

---

# ヒトカゲの旅 SE

Lino

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒトカゲの旅 SE

### 【Nコード】

N7007H

### 【作者名】

Lino

### 【あらすじ】

記憶の戻ったヒトカゲが、今度は別の目的で旅に出る。しかし、旅の途中でまた様々な出来事に遭遇する。今度はどうなるのか？  
新たな仲間を引き連れて、「ヒトカゲの旅」の続編、始動！

## 第1話 ルギアの頼み事（前書き）

初めての人も久しぶりの人も、どうもです。ようやく私にも夏休みがやって来て、期末試験から解放され、執筆ができるようになりました。

ヒトカゲ

「主人公のヒトカゲです。よろしくお願いします」

あ、主人公です（笑）それでは……っとその前に、一応最初なので、注意が1つあります。

この小説『ヒトカゲの旅 SE』は、前作『ヒトカゲの旅』の続きにあたる小説です。なのでいろいろな設定は既知のものとして話を書いていきますので、初めての人は『ヒトカゲの旅』をざっと流し読みすることをオススメします。

ヒトカゲ

「それでは、どうぞ！」

また初回の台詞先に言ったな（怒）

## 第1話 ルギアの頼み事

ミュウツウの計画を阻止し、ヒトカゲがポケモンだけのいる世界に戻ってきてから1年後、ポケモンアイランドの口ホ島では、みんながいつも通りの生活を送っていた。

「ヒトカゲ、起きんか!」

「……ん〜まだ眠い〜……」

ヒトカゲは、こちらの世界での父親・ウインディにたたき起こされていた。それもそのはず、もう昼を過ぎていたのだ。

「今日はデルビルと約束しているんだろ!? 起きなさい!」

「……あっ、そうだった!」

デルビルと遊ぶ約束をしていたのをすっかり忘れていたようだ。ヒトカゲは慌てて起き上がり、真っ先に向かったのはリビングにあるきのみ置き場。

「急いでお昼ご飯食べなきゃ!」

両手いっぱいいきのみを抱えて自分の定位置に移動すると、ヒトカゲは勢いよくきのみにかじりついた。その姿は若干恐ろしさを感じるほどで、ウインディもおもわず1歩ひいてしまった。

「しゅちそうさま〜 行ってきます!」

早々に食べ終わると、すぐさまヒトカゲは家を出て行った。こんな光景は日常茶飯事のはずだが、ウインディは未だに慣れることができないでいた。

「はぁ……本当にリザードンだったのかあいつは……」

溜息をついて呆れるウインディ。始めは“子供な大人”であるヒトカゲにどう接していいかわからず試行錯誤していたが、今はどこからどう見ても子供。親として厳しいしつけを繰り返す毎日だった。その場に座り、ウインディは休日だけの楽しみである昼寝を始めた。

「遅いよ〜俺とんだだけ待ってたと思ってんのさ〜」

「ゴメンね〜」

ヒトカゲが待ち合わせ場所に到着すると、すでにデルビルが来ていた。待ちくたびれてその場で寝そべってうなだれている。

「ま、いつか。門限は相変わらずの夕方だろ？ 早く遊んじゃおう」  
「！」

この世界に来てから、ヒトカゲの門限は1分たりとも長くなったことはない。これもウインディの教育方針のせいである。

「じゃ、何しよっか？」

いつもの如く、何をして遊ぶかに頭を使う2人。稀にだが、それだけで夕方になってしまうこともある。つい先日も、このように考

えている間に寝てしまい、気づけば辺りが暗くなっていたのだ。

その時、海の方こうからとあるポケモンがこちらに向かって飛んできたのをデルビルは見た。最初は遠すぎて誰だかわからなかったが、徐々にその姿が大きくなってきた。白、というよりは銀色の体をした、翼竜に似た姿。

「あつ……」

ヒトカゲもそちらに目をやると、その存在に気づいた。約1年ぶりに会う、自分と共にミュウツーと戦ったうちの1人。せんすいポケモン、そして別名『海の神』と呼ばれる存在、ルギアだ。

大きな翼を広げたまま海上を滑空し、ヒトカゲ達が見続けているうちに自分達の元へ舞い降りてきた。

「久しぶりだな、ヒトカゲ」

再会を喜びたいところであるが、そこは神様。威厳ある風貌を保ったままルギアは喋った。それとは対照的にヒトカゲは右手を上げて気軽に挨拶した。

「ど、どうしてルギア様がここに……?」

ただ1人、目の前の尊い存在に腰を抜かしていたデルビルが思い切って尋ねてみた。「臆することはない」と優しくルギアが言うと、ヒトカゲの方を向いてここへ来た理由を言った。

「ヒトカゲ、お前に用があつて来たのだ。デルビル、悪いがしばしの間、ヒトカゲと2人だけで話をしたい。連れてつていいか?」

断る理由もないため、デルビルは首を縦に振って承諾した。ヒト

カゲは何かあったのだろうかと気が気でなかった。

「すまん。ヒトカゲ、私の背中に乗れ」

言われるがままにヒトカゲはルギアの背中に乗ると、勢いよくその場から飛び立った。海上を飛んでいる間ヒトカゲは何かあったのかと訊いたが、ルギアは何も答えずにただ黙っていた。

直にルギアが降り立ったのは、アイランドの中央に浮かぶ島『デイオス島』だ。今は一時的にバリアを解いているようだ。そして島の中心に位置する洞窟の中に入るように、背中からヒトカゲを降ろしながら言った。

洞窟の中を進むと、大きな空洞のあるところへ辿り着いた。

「ここは……？」

口を開けながらヒトカゲは辺りを見回していた。頭上には鍾乳石、この空間の中央には石を削られてできたような台座が2つあった。

「ここは共鳴の部屋。私を呼ぶための場所だ」

一通りヒトカゲが部屋を見尽くすと、ルギアは改めて話を始めた。

「ヒトカゲ。私から頼みがある」

意外なことに、ルギアはヒトカゲに頼み事があるのだという。それが何なのかをヒトカゲが尋ねると、落ち着き払った話し方で用件を伝えた。

「私の友……ホウオウを捜してくれないか？」

「えっ、ホウオウだって!？」

ヒトカゲが驚くのも無理はない。ホウオウと言えは、この世界でも人間のいる世界でも、とてつもなく高貴な存在。そのホウオウを捜してほしいと言われれば、聞き返したくもなる。

ルギアは何故このような頼み事をしたのか、説明を始めた。

「今だから話すが……ここ十数年間、ホウオウが行方不明なのだ」  
「ゆ、行方不明!？」

さらに驚くヒトカゲ。それに構うことなくルギアは続けた。

「仮にどこかに行っていたとしても、この部屋にあるあの台座に『金の結晶』と呼ばれるものを置けば必ずやって来るはずなのだが……それでも現れないのだ」

ヒトカゲは以前フリーデインから聞いた、ディオス島の話思い出していた。この島には2体のポケモンを呼ぶ場であり、台座に納めるのが『銀の結晶』であればルギア、『金の結晶』であればホウオウが現れるのだ。

「最悪の事態も考えたが……1年前、ミュウツーと戦った時にお前がやった詠唱が成功した。それはつまり、あの詠唱で引き出される力の源であるホウオウが生きている証拠だ」

ファイヤーより強力な力を得ることができると詠唱、その力の源がホウオウであることに改めて気づかされたヒトカゲは、その話に納得した。



「私はホウオウを捜してありとあらゆる所を回った。だが人間のいる世界でミュウツーと出会ったことで不覚にも自ら身を拘束することとなってしまった。だから私はアイランドの番人達に、ホウオウを捜すよう命じたのだ」

ヒトカゲはようやく理解した。何故番人達が自分達を見守るだけでいたのかを。単にヒトカゲ達に協力しなかったのではなく、ホウオウを捜すという任務を果たす義務があったため協力できなかったのだ。

「そっか、それでエンテイ達は……」

「そっという事だ。悪く思うな」

一息ついて、ルギアはヒトカゲの目を見つめた。

「お前しかできない“詠唱技”。それは時として莫大な力をその身に宿すこととなる。そしてお前の実力を見込んで、私は依頼したのだ。頼む、私の友を捜してはくれないだろうか」

何と、ヒトカゲの目の前でルギアが深々と頭を下げたのだ。神様が頭を下げるという事態にヒトカゲは大慌てで頭を上げるように言った。

「や、やります！ 僕にホウオウを捜させてください！ だからもう頭上げて！」

神様に頭を下げられれば、誰でも拒否することはできない。ヒトカゲは自分にホウオウ探しができるだろうかと悩んでいたところで頭を下げられたので、勢いあまって承諾してしまった。

「……ありがたい。もちろん私もハウオウを捜す。何としてでも捜し出してくれ」

そう言うと、ルギアは天を仰いで念じ始めた。するとヒトカゲの手元にある物が形作られて、手の上にぽとりと落ちた。それは横笛のようにも見える。

「これは………」  
「それは“海神笛”かいしんてき。笛を吹くものと私にしか聞こえない音が出て、それを吹けば私はいつでもお前のところに行く」

海神笛を渡されたヒトカゲは早速試しに吹いてみようととして、笛の穴に口を近づけた。

「くれぐれも、興味本位で吹くことはしないように」

ルギアに注意されてしまったヒトカゲは笑ってごまかした。きつと“みらいよち”を使っているからだヒトカゲは思ったが、ヒトカゲの事を知っていれば“みらいよち”を使わなくてもわかることだ。

「それと……」

次に何かを思い出したかのように、ルギアがヒトカゲにある事を尋ねた。

「……ヒトカゲ、リザードンに戻りたいか？」  
「も、戻れるの!？」

目を輝かせながらヒトカゲが聞き返した。願ってもない事だ。再

びりザードンに戻ることができると思うだけで希望が湧き、心が躍る。

「確証はないが、可能性はある。ディアルガに会うことだ」

「ディアルガって、あの……」

「そうだ。時を司る神・ディアルガ。ディアルガは時間を操ることができる。だからお前のその体も、時間操作すればリザードンに戻るはずだと思っただけだ」

それを聞くと、ヒトカゲは居ても立ってもいらなくなつた。どこに居るのかとルギアに聞いたが、ルギアもわからないらしい。

「私も過去に1度しか会つた事がないが、その時はこの世界に現れた時だからな。普段は自分のいるべき空間にいるとしか知らない」

ヒトカゲは少しだけ残念そうな顔をしたが、ディアルガに会えないと決まつたわけではないので希望が持てた。

「わかつた。会うことができたら頼んでみる！」

こうして、ヒトカゲは再び旅に出ることとなつた。ルギアの友・ホウオウを捜すため、そして、自分の体を、元のリザードンに戻すことができるかもしれない、時を司る神・ディアルガに会う旅に。

## 第1話 ルギアの頼み事（後書き）

ヒトカゲ

「ホウオウとディアルガ捜し……どう考えてもキツイでしょこれ（汗）」

よいではないか（笑）

いや〜約ひと月ぶりに本腰入れて小説書いたけど、楽しいなあ〜

ヒトカゲ

「はいはい（汗）で、次回は？」

ふつーの話でございます？

ヒトカゲ

「……出た、作者さんの特技“曖昧発言”（汗）」

## 第2話 新たなる旅へ（前書き）

え、今回みたいに、だいたい4日に1回ペースで投稿できるように努めます。

ヒトカゲ

「何で毎日じゃないの？」

夏休みはね、お仕事がいつぱいやって来るのですよ。

あ、初回投稿時に沢山感想欄で祝福して頂き、ありがとうございました！

ヒトカゲ

「では、どうぞー！」

## 第2話 新たなる旅へ

「ええ〜っ、また旅に出るのかよ〜!？」

口ホ島から戻って来たヒトカゲは、その場でずっと待っていてくれていたデルビルに、再び旅に出なければならぬ事を伝えた。ここ1年何事もなくヒトカゲと平和に暮らしていたせいも、デルビルは驚いている。

「うん、またしばらく遊ばなくなっちゃうんだ……ごめんね」

ヒトカゲも残念そうな顔で言った。ホウオウを捜す、それはつまりまた仲の良い友達と離れるだけでなく、この世界で何か起きていることを意味していたからだ。

「そっかあ……寂しくなるな。今度はちゃんと連絡しろよ！」

「わ、わかったわかった。手紙書いたり電話したりするからさ」

渋々ではあるが、デルビルは納得してヒトカゲを応援した。そんなデルビルを見て、持つべきものは友達だな、とヒトカゲはしみじみと思ったようだ。

「じゃあ、今日はうちに泊まってよ。お父さんもOKしてくれるだろうし〜！」

「えっ、ホントか!? ヒトカゲ大好き〜」

いきなりデルビルがヒトカゲに抱きついて、ヒトカゲの顔を舌でペロペロとなめ始めた。くすぐられるのに弱いヒトカゲは仰向けになっただまま大笑いした。

しばらくして、ヒトカゲとデルビルはとある家の前に来ていた。ヒトカゲの家の近所に位置する、そこそこいい造りの家。その家の住人は、ヒトカゲのお兄さんの存在・バクフーンのサイクスの家である。どうやら旅に出ることを伝えにきたようだ。

数カ月前にバクフーンの本名がサイクスだと知ったヒトカゲ達だが、それでもヒトカゲだけ、この世界では“バクフーン兄ちゃん”と呼んでいた。

「バクフーン兄ちゃん。僕だけど〜」

ヒトカゲは扉の前で呼びかけるが、返事がない。ふとデルビルがヒトカゲの方を向くと、何やら扉に張り紙がしてあった。それに気づくことなくヒトカゲはサイクスを呼び続けていた。

「おい、張り紙貼ってあるぜ。見ろよ」

「へっ?」

ようやく張り紙の存在に気づいたヒトカゲ。2人でそこに書かれている内容を読んでみると、こう書いてあった。

“しばらく留守にします。ファンレターやお土産は隣家へ預けてください。by サイクス”

「……………相変わらずだな……………」

「そだね」

何を思うわけでもなく、2人はサイクスの家を後にした。

夕刻、ヒトカゲとデルビルはウインディの家にいた。ぐっすり寝ていたウインディをたたき起こすと、ヒトカゲは今日あった事をありのまま話した。

「えっ！ また旅に出るのか!？」

それを聞いた途端、どうしようどうしようとして右へ左へとつろつろし始めたウインディ。まだ旅に出てもいないヒトカゲの事を心配してしまっているようだ。

「嗚呼、もしまた敵に襲われたら……はっ、食料が尽きて倒れ……はたまたケンタロスの大移動に巻き込まれたら……」

何やらウインディの妄想は徐々に現実離れする方向へと向かって行った。もう慣れたせいかな、そんなウインディを無視してヒトカゲはデルビルとお喋りとしていた。

「で、ヒトカゲ、いつ出発するのだ？」

いきなり気持ち切り替わったウインディがヒトカゲに尋ねた。しばしの間うなりながら考え、ヒトカゲはウインディに答える。

「明日行く!」

『明日!??』

いくら何でも急すぎるのではと2人は焦る。しかしここ数年間ホウオウの消息がつかめていない事を考えると、本当なら今すぐにで



も出発すべきなのだろうともヒトカゲは思った。

だが一旦旅に出ると長い間帰って来られない。前回みたく黙って出て行くのも悪いと思い、今晚だけ思いっきり楽しんで気持ちを満たしてから行こうと決めたのだ。

「そうか、わかった！ なら早く準備しなさい。その間に夕食の準備をするからな」

「じゃ、俺手伝います」

ヒトカゲは荷造りを、ウインディとデルビルは夕食の準備へと取り掛かった。全てが整うと、この日の晩は3人で、ずっと笑いつぱなしの時間を過ごしたようだ。

次の日、ヒトカゲ達はウインディの家の玄関先にいた。荷物を持ったヒトカゲがデルビルとウインディを少し寂しそうに見ている。

「じゃあ、行ってくるね」

お互いに軽く手と前足を振ると、ヒトカゲは海のある方へ向かって歩き始めた。それを後ろから、その姿が見えなくなるまで2人は玄関先からずっと眺める。

「行っちゃったか……」

「そうですね……」

ヒトカゲが見えなくなっても、ずっとその方向を見続けるウインディとデルビル。2人の顔からは物寂しげさが滲み出ている。デルビルに至っては泣きそうなのを堪えている。

2人は気持ちを切り替えて家に入ろうとした時、猛ダッシュでヒ

トカゲが慌てた様子で戻って来た。それに気づき、2人はヒトカゲへ駆け寄る。

「どうした!？」

「はぁ……はぁ……港どこ？」

港の場所もわからずに、ヒトカゲはただ海のある方へ向かっていったらしい。口をあぐりさせて呆れるウインディとデルビル。それにしても、ヒトカゲは何度か船に乗っているにも関わらず、未だに港の場所を覚えていないとは、よほどの方向音痴なのだろう。

港の場所をわかりやすく教えてもらうと、ヒトカゲは港のある方へ向かって再び歩き始めた。今度こそお別れか、そう思いながら2人はヒトカゲの姿を見つめていた。

が、またしてもヒトカゲが走って戻って来た。この一瞬で港の場所を忘れるようなバカではないはず、と少々疑いながらも、2人は再びヒトカゲに駆け寄る。

「今度はどうした？」

「……僕、一人で船乗れない……」

「……あつ……」

ウインディとデルビル、そして船に乗る当人であるヒトカゲもうつかり忘れていた。この島には掟があり、進化で最終形態になる、もしくはそのポケモンと同伴でなければ島を出ることができない決まりなのだ。

「……………」

3人は黙ってお互いを見つめている。

「うわーヒトカゲ、あれ見てみ！」  
「あっ、ホエルオーの大群だ〜」

結局、3人で船に乗ることにした。ヒトカゲの目的地である、ア  
イランドから少々離れたところに位置する『ポケラス大陸』までは  
約1日かかる。それまでは船上で有意義なひと時を過ごすこととな  
った。

「海を渡るのは何年ぶりだろうなあ」

太陽の光が反射して一層綺麗さを増した海を見ながら、ウインデ  
イが過去を振り返り始めた。小声で呟いたはずだったが、ヒトカゲ  
とデルビルの耳にしっかと届いていた。

「お父さん、船に乗った事あるの？」

「昔にな。一度だけ、どうしても会ってみたかったポケモンに会う  
ためにな」

ヒトカゲも初めて耳にする、ウインデイの昔話。これを聞かなく  
ては夜も眠れないといったほど興奮したヒトカゲとデルビルは、続  
きを話すようせがんだ。

「気になる〜。おじさん続き教えてください！」

「わかったわかった。そのポケモンの名前はライナス。ルカリオの  
ライナスだ。今から20年以上も前に突然消息不明になった、伝説  
の探検家だ」

“伝説”という言葉にさらに興味を抱き、2人はさらにウインデ  
イの話に集中した。

「当時、彼はアイランドでは知らない者はいないほどの有名な探険家で、島中の調査を1人でこなしていたんだ。その姿がカツコよくて私は彼のファンになり、実家へ押しかけようとした事があるんだ」

話を詳しく聞くと、ライナスは、ゼニガメの兄・カメックスが現在やっている職業である“ポケ助け”の礎を築いた存在だということ。各地を回っては宝を探しつつ、困っているポケモンを助けたりする、誰もが憧れる探険家だったそうだ。

だが、約20年前に妻と子供を残し、突如として行方がわからなくなつたようだ。警察や他の探検隊が必死で捜索したものの、何一つ手がかりを得られないまま捜査は打ち切られたのだという。

「へーすごいや！」

ヒトカゲとデルビルは目を輝かせている。話を聞くだけでもライナスをカツコよく思ったのだろう。そしてウインディはある事を思い出した。

「そうそう、ライナスの家系はみんな、左胸に赤い稲妻印がついているんだ。それもまたカツコよくてな……」

そこからウインディの、ファンならではの少々マニアックな話が3時間ほど続いた。だがライナスについての伝説はヒトカゲとデルビルをさらにライナスを惚れさせたようで、恍惚こぼれした様子で話を聞いていた。

約1日後、船は目的地であるポケラス大陸の『シーフォード』という街の港に到着した。船に乗っていたポケモン達が次々と下船す

る。

「それじゃあ、今度こそ行ってくるね」

ヒトカゲは乗降口付近でウインディとデルビルに言った。今度こそ本当にお別れだ。

「頑張るんだぞ！」

「はやく戻ってきてくれよな！」

2人の励ましにヒトカゲは、嬉しさのあまり泣きそうになってしまった。腕で目を擦ると、タラップを駆け下り、地面に足をつける。とウインディ達の方を振り向いた。

「行ってくるね〜!!」

ヒトカゲは元気よく腕を大きく振った。ウインディとデルビルも前足を振ってくれたのを確認すると、2人に背中を向け、街へ向かって走り出した。

新たな旅が、今、始まった。

## 第2話 新たなる旅へ（後書き）

サイクス

「おい！ 俺名前だけか！？」

そうです（笑）一応話しておこうか。

改めて紹介します、バクフーンのサイクス。昔から名前はあったけど、事情により名前を伏せて暮らしてきました。

サイクス

「そういうわけで、コラボ中の『バクフーン達の冒険』でもこの名前ですってんだ」

……という補足説明でした（笑）

サイクス

「作者、俺の出番は？」

ご心配なく、当分は出ないから（笑）

サイクス

「何だと！？ ふんだ！ もうあっち戻ってやる！（怒）」

飯食いにいくだけだろ（汗）

### 第3話 赤い稲妻（前書き）

新しい街、シーフォードでどんな事が起こるのやら……

ウインディ

「私とデルビルはまた当分出番なしですか？」

ん〜いや？ そつでもないかもしれないかもよ？

ウインディ

「意味がわかりません（汗）」

### 第3話 赤い稲妻

シーフォード、そこは砂浜の美しさがとても印象的な街。中心には飲食街や宿泊施設、銀行などがあり、この街は多くの観光客や探検家達が集う場所である。

「うわあ〜」

船が出航した後、ヒトカゲはその海岸や街並みを見て感動していた。こんな思いをしたのは、数カ月前に、アイランドから少し離れたリゾート地『リーファイユール』にみんなで旅行しに行った時以来だ。

「きれいだけど……お腹空いたから何か食べたいな」

花より団子、ヒトカゲによく合うことわざだ。食べ物を探し求めて、ヒトカゲは看板を頼りに飲食街目指して走って行った。

しばらくして、飲食街に到着した。お洒落なドリンクスタンド、家族向けのレストラン、高級きのみしか使用しない料亭などなど、ヒトカゲにとってここは天国そのものだった。

「ら、楽園でしょーっ……」

今までに見たことがなかったほどの規模の大きさ、店数の多さ、そして街中に漂う食欲を刺激する香り、どれをとっても星5つものであると感じたようだ。

「え〜どうしよう、絶対1つに決めれないよ〜」



とりあえず街中を歩いてみるものの、目に入るもの全てが魅力的すぎるあまり最初は至福の時間を過ごしていたが、店を見る度にお腹もどんどん減っていき、徐々に苦痛になり始めていた。

「はあ、ダメ。動きたくない」

これ以上動いたら絶対倒れてしまう、ヒトカゲはそんな表情をしていた。そんな時、1軒のカフェテラスを発見した。もういいや、ここで何か食べようと思い、ヒトカゲは店の外に並べられてあるテーブル席に腰かけた。

ふと自分の右側の席に目をやると、そこには1匹のルカリオが腕組みしながらうたた寝をしていた。そしてそのテーブルには焼きたてのポフィンが数個と、“ご自由にどうぞ”という立て札が置いてあった。

(ポフィンと、“ご自由にどうぞ”……)

こういう時、大抵自分の都合のいいように解釈してしまうのではないだろうか。ポフィンを注文したかどうかは別として、ルカリオは寝ている。ましてや今ヒトカゲはお腹を空かせている。

ヒトカゲの頭の中では、あり得ない解が導き出されていた。

「えっ、これ自由に食べていいんだ！ やった〜！」

大喜びしたヒトカゲは、早速目の前に置いてあるポフィンを食す。おいしい。一口食べてそう思うと、もうその手は止まらない。無心になってひたすらポフィンを食べ続けた。

そしてしばらくすると、うたた寝していたルカリオが目を覚ました。

「……ん、寝てたか……」

まだよく見えない目を擦る。大きく息を吸いながら思いっきり両手を上に伸ばし、シャキッと目を覚ましたルカリオ。ようやく見えるようになった目で最初に見た光景は、信じられない現実だった。

「……あ　！！」

ルカリオが見たものとは、自分の目の前にあつたはずのポフィンが屑1つ残っていない状態の皿だった。あまりの衝撃に目を大きく見開いている。

「お、俺の、俺の……ポフィンは……？」

計り知れないショックを受けたのだろう、ルカリオは頭を抱えてその場にしゃがみこんでしまった。

「何故だ、何故俺のポフィンが、一瞬にして消えた……！？」

ルカリオが寝ていたのはわずか10分程度。寝てしまう前にはポフィンは届いていなかった。わずかな時間で誰かが盗んだのか、色々と原因を考えていると、自分の近くから声が聞こえた。

「ふーっ、おいしかった」

ふとその声のする方を見ると、1匹のヒトカゲが満腹そうにイスにもたれかかっている姿だった。しかも座っているのは自分の真向かいのイス。ルカリオはまさかと思いつながら、ヒトカゲに声をかける。

「お、おい。ここにあったポフィン、知らないか？」

ヒトカゲは声をかけてきたルカリオの顔を見ながら、嬉しそうに話し始めた。

「いや〜このお店っていいよね！ポフィンご自由にどうぞってなかなかないよ！」

間違いない、犯人はコイツだ。しかもえらい勘違いをしている。ルカリオはそう確信すると、ヒトカゲに対して憤慨した。

「ふ……ふざけんじゃねえぞてめえ！どこの世界にポフィン無料で食べ放題の店があんだよ！？」

「……」

平然とした様子でヒトカゲは答えた。何か間違っていますかというような顔つきは、ルカリオをさらに怒らせてしまったようだ。

「だって、ここに“ご自由にどうぞ”って書いてあるじゃない」

「それ、は、自由に席に座っていいって意味で、俺が注文したポフィンをご自由に食べていいって意味じゃねえーんだよこのガキ！」

ルカリオは左腕を振り払って怒りを露にした。その時、ヒトカゲがルカリオの方に目をやると、ルカリオの左胸に赤い稲妻の印があるのが見えた。

（“そうそう、ライナスの家系はみんな、左胸に赤い稲妻印がついているんだ。それもまたカッコよくてな……”）

それが目に入った瞬間、ヒトカゲは昨日ウインディが言っていたことを思い出した。その話が本当ならば、間違いなく、ヒトカゲの目の前にいるルカリオは、ライナス家のポケモンだ。

「あつ、それ！」

ヒトカゲがルカリオの左胸を指差す。ヒトカゲの驚く顔を見て不思議そうにルカリオは指された方を見ると、自分の胸の印があった。

「……見たな？」

何故か、ルカリオはヒトカゲを睨む。その気迫に押されてヒトカゲはおもわず後退しようとした。睨み続けたままルカリオはゆっくりとヒトカゲに近づく。

(何？ 見ちゃいけないものなの！？)

ヒトカゲは少々怯えていた。そしてとうとう自分の目の前までルカリオがやって来た。逆光のせいでヒトカゲがルカリオの影に隠れてしまっている。

「……黙っててくれないか？」

「えっ？」

ルカリオが言ったことが意外すぎて、ヒトカゲは聞き返してしまっただ。てつきり“赤い稲妻を見たものは生かしておけない”と思うと思っていたようだ。

「たぶんこの印を知ってるってことは、俺の家系……特に親父の事

を知ってるんだろ」

「親父……つてことは君……」

「そうだ。伝説の探検家と呼ばれた、ライナスの息子だ」

何と、ヒトカゲの目の前にいるのは、伝説の探検家・ライナスの息子だったのだ。運命的な出会いにヒトカゲは大声を出して歓喜しようとしたが、ルカリオが口を塞いで阻止した。

「だから、黙っててくれないか!？」

「う、ううう? (えっ、何で?)」

ヒトカゲがじたばたしながら尋ねた。そのせいで、ルカリオとヒトカゲの姿を見た客がともルカリオを怪しんでいる目でこちらを見ている。ルカリオが、暴れるヒトカゲの口を塞いでいる。傍から見れば殺ポケ未遂とも取れる。

それを察知したのか、ルカリオはヒトカゲを連れてそそくさとその場を後にした。

「それでだな……」

誰もいない路地裏でルカリオが話し始めた。これはこれで怪しまれるのではないだろうか。

「この赤い稲妻印を見ると、誰もが俺を哀れむ。何故って? みんなが俺の親父は死んだと思ってるからさ」

約20年前、突如として行方をくらませたライナス。警察の捜査が打ち切りになった時点で、ライナスを知るものはライナスの生存を信じなくなってしまう。ルカリオを除いて。

「俺は、親父はどこかで絶対生きてるって信じてる。だから俺もこうやって探検家になって……」

「ルカリオ、探検家なの？」

ヒトカゲは少し憧れの目でルカリオを見た。頭の中にあるライナスのイメージとかぶったのだろう。

「ああ。探検家になれば情報が入ってくると思ったし……でも、親父に憧れてるのが1番かな」

ふとルカリオは視線を遠くにやる。その目は決意を固め、想いのこもった熱い目だった。必ず親父と再会する、そう自分自身に言い聞かせているようにも見える。

再びヒトカゲの方を見るルカリオ。軽く微笑んでいる。

「なんか悪かったな。初対面のお前にいきなりこんな話して」

「ううん。ルカリオのお父さん、見つかるといいね」

心からヒトカゲはルカリオを励ました。するとルカリオの方から手を差し出してきた。何も言わず、ヒトカゲも手を差し出して互いに握手する。

「ありがとう」

ルカリオは嬉しかった。初めて自分の父が生きていると信じてくれる者がいたことに。

「それじゃあ、僕行くね。頑張ってね！」

「おう！」

ヒトカゲは手を振りながらルカリオに別れを告げた。ルカリオも微笑みながらヒトカゲに手を振っていた時、ある事を思い出してしまった。

「……って、ちょい待てガキ！ 俺のポフィンどうしてくれんだよ！？」

そう叫びながら、ルカリオはヒトカゲを追いかけ始めた。あつという間にヒトカゲに追いつくと、ルカリオはもう1度同じ事を言った。

「あ……そういえば」

「そういえばじゃねーよ！ 金払え！ 全部で1、300ポケだ！」

仕方ないと思いながらヒトカゲはカバンを漁る。そして数秒後、顔が青ざめてしまった。

「……お金、家に忘れてきちゃった……払えないや。ゴメンね」

満面の笑みで赦しを請うヒトカゲ。ルカリオは衝撃のあまり、声がひっくり返ってしまった。

「な、ないだと！？ ふざけんなよガキ！」

ルカリオはとうとうキレてしまった。食べ物の恨みは恐ろしいと言いが、どうやら本当のようだヒトカゲは思った。

「今ここでお前をボコボコにしてやる！ 覚悟しろ！！」

「ちよっ……ええっ！？」

食べ物の恨みによる、ルカリオとヒトカゲのバトルが始まってしまった。勝敗がついたところで、ヒトカゲが100%悪いのには変わりないのだが。



### 第3話 赤い稲妻（後書き）

ルカリオ「クール？ そんなもんぶっ壊してやりますよ（笑）

ルカリオ

「あ、あのなあ……（汗）」

そして次回は、ぬる〜いバトルですな。

ルカリオ

「俺をこんな風にしといてしかもぬるいバトルとは……（怒）」

映画で散々活躍したじゃない（笑）

ルカリオ

「関係ねえっつーの！（怒）」

#### 第4話 こいつ何者！？（前書き）

さて、ナレーションでも……

たかが1、300ポケぼつちに超お怒りのルカリオが、ヒトカゲからはした金を奪還すべくぬるバトを繰り広げる。果たしてルカリオは子供から金を巻き上げることができるのか！？

ルカリオ

「……てめえぶつ殺すぞ（怒）」

## 第4話 こいつ何者!?

「でんこうせっか」!

ルカリオは素早くヒトカゲに近づいて攻撃する。両腕をクロスさせてヒトカゲは身体を守り、衝撃を和らげた。

「ちょ、ちよつと、本気!？」

今の攻撃は少し痛かったらしい。しかしこの攻撃の強さ、どう考えても子供に対するものではない。ルカリオは本気でヒトカゲに向かってきていたのだ。

「当たり前だ! “メタルクロー”!」

容赦なくヒトカゲに攻撃をくりだしてくるルカリオ。ポフィンを勝手に食べられた挙句、お金を払わないことに相当ご立腹なようだ。

「メタルクロー」!

ヒトカゲも“メタルクロー”をくりだし、お互いの攻撃を相殺した。腕と腕とがぶつかり合い、力比べの状態になっている。

「なっ!?! お、俺の攻撃を防いだ!?!」

ルカリオは酷く驚いていた。ヒトカゲが自分の攻撃をまともに防げるはずがない、体格もかなり差があるのに、どうしてこんなに力があるのだと不思議がる。

（こいつ、絶対に普通のヒトカゲではないな。もしかしたら、このガキには特別な何かがあるのかもしれない……よし、この目で確かめてやる！）

バツク転でその場から後退すると、ルカリオはヒトカゲに指を差しながらこう言った。

「予定変更だ。おいお前！ 俺と勝負して勝ったら金はいらねえ！」  
「ホントに!？」

意外な提案にヒトカゲは嬉しそうに聞き返す。もちろん、ルカリオがヒトカゲの事を探るためにこう言ったとは知らないでいた。ルカリオも作戦がうまくいったようので笑みを浮かべている。

「決まりだな。なら早速いくぜ！ “みずのはどう”！」  
「つていきなり!？」 “れんぞくぎり”！」

ルカリオが放った水のエネルギー波がヒトカゲに向かって行った。それに対しヒトカゲは、自分の身体、特に尻尾の炎に当たらないように“れんぞくぎり”で裂いていく。

「“はっけい”！」

ヒトカゲが割った水はヒトカゲの視界を狭める。それを利用してルカリオはヒトカゲに気付かれぬように急接近、あつという間に目と鼻の先まで辿り着き、至近距離で“はっけい”を放った。

「痛だあ ……！」

“はっけい”をまともにくらってしまったヒトカゲは、“はっけ

い”が当たった頭を抱えて痛がった。この様子を見る分には、ヒトカゲはただの子供である。

「もっといくぞ！」

そう言うと、ルカリオは再びヒトカゲから離れて、両手を自分の脇腹辺りに持っていった。そして次の瞬間、ヒトカゲは驚愕する事となる。

【万物が持ちし躍動よ……】

(えっ、これって……詠唱!?)

ヒトカゲが驚くのも無理はない。自分以外に詠唱をするポケモンを初めて目にしたのだから。その様子を気にする事なく、ルカリオは続ける。

【……我が命に従いて 我が手に集いて力となれ!】

ルカリオがそうい終わる頃には、ルカリオの手の中には青白いエネルギー弾が作られていた。このエネルギー弾、ヒトカゲには見えなかった。

「波導は、我にあり! “はとうだん”!」

それはかつてミュウツーと戦った時に見たものと同じ技、“はど  
うだん”。中々の威力があり、相殺しない限り絶対命中する技だ。  
普段のヒトカゲなら相殺できるのだが、ルカリオが詠唱らしきも  
のを唱えたことで動揺し、何もできずに“はどうだん”をくらって  
しまった。

「どうかな？ 俺の得意技“はどうだん”は」

腕組みしながら自慢気にルカリオは言う。“はどうだん”を受け  
てひっくり返ってしまったヒトカゲは起き上がり、楽しそうな表情  
でルカリオを見た。

「すごいね。だけど、僕もできるんだよね」

始め、ルカリオはヒトカゲの言っていることに引っ掛かりを覚え  
た。ヒトカゲが“はどうだん”を使うのかと思っていたようだが、  
次の瞬間、ルカリオは血の気が引いた。

【紅蓮の炎を操る神よ 我ここに誓う 我と汝の力ここに集結し時  
我の前に現る悪を持つものに 肅正の咆哮を与えん】

(……………あらー……………)

実はルカリオが言っていた詠唱らしきものは、ただの雰囲気付け  
の言葉である。それに対して、ヒトカゲの使っている詠唱は本物。  
その証拠に、ヒトカゲの周りを風が渦巻き始めていた。

「あ、あのー、ヒトカゲさん……？ それって……」

口元をヒクつかせながらルカリオは立ちすくんでいる。それは詠唱ができることに驚いたのもあるが、ヒトカゲの能力がもっと上がるのではないかと危惧しているからでもある。

「これでルカリオと同じように僕も強くなったよ。いくよ！」

「えっ、ちよつと待っ……」

どうやらヒトカゲは待つてくれないようだ。ルカリオがそう言った時には既に“かえんほうしゃ”が放たれていたのだ。もちろん、今度は自分が驚かされたルカリオは抵抗する間もなく攻撃、しかも強力なものを受ける。

「次は“だいもんじ”！」

「ええっ!？」

すかさずヒトカゲは“だいもんじ”をくりだした。“かえんほうしゃ”で、弱点である炎を目一杯受けたルカリオはほぼ戦意喪失状態であったが、ヒトカゲの容赦ない攻撃が続く。

「じゃあ最後!“ブラストバーン”！」

(……俺死んじゃう……)

調子に乗りすぎたヒトカゲは構うことなく“ブラストバーン”を決めた。もはやルカリオに反撃できるだけの体力と気力は残されてなかった。ルカリオ、哀れ。

「こいつ、何者なんだよ……」

爆発に近い炎を真正面から受けたルカリオは、目を回して倒れてしまった。それを見てようやく、ヒトカゲは自分がやり過ぎてしまったと少しばかり後悔したようだ。

「……………うん……………」

「あっ、目覚めた？」

数時間後、辺りがすっかり夕方になった頃にルカリオは意識を取り戻した。仰向けに寝たまま首を動かして周りを見渡すと、自分は街外れにある草原にいるとわかった。

「あの、調子乗ってごめんなさい。気絶しちゃうと思ってなくて」

ルカリオの目を見ながらヒトカゲは申し訳なさそうに謝る。少々黒こげになっている胸の体毛をいじりながら、ルカリオは鼻で笑った。

「気にすんな。俺はお前がどんだけ強いか見たかったから、逆によかったよ」

少しだけ辛そうにして、ルカリオはその場で立ち上がった。

「俺の負けだ。約束どおり、ポフィン代はタダでいいぜ」

「あ、ありがとう！」

律儀に約束を守ったルカリオはどこか満足気な顔をしていた。それはおそらく、ヒトカゲと一戦交えることができたこともあるが、それよりも大きな理由は自分に足りないものがわかったことだろう。



探検家としては、世界中のありとあらゆることを知っておきたいというのがルカリオの考え。今回のように、ヒトカゲのような自分が見たことのない特殊な存在を見ることで、自分はまだまだだと思わされるようだ。

「ヒトカゲ……だったな。これからどこか行くのか？」

「うん。旅に出なきゃいけないからさ」

「そうか。お前くらい強い奴なら、どんな事があっても大丈夫だろ。頑張れよ！」

そう言うと、ルカリオはヒトカゲに向かってずっと手を差し出した。それに気付いたヒトカゲはルカリオの目を見ながら、がっしりと握手を交わした。その目からは、頑張れよというメッセージが伝わってきたようだ。

「じゃあ、僕行くね！」

握手をし終わると、ヒトカゲは荷物を持って街から離れる方向に向かって歩き始めた。ヒトカゲを見つめながら、ルカリオは手を振っている。

ルカリオはそうしているうちに、何か自分の中で異変が起きていることに気付き始めていた。何となくもどかしさに似たものを感じ、じっとしていられなくなった。

気付いた時には、その場から走り出していた。そして向かった先にいるのは、先程別れたばかりのヒトカゲだ。

「ヒ、ヒトカゲ……」

息を切らしながらヒトカゲの名前を呼ぶルカリオ。これにはヒトカゲも驚いている。

「ど、どうしたの？ 僕忘れ物でもしてた？」

慌ててヒトカゲはカバンの中を探る。「そうではない」と否定すると、ルカリオは呼吸を整え、ヒトカゲの目線に立ってこう言った。

「……………俺、お前に同行したい」

いきなり、ルカリオはヒトカゲと一緒に旅をしたいと言い出したのだ。突然のことにヒトカゲも再び驚きながらも、その理由を尋ねてみる。

「俺、さっきの一戦でお前に興味を持ったんだ。……………あつ、恋愛とかそういうんじゃないよ！？ なんか……………親父に近いものを感じて……………あーうまく言えねえ〜！」

頭をかきむしるルカリオ。ヒトカゲはなんとなくしかその理由がわからなかったが、一緒に旅してみたいと思う気持ちは十分に伝わってきた。そしてそれはヒトカゲも同じだ。

「だからその……………俺もいつぱいいろんな事経験したいし、それに一人よりは大勢の方がいいっつーか、つまり……………」

「もちろんいいよ」

「……………えっ？」

あまりに簡単なヒトカゲの返答に、ルカリオは一瞬聞き間違えかと思ひ、目を見開いた。聞き返そうとする前にヒトカゲがさらに答える。

「僕も、ルカリオと一緒に旅してみたいな」

今度はハッキリ聞こえた、OKの返事。それがわかるとルカリオは心の中でガッツポーズをきめた。顔からも嬉しさが滲み出ている。

「それじゃあ改めて……俺はルカリオだ、よろしくな！」

「僕はヒトカゲ。よろしくね！」

再びお互いに握手を交わした。これにより、2人の距離は一気に近づいた。ヒトカゲにとって、ルカリオが旅の仲間でもあり、親友にもなった瞬間であった。

#### 第4話 こいつ何者！？（後書き）

というわけで、新しい仲間第1号はルカリオです！

ルカリオ

「よろしくな」

彼を選抜した理由は……やっぱり映画DVD見たからかな？

ルカリオ

「つまりカッコいいと」

うん（笑）ただクールなルカリオなんかざらにいるから、そこは変えましょうということ、こんなキャラです（笑）

ルカリオ

「変えなくていいっつーの（怒）」

それがLino流ですから（笑）

第5話 父からのお守り（前書き）

……で、ルカリオ。

ルカリオ

「何だ唐突に」

どうするの？ 食費は。

ルカリオ

「……赦せ」

な……ぐはっ！？

ルカリオ

「よし、作者の財布があれば当分金に心配はいらな……」

ヒトカゲ

「ルカリオ、作者さんは次に出掛ける時にお金を補充するらしいから、今はほぼカラだよ（汗）」

ルカリオ

「ちっ、ホントに小銭だけじゃねえか（怒）」

ヒトカゲ

「……………（汗）」

## 第5話 父からのお守り

「はあっ!?! おまつ、元はリザードンだったって!?!」

その日の夜、街まで戻って宿に泊まることにしたヒトカゲとルカリオ。2人は夕食を終えて、部屋でお互いの事について話をしていたところだ。

「うん。まあ、一応」

ヒトカゲが自分の過去について話すと、ルカリオはおもわずその場から飛び上がってしまうほど驚いた。そんなに驚くことはないだろう、ヒトカゲはそう思いながらルカリオを見ているが、驚かない方がおかしい。

「え、あつ、だからさっき、“プラスチックバーン”が使えたんだな」

「そういうこと。1年前にようやく、僕がリザードンだって思い出せたからわかったんだ」

ヒトカゲは話を続けた。記憶喪失になった原因、アイランドで起こった出来事、そして今の旅の目的など、全てを話すと相当な時間を要した。

だがルカリオは、嫌な顔一つせずじつと聞いていた。それほどヒトカゲに興味を持っていたのだろうか。

「……お前、本当に凄い奴なんだな」

「えへへ」

一通り話を聞き終えたところでルカリオは感嘆の声を上げる。凄

いと誉められたヒトカゲは右手を頭にやりながら照れた。顔もほんのり赤い。

「そんじゃあ、次は俺の番か。って言っても何話せばいいんだ？」

「僕がいくつか質問していいかな？」

「おっ、それナイス！ 質問したやつ答えてくよ」

ヒトカゲはルカリオに聞いてみたい事を頭の中で整理し始めた。そしてその中でも特に気になっている事を1つ、質問してみることにした。

「そつえば……さっきさ、詠唱してなかった？」

それはヒトカゲとルカリオがポフィン代争奪戦(?)をしていた時のこと。ヒトカゲしか使えないはずの詠唱をルカリオがしていた事に驚かされたようだ。

「あゝあれか！ あれはただのおまじないだよ」

少々苦笑いしながらルカリオは答える。そのおまじないについてヒトカゲが尋ねると、何かを思い出すように目を閉じながら静かに呼吸するルカリオ。しばらくして目を開けると、ルカリオは話を始めた。

「【万物が持ちし躍動よ 我が命に従いて 我が手に集いて力となれ】これは俺の親父がよく言ってたんだ。親父曰く、『強くなるおまじないだ』なんだってさ」

昔を懐かしむようにルカリオは話す。父との数少ない思い出の1つなのだろう。

「あの頃は忙しかったはずなのに……俺のわがママを聞いてくれてよく遊んでくれたよ」

窓辺に座りながら、溜息を一つつくルカリオ。少々しんみりした雰囲気になってきたので、ヒトカゲは話題を変えることにした。

「あっ、あのさ、ポフィン好きなの？ いっぱい注文してたじゃない」

ヒトカゲは敢えて明るい話題に持っていった。それによつてルカリオの気分のスイッチが切り替わったようだ。表情も明るくなった。

「おう！ ポフィン大好きだぜ！ 特にあますっぱポフィンが好物なんだ！」

嬉しそうにルカリオはその話題に食いついた。食べ物の話ということもあり、ヒトカゲも楽しく話をしていった。だがしばらくすると、再びルカリオの表情が曇る。

「……そういや親父も、家でよくポフィン食ってたよな……」  
(……………あー……………)

これはどの話題で話をしても、暗い雰囲気になってしまふなとヒトカゲは感じ取った。だが別の言い方をすると、それほどルカリオが父親を愛しているということになる。

ヒトカゲはふとルカリオの方に目をやる。その時、ルカリオの首から何かがぶら下がっていることに気付き、それが何かを聞いてみた。



「ルカリオ、それ何？」

その声を聞いて、ルカリオがヒトカゲの指差す方向を見ると、昼に会った時に見た覚えのない、自分の首からぶら下げているものがあった。それをひょいと持ち上げる。

「これか？　これはお守りだ」

ルカリオが大切そうに持っているのは、直径10cm程の、色々な色が絶えず交じり合いながら輝いている、水晶のような玉だった。

「ちょうど親父が行方不明になる前の日だったな。親父がこれを俺に渡してくれたんだ」

その玉の色が変わっていく様子をじっと見つめながら、ルカリオは続ける。

「そんな時親父が、『これはお守りだ。絶対に傷つけたり無くしたりするんでない。大切に持っているんだぞ』って言ったから、こうして大事にしてるのさ」

「へえ〜。お父さんがくれたものか〜。大切にしなきゃね」

ヒトカゲはどこか羨ましそうにその玉を見ていた。ルカリオもずっと玉を見つめたままで、しばしの間2人はどこか神秘的なその光に癒されていた。

「この玉が何なのかを調べれば、何となくだけど、おの自ずと親父の事もわかるんじゃないかって思っ、俺はこれについて調べているんだ」

そついに終わると、ルカリオは再びその玉を首からぶら下げた。昼に玉をつけてなかった理由をヒトカゲが尋ねると、寝る時のみ肌身離さず持って盗まれないようにしているのだとか。

「ふぁ……ねみいや。今日はもう寝るか」

「そつだね。僕もそろそぐー……」

「早っ!？」

ヒトカゲの行動はもはやコメディの域に達している。そんなヒトカゲを笑いつつ、ルカリオもベッドに正面から倒れこむようにして眠りについた。

眠りについてから数時間後、ルカリオは夢を見ていた。自分の視界には、幼い日の自分　リオルが鮮明に映っている。

「おい、こつちおいで」

「どつしたの？　お父さん」

リオルを呼んだのは、父親のライナスだった。リオルはてくてくとライナスの元へと近づいていくが、その時のライナスの表情がどこか悲しげだったことに、夢を見ているルカリオがこの時初めて気付く。

(親父……?)

どことなく心配になりながらも、夢の続きを見る。

「リオル、お前にこれを渡す」

そう言ってライナスはリオルの目線までしゃがむと、自分のカバンからあの玉を取り出した。リオルは嬉しそうにその玉を受け取る。

「お父さん、これなあに？」

「これはお守りだ。絶対に傷つけたり無くしたりするんでない。大切に持っているんだぞ」

「うん、わかった！」

リオルの返事を聞くと、ライナスは少々乱暴にリオルの頭を撫でる。

「どれ、抱っこさせてくれ」

ライナスはリオルを抱っこした。親子の微笑ましい光景を見てルカリオは懐かしく思っていたが、よく見ると、ライナスの表情が暗い。

抱きかかえられているリオルは満足気な顔をしているが、ライナスは正反対だ。何かを惜しむような顔にも見える。ルカリオは不思議そうにその様子を見ていた。

しばらくして、リオルをそっと降ろすと、ライナスはいつもの優しい表情へと変えた。

「それじゃあ、行ってくる」

「いつてらっしや〜い！」

リオルが大きく手を振っているのを目見て、ライナスは家を離れた。

(……………親父！ どこ行くだよ!?)

ルカリオが手を伸ばした瞬間、いきなり視界が闇に染まってしまった。1人だけその場に取り残されて、他には何も無い空間ができてしまった。

「……はっ！」

その瞬間、目を覚ましたルカリオ。不意に窓を見ると、数匹のポツポとムツクルが囁ささっている。現実世界では朝を迎えていた。隣のヒトカゲはぐっすり眠ったままだ。

「夢……なのか？ 親父は一体……？」

夢か現実か、混同するほど鮮明な光景だったのだろう。それでも間違いなく言えることは、今あった事は実際に20年前に起こった出来事、そしてルカリオの記憶そのものだ。

何かを振り払うようにルカリオは首を数回左右に振り、気持ちを下ろさせた。今のが何だったのかは別として、父親への気持ちが強くなった時になったのは言うまでもない。

「ん〜さわやかな朝だね」

「……もう昼だぜ」

あれから数時間後、太陽が真上にある時間帯にヒトカゲは目覚めた。おおよそ半日程睡眠に費やしていたせいか、関節の鳴り具合が半端ない。

「あれ、ルカリオどうしたの？」

ヒトカゲがルカリオの方を見ると、ルカリオの右手と右腕に包帯が巻かれていることに気付いた。それを指摘されてルカリオは怒りの表情を浮かべる。

「お、俺が起こそうとしたらお前がかじりついてきたんだろーが…」

「あゝゴメン。でも包帯巻くなんて大げさだよ」

その言葉に、ルカリオは心の中で抑えていたものを爆発させた。声をひっくり返させてヒトカゲに怒鳴る。

「て、てめえよく見てみる！ このキバの跡は何なんだよ、あ！？」

包帯を取って傷跡を見せるルカリオ。彼の右手にはくつきりと赤い点が表裏に2つずつついていて、まだ血がうっすらと滲んでいる。噛まれた時は相当痛かっただろうと窺える。

「あちゃゝ……で、でもさ、昨日の“ブラストバーン”よりはいいでしょ？」

「謝れ！！」

ルカリオはヒトカゲの頭をゴチンと音が鳴るくらい強く殴った。殴られたヒトカゲは頭を押さえて痛がったが、痛い思いをしたのはヒトカゲだけではない。

「痛えええ　　！！」

右手で殴ってしまったため、傷口が開いてしまい、大声を上げて

ルカリオは痛がった。血がポタポタと床に垂れている。

こいつと一緒にになるんじゃないか……ルカリオは心の底からそう思った。

## 第5話 父からのお守り（後書き）

ヒトカゲ

「作者さん、ゼニガメとかっていつ出るの？」

誰が出るかは言えないけど、次回、前作のキャラが再登場するよ。

ヒトカゲ

「誰だろうなあ。ヒントくれない？」

ヒント？ しゃあないなあ。ヒントはね、前作の第60話より前に出たキャラだよ。

ヒトカゲ

「えっと、それより前ってことはリサとミュウツー以外だから……  
いっぱいすぎ（汗）」

そう簡単には教えんよ（笑）

第6話 脱獄犯を捕まえる！（前書き）

ヒトカゲ

「作者さん、更新ちよつと遅れるだけでも僕眠いんだからね（汗）」

ごめんなさい、友人達と飲んでて、さっきまでうたた寝してました  
（笑）

ルカリオ

「飲んでる暇あつたらさつさと執筆しろよ」

黙れカネガネーゼ。

ルカリオ

「な、なんだと！？（怒）」



## 第6話 脱獄犯を捕まえる！

あれから昼食を食べ、2人はこれから先どうするかを考えていた。

「困ったな、ホウオウとディアルガ捜しだろ？」

イスに座り、腕組みしながらルカリオは頭をひねっていた。簡単に言ってしまうばただのポケ捜しになるが、その対象があまりにも崇高な存在故、ただ歩き回っていても見つかるものではない。

「そうだね。前はルギアの方からテレパシーが送られてきたから、どうすればいいかわかったんだけどね」

ヒトカゲも首を傾げたまま考えていた。引き受けたのはいいものの、改めてこれは無理難題だなと思ったようで、顔をしかめる。

「……よしっ！」

何かを決心したかのようにルカリオは気合いを入れて立ち上がった。

「どうしたの？」

「考えても仕方ねえから、やっぱり捜査の基本、聞き込みから始めるしかねーだろ？」

地道に聞き込みをやっていくのが近道と思ったのだろう、ルカリオは得意げな顔でカツコつけながらヒトカゲに言った。早く行くぞと言わんばかりに手を差し出している。

「え〜本気〜？」

そんなルカリオの想いを知ってか知らずか、ヒトカゲは面倒くさそうに聞き返す。当然だが、それを聞いたルカリオの頭には血管が浮かび上がってきた。

「これはお前がやらんといけねーもんだろ……！！」

「す、すみません……」

この1日で数回ルカリオを怒らせてしまったヒトカゲだが、今回は今までの中で1番恐かったようだ。ヒトカゲを見下ろすルカリオの目が赤く光っているように見えたらしい。

しばらくして、2人はシーフォードの中心街に到着した。昼過ぎだからか、多くのポケモン達が露店で買い物をしたり喫茶店でくつろいだり、はたまた井戸端会議をするものやただのウインドウショッピングをしているものもいた。

「昨日も見ただすごいなー！」

ヒトカゲは改めて、この街に集うポケモンの多さに驚いていた。

特に商店街のアーケードの方はポケモン密度が大きく、立ち入る隙間が少しもないほどだ。

「こりゃ骨だな」

提案したルカリオも小さく溜息を漏らす。自分が言い出したからにはやらなければ示しがない。

「仕方ない、やるか。ヒトカゲ、お前はあっちに行ってこい」  
「了解！」

ルカリオの指示した方向にヒトカゲは走っていきこうとしたが、何となく不安になったルカリオは一旦ヒトカゲを呼び止める。

「ちょっと待て！」

呼び止められたヒトカゲは不思議そうな顔をしながらも、ルカリオの元へ駆け寄った。

「お前、まさかとは思うが、『ホウオウとディアルガはどこにいますか？』なんて幼稚な質問しようとしてないだろうな？」

「えっ、それじゃいけない？」

ルカリオはそれを聞いて頭痛をもよおしたようだ。頭を抱えて大きく溜息をつく。

(……こいつ、本当にリザードンだったのかよ……)

思考そのものまで退化してしまったのかとルカリオは疑ったが、実際はそうではない。ヒトカゲは昔からこのままの性格が変わっていないだけなのである。

「あんなー、聞き込みつてもんはな……」

そこまで言いかけた時、1匹のゴリキーが何やら慌てた様子でこちらに向かって走ってきていた。手には紙切れが1枚しっかと握られている。

「おーい！ 大変だぞー！」

その声に気付いたポケモン達は、ゴリキーの方へと近づいていく。その流れに乗って、ヒトカゲとルカリオもついていった。

「どうしたんだ？」

「これを見てくれよ！ さっき掲示板に貼られたばかりのモンだ！」

ゴリキーの周りには、その紙に書かれた内容を読みたいと思うポケモン達が我先にと群がる。そのせいでルカリオは他のポケモン達に阻まれて動けずにいたが、ヒトカゲはその隙間をかい潜くってゴリキーのところまで辿り着いた。

「見〜せ〜て〜！」

なかなか紙に書かれていることが読めずにいたヒトカゲは思い切つて、紙に群がる他のポケモン達によじ登った。紙に書かれている文字が読める位置まで登ると、1文字ずつゆっくり読み始めた。

「けいむ……しよで、しゅーぽ……ケがだ……つご……く」

ヒトカゲは頭の中でもう1回その言葉を整理すると、ようやく意味が通じる文が浮き上がってきた。

「け、刑務所で囚ポケが脱獄！？」

叫びながらヒトカゲはルカリオに伝えるためにルカリオを捜す。群がっているポケモン達の頭の上をぴよんぴよんと跳ねながら移動すると、途中で見覚えのある青色の耳を踏んだ感じがした。

「あつ、いた！」  
「……俺を踏むな」

もう1度その耳を見つけると、そのポケモンの頭の上に乗ったヒトカゲ。間違いないルカリオだとわかったのは、彼の怒った表情を見たときだ。

「刑務所で脱獄があつたんだって!!」  
「ああ、俺も聞いたぜ。しかもこの街に潜伏しているかもしれないらしいな」

さらにルカリオの聞いた情報によると、その囚ポケは過去に何度も脱獄に成功している、云わば常習犯とのこと。しかもそう簡単に捕まらないようだ。

「ルカリオ、捜そう！」  
「言われなくてもわかってるさ！」

ポケ混みを掻き分けてポケモン達の少ない通りへ出ると、ヒトカゲとルカリオは二手に分かれて脱獄犯を捜し始めた。

その頃、街の中にあるポフィンのお店では、あの3人がくつろいでいた。

「いや〜案外うまくいくもんですね〜」  
「そうだな。何回かやったけど、今回ほど簡単にできたことはないよな」

ポフィンを食べながら、2人のポケモンが嬉しそうに喋っている。

その向かいの席には、そのグループの中心となるポケモンが座っている。

「まあ長かったけど、ようやくアタイ達もこうやって広いところに来れたわけだし、これからは思う存分やっていこうじゃないの！」  
『おーっ！』

堂々と大声で何やら怪しい事を口にはしているのは、何をするにしてもバカ丸出しである3人　華麗な泥棒猫・ペルシアン、俊足な狩猟蛇・アーボック、そしてこのグループのリーダーである、トリッキーウーマンことオオタチである。

「でも、さすが姐さん！　あんな方法を思いつくとは、さすが！」  
「俺達の中で1番頭がいいからなあ」

ペルシアンとアーボックがオオタチの事を誉め称える。この中で見れば確かにオオタチは1番頭がいいが、サイクスと比べると天地ほどの差がある。

「ふっ、そんなに誉めるんじゃないよ」

気分を良くしたのか、オオタチは若干照れている。もう1度言うておくが、この3人は誰もが認めるバカである。

「それにしても、ここのポフィン美味いっすね」  
「当たり前だろ、ガイドブックにはこの街1番って書いてあるからな」

「アタイはアマリジヨ島のエレデンポフィンが好きだけど、まあ悪くない味ね」

3バカは談笑しながらくつろいでいる。若者ならまだしも、3バカの年齢はいわゆる「おじさん」「おばさん」と呼ばれ始めるくらいの歳なので、ウエイトレスのロゼリアはこのテーブルに行くのを少し嫌がっている。

そして遠くから見ても目立っている。その姿はこちらに向かって走ってきていたヒトカゲの目にもバツチリ映っていた。

「あれ？ あれって……3バカ？」

ヒトカゲは直感的に、3バカが脱獄犯だと睨んだようだ。駆け足で3バカの元へと近づく。そして3バカの目にもヒトカゲの姿が映った。

「げっ、ヒトカゲ！ 何でアイランドじゃなくここに!？」

3バカはまさかヒトカゲがポケラス大陸にいたかと思っていなかったらしく、相当驚いている。そんな事はお構いなしに、ヒトカゲは3バカを問い詰める。

「どうしてこんなとこにいるのかな？」

「どうして？ いちゃいけねえのか？」

ペルシアンが逆に聞き返す。悪びれる様子がないと感じたヒトカゲは、怒った様子で3バカに対して強い口調で話した。

「早く刑務所戻りなよ！」

「……も、戻りな!？」

3バカが口を揃えて言った。何か引つかかることがあるのか、ヒトカゲに対してどういう意味か尋ねると同時にそれを否定した。

「も、戻りなつてどういうことだよ!？」

「あたかも俺達が刑務所暮らしたみたみてえな言い方じゃねえか!」  
「アタイ達が刑務所に? んなワケないじゃない!」

少々怒りながら3バカは、自分達はただくつろいでいるだけだと主張した。ヒトカゲも3バカの様子から、こいつらが脱獄犯というわけではなさそうだと悟った。

(そうだよね、こんなバカに脱獄なんかできやしない)

相当見下してもいるようだ。

「じゃあさつきと同じ質問ね。どうしてこんなとこにいるの?」

ヒトカゲは念のため3バカに対して、ここにいる理由について尋ねた。まだ少しだけ興奮気味のアーボックがそれに答える。

「俺らは貨物に混じってアイランドから船に乗ってこっちに来ただけだ。それに、脱獄どころか今まで捕まったことすらねえよ」

その証拠なのだろうか、3バカは自分達の後ろにあった、大量のモモンのみが入った輸出用の袋をヒトカゲに見せつけた。その袋にはタグがついていて、印刷されている日付は昨日になっている。

「ホントだ……」

それを見て、3バカの言うことを信じたヒトカゲ。だがこれで振り出しに戻ってしまった。本当の脱獄犯は一体誰なのか、もう1度捜さなくてはならなかったのだ。



いろいろな意味を込めて、ヒトカゲは大きな溜息をついた。

第6話 脱獄犯を捕まえる！（後書き）

はい、3バカ登場です（笑）

ヒトカゲ

「ま、まだいたんだ（汗）」

ルカリオ

「あいつらそんなにバカなのか？」

ヒトカゲ

「あいつらそんなにバカなんだよ」

まあまあ、そんな事言ったら………かわいそうじゃないか………（笑）

ルカリオ

「だったら笑うなよ（汗）」

第7話 波導カクテル（前書き）

つ、疲れた（汗）

ヒトカゲ

「何がそんなに疲れたの？」

“波導”と“波動”の違いについて。調べまくってようやくわかりました（汗）

ルカリオ

「どう違うんだ？」

えっとね……何だっけ？（笑）

ルカリオ

「ダメだこいつ（汗）」

## 第7話 波導カクテル

しばらくして、ヒトカゲの元ヘルカリオが戻って来た。その様子を見ると、ルカリオの方は手がかりが一切つかめなかったようだ。

「ヒトカゲ、そいつら誰だ？」

ルカリオが指を差したのは3バカ。初めて見る顔ぶれに興味津津なルカリオに対し、ヒトカゲは面倒くさそうに答える。

「ただのバカ3人だよ」

この3バカに対しては口を動かすのもかったるいとヒトカゲは言う。毎度とはいえ、紹介すらまともしてくれないことに3バカは怒りを露にした。

「ちよつと！ 紹介くらいまともにしてよ！」

「使えない泥棒。以上」

何を言われてもヒトカゲはそれ以上言おうとはしなかった。キレている3バカをよそに、ヒトカゲとルカリオは今後について話し合っていた。

「参ったな、誰が脱獄犯かさえわかれば早い話なのにな」

おもわず愚痴をこぼすルカリオ。だが、この愚痴により事態は大きく急変することとなった。3バカの1人、アーボックがその愚痴を聞いた瞬間、口を開いた。

「脱獄犯って、あのサイドンのことか？」  
「……えっ!？」

その場にいた全員が驚きの声を上げた。その勢いある声にアーボツクも驚いてしまった。

「な、なんだ、知らなかったのか？」

とりあえず深呼吸して気持ちを落ち着かせると、アーボツクはヒトカゲが現れる少し前まで読んでいた朝刊をテーブルの上に広げた。その新聞の地域欄にそれは掲載されていた。

「囚役中のサイドン被告が脱獄! シーフォードに潜伏か」……  
マジかよ!」

実はこのサイドン、数年前にアスル島で、サイクスがマグマラシだった頃にサイクスの活躍によって逮捕されたサイドンなのだ。数度脱獄を試みて、今回ようやく成功したと記事に書かれていた。

「ど、どうする? こいつ確か凶悪なのよね?」

「って姐さん、俺達に言われても……」

オオタチとペルシアンはびくついて足が震えている。さすがに凶悪犯が脱獄したとなると怯えるのが普通だろう。ある1人を除いて。

「……………」

少し楽しげな表情を浮かべて、手を顎にあてながら考え事をしているのはルカリオだった。全く怖がっている様子はない。

(サイドンか。サイドンは確か……うん、間違いがなければそうただけはどうする？ どうやって接触を……あっ！)

目を逸らしたその時、ルカリオの目にある看板が目に入ってきた瞬間、ルカリオの頭上の電球が光った。サイドンを捕まえる作戦を思いついたようだ。

「なあみんな、ちょっと聞いてくれるか？」

ルカリオはその場にいたヒトカゲと3バカを呼び集めると、円陣を組むような形になって小声で自分の考えをみんなに伝えた。少々不安は残るものの、みんなはその作戦に大方賛成した。

「じゃあ決行は夜だ。みんな、頼んだぞ！」

『了解！』

数時間後、すっかり夜を迎えてしまったシーフォードは静寂していた。唯一活気付いているとすれば、路地裏に点々としている酒屋のみ。その中の1つに、穴場となっているバーがある。

深夜0時頃だろうか、その店に1匹のポケモンが来店し、カウンター席に腰を下ろした。左腕をカウンターにかけ、斜めを向いて座っているそのポケモンは、サイドンだ。

「マスター、とりあえずウオッカリッキー」

「かしこまりました」

顔に似合わずカクテルを飲みに来たサイドンはカクテルを1つ、マスターに注文した。そのマスターをしているのは、バッチリ正装

したルカリオである。

ルカリオは慣れた手つきでシェーカーを振る。その姿が格好良かったのか、店にいた客のブニャットが失神して倒れてしまった。

「お待たせしました。ウォッカリッキーズです」

カクテルができると、待ってましたと言わんばかりの勢いでサイドンはそれを一気に飲み干す。ルカリオもその姿を見るが、やはり似合わないと思えないようだ。

「……………ん？ お前……………」

「な、何でしょう？」

突如、サイドンが睨むような目つきでルカリオの方を見た。何か気付かれてしまったのではないかとルカリオは焦り始める。お互いの目があったまま沈黙が続き、その沈黙を先に破ったのはサイドンだった。

「若えのにやるな、なかなかの味だ」

「……………こ、光栄です」

ルカリオはただ誉められただけで、サイドンは何も気付いていないようだ。サイドンに背中を向けると、安心したルカリオは大きく息を漏らした。

「次は何に致しますか？」

「スレッジハンマーをくれ」

その後もサイドンは数杯カクテルを注文し、一気飲みをしている。しかしさすがに酔ってきたのか、目は虚ろに、顔はほんのり赤くな

ってきた。

(そろそろかな……)

実は、ルカリオはサイドンの注意力が低下するタイミングを見計らっていたのだ。この時を逃してはいけないと気合いを入れ、作戦の1番重要な部分へと差し掛かる。

「お客様、私からのサービスです」

そう言いながらサイドンに差し出したのは、何とも神秘的な青色のカクテルだ。ウォッカの中で青白い球体ができているように見える。サイドンは嬉しそうに受け取った。

「気が利くじゃねえか。何てカクテルだ？」

「私のオリジナルでしてね……ブルー・ブレット、“青い弾丸”と  
いいます」

「ほお、洒落たカクテルだな」

ブルー・ブレットと呼ばれたそのカクテルにサイドンは見とれていた。一方のルカリオは少し緊張気味な様子だ。黙ってサイドンの方を見たまま動こうとしない。

そしてサイドンがそのカクテルを口元まで持っていき、少量の酒を口に含んだ、まさにその瞬間だった。

「はっ!!」

ルカリオが腹から声を出すと、グラスから青白い球体がサイドンの口めがけて突っ込んだ。うまい具合にそれが口に入り、サイドンに口の中で爆発を起こした。



「……がはっ!？」

口から煙を吐きながら、サイドンは気絶して倒れてしまった。その様子を影から見ていたヒトカゲと3バカがサイドンに近寄る。

「気絶してる……“波導カクテル” うまくいったんだな！」

ペルシアンが言った“波導カクテル”、これこそがルカリオが考えた作戦だったのだ。おそらく真正面から立ち向かうと苦戦すると思つたルカリオは、悪人が集うと有名なこのバーにサイドンが訪れると睨み、作戦を考えた。

不意をついて一発攻撃をかますことはできないだろうか、それを考えた結果、カクテルの中に“はどうだん”を入れることを思いついた。とくぼうが低く、かつかくとうタイプに効果抜群な相手ならではの作戦だ。

「俺も初めてやってみたが、こんなにうまくいくなんてな、正直驚いたぜ」

この作戦が成功した事にみんなは驚いているが、その中でも作戦の考案者でもあり、中心人物でもあるルカリオが1番驚いていた。

間もなくして、3バカが呼んだ警察が店に駆けつけ、サイドンは再びお縄についた。連行される際、ヒトカゲ達を見ながらサイドンは苛つきながら口を開いた。

「何年か前にも、ガキの不意打ちで捕まっちゃったんだよ。とんでもねえ野郎だったが、お前らもそいつくれえ憎たらしいぜ」

言われた側にしたら、ガキというのが誰の事を言っているのかさっぱりわからないため、ヒトカゲとルカリオは首を傾げるしかなかった。もちろん、これはサイクスのことである。

ヒトカゲが聞き返そうとしたが、その前に警察によって連行されてしまった。

「さて、3バカだったっけか？ 協力してくれて助かったぜ」

ひと段落したところで、ルカリオが3バカにお礼を言いながら手を差し出した。3バカもそれに対して照れくさそうにしながら、リーダーのオオタチが代表して握手を交わした。

「は、恥ずかしいじゃないか」

顔を真っ赤にしながらオオタチは言う。単純に誉められるのに慣れていないからか、それともルカリオに惚れてしまったのか、どちらにしろ胸の鼓動が激しくなっているようだ。年齢から来る動悸とは違うと本人は主張する。

しかし、まだ作戦は全て終わっていない事を、ルカリオ以外のみんなはまだ知らないでいた。

ヒトカゲは、照れていた3バカの後ろに誰かが立っているのに気付いた。よく見ると、それは手錠を持っているカイリキーだった。

「あゝ君達君達。ちょっとちょっと」

ペルシアンとアーボックの肩を軽く叩くカイリキー。警戒心ゼロのまま2人が後ろを振り向くと、そのカイリキーがさわやかな笑顔でこちらを見ていた。

「何ですか？」

「え、君達ね、窃盗容疑で逮捕だからね」

そう言うと、カイリキーは強引にペルシアンとアーボックに手錠をかけた。それはカイリキーの腕と繋がっているため、もう逃げられない。

「あ、そうそう、君もね」

ついでにといった具合に、オオタチにも手錠がかけられた。ここに来てついに、3バカが全員お縄についてしまったのである。

『ちよ、ちよつと待つてよ！？ どういう事！？』

「まだわからねえか？」

3バカの哀れな姿を見ながら口を開いたのは、ルカリオだった。実は作戦が続いていたということを3バカに伝えた。

「窃盗犯が自ら警察に顔出しといて、逮捕しない警官がいるか？」

ルカリオの本当の作戦、それはサイドンと3バカの同時逮捕だったのだ。そのため、わざわざ3バカに警察を呼びに行くよう指示したのである。

「ちよつ、アタイ達をはめたわけ！？」

「悪いけど、俺は探検家。悪事は放っておけねえのさ」

そう言いながら、ルカリオは3バカ達に背を向け、右手を軽く上げて別れを告げた。立ち去るルカリオをヒトカゲが後ろから追いかけていった。

『最後までいい何か言ってけよヒトカゲ!!』

こうして、3バカは無事に刑務所へ送られることとなった。そんな。

## 第7話 波導カクテル（後書き）

はい、逮捕により3バカもう出番なし（笑）

ヒトカゲ

「思いつきりやったね作者さん（汗）」

まだ10話も書いてないのにもう出演終了、これほどあいつらに相応しい末路はないではないか（笑）

ルカリオ

「……黒いな（汗）」

## 第8話 生意気ブイゼル（前書き）

ポケモン小説を書いて半年以上……文章が上達している感じがまったくありません（汗）

ヒトカゲ

「ちゃんと勉強してるの？」

このサイトのポケモン小説はほとんど目を通してるし、それなりに頑張ってはいるんだけどね……はぁ（汗）

ルカリオ

「じゃあ、能力がないってことだろ（笑）」

うっ（汗）笑いな（怒）

## 第8話 生意気ブイゼル

3バカが逮捕された翌日、ヒトカゲとルカリオは再びホウオウについて調べるために聞き込みや図書探しをしたが、何一つ情報を得ることができなかった。

その晩、宿に戻った2人が話し合った結果、この街には手がかりになるようなものはないと判断し、翌日に次の街へ移動することを決めた。

「もう寝よつか。おやすみ〜」

「昼まで寝るんじゃないぞ」

実はこの日も昼まで寝ていたヒトカゲ。これにはルカリオも程ほど呆れていた。絶対朝には起きると再三注意した後、2人は眠りについた。

「そついう日もあるって」

「……………う、うるせえ」

翌日の昼、2人はシーフォードを出て次の街へと続く道を、ヒトカゲは笑いながら、ルカリオはどことなく赤い顔をしながら歩いている。

「でもビツクリしちゃったよ。僕が起きたらルカリオがまだ……………」

「それ以上喋んじゃないねえ……………！」

自分の行いを頭の中で必死に否定するかのように、その会話を遮

断ってしまうルカリオ。自分が寝坊してしまった事が彼にとっては大きな汚点となってしまうたようだ。そしてそれを先程からヒトカゲにつつかれている。それがさらに彼を苛立たせていた。

「あ、ルカリオあれ見て」

そんなルカリオの事を全く気にせず、ヒトカゲはいつもの調子で声をかける。苛々しながらもルカリオはヒトカゲの指差す方向を見ると、その場に立ち止まってしまった。

「……ちつ、よりよつて……」

2人が見たもの、それは分岐している道だった。そしておもわずルカリオが舌打ちしてしまったのは、ここに立ててあるはずの立て看板がどこにも見あたらないのだ。

2人は地図を持っていないため、看板を頼りにしながらここまでやって来た。つまりこれから先どの道にいけばいいかわからない状況なのだ。

「どうしよつか？ ルカリオわからない？」

「俺もこないだ船でシーフードに来たばっかだからな。全く知らねえぜ」

どうすればよいか途方にくれている時、後ろから1匹のブイゼルがこちらに向かって歩いてきた。そのブイゼルが目に入ると、2人がこれはチャンスと言わんばかりの勢いでブイゼルに近づく。

「お、おい！」

呼び止められたブイゼルは、少し不機嫌そうに返事をする。



「何？」

「俺達、隣町のインコロットに行きたいんだ。よければ案内してくれないか？」

ルカリオはブイゼルの目線までしゃがんで優しく頼み込む。この時、ルカリオは100%このブイゼルが言う事を聞いてくれると確信していたようで、気が緩んでいた。だがブイゼルから返ってきた返事は意外なもので、おもわず聞き返してしまった。

「はあ？ 何で僕が？」

「ありが……えっ？」

まさかこんな言葉が返ってくるとは思ってもいなかっただろう、ルカリオは勘違いしてお礼を言いかけてしまった。ブイゼルの顔を見ると、あからさまに嫌そうな顔をしている。

「だから、何でこの僕がお前達の道案内をしなきゃいけないのかって言ってるの」

このブイゼル、どうやらヒトカゲとルカリオを見下しているようだ。上から目線のものの言い方しかない。

「て、てめ……ふがつ！？」

ブイゼルの態度にキレかかったルカリオが殴りかかろうとしたのをヒトカゲが口を押さえて止めに入る。

「ん、んんーんん（おい、何すんだよ）！？」

「まあまあ、相手は子供なんだからさ」

興奮気味のルカリオをヒトカゲがなだめている。そのやりとりが  
ブイゼルの耳に入ったのか、今度はヒトカゲに対して同じ口調でふ  
っかけた。

「お前だつて子供じゃんか。ま、でもそのわりには会話が成り立ち  
そうだからまだそっちのバカそうなるルカリオよりマシかな」

「……てめえこのガキ一発ぶん殴らせる！」  
「お、落ち着いて落ち着いて！」

ヒトカゲが必死になって再びルカリオを止めている。それを馬鹿  
馬鹿しく感じているのか、ブイゼルは鼻で「ふん」と言いながらそ  
っぽを向いた。

その後、なんとかルカリオを落ち着かせてヒトカゲがブイゼルに  
交渉すると、条件付きでインコロットまで道案内をしてくれること  
になった。ただしその条件というのが、今のヒトカゲにとってはと  
ても危ないものであったのだ。

「次、右」

(……何で俺が……)

ピリピリしながら歩いているのはルカリオ。そして彼に肩車して  
もらっているのは、ブイゼルだ。ブイゼルが出した条件というのは、  
街まで肩車しろというものだった。

ルカリオがいつブイゼルを半殺しにしてもおかしくない、そう警  
戒しながらヒトカゲは2人の言動に注意して歩いていた。

「ねえ、僕お腹空いたんだけど、何か食べるもんない？」

そんな状況の中、ブイゼルは食べ物要求してきた。傍から見ればブイゼルは王様気取りだ。ルカリオの顔つきが変わったのが目に入り、ヒトカゲは慌ててカバンを漁る。

「あつ、リンゴあるよ！ これあげる！」

幸運にも、カバンの中にはリンゴが入っていた。それを取り出してヒトカゲが差し出したが、ブイゼルはそれをじっと見るだけ一向に受け取るうとしない。

「どうしたの？」

「これ、ただのリンゴでしょ？ 僕、おうごんのリンゴしか食べたくない」

(な、生意気なっ……！)

ブイゼルのわがまを聞いて、ヒトカゲとルカリオは同じ事を思った。さらにブイゼルは、ルカリオの怒りのボルテージを上げる発言をした。

「ねえ、どっかで買ってきてよおっさん」

「お、おっさんだと!？」

この世に生を受けてまだ22年しか経っていないルカリオをおっさん扱いしたブイゼル。この瞬間、ルカリオの中で何かが破裂する音が聞こえた。

「……さ、さつきから黙ってりゃ調子に乗りやがって……」

ルカリオの怒りは最高潮に達している。もう自分には止められな

いとヒトカゲは悟り、ただ頭を抱えているしかなかった。

とうとうルカリオは我慢できなくなり、怒りを露にする。頭の上で騒ぎ続けているブイゼルの片足を掴むと、空中で宙吊り状態にした。突然の事にブイゼルは暴れだす。

「な、何するんだよ！ やめろよ！」

「うっせえ！ 生意気なんだよクソガキ！」

ヒトカゲはその場で慌てふためいているが何もできないでいる。その間にもルカリオとブイゼルの口げんかは続く。

「ぼ、僕にこんなことしたら、もう道案内してあげないもんね！」

「おお上等じゃねーか！ てめえなんか教えてもらうくらいならこつちから願ひ下げだ！ 勝手にどこでもいきやがれ！」

こつちは言うものの、実際はルカリオが道案内してくれと頼んでいるのだから、ずいぶん矛盾した発言になってしまっている。勢いに任せて言っているせいも、この矛盾に誰も気付かない。

「……と、言いたいところだが……」

少し冷静になったのか、落ち着いていた表情でルカリオが言う。ヒトカゲもその様子を見てほっと一息ついたが、それは間違いであった。

「自由にする前に、ボコらせろ」

『ええっ！？』

ヒトカゲとブイゼルは目を大きく見開いて驚いた。ルカリオを止めようとした時には、既に彼の右手は固くしつかりと握り締められていた。どうやら宙吊りのままブイゼルを殴るようだ。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 子供にそんな事する気！？」

初めてブイセルが弱いところを見せた。だが今のルカリオにはどうでもよい事だった。

「子供だろうが老いばれだろうが関係ねえ。ム力つく奴はこうするんだよ！」

そう言うと、ルカリオは自分の右手を勢いよくブイセルの顔面めがけ振った。目の前まで迫ってきた拳に臆し、ブイセルはぎゅっと目を瞑った、まさにその時だった。

「待ってください」

突如、どこからか声が聞こえた。その声に気付いたルカリオはブイセルの顔面すれすれのところでびたりと拳を止める。辺りを見回すと、自分達の後ろに1匹のフローゼルが立っていたのだ。

そのフローゼルは黙ってヒトカゲ達に近づき、ルカリオに宙吊りにされているブイセルを見た。そして何かを確認すると大きく息を吸い、大声でブイセルに怒鳴りつけた。

「このバカ息子が！」

フローゼルはそう怒鳴りながら、ブイセルの顎を思い切り殴りつけた。ルカリオが驚いて手を離してしまったため、ブイセルは地面に突き刺さるのではないかというくらい勢いで地面に潰された。

「“うずしお”！」

すかさずフローゼルは“うずしお”をくりだし、大きな渦潮の中にブイゼルを閉じ込めた。2人は啞然としながら見ているしかできなかった。

それが済むと、ゆっくりとフローゼルが近づいてきて、2人に深く頭を下げた。

「うちのバカ息子をご迷惑をかけ、申し訳ございませんでした」  
『い、いえいえ』

絶対に散々迷惑をかけられたと言っではいけない、2人は直感的にそう思っただけで本当の事を言えなかった。

「実はあの子、うちで何かあるかにつけ家出しては、他人様に迷惑ばかりかけて……かなづちだからああやって“うずしお”に閉じ込めて反省させるんです」

さらにフローゼルは謝罪を繰り返す。それは水に流していいからとりあえず道を教えてほしいと2人が言うと、フローゼルが誠心誠意を持って案内してくれると言う。

「あの……ブイゼルどうするんですか？」

「あの子は放っておいて下さい。気絶するくらいまでやらないときっとダメでしょうから」

世の中には恐ろしい親もいるもんだ。2人はいい経験をしたと自分に言い聞かせながら、フローゼルの後ろを歩いていった。

## 第8話 生意気ブイゼル（後書き）

勘違いしないで下さい。私はブイゼル大好きですからね？

ルカリオ

「だったらフツーのかわいいブイゼルにしるよ」

ヒトカゲ

「まあまあ（汗）それより今日は!？」

サイクス

「バクフーンの俺と!」

バンギラス

「俺が主役だぜ!」

出た、第2世代の人気者（汗）

サイクス

「照れるって もちろん予約したよな？」

もちろん初日にしましたよ（笑）でも今日は朝から遠出しなければいけない用事があつて、明日の夜中まで家に帰れません（泣）

バンギラス

「あちゃ〜（汗）でも帰ってきたら速攻やるんだろ？」

当たり前（笑）夏休み万歳だよホント（笑）ちなみにHGから開けるつもり。

サイクス

「あれ、作者ルギアの方が好きなんじゃなかったか？」

だから箱を開けたくないのさ（笑）

バンギラス

「気持ちわかるかも（笑）俺だって……」

サイクス

「大好きなピチューを食べないように気をつけてるんだもんな？」

バンギラス

「……コラボ先で覚えてやがれ（怒）」



## 第9話 伝記（前書き）

サイクス

「おっす！ サイクスだぜい」

バンギラス

「なあ、何で俺らがここに出てるんだ？」

サイクス

「HG・SS発売記念か何か知らんけど、しばらく俺達がここを仕切っていいみたいだぜ」

バンギラス

「……ゴルドンウィークの時も仕事押し付けられたような（汗）」

サイクス

「まっ、出番ないからいいじゃんか。今日の話は……おっ、ホウオウについての情報が!？」

バンギラス

「物語が動くのか？」

サイクス

「『それは読んで確認してください by Lino』だとさ」

バンギラス

「……へいへい（汗）」

## 第9話 伝記

「では、私はこれで」

『あ、ありがとうございます』

計り知れぬ恐怖に耐えながらも、2人はフローゼルの案内によりどうにかインコロットに辿り着くことができた。フローゼルは2人を宿屋の前まで案内すると、大きくお辞儀をして帰っていった。

「もう夜遅いし、今日はもう泊まるうか」

「そうだな。なんかあのガキのせいで疲れたし」

2人は相当気疲れしていた。特にルカリオはブイゼルを肩車していたため、体力的にも疲れてしまっていた。明日の事は明日考えよう、それしか考えられなかった。

次の日、先に起きたのはルカリオだった。隣のヒトカゲは静かに寝ている。どうせまだ起きないだろうから少し朝日を浴びてこよう、そう思ったルカリオは1人で街を散歩することにした。

インコロット、その名の通り清らかさを感じ取れる街で、空気もおいしい。建物こそ多いものの、どこか田舎を感じさせる建物の造りで、趣もある。ルカリオはすぐにこの街が好きになったようだ。

「ここがインコロットか。初めて来たが、いいとこだな」

道端には綺麗な花が並んでいた。その1輪1輪がそよ風によって揺らいでいる。ルカリオはその花達に意識を集中させると、花達から出ている波導を感じ取った。

(……生き生きとしてるな。生命の躍動とは、やはりいいものだな)

ルカリオの好きな事、それは波導、特に自然の中にある生き物から発せられるものを感じ取ることだ。これを感じ、自分もこの世界と共に生きている、そう思える瞬間が幸せなのだとか。

そんな哲学をしているルカリオはそれにはかり集中していたせいか、自分の頭上に向かって落下してきている物体の波導を感じ取ることはできなかつたようだ。

「いでっ!?!」

何か固いものがルカリオの頭に直撃した。頭を押さえながらルカリオが頭上を見ると、目の前にある建物の4階から1匹のカモネギが申し訳なさそうな顔をしてこちらを見ていた。

「す、すみません! 今そちらへ!」

その場からすぐに飛び降りると、カモネギはルカリオを建物の中へと案内した。

「だ、大丈夫ですか?」

「何ともねえけど、ここは何だ?」

カモネギが心配そうにしているが、ルカリオにはかすり傷一つついていない。それよりもルカリオはカモネギに入るように言われたこの建物の事が気になっていた。

今2人はロビーらしきところにいるのだが、それ以外は何もない

のだ。それに加え、あまり掃除がされていないようで、所々にホコリやクモの巣が見受けられる。もの珍しそうに建物の中を見ているルカリオに、カモネギは説明した。

「ここは書庫なんです。図書館に所蔵しきれないものや、歴史的に大事にすべき書物を保管しているところなんです」

「どうりでここに何も無いわけか」

「はい。そして先程掃除をしていたら……本が落下しちゃいまして。申し訳ありませんでした」

故意にやったものでないので攻めるわけにもいかず、許してあげたルカリオ。だが本当は詫びの1つでも入れさせようかと考えていたようだ。

「……ん？ お前、ここ書庫だって言ったよな？」

その時だった。ここが書庫だということに気づいたルカリオがカモネギに確認する。改めてここが書庫だとわかると、カモネギにある事を頼み、駆け足でその場を後にした。

数十分後、カモネギの元ヘルカリオが、宿屋で寝ていたヒトカゲを連れて戻って来た。何故かヒトカゲの顔に3本ほど斜めの赤いラインが入っている。

「おい、あったか？」

「あるにはありましたが、これしかありませんでした」

ルカリオがそう言うと、カモネギは1冊の本を2人に差し出した。それはとても古びている本で、背表紙のタイトルはかすれていて読

めない。

「これ何？」

ヒトカゲはどういう理由で連れて来られたのもわからないまま本を渡され、少々混乱していた。その様子を見ながら、ルカリオが嬉しそうにその質問に答える。

「これは、ホウオウについての記述がある書物だ」

「……本当！？」

ホウオウについて記述がある書物は皆無に等しい。事実、1年前にヒトカゲがナラン八島の図書館で読んだ『伝説のポケモン』にも、ホウオウの名前すら載っていないかったのだ。

ホウオウ この世界のポケモン達は、その存在を昔からの言い伝えだけで知っているようなもの。正確な情報であるかどうかさえ不明なのだ。

「よし、読んでみるか」

貴重な資料を手取るヒトカゲ。緊張しているのか、手が小刻みに震えている。大きく深呼吸をして緊張を取り除くと、恐る恐る表紙をめくった。

「……“ホウオウ。生命を与えし七色の神と呼ばれる存在

”」

冒頭のページにはそれしか書かれていなかった。ヒトカゲは次のページをめくるが、そこには何も書かれていない。その次のページもまっさらだ。

「何だよこれ、これしか書かれてないってか？」

ヒトカゲから本を手渡してもらい、今度はルカリオがページをめくる。1ページずつ丁寧にめくっていき、十数枚めくったあたりである事に気づいた。

「ん？ 所々破かれてるな……」

ルカリオが見つけたのは、数ページに1枚の割合で破かれたページの残りだった。破かれているということは、おそらく何かを書いてあったらうと推測するルカリオ。

「おいカモネギ、本当にこれしか資料はないのか？」

「はい。ホウオウに関しての資料はこれ1冊だけでございます。何せあのディアルガやパルキアよりも民の前に姿を現さないと言われておりますので……」

カモネギ曰く、ホウオウを見た者に永遠の幸せが約束される所以<sup>ゆえん</sup>はここにあるのだとか。兎にも角にも、資料が今手に持っているものしかない事に落ち込む2人。

「はあ、せつかく情報をゲットできると思ってたのによ」

肩を落としたルカリオは乱暴に本を机上に投げる。投げられた本は机にぶつかった衝撃で開き、さらに風が吹いてパラパラとページがめくれる。

「……あつ、ルカリオ、見て！」

その光景を眺めていたヒトカゲが、めくれていくページの中の1枚に何かが書かれているページがあるのを発見した。そのページを探して開くと、見開き2ページにホウオウについての記述が挿絵付きであったのだ。

「ヒトカゲ、読んで見る」

ルカリオに急かされながら、ヒトカゲはそのページに記載されている内容を読んでいく。

“ホウオウが飛び去ったあとには虹が残るとされる。またホウオウは不死鳥とも云われ、この世界が崩壊しない限り生き続け、この世界を見守っている神と信じられている。”

この文以外にもたくさん記述がなされていたが、インクが滲んでいて解読できず、はっきりわかったのはこの部分だけであった。そして挿絵は、手書きで描かれたと思われるホウオウの絵だった。黒1色で描かれており、特徴がはっきりわかるものだ。古代版ポケモン図鑑と言えるような作りになっている。

「なんだあ、これだけか」

ヒトカゲとルカリオの期待が大きかったせいも、2行の記述だけにがっかりといった様子。収穫があったとすれば、ホウオウの姿がどんなものを把握できたことだけだ。

「じゃあねえな。地道にやってくしかないな」

ヒトカゲの肩をぽんと叩いて、軽く励ますルカリオ。ヒトカゲは

「うん」と返事はしたものの、やはり残念がっているのが表に出ている。

それからカモネギと別れ、いつものように二手に分かれて聞き込みを行った2人。だが簡単に情報が集まるわけもなく、夕方になっても情報はゼロだった。

川沿いの芝生で合流すると、ヒトカゲはその場に座り込んで川を見て、ルカリオは技の素振りをはじめた。

「なあ、ヒトカゲ」

未だ暗い表情のままのヒトカゲにルカリオは声をかける。その声に反応し、ヒトカゲはふとルカリオの方を見た。

「何でそんなに落ち込んでるんだよ？」

「……なんか、思うようにいかないなーって」

ここ最近、ヒトカゲは戸惑っていたのだ。前回のように軽い気持ちで始めた旅と異なり、今回は神捜しの旅である。その責任の重さからくるものなのだろう、自分のやり方が正しいのかどうかかわからないでいたとルカリオに話した。

それを聞くと、軽く溜息を1つつき、何故かルカリオはヒトカゲの方を向いて構えた。

「はどうだん」！

刹那、ルカリオはヒトカゲに“はどうだん”を放った。突然の事にどうすることもできずに、ヒトカゲは“はどうだん”をくらって後方に背中から倒れる。



「痛たたた、いきなり何すんのさ!？」

腹を押さえながらヒトカゲはルカリオに尋ねると、真剣な眼差しをしたルカリオが答える。

「……俺がお前に“はどうだん”を打つってわかったか？」  
「えっ？」

「お前には、俺が“はどうだん”を打つなんてわからない。そうだろ？ それは未来の出来事なんだからよ。先のわかつてる未来なんか未来じゃねえだろ」

説教じみているように感じる言い方だが、どこか暖かい。ヒトカゲはそう感じながらルカリオの言うことを聞き続ける。

「未来は何か起こるかわからないんだから、試行錯誤して自分なりの答え見つけて突き進んでいくしかないんじゃないか？ それが『生きる』ってことだと俺は思うぜ」

忘れかけていたものをヒトカゲは思い出した。1年前、死に掛けた自分が生き返らせてもらう時に言った、自分なりの『生きる意味』の答え。今ルカリオが言ったものと同じである。

(答えを見つけて、未来へ向かって突き進む。そうだよ、これでいいんだよ。何で忘れてたんだろう)

自分の信念を今一度思い出させてくれたルカリオに感謝したヒトカゲ。ゼニガメともチコリータともドナイトスとも違う、自分を想ってくれる仲間。その仲間に、ヒトカゲは一言だけお礼を言った。

「もう大丈夫、ありがとう」

## 第9話 伝記（後書き）

サイクス

「えっと、『最後のは文字数稼ぎとして書かせてもらいました（笑）』だよ」

バンギラス

「作者にいい台詞なんか書けるはずねえもんな（笑）」

サイクス

「俺より頭悪いもん。それに、今危険だし（汗）」

バンギラス

「危険って？」

サイクス

「この前ポケモンセンターでルギアのぬいぐるみ買って、それを見  
てはにやけてるんだぜ（汗）」

バンギラス

「うおっ、確かに危険だな（汗）」

サイクス

「しばらくほっとこうぜ（汗）んじゃ、まったな〜！」

バンギラス

「いつも感想・評価ありがとよ！」

第10話 孤児（前書き）

サイクス

「バンちゃん、俺思ったんだけどさ」

バンちゃん

「バンちゃん言うな（怒）んで、何だ？」

サイクス

「俺らつてさ、前にやった投票で1、2位だったじゃん。それってどうなん？」

バンちゃん

「いや、まあ嬉しい事だけだな。お前なんかあんまし出番なかったろ（笑）」

サイクス

「うっ（汗）何だよ、自分が人気あるからってよ……（泣）」

バンちゃん

「な、泣くなよそんな事で（汗）」

サイクス

「くそ〜っ、早くポツポ食べちゃえよ〜！（泣）」

バンちゃん

「わ、わかっ……はあっ!？（怒）」

## 第10話 孤児

日が暮れると、ヒトカゲの事を気遣っているのか、ルカリオが外食をしようと言いだした。当然の如く「行きます」とヒトカゲは目を輝かせてルカリオに返事をした。

(現金な奴だなこいつ……)

その態度の変わり様に呆れながらも、おもわず口元を緩めてルカリオは小さく笑った。

「ご注文は何になさいますか？」

数十分後、2人が入ったのはテーブル席がわずか20席程の小さな酒場だった。数人の客が楽しそうに酒を飲みながら話している。2人の席にはウエイトレスのラッキーが注文を伺いにやって来た。

「俺は生1つとつまみ1皿」

「僕は……オリジナルポケモンフーズとおいしいみずと、えっと……」

「以上でいいです」

ルカリオは咄嗟に財布の危機を予期したのだろう、ヒトカゲの注文を途中で遮ってラッキーを下がらせた。そしてルカリオが「これ以上注文するな」というオーラを出していることに気付いたヒトカゲは大人しくメニュー表をテーブルに静かに置いた。

「お前、頭ん中と食欲だけは退化しなかつたんだな」

ずばり指摘されて顔を赤くするヒトカゲ。事実、リザードに進化する前のヒトカゲだった頃は今と比較して食べる量をはるかに少なく、逆にリザードンの頃と変わっていない。

「ルカリオはあんまり食べないの？」

「……金がねえから……」

テーブルの下で財布を出し、その中を見ながらルカリオは悲しい顔をした。あとどれだけ持つだろうか、頭の中はそればかり考えている。

「あ、いや、そういう意味じゃなくて、お酒の方が好きなのかなって意味で聞いたんだけど」

慌ててヒトカゲが話を転換する。もちろん先程の質問の意味はそのままである。

「酒か？ 嗜<sup>たしな</sup>む程度にな。俺が酒豪に見えるってか？」

「うっん。たぶん、僕の知り合いの方が酒豪だと思うから」

「ヘクシユン！」

同時刻、アイランドのとある島では、あのポケモンが大きなくしやみをした。

「あら、大丈夫？」

「……大丈夫ですよ。たぶん花粉が何かでしょう」

変だなと思いつつもそのポケモンは気に留めず、心配してくれたポケモンに寄り添った。

しばらくすると、ヒトカゲ達のテーブルに注文した物が運ばれてきた。料理はできたで湯気が立っている。その料理の香りが鼻につくだけで、ヒトカゲはよだれを垂らしている。

「いただきます」

早速ポケモンフーズを1粒つまむヒトカゲ。噛んだ瞬間、口の中に広がる芳醇な味わい。頭にくつきりと浮かんだ文字はまさしく“美味”の2文字だった。

「んじゃ、俺も……」

続いてルカリオもビールを口に含む。軽い運動の後に飲むビールの喉越しはまさに格別で、それを体感したらその勢いは止まらない。一気にジョッキの半分まで飲み干してしまった。

『うまい〜!』

2人が声を揃えて言った。おもわず笑みがこぼれるほど、今まさに2人は幸せの絶頂にあった。ヒトカゲに至っては既に皿の半分のフーズが消えていた。

「お前、食うの早いな」

「でも僕の知り合いと比べたら全然遅いよ」

「ブエックシユン！」

同時刻、ヒトカゲ達のいるポケラス大陸のどこかで、あのポケモンが大きくくしゃみをした。

「うゝ風邪かあ？ まっ、いいや。それより……この肉最高」

そのポケモンもヒトカゲ達同様、食事を楽しんでいた。数秒間だけではあるが。

ヒトカゲとルカリオの夕食が中盤に差し掛かった頃、ルカリオはふと店の窓から外を見ようとした。すると、自分のいる位置から一番離れたところにある窓の外から、こちらを覗いているポケモンがいた。

そのポケモンが気になったのか、ルカリオは窓に近寄ろうと席を立ったが、横のテーブル席で酒を飲んでいたエビワラーとバクーダが止めに入る。

「おい兄ちゃん、やめとけ」

不意に腕を掴まれたルカリオは驚き、言われるがままに自分の席についた。どうして無視するのかを尋ねると、エビワラーはそのポケモンの事について語りだした。

「あいつ、アーマルドっつーんだけど、いつつもここにきてはああやって窓からこっち覗いて物乞いしてるんだよ」



『物乞い？』

ヒトカゲ達は不思議に思った。野性のものも含めて、この世界では食べ物に困ることはない、それなのに何故わざわざ物乞いをするのかが理解不能だった。その理由をバクーダが説明する。

「あいつはな、家もなければ両親もいない孤児、つまりストリートチルドレンなんだよ」

話によると、生まれて間もなくして両親が不慮の事故で他界。それからというもの、自分で食べ物を見つけたり物乞いをしたりして食料を確保し、夜は誰にも見つからない場所で寝ながら生活をしているのだという。

「そして口がきけねえのか知らねーが、まったく喋ろうとしないぜ」  
以前、バクーダも食料を分け与えたこともあったのだが、受け取ったアーマルドはお礼すら言わずにそのまま立ち去ったらしい。バクーダの他のポケモンに対しても同様の態度をとるようで、アーマルドの印象を良いと思っている者は少ないのだとか。

『へえ〜』

時折、いまだ窓から店内を覗いているアーマルドに目をちらつかせながら、ヒトカゲとルカリオは話を聞いていた。孤児として育ててきたアーマルドを不憫ふびんに思っているのかとおもいきや、そうではなかった。

「なんかよくわかんねーけど、喋らせてみたくなっただぜ」

話を聞いているうちに、ヒトカゲモルカリオも、アーマルドに対して徐々に興味が湧いてきたらしい。どこか放っておけない、そんな気がしてならないようだ。

「おいおいマジかよ!? 止めとけて!」

「そうだ、あまり関わりを持たない方が……」

エビワラーとバクーダが2人をなだめるが、一旦興味を持ったこの2人を止めることはできない。2人の目はやる気に満ちている。

「あいつが喋んないのは、たぶん心を閉ざしてるだけだ。俺らで何とかしてみようじゃねーか! なっ、ヒトカゲ?」

「うん。僕、やってみたい!」

2人は食事が終わり次第、アーマルドに直接会って話をするといい。渋った顔をしながら「やるだけやってみろ」と、酒を飲み干したエビワラーとバクーダは言い残し、店を後にした。

しばらく店の外から中の様子を覗いていたアーマルド。いくら待っても誰も自分のところへ来てくれる気配はなく、みんなから無視されているように感じていた。

こここのところ、まともな食事にはありつけていないのだろう、しきりに腹の虫が鳴く。店の中では見るからに美味しそうな食べ物から次へと運ばれている。それを見ながら、自分がその料理と食べられているのだと必死に思い込ませているのだ。

中へ入れば食べ物が出てくる。だが料理を食べるためのお金がない。数日かけて必死にかき集めた30ポケでは店の料理は食べられない。手に持った金を見ながら溜息をつく。

今日は収穫なしか。仕方ない、帰ろう。そう思ったアーマルドは

無表情のままとぼとぼと、峙ねむにするための誰にも見つからないような場所を探し求め始めた、その時だった。

「ちょっと待てよ、そのアーマルド」

突如、声を掛けられたアーマルド。自分に声をかけてくれるポケモンは久しぶりだ。アーマルドはどこか期待しながら振り向くと、そこにはヒトカゲとルカリオが立っていた。

「俺達、お前と話してみたくなつたんだ。よかつたら一緒に……」

そこまで言ったところで、アーマルドは無言のままヒトカゲ達を背にして歩き始めた。2人に対して完全に心を閉ざしているようだ。それがルカリオの闘志をさらに燃やさせる。

「ま、待つてくれよ！」

黙って歩くアーマルドを追いかける2人。逃げることなく自分のペースで歩き続けるアーマルドの横にぴったりくつきながら、2人は説得を試みる。

「別に僕達怪しい者じゃないよ。アーマルドと友達になつてみたいだけで……」

「そうだぜ。だからちょっとでいいからトークでも……」

無言を貫くアーマルド。ヒトカゲとルカリオを無視するかのよう  
に歩くペースを速めて突き放す。2人はこれ以上追いかけないで  
おこうとその場に立ち止まり、そこからアーマルドに呼びかけた。

「話してくれるまで諦めないからなー！」

アーマルドが振り向くことはなかったが、その言葉はしつかり耳に届いていたようで、一瞬その場で立ち止まった。

この時、アーマルドは変な感覚に陥った。きっと自分をからかっているだけだと強く思う反面、2人に好意を抱いたのか、ちよつとだけなら話してもいいかなという思いが入り混じり、胸に違和感を覚えたようだ。

だがそれを悟られないように、再び歩き出す。素直に自分の気持ちを表に出すことができずに、アーマルドはいつも苦しんでいる。

埒についたアーマルドは、今宵の星空を見上げて神様に請う。“  
勇気が欲しい”、そう願いながら静かに眠りについた。

## 第10話 孤児（後書き）

ヒトカゲ

「バンギラスがバクフーン兄ちゃん半殺しにしてるせいで、結局お休みもらえたの少しだったね（汗）」

ルカリオ

「何であんなチョイスにするんだ作者の奴は（怒）」

ま、よいではないか（笑）

ルカリオ

「んで、今度も随分とイメージ崩すようなキャラだな（汗）」

ししょーがいい奴すぎて惚れたのでアーマルドを起用しましたが…

…やりすぎ？（笑）

ヒトカゲ

「あれはちょっと（汗）」

ルカリオ

「……お前の考えている事がよくわからん（汗）」

## 第11話 少しの勇氣（前書き）

ちよつとだけ文章頑張ってみました。

ヒトカゲ

「そーお？ あんまり変わってないと思うよ？」

そんな事は……言われてみるとそうかも（汗）

ルカリオ

「……（意味ねー、でも笑える 笑）」

おいルカリオ、今「意味ねー、でも笑える」って思っただろ（怒）

ルカリオ

「ギクツ！？（汗）」

## 第11話 少しの勇氣

次の日、街からさほど離れていないところを流れている川にアーマルドはいた。顔を洗い、直接口をつけて水を飲んでいる。彼の朝はこうして始まる。

だがいつもと違うところがあるとするれば、どこからか視線を感じることだ。わかっていても敢えて自分からは動かず、相手が動くのをじっと窺っていた。

「おはようさん」

アーマルドの予想通り、そこにいたのは昨晚に会ったヒトカゲとルカリオだった。わざわざ自分を捜してここまで来たのだろう、そうでなければこの場所にポケモンが来ることは滅多にないとアーマルドは心の中で呟いた。

「……………」

無視するかのようにわざと視線を逸らす。そしてアーマルドはその場から立ち去ろうとしようとした時、ヒトカゲが手に持っていたリンゴを差し出した。

「お腹空いてるんじゃない？ これ食べていいよ！」

優しく差し出されたリンゴを、じっとアーマルドは見つめていた。昨日から何も食していない彼にとってこのリンゴはこの上ないほどのご馳走だ。そのリンゴを受け取るうとすつと手を差し出そうとした。

だが彼の中で何かが働き、その手の動きを止めさせた。その顔に

はためらいの表情が浮かんでいる。そしてその場にいづらくなつたのか、ヒトカゲ達から離れようとして背を向け、早歩きでどこかへ向かって行ってしまった。

心を閉ざしているとわかっているにしても、いざリングを受け取ってもらえないとなると、ヒトカゲは少し落ち込んでしまった。それをなだめるようにルカリオが肩を叩く。

「何落ち込んでんだよ？ まだ始めたばかりじゃねーか」  
「そうだよ。よしっ、頑張っていこう！」

すぐに気持ちを切り替え、2人は少し間を置いてからアーマルドを追いかけ始めた。

両親の死後、当時は進化前のアノプスだったということもあつたか、一時期は面倒を見てくれる者もいたアーマルド。しかしそれもつかの間、半ば捨てられる形でその家を追い出されてしまった。

その後は路頭に迷いながら物乞いをして生活を送ることとなった。これも最初は彼を哀れんで食料を渡す者も少なからずいたが、いつからか周りには誰も寄りなくなっていた。

この経験が、アーマルドの心の扉に重い南京錠をかけたのだ。自分をさらけ出すことのできる家族や友達がいらない。それが長く続いたせいだ、自分からもこのような者達を求めようとはしなかった。いや、求めるのが怖かったのだ。いつまた捨てられてしまうか、自分を裏切ってしまうのかを考えると、どうしても他の誰かと接触ができない。

(……あいつら、何で……)

いつもと同じ事のはずなのに、今回はどこか違った。いつもなら



自分と接触した者の事は忘れるようにしているのだが、どういう訳か、アーマルドはヒトカゲとルカリオの事だけは頭から離れない。

(……どうして俺にこんなに構おうとするんだ?)

実は昨晚からこの事ばかりずっと考えていたのだ。アーマルド自身、大抵の奴らがやるようなからかいではないとわかっていて。では何かと考えてみたものの、答えが浮かばない。そう考えながら歩いているうちに、再びその2人がやって来た。

「なあアーマルド。俺達は本気で友達になりたいだけなんだって。一目見た時からそう思ったんだよ」

本音をぶつけるルカリオ。そして同じ想いのヒトカゲも賛同の意がこもった頷き方をする。2人の様子を見て、アーマルドは確信した。こいつらの言っていることは嘘ではないと。

話だけならしてみたい、そう思っても恐怖が体の動きを抑えつけようとする。しばしの間頑張ってみるものの、結局ヒトカゲ達に背を向けてしまった。

ヒトカゲとルカリオが顔を出しては、避けるようにアーマルドはそっぽを向く。この一連のやりとりは数日間続いた。その間、アーマルドは1度も口を開く事はできていない。

そしてこの日の夜も、ヒトカゲとルカリオはアーマルドの元へやって来た。もし彼らが義務でアーマルドに会いに来ているなら飽き飽きした顔になっているだろうが、そのような表情はせず、友人同士に見せる普通の顔をしている。

「リング取ってきたんだ。ここに置いてくから食べてね」

ヒトカゲがリンゴを3つ、アーマルドの足元に置いた。そしてあれこれ話をするわけでもなく、「また明日来るね」と言って2人は去っていった。

2人がいなくなったのを確認すると、アーマルドはヒトカゲが置いていったリンゴを貪る。最初はヒトカゲ達が持ってきた食料を触りもしなかったが、日が経つにつれてだんだんその気が変わってきたようだ。

『うわあっ!』

リンゴを食べ終わったたちょうどその時、遠くからあの2人 ヒトカゲとルカリオの声が聞こえてきた。心配になったアーマルドは声のする方へ向かって行った。

(……………!)

現場近くまで来ると、アーマルドは草むらに隠れて様子を窺う。そこで彼が見たのは、1匹のウツボットの“つるのムチ”でヒトカゲ達が縛られている姿だった。

「ぐっ……何しやがんだ!？」

「か、金目のもの置いてけ。そしたら解放してやる!」

このウツボット、どこか緊張気味である。それもそのはず、金に困って衝動的に2人を襲ってしまったのだ。そのせいか、2人を縛っている蔓が気持ちよく感じる。

2人が本気を出せば簡単に倒せる相手だろう。だがウツボットが

持つ夢の先端の針を向けられているため、下手に動けない。

(……………どうしよう……………)

アーマルドはただ1人、どうすることもできずに草陰で慌てふためいている。助けなければいけないと思いつつも、恐怖が先走ってしまったているのだ。

そのせいか、ヒトカゲ達を放置しようとしてまで思い始めた。関係ない、俺には関係ない、赤の他人なんだからと自分に言い聞かせ、その場から離れようと背を向けた。

(……………)

それでも、足が1歩も前へ進もうとしない。どこかで何かが引っかかっている。そして本能的に行ってはならないと足止めされているのが自分でもわかったようだ。

この数日間で、アーマルドの気持ちは確実に変化していた。うざいと思ってしまうくらい毎日のように顔を出す2人が変化を与えたのは言うまでもない。

友達になりたい　今まで生きてきた中でそんな事を言われたことすらなかったアーマルド。友達というものが実際にはどういうものかを知らない彼にとっては、興味をそそられる誘いである。

だがそれ以上に、ヒトカゲとルカリオ、この2人から感じ取ったものがあつた。アーマルド自身感じた経験が皆無なため口で表現しづらいつらいつた、とても大きく、暖かく、光り輝いているもの

“愛情”だ。

(……………！)

自分に今足りないもの、そして自分に必要なもの、それをはつきりと自覚したアーマルドは、もう1度自分の体をその方へと向けた。

「さ、さっさとよこせ！」

「ぐっ……くそっ！」

なかなか金品を渡そうとしないヒトカゲとルカリオに腹を立てたのか、ウツボットはさらに蔓をきつく締めた。抵抗しようにも手を塞がれ、さらには針も向けられている。ヒトカゲの方は口を塞がれているため、強力な炎技が出せない。

(ヒトカゲがあれじゃあ技使えないよな。仕方ねえ、俺が一か八か……)

ルカリオは針で刺されるのを覚悟で脱出を試みようとした、まさにその時だった。

「シザークロス」！」

突如、どこからか声が聞こえた。それから直に、ヒトカゲとルカリオは自分達を縛っていた蔓が緩んだことに気づいた。ふと顔を上げると、思いも寄らぬ顔がそこにはあった。

『……アーマルド！？』

2人を庇うように前に立ちはだかっていたのは、あのアーマルドだった。“シザークロス”を受けたウツボットも突然の事に困惑している。

「……消える」

やはり怖いのか、小さな声でアーマルドはそう言った。だが逆にそれがウツボットの恐怖心を呼び起こし、戦おのいでしまった。そしてアーマルドが自分のツメを振り上げると、それを見ただけでウツボットは逃げていった。

自分の視界からウツボットが消えると、アーマルドはふうと小さく息を漏らした。自由の身となったヒトカゲとルカリオが彼の元に近づいていった。

「ありがとう！ 助かったよ！」

「マジ感謝！ ホントにありがとう！」

感謝の言葉に顔を赤らめるアーマルド。だが相変わらず何も喋るうとはしない。

「よし、明日はいっぱいリンゴ持ってきてやるからな！ 楽しみにしとけ！」

ルカリオはそう約束すると、ヒトカゲと共に先程のように手を振って別れようとした。それをアーマルドは黙って見つめていた。

「ヒトカゲ、尻尾の炎で蔓を焼けなかったのか？」

「なんか変にからまって、尻尾動かせなかったんだ」

先程の出来事の話しながら、2人は今日泊まる宿に向けて歩いていた。程なくして、何となく自分達の背後に何者かの気配を感じ、

後ろを振り返った。

「……………」

少し遠いところに、何とアーマルドがいた。距離をおきながらも、2人についてきたらしい。2人が歩けばアーマルドも歩き、2人が止まればアーマルドも止まる。それを数回繰り返していた。

それを2人は楽しそうに見ていた。アーマルドの心の内を読んだヒトカゲは、アーマルドに声をかけた。

「一緒にくる？」

それに対し、アーマルドは大きく、はっきりと頷いて返事をした。ヒトカゲもルカリオもおもわず笑みがこぼれた。

「なら、こっち来いよ！」

ルカリオの言葉にアーマルドは小走りで駆け寄っていった。その顔はほんの少しではあるが、嬉しそうにしているように2人には見えなかった。

まだ完全に心を開いたわけではないが、“友達”、そしてヒトカゲの旅のお供になったアーマルド。夢や希望を膨らませ、彼はこれから新たな旅に出る。

## 第11話 少しの勇氣（後書き）

展開的にはちょっと早いですが、SE仲間第2号はアーマルドです。

アーマルド

「……………」

ん、フリップ？ なになに……………「俺はアーマルド。よろしく」だそうです。

アーマルド

「……………」

またフリップ（汗）「こんな俺を好いてくれる人間がいるかどうか心配」って？

大丈夫でしょう。ゲームでししょー役だから人気ないわけないだろうし、空気キャラになったらイジられるという最近の傾向もあるから（笑）

アーマルド

「……………」（汗）

あつと、予告をしなくては……………と言っても次回予告ではありません（笑）

今作初（ポフィン代争奪戦除く）バトルは、10月上旬に投稿する予定です。

第12話 観光です(前書き)

もうすぐ夏休みが終わる……

ヒトカゲ

「冬休みがあるじゃない！」

ああ、9日間だけね(泣)

ルカリオ

「だらけ過ぎなんだよ。だからアーマルドより重いじゃねえか」

えっ、あれ、アーマルドの体重いくつ？

アーマルド

「……………」

えっと……あっ……そっですか(汗)ううっ(泣)



## 第12話 観光です

「金額はこちらになります」

その日の晩、ヒトカゲ達は道中にあつた宿の中にいた。受付カウンター上に置かれた請求書を見て目から涙を流しているのはルカリオ。その様子を黙って見ているのはヒトカゲとアーマルドだ。

「くうっ……お前らいつか払えよ、畜生！」

今までは何だかんだ言いつつも何とか間に合っていたのだが、今日からアーマルドが仲間に加わったことによって、彼の分まで負担しなければならなくなったのだ。一応、アーマルドはお金を持っている。何も買ったりすることはできない金額だが。

「……………」

「ごめん、いつか必ず払うから、しばらくはよろしくな、とアーマルドは心の中で言った。もちろん本人には伝わっていない。これと正反対の事を実際に口にしたのは、ヒトカゲだ。

「やっぱり払わなきゃダメなの？」

ポフィンの件といい今といい、ヒトカゲは自分からお金を払おうとは1度もしていない。何気なく言った一言でルカリオはプツン。

「今すぐ逝かせてやる……歯あ食いしばれや！」

「お客様、騒ぎは止めてください！」

「…………ごめんなさいもう言いませんから〜！」

「……………」

騒がしい奴らだな、と思いながらアーマルドはカウンターに置いてあった試食用のきのみを食べながら黙って傍観していた。

次の日、次の街へ行く道程がわからなくなってしまった3人は、行き先を確認するためにもう一度インコロットに戻ることにした。今の3人に地図を買う余裕はない。

街に到着すると、道行く誰もがヒトカゲ達の方を見ながら驚いていた。その原因となっっているのは、もちろんアーマルドである。今まで決して心を開こうとしなかったアーマルドが他のポケモンと一緒に歩いている事など、誰も想像すらできなかったからだ。

「お、おい見ろよ！ あれって……………」  
「嘘だろおい……………」

街中のポケモンが口あんぐりといった状態だ。ヒトカゲとルカリオは、どうだ参ったかと言わんばかりの笑顔で歩いているが、当のアーマルドは指を差されるのが嫌なようで、俯きながらヒトカゲとルカリオの後ろにピツタリくっついて歩いている。

「そんなに驚くことなのかな？」  
「そんだけこいつが辛い思いしてきたってことだろ」

2人は自分達の方を見て驚いているポケモン達を見ながら話をしていた。ふとヒトカゲが目線をルカリオから自分の正面に戻すと、目の前にクリーム色のふさふさしたものがあつた。

これは何だろうと不思議に思いながらさらに顔を上げると、ふさふさの中に橙色が見えた。そう、ヒトカゲの記憶によれば、これは

犬だ。しかも自分がよく知る犬だと確信した。

「お、お父さん!?!」

「ヒトカゲ、何してるんだこんな所で?」

そこにいたのは、船でアイランドまで帰ったはずのウインディであった。さらにウインディの隣を見ると、これまたいるはずのない奴がいた。

「何してんのー?」

ウインディの隣にいる、骸骨をかぶったような頭をしている黒い犬・デルビルがにこやかに話しかけてきた。その存在に気付いたヒトカゲはさらに驚く。

「デ、デルビルまで!? どして!?!」

ただただ驚いているヒトカゲ。前回のよう<sup>に</sup>に心配して様子を伺いに来る距離でもないし、なによりデルビルまで一緒にいる。一瞬思考が停止したが、はっと何か思いついたようだ。

(なるほど、僕が忘れたお財布、わざわざ届けに来てくれたんだ! やっぱりお父さんだな)

ウインディ達がいる理由をこう考えたヒトカゲの顔は綻<sup>ほころ</sup>んでいる。ようやく貧乏生活から脱出できる、そしたら美味しい物がいっぱい食べられる、そう確信していたヒトカゲの考えは、脆くも崩れ去ることになる。

「せっかく船使ってポケラスまで来たんだ、観光したっていいだろ

う

それを聞き、ヒトカゲは一気にうな垂れてブルーになった。自分の考えは甘かったと反省したようだ。

「でもビックリだよ。まさか会えるなんて思ってたもん」

嬉しそうにデルビルは言う。その証拠に、ヒトカゲに擦り寄って顔をペロペロと舐めている。それを見たウインディはじゃれ合っているヒトカゲを銜くわえて自分の目の前に立たせると、恥ずかしそうに小声で質問した。

「なあヒトカゲ。あ、あそこにいるのって……」

ウインディの目線の先には、本人は隠しているつもりだがハッキリと見えている、左胸に赤い稲妻印を持つポケモン、ルカリオだ。

「な、何ですか？」

ウインディに見られているルカリオは少し焦っていた。ウインディがルカリオを見ているのは、もちろんルカリオの父であるライナスのファンだからであるが、ルカリオはヒトカゲに行ってきた所業をバラされたのかと思っていたのだ。

（あ、あの野郎、チクリやがったな！）

勘違いしていたルカリオはヒトカゲを睨もうとするが、ウインディの目線を感じ、慌てて普通の表情に戻す。だが不運にも、ウインディが近づいてきたのだ。こうなるともう冷静でいられなくなる。

（お、おい説教か？ 俺は悪くねーぞ。逆に被害者なんだからな。そうだ、そうやって言えばいい。でもあの親父さん怖そうだな……ある意味ヒトカゲより強そうだし……）

色々な考えをめぐらせているうちに、ウインディが目の前まで来てしまった。はっとそちらを見ると、緊張感が一気に増し、思うように口が動かせないでいた。

「あ、あのっ、お、俺……その……」

「……君が、うちのヒトカゲを……」

ここまで聞いた瞬間、ルカリオの顔面に一気に汗が出た。絶対に、確実にこのウインディに半殺しにされる、そう思ってしまったおもわず目をぎゅっと瞑って下を向き、ルカリオは怯えていた。数秒間だけ。

「うちのヒトカゲを世話してくれているのは？」

「うわあっ……？ は、はい？」

ウインディが口を開いたと同時に奇声を上げたルカリオ。だがすぐにウインディが攻撃してくる気配がないとわかると、急に緊張の糸が解け、張っていた肩が緩くなる。

「え、ええ。俺がヒトカゲ君と一緒に旅させてもらってます、ルカリオです」

落ち着きを取り戻し、ルカリオはウインディに自己紹介をする。このとき初めてルカリオに君付けで呼ばれたヒトカゲは複雑な心境になったらしい。

「実は私、君のお父さんの大ファンでな、君が小さい時に1度見たことがあって……」

そこから始まったのはウインディの思い出話。どれだけライナスを愛していたか等、話せば話すほど深入りしていくことに気付いたヒトカゲは話題を逸らす。

「お父さん。このポケモンも僕についてきてくれてるんだ」

そう言って紹介されたのは、アーマルド。彼の心の中ではまだ挨拶できるまでに至っていないためか、ウインディとデルビルに軽く会釈するだけに止まった。

「初めまして」

それを知らないデルビルは挨拶しようとアーマルドに近づいたが、さっとルカリオの後ろに隠れられてしまった。

「えっ……俺、嫌われてるの？」

「違うよ。恥ずかしがってるだけだから、気にしないで」

ヒトカゲがさかさずフォローする。実際にアーマルドは本当に恥ずかしがっているようで、ルカリオの後ろから覗き見るようにウインディ達を見ていた。

「頼りになりそうな仲間だな。よかったなヒトカゲ」

だがウインディはそんな事を気にせず、仲間である以上きつと心配いらな**い**と思ってヒトカゲにそう言ったようだ。嬉しそうにヒト

カゲは「うん！」と返事をした。

「でもね、ルカリオだったら、いつも……」

「いやーおじさんにそう言われると俺嬉しいです！ 頑張ってヒトカゲ君と旅していきますよ！」

ヒトカゲがよからぬ事を言おうとしたのを察知し、ルカリオは大声でヒトカゲの発言を遮った。さらに注意を自分に向けさせるために、ウインディの目を見つめながら両足をつちり掴んだ。

「は、はあ……」

ルカリオの勢いに負け、これにはただ返事をするしかなかったウインディ。

「……………」

こんな奴だったんだ、とアーマルドはルカリオを見ながら思った。アーマルドは黙っている間は誰かを観察するのがわりと好きなのだから。

「あはは、ゼニガメ達と全然違うな！」

「うん。だから新鮮に感じるんだよね」

デルビルとヒトカゲは再びじゃれ合いながら話をする。ウインディもルカリオと話をしていると、ピンと名案が浮かんだ。

「そうだ。私達、今日の夕方の船で帰るんだが、それまでみんなでゆっくり観光でもしないか？」

ヒトカゲはこの街をゆっくり見ていなかったため、嬉しそうにその意見に賛同する。

「したいしたい　ルカリオ、アーマルド、いいよね？」

「嗚呼、いいぜ」

ルカリオは親指を立てて、アーマルドは首を縦に振って返事をした。これにはヒトカゲとデルビルは大喜び。まるでアルプスの少女を連想させるような踊りで喜びを表現していた。

「じゃあ、早く行こうよ！」

ヒトカゲを先頭に、みんなはインコロットをゆっくり見て回るべく歩き始めた。

そんなヒトカゲ達の様子を、1匹のポケモンが息を潜めながら建物の影からじっと見ていた。

「ついに……見つけたぞ……！」

不敵に笑うそのポケモンは、獲物を射すくめるような目つきでヒトカゲ達を睨む。正確に言うと、その中の1人を見続けていた。

標的を見つけたことができて満足したのか、そのポケモンは足早にその場から立ち去った。



## 第12話 観光です（後書き）

ヒトカゲ

「ちよつと、最後のあれ誰!？」

次回出すから待ってなさい。あ、それとちよつとお知らせです。実は私、とある競技の全国大会に出場するため、その調整やら何やらで来月下旬までの投稿が予定通りいかないかもしれません。ご了承ください。

ルカリオ

「そんな事より……お前さ、もっと早い時間帯に更新できねえのかよ?（怒）」

いやぁ最近昼寝ばかりしててさ、夕方〜朝方が活動範囲なのさ（笑）

だから友達とメールしても朝4時までには続くぞ（笑）

アーマルド

「……………（マジかよ 汗）」

### 第13話 薬草探し（前書き）

リニューアル後初投稿！……といっても何とも感じません（笑）

ヒトカゲ

「それより今回はどうなるの？」

今回はね……いろいろ大変です。特にルカリオはね。

ルカリオ

「俺が？ また何か酷え目に合わしやがったな（怒）」

あーでもネタ系ではないよ。本当に酷い目に遭ってもらいます（笑）

ルカリオ

「何で笑いながら言えるんだてめえは（怒）」

ヒトカゲ

「大丈夫、僕なんか1回殺されてるんだから（笑）」

ルカリオ

「お前もな……笑い事じゃねえだろ（汗）」

### 第13話 薬草探し

夕方、観光を終えたヒトカゲ一行は、アイランドへ帰るウインディとデルビルをシーフォード近くまで送り届けた。買い物や食事にかかった費用は全てウインディが負担してくれたことに加え、「頑張れ」と励まされたヒトカゲの機嫌は一層良い……はずだった。

「はあ……」

「溜息つくんじゃないやねーよ、俺までテンション下がるじゃんか」

ヒトカゲは歩きながら溜息をついていた。そう、今3人が歩いているのはシーフォードとインコロットを繋ぐ、辺りに民家が点在しているだけの1本道だからだ。

その道を、かれこれ2時間近くは歩いている。だがそこでようやく中間地点らしく、ヒトカゲとルカリオはさらに深い溜息を吐いた。ちょうどその時、2人の後ろから“バタツ”と音が聞こえてきた。その音に気付いた2人が後ろを振り返ると、そこにはうつ伏せで倒れているアーマルドがいた。

『……アーマルド!?!』

慌てて駆け寄りその場で体を仰向けにさせると、アーマルドは顔を赤らめ、息苦しそうにしていた。意識が朦朧としているのか、目が半開きだ。

「おい、しっかりしろ！ おい！」

ルカリオが呼びかけるが、返事をする余裕もないようだ。辺りを見回すが、病院などない。仕方がないので、ルカリオはアーマルド

を肩に担ぎ、一番近くの民家へ助けを求めることにした。

10分後、アーマルドはベッドの上で寝ていた。依然として容態が変わることはなく、辛そうな表情を浮かべている。その横では、ヒトカゲとルカリオが心配そうに見つめていた。

しばらくすると、この家の住人・ビツパが水で冷やした布を持ってきて、アーマルドの頭にそっとのせた。

「どうやら高熱が出ているようだね。まずは安静にしてないと」

ビツパは冷静に言った。だが2人は冷静でいられない。

「この近く、病院ないんだよね？」

「……ああ、そうだった！」

付近に病院がない事を思い出し、ビツパは慌てだす。このビツパ、どこか抜けている。1人慌てているビツパを余所に、ヒトカゲはずっとアーマルドに呼びかける。

「ねえ、大丈夫？ 苦しいの？」

その問いかけに首を小さく縦に振って答えるアーマルド。若干余裕が出てきたのか、首を傾けてヒトカゲ達の顔を見ている。

「……ごめん……」

アーマルドが珍しく口を開いた。申し訳なさそうに小さい声で2人に謝る。それにルカリオが応えた。

「何言つてんだよ。熱なんか誰だつて出るだろ。俺達が何とかしてやっから、お前はゆっくり寝てる」

これまた珍しくルカリオが優しい言葉をかける。そんなルカリオを見て惚れてしまったのか、ビツパは顔を赤くする。ちなみにこのビツパ、メスである。

「……って言うてみたものの、どうすっかな」

アーマルドを安心させるために言ったのはよいが、具体的にどうするまでは考えていなかったようだ。病院へ運ぶといつても、ここから2時間以上はかかってしまう。唸り声を上げながら必死で考えた。

ヒトカゲも一緒になって考える。首を傾げると、偶然ヒトカゲの目に観葉植物が飛び込んできた。その瞬間、自分がリザードだった時の出来事を思い出した。

「困ったな〜ポケモンセンターないよ〜」

数年前、とある林道でリサは熱を出したりザードを抱えて慌てふためいていた。そう、今のアーマルドと同じ状況にリザード　今のヒトカゲは遭っていたのだ。

「ん〜仕方ないなあ……リザード、ちよつとの間ここで待っていてくれる？　すぐ戻ってくるから!」

リサはそう言うと、リザードを人目のつかない木陰にそっと寝かせ、どこかへ行ってしまった。

それからわずか5分後、リサは片手に2、3枚の葉っぱを持って戻って来た。

「リザード、これ食べて。これは“ゲファイ”という雑草なんだけど、これを食べると1時間で熱が下がるのよ」

言われるがままにリザードはゲファイと呼ばれる、五つ葉のクローバーに似た形状の葉っぱを食べた。苦々しい薬草と異なり無味であるため、難なく食べることができた。

1時間後、リザードの熱は本当に下がり、元気に歩けるまでに回復した。

「ルカリオ、“ゲファイ”っていう雑草探そう！ それ食べれば熱下がるよ！」

過去に体験した出来事を全部思い出すと、ヒトカゲはその内容をルカリオに伝えた。これにはルカリオも喜びの表情を見せる。

「ホントか！？ よっしゃ、今から探しに行くぞ！」

ヒトカゲはゲファイの特徴を細かく言うと、駆け足で玄関へと向かった。一刻も早く見つけて食べさせなければと半ば焦っている。

「おい、どこら辺に生えてるんだ？」

「主にきのみが生なってる木の下にあるみたいだよ」

「じゃあ俺は向こうの方、お前はあっちを探してくれ！」

互いに行き先を確認すると、ルカリオは近くの雑木林の方へ、ヒ

トカゲは雑草が生い茂っている場所へ向かって走り始めた。

だが急にその足の動きを早めてしまったせいか、ただ足が短いせいか、ヒトカゲは数歩走っただけで真正面から転んでしまった。鼻を思い切り地面にぶつける。

「痛たたた……」

両手で鼻を押さえながら起き上がり、痛みをぐっと堪えている。あまりに痛かったのか、無意識に目から涙が流れた。しばらく堪えた後、ヒトカゲは涙を拭って立ち上がるうとした、まさにその時だった。

よくよく目を凝らすと、自分が転んだところに見覚えのある形があった。濃い緑色の、五つ葉のクローバーに酷似した形の葉っぱ。それはまさしく、ゲフィそのものだった。

「……え……」

いくら何でもこういう展開はあってはいけないのではないだろうか、ヒトカゲは何となくではあるが、居た堪れない<sup>たま</sup>気持ちになった。いつそ見なかったことにした方がよいのではとも思ったようだ。

そんな事になっているとは露知らず、ルカリオは必死になって木の下に目を凝らしてゲフィを探していた。しかし見つかるのは四葉のクローバーばかり。ルカリオはそのクローバーを摘み取るどころか、苛立ってブチブチ引き抜いていった。

「あ〜どこにあんだよ!? 早くしねーと熱長引くっつーのによ!」

キレ気味になりながらも、地面に這い蹲りながらゲフィを探して

いた、その時だった。

(……ん?)

ルカリオは自分の背後に何か違和感を覚えた。それが気になり、立ち上がって後ろを振り向くが、そこには何も無い。辺りを生ぬるい風が漂っているだけだった。

(気のせいか……)

気を取り直して、再びゲファイ探しを始めたルカリオ。だがまたすぐに背後から何かを感じたようで、ぱつと後ろを振り向いた。しかし、何も見当たらなかった。

おかしいと思ったルカリオは、目を閉じて精神を集中し、波導を感じ取るうとした。真つ暗な視界の中で青白く輝いているのは、草や花の波導、木の波導、そして。

(なっ……!)

ルカリオがもう一つ感じた波導、それは明らかにポケモンから発せられる特有の波導だった。だがそれだけではなく、物凄く強い何かを一緒に感じ取ったようで、その勢いに押されて1歩後退してしまった。

「だ、誰だ!? 出て来い!」

林一帯に響き渡るくらいの大声でルカリオは誰かを呼んだ。しばらくは物音一つしなかったが、直にその沈黙は、謎の波導を放っている者によって破られる。



「……さすがは波導使い、気配を消しても意味がねえってことか」

何処からともなく声が聞こえてきた。けれどもその声の主は一向に姿を現そうとはしない。相手の出方を窺いながらルカリオは対話を続ける。

「俺に用があるのか!？」

「ああ、あるとも。でなければこんな所にいる必要ねえからな」

明らかに戸惑っているルカリオに対し、相手のポケモンは声色からして余裕が感じられる。さらにルカリオはそのポケモンを問いた

「い、いつから俺の事を……」

「昼間、インコロットの街中でお前を見つけて、それからずっと尾行させてもらったぞ。お前が1人になるのを待っていたが、こんなにも早いとは思ってもなかったぜ」

“尾行”という言葉聞き、ルカリオは確信した。「こいつ、いい奴ではなさそうだな」と。面倒な事に巻き込まれてしまったのは間違いないようだ。

「嬉しいぜ、お前に会えてよお……」

「お前……何者なんだ!? 目的は何なんだ!? 答える!」

ルカリオは痺れを切らし、核心をつく質問を出した。数秒間の静寂の後、相手のポケモンは鼻で笑いながら「いいだろう」と答えた。刹那、ルカリオの周りの木々からガサガサと草が擦れる音がし始めた。どうやら木から木へと移動しているようで、その音はどんどん大きくなっていった。

瞬く間にそれはルカリオの背後へと回り、そのポケモンは木から降りた。慌ててルカリオは振り返り、そのポケモンを目にした。

「……お前は……」

そこにいたのは、全身が黄緑色をしたポケモンだ。腕は木の枝のような形をしており、腕や頭には特徴的な葉っぱらしきものがついている、トカゲのようなポケモンだ。

そのポケモンは静かに、そして低い声でルカリオの質問に答える。

「俺の名はジュプトル。ルカリオ、お前を……殺しに来た」

### 第13話 薬草探し（後書き）

盗賊？ そんなのぬるいぬるい（笑）

ヒトカゲ

「敵がジュプトルって……これはポケダンと同じパターン？」

いや、ポケダンは参考にしてません。私がやりたかった事は……

ルカリオ 伝説の救助隊リーダー

アーマルド お尋ね者のししよー

ジュプトル 正義を貫いた英雄

つまり、救助隊×探検隊のキャラコラボです（笑）「こいつらカッ  
コイイ！ 漢だぜ！」って理由だけで決めました（笑）

ルカリオ

「そんだけの理由で俺殺されてたまるかよ（怒）」

というわけで、次回はバトルでございませう。

第14話 殺意(前書き)

さて、死んでもらいますか。

ルカリオ

「縁起でもない事初っ端から言っんじゃねえよ(怒)」

ヒトカゲ

「そっだよ作者さん。言い方ってものがあるじゃない」

あゝそうだね。ゴメン(汗)

それなら……ルカリオ、苦悶の果てに絶命してもらいましょうか。

ルカリオ

「表現変えただけじゃねーか！(怒)」

アーマルド

「……………(笑)」

ヒトカゲ

「アーマルド、笑わなくても……………(汗)」

## 第14話 殺意

「俺を、殺しに来ただと？」

いきなり目の前に現れたジュプトルから伝えられたのは、自分を殺すという予告。当然ながら冷静でいられるわけのないルカリオは、ただただ焦るばかりであった。

「な、何故だ？ 何故俺を殺そうとする！？」

冷や汗を垂らしているルカリオとは逆に、ジュプトルは笑みすら浮かべず、ずっとこちらを睨んでいる。そしてジュプトルは体勢をやや前かがみにする。

「何故だと？ 死に行く者が……知る必要などないっ！」

刹那、ルカリオの視界からジュプトルが消えた。“いなくなった”と頭の中で理解した時には、既にジュプトルはルカリオの目の前まで来ていた。

「“でんこうせっか”！」

「ぐっつ！？」

至近距離で攻撃をくらったルカリオ。攻撃の当たった腹部を抑え、顔は険しい表情に変わった。だが体力的にはまだまだ余裕のようだ。

「やってくれるな、殺せるもんなら殺してみやがれ！」

そう言った瞬間、まるで沈静させるかの如く空から雨が降ってきて

た。だが当のルカリオには関係なく、逆に気持ちが高ぶってきている。

再び素早い動きでジュプトルはルカリオに近づく。波導を使えば動きを把握することもできるが、そのような時間はない。考えたルカリオは咄嗟に構えた。

「きんぞくおん」!

“きんぞくおん”、本来ならとくぼうを下げるために使う技であるが、この音を聴いて不快に思わない者はいない。その特性を利用しようとしたのだ。

ルカリオの予想通り、ジュプトルの動きが少しだけ鈍くなった。それをルカリオは見逃さなかった。そこから動きを予測し、自分の目の前に現れるタイミングを計る。

「はっけい」!

勘を頼りにルカリオは“はっけい”をくりだした。タイミング的には問題なかったはずであるが、どういうわけか技が当たった感触がない。完全に手を振り払った時には、そこにジュプトルの姿はなかった。

(……!?!? どこだ!?!?)

辺りを見回すが、どこにもいない。ふとルカリオの視界が若干暗くなった事に気付き、慌てて空を見上げると、そこにジュプトルはいた。何と“はっけい”が当たる直前に飛んで攻撃をかわしていたのだ。

「はたく」!

ジュプトルはルカリオの頭を思い切り叩いた。普通に叩く攻撃よりも、重力に身を任せている分、威力が増しているのだ。

「痛ってーなこの野郎！ “あくのはどう”！」

地上に降り立ったジュプトルにすかさず攻撃を放った。ルカリオを中心として同心円状に黒い波導が放たれている。しかしこれも難なく高らかに飛び上がって回避される。

「 “はどうだん”！」

「ちっ！ 罠か！」

ジュプトルの言うとおり、“あくのはどう”は罠だった。空中で無防備な状態のジュプトルに攻撃を仕掛ける作戦だったのだ。ルカリオの“はどうだん”は真っすぐジュプトル目掛け飛んで行き、ぶつかるはずであった。

「 “みきり”！」

間一髪のところ“はどうだん”を見切ったジュプトル。すれすれのところで“はどうだん”をかわすことができた。これには自身満々だったルカリオも舌打ちをして悔やんだ。

「 “れんぞくぎり”！」

「 だったら俺も “みきり”だ！」

体勢を立て直し、一気に攻めてきた。しかしジュプトル同様、ルカリオも“れんぞくぎり”を見切り、すでに既の所で攻撃を回避できた。

「……………」

一旦間合いを取り、互いに睨み合う。その間にも、降っていた雨はさらに強さを増している。ジュプトルは黙って構えているものの、ルカリオの呼吸は若干荒い。ようやくジュプトルのスピードについていけているようで、余裕が見られない。

「苦しいか？ 今楽にしてやる……………」

「へっ！ マッサージでもしてくれるってか？」

「減らない口だな……………」

張り詰めた空気の中、じりじりと互いに近づく2人。天候もなお悪化し、雷まで鳴り始めた。雷が落ちて辺りが一瞬明るくなった瞬間、2人はそれぞれ相手に向かって走り出す。

「…ちぎど……………」

ルカリオは“さきどり”でジュプトルのくりだす攻撃を出そうとしたのだが、どういうわけか、ジュプトルはルカリオに抱きついた。正確に言うと、体を両腕でがっしり掴んだのだ。

そしてそのまま高らかにジャンプし、空中でルカリオの体を地面目掛け投げつけた。そう、ジュプトルはルカリオより先に技をくりだしていたのだ。

「…たたきつける」！

「……………があっ!？」

地面に叩きつけられたルカリオは全身に痛みを被った。すぐさま起き上がるうとするが、その一瞬さえジュプトルは見逃さなかった。



「リーフブレード」!

ジユプトルはルカリオの真上に飛び上がり、緑色のエネルギーを纏わせている自身の腕にある葉っぱで切りつけようとしている。これをくらってしまつては、今のルカリオでは反撃するだけの力が残るかどうかわからない。何としてでも防ぐ必要があつた。

(くそつ、間に合え!)

ルカリオは両手を広げて、今注げる精神力のほとんどを両手に集中させ、波導を集めた。そしてそれはだんだんと棒状に形作られていった。

ジユプトルが“リーフブレード”を振りかざした時には、それは完成していた。かろつじて攻撃を防ぐことに成功したのだ。

「……なつ!？」

「ふつ、“ボーンラッシュ”のできあがり、つてな」

波導を骨の形にした武器を使う技・“ボーンラッシュ”。カラカラなどは骨を投げつけるだけだが、ルカリオの場合、これを棍棒のように扱うのだ。

「……どうやら俺は本気でお前を殺らなければならないようだな……」

不機嫌そうな顔つきでジユプトルはそう言うと、自分の手を背中へと回した。何をするつもりなのか、ルカリオはすぐに知ることとなつた。

「……そ、それは……!？」

ジユプトルの手に握られていたのは、銀色の、長くて鋭利な武器  
“ぎんのハリ”だ。左手に1本、そして右手にも逆手に持った  
ものが1本。その構えはまるで剣術を扱う者に似ている。

「俺はこのぎんのハリで何人もの標的にとどめを刺してきた。お前  
もこれで息の根を止めてやる……！」

「“剣術”対“棒術”ってか？ 悪いけど負けねえぜ」

体勢を立て直したルカリオも構える。再び雷が鳴った瞬間、2人  
は1回も目を離さずに走り出し、互いの武器を振り払う。

ルカリオは自在に“ボーンラッシュ”を操りながらジユプトルの  
急所を突こうとしている。ジユプトルはと言うと、2本のぎんのハ  
リで“ボーンラッシュ”を止めつつ、逆手に持った針でルカリオの  
体を横一文字に切りつけようと大きく針を振る。

互いに一步も譲らない駆け引きは数分間続いた。とはいえ、ルカ  
リオの方には明らかに疲労の色が見え始めている。最初は余裕で攻  
撃をかわしていたものの、今は攻撃が当たらないように防いでいる  
のがやっとだ。息も切れ始めている。

（まずいな、このままだと俺の方が体力切れでやられちまう。何か  
手を打たなければ……）

作戦を考えるのに意識を持ってしまったせいか、ルカリオ  
は雨で滑りやすくなっている地面に足を取られてしまった。刹那、  
“ボーンラッシュ”が宙に舞ってしまった。

「あっ！」

空中に放り投げてしまった“ボーンラッシュ”を目で追いかけているルカリオに、ジュプトルは攻め入る。持っていた針の1本をルカリオ目掛け投げつけた。凄まじい速さでそれはルカリオの左肩に命中する。

「ぐあっ!？」

ルカリオはそのまま後方に倒れてしまった。右手で抑えている左肩からは出血がみられる。急いで立ち上がるうとするも、あつという間に目の前にそいつは現れた。ジュプトルだ。

「終わりだ……」

ジュプトルは地面に仰向けになっているルカリオに覆いかぶさるように立ちはだかる。ルカリオは抵抗しようと足掻くものの、無意味だった。出血箇所を押さええているルカリオの右腕を押さえつけ、右手に持っているぎんのハリを振り下ろした。

「ルカリオ? どこ?」

針の先端がルカリオの目の前まで差し掛かった、まさにその時、聞き覚えのある声が近くからルカリオを呼んでいるのが2人の耳に入った。

それに気付いたジュプトルは腕の動きを止める。針の先端は目から1cmあるかないかくらいの所で止まった。あまりの恐怖にルカリオは目を見開き、大きく呼吸を乱している。

「……邪魔が入ったか……」

口惜しさでいっぱい表情を浮かべながら、ジュプトルはルカリオから退いた。声の主・ヒトカゲが近づいてくる気配を感じ取り、ルカリオに去り際の台詞を並べた。

「ふん、命拾いしたな。今回は見逃してやる」

刹那、ジュプトルは目を大きく開き、蔑むような目つきで睨みながらこう言った。

「だが次に会った時には……その身をズタズタに引き裂いてやるからな……！」

そしてルカリオに背を向け、ジュプトルは木々を渡りながら逃げていった。ちょうど入れ替わるように、ヒトカゲがフキのような植物を傘代わりにしてやって来た。

「……ルカリオ!？」

ヒトカゲが見たのは、雨が降っているにもかかわらず地面に大字になっているルカリオの姿だった。慌てて近づくと、ルカリオはまだ目を大きく見開いたまま荒い呼吸を続けていた。

「はっ、はっ、はぁっ……」

殺されるという恐怖感を初めて体感したルカリオ。本気でジュプトルを恐れたようだ。彼は腰が抜けてしまったせいでしばらくその場から動けず、ヒトカゲに傷口を手当してもらったこととなった。

## 第14話 殺意(後書き)

ヒトカゲ

「ぎんのハリだなんてずるくない!？」

いや、どうしてもレオvs・ラフみたいな戦いを書きたかったの(笑)

……でも“ボーンラッシュ”とぎんのハリだから、この場合はラフよりドニーかも。

ゼニガメ

「随分映画に影響されてんだな、作者(汗)」

あれ、ゼニガメ、帰ってきたの？

ゼニガメ

「いいじゃん帰ってきたって。俺だってこのSEに出るんだろ?」

……ゼニガメ、よく聞いて。君の出番はね……

ゼニガメ

「えっ……ちょっと、嫌だ! 聞きたくねえ!(泣)」

ヒトカゲ

「あっ、泣きながらどっか行っちゃった(汗)」

ゼニガメの出番はわりと早めにしようと思ってるって言おうとしただけなのに(汗)まっ、いいか(笑)

第15話 ドジなのか？（前書き）

今回は君に頑張ってもらおうかな。

アーマルド

「……………?」

うん、君。君だってそれなりに頑張ってもらわないと、キヤラ投票  
やった時に0票じゃ嫌でしょ？

アーマルド

「……………」（泣）

そ、そんな泣かなくても（汗）

## 第15話 ドジなのか？

その後、どうにかルカリオはヒトカゲに連れられてビツパの家へと戻った。だが依然として恐怖から来る動悸が治まらずにいるようで、大きく呼吸しながら苦しそうに胸を掴む。

やっとの思いで階段を上がると、ベッドから上半身だけ起こしているアーマルドがいた。あれからヒトカゲがゲフェを食べさせたおかげで、熱が下がったようだ。

「お、おうアーマルド。熱下がったか……」

肩で呼吸しながらも、容態が快方に向かっているのを見ると自然と表情が緩むルカリオ。だがアーマルドは表情が固くなってしまった。理由はもちろんあれである。

「……！」

アーマルドが指した先にあるのは、傷ついたルカリオの肩。驚くのも無理はない、怪我をしてからただ押さえているだけなので、行き場のない血が腰辺りまで垂れていたのだ。

「あ、ああこれが……」

ルカリオはそこまで言うと、口を閉ざしてしまった。病み上がりの仲間に心配かけさせたくないと思ったが、流血を見られた時点で言い訳など通じるはずないと悟ったからだ。

「ただの怪我じゃないよね？ ルカリオ、ちゃんと話して」

心配そうにしながらも、ヒトカゲは全てを打ち明けるよう説得する。アーマルドも目線でそれを訴える。嘘もつけないし黙ってもしられないと思い、ルカリオはまるで観念したかの顔つきで応えた。

「わかった。ちゃんと話すから、まずこの怪我の手当てさせてくれ」

「こ、殺されそうになった!？」

怪我の手当てを終えたルカリオはベッドに腰掛けながら、事の一部分始終をありのままに語った。ジュプトルというポケモンに尾行されていた事、理由も語らず自分を殺そうとした事、技だけでなく武器も使用していた事までこと細かく。

「ああ。あん時ヒトカゲが来てなかったら、間違いなく俺死んでたぜ」

記憶を振り返りながらルカリオは話しているが、その間にも再び恐怖が湧き上がってきた。ジュプトルの殺気立った目が頭から離れない。間違いなく、あれは怒りに満ちていた。

「何でかは知らんけど、俺の事相当恨んでるようだったな。次会ったらスタスタに引き裂くって言ってたぜ」

「ひ、引き裂く……」

これには2人は言葉を失う。まだルカリオと出逢って間もないが、誰かに恨まれるような事をするようなポケモンでないことくらい理解している。ジュプトルの行動が不可解に思えて仕方がなかった。



「まあまた奴は俺を襲ってくるだろうけどよ、お前の“ブラストバ  
ーン”があれば大丈夫だろ。な、ヒトカゲ？」

ルカリオは気軽な口調でヒトカゲにそう言った。単にヒトカゲを  
信頼して言っているのか、これ以上話をするのが辛かったのかはわ  
からないが、ヒトカゲは気遣って同じ口調で返す。

「うん、大丈夫だよきつと！」

この時、アーマルドは少しだけ悲しくなったようだ。自分はヒト  
カゲ程強くない、ならルカリオに何をしてあげられるのだろうか  
考えたが、戦いでは戦力にならないと自分で決め付けてしまったの  
が1番の原因だ。

(俺にできる事……そうだな……ん？ そうだ！)

何かが閃き、アーマルドは目を見開いた。自分にもできる事があ  
ったと気づき、内心とても喜んでいる。

次の日、ルカリオはまだ傷口が痛み、1人で動けずにいた。完治  
するまでゆっくりしていいというビツパの言葉に甘んじて、  
しばらく家にいさせてもらうことにした。

いつものように昼過ぎに起きたヒトカゲは、これからインコロッ  
トに行って医者を呼んで来るという。ビツパを連れてヒトカゲはイ  
ンコロットへ向かい、アーマルドはお留守番することになった。

「な、何だよジロジロ見て……」

ベッドに横になっっているルカリオを、アーマルドは隣のベッドに座りながらじつと見ていた。留守番してると言われても、特にすることもなく暇を持て余していた。

「あ、そうだアーマルド。俺に何か飯作ってくれないか？ よく考えたら昨日の夜から何も食ってなくてよ」

昼ご飯を注文するルカリオ。アーマルドにとってこれは願ってもないチャンスだった。昨日からアーマルドは、怪我が治るまでルカリオの世話をしようと考えていたからだ。

アーマルドはコクリと頷くと、1階に降りて何かを作りに行った。

20分後、アーマルドがルカリオの元へ戻って来た。彼が持ってきた皿の上にはおいしそうな焼きリンゴが盛られていた。

「すげえ！ 焼きリンゴじゃんか！」

まさか料理をしてくるとは想像していなかったのだろう、ルカリオは酷く驚いていると同時に満面の笑みで喜んだ。これにはアーマルドも顔を赤くする。

「それじゃ早速……って言いてえけど、1人じゃちよつと食えないから、食べさせてくれ」

ルカリオは甘え始めた。おそらくヒトカゲの前では見せない一面だろう。アーマルドは頷いて答えると、食べやすい大きさにリンゴを切ろうと自分のツメを振り下ろした。

刹那、焼きリンゴが小型爆弾並みの爆発をした。アーマルドがツ

メを差した瞬間に、中に入っていたドロドロのリンゴが一気にはじけ飛んだのだ。

「熱い熱い熱いいいい            ！！！」

その高温ドロドロリンゴはルカリオの顔に飛び散り、“ひのこ”以上のダメージを彼に与えてしまった。ルカリオはもがき、アーマルドは右往左往していた。

「…………ごめん…………」  
「わざとじゃねえんだろ？    全然気にしてねえよ」

しばらくして、アーマルドはルカリオの顔に氷水の入った袋をあててあげていた。やはり火傷は避けられず、顔にはいくつか赤い点となって火傷の跡があった。

「それより、お前ちょっとは喋るようになったじゃんか」  
「……………」

照れながらアーマルドは黙って頷いた。まだ「ごめん」の一言しか口を開いていないが、それだけでかなり成長したのだとルカリオは感じたようだ。

「ま、無理はするなよ。あゝアーマルド。もうこの氷水冷たくないから、取り替えてくれ」

氷が完全に溶けてまるで水風船のように膨らんだ袋を、アーマルドは取り替えようと袋の底に手を回して持ち運ぼうとした。

しかしこれもまた袋にツメが刺さってしまったせいで、袋が音を立てて破裂した。行き場のなくなった水はその真下に落ちるしかない。もちろんその下にあるのは、ルカリオの顔だ。

「げほつぐほぶくほっ!？」

大量の水がルカリオの口へ浸入する。これまたどうすることもできずにアーマルドは成り行きを見続けるしかなかった。瞬く間にベツドの上は水で濡れ、ルカリオは尋常でないほど噎せている。

「……………てめえドジなのか？ それともわざとやってんのか？ あ？」  
「……………」

2度も災難に遭ったルカリオはさすがにキレてしまい、手の甲にある棘をアーマルドの首につきつけている。恐怖に怯えているアーマルドは必死に首を横に振ってルカリオの言葉を否定する。

「まったく、俺はケガ人なんだからもつと優しく扱えっつーの」

そう言うとアーマルドから離れ、ルカリオはアーマルドが寝ていたベツドで横になった。その時ふと自分の肩を見ると、包帯に血が滲み出ている。

（まだ出血してるのか……………取り替えた方がよさそうだな）

自分で包帯を取り替えようと、肩の包帯を外したまではよかった。だがやはり片手で新しい包帯を巻くのは困難なようで、何度も失敗している。

ふとルカリオが見たのはアーマルド。やはりこいつに頼むしかないのかと思うと、自然と溜息が出てしまった。なくなるとルカリオはアーマルドに包帯を巻いてもらうことにした。

「いいか、慎重に巻けよ。失敗したらただじゃおかないからな」

脅しをかけられたアーマルドは、ゆっくりと包帯を巻き始めた。よほどルカリオの事が怖いのか、若干手が震えている。それでも確実に包帯は巻かれていった。

4回くらい巻いた頃に、アーマルドに悪魔が悪戯を仕掛けた。

「…………ふあっ…………」

息を吸い、口を開けながらそう言った。これが欠伸でないとなると、考えられるのはただ1つ。反射的に激しく息を吐き出す生理現象　くしゃみだ。

「お、おいちよつと待てよアーマルド…………」

それにルカリオが気付いた時には暴発寸前だった。アーマルドも全精神力を費やしてくしゃみを止めようとしたが、逆らうことは出なかった。

「…………ツクシヨン！」

それ程大きなものではないが、耐え切れなくなったアーマルドはくしゃみをした。反動で体も動く。もちろん、包帯を持ったままの手も。

アーマルドの掴んでいる包帯は体の動きに合わせて引っ張られ、ルカリオの肩をきつく締め付けてしまった。

「痛っ……てえええ　　！！」

肩に激痛が走り、ルカリオは悲鳴を上げる。漫画で例えるならその場で飛び上がる程の痛さのようだ。そのせいか、また包帯に血が滲んでいる。

しばらくして痛みが治まると、鬼のような形相でアーマルドの前に立ちはだかった。

「……アーマルド、覚悟はできてんだろっな？」

ルカリオに絶対に殺されると思ったのか、アーマルドは恐怖のどん底に落ち、顔からは滝のような汗が流れ落ちていた。

「ただいま」

夕方頃に、ヒトカゲとビツパは医者を連れて帰ってきた。ヒトカゲは早く2人に会いたかったのか、急いで階段を駆け上がり、2人いる部屋の扉を開けた。

「お医者さん連れてきた……って、どしたの!？」

ヒトカゲが見たのは、部屋の隅っこで泣き伏しているアーマルドと、ベッドの上で胡坐をかき、頬杖をついている、物凄くお怒りモードのルカリオの姿だった。

「あの、一体何が……」

「ああ!？」

「い、いえ、何でもありません……」

ルカリオの機嫌が直ったのは、それから2日後の事だった。

第15話 ドジなのか？（後書き）

アーマルド

（……よし、作者しかいないな）

あれ、どうした？

アーマルド

「……何で俺が酷い目に遭わなきゃいけないんだよ！（怒）」

えっ、えっ！？ 喋った！？（汗）

アーマルド

「頑張ってた、結局はルカリオの引き立て役みたいになってるじゃねえか！ ふざけやがって！（怒）」

ちょっと落ち着いて（汗）

ルカリオ

「うるせえな、誰だよ騒いでんの？」

アーマルド

「……………」

こいつ、かなりずるい奴だな（汗）



第16話 殿様のいる街（前書き）

カイリユー

「相変わらず狭いねこの部屋」

あら、かなり久しぶりじゃないですか（笑）

カイリユー

「僕が出てない間に、随分といろんなことが起きてるんだね」

そうだよ。ところでカイリユー、君今まで何してたの？

カイリユー

「それは秘密です」

……そうっすか（汗）

## 第16話 殿様のいる街

1週間後、ルカリオの怪我也完治し、3人はビツパに別れを告げて旅を再会した。インコロットを過ぎ、次の街へと続く1本道をひたすら歩いている。

「ルカリオ、次の街ってどんなところ？」

てくてく歩きながらヒトカゲはルカリオに尋ねる。家を離れる際にビツパに聞いていたことをルカリオはそのまま話す。

「なんかよくわかんねーけど、確か名前が『ロルドフログ』だったかな？ ちょっと変わったところらしいぜ？」

実はビツパからいろいろ聞いたものの、ルカリオはその大半を忘れてしまっていたのだ。唯一覚えていたのが街の名前と、ちょっと変わったところということの2つである。

「変わったところって？」

「俺に聞くなよ。行けばわかるだろ」

「……………」

コイツ絶対ビツパの言ったことを忘れてるな、とアーマルドは確信した。前回の件から仲直りはしたものの、まだただけルカリオの事を「乱暴者」と思っているようで、アーマルドはルカリオが自分を見るとビクついてしまう癖がついてしまった。

「そつだよな、アーマルド？」

今もルカリオがアーマルドの方を振り向いてきた。その瞬間背筋に緊張が走り、体に金属が入っているかのように固くなった。そして機械的に首を縦に振って返事をする。

「……？　なんか最近、お前変だな」

ルカリオは、まさか自分のお仕置きのせいでアーマルドに恐怖心を抱かせてしまったとは思ってもないようだ。

数時間後、3人は足を引きずりながらも、インコロットの隣町『ロルドフログ』に辿り着くことができた。この街は水に関する設備が整っていて、人工的に造られた河や噴水などがあちらこちらに存在している。

「うわー、きれいー！」

流れる水は太陽の光を反射してきらきらと光る。噴水の水しぶきによって光が拡散し、虹も出ている。ヒトカゲを始め、ルカリオとアーマルドもしばらくこの光景に見とれていた。

「どうですか？　この街は綺麗でしょう？」

突然、3人は背後から誰かに声を掛けられた。誰だろうと後ろを振り向くと、少々老けているニョロトノがニコニコしながら立っていた。

「だ、誰っすか？」

不審そうにルカリオが尋ねると、申し訳なさそうにそのニョロト

ノは自己紹介を始めた。

「あゝすまんすまん。ワシはニヨロトノ。この街の殿様じゃ」

『へ〜……ん?』

何かを聞き間違えたのではないかと不安になった3人。自分達の耳が正しかったかを確認すべく、代表してヒトカゲがニヨロトノに訊く。

「あの〜、さつき“殿様”って言ったりした?」

「“殿様”って言ったりしたぞい。何かおかしいかの?」

間違いなかった。3人が聞いた“殿様”という言葉は間違いなく目の前のニヨロトノがはつきり言ったものだった。それを理解すると、3人は数歩引き下がって正座をする。

(と、殿様って!?! ホントなの!?! だったら殿様見るの初めてだ〜)

(は? この爺が殿様だって!?! おいおいマジかよ、キチガイとかじゃねーだろな?)

(殿様……イメージと全然違うな。こういうもんなのかな? ならいいんだけどな)

3人は各々いろんなことを思っていた。ちなみにニヨロトノの事を爺とかキチガイ等の失礼な事を思っているのはルカリオである。そのニヨロトノが3人に近づいてきて、詳しく語り始めた。

「君達知らないのかね? 殿様っていうのは、この街では市長のことを言うんじゃないよ。毎年くじ引きで選出されて、今年度はワシが市長なんじゃ」

ニヨロトノ曰く、100年ほど前の市長がふざけて殿様を気取ったところ、それが人気を博したらしく、現在までこの習慣が残っているのだとか。

事実を知った3人は少し残念そうに溜息をつく。とはいえ、このニヨロトノは市長。立派な存在には変わりなかったため、正座は保つたままだ。

「なあジジ……し、市長。こんなところほつつき歩いていいんですか？」

危なく無礼発言をかますところだったルカリオ。聞こえていたかどうかは不明だが、ニヨロトノは口調を変えずに話を始めた。

「実はな、この街に最近、怪しい奴らが出没しているようだな」  
『怪しい奴ら？』

もしやその中にジユプトルがいるのではないかと、3人はさらにニヨロトノの話に耳を傾ける。

「そうなんじゃ。誰かはわからんが、そいつらはまるで何かを探し物をしているかのように、この街の図書館や美術館などをひっかきまわしてるんじゃ」

話によると、至る所が荒らされてはいるが、物は何一つ盗まれていないのだという。警察も必死で捜査にあたっているが、手がかりが掴めていないらしい。

「だから、ワシは凄腕のお助け隊に何とかしてくれよう依頼したんじゃ！ そのポケモンが来るのが楽しみで楽しみで……」

どつやらこのニョロトノ、じっとしているのが苦手なようだ。さらによくよく聞くと、そのポケモンが来るのは明日だとか。

「へえ、でもわかるな。楽しみなものって待ってるの辛いもん」  
「だけだよ……このジジイ子供みてーだな」

同感してうんうんと頷くヒトカゲに対し、やれやれと言った具合に溜息をつくルカリオ。ただ1人、アーマルドだけは正座で痺れ始めた足を気にしていた。

「……そういえば、君達はどちらさんかね？」  
（今更かよ!?!）

ニョロトノのいかにも年寄りらしい時間差発言にルカリオとアーマルドは心の中で突っ込みを入れる。しかし、純粋なヒトカゲは何も思うでもなくしつかりと自己紹介を始めた。

「僕、ヒトカゲ。アイランドの口ホ島から来たんだ。こっちがルカリオ、そしてこっちがアーマルド。2人ともつい最近知り合って、僕についてきてくれてんだ」

「ほお、アイランドからわざわざ。どうやらただの観光とかでここに来たわけじゃなさそうじゃな?」

自信満々に言うニョロトノの目は光っていた。怪しい者ではないとわかっていたヒトカゲは、今に至る経緯を説明する。そして、ホウオウとディアルガを探していることを告げると、再びニョロトノの目つきが変わった。

「……ディ、ディアルガとな……!」

この口調から、3人はこのニョロトノが、ディアルガについて何か知っているのだろうと推察した。これはと思ったヒトカゲは追及し始める。

「な、何か知っているの!? ディアルガについて何かわかるの!?」

前回のホウオウについての時も同じだが、ヒトカゲは必死だった。ついでにはいえ、自分の体をリザードンに戻すことができると思われる唯一の存在。些細な情報も集めたいところだ。

しばらくうなり声を上げていたニョロトノだが、急に3人に背を向けた。

「……こっちに来なさい」

ただそう言っつて、ニョロトノは歩き始めた。訳もわからないまま、とりあえず3人はニョロトノの後を追いかけ始めた。

10分後、彼らが着いたのは大きな屋敷。 ”Politoad” と扉の前に書かれていたことから、ここがニョロトノの家だということに気付いた3人は内心ほつとする。

「まあまあ、お入りなさい」

促されるままに家の中に入ると、玄関から長く続く廊下にはポケモンの彫刻が左右にたくさん並べられていた。それも見るからに強そうなポケモン達ばかりだ。

「うへー、これグレードンっつーんだろ？　すげー！」  
「あつ、ルギアあつた」

大分廊下を突き進んでいき、リビング前の扉の前にそれはあつた。5mはあるう高さに、胸には加工された青色の水晶がはめられている彫刻　そう、これはディアルガの等身大彫刻だ。

3人は初めてみるディアルガの全容に開いた口が塞がらない。彫刻とはいえ、それから発せられるプレッシャーは言葉で言い表せることが困難なものだ。

「これが、時を司る神・ディアルガの姿じゃ」

3人の後ろからゆっくりとニョロトノがやって来た。少し誇らしげな顔つきで、彼自身もディアルガの彫刻をじっと見つめる。

「……昔、世界が生まれる前に、神は時間と空間、これらを創造・管理するポケモンを生み出した。その瞬間から、4次元のベクトルは一気に広がりを見せ、世界が生まれたのじゃ」

ニョロトノは、自身が知っているディアルガにまつわる話を始めた。それを3人は黙って耳にする。

「そのうち、時間を管理するのがこのディアルガじゃ。普段は“歪み”というものを直して、いくつも存在する世界を回っているらしいぞ」

初めてディアルガについて、そして世界の始まりについて知った3人。ディアルガに会うという事の困難さを一瞬にして感じ取った。だからと言って、落胆した様子は全くない。



「……会ってみたい。難しくても、ディアルガに会ってみたい！」

少々興奮気味に、ヒトカゲがその場にいた全員の顔を見ながら言った。ニヨロトノだけ焦った表情になっていたが、あとの2人はそんなヒトカゲを見てふつと微笑んだ。

「なら見つけて会ってみようじゃねーか、なあアーマルド」

「……ああ」

ルカリオ、そしてアーマルドもヒトカゲの意見に賛同する。この「仲間」というものを見たニヨロトノは、さっきまで見せていた焦りをなくし、逆に期待を込めた目で3人を見ていた。

「まったく、若いとは素晴らしいことじゃ。困難や危険を恐れず、果敢に立ち向かう……無茶で危なっかしいけど、それが『旅』や『冒険』というものなのじゃな」

そう、こうやって、ヒトカゲは『旅』を続けていくのだ。終わりのない、常にスタートラインに立っているマラソンのようなものがある。

「絶対見つけようね！」

『おお つー！』

ちなみに、この掛け声の中にアーマルドは入っていない。

## 第16話 殿様のいる街（後書き）

サイクス

「うわ〜正座とか無理なんだけど（汗）」

君まで来たのか（汗）

サイクス

「ところで作者、俺気になってることがあるんだけど」

なんだい？ 言っつてらん。

サイクス

「この小説を説明するとき、何て言うんだ？」

う〜ん……（いろんな意味で）お涙頂戴シリアスコメディーポケモンアドベンチャーファンフィクション？

サイクス

「何だよそれ（汗）読者のみんなは何て説明する？ よければ聞かせてくれ〜」

第17話 チーム・プラスタス（前書き）

ただいま

ルカリオ

「遅え、いつまで待たせてんだよ（怒）」

ごめんなさい、有休取らせていただきました（笑）

そうそう、皆さんがくれた意見をまとめると、この小説は、

『ルカリオの悲劇の記録を描いた、ヒトカゲと愉快な仲間達の旅物語』

だそうです（笑）

ヒトカゲ

「あー確かに」

ルカリオ

「……誰でもいいから殴らせろ（怒）」

## 第17話 チーム・プラスタス

「はっ、はっ、はっ……」

某日、ロルドフログの人気のない道を、1匹のストライクが血相変えて走っていた。その後方からは、ゆっくりと巨体のポケモンが近づいてきている。

「はっ、はっ……し、しまった!!」

ストライクは路地裏に逃げ込んだが、そこは行き止まり。本当なら羽を使って飛び去りたいところだが、どうやら羽にダメージを負っているらしく、飛ぶことができないでいた。

「……手こずらせやがって」

慌てふためいている間にも、ストライクを追っかけていたポケモンが来てしまった。そのポケモンを見たストライクは命乞いを始めた。

「ま、待ってくれ！ ポ、ポケ違いだ！ 俺じゃねえ！」

「この期に及んでガキでもわかる嘘をつくとはな、つくづくムカつく野郎だぜ……」

この会話から察するに、ストライクが目の前のポケモンに何かをやらかしてしまったようだ。そのポケモンはあからさまに怒っている。

「わ、悪かった！ 金ならいくらでも払う！ だ、だから……」

「金で解決しようってか？ 悪いが、俺はそういう奴が大っ嫌いなんだよ！」

刹那、そのポケモンは“ラスターカノン”をくりだした。3本の光線のうち2本は羽を撃ちぬき、残りの1本はストライクの顔の横すれすれを通り、壁を破壊した。

撃たれたのは羽だけだったので、ストライクは痛みを感じることはなかったが、言い切れぬ恐怖を感じたようで、腰を抜かしている。さらに追い討ちをかけるかのように、そのポケモンはストライクの首を片手で持ち上げた。

「さあ、俺を怒らせた罰だ。底なしの恐怖を味わうが……」

そのポケモンがそこまで言いかけた時、その後ろにまた別のポケモンが現れた。かなり小柄で、2人に比べて幼さを感じるくらいのポケモンだ。

「兄さん、遅れちゃうよ！ あと10分しかねえよ！」

“兄さん”と呼ばれたポケモンはそれを聞くと、ぱつとストライクの首を持っていた手を離れた。よほど苦しかったのか、ストライクは噎せている。

「そつか、なら行くか」

そう言うと、ストライクに背を向けてそのポケモンは歩き始めた。だが最後の足掻きなのか、ストライクは大声でそのポケモンに向かって叫ぶ。

「こ、この事警察に言うからな！ 何者だお前！？」

そう訊かれたそのポケモンは立ち止まり、再びストライクの方を向いた。鼻が当たるくらいまで顔を近づけて、隻眼であるそのポケモンは質問に答えた。

「上等じゃねえか。この俺、チーム・ブラスタスのカメックス、逃げも隠れもしねえからよ」

それを聞いた瞬間、ストライクの顔は青ざめた。そんな事に興味すら示さず、カメックスは連れのポケモンとその場を後にした。

「チ、チーム・ブラスタスのカメックス……あのポケ助けのスペシヤリストで有名な……」

「兄さん、いくらぶつかってアイス落とされたからって、あれはやりすぎ……」

「聞け、ゼニガメ。あいつは俺の好きなソーダアイスを落としたんだ。当然の報いだ」

カメックスは連れのポケモン 自分の弟であるゼニガメと話をしながら目的地へ向けて歩いていった。ちなみに先程までカメックスが焼きを入れていたストライクは、通行途中にぶつかり、カメックスのアイスを落としてしまったのだ。

「アイス落とした上に、この俺をおじさん呼ばわりするような奴を見逃せてか？」

「いやそうかもしれないけど……」

ソーダアイスがお気に入りのカメックスは相当腹を立てていたようだ。1時間近くストライクを追いかけまわしていたのだとか。

「あの野郎……今度見かけたら殺虫剤かけてやる……！」  
(……たかがアイスごときで……)

内心まだお怒り気味のカメックスは自分の拳を掌てのひらにぶつける。ゼニガメは呆れているが、言ったところで怒りが治まらないとわかっているせいも、何も言わなくなった。2人は待ち合わせの場所へと急ぐ。

それから約1時間後、ロルドフログにある大きな屋敷で、ヒトカゲ達は昼食を取っていた。昨日ディアルガの彫刻を見せてもらった後、殿様ことニョロトノ市長に泊めてもらうことになったのだ。

3人は貧乏なため、ここぞとばかりに食べ物を食らう。ルカリオに至ってはきのみやフルーツを自分のカバンに入れている。いざという時の食糧対策なのだろう。

「ほっほっほ、みんなよく食べるのお」

そんな3人を笑いながら、ニョロトノはほのぼのとお茶を飲んでいたらその時、玄関のチャイムが鳴り響いた。時計を見ると、きつかり13時を差していた。

「おっと、お助け隊が来てくれたみたいじゃな」

そう言つと、ニョロトノは1人、足早に玄関へと向かう。お客が来るにも関わらず、3人は食事に夢中のままだ。特にアーマルドは嬉し泣きしながら料理を食している。

数分後、ニヨロトノはリビングに戻って来た。その表情はとてものにこやかだ。

「さあさあ、お入りなさい」

その声を聞いて、ようやくヒトカゲ達は食事を一旦中断した。ニヨロトノのいる方を向くと、小さい影と大きい影が1つずつ、開いた扉の向こうから見えていた。

その影がだんだん大きくなってきたと思うや否や、その影の主は姿を現した。1人は水色の体をした、まさしくカメ。もう1人は甲羅からバズーカを思わせるものが出ている、これまたでかい強面のカメ。そう、あの2人である。

「…………ゼニガメ!? カメックス!?」

その影の主が自分の親友達だとわかると、ヒトカゲはかなり興奮しながら大声でその名を呼んだ。それに気づいた2人も驚いた様子でヒトカゲを見る。

「えっ、ヒ、ヒトカゲじゃなか!?」

「ど、どうしてこんなところにいるんだ?」

「…………ほえ、君達、知り合いなのかね?」

ゼニガメ達を連れてきたニヨロトノも驚いている。その場の空気が一瞬止まり、次の瞬間それが弾け飛んだかのように大騒ぎするヒトカゲとゼニガメ。久々の再会に心躍らせ、子供の如くはしゃいでいる。

「あれが、俺と出会う前に一緒に旅してた仲間なんだな」



ヒトカゲの事を見ながらそう言ったのはルカリオ。ゼニガメ達の存在を以前ヒトカゲが話してくれたのを思い出していたのだ。そんな中、ルカリオはカメックスと目が合った。

「ん？ 誰だお前は？」

先に声をかけたのはカメックスだ。強面・隻眼・そしてその低い声にルカリオは恐怖を覚えた。その時には既に頭の中ではある式が浮かび上がっていた。「カメックス『ヤクザ』だと。

「あ、俺はヒトカゲと一緒に……」

「もつとでかい声で喋ってくれ。聞こえねえ」

このカメックスの発言を聞いただけでルカリオは失神寸前まで陥った。そんなルカリオの状態を知ってか知らずか、代わりにヒトカゲが答える。

「一緒に旅してくれてるルカリオだよ。そっちにいるのはアーマルド。2人とも新しい友達だよ」

「ほう……」

納得したのか、カメックスはルカリオから少し離れた。それに安心し、ルカリオはほっと胸を撫で下ろす。その代わり、今度は別の者が恐怖を覚えることになる。

「……………」

カメックスはアーマルドに近づいたのだ。アーマルドもルカリオと同じく、カメックスに相当怯えているようで、冷や汗が額から流れ落ちていく。

「おいヒトカゲ、こいつ口きけねえのか？」

黙ったままのアーマルドを指差しながらカメックスは尋ねた。固まっているアーマルドを見てヒトカゲはフォローしてあげることにした。

「あ、いや、声が出ないとかそういうのではないけど、いろいろあって喋るのがとても苦手なんだ」

ヒトカゲの説明を一通り聞いたカメックスは、数秒間考え事を始めた。そして何を思ったのか、いきなりアーマルドの首に手をかけた。さらに何と、そのまま片手でアーマルドを持ち上げた。その場にいた全員が驚愕する。

「おい、本当は喋れるのを隠してんのか？ 答えてみる」

カメックスの問いにアーマルドは首を振って必死に否定する。カメックスがアーマルドの顔を見ると、彼は半泣きしていた。

「……本当に苦手なんだな？」

首を縦に振って訴えるアーマルド。それを見てようやく理解したらしく、カメックスは「悪かった」と言いながらアーマルドを降ろし、その手を離した。

「兄さん、今機嫌悪いんだよね。後であのアーマルドに謝っといってくれねえか？」

「うん、僕から言っとくよ」

カメックスから離れたところで、ヒトカゲとゼニガメは小声でそう話している時、2人の元にルカリオがやって来た。何やらゼニガメに話があるようだ。

「ゼニガメ……つたな。お前の兄貴、ヤクザなのか？」  
「はあ？」

まさかの発言にゼニガメだけでなく、横にいたヒトカゲもおもわず聞き返した。2人共、少なくともルカリオよりは長く一緒にいるため、カメックスの事をそう思ったことは1度もない。

「だってよ、どう考えてもあの威圧感は……」  
「……誰がヤクザだと？」

その声にルカリオは背筋が凍るような感覚に襲われながらも、恐る恐る後ろを振り向いた。予想通り、そこにはあからさまに不機嫌そうな顔をしたカメックスがいた。

「てめえ、ちよつとこつち来い。“詰めて”やる」

物凄く危険な発言をしながら、カメックスはルカリオを連れ去ろうとしたが、慌ててニョロトノが止めに入る。

「あゝカメックス殿、そろそろ本題に……」  
「……そうだな」

うまく話題を逸らすことに成功し、ルカリオは難を逃れることができた。もう2度とカメックスの目の前でヤクザという言葉を使わないようにしようと心に決めたのはこの時だ。

「それじゃあ市長。早速だが、詳しい説明をしてくれ」

第17話 チーム・プラスタス（後書き）

あつ……前書きでゼニガメとカメックス出ること言うの忘れてた（汗）

ゼニガメ

「ちよつ、久々なのに酷いじゃんか!」

カメックス

「ほう、いい度胸してるじゃねえか。あ?」

す、すみません……（汗）

ヒトカゲ

「まあまあ（汗）久々に会えたんだからいいじゃない」

ゼニガメ

「俺は別にいいんだけどさ、その……」

カメックス

「抉<sup>えぐ</sup>るか、砕くか、裂くか、選<sup>えら</sup>ばせてやる」

相変わらず怖いよ（泣）

第18話 荒らす者（前書き）

今回から後書きにて新企画が始まります。

ヒトカゲ

「何するの？」

ゼニガメ

「またろくでもない企画じゃねえの？」

ルカリオ

「そうだろ。コイツの考えることだぜ？」

カメックス

「ふん、勝手にやらせとけ」

アーマルド

「……俺、いいや」

お前らホントにムカつくな（怒）

## 第18話 荒らす者

数週間前、ロルドフログにある図書館や美術館が何者かによって荒らされた。図書は辺りにばら撒かれ、ショーウィンドウのガラスは粉々に割られていたが、幸いにも何か取られた形跡はないという。その1回だけならまだ若者や質の悪い連中の仕業だと思えるが、このような出来事が数度に亘わたって繰り返されたのだ。こうなるとただの悪戯とは考えにくい。何か別の目的があるのではと市長は思い、ポケ助けで名高い、チーム・ブラスタスに調査を依頼したのだ。

「なるほど。確かに、何かありそうだな」

腕組しながらカメックスは言った。一緒に聞いていたヒトカゲ達もそれに続くように頷く。

「お願いじゃ、何とか原因を探ってくれ。どうも悪い予感しかしなくての……」

「大丈夫、俺の兄さんなら必ず説明してくれるからさ！」

不安で湯呑みを持った手を震わせながらニョロトノは頼み込む。それをゼニガメが声をかけて安心させようとしたが、語弊があったのか、カメックスが訂正する。

「市長、“俺達”で説明してみせますので、ご安心を」  
(……ん?)

その言葉にひっかかりを覚えたのは、ルカリオとアーマルド。きつと聞き間違いだらうと自分に言い聞かせながらも、不安になったルカリオはカメックスに尋ねた。

「あ、あの、今“俺達”って言いました？」  
「……何が言いたい？」

またもや不機嫌そうな顔でカメックスはルカリオを見た。おじけづくルカリオとは反対に、ヒトカゲは嬉しそうに目を輝かせている。

「僕達、一緒についてっていいの？」

「もちろん！ 久々に一緒に行動したいしな それに、大勢の方が何か気づくかもしれないし！」

半年以上ぶりに一緒に行動できるチャンスを得て、ヒトカゲとゼニガメは大喜びしている。もちろんカメックスも、ヒトカゲがいてほしいと思っていたようだ。

だがやはり乗り気でないルカリオとアーマルド。あまり事件に巻き込まれたくないということもあるが、1番の理由は、もちろんカメックスという恐怖の対象である。

「……お前ら、何黙ってやがんだ？ まさか行かねえとかぬかすつもりか？」

『い、行きますっ！！』

2人の返事は否応なしに決まってしまった。ここで「本当は行きたくない」と言ってしまうと、お互い20年ちよつとの生涯に幕を閉じることになりかねないと悟ったからだ。

それから、彼らは3グループに分かれて行動を開始した。ヒトカゲ・ゼニガメグループは図書館を調査、ルカリオ・アーマルドグループは美術館を調査、そしてカメックスは単独で聞き込みをするこ



とになった。

ヒトカゲとゼニガメは図書館で、当時の状況などを詳しく訊いた。だが当時図書館にいた職員のカモネギは図書館をこのようにされるような出来事などはないと言い切った。

「これ警察にも言いましたけど、確かにうちの図書館には重要な書物がありますが、一般公開してないので普通のポケモンは閲覧することができないのですよ！ だからうちが誰かに荒らされるような原因は……」

『……………それだと思っよ……………』

何ともあつさり情報を得ることができてしまった。全国10以上の図書館にいるカモネギ兄弟の中でも、ロルドフログにいるカモネギは少々抜けているようだ。

「んじゃ、その書物見せてくれよ」

ゼニガメが軽々しく言ったが、カモネギはすんなりとその書物のある部屋へと案内してくれた。一般公開してないとはいえ、職員に頼めば簡単に閲覧できるのだとか。全くもって重要な書物を扱っているとは言えない。

その頃、ルカリオとアーマルドも美術館で係のポケモンから説明を受けていた。だがこちらはヒトカゲ達とは異なり、ほぼ全ての展示物が重要なものである。物が奪われていない以上、何を目的としているかわからないでいるという。

「いや、参ったな。これじゃ何も手がかりつかめねえし……………アーマルド、ちよつと見学してくか？」

「……………ああ」

これ以上調べようがなくなった2人は手持ち無沙汰なため、暇つぶしに美術館を見学することにした。この時にはカメックスの事など2人の頭になかった。

「ほお、これまた立派なカバルドンハニワなこと」

（おお、これがまもりのオーブかあ。凄え、欲しいなあ）

歴史的に重要な物や、現代において希少価値の高いもの、それらの1つ1つを見ながら2人は見学を楽しんでいる。もしカメックスがこの事を知った場合、彼らは生きて帰れるだろうか。

「……………ん？ アーマルド、これ見てみ」

何かを発見したらしく、ルカリオがアーマルドを呼びかける。アーマルドがルカリオの指すものを見ると、おもわず感嘆の声を上げた。

「凄え綺麗だな……………」

2人が見たのは、両端が尖っていて、時には鈍く、時には鋭く赤色に輝いている水晶のようなものだった。それは大きな宝石の一部ではないかと言われているものだとか。

ルカリオがこの水晶らしきものに惹かれたのには理由があった。何となくではあるが、ルカリオの持っている光輝く玉と関係ありそうな気がしたらしい。

（……………でも思い違いだな。変わった光り方してるからそう思っただけだろ、きつと）

その水晶らしきものをずっと眺めてはいたが、ルカリオは自分の玉との関連性はないと判断し、「ただの綺麗な石」だと思い込み、その場を後にした。

日が完全に沈み、街は夜を迎えた。みんなは街のはずれにある、街のイメージキャラクターになっているニョロトノ（市長ではない）の銅像の前に集まり、結果を報告しあう。

「夜遅くまでご苦労だった。まずゼニガメ、ヒトカゲ。何か手がかりあったか？」

「一応、図書館に狙われるようなものはあったよ。古文書みたいだけど、何が書いてあるかは誰もわからないみたい」

ヒトカゲがカメックスに、図書館にあった重要な書物について伝えた。おそらく荒らされた原因があるとすれば、これ以外には考えられないという結論に至ったようだ。

「そうか、図書館についてはそれかもしれないな。じゃあ次、お前ら指名されたルカリオとアーマルドは一瞬固まってしまった。ここで正直に「全部狙われそうな物だった」や、「さっきまで見学してただけ」と言えるはずがない。」

「……何故黙っている？ まさか、サボってその辺で遊び呆けてたとかぬかすつもりじゃねえだろうな？」

図星をつかれた2人はどんな小さなことでも報告しなければいけないと思い、美術館で1番印象に残っていた展示物について報告し

た。

「あ、狙われてるものかはわからんけど、凄く綺麗な石があったぜ。何でも大きな宝石の一部だとか言われてるってさ」

ルカリオが伝えたのは、アーマルドと一緒に見たあの赤色の水晶らしきものことだ。とにかく綺麗だったことを強調し、それが狙いだったかもしれないと付け加えた。

だがそんな説明で納得するカメックスではなかった。ルカリオ達の表情や話の内容などを考慮した結果、彼らにハイドロキヤノンを向けたのだ。

「てめえら、ただ美術館見学してただけじゃねえのか？ あ？」

『い、いやいやいやいや！』

2人は全力で否定するが、一旦疑いの念を持ったカメックスの考えを曲げるのはかなり困難なことだ。カメックスはじりじりと2人の元へと近づいていく。

「たとえ宝石だとしても、そんな一部だけ欲しがる悪党共がいるとでも……？」

その時だった。カメックスの言葉に答えるかのように、何者かの声が辺りに響き渡った。

「いたらどつする？」

聞き慣れない声にみんなは誰だと思いつながら振り向くと、彼らに

とつてまずい事態がそこで起こっていた。

『し、市長!?!』

そこでは、サメを思わせる頭部や尾をしている、小型の肉食恐竜のような姿をしているポケモン、ガバイトがその腕をニョロトノの首に回し、自身の鱗のような器官を首に突きつけている。

その横には、ハイエナに近い外見のポケモン、グラエナがヒトカゲ達を黙ったまま睨みながら構えている。状況からすると、ガバイトの仲間のようだ。

「どういうつもりだ？」

ルカリオ達に向けていたハイドロキヤノンを今度はガバイトとグラエナへと向けなおすカメックス。だがニョロトノも相手の手の内にいるため、迂闊に攻撃できない。辺りは緊張状態だ。

「必要だつてことだよ、その石の破片がな」

にやりと不気味に笑いながらガバイトは言う。本当なら攻撃を仕掛けたいところだが、まずはニョロトノの安全確保が第一だ。話をしている間に、さらに悪いことは続く。作戦を練っている間に、空から1匹のポケモンがヒトカゲ達の前に降り立った。西洋風のドラゴンに近い外見のポケモン、ボーマンダだ。全身に傷跡があるのが特徴だ。

「遅かったな」

「悪い、手間取ってた……」

ボーマンダは静かにそう言うと、獲物はどいつだといったような目つきでヒトカゲ達を一望するが、攻撃してくる気配はない。その答えは本人からすぐに返ってきた。

「……その赤いガキ。こいつらの命が惜しくば、今話していた石の破片を持ってこい」

## 第18話 荒らす者（後書き）

（小ネタ小説）

・ラスボス

ヒトカゲは苦難の末、ラスボスのところまで辿り着いた。

「ついにここまで来たか。ここに来たことを悔やむがよい！」

そう言うと、ラスボスは襲い掛かってきた。痛恨の一撃が味方にヒットする。

「くっ、負けない……この戦いは絶対……負けられない！」

ヒトカゲは必死にラスボスに食らいついた。ありとあらゆる手を使ってでも、こいつは倒さなければならぬ、そう心に決めていたのだ。

だがボスの痛恨の一撃はヒトカゲにもヒットしてしまった。回復する術もなく、仲間と共に倒れてしまった……

「だから言っただろ？　そう簡単にバラ　スは倒せないって」

溜息をつくヒトカゲの横でサイクスがDSを持ちながら言う。ヒトカゲとサイクスは一緒にゲームをしていたのだ。

「だって、この勢いで行けば絶対倒せると思ったのに」

「どれ見せてみ。あゝこれなら全員でミラーシールドかマホカントを試してみ？　勝手に自滅すつから」

ヒトカゲはこうやって、また一つ、世界を平和にしていくのだった。



第19話 年寄りの特権（前書き）

サイクス

「何でこんな時間（午前4時）に更新すんだよ（汗）」

いや、今日、学部の文化祭で講義が全部休講になっちゃって（笑）  
それで小説書いたりジラーチの映画見てたらこんな時間に（汗）

サイクス

「だから目が潤んでるのか（笑）」

い、言うなっ（汗）

## 第19話 年寄りの特権

「……ぼ、僕？」

ボーマンダが指名したのは、何とヒトカゲであった。ゼニガメをはじめ、ルカリオやアーマルド、そしてカメックスも一瞬表情が固まるほど驚いている。

「そうだ、お前だ。嫌とは言わせねえよ。グラエナを見張りにつけるから、取りに行つて来い」

「……わかった」

ここはニョロトノの安全を優先する以外に選択肢はない。ヒトカゲはそう判断し、グラエナとともに美術館へ向けて歩き出した。ヒトカゲとグラエナの姿が見えなくなった頃、ルカリオが敵の真意を探ろうと、ボーマンダに尋ねる。

「おい、何で子供にあんな事させやがる？」

どこからどう見ても、ヒトカゲの外見は子供そのもの。元はりザードンだったという事実はごく一部の者しか知らない事実。なら何故ヒトカゲを指名したのが気になつていたのである。

すると、口元で笑みを浮かべながら、ガバイトがそれに答える。だがその答えは誰も予想しなかつたもので、全員の度肝を抜く答えであつた。

「そりゃあ、詠唱ができる奴がここにいると厄介だからだよ」

「なっ……！？」

約10分後、ヒトカゲとグラエナは美術館近くまで来ていた。ヒトカゲが前を歩き、その後ろをグラエナがぴったりくっついていて。この時、ヒトカゲもみんなと同じ事を考えていた。どうして外見は子供である自分にこんな事をさせる必要があるのかと。思い切つてグラエナに質問を試みる。

「ねえ。石の破片を持ってこいって僕を指名したのに、何か理由でもあるんじゃないの？」

「……俺の知ったことか。ガキだろうが何だろうが関係ない。お前はただ石の破片を取ってくる、それだけだ」

グラエナは静かに言う。まるで感情を持たないような声色、そして表情。それに若干恐怖を感じながらも、ヒトカゲは冷静を保っている。

「じゃあ、僕がもし石の破片を取ってこなかったら？」

「その時はお前に死あるのみ。その魂を冥界へ捧げるのだ」

「へー。じゃあ、こっしょうかな？」

グラエナの話の聞いている最中に、背を向けたままヒトカゲは既に攻撃する態勢に入っていた。右手のツメをまるで鋼のように硬くし、自分が語尾を言い終わると同時にグラエナの方を振り向く。

「“メタルクロー”！」

その硬くしたツメをグラエナの背中に振りかざす。グラエナは避けることなく“メタルクロー”を背中に受けた。

だがヒトカゲの手に当たった感触がない。ヒトカゲが完全にツメを振り下ろしたときにそれはわかった。ツメがグラエナの体に触れ

た瞬間、グラエナの体が影のように揺らぎ始める。そしてあっという間にグラエナの体はその場から消え去ってしまった。

「……み、みが変わり」！？ どういう事！？」

ヒトカゲが驚くのも無理はない。“みが変わり”は本物が造りだす分身体であるにも関わらず、その本物がどこにも見当たらない。それだけではなく、ガバイトと接触した時には既に“みが変わり”のグラエナだったことになる。

(……辺りに誰がいる気配は全くない。本体はどこへ……？)

周囲に細心の注意を払いながら、とりあえず解放されたヒトカゲはみんなのいるところへ戻ろうと歩き始めた。

一方、ゼニガメとカメックスはボーマンダと戦い、ルカリオとアーマルドはガバイトと対峙していた。ボーマンダはゼニガメ達との戦いを楽しんでいるように見える。

「みずのはどう」！

「いあいぎり」！

ゼニガメが扇形に放った“みずのはどう”はボーマンダに向かっていくが、“いあいぎり”で水を横一文字に切り裂かれてしまう。水しぶきだけがボーマンダの顔にかかる。

「ラスターカノン」！

「まもる」！

すかさずカメックスが自身のハイドロキャノンから光線を放つ。しかしボーマンダが張った透明の壁によって“ラスターカノン”は阻まれてしまった。

壁がなくなると同時に、ボーマンダはカメックスとの距離を一気に縮め、右前足をカメックスの目の前で振り上げる。

「ドラゴンクロー”だ！」

「……………」

カメックスは固まってしまった。頭の中ではあの日の出来事が蘇る。弟を護るために身を張った結果、自分が隻眼になってしまった日を。

弟を安全な場所へ移動させなかった自分に責任があると思いつめていたせいで、この出来事がトラウマとなってしまう。今回、“ドラゴンクロー”でそれが一気に湧き出てしまったのだ。

傷ついている左目にボーマンダのツメが直撃する、まさにその直前だった。ガキンと音が鳴り響き、ボーマンダの唸り声がかメックスの耳に届く。目を見開くと、自分の目の前にゼニガメがそこにいた。

「お、お前……………」

「ほくら、もう“ドラゴンクロー”なんか怖くないもんね」

カメックスの代わりに攻撃を防いだのはゼニガメであった。“ドラゴンクロー”に対し、“アイアンテール”でボーマンダごと弾き飛ばし、カメックスを護ったのだ。

「……………悪いな、ゼニガメ」

本当ならゼニガメの成長を喜びたがったが、そんな悠長なことを

している暇はない。再び彼らはボーマンダとの睨み合いを始める。

睨み合いはルカリオ達の方でも続いていた。1歩でも動こうとするとガバイトは鋭い鱭のような器官をニョロトノの首に押し付ける。攻撃どころか、近づくことさえ困難な状況だ。

「手も足も出ないとはこのことだな。さあ、どうする？ 大人しく仲間がやられるのを傍観しているか、俺に突っ込んでこの市長を犠牲にするか……」

ガバイトはその場から動けないルカリオ達をからかって楽しんでる。歯痒さからか、足で地面の砂を巻き上げるルカリオ。歯軋はせりするまで苛立っていた。

「くっ……いい気になりやがって！」

そう言うてはみるものの、相手からしてみればただの強がり。無駄吠えばかりする犬と同じである。何か突破口はないのかと、気持ちばかり焦る。

そんな時、動きがあった。ガバイトに気づかれないようにニョロトノは片手を耳にやり、何やら小さくて丸いものを取り出した。よく見ると、それは補聴器であった。

(……ん、補聴器……?)

いち早く気づいたのはアーマルドだった。何故に補聴器を外しているのだと考えている間にも、ニョロトノはもう片方の補聴器を取り去った。そして自分達の方をしきりに見つめ、何かを訴えているようだ。

(補聴器を外す必要があるのか？ あれじゃあ何も聞こえないだろうに……ん、“聞こえない”？ そうか！)

ニヨロトノの意図をくみ取ることができたアーマルドは、ニヨロトノに目を合わせて頷く。お互いに意思疎通ができると、声の限り叫んだ。

「耳を塞げ！！」

その声を聞いたゼニガメ達も動きを止める。そして直感的に危険を察知したのが、ゼニガメとカメックスはすぐさま言われるがままに耳を塞いだ。

「 $\pi$  ?  $\div$   $\pi$   $\equiv$   $\sim$ 」

刹那、辺りに響き渡ったのはニヨロトノの歌声 “ほろびのうた”だ。近くでまともに聴いてしまったガバイトはもちろん、耳を塞いでいないポーマンダも地獄の賛美歌を耳にしてしまった。

『うぐあああつ！？ き、貴様……！』

“ほろびのうた”を受けたガバイトとポーマンダ。体がまるで鉛をつけられているかの如く重くなっていく。意識も若干薄れてきている。

「10分もすれば気絶するぞい。このままここにいってもいいけど、そうなら警察行きじゃな」

ガバイトから解放されたニョロトノが後ろに手を回しながら、余裕の表情で2人に語りかけた。腹立たしく感じた2人だが、今は反撃している暇などなかった。

「ぐっ……仕方ねえ、退散だ。行くぞ！」

「おう！」

急いでポーマンダの背中に乗るガバイト。それを確認すると、ポーマンダは地を蹴り、勢いよくどこかへと飛び去っていった。

「なるほど、補聴器外すとはな……だから“ほろびのうた”を聴いても自分には聴こえてないから、なんともないわけか」

ガバイト達の姿が見えなくなったのを確認してから、腕組みしたカメックスがニョロトノに近づいた。みんなも集まり、この作戦にいち早く気づいたアーマルドを褒め称える。

アーマルドは照れてみんなに背を向けたとき、ちょうど向こう側からヒトカゲが帰ってくるのが見えた。ヒトカゲは駆け足でこちらへ戻って来た。

「あっ、そういえばグラエナいないけど、やつつけたのか？」

何気なくゼニガメが尋ねると、ヒトカゲは自身が経験した奇妙な出来事「本体がない“みがわり”」を説明する。

それが終わると、今度はゼニガメ達から、ガバイトがヒトカゲの存在を知っていることを話した。これにはヒトカゲも驚かずにはいられなかった。何がなんだかわからない、この一言に尽きるとみん



なは思った。

「とりあえずはよかった……と書いてえところだが、何だか厄介な事になりそうだぜ……」

天を仰ぎながらルカリオはそう呟く。みんなもつられて空を見上げると、月が雲に覆われていくのが見えた。悪い出来事が起こる予兆のように感じる。

多くの謎を抱えたまま、一同は帰路についた。

## 第19話 年寄りの特権（後書き）

（小ネタ小説）

・ルカリオの弱点

ルカリオは誰にも負けないように、己を鍛えるために山籠りの修行に明け暮れた。滝に打たれ、波導を感じて木を避けたり、人一倍努力した。

そして数カ月後、ルカリオは最後の砦に立ちはだかった。全てを支配していた黒幕にルカリオ以外の全員がやられていたのだ。今世界を救えるのは、ルカリオただ1人。

「俺は強くなった、体も……心もだ！　いくぜ！」

みんなの想いを無駄にしないため、ルカリオは単身で黒幕に突っ込んでいく　今の力ならこいつを倒すことができる、そう確信しながら。

「この私を倒すだと？　お前には無理だ」

「うっせえ！　これでもくらいやがれ！」

目一杯体中に力を込め、黒幕目掛けその身を投げ出すように突進していく。

「終わりだ！　“すてみタック”」

「お手」

「グルッ」

心や体を鍛えても、ルカリオという種族の悲しい性故、犬のように服従してしまうのだ。古代ではアーロンという人間に従っていたポケモンもルカリオだという話も。

「……単純な奴め……」

ルカリオ、無念。

## 第20話 山登り(前書き)

ヒトカゲ

「あれ、投稿早くない？」

なんか今日すらすら書けちゃって、投稿しちゃいました(笑)

ルカリオ

「おいLinno、昨日の後書きの扱い、説明してもらおうか(怒)」

カメックス

「ついでに今までの鬱憤、晴らさせてもらっぜ」

……逃げる!(汗)

ルカリオ&カメックス

『待てやゴルア!!!(怒)』

アーマルド

「……と、とりあえずどっぞぞ(汗)」

## 第20話 山登り

翌朝、依頼を終えたゼニガメとカメックスは寝ていた部屋で次の依頼先へ行くための準備をしていた。ちょうどそこに、セロリを加えたルカリオが覗きにやって来た。

「おっ、次はどこ行くんだ？」

「インコロットとは逆方向の隣町だよ。ルカリオ達は？」

「実は俺達もそっちに行こうと思ってて……」

ルカリオはちらつとカメックスの方を見る。まだカメックスの事が怖いようだ。何か言われそうな気がしているせいか、ルカリオの顔が強張る。

「……何か言いたいならはっきり言え」

「一緒に行かせてくださいっ！」

やはり怖かった。

ルカリオの緊張はまだ続く。彼に待ち受けているもの、それは、ヒトカゲを起こすことだ。最近は1人で起きていたため何事もなかったが、今日はまだ寝ている。以前のように噛み付かれるのではないかと警戒していたのだ。

「あいつ案外噛む力強えからな、どう起こすかな……」

そう言いながらも、その手にはすでに“ボーンラッシュ”が作られていた。どうやら、“ボーンラッシュ”で殴って起こすか、突い

て起こすかのどちらかで悩んでいるらしい。

「ヒトカゲには悪いが、やっぱここは殴って起こすか」

殴って起こすことを決めると、ルカリオは波導で作った骨を両手で持ち、ヒトカゲ目掛けおもいつきり振り下ろした。だがタイミングよくヒトカゲは寝返りを打ち、空振りとなる。

「……………」

気を取り直して、もう1度トライ。だがまたしても空振りに終わる。

「…………ほ、ほお…………いい根性してんな」

ルカリオの闘争心に火がつき、何としてでもヒットさせるべく、ルカリオはその名のとおり“ボーンラッシュ”をヒトカゲにくりだす。だが何回やっても当たらない。寝ている者の動きとは思えない身のこなしでヒトカゲは骨を避ける。

「はぁ、はぁ、イ、イラつく〜!! 何だよコイツ!?!」

息を切らしてルカリオは嘆く。その時、隣の部屋から出掛ける準備をし終えたゼニガメがやって来た。ヒトカゲがまた寝ているのを確認すると、軽い口調でこう言った。

「しぶあまポフィン焼けたってー」

ゼニガメはそう言う腕組みをしながらじっと待つ。すると数秒後にヒトカゲが唸り声を上げながら体を起こし、目を擦って欠伸を

する。

「おはよ〜」

ルカリオがあれだけ苦労しても起きなかつたヒトカゲが、ゼニガメの一言で簡単に起きてしまった。これが一緒にいる時間の長さからくるものかと思う反面、あれだけ頑張ったのにと悔しがるルカリオの気持ちは少し複雑だった。

だがこれだけははつきりしていた。「後で殴ってやる」ということだけは。

「ねえ、僕何かしたの？」

「さ、さあ……」

1時間後、ヒトカゲ一行は山を越えた先にある街目指して歩いていた。どういうわけか、ヒトカゲの頭には赤く腫れたこぶが1つできている。

「〜」

このグループの中で唯一ご機嫌なのが、ルカリオだ。その様子から、みんなはすぐにヒトカゲのこぶを作った犯人がルカリオだと察した。何があつたかはゼニガメしか知らない。

「ところで兄さん、この山どれくらいで越えられるの？」

ちょうど山の麓に到着した頃、ゼニガメが何気なく兄のカメツクスに尋ねる。その何気なくがいけなかつたのか、後々この発言を後

悔することになる。

「この山だと、最低2日かはかかるな」

『ふ、2日も〜!?!?』

しばらくぶりの野宿が確定してしまった瞬間だった。ヒトカゲにルカリオ、さらにゼニガメもこれにはうな垂れる。今までの生活が野宿みたいなものだったアーマルドだけは、どうしてみんながっかりするのだろうかといった顔をしている。

「情けねえ奴らだな、たかが野宿くらいで」

「アイス如きで激怒する奴の言うセリフかよ……」

小声でルカリオはつい口答えをしてしまった。だが悪口というものには普段どんなに耳が悪くても聞こえてしまうもの。今回も例外ではない。

「ほう……言ってくれるじゃねえか、あ?」

一気に機嫌が悪くなったカメックスは、発言者であるルカリオにこれでもかというくらい顔を近づけて睨みつける。普段は短気なルカリオだが、カメックスを前にしては恐怖のあまり何もできないでいる。

「す、すみません……」

そんなルカリオの姿を見て、アーマルドは「くくっ」と小さく笑う。後にルカリオに泣かされるとも知らずに。



何だかんだで夕方になってしまった。山の夕方は想像以上に薄暗く、ヒトカゲの尻尾の火を灯りとしながら進んでいる。辺りの木々にはギーギーと鳴いているズバットが集まっていた。

「暗いの怖い」

自分の視界が1番明るいはずのヒトカゲが怖がっている。それに便乗して「ヤクザ怖い」と言いそうになったルカリオ。ヤクザのヤの字を言ったところで何かを感じ取ったのか、それ以上言葉を発することはなかった。

「ヒトカゲ、そんな暗がりだったけ？」

「最近変な夢見てるせいかな、ちよつとね」

1年前を思い出しながらゼニガメが訊くと、少しだけ悩んでいるような表情をしたヒトカゲが答える。具体的にどういう夢かは言わなかったが、同じような夢を何回も見るとか。

「ん〜何でかわからないだ」

「そうなんだよね〜」

ヒトカゲの隣にいるゴーストが頭を掻きながら悩んでいた。ヒトカゲもそれに頷く。

「“ゆめくい”で、悪夢見てるのかと、違うだ？」

「そういう感じではないと思う。毎日じゃないしな〜」

あれこれ考えてはみるものの、考えれば考えるほど頭がごっちゃんになっていくヒトカゲとゴースト。同じタイミングで首を傾げたり頭を掻いたりしている。

『うっん……』

「ヒトカゲ、いい加減突っ込んであげないとこのまま永遠と続くぞ」

横からゼニガメが突っ込みを促した。その声に反応したヒトカゲがみんなの方を見ると、表情が固まっていた。そして自分の横を見ると、ゴーストが嬉しそうな顔でこちらを見ている。

「……あー！ ゴースト！」

絶対狙っていただろと言われても仕方がないくらいのポケぶりを発揮したヒトカゲ。今知ったかのように驚き、ゴーストに飛びついた。

「久しぶりだ。さっき偶然見かけてついてきちゃった」

相変わらずの強い訛口調でゴーストは喋る。よく状況がわかっていないゼニガメ以外のみんなにヒトカゲはゴーストを紹介した。

「ところでさ、何でここにいるんだ？」

ふとゼニガメが尋ねる。ゴーストが言うには、この山にゴーストの姉が住んでいるらしく、久々に遊びに訪れようとしているのだとか。その道中、たまたまヒトカゲを見かけたらしい。

「姉ちゃん、アイランドで起こったこと、知らないだ。ついでだから、ヒトカゲ達にも着てほしいだ。事実を、伝えたいだ」

ゴーストの強い思いを汲んだのか、カメックスは「1日くらいなら構わん」と言ってくれた。今このチームの主導権は完全にカメッ

クスにあると行ってよさそうだ。

「ありがとうだ。ところで……その2人は誰だだ？」

ゴースが自分の両手で指したのは、ルカリオとアーマルド。ゼニガメの兄であるカメツクスは別として、ヒトカゲとの関係がわからないので教えてほしいと言う。

「俺はルカリオ。探検家だ。よろしくな」

「……俺、アーマルド。よろしく」

3人は同時に握手を交わした。しかしルカリオとアーマルドの握っているのは手そのもの。そこからくつついているものがないせい、どこことなく不気味に思えた。

「ゴーストだだ。よろしくだ」

互いに挨拶を終えると、一同無言状態になってしまった。これといった話題がないわけではないが、ゴーストは大切な話の半分以上を盗み聞きしていたため、これ以上の話もあり聞く必要がないといったようだ。

「……じゃ、みんなで行くだ」

ヒトカゲ達も特に話すことがなかったので、ゴーストに従い、ゴーストの姉の家目指して進み始めた。

「ところで、ルカリオ」

「何だ？」

不意にゴーストから声をかけられたルカリオは振り向いて、何かあったのかと尋ねる。次の瞬間、ルカリオは一気に恐怖のどん底へと落ちるはめになる。

「さつき、『ヤクザ怖い』って、言おうとしてなかっただ？」

「うげっ!? バ、バカッ、おお俺がそんな事……」

明らかにルカリオは焦っていた。その姿が、彼がそう言ったという確たる証拠となってしまう。ルカリオの視界はだんだん何かの影で暗くなっていく。

「おい、お前……俺が黙ってりやいい気になりやがって……」

「あつ、いいいや別にカメックスの事をい、言っただけじゃなくて、そのあの……」

ルカリオが顔を上げると、眉間にしわを寄せ、鋭い目つきのおかげ、もとい、カメックスが怒っていた。ゼニガメが後から言うには、あからさまに怒った表情をするのは珍しいという。

「2度とその口開かねえようにしてやる。来い！」

とうとうカメックスはキレてしまった。ルカリオの口を右手で塞いだまま道から逸れた雑木林の中へと入っていった。ルカリオは半泣きしながら助けってくれと目線で合図を送ったが、誰もなす術がなく、見ているしかできずにいた。

その後、数分間に亘り山中に悲鳴が響き渡った。

## 第20話 山登り（後書き）

（小ネタ小説）

・ししよー（感動ぶち壊し警報発令中）

ポケダンのイメージを壊したくない方は読まない方がいいかもしれません。

「俺は……悪い奴なんだよ」

探検家・ニドキングによって居場所が発覚してしまった、Bランクのお尋ね者・アーマルド。だが抵抗するわけでもなく、プリンクの為を思って、保安官に捕まる。

（ぼつずには、俺のようになってほしくない。罪を犯してほしくない……）

少しの時間を使って、アーマルドはプリンに思いを告げる。こぼれ落ちそうになる涙をぐっとこらえ、ジバコイル保安官のもとへと戻り、連行される。

「ししよー！ ししよー！」

泣き叫ぶプリン。その声を聞くだけでも辛い。今まで共に探検してきた記憶が走馬灯のように頭の中を駆け巡る。

せめて、ぼつずには俺と一緒にいたという思い出だけでも そ

う思ったアーマルドは、プリンと初めて探検した時に手に入れた宝「まもりのオーブ」を渡そうと決意した。

「受けとってくれ！」

アーマルドはプリンに向かって、まもりのオーブを投げようとした。

「ぐふっ!?!」

振り返ると同時に投げようとしたのがいけなかったのか、勢いあまって左手が隣にいたニドキングの顔にヒット。

さらにそのせいで手元が狂い、宙に放り出されたまもりのオーブはプリンに届くことなく地面に落下し、砕け散る。

「アーマルド……子供の目の前で悪あがきか。見損なったぞ！」

「ボウリヨクザインクワエテ、キブツハソン！ Sランクニカクアゲダ！」

「ち、違う！ 待ってくれ！」

その後、アーマルドがやったのは事故であると理解してもらえないのに、おおよそ3日かかったという。

## 第21話 姉の行動（前書き）

はい、結局いつも通りのペースになってしまいました、と（笑）

ヒトカゲ

「調子乗ると投稿できなくなるからね」

わかっております。

さて、ケータイから読んでくださってる皆様、TOP絵が小さくてごめんなさい（汗）あれ以上大きくすると表示されない可能性があったもので（汗）

ルカリオ

「あんな絵をどうしても見たいって奴は、パソコンから見ればでっかいぜ」

まあ……素人の落書きですから（笑）

## 第21話 姉の行動

「あ、あそこが姉ちゃんの家だだ」

その日の晩、ヒトカゲ達はゴーストの姉の家近くまで来ることができた。ゴーストが指した先には1軒の家がぼつりと佇んでいる。あれが姉の家のようだ。

「やった、晩御飯食べられる」

「おいおい、最初からそれ期待しちゃダメじゃんか」

両手を挙げて万歳しながら喜んでいるヒトカゲに、ゼニガメが突っ込む。だが内心はゼニガメもヒトカゲと同じ事を思っていた。若干よだれが垂れている。

「そんな日もあるって」

「……う、うるせえ」

そんな中、ヒトカゲ達よりも少し後ろを歩いている者がいた。ルカリオとアーマルドだ。顔面が痣あざだらけでよろめくルカリオを、アーマルドが支えている。もちろん、これはカメックスにやられた跡だ。

「大丈夫か？」

「今更だな……痛っ、あゝ痛え。まだじんじんするぜ……」

顔面殴打の後、“ハイドロポンプ”と“ラスターカノン”の繰り返し繰り返の攻撃を受けたその体はもうボロボロだ。それだけやってもまだカメックスの機嫌は直っていない。



「おいお前ら！ さっさと歩け！」  
『はいっ！！』

2人の前方からカメックスが怒鳴る。首を絞められたまま宙吊りにされたアーマルドとボコられたルカリオにとっては、もはやどんな敵よりも恐い存在になっていた。

直に、ヒトカゲ達はゴーストの姉の家に到着した。見た目は完全なログハウスで、窓辺にはいくつもの花が飾られ、庭にはプランターが置かれている。

「姉ちゃん、俺だ、ゴーストだ」

扉を軽くノックするゴースト。しかしどういわけか返事が返ってこない。家の中は明るいままで、暖房によるものと思われる煙も出ている。誰かがいる気配がないのだ。

「どっか行っただ？」

「この時間までうたた寝してるとか？」

ゼニガメの言う通りかもしれないと思い、ゴーストはもう1度、今度は強くノックしながら大きな声で姉を呼ぶ。

「ゴーストだ！ 中にいるなら返事してだ！」

それでも、一向に誰かが出てくる気配はなかった。みんな首を傾げてどうしたものかと言っていたその時、軽い地響きが起こった。

「な、何!？」

「何かあつたみてえだな。行くぞ」

カメックスを先頭に、ヒトカゲ達は謎の地響きの原因を探るべく、震源地へ向かって走っていった。

「な、何だこれ……?」

震源地辺りに辿り着き、その光景を目にしたルカリオの第一声。そこには、地面に無数の穴が開いていたのだ。例えるならディグダやダグトリオが地面から顔を出した時にできるような、あまり大きくはない穴だ。

「何かが降ってきたような穴だな。だけど、数がやけに多いな……」

顎をいじりながらカメックスはこの穴の正体を考える。思いついたものをそのまま口にしていった。

「以前見たことがあるのは“りゅうせいぐん”でできた穴だが、それと比べたら穴の大きさからして威力があまりない……“はどうだん”じゃなおさらだ。うーん……」

1つだけ確実に言えることは、「何か降ってきた」それだけである。ヒトカゲ達も一緒になって考えていた、ちょうどその時である。風が吹いているわけでもないのに、近くの木がガザガザと音を立て始めたのだ。

(……このパターン、まさかあいつか!?)

木が揺れただけで、ルカリオは警戒心を強めた。もちろん確信したわけではないが、記憶が正しければ、以前対峙した恐ろしい奴ジュプトルが現れるのではと感じたようだ。

みんなはぐつと構える。それからすぐに相手は木の茂みからぱつとその姿を現した。しかし月明かりのせいで影になり、真っ黒にか見えない。そのポケモンは茂みから飛び出ると、空中でヒトカゲ達を発見し、急に驚き始めた。

「わわっ、どいてどいて〜！」

刹那、そのポケモンから黒い球状のエネルギー弾“シャドーボール”が何発も繰り出された。突然の事にみんなは目を丸くしながらも、急いで木陰に避難し始めた。

「何なにこれなんだよ〜！？」

足が遅いため、“シャドーボール”を何とかかわしながらゼニガメは右往左往する。20発ほど放たれたところでそれはようやく治まった。

辺りが静まり返り、砂塵が立ち込める。みんなが無事を確認するために顔を上げると、砂煙の中から1匹のポケモンが現れた。ゲンガーだ。

「すみません〜、大丈夫ですか〜？」

申し訳なさそうにゲンガーが話しかける。その声を聞いて真っ先に反応したのはゴーストだ。草むらから顔を出しながらゲンガーと話す。

「姉ちゃん、いきなり危ないだ。弟殺す気だ？」  
『……ええっ！？ ね、姉ちゃんだって！？』

ゴーストの一言で、みんなは驚きのあまりその場にがばつと立ち上がった。集中豪雨のような“シャドーボール”を放った犯人が、ゴーストの姉であるゲンガーだったのだ。

「そだ。俺の姉ちゃんだ」

ちよつと困ったような表情をしながらゴーストは自分の姉を紹介する。ゲンガーも申し訳なさそうに頭を下げて挨拶をする。

「はじめまして……とここでゴースト、この方々はどちら様？」

「あ、そうだっただ。話せば長くなるから、自己紹介だけしてくれないだ？」

ゴーストに促され、とりあえずヒトカゲ達は1人1人自己紹介をすることになった。

「僕はヒトカゲ。よろしくね！」

「俺はゼニガメ！ はじめまして！」

「俺はルカリオ。よろしくな」

「……俺はアーマルドだ。よろしく」

各々挨拶をし終わり、残るはカメックスだけとなった。ふとゲンガーがカメックスの方を見ると、一瞬にして胸を何かで撃ち抜かれたような苦しさを感じたようだ。

「カメックスだ」

その声を聞いて、完全にノックアウト状態になってしまったゲンガー。どうやらカメックスに一目惚れしてしまったらしく、目線を逸らそうとしない。

「ね、姉ちゃん？ どしたただ？」

それからしばらく、ゲンガーの意識がカメックスから離れるまでみんなは黙ってその場で待つしかなかった。この間、カメックスは一切動じずにいた。これが兄貴というものなのだろうか。

「ところでさ、さっきの“シャドーボール”は何なんだ？」

ゲンガーの家に場所を移し、食事を取りながらお互いに聞きたい事を聞き合っていた。先陣を切ってルカリオが先程の襲撃（？）についてゲンガーに尋ねる。

「あつ、あれはね、ちよつとした特訓よ。“りゅうせいぐん”みたいにいっぱい攻撃できたらいいなーって思ってたね」  
「どうりで……どういう方法だ？」

その特訓に興味があるのか、カメックスが割って入ってきた。それによってゲンガーは顔を赤らめ、緊張しながら説明を始める。

「え、えつと、普通の“シャドーボール”じゃつくるのに時間かかるから、片手で小さいのを作って何発も撃てるようにしたのよ……カメックスさん」

ゲンガーの声は徐々に小さくなっていき、最後の「カメックスさ

ん」に至っては蚊が鳴くような声になっていた。

「特訓してるって、何のためにしてるの？」

ふとヒトカゲが気になったことを訊いた。その質問に対して、どういうわけかゲンガーが少し焦った表情をする。

「えっ？ な、何のためにつて？ そりゃあ……あれよ、何て言うの、自己防衛……そう、自己防衛よ！ 最近物騒だしね」

答えもどこかたどたどしい。変だなと思いつつも、とりあえずその答えを信じることにした。その話題を遠ざけたいのか、ゲンガーは話を変え、逆にヒトカゲに質問をした。

「ヒトカゲ君……だったよね？ 弟と友達みたいだけど、いつ知り合ったの？」

いいタイミングで、ゴーストが伝えたかったことをゲンガーに伝える時が来た。ヒトカゲを中心として、ゼニガメとカメックス、そしてゴーストを交えて、伝えるべき事実。1年前にアイランドで何が起こったかを説明していった。

後からルカリオとアーマルドも加え、今旅をしていることもついでに話した。すぐには信じられない事が多々あるにも関わらず、ゲンガーは全てを理解しているようだ。

「そういう事だったの。異常気象が起こったってこと以外全然知らなかったわ」

驚きの連続であるが、ゲンガーはとりあえず、弟を助けてくれたお礼として今晚ここに泊めてくれるという。一同大喜びで、カメッ

クス以外のみんなは再び目の前の料理にがついていた。

深夜、みんなが寝入っている午前3時頃、寝付けずにいたゴーストとゲンガーは庭先で話をしていた。久々の姉弟の話かと思いきや、そうではなかった。

「姉ちゃん、何で、自分の事、言わなかっただ？」

「そりゃあ、秘密裏に行動する必要があるからよ。万が一情報が少しでも漏れたら、大変なもの」

この会話からすると、楽しいな会話ではなさそうだ。ゲンガーはさらに続けて言う。

「そう、目の目を見る事はないこの仕事、バレたら命はないも同然だからね……」

ゲンガーのこの言葉にゴーストは黙りこくってしまった。しばしの間そのままの状態が続いたが、突如ゲンガーは立ち上がり、家中に戻ろうとした。その際、ゴーストに背を向けたままこう言った。

「ヒトカゲ君達にあんたから言っというてあげて。『気をつけて』って」

## 第21話 姉の行動（後書き）

（小ネタ小説）

・兄弟愛？

ドダイトスがバンギラスの家に遊びに来た日のことだ。2人きりで何かをするのは久しぶりなせいか、お互いにどこかぎこちない。

「じゃあ乾杯でもすつか、ドダイトス」

「そうだな。乾杯」

血こそ繋がってはないものの、本当の兄弟のように育ってきた2人の会話は自然と昔話になる。バンギラスの父・ラルフも生きていた、昔の事を。

「それじゃ今や、バンギラスもポツポの旦那かよ」

「ああ……ああ！？ ち、違いーよバカ！」

お互いに再会でき、改めて『兄弟』というものを感じたこの瞬間を、幸せに感じていた。20年以上空いていた心の穴は、この一晩で全て「幸せ」で埋め尽くされる……はずだった。



「バンちゃん、酒足んねーぞ！ さつさと持ってこいや！」

20年も経てば、お互い成人を過ぎた立派なポケモンに成長する。それ故子供の時と異なる面も多々生まれてくるものだ。よい面にしろ、悪い面にしろ。

「……酒乱だったのかよ」

シラフの時と比べたドダイトスの豹変振りは、バンギラスを呆れさせるものだった。あの頃の駄々っ子ナエトルに戻ってほしい、心からそう願うほどドダイトスの酔っ払い具合は酷かったのだ。

「んーバンちゃんのほっぺにく、キスしちゃおっかな　ガハハハハ！」

「一発ぶん殴らせろ」

嗚呼、素晴らしきかな兄弟愛。

第22話 犠牲者（前書き）

ヒトカゲ

「だから作者さん、眠いって（汗）」

いや〜ごめん。DVD観まくってたら時間経っちゃって、慌てて執筆したらちよっと行き詰ってね（笑）

ヒトカゲ

「も〜僕子供なんだからね？ よい子はもう寝てる時間だよ〜」

君も私も子供じゃないでしょ（汗）ましてやよい子って……（汗）

## 第22話 犠牲者

「みんな起きるだ〜」

ゴーストとゲンガーの会話から3時間後の午前6時、ゴーストはみんなを起こしに各部屋を回る。眠そうな目を擦るゼニガメやルカリオ、昨晚ポケラス酒を飲み続け、二日酔いのせいで頭痛が酷そうなカメックス、とつくに起きていたアーマルドが部屋から出てくる。

「あとはヒトカゲだけかだ〜」

みんなが部屋から出払った後にヒトカゲを起こそうとするゴースト。体を揺すつても肩を叩いても起きないヒトカゲに対し、ゴーストは思い切った行動に出る。

自分の手でヒトカゲを天井近くまで持ち上げ、そのまま手を離れた。ヒトカゲの体はそこから布団のない堅い床へ急落下し、顔面からぶつかる。

「おはよだ」

「……おはよ」

ムツクルが囁る、すがすがしい朝の始まりだ。

それからみんなは朝食をとり始める。ヒトカゲとゼニガメは以前のように食べ物の取り合い、ルカリオとアーマルドは必死に食べ物に食らいつき、二日酔いのカメックスは水を少し飲んでた。

「……おい、ゲンガーいねえけど、寝てんのか？」

肘をつき、右手で額を押さえながらカメックスはゴーストに言う。その声を聞いてみんなはカメックスの方に目を向けると、見るからに具合が悪そうな表情をしていた。

「姉ちゃん、もう仕事行っちゃっただ。『気をつけてって言うていて』って、言ってただ」

特に表情を変えるわけでもなく、ゴーストは昨夜言われたことをそのまま伝えた。この時、姉の職業について質問されたらどうしようと思っていたが、みんなはそれ以上何も聞こうとしなかったため、内心ほっとしていた。

「ゼニガメそれ食べないの？ もったいないから僕食べるよ？」

「あつ、取るな！ それは俺が楽しみにとっておいただけだ！」

「ゴースト料理上手いな、これおかわりないか？」

「このきのみ、もっとない？」

「……うーお前ら騒ぐな。頭がさらに痛くなるぜ……」

それどころか、みんな自由すぎるなど、ゴーストは心配事を考える暇すらなくらい忙しく、彼らの対応に追われていた。

朝食の後ひと段落したみんなは、出発する準備を整え終わり、玄関先でゴーストにお別れの挨拶をしているところだ。

「付き合わせて、悪かっただ。ありがとだ」

「いやいや、こんなに手厚くもてなしてもらって、こっちがお礼言わなきゃな」

そう言うルカリオの手には、沢山の食料が入った袋が握られていた。貧乏ポケモンはちゃっかり飢え対策をしていたのだ。

「俺、2、3日後にはビオレタ島に戻るだ。たまには連絡するだ」  
「うん。今度手紙とか電話とかするから！」

ゴーストとヒトカゲは握手を交わしながら別れを惜しむ。「行くぞ」というカメックスの声がかかり、ヒトカゲ達はその場を後にする。ゴーストはヒトカゲ達が見えなくなるまで、ずっと手を振っていた。

登りはきついが、降りくだりは案外早く進めるとというのが山。越えるだけで2日かかると思っていたこの山は予想以上に早く抜けられ、ヒトカゲ達はこの日の昼過ぎには次の街へと続く道まで来ていた。その途中、分岐点に差し掛かったところで、カメックスが話を切り出した。

「どうやらここまでだな、お前らに同行してやれるのも」

カメックスが言うには、依頼主のいる街とヒトカゲ達の目指していた街はここで左右に分かれて進まなければならないようだ。少し残念がるヒトカゲ。

「はあ、何か短く感じたな。もうちょっと一緒にいたかったな」

その横で、カメックスに見えないようにほっと胸を撫で下ろすルカリオとアーマルド。ヒトカゲには悪いが、一刻も早くカメックスと別行動を取りたかったらしい。

「ごめんな。ねえ兄さん、依頼が全部片付いたら合流しちゃダメかな？」

「ヒトカゲが嫌でなければ、そうするつもりだ。どうだ？」

ヒトカゲにとっては願ってもないチャンス、ルカリオとアーマルドにとっては願ってもない悲劇だ。台風が過ぎ去る直前に発令した次の台風警報。待ったを掛けたかった2人だが、それよりも早くヒトカゲの返事が出てしまった。

「いいの！？　じゃあ依頼終わったら一緒に行くよ！」

刹那、ルカリオとアーマルドの血の気が引いた。元々青色の顔がさらに濃い青に染まる。その横で、ヒトカゲとゼニガメが嬉しそうにはしゃいでいた。

「決まりだな。じゃあ俺らは行くぜ。ヒトカゲ、屈するんじゃないぞ」

「早く依頼片付けるよう頑張るからさ、そっちも頑張れよ！」

「ありがとう！　じゃ～またね～！」

今からゼニガメ達の合流を楽しみにしながらヒトカゲは思い切り手を振った。シヨックで言葉が出ない2人は小さく手を振り、ゼニガメ達に別れを告げた。

『はあ……』

それからというものの、ルカリオとアーマルドは溜息ばかりついていた。またカメックスと合流することを考えると、辺りに咲いて

いる花も全部毒々しく見えてしまう程、滅入っていた。

「あつ、街見えてきたよ〜！」

そんな事を思っているとは一切知らず、ヒトカゲはいつものマイペース振りを発揮する。ヒトカゲの指差す先には、次の街「グリーン」の建物が見えていた。

その時ふとヒトカゲが目線を下げると、何やら街の入り口でポケモン達が集まっているのが目に入ってきた。がやがやと賑わっているように見える。

「あれ、何だろ？ お祭りとかやってるのかな？」

「いや……何か雰囲気が違うみてえだな。ちよつと見てみようぜ」

3人は駆け足で、ポケモン達が集まっている場所へと向かった。

ヒトカゲ達はその現場に辿り着くものの、あまりのポケモンの多さに何が起きているのかも把握できない状況にあった。だが状況から察するに、お祭りのような楽しい賑わい方ではないようだ。

「ち、ちよつと通してください〜」

1番体の小さいヒトカゲが沢山のポケモン達を掻き分けて、集団の中心へと足を運ぶ。そうして進んでいった先にあったものは、想像を絶するものだった。

「……………！」

集団の中心にあったもの、それは胸から血を流して倒れているエ

レキブルの姿だった。警察が何十人もいることを考えると、おそろしく息を引き取っている。

目を覆いたくなるような光景に、ヒトカゲは身を震わせずにはいられなかった。慌てて集団の中を再び駆け抜け、ルカリオ達のところへと戻る。

すると、途中まで2人も集団を掻き分けて来ていたのだ。それに気づくとヒトカゲは目一杯その場で飛び跳ねて自分の居場所を知らせる。

「ヒトカゲか！ 聞いたぜ、殺しがあつたんだってな？」

「そうみたい。とにかく来て！」

ヒトカゲに先導され、ルカリオとアーマルドも中心へと向かった。着くや否や、2人とも絶句するしかなかった。初めて見る殺しの現場、ヒトカゲと同じく、震えが止まらない。

ちょうど警察がエレキブルに布をかけようとした、その時だった。アーマルドがふと見ると、胸に何か刺さっているように見えた。血のせいでよく見えないが、体のラインのところで鋭利な何か折れている。さらに確認しようとしたが、布を掛けられてしまった。

「胸に、何か刺さってた」

『えっ！？』

アーマルドの証言を聞くと、ルカリオの頭の中ではある台詞が浮かび上がってきた。

《俺はこのぎんのハリで何人もの標的にとどめを刺してきた》



つい最近の記憶が鮮明に蘇る。もしエレキブルの胸に刺さっていたのがぎんのハリであれば、十中八九、犯人はジュプトルだ。ルカリオはそう確信した。

「ヒトカゲ、アーマルド、ちょっと来てくれ」

ポケモンが多いところでは話せないため、ルカリオは2人を連れて集団を抜けてポケ込みの少ない路地へと移動した。

「ほ、本当なの!？」

「……冗談じゃないよな？」

以前の話を踏まえながらルカリオは心を落ち着かせつつ言う。ヒトカゲとアーマルドはおもわず大きな声を出してしまった。慌ててルカリオが注意する。

「ああ、ほぼ間違いないだろう。あれはおそらくジュプトルの仕業だ」

全員、固唾を呑む。ジュプトルがどれほど危険かはルカリオの話からしか想像できていなかったが、今回の事件の犯人であるならば、それは容易に想像できる。

「どうするんだ？」

アーマルドがルカリオに尋ねる。大体の答えは予想していたが、実際に答えを聞くことで気持ちを高ぶらせるつもりなのだろう。

「もちろん、捜すさ。だけど警察にバレないようにな」

「どうして？」

「警察を当てにしていなくてもあるけど、1番は警察に引き渡したら俺を狙ってる理由が聞けなくなっちゃうからだな」

ここで再度、辺りに誰もいない事を確認すると、ルカリオはジュプル捜しの作戦を立て始めた。聞き漏らさないように互いに顔を近づける。

「白昼の犯行だ。まだこの近辺に身を潜めている可能性が高い。そして夜になれば動きやすくなるはずだ。とりあえず日が暮れるまでは浅く、暮れたら念入りに捜すぞ」

『わかった！』

3人はそれからすぐに散らばり、独自の捜査を開始した。

## 第22話 犠牲者（後書き）

（小ネタ小説）

・お嬢と呼ばれて

ドダイトスがメガ家の警備員になってから、チコリータは「お嬢」と呼ばれるようになった。チコリータ自身、様付けなど、高貴に扱われるのを嫌うため、こうなったらしい。

「お嬢、お父様がお呼びですよ」

「はい、今行きます」

数年間も経てばそれが当たり前になっていた。「お嬢」と呼ばれることに全く違和感なく過ごしていたのだ。

ある日、メガ家にメガニウムの知り合いの警察官・バシャーモが来客として家に来ていた。メガニウムと親しげに話をしている。

そしてこの日は、チコリータの通学している学校で学校祭についての話し合いがある日でもあった。集合時間近くになっても部屋から全く出てくる様子がないため、ドダイトスが声を掛けに行った。

「お嬢、組の会合の時間ですぞ！」

「はい、今行きます！」

何も知らない人が聞いたら、「そつちの筋」の会話に聞こえてしまっても仕方がない。このバシャーモも例外ではない。

「メガニウム、裏で何をしているのだ？」

「えっ！？ ち、違う！ あれは私の娘で……」

「娘が暴力団の関係者？ ちょっと詳しく聞かせてもらおうかな？」

この後、チコリータはバシャーモに質問攻めにされ、ドダイトスはメガニウムに嚴重注意という名のお仕置きをされた。

### 第23話 犯人捜し（前書き）

リニューアルされてから早1カ月以上……評価システムとかレビュ  
ーとか、まだよくわかってません（汗）

ヒトカゲ

「勉強しようよ」

そのうちね（笑）

ルカリオ

「そういつてテスト前ひーひー言ってんの誰だよ？」

……ゼニガメだよ。

ゼニガメ

「俺じゃねえし！？（汗）」

## 第23話 犯人捜し

日が暮れるまで、3人は各々ジュプトルについて情報を聞いたり捜したりしていた。身を隠していられそうな宿屋を中心に回るも、その場にいるどころか、そこにいた形跡すらない。

ヒトカゲ、ルカリオ、そしてアーマルドが必死に捜し回っても、その姿を見つけられずにいた。それもそのはず、この3人は尾行されてきたのだ。彼らが血眼になって捜している、ジュプトル本人によって。

先程のポケモン達の集まりの後方でその様子を確認していると、偶然ルカリオを発見してしまったのだ。それと同時に、ヒトカゲとアーマルドがルカリオの連れであることが発覚してしまう。

「あいつの仲間か……まあいい。何かあればその場で口を塞げばいいだけの話……」

ジュプトルはそう呟くと、物陰に隠れてヒトカゲ達の行動を見張っていた。そう、彼らが作戦を立てていた時には既に行動を把握されていたのだ。籠の中の鳥状態である。

ヒトカゲ達がばらばらに分かれて行動した時には、ルカリオだけをつけていったジュプトル。よほど彼に対して何かがあるのだろう、その目つきは鋭い。

ジュプトルがルカリオの事を殺害しようとしたのはつい最近の話だ。今日までに殺したポケモンの数は4人。フォレストス、ヨノワール、ヤドラン、そして今回のエレキブル。

もちろん何かしらの想いがあって殺害したのだろうが、まだ殺害していないルカリオに対する想いは特に強い。

それ故、ルカリオの殺害が彼の最優先事項になっていた。頭の中でその事を考えれば考えるほど、怒りのような感情が溢れ出てくる。そうすると余計に殺意が強くなるのだ。

「ルカリオ。生まれてきた事を後悔するんだな。自分の運命が……末路が……哀れなものになることを後悔するのだ」

一体何が彼をここまで狂気に満ちたポケモンに変えてしまったのだろうか。それは今のところ本人以外、知る者はいない。

日が暮れると、ヒトカゲ達は1度集合場所に戻る。お互いに成果を報告し合うが、当たり前のように首を横に振って答える。そして同時に溜息を漏らす。

「ま、そんな簡単に見つけられねーよな。この街を出た可能性だってあるわけだしな」

そうは言うものの、ジュプトルに1番接触したいのはルカリオである。こんな真剣な空気の中、ぐうという音が3人の耳に入ってきた。もちろん、これは空腹時になる音だ。

「……………休憩にしないか？」

お腹が鳴ったのは珍しくヒトカゲではなく、アーマルドだった。一気に場の空気が和み、ヒトカゲとルカリオが笑い出す。恥ずかしそうにアーマルドは顔を赤らめる。

「僕もお腹減っちゃった。何か食べて一服しようよ!」  
「そうだな。よしっ、飯食いに宿に戻るか!」

3人は休憩をとるため、一旦宿へと戻っていった。この様子も、後ろからジユプトルにしかと見られていることも知らずに。

「はあく、ゴーストから食べ物もらつといてよかったあく」

部屋についた3人はすぐさま食事でありつく。ゴーストから頂戴したきのみやお菓子などをほおばりながら、お互いに雑談を交わす。

「そついやさアーマルド、前にもいったけどさ、お前喋るようになつたよな」

「……えっ？」

ルカリオにそう言われ、アーマルド自身気づかされたようだ。自分でも気づかぬうちに自然と口が開くようになっていたらしく、今更ながら驚いている。

「そつだよな。僕達が最初に会った時なんか、基本無視だったもんね」

「あ、いや……ごめん」

すつかり受け答えもできるほど喋れている。あとは黙つても口が開く回数は増えていくだろうとヒトカゲとルカリオは思ったようだ。3人の顔が綻ほころぶ。

だがその一方で、ルカリオの心には心配事もできていた。せつかく明るくなったアーマルドのこのまま自分と一緒に行動させてよいのだろうか。

もし万が一、自分のせいでアーマルドに最悪の事態が起きてしま



「だったらどうしようか、ジユプトルに目をつけられてしまったらどうしようかと、改めて思いつめている。」

「どうしたの？」

食料を掴む手が止まったルカリオをヒトカゲは不思議そうに見つめる。だがその声が耳に届いていないのか、頬杖をついてぼーっとしながら考え事を続けていた。

「ルカリオ、どうした？」

今度はアーマルドがルカリオの体を揺すって呼びかける。ようやく気づいたルカリオは辺りを見回し、頭の上に疑問符を浮かべている。

「な、何だ？　どうかしたか？」

「こつちが聞きたいよ。フルーツ食べないでぼーっとしたままだったからね」

そう言われてよく見ると、目の前にあった食料が一瞬にして消えていた。そこでようやくルカリオは、自分が無意識に手を止めていたことに気がつく。

「あ、ああ……急に腹いっぱいになったからな。俺ちよつと夜風に吹かれて胃を落ち着かせてくるから、俺の分残しとけよ」

少し言い訳がましい言い方だが、ヒトカゲとアーマルドは特に気にすることなく、再び目の前の食料に手を伸ばす。その横を静かにルカリオは通り過ぎ、部屋を後にする。

(一緒にいたがるのを無理に引き離すのも悪いし、かといってあいつに危険が及ぶのは……)

ルカリオは夜道を歩きながら先程の事をずっと考えていた。あのメンバーに本当の事は言えない。言ったら傷つくかもしれない。そう思い、一人で部屋から出てきたのだ。だが、本当の理由はもう一つあった。

(今更だとは思うが、あいつらを俺の事で巻き込むわけにはいかない……標的にされるのは、俺一人がいい)

どうやら、ルカリオは一人でジユプトルと戦うつもりで外に出たようだ。元々ヒトカゲに声をかけられる前に決心し、頃合を見計らって部屋を後にするつもりだったのだ。

宿から離れた、人気のない街の入り口付近の並木道。周りに誰もいない事を確認すると、徐にルカリオは普段より少し大きめの声でこう言った。

「おい、近くにいるんだろ？ 出てこいよ」

しばしの間静寂が辺りを支配していたが、ある時になると、木々の葉が擦れ合う音がだんだん大きくなっていくのがわかった。それが風によるものではないと、ルカリオは直感で把握した。

「いい根性だな……」

どこからともなく聞こえてきた声。それは確かに、ルカリオの聞き覚えのある声だった。低く、恨みがこもったその声は、聞くだけ

で他を圧倒する程の威圧感を秘めていた。

気配を察知したルカリオが背後に目をやると、そいつはいた。今ルカリオが最も会いたくない、冷酷非道なポケモン ジュプトル。

「聞きたい事がある。この街のエレキブルを殺したのはお前か？」

ジュプトルが現れると同時に、今回の事件の焦点となるべき質問をルカリオはする。エレキブルの胸に刺さっていたものから犯人はジュプトルだと確信していたが、本人の口から言わせないと証拠になり得ない。

「……だったらどうする？」

「動機が気になるな。何故お前がエレキブルを殺ったのか、それだけだ」

ルカリオが質問すると、ジュプトルは目を閉じて黙ってしまった。しばらく沈黙が続いた後、一気に目を見開いたジュプトルが口を開いた。

「お前と同じだ」

自分と同じと言われても、自分を狙っている理由がわからないためピンと来ない。さらに続けてルカリオは訊く。

「どついう意味だ？」

「そんな事、あの世で聞け！」

刹那、ジュプトルは“リーフブレード”でルカリオに襲い掛かっ

た。咄嗟にルカリオは後退して攻撃を避ける。

「怖え、もう殺す気かよ？」

余裕の表情を見せながらルカリオはジュプトルを見る。間合いを取って再び対峙する2人。次の瞬間、ルカリオは恐れていた事が起こっていたことを、ジュプトル本人から聞いてしまう。

「お前の仲間……ヒトカゲにアーマルドがいないからな……」  
「なっ!？」

ルカリオの恐れていた事 ジュプトルにヒトカゲとアーマルドの存在を知られていたのだ。前回の事もありヒトカゲが知られるのは百も承知であったが、まさかアーマルドの存在まで知られているとは思ってもなかったのだろう。冷や汗が頬を伝う。

(くそっ、あいつにはお見通しだったのかよ!)

舌打ちして悔やむが、どうにもできなかった。存在を知られた以上、今回ジュプトルに逃げられた場合に次の標的に追加される可能性も無きにも非ずなのだから。

「お前は1人でわざわざ殺されに来たんだ。いつ死んでもいい覚悟があるから来たんだろう？」

「その逆だな。お前に勝てる自身があるから来たんだ。それに、今お前にはぎんのハリがない」

その言葉を聞き、ジュプトルははっとした表情になる。だが「知っていたのか」と思うだけで、心に動揺は見られない。

「だからどうした？ 俺にはこの腕がある」

そう言うと、2人は同時に身構える。一步も退けぬ空気の中、互いに気持ちを高ぶらせている。絶対に成し遂げる。2人の頭にはそれしかなかった。

「前回言った通り、その身体、ズタズタに引き裂いてやるからな……！」

「じゃあ俺は、お前の顔が原型留めなくれえにボッコボコにしてやるぜ！」

2人の目の前を飛んでいた木の葉が地面に落ちた瞬間、生きるか死ぬかの戦いが、再び幕を開けた。

## 第23話 犯人捜し（後書き）

（小ネタ小説）

・超難問

「……だから、導関数が0である臨界点を除いて、解析関数によって定義される写像は等角であるってことが証明されたわけよ」

とあるポケ・ユニバーシティ、簡単に言えばポケモンの大学で特認講師として教鞭をとっているのは、知能指数が200以上あると噂されるバクフーン サイクスである。

呼ばれば何処であっても講師として教壇に立つ。サイクスはそれを「アルバイト」としてやっているが、もらえる給料は正規の講師、いや、それ以上という。

「サイクス先生、本日はどうもありがとうございます。これ、給料でございます」

「おっ、こんなに また呼んでくださいね」

講師のアルバイトをしたその日の晩は、絶対外食すると決めているサイクス。多めの給料を片手に街をうろつく。

そんな彼の目に飛び込んできたのは、知能指数が高い彼でも、かなり苦戦を強いられる問題が書いてあった看板だった。

『3000ポケで食べるならどっち？ 絶品ステーキ or 焼肉10種類！』

おいしそうなものを2つ並べられると、どうしようと悩む者は多い。だがサイクスの場合はそんな簡単な問題ではない。

「うゝ……何でステーキと焼肉がセットじゃないんだよ！？ どっちとか聞く方が間違ってたって！ あゝどうしようゝ……」

散々悩んだ挙句、サイクスが導き出した答えは、『どちらも注文して食べてしまっ』。毎回悩んでも、辿りつく答えはこれしかないのだとか。

第24話 波を導く力（前書き）

ヒトカゲ

「……今までありがとね」

ルカリオ

「な、何だよこの花束は？」

アーマルド

「ご苦労だったな」

ルカリオ

「お、お前まで何なんだよこれ？」

ヒトカゲ

「作者さんが渡しとけて、このユリの花」

ルカリオ

「……死ねつつってんのかあいつは（怒）」

アーマルド

「あ、今日は小ネタ小説はお休みだったよ。後書きはあるみたい」



## 第24話 波を導く力

「まずは1発“しんくうは”だ！」

先制攻撃を狙ったルカリオは“しんくうは”を放つ。まずは相手がどう出てくるか、技をくりだしながらそれを窺っていた。

「“こうそくいどう”！」

（やっぱり避けたか！）

ルカリオの予想通り、ジュプトルは素早く攻撃を回避すると同時に自分の方へ近づいてきた。相手の攻撃にそなえてルカリオはぐつと構える。

「“れんぞくぎり”！」

「それきた！ “カウンター”！」

ジュプトルの“れんぞくぎり”も予想していたのか、ルカリオは瞬時に見えない壁をつくる。“カウンター”だ。それにより攻撃を倍にしてジュプトルに返したが、放ったばかりの“れんぞくぎり”は威力が高くない。2倍のダメージでも大したことなさそうだ。

『“でんこうせっか”！』

数mの距離を置くと、2人は互いに相手へと向かって行った。元々素早い2人の“でんこうせっか”は目にもとまらぬ速さ。だが技を放って数秒後、体勢を崩したのはルカリオの方だった。

（痛っ……あいつ、あんなに力が……！？）

“でんこうせっか”はお互いの脇腹に当たった。だがルカリオの方が苦痛に表情を歪める。ルカリオの想像以上にジュプトルの力は強かったのだ。

「さっきの威勢はどこへやら……」

「ちよつと遊んだだけだ。お前が俺と遊びたそうにしてたからさ」

それでも余裕の表情でルカリオは言葉を返す。それはジュプトルの神経を逆撫でし、ふつふつと怒りを今以上に湧きあがらせるのだ。  
「た。」

「遊ぶだと？ 冗談めかすな。俺はお前らが憎いんだよ！」

するとジュプトルは後方に引き下がり、ルカリオとの距離をさらに広げた。その間に、彼が大きく口を開けていることにルカリオは気付けなかった。

「タネマシガン」！」

ルカリオが状況を把握できたのは、“タネマシガン”が目の前まで差し迫っていた時だった。だがすでに遅し。防御できる姿勢も取れずに、その攻撃を浴びる。

刹那、辺りに閃光が走った。それと同時にルカリオを中心として大きな爆発が起こる。ジュプトルはその様子をただじつと、無表情のまま傍観していた。

爆発による煙が引くと、中からルカリオの姿が現れた。想像以上のダメージを負ったのか、全身が傷つき、呼吸が荒い。

「て、てめえ…… “タネばくだん” 仕込んだのか……」

「よくわかったな。褒めてやろう」

“タネマシガン”で放った種の中身は“タネばくだん”。それが数十発にもなると協力なダメージを相手に与えることになるのを知ってたジユプトル。だがこれでルカリオはわかったことがあったようだ。

(あいつ、感情に流される傾向にあるな……)

前回の時もそうであるが、ジユプトルは感情が高まるとそれに比喩するように威力の高い技や惨い方法を取る傾向にあるとルカリオには感じ取った。頭の中で作戦を練る。

(だったら“カウンター”でダメージ返しにするか？ けどどさつき使ったから読まれるな……あいつに効く攻撃は俺にはない。なら1つ。相殺しながら地道にとっていく！)

傷の痛みには耐えながら立ち上がると、攻撃する態勢に入った。前のように天気が悪くて不意をつかれる心配もない。必ず勝てる、そう信じて構える。

「来いよ、トカゲ野郎！」

「本気で殺してやる……！」

まだまだといったルカリオの表情と、眉間をぐっと寄せて怒りを露にするジユプトル。睨み合いがしばらく続き、ある瞬間に同時に駆け出した。

「“エナジーボール”！」

「“あくのはどう”……！」

ジュプトルは手で作り出したエネルギー弾をルカリオ目掛け、ルカリオも同様にして作り出した黒色の波導を同心円状に放った。互いにぶつかったエネルギーは中心で爆発を起こす。

「はとうだん」!

これまた前回同様、その場から飛び上がったところに攻撃を入れようとしたルカリオ。青白い玉を煙の中にいるであろうジュプトル目掛け投げつけた。

「れんぞくぎり」!

2度目の“れんぞくぎり”をくりだすジュプトル。威力が増しているため、向かってきた“はとうだん”を自身の腕で弾き飛ばしてしまったのだ。軌道が逸れた“はとうだん”は地面に落ちて小爆破する。

「リーフストーム」!

ここでジュプトルは大技“リーフストーム”をくりだした。ルカリオにあまり効果がないとはいえ、その威力・勢いはルカリオを空中から地面に叩きつけるには十分すぎるものだ。

「うがあっ!?!」

激しく地面に体を打ち付けられたルカリオ。それでもまだ“リーフストーム”は止まない。無数の葉っぱがようやく視界から消えたのを確認すると、それと同時にジュプトルの姿も消えていた。

すぐさま立ち上がりどこへ行ったと見回すが、どこにもいない。

逃げるための手段だったのかとルカリオは予想したが、それは大きな間違いだということに気づいたのは、それからわずか数秒後のことであった。

予想だにしない事が起こった。何とルカリオの真下から、まるで地面を打ち破るかのように勢いよくジユプトルが現れたのだ。それと同時に強烈な攻撃をぶつける。

あまりの苦痛にルカリオは絶叫するしかなかった。その身は空中へと放り出され、やがて墜落する。一撃で相当なダメージを負ってしまい、苦しみ悶えて立つことすらままならないほどだ。

「……………あなをほる」、か……………」

そう呟くルカリオの元へ、ジユプトルがやって来た。「無様な姿だな」と鼻で笑うと、ルカリオの首を思い切り踏みつける。声にならない声がルカリオから出ている。

「う……………うぐっ……………」

「このまま首をへし折ってやる。地獄に行く覚悟でもしとけ」

ジユプトルはさらに足の力を強める。それに比例してルカリオの声もだんだん小さくなっていく。意識も少しずつ薄れてきているようだ。

(このままやられる……………のか……………? こんな奴に俺が……………)

瀬戸際に立たされると弱気になってしまふものなのか、ルカリオの頭の中はやられることばかり考えていた。いつそ全身の力を抜こうかと思ったときに、ふと出てきた顔が2つ。いつも笑顔のヒトカゲと、大人しいアーマルド。

(……俺がここでやられたら、あいつらもこいつに……?)

そこではっと気づかされる。自分は2人を巻き込みたくないがためにここへ来たというのに、自分がやられてどうすると、考えを変えられることができた。

(俺はここで……)

「……負けねえ!!」

刹那、ルカリオはそう叫びながら直前の倍以上の力でジュプトルをなぎ倒す。突然のことにジュプトルは驚きつつも落ち着いてルカリオを見るも、再び衝撃を受ける。

「なっ……!?!」

おもわず声を上げたジュプトルが見たもの、それは、周りが渦を巻いているルカリオの姿。ルカリオは両腕を横に広げ、目を閉じて意識を集中している。

【無辺、時に切り立ち大地よ 静寂、時に荒々たる海原よ そこから得ん万物が持ちし躍動よ 我が命に従いて 我が手に集いて力となれ!】

何とルカリオは詠唱を唱え始めたのだ。しかも今回はおまじないとは違い、本物のようだ。詠唱中にルカリオの体の毛が逆立っている。

(あ、あいつ……まさか!?)

さらにジュプトルは気づいてしまった。詠唱する声が2重に聞こえたのだ。そして幻影なのだろうか、ルカリオの後ろにもう1人のルカリオがいるように見えたらしい。ただただ衝撃を受けている。

「絶対お前になんか負けねえ！ 波導は我にあり！ “はどうだん”！」

ルカリオは両手で作り出した波導の球“はどうだん”を放つ。再び“れんぞくぎり”で弾き返そうとするジュプトルだったが、勢いが想像より遙かに上回っていた。弾くこともかわすこともできずに、“はどうだん”を正面から受けて吹っ飛ばされる。

「ぐおっ！？」

ジュプトルはそのまま後方にあった木に打ち付けられた。それだけではない。その木が音を立てながら折れ、ジュプトル共々後方に倒れ込んだのだ。その隙をつき、ルカリオはさらに攻撃を放つ。

「もう1発！ “はどうだん”！」

（いきなり強くなってやがる………一時退散だ！）

再び放たれた“はどうだん”がジュプトルに当たるか否かのところで爆発が起き、視界が遮られる。その間に、ルカリオは以前の状態に戻っていった。

視界がようやくよくなった頃には、ジュプトルの姿は消えていた。おそらく“あなをほる”で逃げていったのだろう。落ち着きを取り戻したルカリオは、自身の両手のひらをまじまじと見つめながら、自分のした事に改めて驚く。

「俺もヒトカゲみたいに、詠唱できた……何故だ？」

本人はどうして詠唱を言えたのか、どうしておまじないとは異なるものを知っていたのかが不思議でたまらないようだ。意識はあったものの、まるで何かがフラッシュバックしたような感覚だったという。

(……………親父……………?)

考え事の最中にふと思い浮かんだ、ルカリオの父・ライナスの顔。それが何を意味しているかはわからなかったが、ルカリオはこう捉えることにした。「親父が助けてくれたのかも」と。

ルカリオがその場を立ち去ってからしばらくすると、地面から手負いのジュプトルが静かに顔を出した。一気に地面から這い出るも、先程の“はどうだん”が効いたのか、足下がおぼつかない。

「あれは見間違いだっただか？ いや違う。あれは……………」

何かを確信したかと思うと、ジュプトルは右手を強く握り締めた。ツメが食い込んで手のひらから出血するほど、力強く。鮮血がぽたぽたと芝生に落ちていく。

痛みを全く感じないほど、彼の怒りはその大きさを増していた。心で誓った誓いの宣言を口に出し、己の気持ちをさらに高ぶらせた。

「待っている、必ずお前に復讐してやる……………ライナス!!」



第24話 波を導く力（後書き）

……意外でしたかな？（笑）

ルカリオ

「ちょ、ちよつと待て！ 何で俺が!？」

それはずーっと先を読まないとわかりません。終盤に差し掛からないと不明ですな。

ヒトカゲ

「僕以外にいたんだー（汗）しかもルカリオ（笑）」

ルカリオ

「何故笑う（怒）」

さて、少しずつ動き出した「ヒトカゲの旅 SE」。こつやっつて執筆できるのも読者様のおかげです。評価や感想も頂き、嬉しい限りです。

これからも努力していきます。よろしくお願いします！

アーマルド

「なんでまともな内容なんだ？」

……いいじゃないたまには（汗）

第25話 かくれんぼ(前書き)

ヒトカゲ

「とりあえず、ルカリオについては秘密、と」

ルカリオ

「やゝこの台本を読み上げて明かしてえゝ!」

ダメダメ、私の自信作をそう簡単に明かされてたまるか(汗)

アーマルド

「ここの俺の見せどころも?」

ダメに決まってるでしょ(汗)

カイリユー

「あつ、僕の出番のページどこ?」

最近君ちよくちよく来るね(汗)

## 第25話 かくれんぼ

ルカリオが宿に戻った時には、ヒトカゲとアーマルドは眠っていた。ただし、食事をしていた場所で、しかも食べ物を持ったまま。幸せそうによだれを垂らして寝ている。

「……………」

ありがとな、お前らがいて助かったぜと、心の中でルカリオは2人にお礼を言った。そして足下を見ると、自分の分の食料がちゃんと残されていた。

幸運なことに、そのほとんどがオレンのみとオボンのみだった。これで戦ったことを内密にできると喜びながら、小腹を空かせていたルカリオはきのみにかじりつく。おいしくきのみを味わい、かつ体力回復。生きるって素晴らしいと絶叫したくなるほど、幸せだったようだ。

「ふっつ、食ったな。俺もここで寝よつと……………ふぁ……………」

大きく欠伸をしながら、ルカリオもヒトカゲ達同様、床の上で雑魚寝をすることにした。

ルカリオもすっかり熟睡している頃に、寝苦しそうな声を上げながら眠りから覚めた者がいた。アーマルドだ。目は半開きで、焦点が合っていない。

「……………水飲んで……………」

口をこもらせながら呟くと、むつくと起き上がって水のある部屋へと行こうとした。当然ながらふらついた足取りで歩き始める。寝ぼけているならなおさらだ。

それに、まさかルカリオが自分と同じ場所で寝ているとは思ってもしなかったのだろう、気づかぬままアーマルドはその太い脚をルカリオのみぞおちにヒットさせる。

「ぐふっ!?!」

ただでさえ数時間前にジュプトルと一戦交えているところに、アーマルドの強烈なみぞおちキックをくらったルカリオは苦しみのあまりがばつと起き上がる。

「て、てめえ何すんだよ!? ゴホッ……」

「わ、悪かった。わざとじゃないから」

物凄く嫌な目覚めとなってしまったルカリオ。寝たくてもみぞおちの痛みのせいで寝られず、結局アーマルドと一緒に水を飲みに行った。

コップ1杯ほどの量の水を飲む2人。夜ということもあってか、冷えたおいしい水が喉を伝う度に小さな感動を得ていた。そのせいか、眠気がどんどん覚めていっていく。

「……目え、冴えちまったんだけど」

「……俺も。たぶん寝れないな」

ルカリオもアーマルドも、お互いの顔を見て困った顔をする。しばらく悩んでいると、何かを思いついたかのようにアーマルドが「

あつ」と声を出した。どうしたんだとルカリオが尋ねると、嬉しそうな顔をしながらアーマルドは自分の思いついた名案を説明する。

「俺ら寝れないから、ヒトカゲも起こそうよ」

意外な一面を仲間の前に晒したアーマルド。どこか楽しそうな表情をしている。この発言に少々驚きながらも、ルカリオもにんまりとした顔つきをした。

「賛成するぜ。あいつだけ暢気に寝るなんて許せねえからな」

互いに握手を交わした後、不敵な笑みを浮かべながら2人はヒトカゲの寝ている部屋へと戻っていった。

「で、何する？」

それから、様々な方法を使ってヒトカゲを起こすことに成功したルカリオとアーマルド。起こしてみたはいいものの、この後どうすればよいかを考えていなかったことに気づき、頭を捻っている。

「何で僕、起こされなきゃいけないの？」

その横で、既にぐったりしているヒトカゲが質問をしてきた。何をされたか本人は全くわかっていない様子。ヒトカゲの後ろで「くくくつ」とアーマルドが小さく笑う。

「たまにはいいじゃねえか。あつ、そうだ、かくれんぼでもしねーか？」

ルカリオが思いついたのはかくれんぼ。誰も小さい頃に経験したことのある、至ってシンプルだが盛り上がる遊びの1つ。子供なヒトカゲはそれに喜んで賛成する。

しかし、かくれんぼを始める以前に、こんな問題があったとは誰も予想できなかった。こんな問題というのは、アーマルドのこの発言だ。

「……あのさ、かくれんぼって、何？」

ヒトカゲもルカリオも言葉を失った。かくれんぼを知らないアーマルドに呆れたのではなく、かくれんぼを知っていて当たり前だと思っていた自分達が少々愚かだったと感じさせられたからだ。

この時アーマルドは、かくれんぼという言葉さえ知らなかった。唯一知っている遊びといえば、ツメを使って地面にする落書きや、川でする石投げくらいである。

「よしっ、あれこれ説明するよりやって見た方が早いだろ」

「基本、見つからないように隠れるだけだから。やってみよ！」

ルールもわからないまま、ただアーマルドはヒトカゲに引つ張られて部屋を後にする。最初はルカリオが鬼になり、さらにハンデということで100も数えてくれるようだ。

「ど、どうすんだ？」

隣の部屋で、アーマルドはおどおどしながらヒトカゲに訊く。そんな彼の様子を見ながら、楽しそうな笑みを浮かべているヒトカゲが簡単に説明する。

「100数えてる間にどこかに隠れるんだ。ルカリオが鬼だから、ルカリオに見つかつたら負け。いかに息を潜めて、意外なところに隠られるかがポイントだよ」

それだけ言うと、最後に「頑張つて」と言い残し、ヒトカゲもどこかに行つてしまった。どうしようかと焦っている間に、既にルカリオは30まで数えていた。

(まずっ！？ とりあえず部屋から出るか)

さらに先の部屋へ行くと、そこは物置部屋だった。ロッカーや押入れなど、隠れるにはうつつけの場所がたくさんある部屋だ。アーマルドはどこに隠れようか考えていた。

まずはロッカー。これは体型的に無理があると判断し、すぐさま却下。次に物の影、これはいいなと思つて隠れてみるものの、尻尾がどうしても隠せず、これも却下。

「うーん、難しいな……」

必死でかくれんぼというものをやっているアーマルド。頭を使って隠れるのに適した場所を思い浮かべるが、ルカリオのカウントアップが気になつてそれどころではない。

「70、71、72、73……」

これは急がなくてはと、焦ったアーマルドは咄嗟に押入れの中へダイブする。そして慌てて押入れの扉を閉め、一息つく。隠れることができたとはいえ、それでも安心できずにいた。

「これじゃすぐ見つかつちゃうよな、そしたら……」

ある事を想像すると、アーマルドは小刻みに震えだした。この時、アーマルドがとてつもない勘違いをしていたことに気づいたのは、かくれんぼが終わってからの話だ。

“ルカリオが鬼”という言葉聞いたせいか、鬼と化したルカリオが隠れた者に対して何か痛いことをするのではないかと先程から不安になっていたのだ。

「90、91、92……」

ルカリオのカウントはもうあとわずか。もうダメかとも思った、その時であった。アーマルドの目にある光景が入ってきたのだ。それを見た瞬間、彼の顔に笑みがこぼれた。

「……100！ おっしやー捜すぜー！」

やる気満々なルカリオは拳を手のひらに打ち付けて、張り切つてヒトカゲとアーマルド捜しを開始する。本当なら波導を感じ取れば済む話であるが、あまりに不公平になるため、使つつもりはないという。

ルカリオがまず向かったのは、隣の部屋。息を殺して耳を済ませるが、誰かが呼吸している音がしなかったため、すぐに部屋を出る。次に向かったのはさらに隣の物置部屋だ。どこを見ても隠れるにはもってこいの物ばかり置いてある。どうやってヒトカゲ達を捜すか、ルカリオは顎をいじって考える。

「……おっ、あそこだな」

何かに気づいたのか、足音を忍ばせながらロッカーに近づく。そ



して一気にロッカーを開くと、中には頭を抱えて丸まっていたヒトカゲがいた。

「はい見つけた!」

「え、何でわかったの?」

「簡単さ。今は夜だから、お前の尻尾の火がロッカーの中を明るく照らしてるんだよ」

ルカリオが考えている間に目にしたのは、ロッカーの隙間から漏れている光だった。ろうそくでない限り、ヒトカゲだとすぐ頭に思い浮かんだようだ。

「あとはアーマルドだけか。速攻で見つけてやる!」

気を良くしたのか、ルカリオはヒトカゲの手を引っ張ってアーマルドを捜し始めた。

しばらく捜してはみるが、他のロッカーや物の影など隅々まで見回してみるものの、アーマルドを見つけるまでに至ってなかった。

「どこ行きやがったあいつ?」

「うーん、あそこ見たっけ?」

頭をかきむしっているルカリオに、ヒトカゲがあるところを指差す。そこはアーマルドが入って行った押入れだ。そういえば見ていなかったなと思いつく。

「あそこしかねえな。よし」

隠れる場所はもはやあそこしかない、そう踏んだルカリオはそつと押し入れに近づき、驚かせようと勢いよくその扉を開けた。

「さあ出て来いや……って、あれ？」

ルカリオが見たのは、空っぽの押し入れ。そこにアーマルドがいなかったのだ。しかしどう考えてもここ以外に隠れる場所はもうない。不思議に思ったルカリオがヒトカゲを使って、押し入れの中を調べさせた。

「こんなどこに何かあるわけ……あ、あった」

いとも簡単にヒトカゲが発見したのは、天井にあった扉。しかも開きっぱなしであることから、アーマルドは天井にいるとすぐに予想がついた。

「アーマルド、天井にいるみたいだよ！」

押し入れから出たヒトカゲがルカリオにそう伝えると、ルカリオは“ボーンラッシュ”をつくりだし、天井を突き破ろうと準備をし始めた。

「うしっ、こっから落としてやる！　せーのっ！」

ルカリオが天井めがけて“ボーンラッシュ”をくりだそうとしたまさにその時であった。バリツという大きな音とともにアーマルドが天井から降ってきたのだ。しかもよりによって、ヒトカゲとルカリオの頭上に向かって。

『あわわわわ！？』

慌てふためいている間に、2人を押しつぶす形でアーマルドは天井から落下した。どうやら天井の木が脆くなっていたらしく、そこをアーマルドが踏んでしまったようだ。

「だ、大丈夫か？」

「そう訊くならさっさと降りろ……」

いつもの怒り口調でルカリオはそう言うが、何故か自然と吹き出してしまった。それにつられてヒトカゲ、そしてアーマルドも一緒に笑いだす。

今の出来事がよっぽど面白かったのだろう、3人の笑いは止まらない。ルカリオとアーマルドはこの時、幸せとはこういうものなんだと改めて自覚することができた。

3人の絆がより深まったこの夜が明けると、宿屋の管理人に天井の修理代を要求されたのは、言うまでもない。

## 第25話 かくれんぼ（後書き）

（小ネタ小説）

・兄貴と猫

「お前……どつから来た？」

仕事で張り込みをしていた時のこと。カメツクスの足に1匹の命知らずの猫が擦り寄って来た。

「俺は仕事なんだ。命を落とすくなかったら、さっさと離れた方がいい」

カメツクスは猫に対して警告を送った。それでも猫は離れるどころか、頭をカメツクスの足にこすり付けて甘える。

「……ちっ、仕方ねえ」

舌打ちをすると、カメツクスはその猫の首を掴んで持ち上げ、そのまま人気のないところへ連れて行く。誰もいないことを確認すると、カメツクスは体勢を低くし、自身のハイドロキヤノンで猫に近づけた。

「楽しいか？」

猫を殺すかとおもいきや、カメックスはハイドロキヤノンに猫を入れてあげていたのだ。案外居心地がいいようで、猫も甘えた声で鳴く。

「……俺と散歩すつか？」

ニヤ〜とかわいい声の返事を聞くと、カメックスは猫をハイドロキヤノンに入れたまま散歩をしてあげた。

「兄さん、そんなに猫好きだっけ？」

「何か言っただか？」

「……いや、何も……」

この日ばかりはゼニガメも身の危険を感じたのか、それ以上何も言おうとはしなかった。

第26話 新たな情報（前書き）

ちょっといろいろあるので、活動日記をお読み下さい。

ヒトカゲ

「お願いしまーす」

アーマルド

「あれ、ルカリオは？」

……ちょっと今不在です（汗）

## 第26話 新たな情報

結局、天井の修理代が払えない3人は1日中宿の掃除をすること  
で管理人に赦してもらうことになった。そのせいで1日余計に滞在  
することとなり、3人とも溜息しか出ないようだ。

「そういえば、ジュプトル捜しどうしよう？」

床を磨きながらヒトカゲが言う。その言葉に一瞬つまずくルカリ  
オ。やっぱりあの事を話すべきだろう、ちゃんと説明しなきゃいけ  
ないなと思い、打ち明けることにした。

「……実はな、俺、昨日会ったんだわ」

その一言にヒトカゲとアーマルドは掃除の手を止めた。どうい  
うことかと訊かれ、ルカリオはありのままに話し始める。もちろん、  
あの事も。

「……で、聞いてくれ。俺、どういいうわけかわからんが……ヒトカ  
ゲと同じように、詠唱技ができちまったんだよ」  
『えっ、えええっ!?!』

この日一番の大声を上げて驚く2人。特にヒトカゲの受けた衝撃  
は大きい。自分以外のポケモンが詠唱をできるなんて誰からも聞か  
せられてないため、当然ながら詠唱ができるのは自分だけだと思  
い込んでいたからだ。

「頭ん中にいきなり言葉がすらすらと出てきてよ、何が何だかわか  
らないうちに力が漲みなぎってきたんだ。だけど何で俺が……」

何より一番不思議がっていたのはルカリオだ。20年以上生きていてこんな経験はなかったという。夢ではなかったかと疑心がつり始めてきたからか、ルカリオはすつくと立ち上がり、ここで詠唱を試してみることにした。

【無辺、時に切り立ち大地よ 静寂、時に荒々たる海原よ そこから得ん万物が持ちし躍動よ 我が命に従いて 我が手に集いて力となれ】

この感覚だ 全身の毛が逆立ち、どこからか未知なる力が湧き上がるのを感じていた。それは傍で見ていたヒトカゲ達にもわかったようだ。ルカリオは詠唱技が使えるポケモンの1人であると。

「ホントだ！ でもよかったよね、今以上に強くなれるんだからさ！」  
「だよな。ちょっと羨ましいくらいだ」

ルカリオが何故詠唱をできるかは別として、これは今の彼らにとつて願ってもない恵み物である。まだ使いこなせるわけではないが、いずれ詠唱になれば、ジュプトルやその他の敵に勝てる確率が上がることは目に見えている。

「そ、そっか。そうだよな。よくし待ってるジュプトル、ぜってーボコってやつからな！」  
「……誰をボコるんだい？」

そこにやってきたのは、宿の管理人であるモンジャラだ。声色か



らして怒っているようだ。モンジャラが見たのは、掃除用具がその辺に捨てられっぱなしの状況だった。

「天井壊しといて掃除をサボる気か　　！！」

『や、やりますっ！！』

それから1日後、ようやく解放された3人はグリーンを後にする。あれから警察が規制線を張り、街の中を容易に動くことができなくなったため、ハウオウとディアルガに関する聞き込みを断念せざるを得なかったのだ。

「次はどこへ行くのかな」

ヒトカゲは道の看板を探しながら楽しそうに歩いている。あちこち見回しては小石に躓いてコケそうになったり、木にぶつかりそうになっている姿を見ると、ルカリオとアーマルドは微笑む。

「お前つて、本当に子供なんだな」

「実年齢が俺ら以上つて……想像つかんな」

冷静に考えてみれば少々呆れる部分も出てくるが、それもヒトカゲのいいところだろうと自分達の中に言い聞かせている。親の顔が見てみたいと思う2人であった。

そんな3人の歩いている道の向こう側から、何かが猛スピードでこちらに向かってきているのに最初に気づいたのはアーマルドだ。小さな黒い点が急に大きさを増す。

「あつ、あれ何だ？」

その声に反応してヒトカゲとルカリオも視線を合わせようとしたが、その時には自分達の横を颯爽と過ぎ去っていた。後ろを振り返ると、既にそれは再び点となっていた。

「えっ、何なに？」

ヒトカゲが目を見つめていると、その点が再びこちらに向かってきた。先程よりはゆっくりしているため、今度は姿を確認することができた。茶色の毛を持つ、獅子のような風格のポケモンはヒトカゲ達の目の前までやってくると、威厳を保ちながら話しかける。

「……まさかここで会えるとはな」

「……エンテイ！」

ヒトカゲ達の前に現れたのは、アイランドの番人の1人・エンテイだった。約1年ぶりの再会に心躍らすヒトカゲとは対照的に、その風貌から高貴な存在であると悟ったルカリオとアーマルドは緊張感を募らせている。

「1年前は悪かったな。私やライコウ、スイクンも任務を優先して  
いてな」

「ルギアから聞いたよ。実は今僕もハウオウ捜ししてくれって言わ  
れたの」

これにはエンテイも驚く。おそらくルギアから何も聞かされていなく、口ホ島で平和に暮らしているのだなと思いついていたのだらう。

「そっか……」

少し申し訳なさそうに思うものの、ヒトカゲに頼んだということはそれなりの力があると見込んでのことだと理解したエンティは、小さく頷いて納得する。

「ところで、そいつらは新しい仲間か？」

「あ、うん！ 紹介するね！」

そう言うと、ヒトカゲは後ろで緊張して固まっているルカリオとアーマルドを無理にぐいぐいと前へ押しやる。2人の目の前に近づいてきたのは威厳あるエンティの姿。臆するのが当然だ。

「あつ……えつと、ル、ルカリオです」

「……俺、アーマルド」

ぎこちない返事に対し、「エンティだ」と軽く返すエンティ。怯えられるのには慣れているためだろう。逆にヒトカゲのように気軽に話すポケモンの方が珍しいと思っている。

それからエンティは、どうしてポケラス大陸から離れる方向に向かっていったのかを話す。それによると、ルギアに会うためだという。何かある度1回1回アイランドまで戻っているのだ。

「あつ！ そういえばいいものあるよ！」

事情を知ったヒトカゲがカバンから取り出したのは、旅に出る前にルギアからもらった“海神笛”。ルギアを呼ぶための笛を使う時が来たようだ。

ヒトカゲはそつと口を近づけ、笛を吹いてみた。その音色は柔らかくも澄み切った音だ。1分ほど笛を吹き続けたヒトカゲは、静かにその手を下ろす。

「これでルギア様が来るのか？」

半信半疑のエンテイにくくりと頷いて答えるヒトカゲ。その場で黙って待つことにした。

わずか数分後の事であった。エンテイよりも素早く、空からポケモンがやって来た。ヒトカゲ達はそれを見るとすぐに確信した。あれはルギアであると。

「私を呼んだか？」

またしても目の前に現れた高貴な存在を目にし、ルカリオとアーマルドは緊張感をさらに募らせた。心臓の鼓動が大きくなってるのがはつきりわかるほどだ。

「私がルギア様を呼ぶように頼みました」

一歩前に出てエンテイが言う。「何の用件だ」とルギアに尋ねられると、ここにいる全員に聞いて欲しいことがあると、エンテイは一呼吸おき、話を始めた。

「実は、ホウオウを目撃したというポケモンがいます……」  
「本当か？」

「はい、子供だったので嘘ではないかと思われませんが……つい数週間前に、北の方角へ飛んでいったという証言が得られました」

何と、実際にホウオウを見たというポケモンがいたのだ。エンテイによれば、グリーネの隣町でつい先日聞いた話で、信憑性も高いという。思ってもない朗報にみんなは喜ぶ。

「よかった、これでホウオウが見つかりそう」

大きく両腕を広げてヒトカゲは嬉しそうにする。ただ、北に向かったという情報だけなので見つかるという確証はない。それでも今まで得られなかった有力な情報というだけあって、自然と高揚してしまう。

「そうか……ヒトカゲ、そしてルカリオとアーマルド。これからも頼むぞ」

『了解！』

3人は元気よく敬礼した。神と呼ばれるポケモンに期待されるというのは物凄く気持ちのいいものだ。ルカリオとアーマルドは実感したようで、嬉しくてたまらないようだ。

「それからエンテイ、この事をすぐにライコウとスイクンにも伝えてくれ」

「了解しました。それでは、失礼します」

エンテイはルギアに向かって頭を下げると、すぐにライコウ達を捜すために走り去っていった。姿が見えなくなるまで見送りすると、ルギアはヒトカゲ達の方を向く。

「ディアルガについては何かわかったか？」

「うーん、姿だけわかったけど、どこにいるとかは全く……」

「そうか。私もあちこち見回してはいるが、そう簡単にはいかないな」

軽く溜息をついて残念がるヒトカゲ。その様子を哀れに思ったのか、なだめるようにルギアはそっと言葉をかける。

「リザードンに戻りたい気持ちはよくわかるが、急ぐと返って逆効果だ。焦らず思い続けていれば、必ず会えるはずだ。私も協力する」

それを聞いて気持ちが落ち着いたのか、ヒトカゲは笑みを浮かべる。ルギアに続くように、この2人も励ましの言葉をかける。

「俺らもいること忘れんなよな。少しは頼りにしろよな」

「できること、俺らなりにやるからさ。頑張ろうよ」

ヒトカゲが振り向くと、優しい表情のルカリオとアーマルドもいた。こういう場面だからか、いつもより遅しく、そして頼りがいのあるように見えている。

「そつだよな。じゃあ見つかるまでずーっと一緒にいてもらうからね！」

ふざけて上から目線の態度をとってみたヒトカゲ。それに応えるように笑いながらヒトカゲの頭を殴るルカリオ。その様子を見て笑うアーマルド。この3人がいれば大丈夫だろうと、傍からみていたルギアは思ったようだ。

「では、失礼する！」

地面を強く蹴って空高く舞い上がると、ルギアも北の方角へ向かって飛んでいった。しばらくしてから、元気な掛け声と共に、3人はルギアを追いかけるように北へ向かって走り始めた。

## 第26話 新たな情報（後書き）

（小ネタ小説）

・完璧な生活

「さて、仕事の準備でもするか」

ヒトカゲのいない家では、ウインディが朝から仕事へ行く準備をしている。カバンに必要なものを詰め、身だしなみを整える。

「あつ、掃除しとくか……」

まだ時間に余裕があるのか、部屋の掃除を始めたウインディ。帰ってきたときに散らかっている部分があると嫌なようで、時間があれば掃除するのが日課になりつつある。

「時間がかなり余ってしまった……よし、この辺を散歩しながら行きますか」

カバンを口にくわえると、ウインディは家を出る。道の周りに咲いている花や他の植物、子供達が遊んでいるのを見ながら出勤している。

何ともいえない充実した気持ち。心をいっぱい満たして、今日も楽しい一日が始まる。

「……いかん！ 遅刻する！」

このような夢を見ていたウインディは、夢か現実か区別つかないほど混乱していた。慌てて準備するも、遅刻5分前だ。

「掃除！？ そのうち！」

ヒトカゲが帰ってくる前日まで、ウインディのせいで部屋はぐっちゃんだったとか。



第27話 よく食べ、よく寝る(前書き)

もう12月ということですか？(今回からあいつが登場しますよ！)

ヒトカゲ

「あいつって？」

ルカリオ

「どれ、台本見せてみ……おおっ、こいつー!？」

アーマルド

「しかも登場の仕方が……(汗)」

これがLino流なんだよ(笑)

## 第27話 よく食べ、よく寝る

3人は果てしなき道を歩いていた。北へ向かうのはよいが、そこにあるのは1本道のみ。周りには青々しい雑草が生えているだけで、いい加減景色にも飽きてきたようだ。

「ねえ、次の街までまだ？」

歩き疲れたのか、ヒトカゲはぐったりした様子で2人に話しかける。だが、横にいる2人も相当ぐったりしていて、前かがみになりながら歩いている。

「し、知らねえよ、俺に聞くな……」

ルカリオは弱々しい声で話す。肩から提げているカバンには一応地図は入っているが、今はそれを取り出す気力さえないようだ。

「この様子だと、まだだな……」

その横で、今にも干からびそうな声で話すアーマルド。この3人、朝から何も飲まず食わずのまま数時間以上歩いていたのだ。近くにはきのみどころか川もなく、水すら飲めない状況下だ。

『ふえ〜……』

先ほどの勢いはどこへやら、3人は何とも情けない声を漏らしている。しかし、この3人以外にも辛い思いをしているポケモンがいることに気づいたのは、それから直のことであった。

ぼーっとしているヒトカゲの目に、不自然な光景が入ってきた。

草むらの上に、何かがある。それが気になったのか、駆け足でそれに駆け寄る。

そこにたどり着くと、それがうつ伏せで倒れているポケモンであることがわかった。深緑色の毛で覆われた背中中、おそらく自分の約3倍の体格はある。そして可愛らしい耳がついている。

「あれ、もしかして……」

何か思い当たる節があるのか、ヒトカゲはそのポケモンを力の限り引つ張り、仰向けにさせた。そして顔を確認すると、衝撃が走った。

「……ああっ、バクフーン兄ちゃん!!」

ヒトカゲが見たのは、鼻血を出して目を瞑っているバクフーンで、口ホ島に住んでいるヒトカゲの兄的存在・サイクスの姿だった。ヒトカゲの叫び声を聞いて慌てて駆け寄った2人も、驚きのあまり一歩後退してしまう。

「えっ、な、何だこれは……」

「し、死んでるのか?」

よくよく顔を見ると、鼻血を出している以外は目立った外傷もなかった。それでもやはりこんな状況で心配しない人はいない。ヒトカゲはとにかくサイクスの体を揺さぶった。

「起きて! 起きてっば!」

胸倉あたりを掴んで大きく体を揺さぶると、そこに待っていたのは何ともベタな展開であった。

「……………ZZZ……………」

サイクスから聞こえてきたのは、何とも気持ちよさそうな寝息。それを聞いた3人は何ともいえぬ表情のまま固まってしまった。

「……………ん、ほえ？」

そうしているうちに、サイクスの目が半開きになった。どうやら眠りから覚めたようだ。むっくと起き上がり背伸びをしている。

「あゝ寝ちゃっ……………あれ、ヒトカゲ？」

まるで何事もなかったかのようにヒトカゲを呼ぶサイクス。もちろん彼の鼻には鼻血がついたままだが。それに突っ込まざるを得ないヒトカゲは恐る恐る訊いてみた。

「そ、それ、それ……………」

「ん？ それって……………あれ、鼻血！？ 何でこんなに!？」

ヒトカゲに言われて鼻に手を当ててみると、手にべっとりと血がついていた。最初はどどういうわけかわからず戸惑っていたが、すぐにその原因がわかったようで、手を叩いて納得する。

「これ、たぶんさつきピーナッツいっぱい食った後にめっちゃ走ったから、血圧上がったんだわきつと」

『ピー、ピーナッツ？』

よりもよって原因がピーナッツだとは誰も信じたくなかったの  
だろう、サイクス以外の3人は顔を見合せている。さらにサイクス  
は続けて説明する。

「んで気持ちいいから昼寝しちゃってさ、寝ている間に出たんだな、  
鼻血」

すごく心配したのに、とヒトカゲは半分呆れていたが、サイクス  
の笑い顔を見ているとそれもどうでもよくなってきたようだ。

「ま、それよりもさ、俺この血何とかしたいからさ、さっさと次の  
街行こうぜ」

一応止まってはいる鼻血だが、顔についているものだけでも量的  
にはかなりある。よく死ななかつたなと3人は思いつつも、元気に  
歩きだしたサイクスを追いかけ始めた。

「ぶはーっ！ 気持ちいい」

街の少し手前で川を見つけ、4人はそこで休憩をとることにした。  
サイクスは鼻についた血を洗い流し、ヒトカゲ達は水を飲んで元氣  
を取り戻している。

「やべ〜生き返る〜！」

たらふく水を飲んだ3人は幸せそうな顔をして芝生の上に仰向け  
に寝転んだ。そこにサイクスも混じって仰向けになる。空を見上げ  
ると、太陽の周りを回るようにオニドリルが飛行している。

「ところでさ、お前ら誰だっけ？」

今更になって、サイクスはルカリオとアーマルドについて興味が出てきたようだ。突っ込みたくもなるが、そこは抑えて自己紹介をする2人。

「俺はルカリオ。探検家で、ヒトカゲと一緒に旅してるんだ」  
「俺、アーマルド。よろしく」

一通り自己紹介を終え、今度はサイクスの番になった。身軽に起き上がって背中についた土を掃うと、胸に拳を当ててカッコつけながら自己紹介を始めた。

「俺はヒトカゲのお兄ちゃんみたいな存在のポケモン、バクフーンのサイクスだぜ！」

ちよつと傲慢な顔をしてサイクスはそう言ったが、重大なミスを犯していた。普段は名乗ることのない本名“サイクス”までうっかり言ってしまったのだ。

「…………げっ！？ 言っちゃった!？」

慌てて言い訳しようとしたが、その時にはもう遅かった。サイクスは恐る恐るルカリオとアーマルドの顔を見ると、2人は口を開いたまま固まっていた。

しばらく沈黙が辺りを支配した。直にそれはルカリオによって破られたが、その口から語られたのは、ヒトカゲも知らない事実であった。

「サイクスって……見つけたって情報だけで数千万ポケ払ってくれるほどの懸賞金が掛けられてる、あのサイクス!？」

それを聞くと、サイクスは顔を逸らしてしまった。ばつの悪そうな顔をし、小さく舌打ちする。ヒトカゲはこれに戸惑い、どういふことをルカリオに尋ねた。

「ね、ねえ、懸賞金って何？」

「詳しくは知らねえけど、探検家の間ではかなり有名だぜ。サイクスって名前のポケモン見つけたら大金だつてな」

それに続けてアーマルドも、自分が知っている“サイクス”の情報を話し始める。

「……前にさ、『サイクス』って名前のポケモン知らないかって、訊かれたことあつたよ」

2人の話が耳に入っているのかいないのか、サイクスは黙つたまま動こうとしない。額からは汗が滲み出て、それが集まつて流れ落ちる。

明らかに様子が変わる。ヒトカゲが心配になつてサイクスの手を引っ張つて呼びかけるが、本人は反応すらしない。

その時だった。街の方向からポケモンの集団がこちらに向かつてきていた。その中の1人がこちらを指差しながら、大声を張り上げる。

「おい、いたぞ! あいつがサイクスだ!」

その声に気づいて後ろを振り向くと、遠くにポケモン達が5人、6人……それ以上いた。それを見るや否や、サイクスはさらに慌て

出した。

「頼む、俺と一緒に逃げてくれ！」

『え、逃げるって!?!』

「後でちゃんと説明すつから！ 猛ダツシユで行くぞ！」

刹那、サイクスはヒトカゲを背中に乗っけて走り出した。訳もわからぬままルカリオとアーマルドも駆け足でサイクスの後を追うようについていった。

「あつ、逃げるぞ！ あいつらを追え〜！」

集団のリーダー格らしきポケモンが残りのポケモンに指示を出す。威勢のいい掛け声と共に、全員がサイクス達を追い掛け回し始めた。

約10分後、全力疾走で何とか次の街『アイスト』に到着したサイクス達。路地裏に潜んでどうにかサイクスを追いかける集団を巻くことができ、ほつと胸を撫で下ろす。

「ねえバクフーン兄ちゃん、あいつら誰なの？」

心から心配そうにしているヒトカゲが思い切って尋ねてみた。それに対してやはりたじろぐサイクス。目を泳がせていると、ルカリオと目が合ってしまった、さらに驚く。

「何を隠してんだよ？ 俺らに言えねえほどまずいことしちゃったのか？」

「あ、いやそれは……言えねえ！ 絶対言わねえ！」



サイクスは質問に答えるのを頑なに拒否する。壁側に追いやられても一切口を割ろうとしない。明らかにいつものサイクスでないヒトカゲは感じ、余計心配になる。

「お願い、知ってること話してよ……」

少々涙で潤んだ目をしながらヒトカゲが言う。元々優しい性格のサイクスがこれを見て何も言えないはずがない。徐々に彼の気持ちが揺れ動く。

「……ふう、わかったよ。全部話すよ」

ようやく決心したのか、脱力気味にサイクスが言った。まるで真相を暴かれた殺人犯のように、その場にうなだれるように座り込む。

「その代わりに、絶対誰にも言つなよ。表沙汰にたくねえことだからよ」

そう言つと、静かに、そして聞こえるか聞こえないかくらいの小さい声で、サイクスは事の真相をヒトカゲ達に話し始めた。

第27話 よく食べ、よく寝る（後書き）

（小ネタ小説）

・くしゃみ

大昔の話。とある町に住んでいた多くの民は困っていた。日照りが続いて作物は台無し、疫病が流行り次々と命を落とす者もいる。そんな状況に苦しんでいた。

ある時、深き海溝より海の神ことルギアが現れ、多くの民を飢餓や疫病から救ったという。

それからその町では、年に1度、ルギアを崇め、称えるために儀式を行うことにし、ルギアもその儀式には姿を現すようになったという。

この年も、民は儀式を行い、ルギアも顔を出した。2つのたいまつ、そして麦で作られた飾りが大きな台座に飾り付けられていた。

だがそれがいけなかったのか、不意に麦の穂が口近くについてしまったルギアは、おもわずくしゃみをする。

「……くしゅん！」

刹那、次々と自分の周りにあるあらゆる物が吹き飛ばされていく。ルギアはその翼で嵐を起こすことができるポケモン。くしゃみをした際にもそれは同じである。

一瞬にして自分を崇め称えていた民をも巻き込み、町を破壊するはめになってしまった。

「救せ、民よ。これも定めなのだ」

ルギアはこの町の民から再び信頼を得るまで、数百年かかったそうなの。

第28話 逃亡生活？（前書き）

あっ……（汗）

ルカリオ

「なした？」

実は前回で後書きの小ネタ小説、最終回だったのを言い忘れてました（汗）

ヒトカゲ

「あーあ。これからはどうするの？」

アーマルド

「また何かするの？」

しばらくはふつーの後書きに戻ります。

## 第28話 逃亡生活？

数年前、サイクスが20歳を迎えた時まで話は遡る。彼は飛び級制度を使って早々とアイランド1の大学を首席で卒業していた。それから数日間は口ホ島で悠々自適な生活を送っていたのだ。

ある日、彼の元にペリッパから手紙が届いた。手紙と言っても、差出人不明の茶色の封筒の中に紙切れが1枚入っていただけだ。その紙にはこう書かれていた。

『さっさと帰って来い』

それを見たサイクスは面白くなさそうな顔つきになり、その手紙を片手でくしゃくしゃにした。後ろに封筒ごと放り投げると、家に戻ってしぶしぶ旅の準備を始める。

カバンには旅に必要な物 何人分かもわからないくらいの量のきのみと、緊急時のためのブラックカード、それを携えて家を後にした。

数日かけて辿り着いたのは、彼の故郷である「アイスト」。その街中には、おそらく100m以上ある高い建物が聳え立っている。その建物こそ、彼の家であり、彼の父親・バルの経営する会社である。

バクフーンのバルは若い頃に会社を設立して以来、わずか数年でポケラス大陸ではこの会社しかないという程の影響力を持った会社を作り上げた。今や世界に活動範囲を広げている。

そのバルの息子がサイクスなのだ。天才児として生まれたサイク

スの能力を開花させてやりたいという思いから、バルは徹底的にサイクスの興味を持つことをやらせた。それが結果的には勉強へと繋がっていったのだ。

いくつも支部を作ったため、バルは数年毎に移動しては各支部の経営を指示していく。その間にサイクスも一緒に引越し、各地の学校に通っていた。

そしてサイクスが16歳の時、「1人暮らしできるだろう」と判断したバルは、大学卒業まで口本島に住むようサイクスに告げ、別行動を取った。これに対してサイクスは何も言わず、ただ従うだけであった。そのまま月日は流れ、現在に至る。

「ここか……でっけーな」

初めて見る自分の父親の会社に開いた口が塞がらないサイクス。空を見上げてようやく最上階が見えるほど高く、サイクスは見上げすぎて後ろにひっくり返ってしまった。

「親父、『さつさと帰って来い』とか……おめーが俺を置いてったんだろーがよ」

手紙の差出人はバルだったようだ。それを思い出すと苛立ち、口調が荒くなる。サイクスは重い腰をようやく上げ、建物へと入っていった。

最上階、そこは決まって社長室になっているものだ。サイクスはその部屋に足を踏み入れると、それを察知したかのように奥の方から1人、こちらに向かって近づいてきた。

「……やっとな来たか」

「これでも最短で着たんだぜ。やっとなか言うなよ。んで、何だよ、親父」

サイクスの目の前に現れたのは、少しばかり老けたバルだ。胸には会社のシンボルマークがついたバッジをつけている。腕組みしながらサイクスのことを見ているが、その顔はあからさまに怒っていた。

「何だよ？ ……ちょっと見ない間にバカになったのか？ お前を呼んだ理由など決まってるだろう」

「後を継げ、だろ？」

わかっていたかのような口ぶりで返すサイクス。大きく溜息をつくと、目の前にいる自分の父親に向かってはつきりした口調でこう言い切った。

「だから、俺は継ぐ気はねえって。親に決められた生き方なんかまっぴらごめんだぜ」

実は、これより以前からサイクスはこの会社の後を継ぐように言われ続けてきたのだ。だが本人にその意思はなく、自由な生活口ホ島という長閑な場所のこがで暮らしをしていきたいという夢があった。

「ほう……もう一度聞く。本当に継ぐ気がないんだな？」

「あつたりめーだ。べ〜！」

怒気のコもった声で聞き返したバルに対し、サイクスは子供のように舌を出して反抗する。その態度に呆れると同時に憤りを感じた

バルは、背中から炎を出した。

「お前がそのつもりならそれでいい。だが私はお前をどんな手を使ってでも後を継がせるからな」

刹那、サイクスの両脇を警備のコイル達がしっかりと掴んだ。そのせいで身動きが一切とれなくなってしまい、サイクスはその場でじたばたともがく。

「ちよつ、何だよこれ！？ 放せっつーの！」

「今言つたはずだ。どんな手を使ってでもって。だからお前には悪いが……」

そう言いながらバルはサイクスに近づく。攻撃でもくらわせるつもりなのだろうか、目が本気だ。本能的にやばいと感じたのか、サイクスは慌てて構える。

「“ふんか”！」

“ふんか”をくりだし、両脇にいたコイルを怯ませると、非常用階段を使って一目散に逃げ出した。だがバルはそれ以上追おうとはせず、ただ黙ってその場に立ち竦んでいた。

「ったく、いつから金の亡者になっちまったんだよ……」

何とか建物から脱出したサイクスは、木陰でそう呟く。バルはサイクスが小さい頃に見た父親ではなくなっていたようだ。精神的に参ってしまったのか、そのまま疲れ果て眠ってしまった。



翌朝、何やら耳にざわめきが聞こえてきたせいで目を覚ました。うつすら目を開けると、そこには初対面のポケモン達は何人もいた。

「お前、名前は？」

不意に名前を尋ねられたサイクスは、寝ぼけ半分で答える。

「サイクスだけど？」

それをはっきり聞いたポケモン達は、一斉にサイクスを取り囲む。一瞬にして眠気が吹き飛び、サイクスはそのポケモン達同様、構えた。

「な、何だよ？」

「俺達はお前を見つけて賞金をもらう。大人しくついて来い」

「は？ 賞金？ 何それ？」

状況がよく飲み込めていないサイクスに、その集団のうちの1人が説明する。

「俺らは探検家だ。今朝、探検家のお尋ね者のピラに貼ってあった。

“バクフーンのサイクス、見つけた方は2000万ポケ” ってな」

「に、2000万！？ し、しかも俺！？」

当然戸惑いを隠せずにいたが、冷静になって考えてみると難しいことではなかった。こんな大金をつぎ込むのはただ1人 親父しかいねえ、と。それがわかると、サイクスは体勢を低くした。

「……逃げる！」

「待て！ お前ら、絶対逃がすなよ！」

「……んで、親父から逃げ切るために数年間旅してきて、2年前に口水島に戻って気ままな生活をしてたってわけさ」

一通りの説明が終わると、大きく深呼吸して疲れた表情を浮かべるサイクス。彼の過去を知った3人は何も言えずに黙って下を向いていた。

「だから俺は追っかけられてるってことさ。俺が犯罪したわけじゃねーからな」

そんな3人の表情を知ってか知らずか、サイクスはいつも通りに明るく話す。元からこういう性格なのか、それとも今だけ辛いのを隠すためにしているのか、どちらともとれる表情だ。

「じゃあ、今になってこの街に来た理由って……」

「おっ、いい質問だなヒトカゲ君。俺が今更この街に戻って来た理由、それはこれさ」

ヒトカゲの質問に教授気取りの口調でサイクスが答える。自分のカバンの中からこそこそと何かを探し、取り出したのは1枚の手紙だった。

「今からちよつと前に、俺ん家に届いたんだ」

その手紙には、『用がある。来てくれ バル』と書かれていた。

ルカリオとアーマルドはそうかと納得していたが、サイクスはこの手紙に引っかけかりを覚えたようだ。

「さつきみたく俺を捕まえようとしている奴がまだいるのに、何で俺を捕まえたがつてる張本人が、俺がいるかもわかんねー自宅にこんな手紙よこすんだ？」

『あつ、確かに……』

言われてみればそうだと3人は納得する。数年がかりで搜索している者が自宅にいるなんて考えにくい（実際には住んでいた）が、堂々と名前つきで手紙が送られてきた。怪しいとしか言いようがない。

「たぶん、親父じゃない何者が送った……ってことか？」

「そのとーりアーマルド君！ さて、後答えてないのは犬君だけだな？」

「い、犬だと！？ 犬って言うな！」

犬と呼ばれたルカリオは怒り出す。それがツボに入ったのか、アーマルドが腹を抱えて笑っている。もちろんそれを見逃すわけもなく、ルカリオは殴りつけた。

「犬じゃ嫌だったかな、犬君？」

「まだ言うか！！」

懲りずにサイクスはルカリオをからかう。ルカリオが怒っているのを無視するかのようには、サイクスは質問をした。

「じゃあ最後の質問だ。俺がここにいるってことは、これからどうするつもりだと思っ？」

「えっ……うん、その親父んとこ乗り込んで、真相を解明する？」  
「Marvelous！ ルカリオ、やればできるじゃねえか！」

まるでできない子のような言い方をされたルカリオはキレそうになったが、誉められていい気分にならない者はいない。手を頭にあてて嬉しがった。

「んじゃ、乗り込むぜ！」

サイクスの掛け声と共に、3人は真相を確かめるため、サイクスの実家である会社の建物へと向かう……はずだった。

突然、サイクスが足を止めた。そのせいでヒトカゲから順に目の前を行く者の背中に顔面から激突していった。何かを思い出したかのように、サイクスはみんなに言う。

「……やっぱさ、何か食ってからにしようぜ」

結局、最初にレストランに向かうはめになった。

第28話 逃亡生活？（後書き）

サイクス

「俺の親父って、やな奴だな（汗）」

今までラルフとライナスみたいな優しい親しか出したことなかったから、酷くしました（笑）

サイクス

「まあいいけどさ（汗）それより、100,000文字越えたな」

ようやく……でした。だけどSEは前作以上になる予定だから、どこまで行くかな？

サイクス

「まずは300,000文字だな。だよな、犬君？」

ルカリオ

「だから犬って言うんじゃないよ！（怒）」

どこからどう見たって犬じゃないか、君（笑）

サイクス

「気にしたら負けさ（笑）」

ルカリオ

「いじめだろお前ら（怒）」

第29話 食って戦え(前書き)

ヒトカゲ

「ねえねえ作者さん」

ん、どした？

ヒトカゲ

「僕とバクフーン兄ちゃん、食べる量が多いのはどっちかな？」

そりゃーサイクスでしょうよ。でも体の大きさから考えるとヒトカゲの方が食べてる……？

サイクス

「何っ！？ それはまずい！ よし作者、特訓するから飯をくれ！」

どんな理由だ？(汗)

## 第29話 食って戦え

「おーなかなかいけるなこの料理」

レストランに入った4人はそれぞれ好きな料理を注文するかと思いきや、サイクスは「このページの料理全部下さい」とメニューを見せながら店員に言った。そのおかげで、テーブルを4つつなげてようやく置くことができるほどの料理が一度にやって来た。

「ほら、お前らも食っていいんだぞ。俺の奢りだし」

『……奢り!?!』

これだけの料理をタダ食いさせてくれるというのかと思うと、ルカリオもアーマルドもおもわずほろりと涙を溢す。それを拭くと、遠慮なく目の前の料理にかぶりつく。

「バクフーン兄ちゃん、そんなに大金持ってたっけ？」

ふとヒトカゲがサイクスの懐の心配をした。さすがに注文した数が数であるため、ちよつとやそつとの金額ではないことは確かだ。なんだ、そんなことかと鼻で笑いながら、サイクスはカバンからあるものを取り出した。

「ほれ見てみ！俺のブラックカード！」

『……お〜!!』

サイクスの手には、かつてドナイトスが持っていたものと同じブラックカードが握られていた。これには3人も拍手喝采だ。そうと分かれば本気で遠慮することなく、次々と運ばれてくる料理を平ら

げることができる。4人はそのスピードを加速させていった。

「『腹が減っては戦ができぬ』って昔から言うだろ？ 名言だよな  
これ」

「うんうん、お腹空いてたら絶対1歩も動けないもん」

きのみタワーを頂上から崩して食べながらヒトカゲとサイクスが会話する。一方のルカリオとアーマルドは一切喋らずに黙々と食べ続けている。

ここで食っておかなければ今後どうなるかわからない、餓死なんかしてたまるもんかと心の中で叫んでいるかのように、2人は空になった皿を積み上げていく。

「おつ、お前ら大食いの練習のつもりか？ おーしなら俺だつて〜  
！」

闘争心が湧き出てきたサイクスは、大食い大会に出たつもりでどんどんと食べ物を胃の中へと押しやっっていく。しかし今サイクスが食べた料理は激辛。当然だが数秒後には一気に額から汗が噴出し、顔を真っ赤に染める。

「……………かれえ〜！！」

おもわず口から“かえんほうしゃ”を出してしまったサイクス。そのせいで店の窓とテーブル2台を破壊してしまい、後から店員に叱責されたのは言うまでもない。

「支払いはこれで。修理代もこれでいいですか？」



「よ、よろしいですよ」

目をヒクつかせながらも店員は営業スマイルで対応する。さすがはブラックカード、驚いているなとサイクスは思っているが、それは全くもって違う。

「は、おいしかったね、ルカリオ、アーマルド」

『……そ、そうだな……』

満面の笑みを浮かべて話しかけるヒトカゲの隣では、今にもリバーズ寸前のルカリオとアーマルドがいた。顔が青ざめ、小刻みに震えている。

（ここで出してしまっただけであんなに食った意味がない。意地でも吐くものか！）

意地と執念だけで吐き気を押さえ込む2人。こう見ると2人は似た物同士かもしれないが、食事以外に関しては全くと言っていいほど似ていない。

「あ、そうだ、あの入口に入ったらすぐエレベーターで、屋上直通だからな」

支払いを済ませたサイクスが父親の会社を指差しながら言った。その言葉にさらに顔が深い青色に染まっていく2人。絶望という言葉が今の彼らの状況にピッタリだ。

そんな事を一切気にせず、ヒトカゲとサイクスは元気に歩き出す。その後ろをルカリオとアーマルドは必死についていく。傍から見れば瀕死状態である。

「わールカリオ、アーマルド見て！ 家があんなちっちゃく見えるよー！」

エレベーターの窓から街を見下ろしてはしゃぐヒトカゲ。本来なら付き合っただけなのに、今の2人にそんな余裕はなく、座り込んで目を閉じ、何も考えないようにしている。

「あつ、もう着いちまったな」

突如、ガクンという音と共にエレベーターは止まった。屋上に着いたと確信した2人は恐る恐る目を開ける。そして深呼吸を数回すると、気分の悪さは収まっていた。

「よーしもう大丈夫だ！ なあアーマルド」

「うん。俺も吐き気治まった」

「じゃあ行くぜー！」

ルカリオとアーマルドが元気になったのを確認すると、サイクスを先頭に4人は最上階の部屋 社長室へと入っていった。

「出て来いよ親父、息子が帰ってきたぜ」

挑発する言葉を放ちながらサイクスは奥へと進む。だが返事はあるか、誰かがいる気配すら感じられない。そのまま進んでいくと、社長の机とイスが目に入ってきた。

「ん、本当にいないのか……？」

辺りを見回しても、バルはどこにも見当たらない。4人が散り散りになって捜していると、机上に1枚の紙切れが置かれているのをヒトカゲが見つけた。

それを背伸びしてようやく掴み取ると、早速その内容を読んでみることにした。そこに書かれていたのは、これから先に起こる事件の始まりを示す内容であった。

「……………父親を返してほしくば、街外れの森に來い……………だつて！？」

ヒトカゲの声に全員が振り向き、作業を中断して駆け寄る。みんなもその手紙に目を通すと、目を見開いて驚いていた。その中でもサイクスの受けた衝撃は大きい。

「お、親父が、誘拐……………された……………？」

動揺を隠せずにいるサイクス。どんな仕打ちをされようが、バルは世界でただ1人存在する自分の父親。そう簡単に見捨てることなどできるはずがない。犯人はその心理を突いてわざとこうしたのだろう。

「行こう、バクフーン兄ちゃん」

「……………そうだな。誰が連れ去つたかは知らねえが、行くしかないよな！」

ヒトカゲの言葉に我が帰つたかのように、サイクスは自分が行かなければならないと思ひ直し、気持ちを改める。いつもの陽気さとは違い、真剣な顔つきへと変わった。

「お前らも手伝つてくれるか？」

ルカリオとアーマルドに手助けしてほしいと頼み込むサイクス。もちろん2人の答えはYesだ。黙って首を縦に振り、彼らの真剣な顔つきになる。

互いの意思を確認すると、4人は社長室を駆け出していった。

アイスト郊外にある森は昼間でも薄暗く、夜になると一層闇が増す場所だ。“フラッシュ”が使えない4人は松明を片手に奥へと進んでいく。

「おい、親父ー、どこだよー！」

「バルサーン、返事してくださいー！」

森に入ってからずっと声を掛け続けるサイクス達。かれこれ10分以上になるが、相手側から返事が来ることは1回もなかった。焦りが募っていくばかりだ。

だがその時、ルカリオが何かを感じたようだ。そこで集中して波導をキャッチしようと試みてみると、森のさらに奥の方から何者かの波導を感じ取ることができた。

「……3人、この奥にいるみたいだぜ」

ルカリオの情報を頼りに、4人はさらに足を急がせた。刹那、自分達の前方から赤い光線がこちらに向かってくるのが見え、慌ててその場に伏せる。

その光線は自分達の真上を通過していったのは、どうやら“はかいこうせん”のようだ。4人がゆっくりと体を起こした時、どこからか声が聞こえてきた。

「ほう、俺の“はかいこうせん”をかわすとは、やるじゃねえか」

サイクス以外は聞き覚えのある声だった。記憶を辿って誰だったかを思い出すや否や、一瞬にして緊張が走る。直に草を踏みしめる音が辺りに響き渡った。

「みんな、どうした？」

ただ1人、状況がよく飲み込めていないサイクスが首をかしげる。ヒトカゲが説明してあげようとした瞬間、そいつらは現れた。サイクスにとって大切な者を連れて。

「……親父！」

4人が見た光景。険しい表情をしているバクフーン、その彼の首に自身のツメを突きつけているガバイト、その横で不敵な笑みを浮かべている、傷だらけのポーランドだった。そう、ヒトカゲ達がロルドフログで1度対峙した奴らだ。

「久しぶりだな、忘れたとは言わせねえぜ」

「いや、俺は初めましてだ」

ここへ来てポケをかますサイクス。ヒトカゲ達はコケそうになるが、これも1つの作戦。敵を油断させるためにたまにつかう手法だとか。

「そ、そうだったな。まあ見てわかるように、お前の親父さんを誘拐した犯人さ」

シリアスな場面を少々壊されたガバイトは呆れながらも、すぐに

状況を立て直す。それから4人はガバイト達に質問する。

「何故俺の親父を誘拐した？」

「仲間のグラエナはどこに行った？」

「どうしてヒトカゲが詠唱できることを知っていた？」

「お前らの真の目的は何なんだ？」

「いっぺんに質問すんじゃないねえ！！ 何言ってるかわかんねーだろ！！！」

4人から同時に違う質問をされ、ガバイトとポーマンダはキレた。自分達の作り出したシリアスな場面を壊されるのが1番腹に立つらしい。

「ならもう一度訊く。何故俺の親父を誘拐した？」

さすがに父親の置かれている立場を可哀相に思ったのだろう、おふざけを止めにして、サイクスが真剣に聞いた。その質問にポーマンダが応じる。

「お前が持っているブラックカード、それが欲しいからだ」

「ブラックカードを？」

金目当てなら何故親父を誘拐する必要があるのか、俺でなきゃいけない理由はないだろうとサイクスは考えていたが、彼らの目的は金目的ではなかった。

「そうだ。お前が親父さんから託されたブラックカード、それはあの扉の鍵になっているのさ」

そう言われるが何のことだかわからず、頭に疑問符を浮かべる。

その様子を悟り、ガバイトが付け加えるように質問に答える。

「その扉の中には、『赤の破片』が眠っているのさ」

『赤の破片』という言葉から、以前彼らがロルドフログの美術館から盗もつとしていた赤色の石の破片のことだろうと3人は確信した。

またもや、サイクスただ1人が違うリアクションをとる。だが先程と違い、かなり驚いている表情をしている。『赤の破片』について何か知っているようだ。

「お、お前ら、まさか……」

「ああ、そのまさかだ」

ガバイトとポーマンダが不敵な笑みを浮かべながら、彼らの真の目的を4人に告げた。

「俺らの目的、それは……大地の神・グラードンを操る事だ！」

第29話 食って戦え（後書き）

ヒトカゲ

「あーなんか酷いことになりそう（汗）」

ルカリオ

「グライドンって……（汗）」

モンコレのグライドン見ながら思いついた話ですからな（笑）  
でも今すぐは出てこないかも。

アーマルド

「じゃあしばらくは手抜きで大丈夫？」

大丈夫……て、手抜きって何さ、手抜きって（汗）



### 第30話 再戦（前書き）

バンちゃん

「何故に俺がここに呼ばれた？」

たまにはいいじゃないか。生存報告だよ、生存報告（笑）

バンちゃん

「何か気に食わねえな（怒）俺が死んだってか？」

まだこちらでは登場してないからね。死んだも同然でしょう（笑）

バンちゃん

「やーめーろーその扱い（怒）」

さて今回の話は……けっこう重要な事が書かれていたりしますかも？

### 第30話 再戦

「……グラードンを……操る!？」

4人が耳にした言葉はあまりに衝撃的なものだった。ガバイト達の真の目的、それは大地の神・グラードンを操ることであったのだ。その表情を待っていたかのように、ガバイト達も微笑む。

「そうさ。グラードンさえ操ってしまえば、大地は原形を留めることなく壊れ、誰も住めなくなる。そう……“滅び”だ」

ようやく掴んだ敵の目的。だが4人には気になる事がある。こんな大それたことをするのに、目の前にいる敵は2人。どう考えても後ろに誰かがついていているような気がしてならなかった。

「おい、ひよっとしてお前らの後ろに誰がいるんじゃないか？ だからヒトカゲが詠唱できるって知ってるんだろ？」

思い切ってルカリオが自分の推測を口に出す。しかしその質問にとぼけた様子の2人。澄ました顔をして「どうだか」と言いながら話を逸らした。

「どうしても知りたきゃ、俺らに勝ってみることだな！」

刹那、ボーマンダがヒトカゲに向かってきた。その巨体でヒトカゲをなぎ倒そうとするかのように勢いよく頭から突っ込んでいく。

「“ずつき”！」

「“ころがる”！」

ヒトカゲが“ずつき”される直前に、サイクスが“ころがる”でボーマンダに直撃した。“ずつき”の軌道がずれ、ヒトカゲは難を逃れることができた。

「あ、ありがとうバクフーン兄ちゃん！」

「なんてことねーよ」

ここは何としてでも止めなければならないと、2人はアイコンタクトで互いに確認する。ボーマンダが戻ってくる間に、ヒトカゲは久々の詠唱 カオス・ワイス 混沌語を唱える。

【紅蓮の炎を操る神よ 我ここに誓う 我と汝の……】

「させるかあ！」

突如、横からガバイトがヒトカゲに“ドラゴンクロー”を振りかざして詠唱を止めようとするが、それはルカリオの“ボーンラッシュ”で防がれてしまった。

「ふっ、俺らがいること忘れてもらっちゃあ困るぜ」

「ヒトカゲ、続ける！」

力比べ状態のルカリオとガバイト。そしてヒトカゲを庇うように自身が壁になるアーマルド。心の中でありがとうと言いながら、ヒトカゲは詠唱続けた。

【我と汝の力ここに集結し時 我の前に現る悪を持つものに 肅正の咆哮を与えん】

体の周りが渦巻き、尻尾の炎が勢いよく燃え盛る。普段の2倍以

上の力を手に入れたヒトカゲは、サイクスと一緒にポーマンダを倒すことにした。

「りゅうのいぶき」！

軌道修正したポーマンダがこちらに戻って来た。“りゅうのいぶき”をくりだし、ヒトカゲとサイクス2人を同時に攻撃する。しかし何を思ったか、サイクスはヒトカゲを脇腹に抱えだした。

「あなをほる」！

次の瞬間、サイクスはヒトカゲを抱えたまま“あなをほる”で地中へと潜って攻撃を回避した。息吹を吐き続けているポーマンダにはそれが見えず、ずっとヒトカゲ達に技が当たっているものだと思い込み、余裕の表情だ。

だが、数秒後にポーマンダの真下から勢いよくサイクスが姿を現し、アッパーを決める。さらにその勢いに任せてヒトカゲを宙高く放り投げた。

「かえんほうしゃ」！

空中に投げ出されたヒトカゲは、狙いを定めて“かえんほうしゃ”を放った。ポーマンダもそれに気づき慌てて回避しようとするが、完全には間に合わず、翼の一部に炎が当たってしまう。

その時、サイクスは不思議な光景を目にした。ポーマンダが負傷した翼の一部が、若干変色していたのだ。これにはさすがのサイクスも首を傾げた。

（何だ、あれ？ 普通、火傷しただけじゃあんな色しねえよな。ふむ……）

その理由を必死に考えながら、ヒトカゲに加勢する。ボーマンダも鬱陶しくなったのか、“はかいこうせん”で2人いっぺんに始末しようと思ってる。2人に向けて大きく口を開いてエネルギーを溜めていた。

「散れ！ “はかいこうせん”！」

「やくだね、“でんこうせっか”！」

ヒトカゲを抱えたまま“でんこうせっか”で“はかいこうせん”を回避するサイクス。その間にも考え事をしてしていると、石に躓いてバランスを崩し、思い切りコケてしまった。しかしそのおかげで、サイクスはボーマンダの謎を解くことができた。

「おいボーマンダ！」

「……………何だ？」

サイクスの声で互いに一旦攻撃をやめ、睨み合いながら間合いを取る。その場にそっとヒトカゲを下ろすと、サイクスはビシッとボーマンダを指差してこう言った。

「お前……………ボーマンダじゃないな？」

ボーマンダに向かって、サイクスは「ボーマンダじゃない」と言い出した。何を意味しているのかわからないヒトカゲは頭にはてなマークを浮かべるが、当のボーマンダはどういうわけか目つきを変えらる。

「ボーマンダじゃない？ はっ、貴様は何をバカなことを！」  
「じゃあ、お前が怪我した右の翼、見てみるよ」

言われるがままに自身の翼を見るボーマンダだったが、一気に顔が青ざめるのがヒトカゲにも見て取れた。ヒトカゲもボーマンダの右の翼を見てみると、部分的にはあるが、明らかに変色していた。

「何で紫色になってるのかな？」

負傷した翼は紫色に変色していたのだ。それにどういうわけか、皮膚にしては弾力があるように見える。冷や汗を流すボーマンダをサイクスはさらに追求する。

「そんな色に変色するポケモンなんか普通いねえよな……ある奴を除いてさ」

名探偵が犯人を暴く時のように、サイクスはうろたえているボーマンダの正体を明かした。

「そつだよな？ ボーマンダ……いや、メタモンちゃん？」

次の瞬間、ボーマンダの姿が一気に変化していく。スライムの如く形を変え、体がだんだん縮む。そしてサイクス達が目にしたのは、彼の予想通り、メタモンであった。

「そつか、わかった！」

メタモンの姿を見たヒトカゲが、あの謎を解明することができたようだ。

以前彼らの対峙した際にいたグラエナ、あれはボーマンダに変身

する前にグラエナに変身したメタモンが“みがわり”を使った、彼ならではの作戦であったのだ。

「これですっきりしたよ。さて、正体がバレちゃったけど、どうする？」

「ど、どどどどうしよう!？」

威勢のよかったボーマンダの時と違い、一気に弱々しくなったメタモン。正体がバレたことに衝撃を受けすぎたのか、慌ててルカリオ達と戦っていたガバイトの元へと戻っていく。

「ガバイト、どうしよう!」

メタモンはガバイトにせがむように近寄るが、何故か沈黙するガバイト。その場で微動だにせず、ただ佇んでいる。彼が沈黙を破ったのは、それからすぐのことであった。

「……お前がいると足手まといだ」

刹那、ガバイトは自身の腕にある鱗のような器官でメタモンを横一文字に掻ききった。仲間に手をかける行為を目の当たりにしたヒトカゲ達は驚愕する。

悲痛の声を上げる間もなく、メタモンは地に倒れこむ。そして、メタモンの体から何やら黒い粒子のようなものが出始め、瞬く間にメタモンの姿がその場からなくなってしまった。

「な、何だこれは……?」

初めて見る何とも奇怪な現象に言葉を詰まらす4人。今日の前にいるのは、自分達に向かって平然と笑みを浮かべているガバイトだ

けだ。ヒトカゲがこれについて尋ねた。

「な、何でメタモンが!？」

「これが俺らのやり方だ。使えない者は排除し、その魂を冥界へ捧げるのみ。俺らが手をかける奴らはみんなあなる」

その言葉に4人の怒りが込み上げる。彼らの表情を見て不思議そうなる顔をするガバイトを見ると尚更怒りが心から湧き上がってくる。

「ふざけんな! 命を何だと思つてやがる!」

珍しくサイクスが怒号を上げる。それほどガバイトの行いが非道であるということだ。

「はん。俺らはそんなもの、何とも思わねんだよ!」

ガバイトは大声でそう言うと、胸を張り、体中のエネルギーを放出するかの如く雄叫びをする。迎え撃とうと4人はその場で身構えた。

「さっさとカードを渡せえ! “がんせきふうじ”!」

“がんせきふうじ”がくりだされ、ヒトカゲ達の足下の地面が隆起し、足首をがっちりと掴んだ。抜こうとしても抜けず、4人は身動きができない状況になってしまう。

「“だいもんじ”!」

そこにガバイトは“だいもんじ”を放つ。大きな炎は忽ち<sup>たちま</sup>4人を飲み込み、ダメージを与える。ヒトカゲとサイクスは炎タイプだが、



ガバイトの炎が予想以上に強力なため、鈍い痛みをくらうこととなった。

サイクスが怯んだのを見計らうと、最速スピードでガバイトがサイクスに近づき、“ドラゴンクロー”をお見舞いする。体勢が崩れたところでサイクスが持っていたブラックカードを奪い取った。

「今回は生かशीてやるよ。ありがたく思いな」

台詞を吐き捨てると、ガバイトはその場から立ち去った。姿が見えなくなった頃にようやく4人の“がんせきふうじ”は解け、身動きが取れるようになった。

「お、追わなきや……グラードンが操られ……ぐっ!？」

かなりのダメージを負ったのか、ルカリオは立っているのも辛い状態だ。他の3人の足取りもおぼつかない。それでも追おうとするヒトカゲ達をサイクスが止める。

「大丈夫だ。一応カードにツメで傷をつけておいた。使いモンにならないはずだ」

一同安心したのか、ヒトカゲ達はその場に座り込んでしまった。しかしサイクスだけは脇腹を押さえながらも歩き出す。その先にいるのは、彼同様傷ついている父親・バルだった。

「親父、大丈夫か？」

サイクスは地面に伏せているバルの頭を抱え、そつと呼びかける。自分の息子の声を聞き、バルはそつと目を開けた。視線をサイクスに向ける。

「……まあ、何とかな……」

弱々しい声ではあるが、バルは返事をした。サイクスはほっと胸を撫で下ろし、「病院に行こう」とみんなに言う。ヒトカゲ達は頷き、互いに支えあいながら、街の病院へと足を運んだ。

### 第30話 再戦（後書き）

↳ Linoの専門用語講座

・犬

? 人間の世界にもポケモンの世界にも存在する動物の一種。忠誠心が強く、ペットや猟に使われることがある。

? 犬のような容姿のポケモンを指す。この小説では特に、ウインディ、エンテイ、ルカリオの事を犬と呼ぶことがある。

ウインディ

「ちょ、ちょっとお待ちくださいな（汗）」

エンテイ

「……私を犬扱いするというのは、お前は？」

ルカリオ

「最近犬、犬ってうっせえぞ（怒）」

だって、どっからどう見たって犬じゃないですか（笑）

デルビル

「あの、俺は仲間はずれというあれ……?（泣）」

……「めん、忘れてた(汗)」

### 第31話 親の心（前書き）

父親って、こうあってほしいという自分の願望を含んだ話になってしまいました。

サイクス

「そんじゃ今回は俺の親父の話？」

そんな感じかな。

サイクス

「へ〜。んじゃ顔出したからそろそろお出かけに……」

おっと、今日は外出禁止。君最近深夜まで友達と遊びすぎてるようだね？

サイクス

「うっ（汗）」

### 第31話 親の心

おぼつかない足取りでみんなは病院へと向かった。幸い命に別状はないが、バルとルカリオはかなり体力を奪われたらしく、しばらくは絶対安静と告げられる。

他の3人は2人から比べて元気がある方だ。とはいえ、今は真夜中。手当てが終わるとすぐに寝入ってしまった。サイクスのいびきが病室内に響き渡る。

次の日の朝、一番に目覚めたのはアーマルド。まだ少し体が痛いのか、起き上がるのが辛そうだ。その足で真つ先に向かったのは、ルカリオが寝ているベッドだ。

(いくらルカリオでも、あの炎じゃ相当辛かっただろうな……) はがねタイプを持つルカリオにとって、炎は厄介なもの。しかもガバイトは威力の高い“だいもんじ”を放った。それで体が悲鳴上げないはずがないとアーマルドは心配する。

ルカリオの顔を覗き込みもうとした時、ちょうどルカリオが目覚めます。半目の状態で見えたのは、普段より大きく見えるアーマルドの顔。それがはつきりアーマルドだとわかると、ルカリオは飛び起き、咄嗟に身を引いた。

「な、何、どうした？」

「……お前には前科があるからな」

過去にルカリオはアーマルドのドジによって痛い目に遭っている。それを思い出したおかげで身の危険を察知し、反射的にアーマルドを避けたのだ。

「それより、絶対安静じゃなかった？」

「……あのさ、先に言ってくれよ。結構痛いんですけど……」

今頃になってルカリオの体が痛み出す。そんな事をしている間にヒトカゲとサイクスも目を覚ましてしまった。しかし2人はベッドから出たくない様子で、かけ布団を取ろうとしない。

「おい、起きろよ」

『やぐだぐ、まだ出たくない』

ヒトカゲとサイクスは声を揃えて言う。しかしそういうわけにもいかないため、アーマルドは2人をベッドから出すための、とっておきの言葉を告げた。

「もうすぐ朝御飯の時間だと思つよ」

『はい、起きますっ！』

その言葉が耳に入ってから1秒もかからないうちに2人はベッドから出た。ルカリオとアーマルドは似た者同士はこの2人を呆れた目で見ていたが、だからサイクスがヒトカゲの兄的存在なのだろうと思つたようだ。

朝食後、4人は依然目を覚まさないバルの周りに集まる。ヒトカゲ達が心配そうに見つめる傍ら、サイクスだけは頼杖をつきながら考え事をしている。

「……何で親父、そんな大事なモンを俺に預けたんだろ？」

いくら考えてもそれらしき理由が思いつかないサイクス。深く息

を吐いたその時、バルが唸り声を上げた。どうやら目を覚ましたようだ。

4人が顔を覗き込むと、バルはちょうど目を開けようとしているところだった。そして半分目が開いたところでバルの目に真っ先に入ってきたのは、息子であるサイクスの顔だった。

「……サイクス……」

真っ先に自分の名前を呼ばれたサイクスは動揺するも、父親の方へさらに近づいた。今は恨みも何もない。ただただ心配するばかりだった。

「まず、お前に謝らなければな」

「謝るって……？」

バルの口から出た、謝罪を示唆する言葉。サイクスはそれに耳を傾けると、数年間思い続けてきた父親の事が全て違う方向を向いていたことがわかった。

「お尋ね者としてお前を捜し出し、カードを奪還しようとした事を、ずっと詫びたいと思っていたのだ」

みんなはその言葉に驚かされると同時に、サイクスの言っていたことが間違いだということに気づかされた瞬間だった。まだ何のことかはつきりわからないサイクスはバルに説明するよう言う。

「私は数年前、ある探検家から依頼を受け、『赤の破片』を護るための場所を造ってほしいと言われて、その施設と鍵を造った」

「そ、その探検家って……」



おもわず身を乗り出してルカリオは真剣な表情で尋ねた。その態度を不思議がるバルであったが、そこまで気にすることなく答える。バルから返ってきた答えは、彼の予想通りであった。

「名はライナス。お前と同じルカリオだ」

やっぱりと言った顔をするルカリオ。だがそれ以上は、何故そんな依頼をしてきたのかということも含めて、何も情報を得ることはできなかった。さらにバルは続ける。

「そしてブラックカードとして私が鍵を使用していれば、気づかれるはずはないと確信していた。ずっと持っているものだからな」

しかし、サイクスが間違っただけでそれを持ったままこの会社から出て行ったことに気づいたバルが、世間に内密に、かつ行方を確実に掴むために探検家達を使って手配したのだという。それでもまだ納得のいかないサイクスは、さらにバルを追求する。

「じゃあ後継ぎの騒動は何なんだよ？ どんな手を使ってでも継がせるつつつたから、俺を連れ戻そうと探検家を……」

それを聞き、バルはまるで観念したかのように、大きく息を吐いた。あまり話したくなさそうにするが、覚悟を決めたのか、ぐつと真剣な顔つきに変え、真相を話し始めた。

「私はお前に後継ぎを無理やりさせようとは思ったことはない。自分の進みたい道を歩ませるためには、親の力を頼らずにやれと私は言いたかったのだ」

その言葉から、サイクスは全てを悟った。バルは全てを知ってい

ただ サイクスが後を継がないで自分の道を歩みたいということも、そのための勉強をしていたことも。

親に頼らずやれるか、それだけが心配だったバルは、後を継がせると言い張って自分が患者に回ることで、わざと自分から引き離そうとしたのだ。後から泣きつくくらいなら最初からするな、そう訴えるために。

偶然重なってしまったこととはいえ、サイクスはこの数年間大きな勘違いをしていたのだ。親父が本当は自分の事をよく考えてくれていたんだ、それがわかると自然と目からこぼれ落ちる物があった。

「……親父……」

息子のくしゃくしゃになった顔を見つめながら、そっと微笑みながらバルは本音を語り始める。

「ここを出てった時も私は心配で仕方なかった。数年がかりでも行方が掴めなかったからな。こんな形での再会になってしまったが……嬉しいぞ、サイクス」

気がついた時には、サイクスはバルに抱きついて泣いていた。そして「ごめんなさい」と何度も言い続けた。自分は何てバカだったのだろう、親の事について何もわかっていなかったと反省するかのよう泣き続けたのだった。

この様子を見ていた3人ももらい泣きをしそうになった。特にアーマルドは羨ましそうに、ルカリオは脳内で自分とライナスに置き換えてその姿を見ていた。自分も親についてわかっている事など少なすぎると思われ、過去を振り返っている。

そんないい雰囲気をもっと簡単にぶち壊したのは、もちろんあいつだった。

「おいサイクス、お前そんなに泣き虫だったか？ …… つて、鼻水を私の体で拭うな！ あつ、鼻かむなサイクス！ やめなさいっ！」

しばらくして、気持ちが悪く落ち着いたサイクスがヒトカゲ達の紹介を始める。頭の上には2つほど、バルによってつくられた痛々しいげんこつがあった。

「こいつヒトカゲ。ロホ島にいる弟みたいな奴なんだ。んでこつちはアーマルド。ヒトカゲと一緒に旅してるんだと」

ヒトカゲとアーマルドは軽く会釈する。バルは1人1人の目を見て会釈で返す。旅の以上は話すと長くなるから後にすることにし、サイクスは残りの1人の紹介をする。

「そしてこいつが、俺が飼ってる犬君。ほら犬君、おすわりは？」

「……2回くらい半殺しにしているか？」

ここにきても犬扱いされるルカリオ。怒りのあまりこの場でサイクスに殴りかかるうとしたが、バルの咳払いを聞き、一気に大人しくなった。

「サイクス、ちゃんと説明しなさい」

「はいな。こいつルカリオ。探検家なんだとさ」

サイクスの説明を聞いてようやく、バルはルカリオがライナスの息子であると推測できたようだ。ヒトカゲ達と一緒にいることから、こう考えた。

「……父親を捜しているのか？」

まさかの発言に少し驚きながらも、ルカリオは「はい」と返事をする。すると、バルはいきなりどこかに電話を掛け始めた。「あれを持ってこい」と一言だけ言うと、電話を切ってしまった。

「あの、何を……？」

当たり前だが、その行動に疑問を持ったルカリオが尋ねた。これに対しバルの答えは、これまた驚く内容。願ってもない、嬉しいことであった。

「ライナスが忘れていったものがある。それを渡そうと思ってな」

驚いている暇もなく、看護師のラッキーが病室に入ってきて「バルさん宛です」と、小さい荷物をバルに渡す。その中から取り出したのは、手のひらサイズのメダルだった。

「これだ。息子の君に預けた方がいいだろう。持っていきなさい」

バルの手から渡されたメダルをルカリオはじつと見る。メダルに描かれていたのは、葉っぱが3枚のみ。大分古いものなのか、傷や汚れが目立つ。

（何だこれ？ 親父が持ってたもんだから、何か大事なもんだとは思うけどな……）

そう思う反面、忘れていくくらいだから大事なものでもないなと思ったルカリオは、とりあえずバルにお礼を言って、そのままカバンにしまった。

4日後、ルカリオの退院が許されたため、また旅を再開しようとしてヒトカゲ達は準備を始めていた。宿で支度をしていると、そこにサイクスがやって来た。

「あゝ、お前らに言っとかなきゃいけないなって思ってた……」  
「どうしたの、バクフーン兄ちゃん？」

ツメで頬をかきながら、申し訳なさそうな顔をするサイクス。荷物を整理する手を止め、みんなはサイクスの元へと集まった。

「ホントは一緒に行こうかと思っただけで、親父んところにもうちよつといよつかなって……」

なんだ、そんなことかと3人は笑う。まだ入院中のバルに付き添ってあげるは必要だからと言ってサイクスを安心させる。

だがサイクスが申し訳なさそうにしているのは、それとは別の理由だ。言いにくそうにしていたが、今後のためと思っただけと伝えることにした。

「俺がいねえから、ブラックカードは使えないぜ？」

『……………』

また貧乏生活に逆戻りになってしまった3人は、笑いながら涙を流していた。

### 第31話 親の心（後書き）

↳ Linoの専門用語講座

・カメ

？ 人間の世界にもポケモンの世界にも存在する動物の一種。硬い甲羅を持ち、陸や海に住んでいる。

？ カメのような容姿のポケモンを指す。この小説では特に、ゼニガメ、カメックス、ドダイトスの事をカメと呼ぶことがある。

ドダイトスの場合のみ、「陸ガメ」と呼ぶことが多い。さらに口語では彼の性格を加味し、「鈍感陸亀」と言う場面が増えてきている。

333

ゼニガメ

「いや確かに種族名に“カメ”ってついてるけどさ（汗）」

カメックス

「とりあえず、てめえ殺してやる（怒）」

だって事実は事実、受け入れるしかないことでしょうが（笑）

ドダイトス

「あの作者様、いくらなんでもこの説明はちょっと……私でも怒りますよ?」

バンちゃん

「いや、あってるからいいぜ、このまんまで」笑

ドダイトス

「おいコラ」怒

第32話 またかくれんぼ（前書き）

ヒトカゲ

「もう今年もあとわずかかあ……………」

ルカリオ

「なんだ、やり残したことでもあんのか？」

ヒトカゲ

「うん。作者さんに1回もおごってもらってないの」

何で私が自分のキャラ達に奢らねばならんだ（汗）

そんなに何か欲しいなら……………ほら、みんなコレ持ってるって！

ヒトカゲ

「わーい……………って、作者さん、この本何？」

来年分の台本。しっかり読んで本編に挑んでね（笑）

アーマルド

「さ、最悪だ……………（汗）」



### 第32話 またかくれんぼ

サイクスと別れてからというものの、ヒトカゲ達は数歩歩く度に溜息をついている。よほどサイクスと別れるのが嫌だったのか、それとも彼の持っていたブラックカードがないせいかわからないが。

「僕達つて、不幸なポケモンだと思わない？」

「ああ、俺達は不幸の塊だ。明日の飯のメドすらつかねえ、とてつもない不幸のな……」

（俺は君という、見た目からは想像もつかない短気な奴にボコられる方が不幸だけどな）

3人はそれぞれ“不幸”について思っていた。アーマルドだけは他の2人と違う意味での“不幸”であったが。そんな気持ちを表すかのように、雨が降り始めた。

濡れないようにすぐさま近くにあったお店の雨避けへと入る。雨が降ったことでますます溜息が重くなる3人。その場にどっか座り込んでしまった。

「な〜んか幸先悪い感じかも〜」

地面にツメで落書きしながら、ヒトカゲはやる気を損ねる。それに応えるように、ルカリオとアーマルドも「う〜ん」と唸る。

ホウオウとディアルガの情報収集、ルカリオを殺そうとするジユプトルの真意を掴む、そしてガバイト達の計画を阻止する。考えるだけで頭が痛くなる事ばかり抱え込み、気が滅入っていたのだ。

そんな時、ヒトカゲは背後から不意に声を掛けられた。

「君、口ホ島のヒトカゲ君？」

自分みたいに子供っぽい声がヒトカゲの耳に入ってくる。ヒトカゲは声のした方を振り向くと、そこには1匹のポケモンが宙に浮いていた。

自分と同じくらいの背丈、ほっそりとした、薄いピンク色の体。そこから生える長めの尻尾。澄んだ青色の瞳。ヒトカゲの目の前にいたのは、超がつくほどお目にかかれないポケモンだ。

「き、君だれ？」

「僕はミュウだよ。ねえ、質問に答えてよ」

“ミュウ”という単語を聞くや否や、ルカリオとアーマルドもばつとそちらを振り返る。2人の目にも、はつきりとミュウの姿が入ってきた。あまりの衝撃に口が開きっぱなしだ。

「お、おま、お前って、ま、幻のポケモンって言われる……」

「……拾った本で読んだことある。滅多に姿を見せないっていう、あのポケモン？」

3人の酷く驚いた表情を見ると、ミュウは呆れた顔をする。幻のポケモンだからという理由で特別視されるのが嫌なようで、少し冷たい態度をとる。

「だから何なのさ、僕だってみんなと同じポケモンなんだからね？」

ほっぺを膨らませてミュウはふてくされてしまった。ヒトカゲ並みに子供っぽいポケモンだとわかると、ルカリオの顔が渋くなる。

(ヒトカゲと同じくらい扱いにくいな、こいつ。はあ……)

とりあえずミュウの機嫌を直すべく、ヒトカゲが頭に手を当てながら軽く謝る。すると、案外すんなりとミュウの態度はころっと変わり、機嫌が戻った。

「ところで、僕に何か用があるの？」

当然だが、ヒトカゲはいきなり現れたミュウの事が気になっている。首を傾げながら質問したが、ミュウの返事は誰も想像のつかないものだった。

「遊ぼう」

「……は？」

目が点になる3人。突如現れた幻のポケモンがヒトカゲ達を尋ねてきた理由が遊ぼうというものだったことに、調子を狂わされる。

一瞬、場の空気が固まる。

「な、何で遊ぶの？」

「いいじゃない、遊びたい時に遊んで何が悪いの？」

アーマルドの質問にも、ただのわがままのようにしか聞こえない答えを返すミュウ。だがミュウが言うには、ただ遊ぶわけではないという。

「もし僕にかくれんぼで勝ったら、君達の知りたいことを教えてあげてもいいよ。例えば……ハウオウの事とか？」

ここでもまさかの発言に驚かされるヒトカゲ達。その他にも、デアアルガの事、ライナスの事など、知りたい情報どれか1つを教え

てくれると言う。だが何故自分達が知りたいことを知っているか  
聞いても、ミュウはそれをはぐらかした。

「かくれんぼしようよ〜！ ねえってば〜！」

ヒトカゲの手を引つ張つてミュウは遊びたいとせがむ。遊ぶこと  
で何かを損するわけでもないし、何か意図があるようには思えな  
かったので、ヒトカゲはOKを出した。

「やった〜！ じゃあ僕が鬼ね。それっ！」

次の瞬間、強く降っていた雨が一瞬にして晴れに変わった。ミュ  
ウが“にほんばれ”を使ったようだ。晴れたのを確認する間もなく  
ミュウはカウントを始めた。

「まずっ！？ 仕方ねえなあ〜、早く行こうぜ！」

「ルカリオ、カバン俺が預かつとくよ」

「あ、ああ……」

どういうわけか、アーマルドがルカリオの背負っているカバンを  
預かるという。何でだろうと思いつながら、走るのには邪魔だから  
かえってありがたいと思つたルカリオはそれ以上何も言わなかつた。

「ルカリオもアーマルドも、早く！」

『わかつてるよ』

3人はミュウから離れ、各自自分の隠れるところを探しに走り出  
した。

「……99、100！ さあて、どこかな？」

カウントし終わったミュウは上空へと飛び上がった。街全体を見渡せる位置まで上がると、そこから目を凝らし3人を捜そうとする。

「……見えないや。やっぱり普通に捜そうと」

さすがのミュウでも、建物だらけの大きな街に潜んでいるヒトカゲを見つげられるほど視力は良くない。諦めて地上まで降下し、街中を捜索することにした。

ミュウはまずターゲットをヒトカゲに決めた。ヒトカゲを捜すためにはどうしたらよいか、頭を捻って考える。しばらくすると、ある名案がミュウの頭に浮かんだらしく、顔をニンマリとさせる。

「よし、決めめた！」

その頃ヒトカゲは、雨宿りしていた位置から大分離れたところになっていた。まだ隠れる場所を探しているのか、辺りをキョロキョロと見回していた。

「どこにしようかな？ 早くしないとミュウ来ちゃうよ」

隠れる場所は沢山あるが、いまいち自分にあつたところがないらしい。そんな時、ヒトカゲの後ろから誰かが低い声で名前を呼ばれた。振り返ると、ヒトカゲにとって少し厄介な存在がそこにいた。

「何してるんだ？ こんなところで」

「…………お、お父さん…………」

何と、声の主はウインディであった。何故こんなところにいるのかヒトカゲは理解できず、とにかく混乱していた。ヒトカゲの中では、“ウインディが突然現れる”お仕置き”と直感的に思ってしまったものがあるのだ。

「ちょっとこっちに来なさい」

ヒトカゲの予想通り、ウインディが手招きをしている。ヒトカゲには悪いことをした心当たりはないのだが、とりあえず従うしかない、俯きながらとぼとぼとウインディの元へと歩き出す。

足元まで辿り着くと、急にウインディから眩しい光が発せられた。あまりの眩しさのあまり、ヒトカゲはおもわず目を覆った。数秒後にそれは止み、ヒトカゲがそつと目を開けると、可愛らしいあのポケモンがいた。

「みつつけた」

「…………ミ、ミュウ!? もしかして“へんしん”してたの!?!」

「あつたり〜」

“へんしん”でミュウはウインディに変身していたのだ。ミュウ曰く、驚かせたかったのが1番の理由らしい。ヒトカゲは本物でなかったことにほつと胸を撫で下ろす。

「それじゃ、次はルカリオを捜そう。ヒトカゲ、ルカリオの苦手なポケモンわかる?」

ミュウは次も同じ手でルカリオを捕まえようとしている。ルカリオの苦手な奴は誰かと聞かれて、ヒトカゲが思いついたのはあのポ

ケモン1匹だけだった。それをミュウに伝えると、ミュウは早速“へんしん”して姿を変え、ルカリオを捜しに行った。

「まったく、何でかくれんぼなんだよ……」

愚痴をこぼしながらルカリオは街中をふらつく。どうせ見つかりはしないと思っているせいか、どこかに隠れようともしない。

「さうで、あのヤクザに会って以来食べてないデザートでも食べに……」  
「……誰がヤクザだって？ あ？」

物凄く聞き覚えのある声がルカリオの耳に入る。予想が当たっていれば、ルカリオにとってはジュプトルよりも命を取られる可能性のある存在だ。

頼む、外れてくれと思いつくりと後ろを振り返るルカリオ。しかし神様の意地悪か、ルカリオの予想は見事的中してしまった。

「……カメックス！？ なんな何で!？」

背後にいたカメックスを見て非常に驚くと同時に涙ぐむルカリオ。だが今更謝ったところでどうにもならず、カメックスはさらに脅しをかける。

「てめえは1回、いや2回殺されなければわからんようだな。来い」

無理矢理カメックスに手を引っ張られるルカリオは既に泣きながら

ら命乞いをしていた。それを見ていたカメックスは十分に満足したのか、“へんしん”を解き、元のミュウの姿に戻った。

「ルカリオみっけ」

「……俺、マジで死ぬかと思った……」

本来なら怒っているところだが、本物のカメックスでなかったことだけで彼は一気に脱力してしまう。ミュウはケラケラと腹を抱えて笑っていた。

「あとはアーマルドかあ。でも、彼はさっき見かけたんだよね」

「えっ、どこで?」

ルカリオを見つげる前にアーマルドを見つけてしまったというミュウ。何故放っておいたのかとヒトカゲが訊くと、「ついてきて」とヒトカゲ達をある場所に案内し始めた。

「ジュースのおかわりはいかがですか?」

「あ、じゃあ下さい」

とある喫茶店の中、そこにアーマルドはいた。彼は隠れるついでにゆっくりくつろぎたいと思い、喫茶店に入っせずとまったりしていたのだ。

「……だから俺のカバン預かってくれたんだな。財布の金使うために……」

「あっ!?!」



くつろいでいたアーマルドの元に、笑っているミュウ、哀れんでいる目つきのヒトカゲ、そして怒りが込み上げているルカリオがやってきた。滝のような汗がアーマルドの頭から流れ落ちる。

「覚悟はできてるよな？」

「……………」

その後数分間、言葉では言い表せないほどの惨劇が繰り広げられた。

「この勝負、僕の勝ちだね」

嬉しそうにミュウは3人の周りを飛び回る。3人はぐったりした様子でミュウを目で追いかける。

「でも遊んでくれたから、ちょっとだけ情報教えてあげるよ」

「ホント？ 何の情報？」

幸いにも、ヒトカゲ達が知りたがっている情報を少し提供してくれるという。ヒトカゲ達は一字一句聞き漏らさないように、ミュウにこれでもかというくらい近づく。

「“グローバル”、これを知ったら道は開けるかもよ」

みんなが1度も聞いたことのない単語“グローバル”。これを調べていくことで何かが解決するとミュウは言う。

「それじゃ、頑張つてね。僕たまくに遊びにくるから、その時はよ

るしく」

「あ、ちよっ……」

それだけ言い残し、ミュウはどこかへ飛んで行ってしまった。多くの謎を残していったミュウの事を、3人はただ見ているしかできなかった。

ミュウは何者で、一体どんな目的があるのか、全くわからないでいた。唯一わかったのは、今後非常に気にしなければならない存在ということと、ヒトカゲと同じくらい子供っぽいということだけだった。

### 第32話 またかくれんぼ（後書き）

（Linoの専門用語講座）

・イジられ（る）

？ イジる（弄る）の受身形。冗談などを言われて困っている状態、いじめられている状態を指す。

？ バンちゃん。

バンちゃん

「待て待て待て待て、何でイジられ＝俺って意味になるんだよ。しかも説明少ねえし（怒）」

君見たら120%そう思うから、もうイコールでいいじゃない（笑）

ドダイトス

「うんうん、そりゃそうだな」

サイクス

「結婚秒読みだし」

バンちゃん

「関係ねえ（怒）結婚の予定なんかねえよ（怒）」

あらあら、照れちゃって（笑）

バンちゃん

「……あーっ！（怒）」

### 第33話 勘違い野郎（前書き）

嗚呼、短い短い冬休みに突入しました。

ヒトカゲ

「10日間ただだもんねー」

しかし仕事があるから、実質6日かあ休めるの。今日から3日連続だし（泣）

ルカリオ

「働け働け。稼いでゲーム買って廃人の如くやりまくっちゃまえ」

……よし、頑張る！（笑）

アーマルド

「今のつて、けなし言葉だよな？（汗）」

### 第33話 勘違い野郎

「で、何者なんだよあいつは？」

「僕が知るわけないでしょ。ミュウなんか話でしか聞いたことなかったもん」

へとへと体を動かしながら、ヒトカゲ達はアイストを後にした。当然ながら会話の話題はミュウの事でもちきりだ。もちきりといっても、結局行き着く先は「何者なんだろう」ということだけである。

「ねえ、どう思う？」

「……あちこち痛くてそれどころじゃないわ」

ヒトカゲはアーマルドに問いかけてみたが、ルカリオの財布を勝手に使った罰として半殺しにあった彼は考える余裕がなく、全身の痛みに耐えるだけで精一杯だった。

「かわいそう。大丈夫？ 歩ける？」

「平気だよこれくらい、みんなのたを思えば何ともないさ」

2人はルカリオをジト目で見ながらわざとプチ芝居をする。そんなことをされていい気分になる人はいないだろう。もちろんルカリオも例外ではない。

「あのなあ、かくれんぼサボるのはまだいい。けどな、サイクスがない時にお前いくら使ったんだよ！？ これじゃ2日ももたねーぞ！ わかってんのか！？」

ルカリオがカバンから財布を取り出し、中身を見せつけながら声

を荒げる。財布の中では数枚のコインがチャリンと虚しく音を立てるのみ。輝かしい紙幣などそこにはない。

「だ、だって、みんなの金……」

「俺の金だっつーの！ 金持ってないお前らに貸してるだけだつての！」

久々にキレルルカリオ。そのやりとりにヒトカゲはおもわず笑ってしまいが、物凄い目つきでルカリオに睨まれたため、黙るしかなかった。

「さあ〜て、どうしてくれるか……またボコるか、あ？」

右手をグーにしてルカリオは構える。こつなつたら彼を止められるものは今のところいない。アーマルドも目を瞑ってボコられるのを覚悟していた、その時だ。

「待て！ やめるんだその青いの！」

どこからともなく聞こえてきた威勢のいい声。何事かとヒトカゲ達は辺りを見回す。するとさほど遠くないところにある木の上は何者がかいた。

人のようにも見えるが、逆光のせいで影しか見ることができない。木の枝に立ち尽くす誰かに向かって、「青いの」と呼ばれたルカリオが叫ぶ。

「誰だ、お前！？」

いかにも悪役らしい台詞になってしまったが、本人は気にしていない。何者かはルカリオをビシツと指差しながら、こちらは正義のヒーロー役の台詞を言う。

「悪逆非道、傍若無人な若者よ、今すぐ降伏するのだ！ さもなくば、正義の名の下に、この俺様が裁きの鉄槌を下すぞ！」

自分の事を“俺様”と言っている時点で、脅威を感じなくなった3人。むしろこの誰かをただの変人かと思うようになってしまった。

「とっつ！」

刹那、そのポケモンは木の枝からジャンプし、空中で回転する。そしてそのまま地面に着地……できず、頭から固い土の上に突っ込んでしまった。

頭が地面に刺さった状態で、そのポケモンは必死にもがく。ヒトカゲ達は助けようともせず、ただ成り行きを見ているだけだった。しばらくして自力で土から脱出（？）に成功したそのポケモンは、再び構えた。

「このバシャーモ様を相手に無傷とは……お前、只者ではないな？」  
(お前が何者だって話だよ……)

ヒトカゲ達の目の前に現れたのは、頭にV字型の鶏冠とんぼがを持つ、鳥人間とも言うべき姿をしているポケモン　バシャーモ。見た目はカッコいいが、言動はどこかおかしいというのが3人の抱いた印象だ。

「まあいい。とにかく！　俺様は正義を貫くヒーロー、悪事は絶対に赦さん！」



自称・正義のヒーローのバシャーモはとにかくルカリオを懲らしめたいようだ。ここまできるとさすがのルカリオも頭が痛くなってくる。

「はあ、 “はどうだん”」

頭を抱えながら片手で“はどうだん”を放つ。自分の決めポーズに少し惚れていたバシャーモが気づいた時には、すでにエネルギー弾は目の前まで来ていた。

「ギョツ!?!」

バシャーモは奇声を発して“はどうだん”をもらにくらってしまった。そのまま後方に吹っ飛ばされてしまった。正義のヒーロー、敗れたり。

「もうめんどくせえ。先に行こうぜ」

『そうしよう』

世の中にはこういうポケモンもいるものなんだ、勉強になったと心の中で自分に言い聞かせながら、3人は次の街へ向けて歩き出すとした。

だが、物凄い速さでバシャーモが走って3人の前に立ちはだかり、懲りていない様子で行く手を阻んだ。ヒトカゲは驚いて尻餅をついてしまう。

「待たないか！ 不意打ちとは卑怯な真似を……お前はどこまで犯罪を繰り返せば気が済むのだ!?!」

「はいはい……もうしませんからさようなら」

ヒトカゲ一行はバシャーモに視線を合わせることなく彼の横を通り過ぎようとした。頼むからもう関わらないでくれ、というのがルカリオの本音だ。

「だから待て！ 俺様を相手にして背を向けるとは言語道断！ やはりここで成敗……」

いい加減腹が立つてきたのか、3人はバシャーモの方を振り返る。当の本人は「やる気になったか」と思っているようだが、それは全く違った。

「はどうだん」！

「かえんほうしゃ」！

「ロックブラスト」！

バシャーモに向かっていったのは、3人による一斉攻撃。誰かが攻撃してきたら自慢の“ブレイズキック”をお見舞いしようと考えていたバシャーモは、顔面蒼白になる。

「ちよつ、待っ……」

慌てて回避しようとするも、時すでに遅し。全部の技を正面からくらったバシャーモは先程よりも高く宙に吹っ飛び、力なく地面へと落下して行った。

さすがにやり過ぎたと感じた3人はバシャーモの事が心配になったのか、彼の元へと駆け寄った。一応生きてはいるようで、ほっと胸を撫で下ろす。

それがわかると、3人はバシャーモを放置したまま歩き始める。しかしながらバシャーモはしぶとく、目の前から遠ざかっていくと

トカゲ達に倒れたまま声をかける。

「ま、待ってくれ……」

またかよと言わんばかりの目つきで振り返ったのはルカリオ。これ以上何かしてくるつもりなら詠唱つき“はどうだん”をぶちかますつもりだったが、バシャーモの発言によりその考えを撤回した。

「……み、道を、教えてくれ……」

バシャーモはいわゆる“迷子”だったのだ。辺りをさまよって、木の上から何か見えないか探していたところ、ヒトカゲ達が見えたからああなったと本人は言う。

「だったら最初から素直に言えっつーの」

困ったポケモンを助けないのは探険家として失格。父親からしつこく言われた言葉を肝に銘じているルカリオは優しくバシャーモを起こし、少々乱暴にはあるものの、彼を担いで行動を共にする。

「……そうか、お前らにはそんな事情があったのか」

次の街へと向かう道中、ヒトカゲ達の旅の目的を知ったバシャーモ。特にヒトカゲについてかなり興味があるのか、まじまじとヒトカゲの顔を見ていた。

「ホウオウにディアルガか……俺様も話でしか聞いたことがないな。会えるなら是非会ってみたいものだ」

（こいつ、普段から自分の事“俺様”って言ってるのか？）

ふとアーマルドがそう思う。しかしいつか聞いているうちに気にしなくなるだろうと思いつき込み、深く考えるのをやめた。旅をしている間にそういう考え方ができるようになったらいい。

「ところで、バシャーモって何してるの？」

ヒトカゲもバシャーモについて知りたくなつたのか、職業について尋ねる。それにバシャーモが応えようとしたが、少し様子が変わる。

「俺様は……せ、正義のヒーローだ」

「だからそれはわかつたって。僕が聞いているのは職業だよ」

「冗談だと思つたヒトカゲだったが、その後何回訊いてもバシャーモは「正義のヒーロー」としか答えなかつた。頭がおかしいポケモンでなければ、嘘をついているようにしか思えない。

「ひょっとして、何か言えないことでもあるの？」

「お、俺様に限つてそんなことあるわけないだろう。とにかく、俺様は本当に正義のヒーローだ」

意地でもそう言い張るバシャーモ。気まづくなつたのか、それ以上追求されないようにと話題を変えた。

「ところでお前達、俺様と特訓しないか？」

『特訓？』

どういうわけか、いきなり特訓をしようと提案されたヒトカゲ達。返事に困ってしまう。

「敵とバトルになった時に、穴があってはやられるだけだ。今のうちにしつかり強くなっておけばいいだろうと思ったのだ。どうだ、俺様と一緒にやらないか？」

確かに、と頷く3人。だがこれはバシャーモの実力にもよる話だ。先程のやりとりだけ見ると、ただのヒーロー気取りのお遊びレベルである。そんな奴と一緒にして果たして自分達が強くなるのかと思うと、首を縦に振れないでいる。

「言っておくが、本当の俺様はさっきのようなヘタレではないぞ。それなりの知識もある。騙されたと思ってやってみるといい」

そこまで言われると、断る理由もない。ガバイトの動きが気になるどころだが、サイクスがカードを使い物にならなくしてくれたことで少しは余裕があるため、ヒトカゲはその申し入れを受けた。

「じゃあ、せっかくだからやるよ。いいよね？」

「しゃあないな。付き合っただけか」

「俺、できるかな……でもやってみる」

3人が特訓することを決めたのを確認すると、右手で拳を作って胸へ当て、バシャーモは任せると言う。

「決まりだな。そしたら、少し休憩してから始めるぞ。俺様の体力が……」

3人同時攻撃のダメージは想像以上だったようで、バシャーモの体力はまだ回復してなかった。

### 第33話 勘違い野郎（後書き）

（Linnoの専門用語講座）

・3バカ

？ 馬鹿な奴が3人集まった状態。または、3種類の馬鹿を兼ね揃えた存在。

アーボック

「うおーい項目削除！？（汗）」

ペルシアン

「お、俺らの名前すら出てねえぞ！？（汗）」

いやいやよく見なさい、“馬鹿な奴が3人集まった状態”ってしっかり書いたじゃない。これが君らの説明でしょう。

オオタチ

「じゃあ前回のバンちゃんなんかいららないでしょ！」

バンちゃん

「いらないと……？（怒）」

アーボック

「あつ、ご本人登場（汗）」



### 第34話 個別の特訓（前書き）

ドダイトス

「あの〜、あの短編消してほし……」

んなわけいかない。君から堂々と……ね（笑）

ドダイトス

「だ、だから恥ずかしいんですつてえ〜！（汗）」

もう遅いね〜あれは永久保存版ですから（笑）

ドダイトス

「……こつなつたら作者を口封じしか……」

おい（怒）

### 第34話 個別の特訓

成り行きで出会ってしまったとんでも野郎、バシャーモ。そして促されるままに特訓をすることになったヒトカゲ、ルカリオ、そしてアーマルド。彼らの特訓はすでに始まっていた。

「おら、もっと早くしろ！」

威勢のいい掛け声をかけるバシャーモの目線の先には、走らされているヒトカゲ達の姿。「まずは基礎体力の強化だ」と言われ、同じ場所を何周も、一定のペースを保ちながら走れと命令されたのだ。

「もう何十周したと思ってるんだよ！ つたく！」

「なんだと！？ お前だけでもう10周だ！」

もう勘弁とばかりにルカリオが不満を漏らしたばかりに、彼だけもう10周追加されてしまった。ヒトカゲとアーマルドが疲れてその場に座っている間、ルカリオだけ短距離走並みの速さで走らされた。

「つ、次は何するの……？」

息を切らしながらヒトカゲが尋ねると、腕組みをしたバシャーモが次の特訓メニューを2人に告げる。この間、ルカリオはまだ走っていた。

「次は個別に俺様が鍛えてやる。まずヒトカゲ、お前からだ」

できれば休みたいと思っていたが、せっかく特訓してくれている

のだからいい子にしようよと、あたかも、いつもの行いを反省しているかのように心の中で呟くヒトカゲ。実際は本人以外わからない。

「はあ、はあ……よ、ようやく終わったぜ……」

ちょうどそこに、追加10周を走り終わったルカリオが、ぜえぜえと息苦しさを全面に出しながら戻ってきた。しかしバシャーモは無視、ヒトカゲも気づいていない。唯一アーマルドが声をかけてくれたが、「お疲れ」の一言だけだった。

「じゃあヒトカゲ、本気でかかって来い」

「わかった!」

本気でいいと言われ、ヒトカゲは正直に全力投球で向かっていこうと考えた。両手を合わせ、瞼を閉じ、強く念じ始める。そう、ヒトカゲがやるうとしているのは、詠唱だ。

【紅蓮の炎を操る……】

「ちよつと待った」

突如、バシャーモによってヒトカゲは詠唱を止められた。ヒトカゲを中心に巻いていた渦が治まり、独特のオーラも消え去った。どうして止めたのかを尋ねた。

「何かあったの?」

「以前、聞いたことがある。何かを唱えると強くなるポケモンがいるっていう話を。お前の事だったのか」

どうやら、ヒトカゲの事が徐々に知れ渡っているようだ。どうやってバシャーモが知ったかは知らないが、“ブラストバーン”を使

えることまで知っていた。

「だがその力に頼りにしすぎるのもどうかと思う。確かに強くはなるが、お前自信の土台がぐらついていては、真の力を発揮できないのではないか？」

この理論は筋が通っている。強い力を手に入れても、それを使う者次第では生かすことにも殺すことにもなる。その者がしつかりと下積みをしていれば思いがけない力を発揮することが可能だが、そうでなければ自分自身の持つ容量キャパシティを超え、その身を滅ぼすことになるのだ。

もちろんヒトカゲの詠唱もこれに当てはまる。ヒトカゲの体で発せられる“ブラストバーン”は普通、ヒトカゲの体で放つには耐えられないもの。それ故体力の消耗が著しく激しくなるため、ふらふらになったり、意識を失ったりするのである。

「わかった、詠唱なしでやってみるよ！」

その事を一番よく知っていたヒトカゲは、すぐに返事をした。そしてバシャーモから言われた特訓の内容は、「ずっと“かえんほうしゃ”を放ち続ける」というものだった。

「1秒でも長く放つ練習をしる。そうすれば容量は増える」

バシャーモの言葉に強く頷くと、ヒトカゲは近くにある岩壁に向かって炎を放ち続ける練習を始める。次にバシャーモは、ルカリオとアーマルド、2人同時に呼び出した。

「お前達には、コンビ技を習得してもらおう」

『コンビ技？』

聞き慣れない言葉に2人は首を傾げる。ちなみにコンビ技というのは、2人以上のポケモンで協力し、より強力な技を出すことを指す。

「お前達で力を合わせて、俺様に強力な1発をお見舞いしてみろ。いいか、“2人で”だからな」

強く念を押しようにバシャーモは言う。戸惑いながら、まずは考えてみようということで、ルカリオとアーマルドは話し合いを始めた。

「コンビ技って言うてもなあ……アーマルド、お前“シザークロス”と“ロックブラスト”以外に何か使えるのか？」

「俺？ 大体の技は覚えてるけど？」

まさかの発言に大声を出して驚くルカリオ。しかしそれなら技を考えるのが大分楽になったと感じ、あれこれと自分達のできる技を頭の中で組み合わせていく。

威力が上がりそうな構成、自分達ならではの技の構成、どれがいいのだろうと考えていた時、姿勢が悪かったせいか、ルカリオの肩に激痛が走った。

「痛っ！？ くっそ、何だって俺が真剣に考え事してるっつーのによ……」

よほど痛かったのか、ルカリオは肩を押さえて痛みが止むのを待っていた、その時だ。その様子を見ていたアーマルドが何かひらめいたように、顔を上げた。

「それ！ それだ！」

「……はい？」

「よし、大分長く出るようになったな。常に一定の量で炎を出せる練習をしる」

ヒトカゲの特訓の様子を見ていたバシャーモが次の指示を出す。ヒトカゲは自身のありそうな顔をして頷き、特訓を再開した。

「おいバシャーモ！」

威勢のいい声で名前を呼ばれたバシャーモが振り向くと、そこにも自身満々といった顔つきになっているルカリオとアーマルドがいた。どうやらコンビ技が完成したようだ。

「もう思いついたのか、なら俺様にその一撃を加えてみる」

そう言うと、バシャーモは両手をいっぱい広げて立ち竦んだ。自分からは一切攻撃をするつもりはなく、とにかく技の完成度を見たいということらしい。

「いいか、アーマルド？ さっきの通りにいくからな」

「わかってる。そっちこそしくじるなよ」

お互いに頭の中で先程までやっていた練習を念入りに思い出す。しくじればコンビ技ではなくなってしまう、2人の気持が一体とならなくては完成しないことは練習中に理解している。後は信じてやるだけだ。

『せーのっ!』

掛け声と同時に2人はバシャーモに向かって走り始めた。横一直線に並び、足並みも揃っている。息はピッタリのようだ。

バシャーモの姿が近づくにつれ、緊張感が募っていく。だがもう後戻りはできない。バシャーモのところに辿り着く寸前に2人は構え、走りながら攻撃をくりだした。

「シザークロス」!

「はどうだん」!

アーマルドが“シザークロス”、ルカリオが“はどうだん”をほぼ同時にくりだした。このくらいなら耐えられると思っていたバシャーモだが、彼が想像していたようにはいかなかった。

「……ぐうっ!?!」

物凄い激痛が体に走ると同時に、軽々と後方へ吹っ飛ばされてしまったのだ。背中を木に打ってようやく止まったが、その木は簡単に折れてしまった。

技の具合を見ていたが、練習通りできたようで、2人はハイタッチを交わして喜んだ。しばらくして何とか戻って来たバシャーモは、2人にこの技について尋ねた。

「こ、これは凄いぞ。威力が半端じゃない。だが“シザークロス”と“はどうだん”だけでどうやってこの威力を……?」

「自分の腹、見てみるよ」

ルカリオにそう言われ、バシャーモが技の当たった自分の腹を見

た。そこには、×印と、その交点に火傷のような跡が残っていたのだ。これを見て、バシャーモはこのコンビ技の正体を見破った。

「そうか、『撃力』か！」

撃力 それは打撃などによって瞬間的に物体に作用する、とても大きな力のことを指す。それを利用した技だったのだとルカリオとアーマルドは言う。

まずはアーマルドが“シザークロス”で攻撃。そしてその攻撃の瞬間にルカリオがバシャーモにつけられた×印を見極め、その中心に至近距離から“はどうだん”を放ったのだ。バシャーモにとっては体がちぎれる程の勢いで殴られた感覚だったようである。

「これがあれば、どんなに強いポケモンでも怯むはずだ。俺様をここまで驚かせるとは……やはり只者ではなかったな」

やられた奴にカッコいい決め台詞を言われ、ルカリオは少々悔しい思いをする。

(……俺にも、できることができた。戦いで役に立てることができ  
るかもしれない)

その一方で、アーマルドは歓喜していた。旅に出てから、まだ戦いで手助けすらできていない自分に悔しさを感じていたのだ。それが今回の特訓によって払拭され、自身に繋がったと後に語る。

「さて、俺様の特訓は終わりだ」



夕方になり、バシャーモはみんなを集めて話をする。特訓と言ってもバシャーモは指示するだけだったので、3人は個人的に技の練習をしたという感覚の方が大きい。

「これで、お前達は正義のヒーローの仲間入りだ。悪事を働く者に正義の鉄槌を下せる」

結局は仲間が欲しかっただけなのかよという突っ込みを心の中でしたヒトカゲ達。正義のヒーローという名前には嬉しさを感じているようである。

「よし、明日、俺様を隣町まで案内したら、解散だ！」  
『やだ』

突如、ヒトカゲ達は案内をしたくないと言い出した。特訓はよかったものの、それ以外は存在すら嫌だと思っていたらしく、思い切った口にした。よほどのシヨックだったのか、バシャーモの頭に雷が落ちた。

「…………困っているポケモンを放っておくとは言語道断！ 成敗してくれる！」

変な奴と知り合いになってしまった 3人の頭痛の種がまた1つ、増えてしまった。

### 第34話 個別の特訓（後書き）

これで年内最後の更新です。そして次回投稿は2010年1月2日……そう、ヒトカゲシリーズ1周年の日です。そしてよく見ると、前作と合わせて通算100話になるという、ビッグな1日になりそうです。

ヒトカゲ

「とりあえず、来年に会おうね！」

ルカリオ

「新年早々何かやらかすかもな、作者」

アーマルド

「年賀状なら早めにな」

それでは、よいお年を

第35話 誘拐犯逃走中！？（前書き）

新年第1号のお話ですな。

ヒトカゲ

「誘拐犯……なんか怖いな」（汗）」

ルカリオ

「厄介な相手なのか？」

うーん……とりあえず本編見てちょうだい（笑）

アーマルド

「説明できないからって逃げたな（汗）」

### 第35話 誘拐犯逃走中!?

特訓から2日後の朝、ヒトカゲ一行は次の街『カレッジ』に無事到着した。この街はその名のとおり、学園都市であるため、街の至るところに大きな学校と、その通学路に商店街が並んでいる。「よく学び、よく遊べ」という言葉をテーマに創られたのだとか。

街の入り口に入ったところで、4人は一旦立ち止まる。街を見回して、その大きさに圧倒されていた。ヒトカゲ曰く、アスル島の2倍以上はある大きな都市らしい。

「俺様の案内はここまででいい。感謝しているぞ」

バシャーモは道案内をしてくれた3人に礼を言う。だがやはり“俺様”という一人称のせいか、感謝しているように聞こえないのが残念だ。

「どこに行くの?」

不意にヒトカゲが訊ねた。まさかそこまで聞かれるとは思っていなかったのか、バシャーモが少し焦りだす。目を泳がせながら、ヒトカゲの質問に答える。

「そ、それは……友人のところだ。最近知り合ったばかりで、住所しか知らなかったからな」

やはり怪しいと思う3人。変な奴ではあるが根が悪いポケモンではないと理解していた3人は、何で自分達に嘘をつくのかわからずにいた。だがそこまで重要なことではないだろうと判断し、それ以上問い詰めるのを止める。

「それでは、さらばだ！」

まるで逃げるかのようにバシャーモは街中に走り去っていった。それを見届けて軽く息を漏らすと、ルカリオはバシャーモがいなくなった喜びを顔に出しながらヒトカゲ達に話しかける。

「んじゃあいつもいなくなったことだし、まずは情報探索といくか」「そうだな。早くしないと、もしかしたらグラードンが……」

この数日間、アーマルドは怖くてたまらなかったのだ。ガバイトが言っていた、グラードンを操る計画が進んでいるのではと考えるだけで、恐怖を感じていた。

「今のところは赤の破片が完全に集まるとは思えないから、しばらくは大丈夫だと思うよ。でもその事も聞き込みしないとね」

アーマルドの恐怖を取り払うようにヒトカゲが言う。その言葉で気が少し楽になったのか、アーマルドは「うん」と言って頷く。

「そんじゃ行きま……って、何だあの集団？」

街に入ろうとルカリオが前を見た瞬間、彼の目にポケモン達の集まりが見えた。もしルカリオの勘が当たっていれば、また事件があったに違いない。

「はあ……行くか、仕方ねえ」

嫌な予感しかしないが、探険家である故、黙って見過ごすわけにはいかない。ルカリオを先頭に3人はその集まりへと向かって行っ

た。

その集まりでは、ポケモン達が慌しく話し合いをしていた。深刻そうな雰囲気、おどおどしているポケモンまでいた。

「ちょっとすみません。何かあったんですか？」

集団を掻き分けてヒトカゲが入り込み、話を聞くことにした。その集団の中にいたアリゲイツが物凄く慌てた様子で何が起きているのかを説明し始めた。

「ゆ、誘拐だよ誘拐！ でっけーポケモンが子供のポケモンを誘拐して、今逃走中なんだ！ 僕、ハッキリこの目で見たんだ！」

「えっ、誘拐だって!？」

まさに大事件である。さらにアリゲイツが言うには、この街は平和そのもので、犯罪が起きるのは数年に一度あるかないかだという。そういう理由で、警察学校もあるのだとか。

ヒトカゲは再び集団を掻き分け、ルカリオ達のところへ戻って事情を説明する。その話から、まだこの街の中を逃走していると睨んだルカリオは笑みを浮かべる。

「ちょうどいい。こないだのコンビ技を実戦で試してみるか」

そう言うと、ヒトカゲ達と一緒に誘拐犯を捜し出すことに勝手に決め、半ば強引にヒトカゲとアーマルドの手を引っ張って走り出した。

「はっ、はっ……」

その頃、街中を血相変えて走るポケモンが1匹いた。小脇には自分よりもかなり体格の小さいポケモンを抱えている。その前方に立ちほだかるように、複数人のポケモンが行く手を阻む。

「どけ　　！　　“はかいこうせん”！」

息を切らしながらも、口から“はかいこうせん”を放つ。それから必死に逃げ惑う市民達はそのポケモンを止められずにいた。目の前の道が空くと、そこを走り去っていく。

「ちよつと、やりすぎじゃないの!？」

「しゃーねーだろ！　やりすぎとか言ってる場合じゃねえ！」

小脇に抱えられたポケモンが自分を抱えているポケモンに向かって叫ぶ。どうやらこの2人、知り合いのようだ。雰囲気から察するに、誘拐ではなさそうだ。

「何で誘拐犯と間違われるわけ!？」

「おめーが空飛べばいいだけの話だろ！　誰だよいつつも『頭に乗っけて』っていうのは!？」

何やら口喧嘩になっている2人。些細なことでも苛々するほど今の状況に参っているようだ。だがうかうかもしてられないので、とりあえず走っている。

その時だ。そのポケモンの前方に1匹のポケモンが飛び出してきた。慌てふためきながらも、そのポケモンはぶつからないように足に精一杯力を入れ、どうにかぶつかる寸前で止まることができた。

「あつぶねーな！ 気をつけ……！？」

飛び出してきたポケモンに怒鳴りつけようとしたが、その姿を見た瞬間、驚きからか、途中で怒鳴るのを止めてしまった。そこにいたのは、友達の姿だったからだ。

「……ヒトカゲ！？ 何でここに！？」

「あれ……うそ、バンギラスにポツポ！？」

そう、追われていたのはバンギラスだった。そして彼の右脇に抱えられていたのはポツポだ。お互いにどうしてここにいるのかというような顔をしている。先に尋ねたのはヒトカゲだ。

「な、何でバンギラスがここにいるの？」

「ああ、実はな……」

バンギラスがその理由を話そうとすると、後方から雄叫びを上げながらポケモン達が彼らに向かってきている。この集団がバンギラスを、ポツポを誘拐した犯人と思い込んで追っかけているのだ。

「やべっ！？ と、とにかく話は後だ！」

刹那、バンギラスは左手でヒトカゲを掴むと、そのまま脇腹へと抱え込んだ。2匹のポケモンを抱えながら、再び彼らから逃げるように走り出した。

「えっ、何なに何なのこれ！？」

「だから話は後からするって！ 今は振り落とされないように掴まってる！」



バンギラスはひたすら走る。だが後ろから追っかけてくる集団を振り切るうとか、追っ手から逃げ回っているような感じではない。どこかへ向かって走っているようだ。

しばらく走り続けると、またしてもバンギラスの行く手を阻むかのように、前方にポケモンが2匹立っていた。目を細くしてそのポケモンを確認する。

「今度はルカリオにアーマルドかよ！ ったく！」

このルカリオとアーマルドは、ヒトカゲと一緒に旅しているメンバーに他ならない。ヒトカゲもその姿を捉えると、まずそうな顔になった。

刹那、ルカリオとアーマルドがバンギラスに向かって走り出す。それを見てヒトカゲは思い出した。ルカリオがコンビ技を実戦で試してみるかと言っていたことを。

（絶対まずいことになっちゃう！）

何とかしてバンギラスにそれを伝えようとするが、こういう時に限って言葉が出てこない。そうしている間にも彼らの距離は縮まっ  
ていく一方だ。

「シザークロ……」

「どけー！ “じしん”！」

バンギラスは両足を地面に思い切り叩きつけた。地割れが起き、ルカリオとアーマルドは足下を崩されバランスを崩し、その場に倒れてしまう。

2人が倒れたのを確認してバンギラスは通り過ぎようとするが、

何とその足に2人がしがみつくと、バンギラスの走る速さが一気に遅くなる。

「や、やめろてめえら！ 放せ！」

「誘拐犯が何をほざきやがる！ 大人しく捕まれ！」

足に絡み付いている2人を引き離そうともがくバンギラスと、誘拐犯を捕まえるべく必死にしがみつくルカリオとアーマルド。その攻防は数分間に及んだ。

それから直に、バンギラス達の横にある学校から、とあるポケモンが彼らの元へやって来た。そして今起こっている光景を目の当たりにして、少々驚いている。

「バ、バンちゃん、何やってんだ？」

「……………お、おじさん？」

バンギラス達の目の前にいるのは、バンギラスの父の元同僚であった、ニドキング警視だった。これまた懐かしい顔にヒトカゲも驚いてしまった。

「早くしないと、もうすぐ式始まっちゃうぞ？」

「……………式？」

ヒトカゲ達が声を揃えて言う。何のことかさっぱりわからない3人にポツポが説明しようとしたが、それより先にバンギラスが口を開いた。

「そつだ……………今日は俺の警察官任命式なんだよ！」

全員に怒鳴りつけながら、さらにバンギラスは説明を続ける。

「寝坊したから急いでこの警察学校に向かおうとしたのによお、誰が言ったか知らねえが誘拐犯だのとかほぎきやがって……ふざけんなっつーの!!」

そう言うと、足を大きく振ってルカリオとアーマルドを振り払う。ついでにポツポとヒトカゲも地面へと落とされた。

「そのルカリオとアーマルド、俺が任命された瞬間に逮捕してやつからな……」

低く、ゆっくりと、2人を睨みつけながらバンギラスは脅す。カメックス並みの恐さを感じたのか、全身に凍りつくような寒気が2人を襲う。

「ハハハ、ご苦労だったな。まあ、ヒトカゲ達も式を見学していきなさい」

まるで日常茶飯事の如く笑い飛ばすニドキング。彼に案内されるがままに、みんなは警察学校へと入っていった。

第35話 誘拐犯逃走中!?(後書き)

新年早々お疲れ、バンちゃん(笑)

バンちゃん

「初っ端からこの扱いかよ(汗)」

君じゃなきゃできないことだからね。それにしても、ようやく本編登場じゃないか。

バンちゃん

「まあな。嬉しいっちゃんあ嬉しいけどよ」

ポッポ抱えてたことが?(笑)

バンちゃん

「あの温もりは俺だけのも……のとか言わせんじゃねえ!(怒)」

言わせてないし(笑)

### 第36話 あいつは今（前書き）

ヒトカゲ、ゼニガメ、チコリータ、ドダイトス、サイクス、バンちゃん、カメックス、ルカリオ、アーマルド……今更だけ何てチヨイスなんだろう（笑）

バンちゃん

「バンギラスって言え、バンギラスって（怒）」

いやだ（笑）

ちよつと言い直すと、子供、番長、お嬢様、警備員、秀才、イジラれ、ヤクザ（っぽい）、キレキャラ、ドジっ子ですからね。やりた  
い放題ですな（笑）

ルカリオ

「笑ってねーで反省しろや（怒）」

何でこんな話になったかというと、今日ふと前作から読み直したんですよ。

振り返ってみると、懐かしいと同時に、見えていなかった部分が見えたりしたので、別の意味で面白かったです。

### 第36話 あいつは今

それから直に、活気ある楽器の音色が辺りに響き渡った。警察官任命式が始まる合図だ。警察学校の敷地内で、今回新たに警察官になるポケモン達の列の中に、バンギラスはいた。

「それでは、学長であるニドキング警視より挨拶を頂きます」

この学校では、現役の警察官が学長を勤めることになっている。だが学長というのは名ばかりで、責任を負わされる、イベントに出席する等以外は、普通に警察官として勤務しているのだ。

「えー、新しく警察官として任命される諸君。長つたらしい話は嫌いだろうから、さっさと任命しよう。とりあえず、頑張れ！」

立ちっぱなしのポケモン達を気遣ったのか、ニドキングが面倒くさかったのかはわからないが、本当に一言だけの軽い挨拶になった。ご機嫌な様子でニドキングは定位置に戻る。

「そ、それでは任命を始める。バッジを渡すので、呼ばれたら学長のところに来るように」

そしてギャラリーや司会も呆れる中、任命が始まった。次々と、ポケモン達の名が呼ばれてはバッジをつけてもらっている。最後の方にあって、ようやくバンギラスの名前が呼ばれた。

よほど緊張しているのか、動き方がロボットそのものだ。その様子をヒトカゲ達はギャラリー席から笑いながら見ていた。あまりに笑いきすぎたルカリオはイスから落ちてしまう。

「ラルフと同じ警察官だな。頑張れよ、バンちゃん」  
「頑張ります、おじさん」

ニドキング警視からバッジを受け取るバンギラス。それはまさしく、自分が小さい頃に自分の父親がつけていたものと同じだ。受け取った瞬間、心の中から凄く何かが湧き上がるものがあつたという。憧れであつた父親・ラルフ。今はこの世にいたくとも、彼の思い出の中でその命は輝き続けている。今その父親と同じ道を歩もうとしているバンギラスは、見るからに嬉しそうな表情だ。

「これにて、警察官任命式を終了する！」

直に、任命式が終了した。ここから先は特に用事もないため、ニドキングがバンギラスと、ヒトカゲ達も一緒に警察学校内にあるカフェテラスへと案内してくれることとなった。

「は？ ヒトカゲ、マジで言ってるのか!？」

「うん、大マジな話だよ。ホウオウとディアルガ捜してるの」

約数カ月ぶりの再会となる2人の話は、近況から始まった。当然ヒトカゲがどうしてポケラス大陸にいるのが気になったバンギラスがその理由を尋ねると、長く、そして驚く程の理由が返ってきた。

「ほお、それでこいつらと一緒に旅してるってわけか……」こいつら』と」

バンギラスはルカリオとアーマルドをじっと睨みながらそう言う。朝の一件をまだ根に持っているらしく、まだこの2人の事を良く思

っていない。

『す、すみません……』

さすがに警察官を目の前にしては、2人も謝る以外にできることはない。気まずい雰囲気になりかねないので、ヒトカゲが間に入つて話を進める。

「それだけならいいんだけど……もうはや敵が来ちゃってね」  
「敵？ 何でまたヒトカゲを？」

バンギラスはヒトカゲが狙われていると思ったようだ。そうじゃないとヒトカゲが訂正して指差した先にいたのは、ちっちゃくなっているルカリオだった。

「こいつが？ おい、何したんだよ？」  
「いやいや、何もしてねえよ」

ルカリオの犯罪を疑うバンギラス。その時ふとルカリオの胸元を見ると、赤い稲妻マークを見つけた。それについて質問すると、いち早く気づいたニドキングが驚いた表情になる。

「お前、まさかライナスのガキ!？」

ガキと言われあまりいい気分ではないが、とりあえず黙つたまま頷くルカリオ。少し興奮気味のまま、ニドキングは話を続ける。

「そうか……親父さん捜してるんだな？」  
「ああ……警察が捜査を打ち切つたから俺が捜してんだよ！」



突如、ルカリオはその場に立ち上がって声を荒げる。明らかに怒っているのはその場にいた全員が見て取れた。この際にといわんばかりに、今まで思ってきたことを口にする。

「何で死んでもないのに打ち切りやがって……なあ、どうしてだよ！？ どうして……」

そう訴えながらニドキングに寄り<sup>すが</sup>継り、泣き崩れてしまった。こんなルカリオを見るのはヒトカゲ達も初めてだ。誰にも言えずにいた、父親への想いが一気に出てしまったようだ。

怒りや悲しみ、それらが全て入り混じって涙となって溢れ出る。ルカリオの肩に手をやりながら、ニドキングは彼の目線までしゃがみ込み、優しく語り掛ける。

「確かに、我々警察は捜査を打ち切ってしまった。お偉いさんは生存率が皆無だと判断したのだろう」

「ふざけんな！ だから……」

「まあ聞きなさい。だからと言って君の親父さん捜しを止めたわけではない」

その一言が耳に入ると、流していた涙を止め、ルカリオはニドキングの顔を見上げた。真剣であり、かつ優しい表情がそこにはあった。目を合わせてニドキングが告げた真実は、驚くべき内容だった。

「ライナスは私の親友だ。親友を放ったらかしにするほどバカではないぞ」

意外にも、ニドキングとライナスは親友であったのだ。事実を明かしたニドキングは、さらにその詳細について説明を始める。

「だが私だけの力では限界がある。そこで、信頼のおける奴らにライナス捜しを手伝ってくれるよう、私は頼んだのだ」

完全に集中して話を聞いているルカリオ。わずかではあるが、希望が見出せたのだ。自分以外にも、父親が生きていると思ってくれているポケモンがいたことが、彼にとって何よりの救いとなった。

「それは一体、誰に……？」

逸る<sup>やほ</sup>気持ちを抑え切れずに、ルカリオは父親捜しをしてくれている者達について尋ねる。ヒトカゲ達も前のめりになりながらニドキングの答えを聞こうとした。

「ライナスの探検隊“チーム・レジエンズ”に匹敵すると言われている、ガブリアスがリーダーをしている“チーム・グロックス”だ」

チーム・グロックス それはガブリアスを中心とした、現時点で右に出る者はいないと言われるほどの凄腕探検家達だ。メンバー編成は明らかにされていないが、ガブリアスを含めて5人という事だけはわかっている。

チームで固まって行動することはあまりなく、ガブリアスが指示し、仲間が単独で動くことが多い。そして彼らもチーム名を名乗る事はない。

「“チーム・グロックス”……知らん」

ルカリオは首を傾げながらそう言った。ニドキングはコケそうになったが、ヒトカゲやアーマルド、さらにはバンギラスもポツポモ知らないと言う。

「ま、まあ表向きには有名でないのかもな、八八……」

苦笑いをして、ニドキングはツメで頬をかいた。当然かとも思っただが、彼らが有名な探険家を知らなかったことに少々残念な気持ちになったようだ。

「んで、そのチーム・グロックスってのはどこにいるんです？」

「それなんだが……私にもわからん」

おもわずもう一度聞き返したくなる答えがニドキングから返ってきた。わからないというのはどういう事なのか、そう訊かれたニドキングは説明をする。

「彼らは常にどこかで活動している。だから所在を特定するのはかなり困難で、誰かからの情報を得るしかないんだよ」

それを聞いて、つまらなさそうな顔をするルカリオ。どうしようかと考えているところに、自分の前方からあの警察官が歩いてきて、ニドキングに話しかけた。

「それなら、あいつが知っているのでは？」

『……ピジヨット警部！』

ピジヨット警部の登場にヒトカゲ達がおもわず声を上げた。「久しぶりだな」と声をかけると、ピジヨットはニドキングと話を続ける。

「あいつとは……ああ、プテラか」

刹那、バンギラスの表情が曇る。実は今、プテラは刑務所を出て、

社会奉仕を行っているのだ。いくら改心したとはいえ、自分の父親を殺した犯人をそう簡単に信用したりできるものではない。

それを知らないルカリオは、プテラに会いに行くと言い出す。本当ならそれを止めたいバンギラスであったが、警察官という立場上、私的理由を持ち出すわけにはいかない。

だがやはり、気になってしまう。そして少しではあるが、プテラに会って話がしたいという気持ちも出てきている。ダメ元で訊いてみようと思ったのか、バンギラスはニドキングに声をかける。

「……………あの、おじさん……………」

そこまで言いかけた時だった。ニドキングはバンギラスの方に手をむけ、それ以上言うなという素振りを見せた。刹那、ニドキングは大声でこう告げた。

「バンギラス巡査。カレッジ圏外での捜査命令を下す。捜査内容は……………“チーム・グロックス”の居場所を特定すること。そしてプテラから情報を聴取すること」

ニドキングにはバンギラスの考える事がお見通しだった。だから命令という形でバンギラスを自由にさせてくれたのだ。目からほろりと涙が落ちる。

「……………了解！」

翌日、彼らは警察学校前にいた。ヒトカゲ達の準備はとつくにできていたが、バンギラスの方が慌しく荷物の確認をしている。

「手帳入れた？ ハンカチは？ 道具は？ 食料は？ おじさんの写真は？」

「あーっもうちょっと黙っててくれよ！ わかんなくなるだろ！」

何かと心配なポツポは気を使ってあれこれ言うが、内容が多すぎてバンギラスにはお経のようにしか聞こえていない。なるべく聞かないようにして荷物を整理する。

「……うしっ、準備完了！ ヒトカゲ、OKだぜ」

「うん、じゃあ行こっか！」

旅の支度ができ、出発できる状態になった。さて行こうとなった時に、ふとバンギラスは声を掛けられる。後ろを振り向くと、ピジヨット警部、ニドキング警視、そしてポツポがこちらを見ていた。

互いに何も言わず、敬礼を数秒間行った。その表情は真剣そのもの。警察官として初めての仕事でもあり、今後の人生にも影響しかない事であるからであろう。

「じゃ、行ってくる！」

そういい残し、バンギラスはヒトカゲ達と一緒に歩き始めた。こうしてヒトカゲ達の旅のお供に、今度はバンギラスが加わったのだ。

### 第36話 あいつは今（後書き）

……しまった、イジってない！（汗）

バンちゃん

「だから別にイジらなくていいっての（怒）」

これは次回イジらなくては……ああっ、バンちゃんの危機だ！（汗）

アーマルド

「そんなにか（汗）」

ヒトカゲ

「あっ、作者さん、今日は……」

今日？ あっ、そうでした。

えっ最後の告知です。1周年企画の締め切りが今日までです。参加してくださる方は、攻略集をお読みの上、メッセージへどうぞ。

### 第37話 標的は1人（前書き）

試験的に、本文に空白を入れてみてください。以前より読みやすくなっているれば、近いうちに一斉修正したいと思います。

ヒトカゲ

「ちなみに企画は集計が遅れております。ごめんなさい。作者さんがだらしなだけです」

……確かにだらしないけど今回は違っぞ（汗）

### 第37話 標的は1人

バンギラスが加わったヒトカゲ達一行は、次の街へと目指して歩いてきた。ニドキングの話によると、プテラはその街中で働いているらしい。

「へー、被害妄想が激しくてイジられキャラになっている、怖い顔してピュアなハートの持ち主のバンギラスって、こいつだったんだ」「一発ぶん殴っていいか、おい？」

要点は押さえているが、本人にとって不快以外の何物でもない紹介を繰り返されると、当然ながらお怒りモードになるバンギラス。拳をルカリオに見せつける。だが、この説明をルカリオ達に話したのはヒトカゲである。

「まあまあ、そんなに怒らないですよ」

当の本人はバンギラスの気持ちを考えてあげているのだろうか、それともただ単にルカリオを庇っているだけなのか、微妙なところだ。

「次言ったら承知しねえからな、つたく……」

だがこんなやりとりは久しぶりだ。何だかんだ言いながらも、バンギラスは嬉しそうにしている。ヒトカゲと会えたことが彼にとつてとても影響していると言える。

「ところで……ポッポ置いてってよかったのか？」



不意にアーマルドがそんな事を言い出した。“ポツポ”という言葉が出てきただけで、バンギラスは唾を喉に詰まらせ、噎せ始めた。

「ゲホツ……な、何言い出すんだいきなり!？」

「だって、あんなに仲良さそうだったからさ、聞いてみただけだよ」

そうは言うものの、実際どう考えていたかは本人のみぞ知る。明らかに動揺しているバンギラスは何を思ったか、真剣に話をし始めた。

「そ、そりゃあ仲はいいけどよ……なんつーの、一緒にいたいっていうのはあるけど、旅って危険だし……それ考えると、待つててもらった方が……」

話していて恥ずかしくなってきたのか、バンギラスの顔は真っ赤だ。俯きながら手をしきりにいじっている。声もだんだんと蚊の鳴くような声に近くなってきていた。

「あ、きのみなってるよ!」

「でかしたヒトカゲ! 早速取つてくか!」

「……てめえら話を聞け!」

話を全く聞いていないヒトカゲとルカリオはきのみとりに夢中になっている。散々恥ずかしい思いをしながら喋ったバンギラスの怒りは辺りに砂嵐を発生させるほどだった。しっかりと聞いていたアーマルドだったが、砂嵐の被害を受けている。

「んでき、プテラって何者なんだよ?」

しっかりと探っていたきのみを食べながら4人は、休憩がてら話をすることにした。その時にルカリオが気になったのが、これから捜しに行くプテラについてだ。

だが、その話になるとヒトカゲとバンギラスの表情が一変する。頭の中ではプテラの事を赦してはいるものの、彼の行いを実際に口にするのは厳しいものがあった。しかし、いつまでも真実を伝えずにいるわけにはいかない。勇気を出し、バンギラスは口を開いた。

「プテラは……俺の父さんを殺した犯人だ」

バンギラスの言葉に沈黙せざるを得なかったルカリオ。聞いてはいけない事だったのかと反省するが、まだ説明をしてくれそうな感じがしたのか、耳を傾ける。

「そしてかなりの情報通でもある。プテラならきつと、チームグロックスの事だけでなく、ライナスやジュプトル、さらにはガバイトのこともわかるかもしれん」

一旦言い出してしまうと気持ちが悪くなり、バンギラスの表情もいつも通りに戻る。ヒトカゲもその様子を見てほっとする。

「そっか……悪かったな、バンちゃん」

「別に気にしてねえ……けどバンちゃんって呼ぶな」

ルカリオは親しみを込めて言ったつもりであったが、逆に怒られてしまった。だがバンギラスはよくイジられることを知っていたため、さらに畳み掛けるように言葉をかける。

「何でダメなんだよ、バンちゃん？」

「うっせえな。ダメなもんはダメだ！」

「なあ、バンちゃんってば。俺達もう友達だろ？ だったらバンちゃんて……」

「……“あくのはどう”！」

我慢できなくなったバンギラスは至近距離で“あくのはどう”をルカリオに放った。もちろんかわすことができず、ルカリオは宙へ吹っ飛ばされる。

「ぜってーバンちゃんって呼ぶんじゃねえぞ！ 殺すぞ？」

そこには警察官としてのバンギラスはいなかった。今いるのは、ナラン八島で平和に、そして自由に暮らしていた頃のバンギラスだ。法律は完全無視である。

カメックスと同行した時以来に仲間からの攻撃を受けたルカリオは軽くシヨックだったようだ。とはいえ、彼を慰める者は誰1人としていない。誰がどう見ても、悪ノリしていたルカリオが悪い。

「相変わらずだね。バンギラスらしいな」

ルカリオがこんな事態に陥っていても、ヒトカゲはほのぼのと昔を懐かしむ。そしてその横で、ルカリオの無様な姿を見て笑いを堪えているアーマルド。後にルカリオにお仕置きされたのは言うまでもない。

何だかんだ言いながら歩いているうちに、夜を迎えてしまった。1本道のため、辺りには木が数本あるのみ。野宿するための洞窟もなさそうだ。

「しゃあないな、今晚は原っぱの上で寝るしかねえな」

残念そうにバンギラスは言う。家に住んでいるポケモンにとって、野宿はあまりしたくないことである。それはヒトカゲとルカリオにとっても同じだ。

「あつ、なんか久々かも」

唯一アーマルドだけが、野宿を懐かしんでいる。溜息をついているヒトカゲ達をよそに、アーマルドは鼻歌を歌いながら草の上にとつかと座り込む。

「ま、みんな飯食おうぜ」

『う、うん……』

どういうわけか、アーマルドが主導権を握って夕食を仕切る。珍しいなと思いつつも、3人も草の上に座り、夕食を楽しむことにした。

「ところでよお、ヒトカゲ」

「ん、なあに？」

ポフィンを片手に掴みながら、バンギラスはヒトカゲに話しかける。手に持っていたきのみを口の中に放り込み、喉元を過ぎてからヒトカゲは話に耳を傾けた。

「そのルカリオを狙ってるのかというジュプトル、大丈夫なのか？」

ルカリオにわざと聞こえないよう、バンギラスはヒトカゲの耳元で小声にして話す。ヒトカゲも会話の内容を悟られないよう、あまり表情を変えずに答える。

「うーん、ルカリオだけしか会ってないからわからないけど……いざとなったら僕の炎があるから大丈夫だとは思うけどな」

そうは言ってみるものの、戦ったことがないためどこか不安そう  
だ。ヒトカゲが言うなら大丈夫だろ、バンギラスはそう言うとき再び  
食事を始め、この話題をやめた。ヒトカゲもそこまで気にす  
ることなく、きのみを貪り続けた。

深夜、4人は芝生の上で床についていた。宿がないため無防備な  
状態での就寝となるが、強面のバンギラスもいることもあり、ヒト  
カゲ達は寝息を立てる程安心してている。

ふと、ルカリオが目を覚ました。自分の首筋を風が通ったようで、  
夢を見ている途中に変な感覚に襲われたのだとか。上半身を起こし、  
辺りを見回す。

「……まだ夜じゃなか。ふあ……」

大きな欠伸をして再び眠りにつこうとした、まさにその時だった。  
地面に生えている草が一齐に伸び始め、まるでロープのように全員  
の体に巻きつく。両手首、両足首、胴体、さらには首まで固定され  
てしまった。

「なっ……!?!?」

突然の出来事に対処する余裕もなく、唯一起きていたルカリオも  
体が不自由となってしまふ。とにかくこの束縛から脱出しようと試  
みるが、もがけばもがくほど草が強く絡みつく。

「往生際が悪いな」

ルカリオの頭上から声が聞こえた。体を動かせないので首だけ上を向くと、そこには奴の姿があった。

「またてめえか。どうしても俺を殺そうってか？ ジュプトル」

聞き慣れた声であったため、すぐにその声の主がジュプトルだとわかったルカリオ。実際に顔を見ると、紛れもなく自分の命を狙っている奴の顔だった。

「ふん、知れた事を。お前を殺すことが俺の最大の目的だ」

「俺はお前に恨みを買われるような事してねえけどな」

口答えするような口調でルカリオは返す。ルカリオがこのような態度をとる度、ジュプトルの感情は逆なでされる。たまらずジュプトルは右手をぎゅっと握り締める。刹那、ルカリオの首に巻かれた草がきつく絞まる。

「う、恨みがあると、すれば……俺の親父、ライナスに、だろ？」  
「……………」

薄々そうではないかと思っていたことをルカリオは口にする。表情こそ一切変わらなかったが、ジュプトルは言葉を詰まらせる。じっと睨むような目つきでルカリオを見下していた。

「どうやら、凶星のようだな。一体親父に何の恨みが……ぐっ!？」

「お喋りはここまでだ。さあ、仲間に看取られながら逝くがいい」

実は既に起きていたヒトカゲ達だったが、彼らは口も塞がれているため、声を出すことすらできずにいた。

一見順調に見えている作戦。しかし、この時ジュプトルは気づいていなかった。バンガラスとアーマルドが、自身の鋭いツメで少しずつ、そして確実に草を切っていたことを。

「ぐっ……い、息が……」

ジュプトルの手を握る力が強くなるほど、“くさむすび”の締める力も強くなっていく。それと同時にルカリオの意識レベルも少しずつ低下していった。

ジュプトルがルカリオにしか注意がいていないことを確認するかのように、バンガラスとアーマルドは互いにアイコンタクトをとる。慎重に機会を窺い、2人は息を合わせて体に巻きついてきた草を引きちぎり、一気に飛び出した。

第37話 標的は1人（後書き）

ルカリオ

「うわゝまた出やがった（汗）」

しかも首絞められてるしね、君（笑）

ルカリオ

「笑うな（怒）作者、いい加減あいつが俺を狙う理由教えるよ」

そいつは無理ですな。

ルカリオ

「お前本当にケチなんだな（怒）」

何とでも言え、犬っころ。

ルカリオ

「ひ、久々に聞いてムカついたぞゴラ（怒）」



第38話 砂地獄（前書き）

約3週間ぶりとなりました。

ヒトカゲ

「うん、大分待ったよ、僕達」

ルカリオ

「暇すぎて2回くらい死にそうだったぜ」

……じゃあ今回の話で死ぬかい？

ルカリオ

「嘘です！ 僕全然暇じゃなかったです！（汗）」

アーマルド

（……必死だな、こいつ 笑）

### 第38話 砂地獄

『「いあいぎり」!』

バンギラスとアーマルドは同時に“いあいぎり”をくりだした。一瞬の隙を突かれたジュプトルは抵抗する間もなく、ルカリオの後方へと突き飛ばされてしまう。

「おい、大丈夫か?」

「はあ、はあ……サ、サンキュー」

すぐさまバンギラスはルカリオの草を解ほどいてやる。息苦しそうにルカリオは肩で呼吸するが、大したことはなさそうだ。それと同時にアーマルドもヒトカゲに巻きついていて草をツメで引き裂いた。4人とも動ける状態になると、すぐにその場で身構える。視線の先には、ゆっくりとこちら側に近づいてくるジュプトルの姿があった。その表情は冷静に見えたが、怒っているに違いない。

「俺は無駄な殺しはしないのだが……こうなれば仕方ない。お前ら全員の口を塞ぐ」

「最初からそのつもりだったんだろ。だったら容赦しねえぜ!」

威勢のいい声でバンギラスが言った。全身にぐつと力を込め、互いに睨み合う。風に揺られて木から離れた葉が地面に落ちた瞬間、攻撃が始まった。

「「エナジーボール」!」

ジュプトルは手にエネルギーを集中させ、球状になったところで

ヒトカゲ達に向けて放った。それをかわさずに立ち向かっていったのは、アーマルドだ。

「メタルクロー」!

鋼のように硬くなったツメで“エナジーボール”を弾き飛ばすことに成功する。飛ばされたエネルギー弾は地面に当たって小爆発を起こす。

「リーフブレード」!

爆発による煙幕の中から、目にもとまらぬ速さでジュプトルが迫ってきた。これをまともにくらえば状況が悪くなることは目に見えていた。

「すなあらし」だぜ!

すかさずバンガラスが“すなあらし”で、自分達の前に砂で壁を作った。これで少しは時間稼ぎできると頭の中で計算した結果なのだろう。

「無駄だ、ふん」!

砂の壁は“リーフブレード”によって切り裂かれ、あっという間にその原形を失ってしまった。だがこれも想定内、対策は既に講じてあった。

「くらえ、“はどつだん”」!

壊れかけた砂の壁の隙間からジュプトルの姿が見えるや否や、そ

こへ向けてルカリオは“はとうだん”を放つ。想像以上に早く放たれた攻撃をジュプトルは回避することができず、正面から受けてしまった。

「やりやがったな…… “いやなおと”！」  
『うあっ!?!』

すぐさま立ち上がり、ジュプトルは不快な音を発し始めた。高い周波数の音はその場にいた全員の耳に入り集中力を欠かせ、行動を止めてしまう。

「覚悟しろ、“リーフブレー”……」  
「させない!“ほのおのうず”！」

向かってきたジュプトルに対して、ヒトカゲは炎をサークル状に放ち、ジュプトルを炎で囲んだのだ。宙にも火の粉が舞っているため、完全に足止めしてしまう。

少しの間、互いの動きが止まる。睨み合いが続いているが、こうしている間にも、ジュプトルは次の行動を考えているようだ。

「…………… “あなをほる”！」

その場に穴を掘り、地中へと姿を隠したジュプトル。この状況で彼が唯一炎から逃れられる方法である。真正面から突っ込んでくると思っていたヒトカゲ達は少々驚いた。

「ど、どうする? これじゃどこから来るかわかんねえぜ!?!」

ルカリオはこの技が厄介であることを既に知っている。だからと言って、対処法を知っているわけではないため、困惑している。そ

んなルカリオの1歩前に立ったのは、バンギラスだ。

「こうするんだよ。“じしん”！」

バンギラスは右足を大きく上げ、全体重をかけて地面へと降ろした。次の瞬間、物凄く大きな揺れが起こる。ヒトカゲ達は立っていることが困難なため、バンギラスにしっかりとしがみついている。

それから直に、地面からジュプトルが這い出てくる。予想以上のダメージを受け、やっとの思いで体を起こし、ゆっくりと立ち上がる。

「その程度か。それじゃあ俺を倒すことなんかできねえな」

ヒトカゲ達に挑発をし始めた。そうは言うものの、4人同時に攻撃を放たれたらさすがにやられてしまう状況だ。それでもジュプトルは笑みを浮かべている。

「じゃあお望みどおりやってやろうじゃねえか！ 行くぜ！」

その挑発にルカリオは乗っかり、3人を引き連れてジュプトルに一斉攻撃を放つべく、ジュプトルに向かって走り出した。だが、それが作戦であることに誰も気づかなかった。

刹那、足下で何度も爆発が起こり始めた。足を取られているため身動きがとれないばかりか、爆発を防ぐこともできないため、立ち往生しながら爆撃を受けるしかなかった。

さらに先程の“じしん”の影響で地面が陥没し始め、ヒトカゲ達は地中へと落下してしまう。防空壕のような穴に4人は閉じ込められてしまったのだ。

「ふん、いい様だ」

「……て、てめえ、一体何しやがった？」

地上からジュプトルが4人を見下している。穴の底に体を強く叩きつけられたルカリオは苦しそうな声で問いかけた。

「地中にいるときに、“タネばくだん”を撒いただけだ」

そう、ジュプトルは“あなをほる”をしたのには2つ理由があったのだ。1つは炎から逃れるため、そしてもう1つは、“タネばくだん”を仕掛けるためである。

“じしん”をくりだすと予想していたため、ある程度のダメージを受ける覚悟で“タネばくだん”を撒き、地面が脆もろくなったところで爆発させることで、攻撃すると同時にそれによって作られる穴に落とす作戦だったようだ。

「生き埋めにしてやる。呼吸できずにもがき苦しみ、死に逝くがいい。“タネマシンガン”！」

“タネマシンガン”を乱れ撃ちするジュプトル。穴の中や周りで小爆発が起こり、土砂が4人に襲い掛かる。爆煙によって何が起こっているかも見るできないまま、数分間攻撃は続いた。

ジュプトルが攻撃を止めた時には、既に穴は塞がっていた。しばらく穴があった場所を見つめていたが、ヒトカゲ達が這い出てくる気配はない。

「死んだか……」

4人が息絶えたと確信したジュプトルは、近くに残されたルカリ

才が持っていたカバンに手をかけようとした、まさにその時だった。先程よりも大きな爆発音が聞こえたのだ。自分以外にこの場に攻撃できる奴などいない、そう思っていたジュプトルが後ろを振り返ると、そこには奴らがいた。

「……しぶとい奴らだな……」

「これはこれは、誉め言葉、ありがとう」

ジュプトルの前に立っていたのは、彼が死んだと確信していた4人。ヒトカゲ、バンギラス、アーマルド、そしてルカリオだ。すっかり余裕の表情になっている。

「あの中からどうやって脱出した？」

「それはな……これだ！ 俺の特技“はどうだん”さ！」

計算外だった出来事にジュプトルは動揺し、その隙を狙ってルカリオは“はどうだん”を放った。それから4人はバラバラに散らばる。

「“リーフブレード”！」

すかさず“リーフブレード”で応戦するジュプトル。引き裂かれた“はどうだん”は青いエネルギーを拡散させ、太陽光の如く彼の体に降り注いだ。

「よくも生き埋めにしてくれたな。そのお礼だ！ 最大級の“すなあらし”だぜ！」

生き埋めにされて怒っているバンギラスは渾身の力を込めて、砂の激流を作り出した。それは真つすぐジュプトルの方へ向かい、彼

の体をいとも簡単に飲み込んでしまう。

「ぐうつ!?」

「じゃあ、みんな最後にあれやるよ!」

ジュプトルが怯んだのを確認すると、ヒトカゲが大声で叫ぶ。その声で3人は一斉に体制を立て直し、大技をくりだす準備に取り掛かる。

「いくぞアーマルド、コンビ技だ!」

「わかつてる!」

怯みから立ち直ったジュプトルが構えようとした、まさにその時、ルカリオとアーマルドは先日バシャーモとの特訓で得たコンビ技をくりだした。

「シザークロス」と!」

「はどうだん”のコンビだぜ!」

“シザークロス”で体に×印をつけると同時に、印の中心に“はどうだん”を当てる。瞬間的に大きな力 撃力が加わり、痛みを感じる前にジュプトルは体を吹っ飛ばされる。

「今度は俺だ! “ストーンエッジ”!」

「くそつ! “リーフブレード”!」

地面に倒れるよりも先に、バンギラスはジュプトルの真下にある岩の破片を特殊な力で宙へと引っ張る。直撃だけは避けるべく、ジュプトルも体を捻って“リーフブレード”で岩の破片を掻き切っていく。



「今だ、ヒトカゲ！」

「……………なにっ!？」

岩を壊すことに無我夢中になっていたせいで、ジュプトルはヒトカゲの事を把握していなかった。バンギラスの背中に隠れていたヒトカゲは、彼の頭上から大きく飛び上がった。

「覚悟! “オーバーヒート”！」

ヒトカゲは今自分が使える最大級の技“オーバーヒート”を放った。大きく広がった灼熱の炎はそのままジュプトルへと降り注ぐ。彼はその身を焼かれ、悲痛な声を上げながら体勢を崩し、その場にな垂れるように倒れこむ。

だがそれでも意識はあるようだ。全身に力を入れ、震える右手で地面を押して起き上がるうとするが、手を伸ばしている時に手首から踏まれてしまう。

「……………がっ!？」

「さあ観念しな、ジュプトル。お前の負けだ」

ジュプトルが顔を上げると、自分の手を踏みつけている犯人であるルカリオの顔が見えた。さらにその周りには、ヒトカゲやバンギラス、アーマルドも構えている。完全に囲まれてしまったのだ。

「本当ならこのまま警察に突き出すけど、お前には聞きたい事がある。全部吐いてもらっからな」

「……………」

勝敗がついても、互いに睨み合いを続けるルカリオとジュプトル。

彼らの目を見て、ただの敵同士ではない、もっと強い何かがあると、  
バンギラスは心の中で呟いた。

第38話 砂地獄（後書き）

ルカリオ

「ジユプトル、敗れたりー！」

相当嬉しいんだね、後でどうなるかも知らずに。

バンちゃん

「つ、冷てえ言い方……（汗）」

ヒトカゲ

「大丈夫、作者さんはそこまで酷いことしないもんね？」

……そ、そんな目で見ないでくれ（汗）

第39話 拷問（前書き）

ヒトカゲ

「ご、拷問？（汗）」

そう、拷問。何か問題でも？（笑）

ルカリオ

「おーし、みんな張り切つていこー！」

アーマルド

「なんでこいつこんなに元気なんだ？（汗）」

### 第39話 拷問

ヒトカゲ達によって、ジュプトルは体に縄を縛られた。そして逃げられないよう常にバンギラスとアーマルドが見張っている。観念しているのかはわからないが、その場に黙って座ったままだ。

「俺達に負けた気分はどうかかな？」

ジュプトルの元に現れたのは、念願の勝利を収めて笑顔になっているルカリオだ。その姿は憎らしく見える。ルカリオの言葉に対してジュプトルは黙ったままだ。

「だんまりか、まあいいか。ヒトカゲ、ちょっとこの近辺から食いもんいっぱい探してきてくれ」

「えっ？ うん、わかった」

どういふ訳か、ヒトカゲをその場から離れさせるルカリオ。近くの木が生い茂る林道にヒトカゲが入っていくのを確認すると、再びジュプトルの方を向く。

「さて……ジュプトル。お前の知っていること、今から全て吐いてもらっぞ」

突如ルカリオは表情を険しいものに変えた。利き手である右手には自然と力が入る。理由も語らず自分を殺そうとしてきた奴を目の前にして、憤りを抑えきれなくなってきているのだろっ。

そう、これから行うのは拷問だ。吐くまで如何なる手段も選ばないつもりであるようだ。そのため、絶対に止めに入るであろうヒトカゲをこの場から遠ざけたのだ。

「じゃあまず1つ。お前の目的は何だ？」

ジュプトルの目線まで屈かがんでルカリオは尋ねる。声に反応してジュプトルはルカリオと目を合わせ、凝視する。

「……………」

しかし、何も喋ろうとはしない。まだ想定の範囲内、いつかは何かを話す気になるはずだとルカリオは思い、質問を変える。

「そしたら質問を変える。俺を殺してメリットでもあるのか？」

実はルカリオが1番気になっていた事を質問に出した。自分に殺されるような理由がないとすれば、相手が自分を殺すことで何らかの利益を得ること以外考えられなかったのだ。

「……………」

だがまたしても沈黙を続けるジュプトル。彼らに捕まってからというものの、一言も言葉を発しようとしな。それどころか、逃げようと暴れたりもしないのだ。

この様子にルカリオ達も首を傾げるしかなかった。逃げるチャンスを探っているのか、それとも気持ちの整理がつかないのか、いずれにせよ十分警戒する必要があると再確認する。

「あんまり気が進まねえが、あまりに沈黙しているとぶん殴るからな」

ここで自分の短気さを思い知らせるような発言をした。力を入れた拳をジュプトルに見せ付ける。これくらいの脅しでは何も喋らな

いとわかっていても、理性が少しずつ抑えられなくなっている彼はこうする他なかった。

それから1時間後、何度も質問を繰り返すルカリオであったが、ジュプトルの口は一向に開かない。その間にヒトカゲも帰ってきたため、ジュプトルを捕まえた時と同じ地点に戻っている。全く以って意味のない時間だったのだ。

「強情な奴だなこいつ……何も吐こうとしねえな」

バンギラスは溜息雑じりにそう呟く。疲れてきたのか、構えていたツメがだんだん下がってきているのがヒトカゲに見えた。

見張りの手が緩んでいるこの隙に、誰かを攻撃して逃げることもできるだろう。ジュプトルにとっては容易いことだろうが、それでも逃げない。それには訳があるのではないかと推測し始める。

「……だつたら吐かせるまで！」

刹那、ルカリオが叫んだ。苛立ちが頂点まで達したのか、とうとうジュプトルの顔を殴ってしまう。バキッという乾いた音だけが辺りに響き渡る。

当然だが、ヒトカゲ達は突然の事に驚く。慌てて止めに入ろうとするが、「止めるな！」とルカリオは一喝。その声を聞いて本能的に足止めされてしまった。

「おい、言え！ 俺の親父と何かあるんだろ！？ だから俺を狙ってるんだろ！ 吐け！」

「……………」

今の一撃で口の中が切れ、口から血を流しているジュプトル。それでも堅く口を閉ざしたままだ。敵であるにもかかわらず、ヒトカゲは少し心配になる。

「ル、ルカリオ、ちよつとやりすぎじゃ……」

「冗談じゃねえ！ 俺はこいつに殺されかけてんだ、やりすぎも何もあるか！」

止めるようにアーマルドは促したが、聞く耳持たずといった状態だ。冷静さを失い、怒りがルカリオの心を支配している。

父親の事についても幾度も頭を過ぎる。一刻も早くこいつから父親の情報を聞き出したい、その気持ちも彼の殴るという行為を後押しする。

ルカリオの尋問、ジュプトルの沈黙、そしてルカリオによる殴打。この一連の流れは数度続いた。正気に戻った時には互いに息を切らしていた。

正気に戻ったとはいえ、同情する余地はないという思いは消えていない。若干苛立ちが残っているルカリオはジュプトルを睨んだ後に舌打ちし、背を向けた。

「もういい。明日警察に突き出して、そこで喋ってもらおう」

拷問は断念する形となった。しばらくはバンギラスとアーマルドが見張ってくれることになったので、ヒトカゲとルカリオが先に仮眠を取ることに。

いつものように、ルカリオはカバンからある物を取り出す。父親から預かっている、神秘的な水晶のような玉だ。それを首にかけようとするところを、ジュプトルは偶然目にした。



「……………！」

その瞬間、ジュプトルの顔つきが変わった。その眼は、長年捜し求めていたものが見つかったときのそれと同じだ。目線を離そうとしない。

都合のいいことに、バンギラス達の注意が少し薄らいでいる。隙を見て、ジュプトルは腕にある葉のような器官に力を込めると、縄を切ることに成功した。

「あつ、てめえ！」

バンギラスが気づいたときには、既にジュプトルはルカリオの背後まで迫っていた。その気配に気づき、ルカリオは回し蹴りをするが、難なくかわされる。

「どういう事だよ？　今まで黙ってた奴が何でいきなり逃走を図ろうとする？」

今度は冷静に対応するルカリオ。腕組みしながらジュプトルを睨みつける。完全に回復していないジュプトルは呼吸を乱しながら、静かに呟く。

「……………やはりお前が……………」

「やはり？　何が言いたいんだ？」

「……………返せ！」

そう叫ぶと同時に、ジュプトルはルカリオに向かって飛び掛る。だが先程受けた攻撃のせいで、全身に鈍い痛みが走った。その場にひざまずいてしまう。

沈黙を通し続けていたと思ったら、再び攻撃を仕掛けてくる。ただならぬ様子にとヒトカゲ達は混乱していた。何を考えているのか全く検討がつかなかったのだ。

そうこうしているうちにジュプトルはゆっくりと、自分を奮い立たせるように立ち上がり、辛そうな表情を浮かべながら、こう言った。

「……『グローバル』へ来い。そこで全てを終わらせる」

それだけ言うと、残っている力を振り絞って全速力で逃げていった。ヒトカゲ達は追おうとしたが、それをルカリオが止める。「おそらく今の奴には戦う気力がない」とのこと。

「な、なあ、グローバルって、こないだの……」

自分の記憶を再確認するかのようになり、アーマルドは尋ねる。バンギラスは何の事だという顔をしているが、彼以外はその言葉をしっかりと覚えていた。

「ああ、あのミュウが言っていた言葉だな。間違いない」

「ミ、ミュウだと!?!」

話についていけないバンギラスが説明してくれと言ったので、ヒトカゲがそれまでの経緯を説明し始めた。何かのキーワードとなっていた『グローバル』、それがジュプトルの口から出てきたことを。

「……っていうわけなんだ」

「そういうことか。だが何でミュウがいきなり現れて『グローバル』なんて言ったんだ?」

「そこが謎なんだよ。でもグルって可能性はなさそうだしな……」

バンギラスの問いに、ルカリオは手を顎につけて考え込む。だがわかったことは、ミュウが言っていたことが本当であった事だけだ。知恵や経験を持ち寄っても答えが出るようなものでもない。それを先に悟ったのか、アーマルドが1歩前に出てみんなに話しかける。

「『グローバル』って、おそらく地名だろ？ 考えるより行った方が早いぜ、きつと」

おそらく、アーマルド自身が活動的な言葉を言ったのはこれが初めてだ。そのせいか一瞬驚くヒトカゲ達だったが、すぐに首を縦に振った。

「うん、行こう、グローバルへ。そこで全てがわかるんだから！」  
「……うしっ、あいつから来いって言ったんだ。行ってやるーじゃねーか！」

意気揚々とヒトカゲとルカリオが声を張った。アーマルドも含め3人が気持ちを切り替えて歩き出そうと足を上げたところで、バンギラスに止められる。

「お、おい待て。その前にプテラんとこ行くからな」  
「……忘れてました」

夜明けも近い頃、何とか逃げ切ったジュプトルであったが、傷ついた体が限界に達し、その場に倒れこむ。息をするのが精一杯といった様子だ。

起き上がるうとしているのか、それとも怒りをぶつけているのか、手に力を込めて地面をガリガリと削る。

「あいつら……絶対ただじゃ済みせんからな……！」

やっとの思いで立ち上がるも、ふらついてそのまま木にもたれかかってしまった。今のジュプトルの原動力は、ほとんどが復讐心によるものだろう。身体を自由に動かせない程だ。

ジュプトルは俯きながら決意を口にして、その復讐心をさらに強めていった。

「20年前のあの日、ライナスのせいで俺は全てを失った。今度は俺の番だ……お前の全てを、俺が奪ってやる……この世から消してやる！」

### 第39話 拷問（後書き）

ルカリオ

「に、逃げられた！？（汗）」

しょうがない奴だな。君は。でも次に会う時は最終決戦になりそうだね。

ルカリオ

「しかも俺のカバン漁ろうとしてるし……もっとボコっときゃよかつたぜ（怒）」

ヒトカゲ

「ところで、今回は……」

あいつ、登場ですよ。バンちゃんに関係するあいつ。

バンちゃん

「もっぺん殺されかけるとか、なしだからな（汗）」

第40話 プテラの元へ(前書き)

今回、そして次回は重要な事だらけだったり？

ヒトカゲ

「そうでもなかったり？」

ルカリオ

「どっちなんだかはっきりしろよ(怒)」

じゃあお前がはっきりさせればいいだろーが！(怒)

ルカリオ

「……………えっ？(汗)」

バンちゃん

「さ、作者どうした？(汗)」

アーマルド

「さ、さあ……………(汗)」

## 第40話 プテラの元へ

「そうだ、“たいあたり”ってのはそうすんだ」

翌日の昼近く、カレッジの隣町『チル』では、とあるポケモンがまだ幼いポケモン達を集めて技を教えていた。

この町は比較的小さい規模の集落が2、3あるのみで、長閑な田舎とあまり変わらない。親が仕事などで日中いないせいか、子供の姿が目立つ。

「じゃあ次、これも基本の“なきごえ”やってみ」

そして、そんな子供を相手にしているのが、1年前まで犯罪に手を染めていたポケモンである。姿は翼竜そのもの。そう、彼こそバングラスの父・ラルフを殺した犯人、プテラだ。

今は刑期を終え、執行猶予期間中なのだ。改心したプテラは社会奉仕活動をするためこの町へ移り、働きつつもこうして子供達の相手もしてあげているのだ。

「おっ、いい感じじゃね〜か。じゃあ今日はこれでおしまい。次に俺が来る時までにな〜んとマスターするんだぜ？」

『はい、先生！』

子供達からは先生と慕われるまでになったようだ。その場で遊び始めた子供達に軽く「じゃ〜な」というと、そのまま歩いてその場から立ち去った。

今現在のプテラの家は、子供達の相手をしていた広場からさほど遠くないところに位置している。それ故わざわざ飛行する必要もなく、歩いて移動している。

帰路の途中にはきれいな小川や草花が目に入ってくる。今まで目もくれなかったものを改めて見ると、小さな感動を覚えてしまうもの。プテラも例外ではない。

「ちよつと昼寝でもすつかなく。どうせ今日はもう何もすることねくしな」

プテラはその場に屈み、翼を折りたたんで居眠りの態勢に入る。目を瞑ろうとした、ちよつどその時だ。自分の視界の中に影が入り込んできた。

何だろうと思って後ろを振り返ろうとする前に、プテラの背後に立っていた何者かが声を掛けてきた。

「久しぶりだな、プテラ」

声を掛けられた側に見れば、1年ぶりに聞く声色。彼にとつては忘れることのできない存在。口封じの対象となった標的・ラルフの息子、バンギラスの声に間違いなかった。

「……あ、あつ……」

振り向くと、そこにいたのはバンギラスだけではなかった。ヒトカゲもいる。そして見慣れない2人の姿もある。それだけでプテラは激しく動揺していた。

バンギラスが口を開こうとしたと同時に、どういうわけかプテラがバンギラスの方を向き、涙ぐみながら地面に伏せる。突然のことにプテラ以外の全員が驚く。



「た、頼む！ 命だけは取らないでくれ！ 頼む……」

その行為はまさしく、命乞いそのものだった。あまりに意外な行動だったため、バンギラスは戸惑ってしまう。その間も、プテラは泣きながら地面に頭をつけ、ひたすら命乞いを続ける。バンギラスが敵討ちに来たと思い込んでいるようだ。

「お、おい、殺さなねえって言っただろ？ とりあえず顔上げてくれ」

その言葉を聞き、半信半疑顔を上げるプテラ。目には涙を浮かべていた。改めて彼らの姿を見ると、殺気などどこにも感じない。そのままバンギラスの話に耳を傾ける。

「実は、お前に協力してほしいことがあってよ、頼みにきたんだ」  
「……俺に？」

予想もしなかった発言に、プテラは首を傾げる。黙ったままバンギラスやヒトカゲが頷いて、何か事件でもあったのかと推測したのだろう。「家で話そう」とプテラが言う。みんなは彼の後を追って、プテラの家へ足を運ばせた。

必要最低限のものしか置かれていない、プテラの家。みんなが到着するなり、バンギラスは話を始めた。軽くヒトカゲ達の経緯を話した後、すぐさま本題に入る。

「……っていうわけで、“チーム・グロックス”について何か知らないか？」

まず切り出したのは、ライナスを捜しているという、チーム・グロックスの情報についてだ。プテラが唸りながら目を閉じている様子から、何か知っているようだ。

「……あんまり言いたかね〜けど、俺にとって1番厄介な相手だったぜ」

嫌な思い出でもあるのか、渋々プテラは“チーム・グロックス”について知っていることを伝え始める。

「特にリーダーのガブリアス。あいつぁ強かった。もう少しであいつにやられるところだったからな。おっそろしくぜ〜」

プテラの話を受け、ヒトカゲ達はガブリアスの事を想像してしまったのか、恐怖を覚えた。ヒトカゲとアーマルドは抱き合っつて小刻みに震え、ルカリオは何故かカメックスを思い浮かべていた。

「それで、居場所は？」

「そりゃ〜さすがの俺でもわからんわ。ましてやライナスを捜してんだろ？ だったらなおさらだな」

あまり期待はしていなかったが、やはりプテラでも彼らの居場所を把握していなかった。これについては諦め、次にライナスについて尋ねる。

先程の発言からわかるように、ライナスの居場所については知らずにいた。だが、プテラはライナスについて気になることがあったという。

「あいつ、行方不明になる少し前から、やたらとライボルトと一緒にいることが多かったな」

これには誰もが驚いた。話に出てきたライボルトというのは、ライナスのいた“チーム・レジエンス”の一員だとルカリオがすぐに説明したからだ。そして、ライナスと一番親しかった者でもあるという。

「何故かは知らんけど、全てを託した、そんな感じに見えたぜ」

一時期ライナスを追っていたプテラが知っているのはここまでだった。それでも十分な情報である。特にルカリオは忘れまいとしっかり集中して聞いていた。

そして気になったのが、プテラが言った「全てを託した」という言葉だった。あくまで憶測の話ではあるが、その言葉がルカリオにとってはどこか引つかるものがあつたようだ。

「今度は僕から訊きたいんだけど、『グローバル』って知らない？」

次にヒトカゲが『グローバル』について尋ねる。これに関して意外にも素早く食いついたプテラは、少しにやつきながら話をする。

「グローバル “一夜にして壊滅した村” だけ。お前ら知らないんか？」

『一夜にして壊滅した村？』

みんなは声を揃えて言った。そんな村があつただろうかと記憶を辿るが思いつかず、その話をしたくてうずうずしているプテラに話すよう頼み込んだ。

「これも、20年前の話でっせ。小さい村なんだけど、夕方までは何ともなかったのに、次の日の朝には建物は全て倒壊、住んでい

たポケモンはほとんど死亡。生き残った奴が1人いたかないかかって話だぜ」

実際に目にしたことはないが、話で聞いたただけだという。だがよく知られた事実として語り継がれているのだとか。そうなると疑い深い彼らでも信じてしまう。

「ところで、何でグローバルなんて名前知ってたんだ？」  
「それなんだけど、実はね……」

ヒトカゲはプテラに、昨日の戦いの様子を説明する。その際ジュプトルが告げた「グローバルへ来い」という言葉に、ずっと頭上に疑問符を浮かべていたと。

しかしプテラは、ジュプトルについて何も知らないと、謝罪するような素振りで言った。残念がるヒトカゲ達だったが、ただ1人、腕組みしながら考え事をしていた。

(……もしかして、ジュプトルの奴、グローバルの生き残り……？  
それとも単にそこを選んだだけか……？)

先程から一点を見つめてこう考えているのはルカリオだ。プテラがグローバルについて話している時からずっと考えを巡めぐらせていたのだ。前者の方が可能性はあると思っっているようだが、それと自身、もしくは父親との関係が見えてこないでいる。

結局それ以上の情報は得られず、あつという間に日が暮れてしまった。長居は無用ということで、ヒトカゲ達は出発しようとする。

「ホウオウか……俺も会ってみてえな。俺が言える資格あるかは

わかんねーけど、頑張れよ」

「ありがとう。嬉しいよ」

プテラから出たのは励ましの言葉。1年前の彼からは想像すらできない変貌ぶりにヒトカゲは戸惑うが、「頑張れ」という言葉がとても響き、心の底から嬉しそうな顔になった。

「あつ、ヒトカゲ。悪いが……」

そこへ、ばつの悪そうな顔をして入ってきたのはバンギラスだ。どうしたのかと尋ねると、バンギラスは手を合わせて頭を下げた。

「ここでお別れだ。一旦署に戻らなきゃならねえし、管轄外の仕事は無理なんだ。本っ当に悪い！」

ヒトカゲ達はすっかり忘れていたが、バンギラスは任務としてついてきてくれていたのだ。一緒に旅ができるのはここまでということになる。

「そうだったあ〜。でもしょうがないよね。寂しいな〜」

「ホントだぜ。バンちゃんがいなくなっちゃうなんて、つまんねえな」

「……ルカリオ、てめえ何回俺にバンちゃんつつつた？」

胸倉を掴まれるルカリオ。昨日に引き続き殺されそうになっている。これを見ていたアーマルドはもちろん、プテラも笑いを堪えている。

「じゃ、じゃあ行くよ！　ありがとね、バンギラス、プテラ！」

「お、置いてくなよヒトカゲ！？」

逃げ腰になりながら、ルカリオを置いてヒトカゲとアーマルドは歩き始めた。慌ててルカリオも彼らの後を追う。残った2人は彼らが行ったのを見届けると、改めて別れの挨拶を交わす。

「また来ると思っからよ、そんな時はよろしくな」

「……わかった。いつでも来てくれ」

2人が互いに軽く頷き、意思疎通を図った。バンギラスは足早にその場を去っていき、姿が見えなくなるまでプテラは見続けた。

しばらくして家へ入ろうとした、その時、プテラは何者かの気配を感じた。久々に神経を研ぎ澄ませて辺りを警戒する。そんな様子を見てか、相手側から声をかけてきた。

「何をそんなに警戒している？ プテラ」

声のする方向へぱつと振り向くと、そこにいたのは、プテラにとっては何故ここにいるのかわからない存在だった。

「……ガ、ガバイト！？ な、何故お前が……」

## 第40話 プテラの元へ（後書き）

嗚呼、バンちゃん。しばしのお別れですな。

バンちゃん

「でも後書きとかで仕事させる気だろ？」

あら、よくおわかりで（笑）

さて、SEも第40話まで来ました。前作ではここでキャラ投票を行いましたが……

ヒトカゲ

「ついにやるの!?!」

……今回はやりません（汗）

ルカリオ

「何でだよ?」

ここでやってしまうと……だから（笑）

アーマルド

「いろいろ不都合が生じる、とても言いたいのか?」

そ、そういう事です（汗）

第41話 蘇り（前書き）

ヒトカゲ

「ルカリオ、メモあるよ？」

ルカリオ

「えっと……“作者、頭痛により就寝。あとは任せた”だと？」

アーマルド

「あーあ、大変だ（笑）」

ルカリオ

「お前も手伝えよ（怒）」



## 第41話 蘇り

「何年ぶりだろうな、お前に会うのは」

プテラの前に姿を現したのは、あのガバイトだった。ガバイトの言葉から察するに、どうやら知り合いのようである。だがプテラは警戒心を解こうとはしない。

「な、何故だ……？ 何でお前がここに……？」

「そうだよなあ、そういう反応が普通だよなあ」

そんなプテラとは逆に、まるで再会を喜んでいるかのような様子のガバイト。不敵な笑みを浮かべ、じりじりと2人の距離を縮めていく。

耐えられなくなったのか、とうとうプテラは、今持っている恐怖心の原因となっている謎について訊いた。

「答える……俺がこの手で殺した奴が、何故ここに平然といる！？」

それは数年前の話。仕事の依頼を受けたプテラはとあるポケモンを手にかけた。その相手こそ、今まさに目の前にいる、ガバイトなのだ。

確かにあの時死んだのを確認した、なのにどうして生きている、どうしてこの世にいるのだ。そう考えているプテラの頭はおかしくなりそうな程混乱している。

その様子を見ながら、ガバイトは鼻で笑う。「いいだろう」と返事をする、プテラの質問に対してこう答えた。

「俺は蘇った。お前によって奪われたこの命を、再びこの身体に宿すことができたんだよ」

一瞬、プテラは我が耳を疑ってしまう。ガバイトの言った事は、非現実的な言葉の羅列。到底信じられるものではないと思うのが当然だが、実際にガバイトは目の前にいる。

「よ、蘇った、だと……？」

「そうだ。あるお方が俺を生き返らせてくれたんだよ」

ますますガバイトが生きている理由がわからなくなってきたプテラ。とりあえず頭の中で整理しようにも、言葉がそのまま並ぶだけで、意味不明でしかなかった。

「あるお方？ 何だ、神様みたいな奴でもいるってーのかよ？」

「いるんだぜ、こんな事ができる神がよ……」

ガバイトは自身が生きていることを「神によるもの」という。これ以上追求しても混乱するだけだと思い、プテラは質問を変える。

「そんで？ 俺の目の前に現れたってーことは、復讐として俺を殺しにきたんだろ？」

蘇ってまで自分の前に現れたということとは、目的は1つ。自分を殺すため。確証は得られていないが、十中八九そうだとプテラは考える。それに対してガバイトの答えは、少々違っていた。

「確かにそれもある。できれば今すぐお前を消し去りてえが、今はやらなきゃならねえことがあるからよ。お前の生前の顔を拝みに来ただけだ」

そう言うと、プテラの横を通り過ぎて背中合わせになる。その時、プテラは感じ取った。ガバイトから放たれる、漆黒の闇の気を。<sup>オーラ</sup>それはプテラの心を簡単に蝕むものであった。闇に飲まれるという表現が相応しいほどに、禍々しく、黒い濁流が心の中に一気に押し寄せてくるものだ。

プテラが我に返った時には、ガバイトの姿は既になかった。恐怖の呪縛から解放されたせいだろう、足の力が抜け、その場につつ伏せになってしまう。

一瞬の出来事とはいえ、余程息苦しかったのか、呼吸が大きい。こんな経験は初めてのようで、動揺を隠し切れない。

「はあ、はあ……な、何だったんだ今のは……？　これが、あいつの言う神の力なのか……？」

しばらくしてようやく落ち着きを取り戻すことができたプテラは、まだガバイトの事を考えていた。どう考えてもおかしいことだらけであったが、今冷静に考えると、ある推測が立ってきた。

（もし命を蘇らせる神がいるとしたら……まさか、あいつを生き返らせたのは！）

それは可能ならば信じたくない推測だった。その推測が正しいとすると、神は悪人を生き返らせたということになるからだ。

そしてプテラは、以前ガバイトが行っていたことを思い出す。確

か、確かと口ずさみながら記憶を辿っていくうちに、ようやく思い出すことができた。

（あいつ、もしかして“やらなきゃならねえ事”って……グライドンを操ることか！？　だとすれば、さっき俺を殺さなかったのはわざとだ！）

再び身体を震わせるプテラ。恐怖心が戻りつつあったのだ。自分の推測はおそらく正しい、ならば確実に言えることはただ1つと、結論を導き出した。

（ガバイトはグライドンを操り、大地を破壊し……この世界にいるポケモンを大量殺戮する気だ！）

一方で、その事実を知っていても、まだ大丈夫だろうと思いついでいたヒトカゲ達がいた。グライドンを操るための『赤の破片』がまだ奴らの手に渡ってないことがその理由だろう。

「ところでさ、グロバイルってどこにあるんだろうね？」

「さあな。あいつから来いって言ったくせに、場所も言わねえなんてな」

ヒトカゲもルカリオも小難しそうな顔をする。そんな中、アーマルドは直感的に思ったことを口にしてみる。

「俺達がグロバイルを捜している間に、体力回復したり、作戦を企てるのかもしれないよ」

なるほど、と感心する2人。しかしそうなると行き先をどこにし

てよいやらわからなくなってきた。とりあえずはハウオウが移動したと見られる北の方角を進んでいるが、それでよいのだろうかと思いを始めてきた。

「とりあえずはこのまま北へ進もう。情報はその途中で集めていけばいいよ」

「そうだな。今回の戦いで、俺らにとって歯が立たねえ相手じゃないってわかったしな」

ヒトカゲの意見に、ルカリオとアーマルドは大きく頷いた。時は必ずやって来る、そう心に言い聞かせて。

「じゃ、早いけど飯食おうぜ」

まだ出発してからそれほど時間は経ってないが、アーマルドが昼食にしようと言い出した。もちろん2人の返事は決まっている。

『賛成！』

ヒトカゲとルカリオは早々にカバンを広げて食料を取り出す。バングラスが持たせてくれたもの、道中で自分達が採ってきたもの、それらを次々と草むらの上へ置いていく。

そしてヒトカゲが好きなリンゴを手を取った、その時だった。手が滑ってしまい、リンゴが地面へと落ちてしまった。それだけならまだしも、運の悪いことにそれが転がってしまう。

「あっ、僕のリンゴ！」

慌ててヒトカゲはリンゴを追っかけていく。だが行く先は坂道になっただけで、リンゴが止まる気配はない。むしろ加速していった。

「待つてよ〜！」

一生懸命追いかけてはいるものの、リンゴの速さに追いつけない。リンゴがようやくやく停止したのは、ヒトカゲからは見えない草むらに隠れていた、ソーナノの足下だ。

「ありま、これリンゴナノ！」

リンゴを食べられると思って嬉しくなり、ソーナノはその場で跳ね上がる。そこにちょうどヒトカゲがやって来て、リンゴを持っているソーナノに話しかける。

「はあ、よかった。それ、僕があっちから落としたリンゴなんだ。返してくれないかな？」

「えっ、ソーナノ？」

ヒトカゲが落としたリンゴだとわかると、ソーナノは素直にそれを返してあげた。しかしとても残念そうな顔をしているのをヒトカゲは見ってしまう。

「……ねえ君、ひよっとしてお腹空いてる？」

それに対して、「ソーナノ」と返事をするソーナノ。話を聞いてみると、今日はまだ何も食べていないのだとか。

このままさよならするのは何だか気が引ける、そう思ったヒトカゲは、リンゴを半分に割り、片方をソーナノに渡してあげた。

「もらっていいノ？」

「うん、あげるよ。食べて」

ソーナノは嬉しそうにリンゴを平らげた。いい事をしたヒトカゲの顔も綻んでいる。そのままヒトカゲはその場を去ろうとしたが、ソーナノのことが少し気になっていいのか、再び話しかける。

「ねえ、1人なの？」

「うん。ひと月に1回おじさんが来てくれるノ」

ソーナノが言うには、そのおじさんというポケモンがソーナノの世話をしてくれて、家にやって来る際に食料を持ってきてくれるのだ。そして次にやって来るのが今日の夕方らしい。

「でも昨日よくばって食べ過ぎちゃったノ。そしたら今日の分なくなっちゃったノ！」

（誰かに似てる……）

今までに会ってきた大食いの仲間を思い浮かべれば、ソーナノに似ている者が誰なのかは想像に難くない。もちろん、ヒトカゲは自分と似ていると微塵も思っていない。

夕方になるまでソーナノは1人。それもまた可哀想だなとヒトカゲは気持ちを察し、そっと手を差し伸べた。

「じゃあ、そのおじさんが来るまで一緒にいようよ」

「……ホントなの？」

夕方までだったら大丈夫と判断し、ヒトカゲは首を縦に振った。彼の返事にソーナノは再び気を良くし、その場で飛び跳ねている。

ちょうどそこに、いつまで経っても戻って来ないヒトカゲを心配したルカリオとアーマルドがやって来た。これはグッドタイミングと言わんばかりにヒトカゲは2人に駆け寄る。

「おい、何やってたんだよ？」

「夕方まであの子の家にいることに決定したから」

『……はい？』

訳もわからぬまま、ルカリオとアーマルドはヒトカゲに手を引く張られ、ソーナノの家へと歩かされた。



第41話 蘇り（後書き）

さて、どうなるかねえ。

ヒトカゲ

「あつ、起きた！」

そりゃあずつと出ないわけにはいかないからね。

ルカリオ

「じゃあ、バイト代よろしく」

おつ、そうだった。はいこれ

ルカリオ

「……ほねっこいらねー！（怒）」

アーマルド

「……じゃあ、俺がもらっとくよ（笑）」

3人

『……えっ？（汗）』

## 第42話 意外すぎる存在（前書き）

サイクス

「なあ、俺らつて次いつ登場するんだ？」

バンちゃん

「さあな。俺はつい最近まで出たから、しばらくはないな」

カメックス

「あの作者の気分次第ってか？ 気に食わねえ」

ドダイトス

「……………みなさん、登場してるだけいいじゃないですか……………（泣）」

3人

『……………あっ（汗）』

## 第42話 意外すぎる存在

「どういう事かちゃんと説明しろよ」

わずか数分で辿り着いたソーナノの家の前で、ただ連れてこられたルカリオとアーマルドがきちんと説明しろとヒトカゲに促す。

「夕方までこの子の保護者が来なくて、1人ぼっちなんだって。可哀想じゃない」

目を潤ませてヒトカゲは訴えかける。どうしてもこの子と一緒に居てあげたいんだと。だがそれだけではルカリオの心は動じなかった。

「確かにそうかもしんねえけど、今はそれどころじゃねえだろ。早くグローバル見つけてあいつボコつたり、ガバイトの計画を阻止したり……」

口ではそう言うものの、実際はめんどくさいだけである。そしてヒトカゲや、旅の途中でブイゼルに会って以来、どうも子供が苦手になっているようだ。

このままでは事がうまく運ばない、そう察知したヒトカゲはアーマルドにこっそり相談する。するとアーマルドはたった一言でその問題を解決してしまう。

「お前、探検家だろ？」

「うっ……」

ルカリオは父親から何度も言われた言葉を思い出した。困ったポ

ケモンを助けないのは探険家として失格だということを。それを怠るのは探検家精神が許さない。

「ちっ、都合のいい時に言いやがって……わかったよ、夕方までな」

これにはルカリオもなく承諾するしかなかった。ヒトカゲもアーマルドも喜んでいるが、アーマルドが喜んだのは、いとも簡単にルカリオを扱えたことによるものだ。

ひとまず、3人は家の中へと入る。子供1人で住んでいる家だからか、全体的に造りが小さく、狭い。アーマルドがようやく通れるほどの枠組みになっている。

「ヒトカゲさん、これ読んでほしいノ」

早速部屋の奥から、ソーナノが絵本を持ってきた。まるでソーナノの父親になった気分ヒトカゲはその場に座り込み、絵本を読み始める。一緒になってルカリオとアーマルドも聞くことに。

「えっと……シ、『シスコンの絆』？」

その絵本の表紙には『シスコンの絆』と書かれていた。ヒトカゲがそれを読み上げると、ソーナノ以外の者はおもわず目を丸くした。

「な、何てもん絵本にしてんだよ」

「シ、シスコンって……」

何故そんな絵本があるのかは別として、世の中には不思議なものがあるな、という解釈を無理にしたようだ。とりあえず、ヒトカゲ

は絵本を開いて朗読し始める。

「昔々、妹が大好きな兄のラティオスがいました。ラティオスがちよっかいをかければ、妹は兄をぶん殴る、そんなこんなで平和に過ごしていました。」

出だしの時点でもはや絵本の題材としてはおかしい内容になっていた。それでもソーナノのお気に入りなのか、楽しそうにヒトカゲの朗読を聴いている。

一方のルカリオとアーマルドは何とも微妙な顔をしている。無理もない、子供が読む絵本の題材がシスコンなのだから。

「……というわけで、めでたし、めでたし。」ふーっ、ようやく終わった」

数十分かけて、ヒトカゲは絵本を読み終えることができた。ソーナノは大満足なようで、ヒトカゲに向かって拍手している。

「じゃあ、次こっち読んでほしいノ」

そう言ってソーナノが次に持ってきた本は、『美女と野獣の物語』というタイトルの絵本だ。今度はまともな絵本のように見える。ヒトカゲ達もほっと胸を撫で下ろした。

「はいはい。えっと……昔、黄緑色の鎧を纏ったような外形の野獣がいた。その野獣は、1人の美しい小鳥に恋をしてみました。」

ヒトカゲがそれを読んだ瞬間、ヒトカゲにルカリオ、そしてアーマルドは吹いてしまった。絵本の内容が面白かったわけではなく、

とある想像をしてしまったためである。

(これ……バンギラスとポツポだよ絶対！)

「……はっ!？」

「ど、どうしたバンちゃん？」

同時刻、隣町のカレッジの警察学校にて、ニドキング警視と話をしていたバンギラスは、背後から何かを感じ取ったようだ。しきりに辺りを見回している。

「……おじさん、今、誰か俺の事呼んだ気がしたんだけど……」

「私には聞こえなかったが？ きっと空耳だろう」

バンギラスは首を傾げるも、あまり深く気にせず、再びニドキングと話を始めた。

この絵本も程なくして読み終わり、またしてもソーナノは満足なご様子。ヒトカゲ達は込み上げる笑いを耐えるのに必死だった。

「最後これ読んでほしいの!」

またしてもソーナノは奥の部屋から絵本を持ってきた。今度こそまともな絵本を持つてくるかと思いきや、明らかに題材としておかしいものが表紙に書かれていた。

「ゴ、ゴッドブラザー……」

絶対に絵本にそぐわない内容とわかっていても、仕方なく読み始めるヒトカゲ。もう突っ込む気さえなくしてしまったようだ。

「むか〜しむかし、極悪ポケモンがこの地域を牛耳っていました。そしてそのポケモンに逆らうと、とてつもないお仕置きが待っていたのです。」

ヒトカゲはそのまま朗読を続けるが、ルカリオとアーマルドだけは何故か身震いし始めた。絵本の内容を知っていくうちに、絵本に登場する極悪ポケモンに思い当たる存在が頭に浮かんでしまったからだ。

(……カ、カメックスだよな、これ……)

「おい、てめえ一体どういつもりだ？」

時を同じくして、とある場所ではカメックスがまたしてもストライクを追いつめていた。仕事の途中に目撃してしまい、路地裏に連れ込んだのだ。

「い、いやだからもう絶対にしませんって言ったじゃないですか〜！」

「はん、どうせ言い逃れだろ。言うておくが、俺の機嫌はとてつもなく悪いぜ？」

何故かしら機嫌の悪いカメックス。ルカリオ達の念を遠くから感じ取ってしまったのだろうか。そしてストライクにとって最悪なこ

とに、ストップパーであるゼニガメがいなかった。

「……覚悟しやがれ！」

『……はあっ！？』

今度はルカリオとアーマルドに強烈な悪寒が襲った。そして同時に心に何か鋭利なものが突き刺さったような息苦しさを覚えた。両手を床について大きく息をする。

「ど、どうしたの2人とも？」

『い、いや、何でもない……』

絵本を読んでいただけのヒトカゲにとって、どうして2人がこのような状態になってしまったのか、全くもって理解できずにいた。

「ありがとうなノ！ とつても楽しかったノ！」

絵本を読んでもらったソーナノの機嫌は良い。一段落してヒトカゲがふと窓の外を見ると、空が茜色に染まっていた。すでに夕方になっっていたのだ。

「もう夕方か……どうする？ 俺らがきのみでも採ってくるか？」

気分転換がてら、ルカリオとアーマルドは夕食になるきのみを捜しにいこうとする。ヒトカゲも一緒に行こうとするが、ソーナノが尻尾を掴んで離さない。

どうしたのかと尋ねると、おじさんが来るまでは一緒に居てほし



いとのこと。そんなソーナノが可愛く思えてきたヒトカゲは、2人で留守番することにした。

「じゃあヒトカゲ、俺の荷物よろしくな。あとアーマルド、俺の財布は置いてけよ」

「……何でバレた？」

それから30分後、ルカリオとアーマルドは近くの森林できのみを採取していた。彼らはきのみを取りつつ、ちゃっかり半分近くその場で食べてしまっている。

その行いに罰が当たったのか、快晴だったにも関わらず突如として雨が降り始める。いくら平気とはいえ、風邪を引いては今後に支障が出てしまうと、2人は同じ事を思う。

「ルカリオ、早めに帰ろう」

「わかってる。何でいきなり雨なんだよ、つたく……」

ルカリオとアーマルドは木の上に登り、いそいそと再びきのみを採取し始めた、その時だった。アーマルドの目に遠くから何かに向かってきているのが見えた。

とはいえ、今は夜。しかも雨が降っていて姿をはっきりと見ることはできていない。だがこれだけはわかっていた。猛スピードでこちらに飛んできていることだけは。

『……うわっ!?!』

それは一瞬の出来事だった。アーマルドがルカリオに「危ない」と言おうとした時には、既に自分達の横を通り抜けていったのだ。

あまりの速さに木々が揺らぎ、ルカリオは木から落ちそうになる。

「な、何だあれは一体!？」

木にしがみつき、何とか体勢を立て直したルカリオ。アーマルドと共に、何かが飛んでいった方向をずっと見ていた。

「……あの尻尾……」  
「へっ?」

突如、アーマルドが呟いた。一瞬であったが、彼は飛んでいったものの尻尾をかるうじて見ることができたのだ。そして驚いたのが、それは見たことのある尻尾だった。

「青色の……傷だらけの尻尾だった」

その頃、ヒトカゲとソーナノはずっと窓の外を見ていた。先程から降っている雨が気になっているようだ。

「雨、全然止まないノ」

「そうだね。ルカリオ達大丈夫かな?」

ちょうどその時、扉を叩く音が聞こえた。最初は雨によるものかと思っただけだったが、再び扉を強く叩く音が鳴り響いた。どうやら来客のようだ。

「あつ、きつとおじさんが来たノ!」

刹那、駆け足でソーナノは玄関へと向かった。ヒトカゲも挨拶を

しなくてはと思い、ゆっくりとした足取りでソーナノの後を追う。

「おじさん、いらっしやいなノ」

「遅くなつてすまんかったな」

玄関先から2人の会話が聞こえてきた。早く挨拶しようとしたヒトカゲが玄関へ辿り着いた時、自分の目を疑う光景がそこにはあった。青、もしくは水色をした身体。真紅の翼。カイリユーとはまた違うが、ドラゴンに属する体形。そして1番の衝撃は、その者の特徴とも言える、体中にある無数の傷跡。

そう、玄関にいたのは、以前ガバイトと対峙した時にメタモンが変身していたポケモンの1人。ポーマンダだったのだ。

第42話 意外すぎる存在（後書き）

ヒトカゲ

「あつ、ポーマンダ（汗）」

ルカリオ

「まずだろこれは……おい作者、コメントしろ」

……みんな、頑張るんだよ（笑）

アーマルド

「ど、どついう意味だよそれ（汗）」

そついう意味さ（笑）

今後は大変な目に遭つていく事が多くなるからね。

### 第43話 逃げる！（前書き）

サイクス

「あー、投稿遅くて俺マジ暇しすぎて飯食いすぎた」

普段から食いすぎの君に言われたくないわ（汗）

サイクス

「ところで今回シリアス？」

えっ、そうだけど？

サイクス

「え〜なら俺帰っていい？」

どういう理由だそれは（汗）

### 第43話 逃げる！

(あそこにいるのって、あのポーマンダ!?)

ヒトカゲは咄嗟に物陰に隠れて様子を伺う。自分の目の前にいるのは間違いなく、ガバイトと戦ったときにメタモンが変身していたポーマンダのオリジナルだ。

今の段階でポーマンダが敵か味方かはわからない。だが本能的に危険を察知したのだろう、ヒトカゲは、今は顔を合わせない方がいいと考えた。

「俺が来るまでいい子にしてたか？」

「うん、ちゃんとしてたノ！」

その一方で、ソーナノとポーマンダは普通の親子と何ら変わりない口調で話している。その様子を見る分には、敵のようには見えない。

しかしヒトカゲには苦い経験がある。良いポケモンだと思っていたプテラが実は敵だったと知った時、計り知れないショックを受けた。それ以来、安易に心を許さないようにしてきたようだ。

(どうしよう……もしポーマンダがガバイト達の仲間だとしたら、まずい事になるのは目に見えている。そもそも、メタモンは何故彼に“へんしん”したんだろう?)

ふと、ヒトカゲは考えた。メタモンという種族は、1度目にしたことのあるポケモンにしか変身できない。そうすると、このポーマンダに何らかの形でメタモンが見たということになる。

何も知らない一般のポケモンにわざわざ化けることはないとなる

と、このポーマンダは只者ではないという結論に至る。無数の傷跡がそれを証明している。

「今日はお客さんが来てくれたノ」  
「お客？」

その言葉が耳に入ると、ヒトカゲの胸の鼓動が一気に高鳴った。万が一自分の存在に気付かれたら、何をされるかわからない。絶対回避せねばと、息を殺してヒトカゲは部屋の奥へと戻っていった。

「お昼にきのみを分けてくれた優しいお兄ちゃん達で、おじさん来るまで遊んでくれてたノ！」  
「そうか、それならお礼を言わなくてはな」

2人は並んで歩き始める。その足音はヒトカゲにも聞こえていた。足音が大きくなるにつれて、恐怖心も大きくなってくる。それでもできるだけ気配を消して動いていた。

そして、ソーナノとポーマンダが居間に顔を覗かせた。しかしそこにいるはずのヒトカゲの姿はどこにもなかった。風が窓から入ってきているだけだった。

「あれ、どこにいったノ？」

ソーナノは首を傾げている。ついさっきまでこの部屋に一緒にいたのに不思議がつている横で、ポーマンダは状況を判断していた。

(……雨が降っているのに、不自然にも窓が開いている……)

30cm程しか開いていない窓。熱帯夜でもない、しかも雨の日  
に開けっ放しにする必要性はどこにもない。ソーナノがするはずな

いと思い、ポーマンダは尋ねた。

「そのお客さんって、どんな奴なんだ？」

「えっとね、ヒトカゲさんと、ルカリオさんと、アーマルドさんなの。もしかして帰っちゃったのかな？」

ヒトカゲ、ルカリオ、アーマルド　頭の中でその言葉を言い聞かせると、ポーマンダは小さく、不敵な笑みを浮かべた。緩んだ口元からは、鋭い牙がちらりと見えている。

「……そうか……」

降りしきる雨の中、ヒトカゲは走っていた。追っ手と思われる者から逃げるために、ルカリオ達が行ったと思われる森林へ向けて。すると向こう側からも誰かが走ってくるのが見えた。影は2つ。その時点で、あの2人はルカリオとアーマルドだと確信したヒトカゲは、動かしている足をさらに速める。

「ヒトカゲ、どうした!？」

ルカリオ達もヒトカゲの姿を確認すると、すかさず声をかけた。どうしたと言ってみたが、実際は何が起こっていたか大体見当がついていた。

「い、家にソーナノのおじさんが来たんだけど、そ、そのおじさんってというのが……」

「あの時のポーマンダ、だろ？」



自分の言おうとしていたことを先に言われ、ヒトカゲは驚いている。まさかとは思ったものの、一応ヒトカゲはアーマルドにどういうことかと訊いてみる。

先程自分達の横を通り過ぎていった者の、青色の、傷が多数ある尻尾。そこから推測できるのはあのボーマンダしかないという結論に至ったと、ルカリオの方を見ながら言う。

「偶然出逢ったとはいえ、敵かもしれない相手にこのうと顔を出すわけにはいかないだろ。それに、味方である可能性の方が少ない気がしてならないぜ」

最後にそう付け加えたルカリオ。彼らもヒトカゲと同じ考えだった。小さく頷くと、3人は走り出した。早くこの場から逃げなければ、その一心で。

「どこへ行くんだ？」

だが、運命はヒトカゲ達を悪い方へと向かわせた。走り出したと思った矢先に、自分達の背後から声をかけられたのだ。3人は足を止めるしかなかった。

十中八九、声の主はわかっていた。ヒトカゲ達はその場でゆっくり後ろを振り向き、自分達の目でその正体を確かめた。

『……………ボーマンダ……………』

そこに立っていたのは、全身に無数の傷跡が存在する、青色の身体と紅色の羽を持つ西洋の竜のようなポケモン、ボーマンダだ。冷静な表情でこちらを見ている。

「お前らが一緒に旅をしているという、ヒトカゲ、ルカリオ、アーマルドか？」

「だったら何なんだよ？」

ケンカ腰の口調でルカリオが応える。どうせ殺すだの何だのという答えが来るのかと思いきや、意外な答えがボーマンダから返ってきた。

「俺について来てもらおうか」

ついて来い。その一言でその後のシナリオが予想できてしまった。このままついていくと敵のアジトに進入、ボスと顔合わせした後に抹殺、そんなところだろうと3人は考える。

敵だと思い込んでいる以上、このボーマンダとガバイト、メタモンとの関係は切れないものとなってくる。それについて遠まわしに訊いてみることにした。

「僕達を、仲間のところへ連れていく気？」

「……まあ、そんなところだ」

ヒトカゲの質問に、笑みを浮かべるわけでもなく、ただ無表情のまま答えたボーマンダ。その風格はジュプトルを髣髴ほうふつされるものがあった。彼と違つところがあるとすれば、憎悪の念がないことだ。

「これでガバイトやメタモンが大喜びするってどこか？」

そうルカリオが言い放つた時、今まで変わらなかったボーマンダの表情が若干変化する。口元が緩み、目を少し見開き小さく驚いた。それからすぐに再び表情を変える。今度はその緩んだ口元が小さ

く笑う。それはヒトカゲ達に更なる緊張感を与えるものだった。

「ガバイトに会ったか……だったらなおさらついてきてもらう必要があるな」

やはりガバイトと関係あることは間違いなかった。そうならば選択肢は2つ。危険と判断してこの場から逃げるか、敢えて相手に従ってついていくか。

大体予想はできてはいるが、確認の意味も込めてヒトカゲはボーマンダに尋ねた。

「もし、嫌だつて言ったら？」

「その時は、無理にでも来てもらう。お前達を連れてくること、それが俺に与えられた任務だからな」

ボーマンダの言葉により、ヒトカゲ達の選択は決まった。ひとまず逃げるしかない。その思いは皆同じで、互いに頷いてそれを確認する。

「せーの」と小さい声で言うと、ボーマンダの横をすり抜けるように走り出した。背を向けてしまつては攻撃されかねないとの判断だ。

「逃げるつもりか。そうはしません」

ヒトカゲ達を追わず、ボーマンダは上空を見上げた。身体を中心に意識を集中し、エネルギーを溜め込む。十分にエネルギーが溜まったところで、口から上空に向けてその塊を発射する。

エネルギー弾が上空まで辿り着くと、分裂して四方八方に飛び散った。分裂したエネルギーは地面へ向かって勢いよく落下していく。この技は、“りゅうせいぐん”だ。

『うわわっ!?!』

突如として目の前に降ってきたエネルギー弾によって足止めされる3人。避けようと後ろを振り向くと、目と鼻の先までポーマンダが迫っていた。

「さあ、来てもらおうか」

狭み撃ち状態になってしまい、3人は戸惑いを隠せないでいる。だが残された選択肢は1つ 強行突破しかなかった。

「はどうだん」!

青白い波導を集め、一気に放ったルカリオ。詠唱なしでもこれは相当なダメージを与えられるはず、という彼の考えは甘かったようだ。

確かにポーマンダに“はどうだん”はぶつかったが、それによって発生した煙が晴れると、一切動じていない様子のポーマンダがそこにはいた。

「なっ……!?!」

これにはさすがに驚かすにはいられなかった。どうしようかと考えている間に、今度はヒトカゲとアーマルドが前に出て攻撃態勢に入る。

「かえんほうしゃ」!

“ロックブラスト”!

2人による同時攻撃。単純に考えて威力は先程の2倍となる。ヒトカゲが放った炎はボーマンダの体全体を覆っている。

しばらくして攻撃の手を止めるが、ヒトカゲ達は驚愕する。炎が止んだ瞬間のボーマンダは全く堪<sup>こた</sup>えている様子がなく、ただヒトカゲ達を見下ろしていたのだ。

「……これで満足か？ なら俺に従え。無駄な争いはしたくない。だがどうしても従わないと言うのなら、次は“りゅうせいぐん”がお前達の体を貫くことになるぞ」

逃げても“りゅうせいぐん”が放たれ、攻撃したとしても全く効かない。これで逃げる術を失ってしまった。まさに四面楚歌の状態だ。

ヒトカゲ達は否応なしに、ボーマンダの要求に従うこととなった。

### 第43話 逃げる！（後書き）

サイクス

「結局、ボーマンダは何が目的なんだ？」

それは次回で全てわかります（笑）

サイクス

「ケチだな。だからゲーム買うときも1番安い店探し回って買ったよ」

そのどろころが悪い（汗）というか何故それをここで言う（汗）

サイクス

「ふっ、俺は眠いとトークが下手になるんだぜ！」

自慢気に言うな（汗）

## 第44話 一対面(前書き)

〔CM〕

ヒトカゲ

「karyuさんの企画、『読んで聞かせて ポケモン川柳!』がスタートするよ!」

ルカリオ

「そしてうちの作者が審査員という……大丈夫か?(汗)」

アーマルド

「詳細・応募・お問い合わせ等はKaryu先生のところへどうぞ」

サイクス

「締め切りは約2週間だぜ!」

バンちゃん

「たくさんの応募、待ってるってよ!」

カメックス

「……俺の喋るところねーじゃねえかてめえら(怒)」

## 第44話 一対面

「さあ、歩け」

ヒトカゲ達は、森の中を歩かされている。1列に並び、最後尾にボーマンダがいる。下手な行動を起こせないように見張りをしながら誘導しているのだ。

「いいか、少しでも妙な真似をしてみる。どうなるかわかるな？」

数分おきに発せられる言葉だ。ボーマンダに隙は見られない。こうなったら覚悟を決めて、敵の本拠地で全員倒すしかない、ヒトカゲ達はそう考えていた。

だがそれと同時に、ボーマンダにまともにダメージを与えることすらできなかったのに、果たしてそれが可能なのかとう考えも頭を巡っていた。

(いつかは戦うことにはなっただろうけど、こんな早いなんて……)

ヒトカゲも歩きながら考え事をしていた。グラードンを操って世界を崩壊へと導かせることだけは止めなければならぬ、ならば早い方がいいに決まっていると言いつ聞かせている。

怖くない、といえは嘘になる。しかし怖いと言っている余裕もない。突破するしか術はない。そしてルギアに頼まれたハウオウ捜しをしなくてはならないと強く思った。

しばらく歩くと森を抜け、ヒトカゲ達の目の前に洞窟が1つ、松たい明まによって照らされていた。どうやらここがボーマンダ達の占拠地



のようだ。

その中から、仲間であろう、鋼鉄の体と4本の足を持ち、顔に当たる部分には×字のプロテクターのようなものがあるポケモンメタグロスが出てくる。彼が見張り番をしているようで、ボーマンダに近づいて小声で話をする。

「ボーマンダ、こいつらがお前の言っていた……」

「そうだ。命令どおり連れてきた。入り口を開いてくれ」

メタグロスは「了解！」と言うと、すぐさま洞窟の中へと入っていった。それを確認すると、ボーマンダがヒトカゲ達に再び「歩け」と命令する。

いよいよ本拠地に潜入かと、3人は同じことを思う。もう後戻りはできない。絶対に計画を阻止するんだと心を引き締めながら、言われるがままに歩き始めた。

「意外と広いな……」

中の通路は想像以上に広く、幅はカビゴン3倍分程あるだろう。周りには小さな松明がいくつも点在し、洞窟の中を淡い光で照らしている。

奥に進むにつれて、目の前に1つの部屋が見えてきた。しかも何者かの影が見えている。今まで以上に緊張感を高めて、3人はその部屋へと入っていった。

「……あら？」

刹那、何やら聞き覚えのある声があった。その方を振り向くと、ヒ

トカゲ達の知っている顔がそこにはあった。

『ゲ、ゲンガー！？』

そう、ヒトカゲ達の前にいるのは、ゴーストの姉のゲンガーだった。どうしてこんな所にいるのかと尋ねようとしたが、それを跳ね除けるほどゲンガーの方が驚いていた。

「うそ、あらーみんなでこんな所まで来てくれたの！？ なんてわざわざ！？ でも嬉しい」

とにかくテンションの高いゴースト。ここって敵の本拠地だよなと、ヒトカゲ達は混乱し始めていた。そんな中、また聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「何を騒いでいるんだ？ 俺様の仮眠を邪魔するな！」

『……バシャーモ！？』

次に現れたのは、自称正義のヒーローことバシャーモだった。少々不機嫌そうにこちらを見ている。ヒトカゲ達は先程以上に驚くことになった。

「ん？ お前達は俺様の弟子共じゃないか！」

(で、弟子共……)

ここまで来ると、何が何だかわからなくなってきた3人。ゲンガー、バシャーモ、そしてボーマンダの顔を順に見回している。

そんな挙動不審な3人の様子を見てどうもおかしいと思ったようで、ゲンガーがボーマンダに向かって質問をした。

「ボーマンダ、あんたまた何も話さないで無理やり連れて来たんじゃないの？」

「……そうだが？」

「そうだが？　じゃないでしょ！　完璧ヒトカゲ君達混乱してるじゃないの！　ただでさえあんた見て悪者だと思うポケモンがほとんどだって言うのに！」

散々避難されるボーマンダ。悪者とまで言われる始末。ゲンガーは慌ててヒトカゲ達のところに駆け寄り、謝りながら事情を説明する。

「ごめんね、恐かったでしょ？　でも安心して、ここはあなた達が思ってるようなところじゃないから」

「えっ、じゃあここは……？」

ヒトカゲはまだよくわかっていないような顔をしている。それに対してバシャーモは、まるで自慢をするかのような口調で自分達の事を明かした。

「ここは、俺達“チーム・グロックス”の本拠地だ！」

『……えっ、ええ〜！？』

この日1番の驚きを見せる3人。ゲンガーの言うとおり、ボーマンダの事をずっと敵だと思っていたため、予想外の事実には腰を抜かしてしまった。

同時に、今までゲンガーとバシャーモの様子がおかしい点があった理由がわかった。あれは自分達が“チーム・グロックス”の一員であることを隠していたためだと。

「そうなのよ、情報が漏れたら大変なことになるから、黙ってたの

よ

「そ、そうなんだ……ってことはこのボーマンダも!？」

ヒトカゲ達はぱつとボーマンダの方を振り返る。無表情の、否、無愛想なボーマンダが静かに口を開いた。

「そつだ。俺もこのチームの一員だ」

この一言でようやく安心できたようで、3人の緊張は解け、その場に座り込んでしまう。若干落ち着いたところで、ヒトカゲはボーマンダに質問をする。

「ソーナノとどういう関係なの？」

「ああ、あいつか……」

一瞬言葉に詰まるが、ボーマンダは事情を説明する必要性を感じ、ソーナノに出会うまでの経緯を語り始めた。

「少し前にな、任務に失敗した俺は瀕死の状態に陥った。その時に偶然俺を見つけてくれたのがソーナノだ。看病してくれて何とか動くことができた。いわば俺の命の恩人だ」

それから、お礼の意味も込めて月に一度、ソーナノのところを訪れるようになったのだ。いつしかソーナノはボーマンダを“おじさん”と呼ぶようになっていたのだとか。

「そうなんだ、だから……」

「ところで、ヒトカゲよ」

ヒトカゲとボーマンダとの会話に入ってきたのは、正義のヒーロースタイルのバシャーモだ。どうやらヒトカゲ達と話がしたかったようで、先程からしきりに顔を覗いたりしていた。

「後でね」

「な、何だと！？ 俺様と話ができないというのか！？」

相変わらずの口調のバシャーモにヒトカゲ達は今まで以上にリラックスできた。ふと3人の顔から笑みがこぼれる。バシャーモは怒っているようだが。

「はいはい聞いてやるから、何だよ？」

まるで幼い子供に対してするような口調でルカリオがバシャーモに話しかける。だが当のバシャーモは嬉しそうな表情に変わる。それでも上から目線には変わらない。

「あれから何か進展はあったか？」

「進展？ そりゃあ……ボーマンダにここにつれてこられたことくらいだな」

ルカリオはボーマンダの方をじいつと見つめながらそう言った。それに対してボーマンダは悪びれる様子を見せず、先ほどから一貫して無愛想な表情を貫く。

「ボーマンダ、お前には素直さというものはないのか？」

「黙れ、軍鶏むしやせ」

バシャーモが1番気にしていること、それは自分をニワトリ、しかも軍鶏扱いされることだ。それをあっさり言ってしまうボーマンダは、バシャーモとあまり気が合わないらしい。

「し、軍鶏だと！？ 貴様は何年経っても俺様を侮辱する気か！？

ならばこの場で正義の鉄槌を　　！」

怒り心頭でボーマンダに殴りかかろうとしたバシャーモだったが、気づくと誰かに体を持ち上げられていた。少しの間もがいた後、後ろをよく見ると、自分を持ち上げた犯人であるメタグロスの顔が見えた。

「やめんか、バシャーモ。ボーマンダも口も慎まんか」

こう見ると、メタグロスはバシャーモとボーマンダの仲裁役のようだ。口喧嘩になってバシャーモが手を出そうとする度にメタグロスが彼を抑える、という光景が容易に想像できる。

案の定、少し落ち着きを取り戻したバシャーモは地面に降りるとそこから動こうとしなかった。腕を組んでボーマンダに対してそっぽを向いてはいるが。

「はは……みんな仲がいいんだね……」

ヒトカゲもこれには何てコメントしていいかわからず、当たり障りのない言葉しか出てこなかった。ルカリオとアーマルドも頑張つて苦笑いしている。

改めて見てみると、誰にでも優しく接するゲンガー、正義のヒーローバカと呼ぶべきバシャーモ、無愛想で何かと荒っぽいボーマンダ、そして彼らのトラブルを解決するメタグロスという、個人の色が強いチームである。

「ところで、お前らのリーダーはどこにいったよ？」

ふとルカリオが気づいた。ヒトカゲとアーマルドも言われて思い出したが、まだこのチーム・グロックスのリーダーであるガブリア

スの姿が見当たらない。

「ああ、リーダーならもうすぐここに到着するはずよ」

ゲンガー曰く、全員が揃った頃に、まるでタイミングを見計らったかのように姿を現すという。今回もおそらくそうだろうとメンバー全員が口をそろえて言う。

ちょうどその時、ザツ、と土を削るような音がみんなの後方から聞こえた。誰もがそれはガブリアスの立てた音だと理解し、彼が通れるほどの道を空けておく。

重く、しっかりとした足音が洞窟内に響く。その音に気を取られているうちに、ガブリアスはその姿をみんなの前に現した。

背中、腕、頭部はサメのような形状をし、体全体は細身の恐竜のように見える。その鋭い眼光でガブリアスはヒトカゲ達をじっと見ている。

「これが……チーム・グロックスのリーダー、ガブリアス……」

#### 第44話 ご対面（後書き）

ポーマンダ

「誰だ、俺を敵だと思い込んでいた奴は？」

ルカリオ

「だってしゃーないだろ、お前の行動なら誰だって悪い奴だって思うから（汗）」

ヒトカゲ

「ホントに恐かったよ（汗）」

うん、しょうがないよそれは（笑）

バシャーモ

「ようやく俺様が再登場だ！ さあ皆の者、俺様と共に悪に立ち向かうのだ！」

ポーマンダ

「誰か、この軍鶏黙らせる」

バシャーモ

「俺様を軍鶏扱いするな！（怒）」

ゲンガー

「……このメンバーでよくやってこれたと思うわ（汗）」

メタグロス

「……そうだな（汗）」



## 第45話 リーダーの威厳？（前書き）

意外にも早く（第47話が）完成したので、投稿します。

ヒトカゲ

「リーダーのガブリアス、どんなポケモンなのかな？」

ルカリオ

「まあ見た目は恐えけど、探検家だから大丈夫だよ」

ポケ助けで有名なチーム・ブラスタスはどうだったけ？（笑）

ルカリオ

「……あれは例外だ（汗）」

## 第45話 リーダーの威厳？

ガブリアスは獲物を下調べするような目つきでヒトカゲ達を見回している。目を合わせるのを避けたくなるほど、彼の目つきは恐いものだった。

刹那、自身のツメをヒトカゲの首に突きつけたガブリアス。驚きのあまりヒトカゲは首を軽く上に動かしたまま固まってしまふ。それにより、ヒトカゲとガブリアスの視線が一致した。

「こいつが……詠唱のできるといふヒトカゲか？」

視線を逸らさずにそう言うと、バシャーモが「はい」とだけ答える。ガブリアスの低く、そして重い声はカメックスのそれよりも気迫のあるもので、ヒトカゲでさえ恐がってしまうほどだ。

ヒトカゲをじっと見続けた後、そのツメを今度はアーマルドに向けた。顔にこそ出していないが、アーマルドの心の中では断末魔の叫びが木霊こだましていた。

「お前が、このヒトカゲと共に行動している仲間だな？」

「は、はい……」

蚊の鳴くような返事がやっとのようだ。またガブリアスはじっと目を見続け、嘘偽りがないかを見極めている。アーマルドはガブリアスの威圧感に負けないよう、必死に耐え続けていた。

やがてそれが終わると、鋭いツメをそっと下ろした。これで終わりかと思っただが、ガブリアスはヒトカゲとアーマルドを掻き分けるようにして前進し、ルカリオにツメを突きつけた。

( やっば俺にもかよ〜！ )

このガブリアスを見て恐がるものが大半であり、ルカリオも例外ではない。カメックス以上に恐い存在はないと思いついていた分、その恐怖は計り知れないほど大きいものである。

だが、ガブリアスが見ていたのはルカリオの目ではない。左胸にある、赤い稲妻の印であった。それを見れば、彼がライナスの家族であることは一目瞭然だ。

「……そうか、お前がライナスのガキなんだな」

「わ、わかっただらそのツメ、お、下ろしてくださいます？」

涙目になりそうなのを必死にこらえて、ルカリオが小さな声で懇願する。3人のことを把握したガブリアスはそつとツメを下ろし、集団の中心に戻ってヒトカゲ達と向き合った。

「俺がこのチームのリーダーのガブリアスだ。今回、お前達をここへ呼び出したのはこの俺だ」

そう、今回ボーマンダに指示し、ヒトカゲ達をここへ連れてくるように言った張本人はガブリアスだったのだ。3人は驚きはしなかったが、ボーマンダのせいで回りくどいやり方だなと思ったのが本音だ。

「僕達も用があつただけで、その前に教えて。何で僕達を呼び出したの？」

話を切り出したのはヒトカゲの方だった。自分達がここに呼ばれる理由が思い当たらないでいるようだ。ガブリアスは岩で作られた台座の上に腰掛けると、頬杖をつきながら語り始める。

「そうだな、まずはヒトカゲ、お前だ。俺らは長年探検家をしてきたが、今までに詠唱ができるポケモンなんて見たことがない。純粹に興味を持ったただけだ」

やはりどこに行っても、ヒトカゲに興味を持たないものはいないということがわかった。当の本人は「それだけであんな恐い思いをしたのか」と、少々気持ちが落ち込んでいる。

「あとは、お前達から情報を聞きたい。お前ら、ガバイトに会ってるよな？」

ガバイトという単語に反応を示す3人。彼らの顔つきを見てガブリアスは、やはりな、という表情をする。ガバイトの事を知っているとという前提で話を進めていく。

「知っていると思うが、ガバイトはグラードンを操って“滅び”を計画している。それを食い止めるのも俺らの仕事だ。何でもいい、ガバイトに出くわした時の情報を俺らに提供してくれ」

彼らも最近になって、ガバイトの事を追っているという。ガブリアスの話によると、ガバイトはグラードンを操るために必要な『赤の破片』を入手するために、各地で動いているという。

殺しこそないものの、建物を荒らしたり、住民に危害を加えたりということが多発しているため、彼らはその元凶となっているガバイトを捕らえることを第一に動いているのだ。

「ガバイトについて……ってよりは、あいつの仲間だな」

先に口を開いたのはルカリオだ。ガバイトと対峙した2回の記憶を整理しながら、ポーランドの方を向いて詳細を説明し始めた。

「俺らが会ったときには仲間はメタモンしかいなかったが、あいつ、何故かはわからんが、このボーマンダそっくりに変身してたぜ」

ルカリオはボーマンダに指を差しながらそう言った。指を差されたボーマンダはもちろん、チームのメンバー全員が驚愕する。付け加えるように、そのせいでさっきまでボーマンダを敵だと思っていたということも告げた。

「……ボーマンダ、お前どこかでそのメタモンに会ったのか？」

話を聞いたガブリアスが疑いの目つきでボーマンダを見る。凄みをきかせているが、本人は全く動じていない。そして静かに首を横に振った。

「会っていない。会っていたら捕まえてここに連れてきてるぜ」

「だったら何でお前に変身できるんだ？」

再度追求するガブリアス。それもそのはず、おそらくボーマンダがこのチームの一員ということがメタモンにバレているからだ。それを見過ごすわけにはいかない気持ちが出る。

「俺にもわからん。要はそのメタモンを捕まえればいい話で……」

「それは無理だよ」

ボーマンダの提案を、ヒトカゲが無理だと断言した。それに続けて、ヒトカゲは困惑した表情を浮かべながらその理由を述べた。

「僕達の目の前で、ガバイトが切り裂いちゃったから……」

メンバーは残念そうにため息を漏らす。一応その詳細も説明するが、普通のポケモンが納得のいくものではない。使えない奴は切り捨てる、このチームにあつてはならないことだからだ。

その中で話題が上がったのは、メタモンの消え方だ。黒い粒子状になって消え去る現象など、誰一人として聞いたことがない。まずはガバイトやその後ろにいる存在が気がりであるともみんなは口を揃えて言った。

「今度は俺から質問させてもらうぜ」

しばらく間を置いた後、ルカリオが前に出る。質問する内容はここに来る前から決まっていた。チーム・グロックスとルカリオを繋ぐ接点　ルカリオの父・ライナスについてだ。

「俺の親父を捜してくれてるそうだけど、何かしらの情報を持っていたら教えてほしい」

ようやく父親についての情報を聞ける、そう思うとルカリオの気持ちは高ぶっていく。しかし、チームのメンバーは何も語らず、ただ何かを拒んでいるような面持ちで俯いていた。

沈黙が続き、ルカリオが焦り始める。彼の心の中では最悪の事態を想像するまでになっていた。その沈黙をガブリアスが打ち破り、質問に答え始めた。

「我々も最善を尽くしている。だが未だ有力な情報は得られていない。というのも……」

「というのも？」

「ライナスのいたチーム・レジエンスのメンバーであるフォレトス、ヨノワール、ヤドラン、エレキブルが何者かによって殺されたからだ」

ルカリオを始め、ヒトカゲとアーマルドも衝撃を受けると同時に、頭の中で記憶がフラッシュバックしてきたのは、今ガブリアスの言った名前の中にもあった、エレキブルの無残な姿。

その犯人は3人にはわかっていて。この事実を受け、ルカリオが命を狙われている理由が何となくわかってきたように思えた。

「……ん、お前ら、何か思い当たることでもあるのか？」

ヒトカゲ達の微妙な表情の変化を、ガブリアスは見逃さなかった。それに動じたわけではないのだが、ガブリアスの問いかけにルカリオは咄嗟に「いいえ」と答えてしまった。

「そうか。ならいい。いずれ話す気になれば話せばいい」

ルカリオ達の気持ちを察したのか、ガブリアスはそれ以上追求はしなかった。その代わり先程の答えに補足することがあると言い、話を続ける。

「そんな中、唯一生き残っているのがライボルトだ。今我々は彼から情報を得るため、彼の行方を追っている」

この発言から、ヒトカゲ達は推測を立てた。もしチーム・レジエンスのメンバーを殺した犯人が同一のポケモンだとするならば、次に狙うのはライボルトに違いないと。

だとすれば、うまくライボルトを見つけることに成功したら、その犯人を捕まえることもできるという考えに至った。犯人捜しよりも、ライボルトを見つけることが先決と決めたようだ。

次の日の昼、若干寝不足気味の3人は眠たい目を擦りながら、ガブリアス達に別れを告げていた。本当なら宿泊など認められないが、ボーマンダが謝罪のつもりで手配してくれたとゲンガーから聞かされた。

「ヒトカゲ君達、隣町まで一緒に行かなくていいの？ 結構遠いわよ？」

ゲンガーがヒトカゲ達を優しく気遣う。できれば一緒に行きたいという気持ちもあるが、一緒にいるところを見られては危ないと判断し、ヒトカゲは丁寧に断った。

「大丈夫。僕には頼れる仲間がついてるからさ」

「それはどいつのことを言っている？」

そこに口を挟んできたのはバシャーモ。心の中では心配しているものの、彼曰く、「正義のヒーローたる者、そのような事を口には出すことは恥である」なのだとか。

「俺らだよ、俺ら！」

バシャーモの言うことにムキになってルカリオが怒鳴る。それに合わせてアーマルドもうんぐんと頷く。ヒトカゲはどう思っているかは知らないが、苦笑いしている。

「じゃあ、何かあったらすぐに連絡してくれ」

「その時になったら、また俺が迎えに行つてやる」

ガブリアスとボーマンダが続けて声をかける。信頼しているからか、はたまた2人に怯えているかは定かではないが、ヒトカゲ達は



無言で首を縦に振った。

徐々に明らかになってきた事実をしっかりと受け止め、3人は1歩ずつ、前進し始めた。

第45話 リーダーの威厳？（後書き）

アーマルド

「……こ、恐かったあ〜！（泣）」

な、泣くほどかい？（汗）

ボーマンダ

「確かにリーダーはよくツメを使って脅してくるがな」

……もしかして、ボーマンダの全身の傷って、全部ガブリアスにつけられたの？（汗）

ボーマンダ

「違う。だがこれについては触れないでくれ」

あ、はい（汗）

そして次回ですが……また出会いがあるわけですね。

バシャーモ

「俺様の出番はこれで終わりだというのが貴様は!？」

ボーマンダ

「朝でもないのに雄叫びするな、軍鶏」

バシャーモ

「ま、また軍鶏って言ったな貴様！（怒）」

ガブリアス

「……黙れ」

ボーマンダ&バシャーモ

『……………』

さ、さすがリーダーですな(汗)

第46話 幸せ者（前書き）

またまた早い更新です。

バンちゃん

「おー珍しい。明日は雪でも降るな」

……実際に今、雪降ってますけど？

バンちゃん

「マ、マジか（汗）」

## 第46話 幸せ者

ヒトカゲは迷っていた。次の街へどう行けばよいかということとお昼ご飯をあまり食べてないので、早く間食をすべきかどうかというのを。

ルカリオは悩んでいた。この先何かあったときに、ヒトカゲ達を巻き込んでよいのだろうかということ、夕飯代をいつもより少なめにしようかということ。

アーマルドは怯えていた。真剣な表情のルカリオを見ると、殴られてしまうのではないかということ、茂みの中からサイホーンが唸りながらこちらを見ていることに。

『はあ………』

それぞれ心に何かを抱えながら、3人は同時にため息をつく。思えば、最近息つく暇もないほど色んな事が起きている。だが時間は彼らを待ってはくれない。

ホウオウやディアルガ、ライナスを捜すことももちろんだが、それより先に目の前にある問題　ガバイト、そしてジュプトルの計画阻止を優先しなければならぬ。

それは彼らにとって重荷であることには変わらないが、どうも1つ1つが結びついていっているような気がしてならないと、ヒトカゲとルカリオが口を揃えて言うようになっていた。

「それにしても、ゲンガー姉さんの言った通り、隣の街まだ見えてこねえな」

すっかり気持ちが悪く参っているせいか、疲れた様子のルカリオが小さく呟く。歩き始めてから半日も経っていないが、それでも全体の

2割ほどしか歩いてないと考えると、相当遠いことが窺える。

「うん。俺そろそろ休憩したいな。水が飲みたい」

「僕も休みたい。お腹空いたから何か食べたいな」

そう言っただけで、3人は目の前に休憩スペース目的の建物をよく発見した。その建物というのは、長距離を移動するポケモン達の憩いの場となっており、大広間と食堂、そして寝室が用意されている。

『天国へ向かってレッツゴー！』

ある意味、この3人、似たもの同士なのかもしれない。ヒトカゲを先頭にルカリオとアーマルドも全速力で走り始めた。

同時刻、その建物の中では、大勢のポケモン達が長旅の休憩を取っていた。その中に混じって、周りと少し空気が違うポケモンが2人、会話をしていた。

「ここって、地元と違って随分広大なところなんですな」

丁寧な言葉遣いと、少しばかり上品そうな口調でそのポケモンは喋っている。話し言葉から察するに、のポケモンのようだ。

「ええ、ここらは地元よりも自然も豊かで、昔私がいた時も住みやすかったですよ」

のポケモンの相手になっているのは、のポケモンだ。周りのポケモン達より体が比較的大きいためか、声が低い。しかしその体

格からは想像し難いほど温厚な様子だ。

「じゃあ、そろそろ行きましょうか」

「そうですね。あ、会計してきますので」

そう言うと、のポケモンは食事代を払うために係員のところへ  
と行ってしまふ。その場に残っていても仕方ないので、のポケモ  
ンは先に外に出て待とうとした。

扉が開き、前へ1歩足を出した、まさにその時だった。猛スピード  
でこの建物に向かって走ってきていたヒトカゲ達が、正面から彼  
女に思いつきりぶつかってしまった。お互いに体が地面に叩きつけ  
られる。

その時に出た叫び声を聞いて、連れのポケモンが慌てて外へ出  
ると、一緒にいたポケモンが倒れている姿が真っ先に入った。

「だ、大丈夫ですかお嬢!？」

『…………お嬢?』

うつ伏せに倒れているヒトカゲ達の耳に入ってきた、『お嬢』と  
いう言葉。ルカリオとアーマルドには違和感がある言い方だが、ヒ  
トカゲには懐かしい響きである。

その声色からしても、また懐かしいものを感じたようだ。ヒトカ  
ゲはすぐに起き上がって声のした方を見ると、予想通りのポケモン  
の姿があった。

「…………やっぱりドダイトスだ!」

「えっ、ヒトカゲか!」

大きい甲羅の上に生えている広葉樹が印象的な、陸亀のようなポ  
ケモン・ドダイトスがヒトカゲを見て驚きの声を上げる。嬉しさの

あまり、顔が綻んでいる。

「じゃあぶつかったポケモンは……チコリータ？」

「ん、ちよつと違うかな？」

ヒトカゲの質問に答えながら起き上がったのは、頭には葉っぱ、首につぼみを持ち、黄色い体をしているポケモンだ。そのポケモンは、ベイリーフと呼ばれている。

「ま、まさかチコリータから進化したの!？」

「そつ　数カ月前にめでたく進化しちゃったのよ」

チコリータ、もといベイリーフは嬉しそうにヒトカゲに擦り寄る。ヒトカゲも大はしやぎしてベイリーフやダイトスの周りを行ったり来たりしている。

その3人で和気藹々としているため、ルカリオとアーマルドは存在を忘れられている。擦り傷程度の怪我ではあるが、誰からも気にされないとなると痛みも大きく感じてしまうものだ。

「おい、俺らを無視すんじゃないねえ」

傷口を押さえながらルカリオとアーマルドがヒトカゲ達の元へやってきた。ルカリオが若干苛立っているのを感じたヒトカゲは、一瞬全ての動作が止まってしまう。

「あつ、彼らは誰なんだ？　ヒトカゲの新しい友達か？」

彼らの存在に気づいたダイトスがヒトカゲに訊いた。それにすぐ答えたのはヒトカゲではなく、何故か胸を張って堂々としているルカリオだ。



「俺はヒトカゲの養育係、ルカリオだ。訳あってこうやって一緒に行動することになった、よろしくな」

(よ、養育係……)

ヒトカゲにベイリーフ、ドダイトス、そしてアーマルドまでもがこの発言に引いた。ベイリーフとドダイトスはルカリオの第一印象を「変な犬」と心の中で呟いた。

後々の説明で、自分はライナスの息子であるとルカリオは明かしたが、それでも最初の一言というものは印象が強く、「変な犬」のレッテルは貼られたままだった。

「ま、まあ、随分個性的な方なのね……」

そう自分に言い聞かせることで、どうにかベイリーフは心を落ち着かせることができたようだ。彼女は次にアーマルドに興味を移す。

「俺、アーマルド……よろしく」

特にこれといって紹介することもないアーマルドは簡単に挨拶だけを済ませる。それだけかと思わず聞き返したくなってしまったベイリーフとドダイトスだったが、ヒトカゲに止められる。

「あ、アーマルドはあまり喋るのが得意じゃないんだ。それでも喋れる方になったんだよ」

(よ、余計な事言っなよ……)

この説明にアーマルドは顔を赤らめる。周りにはただの大人しいポケモンだと思われたいらしく、いらぬ説明をされて急に恥ずかしくなってしまったのだ。

すっかり俯いてしまったアーマルドの元にやってきたのは、ベイリーフだ。きつと自分を慰めてくれるんだ、何て優しいポケモンなんだと、幸せな気分いっぱいなアーマルドの心の中は、一瞬にして沈むことになる。

「わゝ、やっぱり体がたいのねゝ！」

「……………そっちかよ……………」

ベイリーフは“つるのムチ”でアーマルドの体を軽く叩いて硬さを調べている。お嬢様ならぬ行動をドダイトスがすかさず止めに入る。アーマルドはすっかり意気消沈だ。

「と、ところで、2人は何でこっちにいるの？」

ヒトカゲはアーマルドを少し慰めた後、ドダイトスにポケラス大陸にいる理由を訊ねる。すると、ベイリーフもドダイトスも、顔を赤くしてにやけ始める。

「……………ぬはっ」

感情を抑えることができなかつたドダイトスが、思わず笑みをこぼしてしまった。地団太を踏んだり首を左右に振ったりと、恥ずかしがっているようにも見える。

これは手に負えないと判断し、ベイリーフに質問をし直す。彼女も照れくさそうにはしているが、はっきりと質問に応じてくれた。

「実はね、今私達、旅行中なの。2人だけでね」

幸せそうな顔をしているベイリーフとドダイトス。どこからどう見てもカップルにしか見えない。ヒトカゲ達はどう接していいか戸

惑っていた。

「まあ、婚前旅行とも言えますな」

調子に乗ってドダイトスがそう付け加えた。だが結婚の予定は一切ないということ伝えていないため、ヒトカゲ達はその場で飛び上がるほどかなり驚いていた。

全員が落ち着いた頃、ヒトカゲは自分のこれまでの経緯についてベイリーフ達に明かした。ホウオウにディアルガ捜しだけでも大変なのに、と愚痴を漏らしてしまう。

ベイリーフ、そしてドダイトスも1年前ヒトカゲと一緒に旅をしてきたが、今回の方が断然大変だと感じている。そう感じた際、ルカリオの方をちら見したのは気のせいだろうか。

「そうなの……なら、この先にある友達の家まで一緒に行こうかと思っただけ、やっぱり邪魔になっちゃうかな？」

申し訳なさそうにベイリーフが言った。しかしそのような理由で同行を断るヒトカゲではない。むしろ一緒に行きたくてうずうずしていたところだ。

「そんな事絶対はないって！ だから一緒に行こうよ、ね？」

ヒトカゲは必死になってベイリーフとドダイトスにせがむ。ここまで行きたそうにしているのを無理に断ることもできない。2人の答えは決まっていた。

「じゃあ、私とお嬢と行きますか！」

嬉しさいっぱいのだだイトス。ヒトカゲが喜ぶ姿を見てベイリーフも自然と笑顔になる。そしてそれはルカリオとアーマルドも同じである。

こうして一緒に行動することになった、ベイリーフとだだイトス。まずはベイリーフの友達がいるという隣町に向けて歩き出した。

第46話 幸せ者（後書き）

ベイリーフ

「やっとSEに登場できたわ〜！」

ドダイトス

「ようやくですよ。いや〜長かった」

連載8カ月目にしてようやく出したからねえ。

ベイリーフ

「次回は私の友達が出るのよ。これも楽しみだわ」

ドダイトス

「じゃあ、記念という事でここは一杯……」

やりません（汗）

第47話 永遠の守護（前書き）

ベイリーフ

「今回は私の友達が出るわけだけど……」

ドダイトス

「またキャラぶっ壊しとかじゃないですよね？（汗）」

大丈夫、それはないよ。

ただ……うん、とりあえず見てください（笑）

ベイリーフ

「だ、大丈夫かしら？（汗）」

## 第47話 永遠の守護

それから2日間、ヒトカゲ達は次の街へと続く1本道をひたすら歩いていた。途中何度か休憩小屋へ立ち寄った以外は、ずっと歩きっぱなしだ。

会話をしようにも、会ったその日にベイリーフとドダイトスに旅の目的などを話してしまったため、ネタがない。2人についてあれこれ聞いても、結局はにやけるばかり。苛立ち半分、呆れ半分といった具合だ。

「おっ、そろそろ着きますよ」

そう言ったドダイトスの目線の先には、木造の小さな小屋が1つ、広大な草原の中に置かれていた。家の周りには、おそらく家主が植えたであろう花が咲き誇っている。

「ここが、ベイリーフの友達の家なの？」

ヒトカゲが訊ねると、ベイリーフは何も言わずに首を縦に振る。これを見たルカリオは不思議に思う。仲のいい友達に会いに行くような空気ではないのはどうしてだろうか。

実際、ベイリーフの表情もそんなに明るくない。ヒトカゲはどうしたのかと問いたくなるが、聞かないほうがいい事なのかもしれないと表情から察し、口を噤んだ。

「お嬢、大丈夫ですか？」

「……大丈夫よ。今のところはね」

ドダイトスが心配そうに声をかける。何ともなさそうにベイリー

フは返したが、何かを堪えているのか、声が少しばかり震えている。

「おい、俺達も行っていいのか？ とても楽しそうな雰囲気じゃねえみたいだし……」

やはり、どう考えても“そういう”雰囲気でないらしい。ルカリオが念を押すかのようにベイリーフとドダイトスに言う。ドダイトスは返答に困っていたが、ベイリーフはすぐに答えを出した。

「うん、来て。むしろ来てほしいくらいだもの。大勢の方が喜ぶだろうからね」

そう言うのと、先導するようにその家に向かって歩き出す。いまいち状況がつかめないでいるが、とりあえずみんなは彼女の後ろをついていった。

家の前までたどり着くと、ベイリーフは一呼吸おいて、自身の“つるのムチ”で扉をノックする。みんなは扉の向こう側の存在を気にしているせいか、うずうずしている。

間もなく、ゆっくりと扉は開かれた。扉の奥からは少しだけ顔を出しているポケモンが1人。赤と白色の、戦闘機を思わせる体と、可愛らしい大きな目をしているのポケモン・ラティアスだ。

「あっ、ベイリーフ」

小さな声でラティアスはベイリーフを呼ぶ。依然として扉から顔しか出していないことから、おそらく極度の恥ずかしがり屋なのだろうという印象をヒトカゲ達は受けた。



「ごめんねラティアス。来るのが遅くなっちゃって……本当はあの時すぐに行きたかったんだけど……」

「ううん、気にしないで。来てくれただけでも嬉しいもの。あっ、入って」

ラティアスは大きく扉を開ける。その時に初めてヒトカゲ達の存在に気づいたのか、扉に隠れるようにして顔だけ出している。

入り際にヒトカゲ達は軽く自己紹介していく。ルカリオが挨拶しようとしてラティアスの方に目をやった時、あるものが目に飛び込んできた。

ルカリオが見たもの、それはラティアスの首からぶら下げられていた、透き通った、薄い青色の宝石のようなものであった。それが何なのかをルカリオは瞬時に理解した。

（あれは……そっか、だから……）

何も言わずに、そっと会釈してその場を通り過ぎる。あまり賑やかにしてはいけない雰囲気になっていた理由がようやくわかった瞬間であった。

「み、皆さん。来てくれてありがとうございます」

藁でできた座布団に腰掛けたみんなに、ラティアスがお礼を言う。神妙な面持ちのヒトカゲ達に向けて、ラティアスは首からぶら下げている宝石らしきものを手に取る。

「……きつとこうなってしまった兄も、嬉しがっていると思います」

こうなってしまった、その言葉で全員が俯いてしまう。そう、ラティアスが持っているものは、“こころのしずく” 今は亡きラティアスの兄・ラティオスの魂が結晶化したものである。

1年程前、ラティオスは不治の病を患ってしまった。何の前触れもなく突然降りかかった災いは、病気を患ったラティオスだけでなく、妹であるラティアスの心をも蝕んでいった。

日に日に衰弱していく兄の姿を見ているだけで酷だった。どうしても自分の兄だけ……と嘆く度に、ラティアスを気遣ってラティオスは優しい言葉をかけた。

「泣くなよ……泣いた分だけ、楽しいことが逃げちまうぜ？」

その言葉を聞くと、自然と勇気付けられたという。それでもどうしても涙が止まらない時があり、その時はラティオスに気づかれないうちに声を殺して泣いていた。

そしてとうとう臨終の日を迎えてしまった。笑顔を保とうとするも、どう頑張っても涙が出てくるラティアスの腕の中でラティオスは天へと旅立っていったという。その直前、最後にラティオスはある言葉を残していった。

もうすぐ姿が変わって、お前と喋ることもできなくなるだろう。ただどな、ずっと一緒だからな。死んだって俺とお前は兄妹なんだからな。忘れんなよ……

「……そう言うってから直に、兄はこの“こころのしずく”に姿を変えました」

ラティオスが死ぬまでの経緯を、1つ1つの思い出を思い出しながらラティオスがみんなに明かした。友達であるベイリーフを始め、その場にいた全員が目には涙を浮かべていた。

死という現実を1番受け入れたくないのはラティオスであるように、それでも自分の妹のことを1番に考えてくれていた、その心意気に感動したようだ。

「そうだったの。ラティオス、本当にごめんなさい。すぐに行つてあげたかつただけ……」

「いいのよ、事情も事情だったんだから」

ベイリーフは深々と頭を下げる。実はラティオスが亡くなったのは、ベイリーフ、つまり当時のチコリータがヒトカゲ達と旅をしていた時だったのだ。その情報が入ってきたのは、アイランドが平和を取り戻してからだ。

ラティオスもそれを理解していたため、連絡を遅らせたのだとか。そしてベイリーフがすぐに訪れることができなかった理由を聞いたときにヒトカゲの名前が出てきたのだらう、ラティオスはヒトカゲの事を知っていた。

「あ、あなたが、ベイリーフと旅してたヒトカゲ君？」

一旦顔を見てしまえば慣れるが、それでも緊張した面持ちでラティオスはヒトカゲに話しかける。涙を腕で拭い、ヒトカゲが首を縦に振った。

「話は聞いてますよ。私、ちょっとヒトカゲ君に憧れてるの」

「えっ、僕に？」

ここに来る前、ベイリーフがラティアスの所へすぐに行けなかったことを電話で話した際、ヒトカゲ達と旅をしていたことを話題に出したため、ヒトカゲの事は知っていたのだ。

その話を聞き、ヒトカゲに憧れを抱いていたのだという。その理由を訊くと、ラティアスは目線を“こころのしずく”に向けて話し始める。

「……私は、兄が生きていた頃は何でも兄に頼りっぱなしで、火起しすらままならなかったの。そしていざ兄がいなくなった後、私は一人で何もできなかった……何をどうすればいいか、全くわからなかったのよ」

ヒトカゲ達はただ、哀れむことしかできなかった。小さく体を震わせ、必死に泣くのを堪えている彼女にかけてあげる言葉も見つからずにいた。

「だから、たとえどんな困難があろうと、いつも前向きに進んでいくヒトカゲ君が羨ましく思ったのよ。今だって、何か目的があつて旅をしているのでしょうか？」

まだ旅をしていると明かしていなかったはずなのに、ラティアスに見透かされてしまう。語ると長くなってしまうので、ヒトカゲはとりあえず「うん」とだけ返事をする。

「いいなあ、私も一緒に旅できたらなあ……」

ラティアスが小さく、ため息混じりに呟いた。それに対して、ヒトカゲもベイリーフもすぐには旅を勧めることができずにいた。

アーマルドの時は別として、今回の旅の目的は相当危険を伴うものだとわかっている以上、はいどうぞと軽い返事をすることはでき

ない。ベイリーフの時も、ドナイトスが同伴するということでメガニウムからOKをもらえたのだ。

ルカリオも首を傾げながら唸っている。どうすればよいものか、誰もがそう考えていた時、突如として声を上げた者がいた。

「…………俺は、来てほしい」

そこにいた者達が声のする方をぱつと振り返ると、みんなの目に飛び込んできたのは、真剣な眼差しをしているアーマルドの姿だった。さらに彼は続ける。

「俺は、ヒトカゲ達と一緒にいたから変わった。ヒトカゲとルカリオはどうしようもない俺を救ってくれた。だから、一緒に来れば何かを変えることができる。絶対に」

「…………アーマルド…………」

初めて聞いた、アーマルドの本音。ヒトカゲとルカリオは確かに実感していた。アーマルドがどれ程変わったか、どれ程心を開くようになったかを。

「ごめん、と一言だけ口を開いた日からそこまで月日は経っていないが、今は敵に立ち向かうことができる。意思疎通も難なくできるようになっている。それを考えると、短期間でここまで変化を与えたのはヒトカゲ達がいたからだ。アーマルドは信じている。」

「危険はいつぱいだけ…………俺は、後悔してない。もし死ぬようなことがあったとしても、ヒトカゲ達といれた、それだけで生きていてよかったと思える。そのくらい、すげー奴だよ」

アーマルドの熱弁を誰もが聞き入っていた。もちろん、旅に出たいと言っていたラティアスも。説得力のある言葉一つ一つに心打た

れていた。

自分も、変わるかもしれない。兄に依存していた過去の自分を  
払拭できるかもしれない。その気持ちはもう抑えておくことができ  
なくなっていた。

「……私も、一緒に行かせてくれないかな？ 一緒に旅をして強く  
なって、今度は私が兄を護りたい 『永遠の守護者』 になりたい  
！」

ラティアスは決心した。ヒトカゲ達と一緒に旅をして、精神的に  
強くなること。そして今は亡き兄を永遠に守護していくことを、心  
の中で固く誓った。

ここまで強い想いをぶつけられれば、断る理由はどこにもない。  
アーマルドはもちろん、ヒトカゲ、そしてルカリオも答えは決まっ  
ている。3人は同時に答えを出した。

『一緒に、行こう』

## 第47話 永遠の守護（後書き）

……というわけで、新しい仲間になりました、ラティアスでございます。

ラティアス

「ど、どうも……」

採用理由ですが、ヒロインキャラを出したかったのがまず1点。そしてやはり可愛くて、世の男子や ポケモン達が「俺の嫁」というべきキャラを1回は出して見たかったからです（笑）

ラティアス

「お、『俺の嫁』って……?」

あ、気にしないでいいよ（笑）

ラティオスもずっと前に考えていましたが、まあシスコンの方で頑張っているので、今回はこころのしずくになってもらいました。

ヒトカゲ

「これで仲間が3人になった」

ルカリオ

「あと1人いるんだよな？ 誰だよ？」

……それでは、また次回！（汗）

アーマルド

「に、逃げた（汗）」

第48話 旅に出る前に(前書き)

ルカリオ

「また遅れたな」

すみませんでした(汗) 何とか頑張っ  
ていきますので(汗)

アーマルド

「俺の順番……」

ちやっかり要求するんじゃない(汗)



## 第48話 旅に出る前に

早速、ラティアスは旅に出る支度を始める。彼女にとって旅は初体験なので、何を準備すればいいさえわかっていないようだ。

「ラ、ラティアスちゃん、それは何でしょうか？」

ラティアスの事が気になりになり、ドダイトスが準備の様子を伺いに来た。そこに広がっていたのは、およそ2m四方の布の上に山のように置かれている荷物だった。

「えっ、寝床用の藁と、兄の持ってた便利アイテムに、料理道具、大切なジラーチぬいぐるみ、それと……」

「あ、あの〜ラティアスちゃん？ 旅にそんなに荷物はいららないですよ？」

見かねたドダイトスが一緒に荷物の整理を手伝う。旅に必要なものはまずは食料だと指導し、家にあるきのみをできる限り入れていく。

「それから、お酒です。お酒は消毒の代わりにもなるので、絶対に入れておかなければ……」

「ドダイトス、ちょっと来て」

食料の貯蔵庫にあった酒を袋に入れようとした時、ベイリーフの優しい声がドダイトスの耳に入った。ドダイトスはベイリーフが怒っているのを確信し、身震いする。

「は、はい……」

警備員たるもの、護衛する相手の言うことを聞かなければならぬ。たとえ何をされるかわかっていても、足を運ぶしかないのだ。ベイリーフに呼ばれて数秒後に、外からドダイトスが絶叫する声が響き渡った。

「おい、ラティアス」

「な、何でしょう？」

戸惑っているラティアスの元に、ルカリオがやって来た。ルカリオは誰のときでもするような接し方のつもりだったが、ラティアスにとってはぶっきらぼうなものの言い方に聞こえたようだ。若干恐がっている。

「この家にある金は全部出せ。そして全部無くなる覚悟を今のうちにしとけ」

まさか金を要求されるとは思ってもいなかったラティアス。目を丸くして驚いている。しかも全部無くなると言われると、どうも怪しいと疑ってしまう。

「ル、ルカリオさん。私のお金を一体どうしようかと？ 遊びに使うのだったら出しませんよ！」

「ちげーよ。全部食費に消えていく運命だ……」

悲しそうにルカリオが小さくため息をつき、自ら財布を差し出す。ラティアスがその中を確認すると、数枚の硬貨しか入っていないかった。金属音が空しく聞こえるのみ。

これは可哀想だ、助けてあげたいと思ったラティアスは財布を力バンから取り出し、その中から100ポケ硬貨を見つけると、それ

をそつとルカリオの右手に置いた。

「これで、パンくらいは買えると思うわ。これからはちゃんと働いて自分で貯めたお金で買ってくださいね」

「おい、お前何か勘違いしてないか？」

渡された100ポケ硬貨を見ながら、ルカリオは口元をひくつかせている。その様子を見て、ラティアスは「しょうがないですね」と言い、さらに50ポケ硬貨を渡す。

「……ぜつてーわざとだろお前！ 何で俺が無職の貧乏人みたいな扱いされなきゃいけないーんだよ！」

「ち、違いました？」

150ポケぽつち渡されたルカリオは憤慨する。ラティアスは何で怒られているのかわかっていないご様子。しっかり硬貨を握り締めたまま、ルカリオはさらに怒鳴る。

「俺達全員の食費になるんだつーの！ ヒトカゲとアーマルドが所持金ゼロだから財布がこうなってるだけなんだよ！」

「……あつ、なるほど」

どうやらこのラティアス、天然な部分があるらしい。ようやく金を要求する理由を理解すると、ラティアスは財布ごとルカリオに渡した。怒りの治まらないルカリオは強引に財布をぶん取る。

「しばらくは俺が管理する。ヒトカゲに任せると1日でなくなるし、アーマルドに財布持たせると何買うかわかんねえからな」

そう言いながら、しっかり自分のカバンに財布をしまつるルカリオ。

中身は確認していないが、手持ちの金が増えたことに変わりはなく、安心した表情を浮かべていた。

それから準備に手間取り、旅支度が終わった頃にはすっかり太陽が赤色に染まり、沈みかけていた。街灯がないため、太陽と反対の方角はすでに暗くなっている。

暗い時間帯に行動するのは少し危険を伴うことと、よく考えてみるとヒトカゲ達は昨日から一睡もしていない。さらにこの先に休憩小屋がある保障もない。となると、選択肢は1つしか残っていないかった。

「結局、お泊りになっちゃったわね」

苦笑いしながらベイリーフがさらりと言う。それにつられるようにみんなも苦笑いする。部屋の隅の方を見ると、ラティアスが一生懸命荷造りしたカバンがポツリと置かれていた。

「でもドナイトス達と一緒になの久しぶりだから、僕はお泊りでよかった」

うつ伏せに寝転がり、顔だけ上げた状態でヒトカゲは話をする。アーマルドも足を伸ばして座っている。この2人は完全にリラックスモードだ。

「あ、あの……」

そこに、ラティアスが何か言いたげな様子で入ってきた。みんなの視線がラティアスの方へ向くと、恥ずかしそうにヒトカゲに質問する。

「今って、何をするために旅しているの？」

昼間にも同じ質問をされたが、長くなるからと先延ばしにしていたのをヒトカゲは思い出した。旅の途中で言おうと思っていたが、今質問に答えることにした。

「今はね、ホウオウとディアルガを捜してるんだ。あとは、ルカリオのお父さんも」

この話をすると、ヒトカゲの口は止まらない。話は自分の家出話までさかのぼり、今に至るまでを細かく説明していくのだ。特にバングラスの話をするとき長くなる。

「へえ、すごい旅をしてきたんですね」

「うん。自分でもびっくりするような事の連続だったよ。詠唱だつて知らな……」

刹那、ヒトカゲの頭にふと疑問が生じた。そういえば、どうして僕は詠唱ができるポケモンなのだろうか、しかも人間の世界にいたなら必要なものではないのにと。

ルカリオを含めると、さらに謎が深まる。生まれた時期も世界も異なるのに、同じ詠唱ができるポケモンが存在するという偶然など有り得ることだろうか。

（何だろう、怖い。偶然じゃない気がしてならない。どういっわけか……怖い）

腕組みをして、ヒトカゲは考え込む。急に話をやめたヒトカゲをみんなはおかしく思い、アーマルドがツメでヒトカゲのわき腹を突

いた。

「どうした？ ヒトカゲ、何かあったか？」

「えっ？ いや、何でもないけど。言葉が出てこなかったただけだよ」

ヒトカゲは言い訳してごまかした。その後すぐにドダイトスが「もうはや痴呆症ですか？」と全体を笑いに誘っていったので、特に突っ込まれることはなかった。

だが、ルカリオだけはヒトカゲの嘘を見抜いていた。どうも怪しいと思つて波導を読み取ると、緊張感漂うものが感じ取れたのだ。しかしここで問い詰めて事を荒立てたくはなかったようで、この場は黙っていた。

「じゃあ明日に備えてこの辺で夕食にして、もう寝ましょう」

ベイリーフの提案で一同夕食をとることになった。そこでラティアスはようやく、ルカリオがあんなにお金を必要としたことを実感することとなる。

時を同じくして、ラティアスの家から遠く離れたところに位置する、小さな村“グロバイル”の跡地にあいつはいた。ルカリオを執念深く殺そうとする、ジュプトルが。

グロバイルは噂どおり、既に壊滅していた。今もその時のままの状態に残っている。倒壊した建物や、炎によって焼けた跡、散乱した道具など。

辺りに風が吹き、砂埃が舞う。ジュプトルの視界は遮られるも、それが落ち着くと彼の視界には、目的のものが入ってきた。太めの枝で作られた、2つの十字架だ。

それを見つけると、すぐさまジュプトルは十字架に向かって走り

出す。息を切らしてそこにたどり着くと、その十字架をじっと見つめている。

「……もう20年経ったのか……」

周りに誰もいないが、ぽつりと呟くジュプトル。どういう訳か、表情がいつもと違う。殺気立ったものではなく、哀しみにくれた表情をしている。

十字架にそつと手を伸ばす。十字架は大分前に立てられたものらしく、かなり傷んでいる。それを壊さぬよう優しく触り、ゆっくりと瞳を閉じた。

（父さん……母さん……俺、辛くなってきた……）

ジュプトルは十字架に向かって、心でそう語りかけている。そうしたところで返事がくるわけではないが、今の彼に本音を語れる者がいないのだろう。

（だけど、やるって決めたんだ。必ず……）

想いを伝えるために、そして自分に言い聞かせるように、強く念じた。目を開けると、表情をいつものものに戻した。目つきを鋭くし、怒りを出している。

（必ず……父さん達の命を奪った、そして、この村を壊滅に追いやったライナスを……殺す！）

地面に一発、拳を打ち込むジュプトル。怒りを表している顔から

は涙もこぼれていた。

しばらくして気持ちを引き締めると、ジュープトルはすつくと立ち上がり、その場を後にしようとする。もう一度十字架の方を振り向いて、小さく頷いた。

「次は……ライボルトだ」

体勢を低くして、一気に走り出した。陽が完全に落ちた闇夜の中を駆けている。まるで、自分の心の闇に飛び込んでいっているように。



第48話 旅に出る前に(後書き)

ルカリオ

「親父は一体何をしたんだよ!? (汗)」

まあ落ち着きなさい(笑)

どうやらこういう理由で君らを追っかけているようです。

ヒトカゲ

「私怨で来られるとやなんだよな(汗)」

アーマルド

「ホント、迷惑」

ルカリオ

「……何で俺の方を見て言うんだよてめえら(怒)」

## 第49話 長い道のり（前書き）

今日から4月、新年度の始まりですね……。

ヒトカゲ

「嫌そうに言ってるね」

春休みの終わりが近づいてるからねえ（汗）

そんな事はさておいて、今回地名の中に「レッドクリフ（Red Cliff）」というところが出てくるのですが……あの話題になった映画とは一切関係ありません。見たこともありません（笑）

ルカリオ

「要するに、英語で書いただけという手抜き（笑）」

……沈めたる（怒）

## 第49話 長い道のり

次の日、ヒトカゲ一行はここから一番近い街『グランサン』を目指して走っていた。何故走っているかという点、事は数時間前に遡る。

その日の朝、一番早く起きたアーマルドはラティアスの家の外で朝日を浴びていた。大きく口を開けて欠伸をし、まだ少し眠たそうにしている。

ふと空を見上げると、ペリッパーが空中からチラシを辺り一帯に撒いている。そのうちの1枚がアーマルドの頭に落ちると、それをツメで刺してチラシを読んでみる。

「えっと……」グランサン出港の船が明後日の運行をもって一時運航停止。北方面へ用のある方はお早い乗船をお勧めします」

実は、これはとてつもなく重要なチラシであった。この先にある街・グランサンの周りは切り立った崖に囲まれており、その先を越えて北に移動するには船が一般的に使われている。

ところがその船が運航停止となると、移動手段は険しい崖を登って越えていかなければならない。その崖の名は『レッドクリフ』

文字通り、赤色の崖である。

その名の由来は、土に含まれる金属のせいで赤色をしているというものと、あまりの険しさに途中で滑落し、命を落とした者の血で染まったからという2つの説がある。

しかもそこは、温泉が湧き出てもおかしくないというほどの地熱が発生しているのだ。そう考えると、崖を越えることが相当な困難であることは容易に想像できる。なので、ここは頑張って船に乗る

必要があるのだ。

「……これはマズい！」

チラシを読んだアーマルドは一目散にラティアスの家へ戻り、みんなを叩き起こしてこのことを説明した。するとどうだろうか、鈍感なはずのドダイトスも大慌てで準備をするほど、家の中は混乱に陥った。

ものの数分で全ての準備を終わらせ、みんなはグランサンへ向かって走り出し、そして今に至るのだ。

「はっ、はっ、あーあとどのくらいで着くんだ!？」

息を荒げながらルカリオがドダイトスに訊ねると、このペースでギリギリ間に合うか間に合わないかだという返事が返ってきた。つまり、あと2日かかるということだ。

一同、さらにその足の動きを速める。誰でもこういう時に限って、足の速いルカリオやラティアスが先にグランサンへ行って船を停めておく等の考えが思いつかないものだ。

「ね、ねえ、ベイリーフの家って船持ってたらしらないの!？」

「それがあつたら今頃走ってないわよ! お父様つたら自分の趣味にしかお金使わないんですもの!」

ヒトカゲの質問にさりげなく不満をぶちまけるベイリーフ。メガニウムのことであるはずなのに、ドダイトスの胸にも刺さるものがあったのか、一瞬間まってしまふ。

「っ、つらい……！」

「ほら頑張つて、アーマルドさん！ まだまだ先なんですから！」

足が遅めなアーマルドを想つて、ラティアスは腕を引っ張つて先導している。しかしラティアスが速すぎるせいだろっ、アーマルドの足はもつれている。

このように、みんなは必死になってグランサンまでの道のりを走つたのだ。長い長い道のりを、共に励ましあいながら。その結果、ヒトカゲ達はグランサンに着いた瞬間に、絶叫した。

『……船行っちゃった　　！！』

間に合わなかったのである。グランサンに到着したのは、船が出てから1時間ほど後だったのだ。あれほど頑張つたのにと嘆きながら脱力し、その場に座り込む。

これで、ヒトカゲ達の進路は否応なしにレッドクリフを越えることになった。それだけでもやる気が減るというのに、2日間頑張つて走つた甲斐がなかったことが1番応えている。

「あー……もう無理、しばらくは勘弁」

大の字になつて、ルカリオは空を見上げて呟く。他のみんなも、喋る気力が残っていないのか、黙つて頷いて答える。そうだ、北へ急ぐ前に聞き込みでもすればいい、それくらいに思っていたのだ。

当然ヒトカゲもそう思っていたが、それ以外に、個人的にレッドクリフに興味を持っていたことや、ハウオウばかりでなくディアルガの事についても調べなければと思つていたことを考えると、好都合だったのかもしれない。

「じゃあ、とりあえず明日は聞き込みをしよう。そしてから今後の事話そうよ」

すつくと起き上がり、ヒトカゲは地面に倒れこんでいるみんなの顔を1つ1つ覗き込みながら言った。だがすっかり意気消沈しているみんなの口から返事は返ってこなかった。

そんな時、後方から見慣れないポケモンがヒトカゲ達の元へやって来た。頭部が音符の形をしている、色鮮やかな鳥のようなポケモン・ペラップだ。

「えー何なにナニ!? みんなどーしちゃったわけ!? 何で寝っ転がってんの? ここ道だよ? 風邪引いちゃうよ? いいの!? いくないしょ! そのヒトカゲ君、説明しんしゃい!」

早口かつ騒がしい程の大声でペラップが話しかけてきた。正直なところ、ほとんど聞き取れていないヒトカゲ。素直にもう1度何て言っただかを訊ねることにした。

「え、えつと、今何て……」

「何、越冬だつて!? 冗談でしょ!? こんなところで越冬だなんてありえないでしょ! しかもまだ冬まで期間あるし! どーすんのこれちよつとマズいよ道端でおねんねなんて!」

ペラップは全く聞き耳持たずといった具合である。ヒトカゲが何かを言いかけようとしても先に嘴が動いてしまう。それに加えて早とちりが甚だしい。

「いんやーとりあえずみんなワイの家来なさいな! 越冬なんてバカなことやめてワイの家でゆっくり談笑でもしようじゃないの!」

な？ ほら決まった事にはすぐ行動！」

半ば、いや、完全に、そして強引に自分の家へ来いと言っている。耳障りだと思いつつも、確かにここでだれてるよりはいいと考えたみんなは、重い腰をようやく上げてペラップについて行った。

程なくしてペラップの家に着くと、みんなは遠慮することなく中に入っていく。住んでいるのはペラップだけであるが、中はとても広い。お金持ちかとも思ったが、木材と藁のみで造られた家だとわかると少々残念がる。

「そんで、皆さんは友達同士？ それよりどうしてあんなところで越冬しようとしてたん？ あ、ちなみにワイはペラップな。あつ、そそそそ、聞いてくんない？ 聞いてちよくだいな！」

(うつせえこの鳥……)

右から入ってくるペラップの滑舌のいい言葉を、ルカリオは左へ軽く受け流している。だが次にペラップが発した言葉からは、受け流すことをやめざるを得なかった。

「つい最近の話なんですなこれ、ワイ幸せになれるんだわ！ 何たってあのホウオウを見ることができたんでっせ！？ ホウオウでっせ！？ ワイチョー感激で涙枯れたわちよつと！」

『……なんだって!?!』

先ほどまで興味のなかったペラップに一気に詰め寄るヒトカゲ達。自分の自慢話に食いついてくれたのが気持ちよく感じたようで、ペラップは嬉しそうに話を続けた。

「もーきれいな翼バツサバツサ羽ばたかせながら飛んでつたの見て、ワイ心奪われたわ！ でもどこへ飛んでつたんだろな、あんな北なんか行つても特にこれといってないのに」

『北へ行つた！？』

気迫あふれる顔がいくつもペラツプの視界に入ってきた。さすがに驚いたのか、若干腰が引けている。ペラツプが口を開くまでみんなは凝視しているつもりか、離れようとしなない。

「そ、そう北。レッドクリフ越えた先だから……たぶん『オース』に行つたんじゃないかな？ オースより北なんて海しかないし。うん、きつとオースに行つたと思う」

ペラツプのいう『オース』とは、ポケラス大陸最北端に位置する岬のことである。そこには岩山のようになっている崖が1つあり、それには洞窟も存在している。

そのオースの洞窟に、神と呼ばれしポケモン達が休息をしに来ることが稀にあるという。もしかしたらハウオウもそこへ行つたのではないかというのがペラツプの推測だ。

「オース……そこに行けばハウオウに会うことができる……」

ヒトカゲの旅に明るい兆しが見えてきた。ペラツプの言うことが本当であるならば、ハウオウがオースに行つた可能性は高い。他に有力な情報があつたわけでもないの、これを信じていることが1番だとヒトカゲは確信した。

「ヒトカゲさん、どうします？」

そんな中、心配そうな表情でヒトカゲに話しかけてきたのはラテ



イアスだ。何か気になることでもあるのかと訊くと、小さな声で相談を始める。

「あの、しばらく船動かないじゃないですか。オースに行くならレッドクリフを越えなきゃ行けないですけど、そこは危険がいっぱいみたいですよ……」

話を聞く分には、どうやら進路に迷っているらしい。ラティアスはここで足止めされたと思い込んでいたため、ここグランサンにずっといなければならないのではとヒトカゲに質問した。

「そんなの、決まってるんだろ？」

ラティアスの質問に最初に答えたのはルカリオだ。逆に不思議そうにしているルカリオの顔を見てラティアスは首を傾げる。それに続けるようにして答えたのはアーマルドだ。

「レッドクリフ越えればいい話じゃん」

「……えっ？」

それはラティアスにとって意外すぎた答えだった。危険とわかっていてどうしてそこへ行こうとするのか、それが彼女にはわからなかったのだ。それを補足したのがベイリーフとドダイトスだ。

「そうよ。危険だからってそれから逃げちゃ、できることができなくなっちゃうこともあるからね」

「それに、いざとなれば皆さんがいますしね。そうやって、私達は旅をしてきたのですよ」

みんなの自身溢れる顔が、ラティアスには輝いて見えた。どんな

事にも立ち向かっていける気持ち、それが私には足りなかったのだと学ぶことができたのだ。

自分を変えるため、旅に同行することを決意したラティアスが、早くも自分を変える場面に出会えたのだ。心の中でしっかりと気持ちの整理をし、ラティアスはしっかりと口調で答えた。

「……そうですね。わかりました。越えましょう！」

危険に立ち向かう自身がついたラティアスの顔を見て、みんなの顔が綻ぶ。それでもう大丈夫だ、一緒について行けると確信できた瞬間だ。

だが、この時誰も予想していなかった。この後に起こる、想像を絶する出来事が彼らを待ち構えていることを。

第49話 長い道のり（後書き）

ヒトカゲ

「ホウオウの居場所が大体わかったけど……もしかして終わりが見えてきた？」

「いや、まだまだ内容は盛りだくさんですよ。」

ルカリオ

「できればもっと上手い文章で書いてほしいんだけどな」

うっ……（汗）

アーマルド

「ところで最後の終わり方、何？」

「な、何でもありませんよ？」（笑）

ラティース

「想像を絶する出来事……わかった、空からお金が降ってくるのね！」

ルカリオ

「……幸せな奴だな（汗）」

## 第50話 グランサン（前書き）

もう50話になってしまいました。

ヒトカゲ

「前作だったら終わりに近づいてたよね」

ルカリオ

「そしてあのヤクザの登場もそれからちょっとしてからだよな」

カメックス

「……殺してやるから来い（怒）」

ルカリオ

「じ、冗談ですってば〜！（泣）」

アーマルド

「……本編どうぞ（笑）」

## 第50話 グランサン

ヒトカゲ達がペラップの家に泊まっている日の深夜、某所ではとある2匹のポケモンがやりとりをしていた。どちらも低い声で話しをしている。

「もうすぐ、例の件が実行できそうです」

立ち膝の姿勢で相手にそう話しかけているのは、ヒトカゲ達の知り合いから『赤の破片』を奪おうとしていたポケモン、ガバイトだ。目の前の存在に深々と頭を下げている。

「グラードンを操り、ポケモン達を殺戮か。私の計画の布石にもならないが……暇つぶしにはなるだろう」

そしてガバイトの前にいるのは、ガバイトよりも大きなポケモンだ。ガバイト自身、今いる空間がものすごく暗いため、未だかつてこのポケモンの姿を見たことがない。口調から察するに、ガバイトより上の存在であることしかわからない。

「ひ、暇つぶしだななんて……グラードンを使えば、向こうから姿を現すかもしれませんし……」  
「そんなまどろこしい事をさせるために汝を生き返らせたわけではない」

焦っているガバイトにさらに追い討ちをかけるように、そのポケモンは強く言った。ガバイトは申し訳なさそうに頭を地面につける。冷や汗も流れている。

今の発言からすると、ガバイトが以前プテラに話していた「生き

返った」という話は事実になる。ただし、その全容は全く持つて不明である。

「我が力は未だ完全には戻っておらぬ。ましてや今の状態では完全などあり得ん。私の代わりに手足となつて動いてもらわねば」

「し、承知いたしております……」

若干不満そうにはしているガバイトだが、顔に出さずに堪えている。このポケモンの存在があるため、動きを制限されている部分があるのだとか。

「よいか、我が望み……それは“滅び”。そう、滅びだ。汝の言うものとは訳が違う」

ガバイトもこのポケモンも、目的は“滅び”であるという。だがそれが意味するものが何であるのかは、この2人以外知る者はいない。

「……それを念頭に置き、事を運べ。わかつたら行くがよい」

丁寧に返事をし、ガバイトはそのポケモンに背を向けた。しかし言い忘れたことがあったのか、その場で振り返り、大きめの声で呼びかける。

「1つ、お願いがございます。ボスゴドラとクロバットを仲間にしたいのですが」

「よかるう。明日までに用意しておこう」

軽く礼だけをする、ガバイトはその空間からどこかへ行ってしまった。真つ暗な空間には、そのポケモン1匹だけが、何も言わず

にその場に居続けている。

次の日、ペラツプの家の前にヒトカゲ達の姿はあった。出発の準備を整えて、一宿一飯のお礼をペラツプに告げた。

「しっかしお前さんたちよく食ったね！　ワイの食料尽きたやんかえ、どないしてくれんの？　なあちよつと特にヒトカゲ君、キミだよキミ！　食いすぎだよもお〜！」

朝から何かと騒がしいペラツプ。大きな欠伸をして頭がぼんやりしているヒトカゲの耳にはこの不満すら届かなかった。むしろペラツプのことは視界の中にも入っていなかった。

「じゃ、ありがとな」

ルカリオはさらっとそれだけ言うと、みんなを引き連れてその場から歩き始めてしまった。当然だが、これでペラツプの怒りが治まるはずがなく、さらに騒ぎ出す。

「ちよ、ちよちよちよそれだけかい！？　そりゃないぜ君達！　ってか行っちゃうのかい！？　えっ、本気で行っちゃうわけ！？　ワイにこんな仕打ちしといてからに〜！」

そんなペラツプの様子をみんなは面白く見ている。だんだん離れていくにつれ、小さな鳥がその場で飛び跳ねている姿しか確認できなかったが、その姿が彼らをさらに笑わせた。

程なくして、ヒトカゲ一行は街の中心にたどり着いた。海に面し

ていることもあり、建物などはシーフードとあまり変わりないが、ポケモン達の活気はそこまでない。

その理由の1つとして、この気温がある。レッドクリフが近いことから、グランサンの地熱も比較的高い。そのため、足元から熱気が上がってきているのを感じることができる。

「何だよここ、気温も暑いし地面も熱いし……あゝ体力が……」

「うん、あつつい。でも動かないともつとあつつい」

うなだれながら歩いているのはルカリオとアーマルド。2人とも顔から汗が垂れている。そんな中でも元氣そうにしているのは、ヒトカゲだった。

「えっ、みんな熱いの嫌なの？ 僕大好きなのに」

もともと、ヒトカゲという種族は熱いものが好きである。もちろんこのヒトカゲも例外ではない。げんなりしているみんなをよそに嬉しそうな顔をしている。そしてもう1人、熱そうにしていない者がいた。

「私は嫌じゃないですよ。足も熱く感じませんしね」

そう言ったのはドダイトスだ。足が大きいせいか、ルカリオ達と比べて熱さの感覚が鈍いのだろう。だがその事に対して、ラティアスはとんでもない発言をドダイトスにした。

「あの、ドダイトスさんって、足に神経ないんですか？」

一同硬直。神経がないと言われたドダイトス本人も口を開いて啞然としていた。みんなの様子をおかしく感じたのか、ラティアスが



焦り始める。

「ラ、ラティアスちゃん、私にだって神経くらいありますよ、ははは……」

苦笑いするドダイトスの目にはうつすら涙が浮かんでいた。ラティアスが小さい頃から知っているが、ここまで心にグサツときたことは初めてだという。

「わ、私何か酷いこと言いました……?」

「い、いや大丈夫よ。それより行きましょう」

戸惑っているラティアスをベイリーフが落ち着かせながら、みんなは再び歩き始めた。賑やかになったところで、熱さが紛れたわけではないが。

しばらく街中を歩いてはみたものの、熱さを凌げるような場所はなく、結局海沿いの砂地にやってきた。束の間の休息という名目で、海に入って遊んだりしている。

「冷たっ！ てんめく“みずのはどう”！」

「うわっ！ やったな、“みずでっぼう”！」

遊んでいるはずなのだが、ルカリオとアーマルドを見ると、どうも普通のバトルをしているようにしか見えない。遊びがエスカレートしてしまったらしい。

「ラティアスちゃんそっちやって」

「じゃあベイリーフちゃんはこっち側ね」

ベイリーフとラティアスはといえば、2人で“サイコキネシス”を使って砂を操り、自分達の3倍以上の高さがあるお城を造っていた。ものの数秒で完成し、中に入って遊んでいる。

そしてドダイトスは、そんな彼らを見つめながら、砂場に腰を下ろしている。首を伸ばしてリラックス状態だ。頭の中では、昔の思い出が蘇っていた。

懐かしい思い出に浸っているときに、横からヒトカゲが突いてきた。我に返ったようにはっとして、ゆっくりと自分の横を見る。

「ヒトカゲ、どうかしたか？」

「ちよつとだけ出かけたんだけど、いいよね？」

ドダイトスがどこに行くんだと訊ねると、近くに探検できそうな洞窟があったから入ってみたいとのこと。この中ではヒトカゲが一番強いため、ダメだという理由はない。

「暗くなる前に戻って来いよ」

それでも、ヒトカゲの事は子供扱いだ。ちよつとふくれっ面をしながらも、ヒトカゲは嬉しそうにその洞窟へと向かっていった。

海岸沿いに少し歩いていくと、小さめの洞窟が1つある。海岸に来る途中偶然見つけたものだ。ヒトカゲは何の躊躇もすることなくその中へと入っていった。

「うわ〜この中も熱いんだ〜」

中は例えるなら蒸し風呂状態。岩の間から蒸気が噴出していると

ころもある。その中をヒトカゲは意気揚々と歩いている。辺りを見回しては、何かないのかなと確認していた。

程なくして1番奥と思われるところに到着した。そこは今まで通ってきた道とは異なり、大きめの部屋のよう空洞が広がっている。

「すつごゝい、誰かが掘ったのかな？」

ヒトカゲが驚いていると、誰かから声をかけられたような気がした。気のせいだと思い無視していると、今度は大声で怒鳴られた。

「誰じゃいこんなところに入ってくるくせ者は！」

耳元で怒鳴られたためか、ヒトカゲの頭に矢が刺さったような痛みが走った。思わず耳を塞いで声のした方を振り向くと、そこには年老いた、橙色をした亀のようなポケモン、コータスがむすつとした表情で立っていた。

「お、おじいさん何ですか？」

「誰がヨボヨボのくされジジィじゃと！？　　ったく、これだから最近に若いモンは……礼儀を知らん！」

このコータス、高齢特有の“何でも悪いように聞こえてしまう症候群”を持っていた。ヒトカゲはそれでも大きな声でここに入ってきた理由などを話し続ける。

ヒトカゲの言いたい事が通じたのは、それから20分も後のことである。ヒトカゲは散々大声で喋ってきたせいで喉は枯れ、疲れた表情を見せる。

「あー君はヒトカゲで、遊びで入ってきたわけじゃな？　そしてワシが何者かとな？」

「そ、そういうこと……」

ようやく理解すると、コータスはヒトカゲを自分の甲羅に乗せ、ゆっくりと歩き始めた。訳のわからぬまま、ヒトカゲは黙って乗せられている。

そして1分も経たないうちにコータスの動きが止まった。年寄りだから疲れたのかとヒトカゲは思ったが、そうではないようだ。

「ヒトカゲ、あれが見えるかね？　ワシはあれを守っているのじやよ」

ヒトカゲの視界の先にあったもの　それは大きな岩の壁に、淡い緑色の線で描かれていた、古代様式の絵であった。

第50話 グランサン（後書き）

サイクス

「……冒頭のアレ、誰？」

誰……と言われてもなあ（汗）

バンちゃん

「どうせ喋んねえだろうから、違うこと話そうぜ」

ドダイトス

「違うこと……バンちゃん、嫁は元気か？（笑）」

バンちゃん

「嫁言うな（怒）ポッポだろ？ 元気だ」

サイクス

「作者のイラスト見たけど、順調にバンちゃんとかに色ついてるぜ」

「

バンちゃん

「……公開したら後悔することになるからな、覚悟しとけ」

ダジャレ？（笑）

バンちゃん

「違えーよ！（怒）」

第51話 生きる壁画（前書き）

いや〜……遅くなりました。

ヒトカゲ

「もっと頑張つて！」

ルカリオ

「早く書けい、愚か者」

うっ、こいつに言われるなんて……（汗）

## 第51話 生きる壁画

「こ、これは何……?」

目の前の光景を見て、ヒトカゲはただ驚いている。暗い密室で不気味に光る、緑色の線で描かれた壁画。よくよく見ると、それは生き物のようにヒトカゲの目に映った。

「これはな、この街の……いや、この星を造った神様そのものじゃ」  
コータスが言った事を、初めは理解できずにいた。その後には付け加えるようにコータスが言った内容を聞いて、ヒトカゲはさらに驚くことになる。

「大昔、長きに渡って降り続いた大雨を光と熱で全て蒸発させただけでなく、この星の陸地を生み出したポケモン 大地の神・グラードンじゃよ」  
「ええっ!?!? こ、これがグラードン……!?!?」

改めて壁画を見直すと、うつ伏せ状態のポケモンの姿に見えた。頭部と、大きく開いた両腕、平たい尾も含めて、まるで壁に張り付いているようにその絵が描かれている。  
そしてその絵を形作っている線はまるで鼓動を打つような光り方をしていた。それがヒトカゲをさらに驚かせている要因の1つでもある。

「そうじゃ。グラードンは、このグランサンとレッドクリフの間の地下で眠っておる。最近ここら辺が暑くなっているのは、数年に1度の目覚めるときが近づいている証拠じゃ」

コータス曰く、グランサンは常にこの暑さではない、グラードンが目覚める前後で特性の“ひでり”が強くなるために起こるものだから。

「この絵、光っているじゃろ？ あれはグラードンの心臓の鼓動に合わせて光るのじゃ。光が強くなるほど、目覚めが近いことを表しているんだよ」

壁画の話をしていたちょうどその時、ヒトカゲを心配したルカリオが迎えにやって来た。わざわざドライブトスに行き先を聞いたり波導を使ったりして捜してくれたようだ。

「何やってんだよ、さっさと……うおっ!？」

ふと視線を逸らすと、ルカリオの目にグラードンの壁画が飛び込んできた。こういう反応に慣れているのか、コータスは小さく笑っている。

「それよりルカリオ、もうすぐグラードンが目覚めちゃうって!」「なっ、何だと!？ 逃げないと襲われて死んじゃうぞ!？」

切羽詰まった表情でヒトカゲが話したため、ルカリオも鵜呑みにして焦り始める。だがそれに対してもコータスは呑気に笑っている。

「はっはっはっ、死ぬはずなからう」

2人からしてみれば、どうしてこんなにコータスが余裕でいられるのが疑問であった。慌てている2人を落ち着かせ、コータスはその根拠を話し始める。



「グラードンは襲ったりせんよ。むしろワシ達のことをよく気遣ってくれる、いいお方じゃよ」

ヒトカゲとルカリオはグラードンの姿を知っている。図書館で見た書物に描かれていた凶暴そうな外見からは全くといっていいほど、優しい神だとは想像できなかった。

ましてや、ガバイトが操ろうとしているポケモンだ。いくら穏やかなイメージを植えつけられても、凶暴なイメージをなかなか払拭できないでいる。

(はっ、もしグラードンが目覚めたら……ガバイトの奴、操ることできないんじゃない?)

急に、ルカリオの頭に仮説が浮かんだ。いくらなんでもガバイトがグラードンに敵うはずがない、目覚めてしまえば近づくことさえできなくなるだろうというものだ。

「ヒトカゲ、俺達に追い風が吹いているみたいだぜ」

「えっ、どういう事?」

首を傾げているヒトカゲに、自身の仮説を説明するルカリオ。自信があるのか、説明に力が入っている。ヒトカゲもそれに応えるように頷き、納得している。

「そっか! グラードンが目を覚ましたら、普通のポケモンなら敵いっこないもんね」

「だから急いでるんだよ」

その時だった。3人の背後から何者かの気配と共に声が聞こえた

のは。後ろを振り返らずとも、声の主の正体はわかっていた。

『……ガバイト……』

ヒトカゲとルカリオはゆっくりと振り返ると、2人の予想通り、目の前にガバイトが立っていた。相変わらぬ不敵な笑みでこちらを見ている。

「久しぶりだなあ、お前ら。まさかこんな所で会うとはな」

「俺らは会いたくなかったんだけどな」

一触即発の睨み合い。恐怖のあまりコートスは首と足を甲羅の中に引っ込めた。しばしの沈黙の後、先に口を開いたのはガバイトの方だった。

「グラードンの目覚めが近い……目覚めるとさすがの俺も手出しが出来ん。お前の言うとおり、目覚める前に『赤の破片』を」  
「全部集めなければ……だろ？」

ガバイトの話を遮ってルカリオが言い放つ。完全に自分達が有利にあると思っているため、自然と口元が笑っていた。

ニョロトノの時も、バルの時も、ガバイトが『赤の破片』を奪うことを失敗させた者としては、今の段階で破片を全部集めきれないことなど想像に難くなかった。

ガバイトの計画はもうすぐ潰れる、そう確信したルカリオは腕組みしながら小さく笑う。だが、思いもよらぬ反応がガバイトから返ってきたのだ。

「……フフツ……フハハハハ！」

どういう訳か、突如ガバイトは大声で笑い始めたのだ。笑みを浮かべていたルカリオはその反応に驚き、笑うのを止める。それでもガバイトは笑い続けていた。

「な、何がおかしい？ 恐怖で気でも狂ったのか？」

意外な反応にヒトカゲもルカリオも焦り始める。しばらく経ってガバイトは笑うのを止めると、いつもの悪人面へと表情を一変させた。

「つくづく平和な奴らだなあ、お前らは！ 見ているこっちまでボケちまいそうだぜ！」

そこには、ルカリオが思い描いていた、悔しそうにしているガバイトの姿はなかった。今ある姿は、自分より下の者を高いところから見下している百獣の王そのものだ。

「ど、どういう意味だよ！？」

「お前らはとんでもねえ勘違いをしてるってことだよ！」

とんでもない勘違い 一体何を勘違いしたのだろうか、それともガバイトの脅しだろうか。2人の頭の中では様々な憶測が飛び交っていた。

「1つ、いい事を教えてやるよ」

そう言っただけガバイトが取り出したのは、中から赤い光を放っている水晶のような石の一片。そう、『赤の破片』の1つだ。次の瞬間、ガバイトはとんでもない事実を2人に告げた。

「お前らはこの破片が全部集まらないと、グラードンを操れないと思っ  
思っているみたいだが……破片は1つあれば十分なんだよ！」  
『なっ……!?!?』

我が耳を疑いたくなるような発言。そして目に映るのは、グラー  
ドンを操ることができ石の破片。優位と思っていたヒトカゲ達の  
立場は一瞬にして逆転してしまったのだ。

その場に固まってしまふ2人。心の中では焦りがさらに募ってい  
く。2人の心理状態が顔に出てしまっているため、ガバイトはそれ  
を見て鼻で笑う。

「苦労したぜ、見つけ出すのは。まあ、お前らが守った市長が吐い  
てくれたおかげで、その後はすんなり事は運んだがな」

何と、今ガバイトが手にしている赤の破片は、以前ヒトカゲ達が  
ロルドフログで守ったものだったのだ。バルが保護している破片を  
奪い損ねた後再びロルドフログまで出向き、美術館にある破片を奪  
うことに成功したのだという。

「ま、待てよ……そしたら市長は……」

「あいつか？ あいつには消えてもらったぜ。破片さえ手に入れち  
まえば用はねえし、何より警察に知られちまうといういると不都合  
だからなあ」

ガバイトが楽しげに言ったその言葉は、大きなシヨックを2人に  
与えた。そしてそれは徐々に大きな怒りへと変わっていった。

わなわなと震える手を頑張っ  
て抑えようとしているヒトカゲ。だ  
が限界に達したのか、感情が高ぶり、涙を流しながら怒りをガバ  
イトにぶつける。

「……どうして、どうしてそんな酷いことをするのか！」

ついこの間まで生きていたニョロトノの死の悲しさ、用無しという理由で彼を死に追いやった非情なガバイトへの怒り、混じった感情のこもった言葉は重いものになるはずだが、ガバイトには一切届いていなかった。

「どうして？ 言ったはずだ、俺の目的は“滅び”だと。いずれ訪れる悠久の眠りにつくの早めてやった俺はむしろ感謝されるべきだろう」

「……貴様あー！」

怒りに任せてルカリオが飛び出した。波導でこん棒のようなものを作り出し、それをガバイトに向けて振り下ろす。“ボンラツシユ”だ。

すかさずガバイトは両腕を交差させてガードする。互いに目を合わせたまま、鏝<sup>つば</sup>迫り合いをしている。両者とも一步も譲らない状態はしばらく続いたが、ガバイトが押し返した。

「“がんせきふうじ”！」

押された拍子に転倒するルカリオを確認した瞬間に“がんせきふうじ”をくりだした。ヒトカゲとルカリオの足元から岩が飛び出し、足を塞いでしまった。

「そこで待っているがいい。俺がグラードンを連れてきてやるからよ。グラードンに仲間が殺されていくのを見届けな」  
「くそっ！」

何とか頑張ってみるが、身動きが取れない。笑みを浮かべてゆっ

くりとガバイトが立ち去ろうとした時、出口の方から聞き覚えのある声がした。

「あら〜どっかにお出かけですか〜、ガバイトちゃん？」

第51話 生きる壁画（後書き）

ルカリオ

「……ガバイトちゃん（笑）」

こんな口調で喋るのはあいつくらいですね。まだ言っではいけませんよ（笑）

アーマルド

「ところで、なんかヤバい雰囲気になっていくのこれから？」

そうだね、しばらくふざけた話はなくなりますね。

第52話 赤崖へ（前書き）

サイクス

「俺って、カッコいい？」

何でそんな質問を唐突にするんだい？（汗）

サイクス

「だって世間では新作ゲームや映画に目がいつてるだろ？俺の存在が危ぶまれるかもしれねーじゃん」

そっだろっけど……目立つようにイラストも描いてあげたじゃない。

サイクス

「えっ、あの手っぴなバクフーンが俺なの!？」

ちよっところっち来なさい（怒）



## 第52話 赤崖へ

「だ、誰だ!？」

突如として現れた、救世主と思われるポケモン。姿を確認しようにも、岩陰に隠れているせいで全くわからない。だが聞き覚えのある声ということは間違いないようだ。

「ヒトカゲみたいになちゅちえ〜ガキにも容赦しね〜ってか？ 恐いな〜」

相手の姿が見えないことに加え、小ばかにされているように聞こえていたガバイトは苛立っている。しきりに辺りを見回して声の主を捜していた。

「りゅうのはどう?!」

それをいいことに、ガバイトの隙を窺って岩陰から“りゅうのはどう”を放った。それはガバイトの横を通り抜け、ヒトカゲとルカリオの足を塞いでいる岩に当たり、岩だけが砕け散った。

「や、やった! これで自由に動けるぜ!」

足を動かすことが出来るようになったヒトカゲとルカリオはぐつと身構える。一方のガバイトは2人に注意を向けないわけにはいかなくなり、注意力が散漫する。

「くっ、姿を現せ! “ドラゴンクロー”!」

声のした方にエネルギーを集中させたツメを振り下ろす。するとガバイトの目の前にあった岩の壁が音を立って崩れ落ちていった。それと同時に、声の主の姿がとうとう現れた。

それはガバイトのよく知るポケモンであった。姿を見た瞬間、苛立ちが募り、思わず舌打ちをする。ガバイトの目に映ったのは、キバの鋭い翼竜と言すべき姿のポケモンだ。

『……………プテラ！』

ヒトカゲとルカリオも思わず声を上げた。誰もが予想しなかった、プテラの登場。当のプテラは敵であった時と同じく、憎たらしいほどの笑みでガバイトを見ていた。

「おい〜っす、お2人さん。まさかこんなところで再会するなんてな〜」

「な、何でここにいるの？」

当然だが、どうしてこの場にプテラがいるのかわからずにいる。ヒトカゲの問いに、プテラは視線をガバイトの方へ向けたまま話し始める。

「そりゃ〜このガバイトちゃんが危なっかしく事しようとしてるから、こっそりついてきて止めようとな。そしたら偶然お前達がいたってわけよ」

プテラにずっと見られているガバイトは黙視を続けていた。だがその言葉を受けて苛立ちを抑えきれなくなったのだらう、ガバイトの口が開いた。

「よく言うぜ。本当は殺し損ねた標的ターゲットである俺を殺やりに来たんだろ

「？」

「はっ、冗談はよしてくれよな。俺あ改心したんだよ」

少しでも心理的に追い詰めたいガバイトだが、プテラは苦しむどころか笑っている。面白くないのだろう、ガバイトはプテラを睨みつけ、刺のある言い方で攻める。

「改心？ 笑わせんな。今ここにいてるってことは、てめえに殺された俺が何故生き返ったのかを突き止めたい……違うか？」

(い、生き返ったって……？)

その一言が場の空気を変えた。プテラは凶星を指されて何も言えなくなり、彼の表情を見たガバイトは悦に入った。そしてヒトカゲとルカリオはその言葉の意味を掴めずに困惑していた。

生き返った　その表現が何を意味するのか。あれこれ考えたが、1番当てはまりそうな意味は1つしかなかった。“失われた命が、再び蘇った”というものに。

「さしずめ、殺しを失敗したことが許せねえって気持ちがあんだろ？　まだ捨てきれねえ悪の心を持った奴が正義面して何をほざいてんだ」

ガバイトの言葉がプテラに深く突き刺さった。今言われたことは全て凶星だ。蘇りの真相を掴みたい反面、どこか自分に対する口惜しさがあつたのは確かである。

1年前にバンギラスと戦った後には心を改めようと決意したのだが、数週間前にガバイトと対峙してしまつて以来、『失敗』の2文字がどうしても頭から離れなかつたのだ。

そのせいか、半ば諦めのような考えも浮かんでいたようだ。犯罪者が完全に更生するなんて無理なんだ、反省なんてできたもんじゃ

ないと。

「……確かにな。お前の言うとおりに、俺あまだ悪人だな」

「……プテラ？」

ふっ、と自分を嘲笑するプテラ。ヒトカゲの呼びかけにも反応せず、ただ黙って俯いている。想像とは違った反応を示したためか、ガバイトがプテラの事を気にし始めた。

実はこの時、プテラはある決心をしていた。それは悪の心、そして善の心の2つを持ったプテラならではの決心であった。

（ガバイトを放っておいたら、罪のない多くのポケモン達が死んじゃう。どうせ俺は悪人のままだ。だったら……共倒れ覚悟でガバイトを……）

もちろん、今自分が何をしようとしているか自覚している。しかしそれよりも、多くのポケモン達が犠牲になってしまふことを恐れているのだ。

昔から知っている、ガバイトの脅威。1つの悪で多くの命が救われるのなら、やるしかない。そう誓ったプテラの表情は固くなっていた。

「だがな、これだけは言えるぜ。意味のない殺しよりはな、こっちの方が断然意味があるんだよ！」

刹那、プテラがガバイトに飛び掛った。あまりに突然のことでガバイトも抵抗する間もなく、プテラの両足によって地面に押さえつけられた。それと同時に首元に翼をあてられる。

「な、何をする!？」

「ヒトカゲ！ ルカリオ！ 聞いてくれ！」

もがいているガバイトを押さえつけながら、プテラは大声で何かを伝えようとしている。2人はいきなりの行動に驚きながらも、耳を傾けた。

「今すぐレッドクリフへ行け！ そしてグラードンを起こせ！ こいつは俺が止めておく！」

「えっ、でも……」

「俺の事は気にしなくていい！ 黙ってたら多くのポケモン達の命がこいつに取られちゃうぜ！」

その一言一言が2人に重くのしかかった。同時に今までに見たこととなかった、プテラの必死さが伝わってきた。まるで別人みたいだとヒトカゲは感じていた。

プテラの姿を見る限り、そこには金のためなら平気で殺しをしてきた昔のプテラの姿はもうない。今あるのは、多くの命を救いたいと願っている、正義感あふれる姿だ。

『……わかった！』

想いを受け止めたヒトカゲとルカリオは、洞窟の出口目指し走り出す。これで大丈夫だと、わずかながらに安堵の表情を浮かべたプテラの気が緩み、ガバイトが押し退けて起き上がる。

「けっ、随分勝手な真似してくれんじゃねえか、ああ！？」

邪魔されたことにガバイトは相当怒っている。一刻も早くヒトカゲ達を止めに行きたいところだが、目の前にいる邪魔者を始末しないと腹の虫が収まらないといった具合だ。

「まゝそう言うなよ。せつかく2人きりになったんだからさ〜」  
「……へっ、確かにな。だったら、この場で殺り合おうじゃねえか  
！」

お互いを睨みつけ、いつでも攻撃できるよう身構える。先ほど壊された岩の欠片が地面に転げ落ちたときになった音を合図に、2人の殺し合いは始まった。

一方ヒトカゲ達は、その足でアーマルド達のいる海岸まで走った。再会するや否や「理由は走りながら」と言い、すぐさまみんなを連れて走り出した。

ヒトカゲとルカリオが状況説明をすると、ガバイトがいたこと、そしてグラードンが近くで眠っているという二重の驚きを示した。緊急事態の理由を理解したようだ。

「でもレッドクリフのどこにグラードンがいるの？」  
「わからねえ、罫でも探すしかないだろ！」

レッドクリフに何があるのかもわからない。だからと言って街で聞き込みをする時間など少しもない。1秒でも早く目的地に行つて探す、それしか方法はない。

とにかく、ただ走り続ける以外に何も考えないことにした。雨が降りそうな薄黒い色をした雨雲が辺りに立ち込めてきた、その時だった。

「あれ、みんな急いでどこに行くの〜？」

みんなの頭上から聞こえてきた、子供っぽい口調の声。その声に

つられてみんなが上を向くと、薄いピンク色の妖精みたいなポケモン・ミュウがいた。

『な、ミュウがいる！？』

誰もが驚かすにはいられなかった。特にベイリーフにドダイトス、そしてラティースはミュウを目にするのが初めてということもあり、息が詰まるほど驚いたようだ。

「だから、前に言ったけど、僕だってみんなと同じポケモンなんだからそんなに驚かないでよね」

相変わらず、驚かれるのが嫌らしい。ふくれっ面のミュウをかまっている時間もないため、この立ち止まっている時間がもつたいなく感じるルカリオは苛立ち始める。

「それで何だよ、用でもあんのか？」

「こつちが訊いてるんだよ、どこに行くのって」

いちいち答えなければいけないのかと思うと、ルカリオの顔は渋くなる。驚きっぱなしのベイリーフ達はまともに喋ることができないため、ヒトカゲが答えた。

「グラードンを起こしに行かなきゃいけないの！ そうしないとガバイトに操られちゃうんだ！」

ヒトカゲはさらに手短に詳細を説明する。重大なことであるはずなのに、ミュウの反応は「ふーん」というものだけ。表情も一切変えていない。

状況がよくわかっていないのか、それとも他人事だからこういう

反応を見せるのだろうかとみんなが疑問を抱いていると、ミュウが口を開き、こう言った。

「ダブルでアタックすれば大丈夫だよ」  
『ダブルでアタック？』

もちろん、それだけでは意味がわかるはずもなく、みんなは首を傾げる。ミュウもふざけてみんなと同じように首を傾げ、笑っている。

「うん、それでうまくいくはずだから、頑張つてね」

そう言うと、ミュウは手を振りながらどこかへ飛んで行ってしまった。引き止める間もなく、気づいた時には既に声の届かないところまで行ってしまっていた。

「行っちゃった……また訳のわかんねーフレーズだけどよ、きつと役に立つだろうぜ」

事実、“グローバル”という名前をいち早く教えてくれたのはミュウだ。そうなると今回のこの言葉も何かしらの手がかりになるに違いないと、ルカリオは確信したのだ。

再び、みんなはレッドクリフへ向けて走り出した。ガバイトによる、グラードンを操っての大量殺戮を阻止するために。



第52話 赤崖へ（後書き）

プテラ

「何だか俺が目立ってる」

ドダイトス

「……こういう事だよ、元敵がこんなに目立つなんて」

バンちゃん

「しかもいい奴になってる……作者さん、俺らもこんな風な出番あるんだよね？」

さあ、どうでしょうね（笑）

プテラ

「ちょっと無理じゃない？（笑）」

ドダイトス

（……） やっぱ殺そうか？ 怒（

バンちゃん

（……） 賛成だぜ 怒（

第53話 壁（前書き）

ヒトカゲ

「今回はプテラが目立つのか。応援しなきゃ」

ルカリオ

「やめとけ、人気横取りされるだけだぜ？」

プテラ

「絶対お前が目立たないよーに、作者に言っとこ」

ルカリオ

「やめるよてめえ（怒）」

プテラ

「……本気だぜ？」

ヒトカゲ

「あつ、久々に殺気を感じる（汗）」

ルカリオ

「い、ごめんなさい……（汗）」

## 第53話 壁

「つばさでうつ」!

「ドラゴンクロー」!

ヒトカゲ達が去ってからどれくらい経っただろうか、プテラとガバイトは時間を忘れるほどの激しい攻防を繰り返していた。相殺に相殺を重ね、疲れが出てきている。

数年前も、今と同じであった。その頃からグラードンを操ろうと考えていたガバイトの事を他の悪党共が見逃すはずがなく、抹殺するようにプテラに依頼したのがきっかけだ。

そしてプテラは仕事に取り掛かろうとしたが、標的のガバイトの力が互角であったのだ。どんなに攻撃しても同じ技を繰り返して相殺の繰り返しが続いた。

一瞬の隙を突いて、プテラはようやくガバイトを殺めたのだ。それほど苦労し、2度と関わりたくないと言ったプテラに思わせる程の存在だったのだ。

しかし皮肉なことに、ガバイトは今生きている。数年の時を経て再び殺し合うことになるかと誰が想像できようか。おそらくガバイト自信も思ってもみなかっただろう。

『かえんほうしゃ』!

2人は同時に“かえんほうしゃ”を放った。炎同士がぶつかり、炎の壁ができていく。どちらかが炎を止めない限り、その場から動

けないとガバイトは考えていた。

「……………“こおりのキバ”！」

「なにっ！？」

驚くことに、炎の壁を突き破ってプテラが出てきた。どうやら炎の壁ギリギリまで“かえんほうしゃ”を放ちながら近づいていったようだ。そして壁を突破すると同時に氷のエネルギーを自身のキバに纏わせ、そのままガバイトの右腕に噛み付く。

ガバイトの腕はパキパキと音を立てながら凍り始める。このままでは全身氷漬けになると思ったが、どうすればよいか判断がつかず、咄嗟にプテラを岩壁に力強く叩きつけた。

「ぐっ！？」

衝撃により腕を噛む力が緩み、一瞬の隙に素早く引き抜いた。ガバイトの右腕は半分ほど氷で覆われているため、しばらくは使えなさそうだ。

「あら、それじゃ利き腕が使えませんな。白旗も揚げられないっ  
てか？」

「……………旗の代わりにお前の首を掲げてやる！」

余裕の表情を見せ付けるプテラに、怒りをあらわにするガバイト。しかしプテラも余裕というわけではなかった。冷や汗が頬を伝う。

「“かげぶんしん”！」

ガバイトは次の手に移った。“かげぶんしん”により自分の分身でプテラを取り囲んだ。その数ざっと10。本人を目で見極めるの

には困難な状況だ。

手当たりしだいに攻撃して本人に当たる確率はそう大きくない。むしろ自分が攻撃される可能性の方が高い。プテラはその場で動かずにじっと作戦を練ると、この技をくりだした。

「にほんばれ」！

口から上方へ向けてエネルギーの塊を放出させたプテラ。その塊はまるで小さな太陽のように強い光を放っている。するとガバイトの作り出した分身が半透明になっていた。

「続いて本物に“はかいこうせん”！」

「食らうかぁ！ “だいもんじ”！」

はつきりとガバイト本人の姿を確認し、すぐさま“はかいこうせん”を放った。ガバイトも避けるわけにはいかず、すかさず“だいもんじ”で応戦する。

“はかいこうせん”による赤色のエネルギーと“だいもんじ”による強い炎が衝突した瞬間、大爆発を起こした。2人は互いに吹っ飛ばされて岩壁に体を打ち付けられる。

「くっ、やってくれんな。結構疲れてきたぜ」

「お前もな。そろそろ終盤へといこうじゃねえか」

互いに息を切らして構えている。睨み合っている間にも、刻々と時は近づいていった。2人のうち、どちらかが倒れる時が。

「はがねのつばさ」！

“アイアンテール”！」

プテラは翼、ガバイトは尾を鋼のように硬くしてぶつけ合った。これも2人の力加減が同じで、相手にダメージを与えるほどのものにはならなかった。

「がんせきふうじ」！

ここで咄嗟にプテラは“がんせきふうじ”を繰り出した。これ以上ガバイトに動き回られたくないのだろう、足止めをするつもりだ。

「おっと、“あなをほる”！」

何と、寸前で“がんせきふうじ”を見切ったガバイトが地面に穴を掘って回避した。一旦地面に隠れたらどこから出てくるか判断できないため、プテラは一瞬困惑する。

「……これだ！ “じしん”！」

一旦上昇し、地面に自身の両足を力いっぱい叩きつけた。それと同時に大きな地面の揺れが起こった。そのせいで辺りの岩も徐々に崩れてきている。

揺れが収まってからしばらくして、地中からガバイトが姿を現した。プテラの予想通り、地中で“じしん”を回避することができず、大ダメージを負っていた。

「はあ、はあ、くそっ……まさかてめえに、ここまでやられるとはな……」

ガバイトの全身に痛みが走っている。もしもつ1度同じ攻撃を受けたら、絶対に立っていられないほどの痛みだ。次に決定的なダメージをプテラに与えなければと考えを巡らす。

ガバイトにはポリシーがある。誰かを殺すとき、とどめは必ず首を掻つ切るのだ。だがそんな事にこだわっている余裕などない。それを除けば、意外に簡単に、そして確実に仕留める方法を思いついた。

「「がんせきふうじ」！」

何を思ったか、空中に浮いているプテラに向かって“がんせきふうじ”をするガバイト。地面から突き出た岩は天井まで届くほど高く、それはプテラを囲むように並んでいった。

数秒後には、プテラは上下左右完全に岩に囲まれていた。動きは制限されたものの、逆に岩によって攻撃を防げるだけのように思える。

「何だよこれ？ 俺を閉じ込めて逃げる気っすか？」

これはガバイトの負けを意味していると思って笑っていたプテラだが、実はそうではなかった。俯いて黙っていたガバイトが顔を上げると、笑みを浮かべてツメを地面へと向けた。

「……あばよ。「いわなだれ」」

刹那、プテラの頭上から大量の岩がガラガラと音を立てて落ちてきた。岩が当たる前に避けようと体を動かした時に、プテラは気づいた。逃げ道がない、と。

そう、周りは岩しかないのだ。ガバイトの“がんせきふうじ”によって、文字通り“封じ”られたのである。何も考える暇も、そして声を上げる間もなく、岩はプテラを飲み込んでいった。

「ふん、土葬する手間が省けたな」

目の前に積まれた岩の山を眺めながらガバイトはほくそ笑み、思えば最初からこうしておけばよかったと、独り言を呟く。

「これで引き分けた。お前が生きていた間していたように、俺も好きなことさせてもらっぜ」

ガバイトはしばらく岩山を見つめた後、後ろを向いて歩き始めた。その去り際に、ガバイトがある言葉を残していった。

もし神がいるとしたら、俺は神によって造られた悪魔かもしれねえな……。

その頃、ヒトカゲ達はレッドクリフを登っている最中であった。そこは道幅はわりと広いものの、道の両端には凹凸すらない。何かの拍子で両端に足がいつてしまった場合、滑落は免れないだろう。ひよっとしたらこの頂上にグラードンがいるのか。いや、この中腹あたりだろうか。何もわからないのでとにかく辺りに注意を配りながら走っていた。

「ねえ、何か見つかった？」

「いいや、何も見つからねえな。そっちは？」

ヒトカゲとルカリオが、崖の下を覗き込むように調べている。その逆側を、ベイリーフとドナイトスが覗き込んでいる。アーマルドはどういうわけか、ラティアスをしっかり警護していた。



「こっちも何もあるようには見えないわ」

「そうですね。どうやらこの辺ではないみたいですね」

こんな会話を、崖の中腹に到達するまでずっと続けていた。手ばかりを得られないまま体力だけが徐々に奪われている。

「も〜どこなんだろうなあ〜」

「何を捜している？」

首を傾げてヒトカゲがそう言った時、進行方向側から声をかけられた。誰もがあまり良い気配ではないと感じたせいか、気を引き締めてその方向を見た。

そこにいたのは、全身が鎧のようなものに覆われ、2本の角がトリードマークであるボスゴドラが1人、そして紫色の体をして足にも翼が生えている、コウモリに似たポケモンであるクロバットが3人、計4人だ。

「お前ら、俺達に何か用か？」

大体の見当はついてはいたが、敢えてルカリオは尋ねた。それを待っていたかのような、嬉しそうな顔をしながらクロバットが答える。

「ここより先を通すわけにはいかないんだ。どうしても言うのなら、俺らを倒していくんだな」

この状況下でこの台詞、間違はなくガバイトの仲間であると確信したヒトカゲ達はすぐに身構えた。だがここで、ドナイトスがヒトカゲに小声で何かを伝えようとしていた。

「ヒトカゲ、先に頂上へ行け。おそらくグラードンは頂上だ」

「で、でも……」

「心配するな。頼れるメンバーばかりだろ？」

クロバットの言った、「ここより先を通さない」。これはおそらく頂上付近に何かあることを意味しているとドダイトスは推測し、ヒトカゲを先に行かせようとしたのだ。

戸惑っていたヒトカゲだが、みんなの顔を窺うと、全員が黙って頷いた。大丈夫だ、任せろ。そう言ってくれているのだと感じ取ることが出来た。

(みんな……頑張つて！)

ヒトカゲもみんなに向けて黙って頷くと、ボスゴドラとクロバットの間をすり抜けるようにして走り出した。

「あつ、てめえ！」

「おっと、お前の相手は俺らだぜ？」

慌ててヒトカゲを追いかけようとするボスゴドラの前に、ルカリオとアーマルドが、同様にクロバット達の前には、残りの3人が立ちただかった。

「……生きて帰れると思うなよ」

ドスの利いた声でボスゴドラが威圧する。しかしそれくらいで屈するルカリオ達ではなかった。逆に神経が高ぶってきているようだ。今、崖上では新たな戦いが始まるうとしていた。

### 第53話 壁（後書き）

バンちゃん

「……………へっ？」

ドダイトス

「……………ま、まさか、「冗談だろ？」

いいや、プテラは負けたよ。これでガバイトを止める者がいなくなっってしまったよ。

バンちゃん

「う、嘘だ！ あいつが……………絶対嘘だって！」

ドダイトス

「そ、そうだ！ 何かの間違いだろ！」

そう言われてもなあ……………。次回以降も、まだまだ山場は続きます。

第54話 追撃（前書き）

バンちゃん

「まず言わせてもらおう。何だあの背景は！（怒）」

描いちゃったものはしょうがないじゃないか（笑）

それに、「お幸せに」ってコメントも多数あったよ（笑）

バンちゃん

「て、てめえぜってー俺を笑い者にしたかっただけだろ！？（怒）」

違うから（笑）

それより今回は……いろいろと大変です。

## 第54話 追撃

『“あくのはどう”！』

クロバットの3体一斉攻撃により、彼らの標的になっているベイリーフ、ドダイトス、そしてラティアスは崖を下る羽目になっていた。ルカリオ達の姿は完全に見えない位置まで来ている。

「そろそろこちらからもやらねば。お嬢、いいですか？」

「私はいつでも大丈夫！ ラティアスちゃんは陰に隠れてて！」

もちろん、ラティアスとしては一緒に戦いたいところ。しかしベイリーフとドダイトスは戦いに慣れた彼女をいきなり出させるのはあまりに可哀想だと思い、あえてこう言ったのだ。

納得はできないが、今仲間同士で言い争っている時間もない。ラティアスは渋々ながらも、ベイリーフ達の背後にある岩陰に身を潜めた。

『せーのっ！ “エナジーボール”！』

2人は同時に“エナジーボール”を放った。クロバット達の“あくのはどう”とぶつかり小爆発が起ると、爆風でクロバット達が体勢を崩した。

『“シャドーボール”！』

だがすぐに空中で1回転して体勢を立て直すと、再び3人同時に“シャドーボール”をベイリーフ達に向けて繰り出した。これも“エナジーボール”で相殺する。

それでもクロバット達は怯むどころか攻撃の手を止めようとしな  
い。“あくのはどう”や“シャドーボール”だけでなく、“エアス  
ラッシュ”などもランダムで繰り出していく。

「これじゃ埒があかないな……一気に片付けるしかないか。お嬢、  
下がって！」

息つく暇もなく攻防を繰り返しては、おそらく自分達が先に  
やられてしまうと考え、ドダイトスはクロバット達に致命傷となる  
攻撃を1発当てようと試みる。

「くられ、ストーンエッジ……」  
「いいのか？」

ドダイトスが前足を思い切り上げたところで、クロバットが口を  
開いた。足を上げたまま、どうということかとドダイトスは尋ねる。

「ここをよく見るよ。こんなところで“ストーンエッジ”使ってみ  
？ 崖が崩れて墜ちるのはもちろん……」  
「……ちっ、運のいい奴らめ……」

“ストーンエッジ”は岩を砕いてからできる攻撃だ。ここで地面  
の岩を砕くということが通路を壊し、崖崩れを起こす危険性がある  
ことをドダイトスは考慮してなかったのだ。

『運も実力の内さ！ “エアスラッシュ”！』

今度は3人同時に空気力でドダイトス達に切りかかった。その  
空気の流れを変える方法が頭になかったベイリーフとドダイトスは  
避けようとしたが、2人とも足に攻撃を受けてしまった。

『ぐあつ！』

鋭い痛みが彼らの足に走った。力を入れることもできず、その場に崩れてしまう。“エアスラッシュ”を受けた足からは血が流れ出していた。

『おら行くぜ！ “シザークロス”！』

クロバット達はさらに強力な“シザークロス”で攻撃を仕掛けてきた。ベイリーフ達の傷口にまた大きく傷をつける。激痛が彼らを襲った。

痛みによる絶叫は辺りに響き渡った。もちろん岩陰に隠れているラティアスにもしつかりと。その声に驚いてしまい、思わず岩陰から飛び出してしまった。

「おっ、そこにいたのかカワイコちゃん」

「あつ……え……」

ただでさえ目立つラティアスの体を、クロバット達が見逃すはずなかった。すぐにラティアスの元に近づき、彼女を取り囲む。そして身動きを取らせまいとクロバット達は翼をラティアスの首に当てた。

「黙っていれば何もしねえよ。だけど下手に動くと、真つ二つだけ？」

それは警告であった。ガバイトの計画の邪魔をするなど。邪魔しようがしまいが、ポケモン達を殺そうとしているのには変わらないが。

ラティアスが人質に取られている以上、ベイリーフもドダイトスも安易に行動を起こせない。しかも今は立ち上がれないとなると、このままでは3人いっぺんにやられてしまう可能性があった。

「いやああっ！」

『ラティアス！？』

突如、ラティアスが騒ぎ始めた。急に恐怖が走ったのだろう、体も震えている。異変に気づいたベイリーフ達が呼びかけるが、全く耳に入っていないようだ。

「ちっ、騒ぐんじゃねえ！ 黙ってる！」

クロバット達も慌て出すが、ラティアスは暴れて追い払おうとする。それに加えて叫びつばなした。このままでは手に負えないと判断したのか、クロバット達は翼を構えた。

「仕方ねえ、今すぐここでやっちま……」

「きゃ　　！！」

刹那、上空へ向けてラティアスの口から何かが放たれた。一瞬の出来事であったため、クロバット達、ベイリーフ、そしてドダイトスもそれが何かを判断することができなかった。

それから数秒後、流れ星の如く、空から無数のエネルギー弾が振ってきた。ラティアスを始めとするドラゴンタイプのポケモンの得意技“りゅうせいぐん”だ。

『げっ！？』

頭上を見上げてクロバット達の顔が青ざめる。自分達目掛けて強



い光を放ったエネルギー弾が大量に降り注ごうとしているのだ。慌てた様子でラティアスから離れていった。

「サイコキネシス」！

そんな彼らを見逃さず、ラティアスは“サイコキネシス”を使って“りゅうせいぐん”のエネルギー弾を全てクロバット達に行くように曲げたのだ。

当然そんなものから逃れられるはずもなく、“りゅうせいぐん”はクロバット達に全て命中。気づいた時にはクロバット達の意識はなく、仲良く地面に倒れこんでいた。

「……ラ、ラティアス？ いつからそんなに大胆になったの？」

「えっ……だつて、怖かつたんですもの……」

普段のラティアスからは考えられない行動に、ベイリーフとドダイトスは唖然としている。当の本人は無我夢中でやっただけだと言いつ張るが、2人の開いた口はしばらく塞がらなかった。

その頃、ルカリオとアーマルドの方も戦いが終盤に差し掛かっていた。相手のボスゴドラも含め、この場にいる全員が大分ダメージを負っている。

「はあ、はあ、さっさとくたばれ！ “ドラゴンクロー”！」

「それはこっちのセリフだ！ “ボーンラッシュ”！」

相手からの攻撃を防いでは反撃の繰り返し。ルカリオとアーマルドの力はこのボスゴドラと互角。どっちが勝ってもおかしくない。

「……ええい、めんどくせー！ “はかいこうせん”！」

じれったく感じていたボスゴドラがとうとう痺れを切らし、“はかいこうせん”を放って一気に片付けようとした。ルカリオ達に向けて放たれたエネルギーが、ボスゴドラの目の前で爆発を起こした。砂煙が舞い、視界が悪くなる。だがルカリオ達がやって来る気配がないのをボスゴドラは感じ、心の中で呟く。死んだな、と。しばらくして砂煙が晴れると、そこにあっただのは“はかいこうせん”によって空けられた穴だけだった。おそらく穴に落ちたか、吹っ飛ばされて滑落したかだろうと思っていた、その時だった。

「……何だ、この感じ……」

ボスゴドラは胸騒ぎを覚えた。嫌な予感がする、そう思いながら辺りを見回すが、何も無い。気のせいかと一瞬思ったが、嫌な予感が当たっていたことに気づいたのはすぐのことだ。

地面から大量の土が噴き出したかと思いきや、その中から現れたのはルカリオとアーマルドだった。2人が飛び出た場所はボスゴドラと目と鼻の先のところだ。

「なっ…… “あなをほる”か!？」

「正解者にはプレゼントだぜ！ “シザークロス”！」  
「俺からは“はどうだん”！」

アーマルドの“シザークロス”、そしてルカリオの“はどうだん”によるコンビ技がボスゴドラに命中する。これが決定的なダメージとなり、ボスゴドラは地面へ倒れこんだ。

「やったな！ ようやく倒せたぜ！」

「うん！ 俺達のコンビ技も上手くいったしな！」

2人はあまりの嬉しさに興奮気味だ。特にアーマルドに至っては、初めて自分の攻撃で悪を倒したということもあり、まるで子供のようにはしゃいでいる。

今まで生きてきた中で、こんなにすがすがしい思いをしたことがなかったらしい。その喜びを、ルカリオと分かち合っている。アーマルドの話の聞いているルカリオも自分の事のように喜んでいた。

「……あつ、月だ」

ふとルカリオが空を見上げると、薄暗くなった空に月がうつすら顔を出していた。アーマルドもそれを見るため、視線を上げた。2人はじつと月を見続けている。

だが、沈みかけた夕日から発せられる、鈍い茜色が何とも言い様のないほど不気味だ。何とも思っていないルカリオはただ月を見ているだけだった。

「じゃあ、そろそろヒトカゲのところにも………」

満足するまで月を眺めたルカリオがアーマルドの方を振り向いたとき、時間が止まったかのように、その光景が静止画として目に入ってきた。

「……………」

硬直しているアーマルドの顔、口から流れ出ている血、腹部に突き刺さった針金のように硬いツメ、そのツメの持ち主・ボスゴドラの姿。1つ1つがルカリオの目に映っていった。

「……アーマルド？」

実は、ボスゴドラは僅かながらに残っていた力を振り絞り、1番近くにいたアーマルドだけでも殺してしまおうと“メタルクロー”をくりだしたのだ。

ルカリオが状況を飲み込む前に、ボスゴドラが力尽きてうつ伏せに倒れる。力が入らずに腕にもたれかかっていたアーマルドの体はバランスを失い、崖下へと向かって落ちようとしていた。

「アーマルド!!」

無意識のうちに、ルカリオは危険を顧みず、アーマルドを追って崖から身を投じていた。

第54話 追撃（後書き）

ルカリオ

「……………ちょっと待て！ な、何だよこれ！？」

何だよと言われても……………こうなってしまったものは仕方ないでしょ。

カイリユー

「ふむ、何だかヤバい状況になってきたね。どうなるのかな？」

それは次回。ルカリオとアーマルド、この2人に注目です。

第55話 最初で、最高の……（前書き）

約2週間ぶりの更新です。嗚呼、大変だった（汗）

ヒトカゲ

「ひと段落しないで！（汗） 2人はどうなっちゃうの!？」

そうでした（汗）

崖から転落したルカリオとアーマルド。この2人の運命は……この後すぐ！

第55話 最初で、最高の……

ルカリオが我を取り戻したときには、右手にアーマルドの腕がしつかりと掴まれていた。崖の途中にある突き出た岩のおかげで落下するのを免れることができたのだ。

とはいえ、崖からの落下の際にルカリオはこの岩に体を強く叩きつけられたようだ。全身に痛みが走っているだけでなく、アーマルドを掴んでいる右腕も負傷している。

「……くっ！」

何とかしてアーマルドを引き上げなければと、右腕に力を込めるが、怪我のせいで思うように力が入らず、掴んでいるのがやつの状態である。だがそれ以上に深刻なのはアーマルドの方だった。

「……けふっ……」

小さく咳き込む度に、少量ではあるが口から血を吐き出していた。それに加えボスゴドラの“メタルクロー”によって刺された腹からも出血が見られる。誰が見ても一刻を争う状況だ。

まだ運が良かったのは、2人の命が助かったことだけだった。ルカリオの腕が繋いでいる、アーマルドの命。それを思うとプレッシャーがルカリオに重くのしかかっていた。

（くそっ、何でこんなことになっちまったんだよ!?!）

ルカリオは自分の運命を嘆いた。どうしてこんな目に遭わなければならぬんだ、何でアーマルドがこんな危機にさらされなければならぬのだと。

今はとりあえず、励ましてあげる以外にしてやれることはない。とにかく無事であることを確認するために、何回もアーマルドに声を掛けることにした。

「も、もう少しだからな。しっかりしろよ」

アーマルドの耳にルカリオの声はしっかり届いていた。だがどういいうわけかそれに対して応答をしない。ただ、ルカリオの方を見ているだけだったのだ。

(俺、いつも足引っ張ってるよな……)

この時、アーマルドの心の中ではある想いが芽生え始めていた。これまで旅をしてきた中で、アーマルドはずっと足を引っ張っていると思っていたのだ。もちろん、ヒトカゲやルカリオにすればそんな事は微塵も思っていない。

先ほどのボスゴドラとの戦いでも、アーマルドがいたからこそ倒せたようなものだ。しかし今の状況を見ると、彼の中では迷惑をかけていると思いつ込んでいた。

現に、ルカリオの手は震えている。懸命に自分の手を掴んでくれているのが痛いほどわかった。同時に、いつも支えられている自分が情けなく感じている。

(もしこのままだったら、俺ら2人と……そうなると、戦力が減ってしまう)

次にアーマルドは最悪の事態を想像した。仮にそうなったとして、ベイリーフ達を含めたヒトカゲの仲間4人で戦うことになる。果たしてそれだけでガバイトの計画を阻止、いや、万が一グラードンが目覚めた時、鎮めることができるか不安が残る。



詠唱ができるルカリオだけでもいなくてはと思うと、これ以上こんな状況が続いているわけにはいかないと、アーマルドは強く思った。

「……………」

ふと、ルカリオの方を見た。苦痛に歪んだ表情をしている。それは怪我のせいだけではなく、左手で岩を掴み、体のバランスを保っている辛さからくるものでもあった。

ルカリオ自身も、本当ならば両手でアーマルドを引き上げたいが、これが原因でできないことに苛立ちを覚えている。

そんな事も含めて全てを見透かして、アーマルドはある決心を固めた。それはこの状況を打破するため、彼なりの、最善の考えであった。

「……………ルカリオ……………」

「ど、どうした？ 大丈夫か？」

不意に声を掛けられ、ルカリオは心配してアーマルドの顔を覗きこむ。容態が悪化したのかと思いきや、そうではなく、真剣な眼差しでこちらを見ていたのだ。

突如、アーマルドがある言葉を発した。それはルカリオ達と出会ってからしばらくして、初めて喋った、あの言葉だった。

「……………ごめん……………」

ルカリオは首を傾げた。何故アーマルドが謝ってきたのかがわからないからだ。それが何を意味しているのかを訊ねると、意外な答

えが返ってきた。

「俺、一緒に行けそうにないわ……」

「ど、ど、どという事だよ、それ……」

急に弱気な発言をするアーマルドが心配でならないようで、ルカリオは焦り始める。「聞いてくれ」というアーマルドの一言で、まともに耳を傾けるようになった。

「この状態が続けば、2人とも落ちちまう。仮に助かったとしても、俺はもう長くない。この先、ルカリオがいなきゃヒトカゲ達は勝てるかわからない。だから……手を離してくれ」

手を離してくれ、それがアーマルドの考えた最善の策だったのだ。どうせあと1時間もすれば力尽きる。ならばいつそのこと自分が犠牲になればとの考えた。

当然だが、ルカリオがそんな事を受け入れるはずがない。何とかしてアーマルドの気持ちを変えようと必死で語りかけた。

「な、何バカな事言っただよ！ 次そんな事言ったらぶん殴るからな！」

だが、こんな言葉しか出てこなかった。いつもの会話の中で出てくるのと何ら変わらない言葉。しかし、それを聞いたアーマルドの表情が少し和らいだ。

「……そついや、ルカリオっていつも二言目には、ぶん殴るって言うってたな」

まるで、今までの出来事を懐かしんでいるような言い方だ。この

時、アーマルドの頭の中では今までの思い出が走馬灯のように蘇っていたのだ。

初めて会った時、高熱で倒れた時、かくれんぼをした時、初めて敵と戦った時。それら全てが懐かしいものになっていた。もちろん、ヒトカゲやルカリオとのやりとりも。

「お、おいやめろ。それ以上何も言うな。血が……出ちまうだろ……」

思い出を語るアーマルドを止めるルカリオ。出血してしまうからだと言いが、本当は違う。自分の意思とは無関係に、勝手に込み上げて来る涙を止めたかったからだ。

「じゃあ、これだけは聞いてくれ」

そんなルカリオを見ている、どうしても言いたいことがあるらしい。視線を合わせると、アーマルドは無理していつもの表情を作りながら、話を始めた。

「こんなどうしようもない俺を救ってくれて、ホントに、嬉しかった。ヒトカゲにも、ルカリオにも、そして旅について来てくれたラティアスにも……とても感謝してる」

「お、お前……」

それは、アーマルドが初めて語った、ずっと言えずに心の中にしまいこんでいた本音。またしても、ルカリオの中から込み上げてくるものがあつた。

「俺が言うのは図々しいかもしれないけど……みんな、大好きだ。俺にとってみんなは、最初で、最高の……“友達”なんだ！」

そこまで言った時には、2人の目から涙がとめどなく溢れ出ていた。それ以上は何も言わず、ただ、互いの気持ちを確かめ合う時間を感じている。

旅をしてきた時間は決して長いとは言えない。しかしこの2人の距離を縮め、強い絆を造り上げるには十分な長さだった。一見凸凹に見える、このコンビの強い絆を。

「だから、友達を死なせるわけにはいかない。これ以上迷惑をかけるわけにもいかない。早く手を離して……けふつ、ヒトカゲと合流してくれ」

「バカ言うな！俺だってお前を死なせるわけにはいかねーんだよ！」

アーマルドはみんなのため、そしてルカリオはアーマルドのためを思って1歩も引かない。特にルカリオはアーマルドの容態や自分の体力に焦りを感じている。

それは落ち着くどころか、逆に悪化していた。依然としてアーマルドの吐血は治まらないし、ルカリオの腕の力も最初と比べ落ちている。状況は悪くなるばかりだ。

何か行動を起こさなくては、という2人の考えは一致していた。行動によって状況が変わるといふ考えも一致している。違うことと言えば、犠牲を伴うかどうかだ。

「俺は……絶対に諦めねーからな！」

刹那、強い意志がルカリオの右手に力を与えた。火事場の馬鹿力というものなのだろうか、徐々にはあるが、アーマルドが引き上げられている。

これで2人も助かる、そう確信していた。だが若干安心してい

たアーマルドが目にしたのは、ルカリオの載っている岩に亀裂が生じていた光景だった。

(ま、まずい……!)

おそらく、最初にルカリオが体を打ちつけた時にできた亀裂が広がったものだ。今崩れてもおかしくない程だが、このことにルカリオは気づいていない。

アーマルドが警戒していた矢先、ルカリオの体のバランスを支えていた左手が掴んでいる岩が崩れた。岩に体重を乗せていたルカリオの体はその方向へ倒れそうになる。

「う、うわっ!？」

ルカリオが落ちれば、アーマルドも落ちる。今まさにルカリオは岩から落ちようとしている。となればアーマルドのする事はただ一つ　ルカリオを助けることだ。

「……危ないっ!」

アーマルドは叫ぶと同時に、自分を掴んでいるルカリオの右手の甲を自身のツメで刺した。突然襲ってきた痛みに驚き、ルカリオは右手を開いてしまった。

「痛っ……!」

ルカリオが気づいた時には、自分の手からアーマルドが離れていた。すぐに崖下を覗くと、その姿がどんどん小さくなっていつているのが目に入った。

叫ぶ。とにかく叫ぶ。ルカリオは涙で目をいっぱいにしながら声

にならない声で叫んでいる。残されたのは、ルカリオの右手についている、アーマルドの血痕だけだった。

（頼む、俺の分まで戦ってくれ。ガバイトの計画を阻止してくれ…  
…）

重力に身を任せ、落ちていく最中、アーマルドはそう思い続けた。ルカリオにこの想いが届くように、そう信じて。

全てをルカリオ達に託して、自らこの道を選んだ彼が、この地で最後に残したのは、みんなへ向けた別れの言葉だった。

じゃあな、俺の“友達”

第55話 最初で、最高の……（後書き）

自ら、相手を想<sup>ルカリオ</sup>ってああしてしまっただのです。  
もちろんそれが正しい行動だったかどうかは、今の時点では誰にも  
わかりません。

1つ言うならば、大切なものを護る時、自分を犠牲にできる勇気を  
持ち合わせている人を、私は尊敬します。

第56話 やるべきこと(前書き)

アーマルド

「ここなら出ていいんだよね?」

あ、えつと……はい、どうぞ(汗)

アーマルド

「……でも喋ればいいんだ?」

そ、そう言われてもなあ(汗)

アーマルド

「じゃあとりあえず、“本編どうぞ”ってことで」

…… 前回の話は何だったんだい、ぶち壊しじゃないか(汗)



## 第56話 やるべきこと

グラードンの壁画があつた洞窟内。その中になる大きな空洞内の一角に、岩だらけのところがあつた。先ほどの戦いでプテラが生き埋めになっているところだ。

その岩が、突如としてカラカラと音を立てて揺れ始めた。しばらくそれが続き、やがて岩が崩れてゆく。崩れた跡を見ると、そこにあつたのは、両足で立っているプテラの姿だつた。

「はあ、マ、マジで死ぬかと思つた……」

プテラは生きていた。実はガバイトが放つた“いわなだれ”が当たる前に、“こらえる”を使つていたので。ボロボロになりながらも、何とか死なずに済んだのはこのためである。

「……だが、こんな状態じゃ、戦うことなんかできねえ……」

自慢の翼は撃ちぬかれ、全身に傷をつけられ、まともに体を動かせる状態になかつた。ましてやガバイトが去るまでじつと岩の中に潜んでいたのだ、その苦痛は計り知れない。

本当なら今すぐにガバイトの後を追いかけたいところだが、1歩歩くたびに体に激痛が走つてしまう。これではガバイトのところまで辿り着く前に倒れてしまうのは目に見えていた。

「どうするか……イチかバチか、あの“厄介者だつた”奴らに賭けてみるか……」

頼りになる存在に心当たりがあるようで、プテラは痛みに堪えながら歩き始めた。プテラの言う“厄介者だつた”奴らのところへ向

けて。

一方、クロバット達を倒したベイリーフ達は、奇怪な光景を目にしていた。それは以前ヒトカゲ達が見たメタモンと同じように、地面に倒れこんだクロバット達が黒い粒子状となって消え去ったのだ。この原因を解明するためにも、彼らもまたガバイトを追おうと気持ちは固める。先導を切つてドダイトスが前へ進もうとした。

「……ぐっ！」

彼もまた、先ほどの戦いによって負った傷のせいで歩くことができなかつた。ベイリーフも同様の理由で動けない。前足を出す度に痛みのせいでバランスを崩してしまうのだ。

「参ったな、派手にやられてしまったか。まずいぞ……」

「私も。ごめんなさい、役に立てなくて」

ベイリーフが深々と頭を下げるが、彼女を責めるものはいない。勇敢に立ち向かってくれた、それだけでドダイトスもラティアスも感謝している。

しかし今問題になっているのは、ベイリーフとドダイトスが動けないことだ。自由に動けるのはラティアスだけだったため、彼女がこう提案した。

「あの、ちょっとここで休んで、大丈夫そうなら登ってきてくれます？ 私が先に行つてるルカリオさんにこの事を伝えてきますから」

ラティアスを1人で行かせるのに2人は少々難色を示したが、他に頼れる存在も今はいない。思い切つてラティアスに任せることに

した。

「わかりました。気をつけてくださいね」

ドダイトスの言葉にラティアスは小さく頷き、ルカリオのいる所へ向かって飛行を始めた。2人は彼女を見送ると、次に何をすべきかを考えながら待つことにした。

しばらく飛行し続けたラティアスは、レッドクリフの中腹過ぎまでやって来ていた。辺りを見回してはみるが、ルカリオの姿は見当たらない。

「ルカリオさんとアーマルドさんのことだから、多分ボスゴドラにやられてるなんてことないと思うんだけど、どこにいるのかな？」

まさか崖には落ちてはないだろうとラティアスは思っているが、念のためと崖下を覗き込んでみる。視線の先には、ここがレッドクリフと名づけられた所以があった。

「わっ……本当に赤い……」

崖下に広がっている地面、そこから生えている草木までもが赤色に染まっていた。まるで血で辺り一体を染めたかのように、若干黒を帯びた赤色をしていた。

視界の半分以上が木々の葉で覆われている。たとえここから落下しても、これでは捜しようがない。おそらく、この木々の下には多くの亡骸があるのだらうとラティアスは推測する。

「は、早く捜そっ」

想像すると急に怖くなり始め、ラティアスは崖下からぱつと目を背けた。すると偶然にも、背けた先に小さく何かが見えたようだ。うつすらと青色のように見えたので、すぐにルカリオだと判断した。

「あつ、いた」

やや急ぎ気味にルカリオの元へと近づくとラティアス。ひとまず安心したようだ。声の届くところまで近づくと、ラティアスは少し大きめの声でルカリオを呼んだ。

「ルカリオさん！ 大丈夫ですか？」

だがルカリオからの返事はない。それどころか、ずっとラティアスに背を向けて立ち止まったままだ。首を傾げながらも、ラティアスはルカリオの後ろで話し始めた。

「こっちは何とかクロバツト達を倒せたんですが、ドナイトスさん達が怪我をしちゃって動けないでいるんですよ」

話は聞いているようで、耳が動いている。しかしどういいうわけか、ラティアスと顔を合わせようとしない。様子がおかしいのでラティアスが心配し始めた、その時、ようやく口を開いた。

「……2人を安全な場所へ連れてって、治療させる」

ものすごく冷静な応答だった。声色からも驚いているとは感じられない。ラティアスはさらに心配になり、一緒に行った方がいいのではと提案する。

「でも、1人でも多くいた方が……」  
「早くしろ！」

話を割ってルカリオが大声で言った。その声は怒りを含んでいるようにラティアスには聞こえたようで、恐さで体をびくつかせる。自分に対して怒っているかどうかもわからないまま、とりあえず「わかりました」とだけ言ってその場を後にするラティアス。何かあったのかと考えながら、急ぎめにベイリーフ達の元へと飛んでいった。

「……悪いな。今の俺はお前と一緒に戦ってやれない……」

完全にラティアスが去った後、その場に立ち竦すくんだままのルカリオが呟く。怪我した右腕に力を込め、手の平を思い切り握りしめる。そこにはまだ血がついたままだ。

そのまま、じっと集中する。今でも目の前に広がっている、あの瞬間を忘れるために。そして前に踏み出すため、心の中に封印するかのよう。

しばらくして、ルカリオは顔を上げて歩き始めた。その表情は自分の感情を出さないように、わざと引き締めたものになっている。今の彼にはそれが精一杯の表情だった。

「もうそろそろ頂上かな？」

一方、何も知らないヒトカゲは頂上を目指しつつずっとグラードンの罫探しをしていた。しかし罫どころか、グラードン、いや、誰かがいる形跡すら見つかっていない。

辺りを見回していると、こちら側に向かって走ってきているルカ

リオの姿を捉えた。ヒトカゲは大きく手を振って自分の存在を知らせる。

「こつちー！」

程なくしてルカリオが到着。嬉しそうに近寄るヒトカゲだが、ルカリオの表情に違和感を感じたようだ。口元に軽く力が入っていて、まるで話してはいけない事があるかのような顔つきだった。

「……ヒトカゲ、約束してくれ」

突如としてルカリオは口を開き、そんな事を言い出した。何を約束しなければならぬのか、全くわからないままヒトカゲは頷いた。

「絶対に……絶対にガバイトの計画を阻止するぞ。そして、生きてここを抜けるぞ」

心の中で、既に誓っていた約束。今この場にはいない、彼との約束を、ヒトカゲと実現するためにルカリオは言ったのだ。もちろんヒトカゲはそんなルカリオの想いなど知る由もない。

それでも、場の空気から少しは感じ取ることができた。口では言い難い程の事があったのだらうと。それに応えるべきだと、ヒトカゲが頷こうとした、その時だった。

「お話はもう済んだのか？」

ルカリオが顔を上げ、ヒトカゲが後ろを見ると、先ほどまでなかったガバイトの姿がそこにはあった。少々怪我をしているが、どこかで手当てでもしたのだらう、プテラと戦った後とは思えないほど元気になっていた。

憎たらしい笑みが2人に怒りを募らせる。そんなガバイトの右ツメの先には、しっかりと“赤の破片”が載せられていた。

「せっかくのグラードン復活祭だというのに、観客はお前らだけか」  
「あのクロバットとボスゴドラはやっぱりお前の差し金か、ガバイト」

ふん、と鼻で笑うと、ガバイトが「そうだ」と答える。あいつらさえいなければと嘆くルカリオだったが、過ぎてしまった事にしがみついている暇はなかった。

「ガバイト、僕達絶対に殺戮なんてさせないからね」

1歩前に出て警告するヒトカゲ。既に攻撃できる体勢だ。そんなヒトカゲの姿を見て、ガバイトが大笑いする。

「笑わせてくれんじゃねーか！ お前ら2人に何ができるってんだよ！」

その言葉には2人も黙っていられなかった。同時にガバイトへ向かって攻撃しようとした時、とうとうガバイトが行動を起こす。

「ほう、どうしても邪魔するつもりか。だったら止めてみな。俺が操る、大地の神・グラードンをよ！」

刹那、ガバイトは持っていた“赤の破片”を自身の足元へ投げつけた。破片は地面へと突き刺さる。その瞬間、地面に緑色の線で模様を描かれていった。

『なっ！？』

ヒトカゲとルカリオも思わずその場に立ち止まる。その間にも模様はどんどん広がっていく。その模様はまさしく、ヒトカゲが洞窟で見た、あの模様だった。

模様が全て1本線でつながると、今度は地面が揺れだした。あまりに激しい揺れのため、視界がなくなるほどの砂埃が舞うほどだ。2人は腕で目を覆った。

さらに、地割れが始まった。崖崩れの恐れがあるため、ヒトカゲ達は一旦その場を退却せざるを得なかった。来た道を全速力で駆け戻る。

「くそつ、何も見えねえ！」

「ル、ルカリオ、あれ！」

砂埃の中、うつすらとヒトカゲの目に映ったのは、驚愕の光景だった。

刺々しく、恐竜のような姿。赤色の体にあるのは、先ほど地面に描かれた模様。そして、何ともいえぬプレッシャーを放っている。

「……………グルルル……………」

低い唸り声が耳に入る。初めて聞く声だが、これで2人は確信した。

『……………グラードンが、復活した……………』



第56話 やるべきこと（後書き）

ヒトカゲ

「嗚呼、復活ですか（汗）」

はい、復活ですな（笑）

今回もあまり多くは語れないので……じゃ、締めという言葉をよく。

ヒトカゲ

「見てくれないと、暴れちゃうぞ ……これでいい？」

そ、それは某アニメのパクリじゃないか（汗）

## 第57話 神の暴走（前書き）

いや〜公式発表されたポケモンが全部で500匹になりましたね。

ドラゴンポケモンのレシラムとゼクロム。この2体はどんな関係があるのか楽しみですね。新聞にでっかく載ってたのを見て惚れました（笑）

ルギア

「……お前がカリスマと称していた私を見捨てるつもりか？」

グラードン

「神を怒らすでないぞ？」

い、いえいえもちろんそんな事しません（汗）

## 第57話 神の暴走

ヒトカゲ達の目の前で、グラードンが覚醒した。特性である“ひでり”によって辺りの空は一気に明るくなり、まるで太陽が接近しているかと思ってしまうほど眩しく、暑い。

それに加え、神と呼ばれるポケモンが放つ強烈なプレッシャーが襲い掛かる。それを感じるだけで、大抵のポケモンなら恐れをなして逃げ出してしまうほどだ。

「さあ、ショータイムのはじまりだ！」

グラードンの頭部側面にある刺に乗っているガバイトが叫ぶ。同時にグラードンが迫力ある雄叫びをあげると、開いた口にエネルギーを溜め始めた。

「ルカリオ、に、逃げて！」

「言われなくてもわかってらあ！」

2人が驚いている間にグラードンが攻撃しようとしている。慌てて二手に分かれて攻撃を回避しようとするヒトカゲとルカリオを見ながら、ガバイトはツメで指示を出す。

刹那、グラードンが桁違いのエネルギーを放った。太陽エネルギーを集めた“ソーラービーム”だ。それはレッドクリフを過ぎてグラーサンに面する海へと真っ直ぐ突き進む。

その直後、海は大爆発が起こったかの如く荒れ狂った。とてつもなく大きな海水の柱ができ、辺りにいた鳥ポケモン達を飲み込んでいく。

「あ、あれが“ソーラービーム”だって言うのかよ……半端ねえ威

力じゃねーかあれ……」

ヒトカゲもルカリオもただ腰を抜かすしかなかった。同じ技は何度も見たことがある。しかしこれ程までに凄まじいものを目にしたことはこれが初めてだ。神と呼ばれしポケモンの力を改めて感じたようだ。

「どうだ、グラードンの威力は。たとえお前達が束になったところで、俺の計画は最初っから止められるものじゃなかったってことだよ」

高笑いするガバイトを、ヒトカゲ達はただ見ていた。戦意喪失とまではいかないが、グラードンを抑えるという強い決意が崩れかけているようで、体が動かない。

しかし、ヒトカゲは何度窮地に追いやられても、必ずできると信じて困難に立ち向かってきたことを思い出す。ルカリオは今この場にはいない者の想いを再び思い返す。

“絶対に止める” 2人は自分自身に対して心の中でそう言った。その想いは先ほどまでの障害を簡単に破り、体も思いどおりに動くようになった。

「僕達に不可能はないってこと、今から証明するよ！」

「じゃあやってみろ。すぐに散っちまうだろうがな！ ハハハ！」

ヒトカゲは不可能はないと宣言したが、この時点でグラードンを打破する方法があるわけではなかった。まずは手探りで解決策を見いだすしかない。

「ほのおのうず」！

まず、ヒトカゲが炎を吐き、グライドンを炎でつくられた渦に閉じ込める。“ひでり”による効果で炎は通常より強めである。

多少なら動きを止められるかと思いきや、グライドンはそれを簡単にはらってしまった。少しだけ落胆しているヒトカゲの次に、ルカリオが前へ出た。

「はどうだん”！」

ルカリオは得意としている“はどうだん”を、グライドンの顔面目掛け放った。実は顔面を狙ったのには訳がある。操られている際に、自我を失っているのか、それともただ命令を聞くようになっただけなのかを調べたかったのだ。

だが、そんなに甘くなかった。グライドンは片手で“はどうだん”を、およそ倍の速度で弾き返してきたのだ。受け止められるはずもなく、ルカリオは走って“はどうだん”を避けた。

「グライドん、“ふんか”」

ガバイトの指示に従うグライドンの口から、まるでマグマを思わせる炎が上空へ向かって噴き出てきた。さらに地面からも間欠泉の如くマグマが噴出する。

炎が苦手なルカリオは逃げるしかなく、炎はある程度大丈夫なヒトカゲにとつても、ここまで桁違いの攻撃では太刀打ちできず、ルカリオ同様、逃げる他なかった。

「潰しちまえ。“アームハンマー”」

逃げ惑う2人を高らかに見物しながら、ガバイトは次の指示を出す。拳を作り、気を集中させて力を込めると、グライドンはヒトカゲ達目掛け一気にその拳を振り下ろした。

『う、うわあつ！』

間一髪、避けることができた。振り返ってみると、グラードンの“アームハンマー”によってできた穴の大きさが、その威力を物語っていた。

それに見とれている暇もなく、すぐさま再び拳が降りかかってきた。何度か攻撃を試みるも、全くと言っていいほど効果がない。

(これじゃ、詠唱しても攻撃が……いや、それどころか詠唱している間にやられちゃう……)

ヒトカゲは知恵を絞って対策を練ろうとするが、頼みの綱でもある詠唱をしてもダメなのではという思いが強く、なかなか踏み切れずにいた。

そして、それはルカリオも同じであった。通常の技であれだけ軽々と弾かれる程の力を持っているグラードンに対して、真正面からぶつかっても意味がないと思っている。

「大人しく観念しろ。お前達はどのみち死ぬ運命なんだからな」

冷たく笑いながら、ガバイトが告げたのは死の宣告。この場であるところとどこであるところ、大量殺戮が目的のガバイトにとってはヒトカゲ達を始末することに、ほとんど執着などないのだ。

「だ、誰が死ぬかよ！ もし死ぬとしても、それはお前を倒してからだ！」

そう、絶対に計画を阻止すると心に決めただけだ。どんな困難にも屈してはならないんだと、自分に言い聞かせるようにルカリオ

は言い放った、ちょうどその時だった。

「よく言った！ それでこそ俺様の弟子だ！」

どこからともなく聞こえてきたのは、偉そうな口調で自分の事を「俺様」という奴。ヒトカゲとルカリオの知り合いの中で、そんな奴は1人しかいなかった。

「……バシャーモ!?」

振り返ると、いたのはバシャーモだけではなかった。バシャーモを乗せて飛行しているメタグロス、その横を浮遊しているゲンガー、その後ろからはボーマンダとガブリアスも来ていたのだ。

「うわ、グロックスのみんな来てくれたんだ！」

「……なんだと？」

ヒトカゲ達も当然驚いていたが、1番驚いているのはガバイトだ。尾行されていた気配もないし、ヒトカゲ達と共に行動していないことも知っている。だが何故こんなにも早く駆けつけてきたのだと疑問に思っている。

「復活しちまったのか……グラードンが」

やれやれ、といった表情でガブリアスがため息を吐く。横にいるボーマンダも困った顔をしている。だからと言って、彼らには“恐れ”があるわけではなかった。

「でも想定してたじゃない。それに復活しようがしまいが、“私達がやること”に変わりはないもの」

「そうだ。まあ、ちよつと大変にはなるが」

彼らと同様に、ゲンガーもメタグロスも落ち着いていた。その落ち着き加減が気に食わないこともあり、ガバイト側から質問を彼らにぶつけた。

「おいてめえら。俺の行動がお見通しって感じだな。どういうことだ？」

これに関してはヒトカゲ達も疑問に思っている。グラードンが目覚めてから今までの時間はほんの十数分。偶然近くにいたならすぐに駆けつけられるかもしれないが、そうは考えにくい。

その質問に答えたのは、ガブリアスだ。首を鳴らし、面倒くさそうな顔つきだ。

「お前が死んだと思ひ込んでる奴が、俺らんとこに土下座しに来たんだよ」

「な、なんだと！？ あいつが!？」

ガバイトはかなり動揺していた。確実に死んだと思ひ込んでいたプテラが生きていたことに驚きを隠せずにいる。そんなガバイトを無視して、話を続ける。

「まさか、俺らを恐れていた奴が直々に顔を出し、『ガバイトを止めてくれ』って言うとは思わなかったがな」

そう、プテラが言っていた「厄介者だった”奴ら”というのは、チーム・グロックスのことなのだ。怪我した身体を引きずって、わ



わざわざ頭を下げて頼み込んだのだと言う。

一通り事情を聞き、グラードンの目覚めが近いことも知らされたため、すぐに駆けつけたとガブリアスが語る。これが、彼らがここへ来れた理由だ。

「……あの時、やはり首を搔つ切るべきだったな……」

後悔している様子のガバイトだが、ここまで来たらもうどうでもよかった。すぐに開き直った態度を見せながら、目下の者達に話を始めた。

「おい、そんな大人数で束になったって、グラードンを倒すなんざ無理な話だろうよ。今さら命乞いしたって遅えぜ」

「はあ？ 貴様は何か勘違いをしているのか？」

脅しをかけるつもりでガバイトは言ったのだが、バシャーモはそれに全く動じず、それどころか呆れた顔をしている。再び気に食わなくなったガバイトがどういうことか訊ねた。

「勘違い？ 何がだ？」

「俺達は、グラードンの暴走を止めるために来たわけではない」

無表情のボーマンダがそれに応えた。これだけ聞いたヒトカゲとルカリオは驚いてしまうが、それを補足するかのようにゲンガー達が付け加えていく。

「そうよ。グラードンには敵わない。だけど問題はそこじゃない」

「元凶さえ取り除けば、問題なしだ」

遠まわしに話しているせいで、ガバイトは理解できずに苛立ちを

募らせた。直にその苛立ちをあてつけるように怒鳴り始めた。

「じれってえな！ はっきり言いやがれ！」

もちろん、彼らにとってはこれも作戦の1つ。理性を欠かせれば隙もできるだろうとのこと。その隙ができるのを窺いながらみんなは構えつつ、ガブリアスがこう答えた。

「俺らの目的はグラードンを止めることじゃねえ……お前を止めることだ」

第57話 神の暴走（後書き）

アーマルド

「なんだ、軍鶏かあ」

そんな言い方しないの（汗）

グロックスのみんなが駆けつけてくれたんだから、次回は活躍するでしょう。

ボーマンダ

「あいつだけが心配だ。連れてくるべきでなかったか……」

バシャーモ

「俺様抜きにこのチームは成り立つはずがないだろう！ 何をバカなことを！」

ガブリアス

「……いてもいなくても変わらん」

き、きつい一言で（汗）

第58話 更なる味方（前書き）

バンちゃん

「そ、外が明るい……（汗）」

そりゃあ、今これ書いているのが4時だからねえ。

しかも昼寝しまくったからまだ眠くないという（笑）

バンちゃん

「寝ろ、今すぐ寝ろ！（汗）」

じゃあ、後は任せた……zzz。

バンちゃん

「し、しまった！（汗）しゃあねえ……本編どうぞ」

## 第58話 更なる味方

ガバイト自身を止める。ガブリアスがはつきりそう言ったのをヒトカゲ達は聞いていた。そう、司令塔であるガバイトを止めればグラードンは機能しないはずだという考えだ。

「ほう、俺を止めるってか。やってみな。グラードンに近づくとさえ無理だろうけどな」

当の本人は至って余裕の表情だ。自分の計画が失敗するはずがないと、頭の中で豪語しているに違いない。その自身は、やはりグラードンが自分の手中にあることからくるのだろう。

「じゃあ、すぐにやらせてもらおう」

静かにガブリアスがそう言うと、他のメンバーがすぐさま動き始めた。ゲンガーは浮遊して、ポーマンダがガブリアスを、メタグロスがバシャーモを乗せてグラードンの近くまで移動する。

ヒトカゲとルカリオは近くに身を潜めているよう、メタグロスに言われたため、ひとまず様子を見させてもらうことにした。チーム・グロックスの戦いを目にする初の機会でもあるからか、期待している。

『“ドラゴンクロー”！』

先手を打ったのはガブリアスとポーマンダ。飛行速度を保ったまま一気にガバイトめがけ、エネルギーを集中させたツメを振り下ろそうとする。

「シャドークロー」で対抗しろ」

ガバイトが命令すると、グラードンが左手で“シャドークロー”をつくり、飛んでくるガブリアス達に向かって振りかざした。火花を散らす程の勢いで互いのツメがぶつかり合った。

力の押し合いになったが、2人の力だけではグラードンに通用するはずがなく、すぐに負かされてしまい、ツメを振る勢いで吹っ飛ばされてしまった。

「じゃあ私も行くこうかしら。はっ！」

ガブリアス達の後方からすぐにゲンガーが現れ、何やら黒いオーラを持つ衝撃波のようなものをガバイトに放った。指示が間に合わず命中してしまったが、ガバイトにとっては強風が吹いたような感覚しかなかった。

「何だ、ただの“かぜおこし”か？ ナメた真似しやがって」

「あら、そんなことないわよ？ これが私のやり方なんだから」

ゲンガーの言ったことが何を意味しているかはわからなかったが、ひとまずガバイトは相手にせず、ゲンガーの後ろからさらに迫ってきたバシャーモ達に目を向けた。

「いくぞバシャーモ。“アームハンマー”！」

バシャーモがその場で飛び上がると同時に、何とメタグロスはバシャーモに向けて“アームハンマー”を当てようとしたのだ。メタグロスの前足が勢いよく横から迫ってくる。

「よしきたー！」

すると、タイミングよくバシャーモがメタグロスの“アームハンマー”に足をつけ、その技の勢いで、まるでビリヤードの球の如く弾き飛んだのだ。

「いくぜ、“スカイアッパー”！」

普段の数倍の速さで上空へ向かっていくバシャーモ。その先にあるのは、グラードンの顎だ。ガバイトは意表を突かれて指示が追いつかず、“スカイアッパー”は見事命中した。

「……………」

グラードンは何も言わず、自分を攻撃したバシャーモを睨んでいる。相当怒っているらしく、“ひでり”がさらに強さを増し、近くにある草を枯らしてしまった。

「怒らせただけじゃねえか。敵わないとわかっている相手に何故突っ込む？」

「これでいいのだ。俺様の判断に間違いはない！」

バシャーモは自信満々にそう答えた。実は、今の攻撃でグラードンの注意は完全にバシャーモにいつている。その隙をつけばガバイトに攻撃ができると考えたのだ。

「準備は整ったな。行くぞ、お前ら」

成り行きを見ていたガブリアスが指示を出す。先程と同じく、ガブリアスとボーマンダ、ゲンガー、そしてバシャーモとメタグロスの順に配置についた。

「練習どおりに行きますように。“シャドーボール”！」

まずはゲンガーから。グラードンへ向け、以前ヒトカゲ達が見たことのある“シャドーボール” “りゅうせいぐん”を思わせるように大量にくりだしている。

『りゅうせいぐん”！』

それとほぼ同時に、ガブリアスとボーマンダが本物の“りゅうせいぐん”を放った。ドラゴンタイプのエネルギー弾が空中で花火のようにいくつもの小さい弾に別れ、グラードンに降り注ぐ。

グラードンは“りゅうせいぐん”と“シャドーボール”を一気に浴びることとなった。怒りが込み上げ、自分の意思で“はかいこうせん”を放って応戦している。

“りゅうせいぐん”の被害はガバイトにも及びそうになっている。注意が完全にそちらへ向いていると判断し、バシャーモとメタグロスがガバイトに突っ込んで行った。

「コメットパンチ”！」

「ブレイズキック”！」

2人による、光を纏った拳と炎を纏った脚での一斉攻撃。不意をつかれたガバイトに抵抗する間もなく、攻撃をくらって吹っ飛ばされてしまった。宙に投げ出されたガバイトはかるうじて、グラードンの尾から出ている刺にしがみつくなることができたようだ。

(す、凄え……)

陰で見っていたヒトカゲとルカリオはただただ驚愕していた。これ



が探検家の実力と言わんばかりのものを見せつけられ、凄いの一言しか言えなくなっている。

そしてガブリアス達の予想通り、ガバイトという司令塔が崩れたため、グラードンはそれ以上何もせず動かないままだ。作戦は成功したと、全員が笑みを浮かべていた。

「はっ、はっ……や、やってくれたな貴様ら……」

息を切らし、何とか体勢を立て直したガバイトに更に追い討ちが加わる。ガバイトが1番近くにいたバシャーモに攻撃しようとした際、急に胸が苦しくなりだしたのだ。

「……ぐっ!? な、何だこの痛みは……」

胸の苦しみにより再び体勢を崩すガバイト。そんな彼のもとにやって来たのは、嬉しそうな表情のゲンガーだった。何か仕掛けたのかと訊ねながらガバイトは睨みあげる。

「それね、さつき私がかけた“のろい”よ。“かぜおこし”なんかじゃないわよ?」

“のろい” それはゴーストタイプの者が使くと、自分の体力を半分削る代わりに、相手の体力もじわじわと、瀕死になるまで削っていくという技だ。ゲンガーが最初に放った技はこの“のろい”だったのだ。

「の、“のろい”だと? なら何故今頃になって……」

「それはね、あなたがグラードンの司令塔だったからよ」

ゲンガー曰く、直接戦闘に出ている者でないと、技の効果が現れ

ないという。つまり、数分前まで実際に戦っていたのはグラードンだけであるため、ガバイトに“のろい”をかけても効果が現れず、バシャーモに攻撃しようとした今はガバイトが戦闘に出たため、“のろい”が始まったということだ。

このままではガバイトは間違いなく瀕死状態になり、完全に敗北を喫することになる。それだけは絶対に避けたい、その一心で起き上がり、大声でグラードンに命令した。

「グラードン、“かみなり”！」

刹那、“ひでり”によって晴れていた空が黒色に染まり、雷鳴が鳴り響く。そして“かみなり”はグロツクスのメンバー全員に落ちたのだ。

『ぐあああつ!?!』

“かみなり”によって全員が怯んでいるうちにガバイトは再びグラードンの頭部近くの刺まで登りつめた。するとどうだろうか、胸の痛みがきれいになくなった。司令塔の座に戻ったことで、“のろい”の効果が切れたのだ。

「俺が敗北など……あり得ん！ 今すぐ貴様らを逝かせてやる！」

ガバイトは本気で怒っている。そのため、今まで指示していなかった禁断の技 “一撃必殺” が可能な技の名前を、大声で口にした。

「……………“じわれ”！」

グラードンの足が強く地面に叩きつけられると、技名のとおり地割れが起こった。その裂け目は“かみなり”によって倒れたチーム全員を一直線で結んだ。

このレッドクリフが真つ二つになってもおかしくない程の亀裂が地面に出来た時には、チーム全員がぐったりとした表情になっていた。

じめんタイプの攻撃が普通なら効かないボーマンダでさえも、“かみなり”のダメージでその場から動けなかったことで、瀕死に追い込まれた。

一方、“かみなり”が効かないガブリアスでも、脅威の速さで襲ってくる“じわれ”から逃れることはできなかった。息絶え絶えの状態である。

「さあ、ヒトカゲ！ ルカリオ！ 出て来い！ 貴様らも始末してやる！」

一層狂気に満ちたガバイトの叫び声を聞き、2人は大人しく姿を現すしかなかった。その横では、勇敢に戦ってくれたメンバーが苦しそくに唸り声をあげている。

「……す、すまん。まさか……こうなるとは……」

悔しさいっぱい思いが詰まった声でガブリアスが呟く。他のメンバーも同様に、小さく謝罪し始める。しかしそれに応じる程の余裕が2人にはなかった。

勝ち目はあるのだろうか。それしか考えられなかったのだ。2人の表情が強張っているのにガバイトが気づき、精神的に追いつめていく。

「あの有名な探険家ですらこうなる。ましてやお前らならなおさらだ。神頼みも無駄だ」

ガバイトの言葉を耳にした、その時だった。ヒトカゲはあることを思い出したのだ。危険を承知して近くにある自分のカバンからあるものを取り出し、ガバイトに見せつけた。

「まだ、僕達にはこれがあるんだからね！」

ヒトカゲがガバイトに見せつけたのは、アイランドを旅立つ前にもらった『海神笛』だ。そしてそれを吹くとやって来るのは、その笛を授けた本人　海の神ことルギアである。

「何だそれは？　笛なんかが何の役に立っつてんだ？」

「そうだヒトカゲ！　こんなときに呑気に笛吹くつてーのか！？」

この笛のことはガバイトも、そしてルカリオも知らない。「大丈夫」と小さく告げると、ヒトカゲは静かに笛を吹き始めた。

何て不思議な音色なんだろうと、吹いている本人が思ってしまうほど、柔らかく、澄んだ音色をしていた。これにはガバイトも手出しをせず、終わるのをじっと待っていた。

笛を吹き始めてから数分経った頃だろうか、後方から何者かの気配を感じ取ったヒトカゲは笛を吹くのを止めた。後ろを振り返ると、確かにあの神様がこちらに向かってきていた。

銀色の翼を持ち、竜のような姿をした、海の神・ルギアだ。

「汝の命に従い、我すなわち海の神、此処に参りけり」

第58話 更なる味方（後書き）

バンちゃん

「ほう、ルギア登場かあ」

サイクス

「今回はルギアvs・グライドンで決着がつくんだな。ほあ〜」

バンちゃん

「作者曰く、グライドン編の執筆はもう終わってるらしいぜ」

サイクス

「だったら早く投稿しろってーの。だいたい私生活からしてケチだよな」

……何か言ったかな？（怒）

2人

『おやすみなさいっ！（汗）』

第59話 解放せよ！（前書き）

グラードンとの戦い、終焉を迎えます。

ヒトカゲ

「はあ、長かった」

ルカリオ

「ホントだな、長かったな」

ルギア

「お前達、これから出番だろう、早くせよ」

2人

『……あつ、そうだ！（汗）』

だ、大丈夫かな？（汗）

## 第59話 解放せよ！

「う、海の神……ルギアだと!？」

目の前の存在に、ガバイトは酷く動揺していた。さすがにヒトカゲとルギアに接点があるとは思ってもいなかったのだろう。焦りを隠せないでいる。

「凄え！ ほ、ほんとにルギアが現れた！」

そしてルカリオも非常に驚いていた。まさか笛でルギアを呼び出すことができるなんてと、ヒトカゲの事を尊敬の眼差しで見ている。当の本人は嬉しそうな顔つきをしながらルギアに詳細を話す。

「……ということなの。緊急事態だから来てほしいって思って」

「そうか。こんな事態になっていたとはな」

一通りの説明を聞くと、ルギアはグラードンの方に目を向ける。そこにいたのは、目に輝きがなく、自分の意思で動けないでいる、ただの巨大な怪獣だった。

「私の友、グラードン。その強大な力ゆえ如何なる存在にも恐れられ、また神として崇拜されると同時に、力を利用しようとする者に支配されやすい、大地の神」

ルギアは今何を思っているのだろうか。悲しみか、怒りか、または別の感情か。突然そんなことを口にし、それを聞いていた他の者達は頭に疑問符を浮かべていた。

「今は深き眠りについていてるカイオーガがお前を束縛から解放するのが本来の筋であるが、“今回も”私とその役割を担うことになりそうだな」

刹那、ガバイトの表情がさらに険しくなり、ヒトカゲとルカリオも顔つきを変える。思わずもう1度聞き返したくなるような、そんな発言であった。

「ど、どどういう意味だ？」

意味を把握しきれずにいたルカリオが訊ねる。その返答は、ルギアが現れたことでガバイトが1番恐れていたことが的中してしまうものだったのだ。

「過去に同じ事が起こり、その際私がグラードンを解放した、ということだ」

ヒトカゲとルカリオは驚きの声を上げ、ガバイトは口惜しそうに舌打ちをする。流れが一気にヒトカゲ達に向いた瞬間であった。どうすればよいのかと訊ねると、再びグラードンに目を向けたルギアが静かに言った。

「頭に浮かんでいる赤の破片を、打ち砕くのだ」

今までにガバイト以外は誰も気づいていなかったのだが、グラードンの頭部には、赤の破片が真紅の光を放ちながら浮いていたのだ。それが壊れると同時に、グラードンは自我を取り戻すのだと言う。

それなら簡単な事だと張り切る2人だが、さらにルギアが付け加えた説明によると、赤の破片を壊すのは並大抵のことではないらしい。過去に壊した時も、ライコウ・エンテイ・スイクンの協力があ



って壊せたのだと言う。

「それなら大丈夫さ。俺らの詠唱があればな！」

「……ま、まさか、お前も詠唱ができるのか!？」

今度はルギアの方が驚かされることとなった。ヒトカゲとルカリオは互いに1歩前に出て、瞳を閉じて意識を集中させながら、混沌語　カオス・ワーズを唱え始める。

【紅蓮の炎を操る神よ　我ここに誓う　我と汝の力ここに集結し時  
我の前に現る悪を持つものに　粛清の咆哮を与えん】

【無辺、時に切り立ち大地よ　静寂、時に荒々たる海原よ　そこから得ん万物が持ちし躍動よ　我が命に従いて　我が手に集いて力となれ】

全てが整った。気持ちも整理がついた。これ以上誰にも被害が及ばないように、全力で赤の破片を壊すことを強く思い、ゆっくりと目を開いた。

真正正銘の詠唱の使い手がヒトカゲ以外にいたことに驚きを隠せないでいるものの、こちらにとっては好都合だと、ルギアはすぐに気持ちを切り替えて行動に出る。

「……私の背中に乗れ。一気に近づくぞ」

ヒトカゲとルカリオはルギアの背中に乗り、グラードンの目の前でやって来た。赤の破片の位置をしっかりと把握し、攻撃する体勢

に入る。

かなり焦っているガバイトにまともな指示ができるはずもなく、自分でも応戦しながら後はグラードンに任せようと考えていた。徐々に計画が潰れ始めていることに苛立ちを覚えている。

「グラードン！ あいつらを殺せ！ 灰にしちまえ！」

そんな指示の元で、最初にグラードンは口から勢いよく炎を吐き出した。“だいもんじ”で焼き払おうとしていることはすぐに想像できたようで、ルギアが反撃する。

「“ハイドロポンプ”！」

炎には水。ルギアは口から大量の水を勢いよく放出させ、炎を消すと同時にグラードンに直撃させた。グラードンに水の攻撃はよく効くようで、表情がきつくなっていた。

「じゃあ“かえんほうしゃ”！」

「俺は“ボーンラッシュ”！」

そこにすかさずヒトカゲとルカリオの攻撃が入る。炎と、波導でできたこん棒は赤の破片に当たったものの、傷1つつけることができなかつた。

「塵にしろ！ “ソーラービーム”だ！」

ガバイトの指示通り、グラードンは天を仰ぐような姿勢で口元にエネルギーを集めようとする。しかし思うように集まらず、時間がかかっている。

それもそのはず、先ほどグラードンが“かみなり”を使うために、

雷雲を呼び寄せてしまったからだ。太陽が遮られている今、“ソーラービーム”はすぐに放てないのだ。

「雲か……ならば“ふぶき”！」

雲や大気に含まれる水分を結晶化し、自身の持つ自慢の翼でルギアは風を起こす。嵐を起こすことができると言われていただけあって、“ふぶき”の度合いもかなりのものである。

効果抜群の技のため、グラードンの受けたダメージは大きい。作りにかけの“ソーラービーム”も不発に終わってしまった。ガバイトは圧倒的に不利な状況に陥っていた。

「くそっ！ 落ちろ！ “かみなり”！」

だがガバイトも機転を利かせ、雲を使って再び“かみなり”を落とさせた。天から勢いよく落ちてきた雷は3人に直撃。ルギアはバランスを崩すも、何とか持ちこたえることができた。

「ぐうつ！ 2人共、大丈夫か？」

「な、なんとか……」

ヒトカゲとルカリオも耐えることができた様子。2人の無事を確認すると、グラードンとガバイトの様子を窺いつつ、小声でルギアは作戦を伝える。

「今から私は“エアロブラスト”を放つ。それと同時にお前達はグラードンの頭に飛び乗り、赤の破片を壊せ。今のお前達なら、“ブラストバーン”と“はどうだん”で壊せるはずだ」

それは、時間がないのもう決着をつけるという意味だった。今

の状況を見たガバイトなら“かみなり”を連発して戦闘不能にしてくるだろうと予想し、決断したのだ。

2人も同意見だった。いつまでも長引かせるわけにはいかないと感じていたが、今のルギアの言葉を聞いて決心することができたようだ。“ブラストバーン”と“はどうだん”で絶対に止めると誓った。

「うん、わかったよ！」

「それで止められるんなら、やってやるぜ！」

自信を持った2人ははつきりと返事をする。ルギアも頷いて応じると、すぐに攻撃する体勢に入った。ガバイトに気づかれぬように息を吸い始める。

「しぶてえ奴らだな！ グラードン！ もう一発“かみなり”だ！」

予想通り、ガバイトはグラードンに“かみなり”を指示した。雷鳴が響き始め、いつ雷が落ちてきてもおかしくない状況の中、先手を打ったのはルギアの方だった。

十分息を吸い込んだ後、それを一気に吐き出すだけの技。だがそれは建造物を簡単に壊してしまうほどの威力を持つ、“ひと息の空気弾”なのだ。

「エアロブラスト」！」

ルギアの放った空気弾 “エアロブラスト”は“かみなり”が放たれる前にグラードンに命中した。強い衝撃を受け体勢が崩れると、それにつられてガバイトも刺から落ちてしまう。

「う、うわああっ!?!」

一方“エアロブラスト”が放たれたと同時にヒトカゲとルカリオはルギアの背中から飛び上がり、無事にグラードンの頭へと着地した。グラードンは怯んでいるせいか、動けないでいる。

近くを見回すと、すぐに赤の破片を見つけることができた。グラードんにダメージを与えないようにしっかりと位置を確認し、2人は同時に指示された技を放つ準備をした。

「ルカリオ、大丈夫？」

「ああ、もう準備オツケーだ」

一瞬、ルカリオの頭にアーマルドの顔が浮かんだ。まるでそばで応援してくれているかのような表情に見えた。それに対し、ルカリオは小さく「ありがとう」と呟く。

そしてヒトカゲは、ミュウの言葉を思い出していた。「ダブルでアタック」とはこれを意味していたのだろう、自分達が成功すると確信していたからそう言うてくれたのだろうと思っている。

2人は同時に顔を上げ、互いに目を合わせる。気持ちを確かめ合うと、意識を集中させ始める。ルカリオの「せーの」の合図で、各々の技は放たれた。

「“ブラストバーン”！」

「“はどうだん”！」

炎の塊、そして波導によるエネルギー弾がぶつかり、大爆発を起こす。あまりの衝撃に2人は吹き飛ばされるが、駆けつけたルギアが“サイコキネシス”で宙に浮かせ、そのまま背中へと乗せる。

しばらくして爆発による煙が晴れると、先ほどまであった赤の破片がなくなっていた。どうやら完全に壊すことに成功できたようだ。

『やったー!!』

思わず歓喜の声を上げるヒトカゲとルカリオ。ハイタッチするほど喜んでいいる。そしてルギアはというと、グラードンが心配なのか、声を掛ける。

「グラードン。私だ、ルギアだ。意識があるなら返事をしてくれ」

だがグラードンはルギアの声に反応もなく、体も動く気配がない。顔を覗き込もうとしたその時、グラードンの目が一気に開く。さすがのルギアもこれには驚く。

「……我が盟友、ルギアよ。何をそんなに驚いている？」

「……………」

返す言葉も見当たらないとは、この事だろうか。グラードンに操られていた間の記憶は一切なく、眠りにつく前、つまり数年前の記憶が最後だという。

「お前は、また操られていたのだ。その支配から解放した者達に礼を言え」

ルギアは事の成り行きを説明すると、背中からヒトカゲとルカリオを降ろし、グラードンと対面させる。数分前まで戦っていた相手ということもあり、少々緊張気味だ。

「我を支配から解放してくれたのは汝等か？ 深く感謝する」

グラードンの言葉に畏れを感じたのか、2人はただ黙って頭を下げることにできなかった。神と呼ばれる存在はやはりオーラが違

うと、ヒトカゲは改めて感じ取ったようだ。

「……ところで、我を支配せんとした輩は、何処だ？」

そうだ、ガバイトはどこだ。その場にいた全員がガバイトの姿を探すが、どこにも見当たらない。死ぬほどのダメージを与えていないことから推測できるのは、逃走だった。

誰もが嘆いていた中、ヒトカゲだけが何とも言い難いものを感じていた。この先もつと、いや、おそらく自分が生きてきた中で1番恐ろしいことが起こるのではないかという、恐怖に近いものを。

## 第59話 解放せよ！（後書き）

ポツネタを公開します。

・グラードンの口調

当初の予定では、

「我が盟友よ、汝の計らいに感謝するグラー」

というものにしていましたが、グラードンのイメージを壊したくなかったのでやめました（笑）

・ライコウの登場

実はルギアを呼んだ時に一緒に出そうと思ったのですが、それはルギアに“エレメンタルブラスト”を使わせようと考えていたからで、それを却下したと同時にライコウの出演も先延ばしに（笑）

ライコウ

「おいっ、俺の扱いが酷いだろ（怒）」

・笛、壊れる



そもそもルギアを呼べないように笛を壊そうとしましたが……やっぱルギアにだけはそんな酷いことできないっ！ という個人的な想いにより、出てもらいました（笑）

こんなもんです。ネタ切れになることはないのですが、やはり大学生は年数が経てば経つほど忙しくて。今では週1更新が限界です。

夏休みに入ってしまったばこっちのもんなので、それまではこの状態が続きます。前回のようにたま〜に早く書けた場合は、すぐに投稿しますね。

第60話 残されたもの(前書き)

グラードン

「……………なあ、ルギアよ」

ルギア

「何事だ？」

グラードン

「我が悩み、いと深きもの。解決策が見つからぬ」

ルギア

「私で何とかなるのなら、言ってみよ」

グラードン

「我の出番、これで終焉でないかと……………さらに出番増やさんとするには……………」

ルギア

「……………(汗)」

## 第60話 残されたもの

朝を迎え、ヒトカゲとルカリオはグランサンの診療所に向かった。そこでは怪我の治療中であつたベイリーフ、ドダイトス、プテラ、そして彼らを看病するラティアスが待つていた。

1人、欠けている。それにいち早く気づいたのはラティアスだ。この診療所にいない、そしてヒトカゲ達とも一緒でない、どうしたのかと誰もが尋ねる中、ルカリオが静かに語り始めた。

あいつは、俺を助けるため、自分から命を絶つた。その言葉を言うだけで物凄く大変な思いをした。嗚咽で言葉にならない。視界はぼやける。そして、右手の傷が疼き始める。

誰がこの事実を素直に受け入れようとするだろうか。聞き間違いであつてほしい、誰もがそう願つたが、ルカリオの首が横に振られるのを見て、願いは崩れ去つた。

『……………』

終始、無言が続いた。言葉が一切出ず、出てくるのは涙のみ。つい1日前まで輝いていた命がその輝きを失うということの重みが、全員にのしかつた。

中でも、それを直に目にしたルカリオにのしかかるものは相当なものだ。悲愴感、後悔、そして自責の念。全てが複雑に混ざり合つて心の中に注がれていく。

そんな中、部屋に入ってきたのは、たった今治療を終えたばかりのガブリアスだつた。他のメンバーは大部屋でぐっすり眠っているという。

「今回は残念だつたな。まさかそんな事になつていたとは……………心中察するぞ」

胸に自分のツメをあて、祈るような仕草で会釈するガブリアス。そしてふらりと窓際まで行くと、燦々（さんさん）と照りつける太陽を見ながら話を始める。

「慰めにも何にもならねえが……俺達も仲間を失ってるんだよ。数年前にな」

みんなの視線がガブリアスの方へと向く。みんなに背を向けているためどのような表情をしているかはわからないが、彼の背中から哀しさが伝わってきた。

「……俺らのチームのマネージャーをしてくれてた奴なんだが、ある日突然死体で発見された。ここからさほど遠くないところにある、小さな村の港でな」

ガブリアスの話によると、そのポケモンは何の罪もないのに殺されたのだという。自分達を恨んでいるものの犯行かとも疑ったがそうでもなく、変なことに近くで別の悪者達も死んでいたらしい。

どこかで聞いたことのある話だな、とブレラは思ったが、なかなか思い出せなかったため深く考えるのを止めにした。そうしているうちにも話は進んでいく。

「無念の死としか言い様がなかった。残された俺達は今のお前達のように、抜け殻状態だった。だがな、ある日気づいたんだよ。そいつ、俺達のためにあるものを遺していったんだ」

「……あるもの？」

みんなは気になって仕方がない様子だ。死期を悟って何かをあらかじめ準備していたのかと想像していたが、その予想は全く違って

いた。

「強くなること」……それを遺したんだ」

悲しみに暮れ、何もすることができなかったメンバーが気づいたのは、いつまで経ってもそれを理由にして前に進んでいくことをしなかった、各々の情けなさだ。

心が傷つくことを怖れたりはしなくなっても、決して強いというわけではない。今の自分達の心は弱い。心身共に強くなれ、そう伝えるためにこの世を去ったのだと解釈するようにした。

「その役割を担うために、そいつは生きてきたのかもしれないな」

ふとヒトカゲが顔を上げると、ガブリアスの目にうつすらと涙が。その涙に深い意味はない。傍にいないことが寂しい、悲しい、ただそれだけだ。

午後になり、体を動かすことができるヒトカゲとルカリオ、そしてラティアスがレッドクリフへと足を運んだ。ルカリオの案内で辿り着いた場所は、悲劇の起きた現場だ。

みんなそれぞれが手に持っている花をそつと地面に供えた。必死で哀しみに耐えようとするが、耐えることができずに再び涙が頬を伝っていった。

「……何を泣いている？」

泣き伏している彼らの前に現れたのは、疲れた表情のルギアだ。

実はグラードンとの戦いの後、ずっとガバイトを捜してくれていたのだ。だが見つからず、ここに立ち寄ったようだ。

涙を拭きながらヒトカゲは事情を説明する。グラードンと対峙する前に大事な仲間を失ったことを知ると、ルギアは申し訳なさそうな表情になる。

「すまない。そんな事があつたとは知らずに……」  
「何事だ？」

そこへ今度は、グラードンが姿を現した。戦いによる傷を癒して戻ってきたところへ、何だかただならぬ様子の盟友や恩人達が目に入ったのだとか。グラードンもまた事情を聞かされると、驚くと同時に同情し始めた。

「汝等の深き悲しみ、痛いほど伝わる。我を救った礼に何とかしてやりたいが、こればかりはどうすることもできない」

いくら神という座にしようと、グラードンやルギアに命を操る力はない。確かに命を操る力のある神もいるが、その力を私的感情などにより使うことはあつてはならない。

「私達を含め、いかなる者も、生の歩む道に干渉してはならないのだ。特に命は、意によって再生されることはこの世の理を犯すことになる」

3人にはルギアの言葉が重く感じていた。それは、もしかしたら生き返らせてくれないだろうかという、僅かな希望を持ち合わせていたからだ。彼らも甘く考えすぎていたと反省する。

そしてルギアとグラードンも、それがどんなに重罪に値するかを思い返し、この件に関しては情けをかけまいと戒めていた。それほ

ど、命の扱いは肝要なものなのだ。

「……大丈夫だよ」

しばしの沈黙の後、最初に声を上げたのはヒトカゲだ。声に反応してみんなはヒトカゲの方を見ると、もう涙を流してはいなかった。むしろ笑顔になっている。

「だって、自分の命と引き換えに、多くの命を救ったんだもん。悲しまないで、むしろ尊敬しなきゃいけないもん」

確かに、失ったものは大きい。だがそれによって護られたものも大きい。多くの命を救うために今まで生きてきたと、ガブリアスの話に影響されたような解釈をヒトカゲはした。

それはヒトカゲだけではなかった。ラティアスも、そして現場にいたルカリオもそう思っていた。自分で背負ってきた不幸の分、数多の命に還元したのだろうと。

「すげー奴だったな。もう殴れねーと思うと寂しいけどな」

涙を拭って、笑みを浮かべてルカリオが言う。右手につけられた傷を見ながらこう思っていた。これがその証。大勢のポケモンのために戦った勇者のつけた、生きてきた証なんだと。

「ええ、私もそう思います」

接していた期間が1番短いラティアスも、尊敬の念を抱いていた。旅に出て程なくしてこれほどまでに辛い場面に遭遇した彼女の辛さは相当なものだろうと誰もが思っていたが、その心配はすぐになくなった。

3人の想いは一緒だった。出会えたこと、一緒に旅をしたこと、いろんな思い出をつくらせてくれたこと。亡き彼に対して、感謝の気持ちを伝えることにした。

『ありがとう、アーマルド』

空を見上げながら、声をそろえて言った。その気持ちに応じるように、すうつとそよ風が吹く。その風に1枚の花びらが乗っかり、遠くへ向かって、長い旅を始めた。

約1週間が過ぎ、ベイリーフ達の怪我が治り、自由に動けるようになった。全員がその場に集まって、これからについて話し合っていた。

「ベイリーフ、ドダイトス、旅行中なのにごめんね。いろいろ巻き込んで」

「いいのよ。それより、これからはどうすればいい？」

旅行を再開するどころか、ヒトカゲ達の手伝いを買って出る。その気持ちを無駄にしたいくないからか、それならヒトカゲはお願いをすることにした。

「じゃあ、この事を、ゼニガメやカメックス、バクフーン兄ちゃんに伝えて。みんなポケラスのどこかにいるはずだから」

「了解した。ヒトカゲ、それからルカリオにラティアスちゃん、気をつけて」



そう言い残し、ベイリーフとドダイトスはすぐに旅立った。姿が見えなくなるまで見届けると、今度はグロックスのみんなに指示を出す。

「グロックスのみんなは、ガバイトを裏で糸引いている存在を探っ  
てほしい。何も手がかりがなくて難しいかもしれないけど……」

「いや、その方がやりがいがある。引き受けよう」

快くガブリアスが受けてくれた。他のメンバーもしっかりと頷いてくれ、ヒトカゲは安心した様子だ。これでひと段落したと思っていたが、大事なことを忘れていた。

「……あのさ、俺あ何をすれば……」

『……あつ』

すっかり忘れられていた、プテラの存在。何か頼めないだろうか  
と改めて考えるも大したことも思い浮かばず、最悪帰ってもらおう  
かと思っていたとき、ガブリアスが口を開いた。

「何もする事がないなら、俺らを手伝え」

それは願ってもないことだった。何とチーム・グロックスのアシ  
スタントとして働けと言っているのだ。それだけでも多くのポケモ  
ンから羨ましがられることだ。

「えっ、お、俺が？」

「そうだ。ここまで改心していれば、何も問題ないだろう。それに、  
過去にガバイトに関わったことのある貴重な証人だからな」

ガブリアスが自分の願いを聞いてくれただけでなく、共に行動し

ようと言ってくれたことにプテラは感涙だ。メンバーも嬉しそうにしているが、バシャーモだけは「正義のヒーローの座を奪おうとする奴だったら許さん」と思っていたようだ。

「じゃあ行くぜ。何かあったら、警察にでも頼んであの本拠地アジトに手紙してくれ」

彼らも、足早にその場を去っていった。残った3人は互いに目を合わせると、ヒトカゲが中心の横一列となり、手を繋ぎ始めた。これからの旅の無事を祈ると、歩幅を合わせて歩き始めた。

話は戻って1週間前、とある場所ではガバイトともう1人とで、話をしていた。ガバイトの計画が失敗したことがすぐに知れ渡ったのだ。

「汝は我に誓ったはずだ。我の代わりに手足となって動く」と

「は、はい……」

そのポケモンは恐れていたのだ。グラードンとルギアに、自分の存在が知られるのではないかと。ガバイトが失敗したことで、確実に危険が迫っているのではないかと。

「それどころか、汝は我の意とは無関係の行動をし、拳句の果てに失敗に終わるとは……」

完全に呆れている様子だ。何のために汝を生き返らせたのか、と嘆いている。もちろんガバイトもこのままにするわけにはいかないと思ひ、再度試みると願ひ出る。

「今回は失敗でした。で、ですが、次は必ず……」  
「汝に次はない」

そう言うと、そのポケモンは自分の目の前に1つの玉を出現させた。黄色に光るその玉を見ると、ガバイトは酷く驚いた顔をする。

「そ、それは……！」  
「これこそ、汝の命そのもの。これを碎けば、永遠に蘇ることはない。無に還るのだ」

無に還る。それは死んだ者達が集まる場所、いわゆる冥界からの追放を意味していた。追放されると、完全に存在がなくなってしまう。

「ど、どうかそれだけは！ それだけのご勘弁を！ あ、あなた様の御慈悲を……！」

次の瞬間、パキツという乾いた音と共にガバイトの体は一気に黒い粒子状となり、消え去った。この場に残っているのは、ガバイトを消し去った張本人のみだ。

「……仕方ない。我が直々に出向くとしよう。さすれば、向こうから姿を現すであろう」

そのポケモンは、静かにその場で立ち上がり、どこかへ向けて移動を始めた。ある標的が自分の前に現れることを願いながら。

## 第60話 残されたもの（後書き）

第40話あたり？ から続いたグランド編、これにて終了です。

ヒトカゲ

「次回からはどうなるわけ？」

じゃあ発表しましょう……次回からは、ジュプトル編です！

ルカリオ

「あー、来やがった（汗）」

ここではいろんな謎が解き明かされる……ように私が執筆しなければならぬという、ある意味大事なところであり大変なところですね（笑）

ラティース

「大丈夫、私達は大変とは思いませんから！」

そ、そりゃあ私が書くんだからね（汗）

第61話 とある1日(前書き)

今回からジユプトル編に入ります。

グラードン編のようにシリアスな感じも……でも今回は久々に遊びました(笑)

ヒトカゲ

(作者さんの目指すところがわからない…… 汗)

ルカリオ

(確かにな…… 汗)

## 第61話 とある1日

歩き始めたのはいいものの、疲れが溜まっていたせいか、結局グ  
ランサンで1泊することにした3人。翌日にレッドクリフを通過し、  
次の町へと繋がる平野の道を移動中の、とある1日。

朝はポツポツやムツクル達の餌の取り合いによる鳴き声で目が覚め  
る。1番敏感なルカリオが、眠たそうな目を少しずつ開けていく。

「う……ん………!?」

始めのうちは視界がぼやけてよく見えなかったが、直にはつきり  
すると、自分の目と鼻の先にラティアスがいることがわかった。ち  
なみに彼女はまだ寝ている。

今にも鼻と鼻がくっついてしまいそうな程近かったため、ルカリ  
オは急に緊張し、飛び起きて後ずさりをする。息を切らし、顔を赤  
らめていた。

「な、な、な、何で……何でこんな近えんだよ!？」

1人で騒がしくしているうちに、ラティアスが目を覚ます。どん  
な状況になっていたかなど知るはずもなく、いつものように「おは  
ようございます」と丁寧な挨拶をする。

「お、おい! お、俺はお断りだからな!」

「はい?」

何かを勝手に勘違いしているルカリオに、ラティアスはただ首を  
かしげていた。気分が落ち着かないルカリオは、自分の横で幸せそ  
うに寝ているヒトカゲを無理矢理起こすことにした。

朝御飯を食べることにし、3人は野宿してた所の近くできのみを探し、大量に集めてきた。次の町までどれくらいの距離があるかわからないため、朝からしつかり食べて体力をつけようという考えだ。

「あー、今日も長い1日が始まるんだ。けっこう歩いたのになー」

リンゴをかじりながら、ヒトカゲは道の先を見ながらそう言った。果てしなく続く1本道の先はまだ何も見えないようだ。現実逃避するかのように残りのリンゴを口に押し込んだ。

「わあ、ヒトカゲ君そんな芸ができたんですね」

「いや芸じゃねえし」

まるで剣を丸呑みする奇術師を見る目でヒトカゲを見たラティアスは驚いているが、ルカリオにすれば飽きるほど見た光景だ。ラティアスに出会う前には、ヒトカゲは自分の頭ほどの大きさがあるきのみを一気に食べようとしてたのだとか。

「ヒトカゲ君、ひよっとして自由自在に顎を外せたり……」

「ラティアス、いいから気にせず食べてろ」

ルカリオに突っ込まれ、ラティアスの暴走は食い止められた。もしこのまま喋らせておけば、とんでもない発言をしそうでならなかったからだ。

食事を済ませ、3人は北へ向かって歩き始めた。普段は何気ない会話をしながら移動しているのだが、今日はヒトカゲの思いつきか

ら会話が始まる。

「ねえ、そういえばルカリオのお母さん心配してないの？ 全然連絡してないけど」

まさかヒトカゲから自分の母親の心配をされると思ってもなかったのか、ルカリオの表情が一変する。驚きがそのまま顔に表れ、少しだけ戸惑った様子だ。

「お、お袋か？ あゝ大丈夫だ。俺が家を出る時に、『探検家の修行する』って言って出てきたから。親父探すなんて言ったら絶対反対するだろうからな」

そこで気になってしまうのは、ルカリオの母親がどのようなポケモンなのだろうかということだ。真っ先にその質問をしたのは、ラティアスだ。

「ルカリオのお母さんって、どんな方なの？」

それを訊くな……と、心の中でルカリオは呟いた。答えないと不自然だし、嘘をつくような事でもないため、ため息を1つつき、質問に答える。

「…………お袋の名前はルッキー。別名、『南ポケラスの女帝』…………」  
「『南ポケラスの女帝』？」

ヒトカゲとラティアスはその別名を同時に聞き返す。言い過ぎたかとも思ったが、この際全部喋ってしまおう、その方が楽だとルカリオは考え、話を始める。



「そうだ。親父と結婚する前まで、南ポケラスで暴れまくってたんだよ」

何と、ルカリオの母親はいわゆる不良だったのだ。しかもその勢力は凄まじく、ポケラス大陸の南半分で頂点に君臨するほどだという。

ルカリオが生まれる数年前、ルッキーが危ない目に遭ったときに偶然助けてくれたのが、今の父親のライナスであった。その勇ましさに一目惚れし、全てを投げ出して結婚したのだとか。

「へえ、素敵な出会いですね」

話だけを聞いていたラティアスは憧れの想いを込めてそう言ったが、ヒトカゲは別の事を考えていた。そうか、ルカリオが怒りやすいのは母親譲りなんだと。

「も、もういいだろ？ 他の話しようぜ」

重大な事実を知ったヒトカゲだけがルカリオに対して頷くが、何も知らない、いや、ルカリオがキレやすい性格であると理解していないラティアスはつまらなそうな顔をした。

そんなこんなで1日中歩いたが、まだ隣町へは辿り着けず、今夜も野宿だなど3人は諦めかけていたところに、幸運にも近くに民家や店がいくつを発見し、入ろうか迷っていた。

よほど疲れてお腹も空かせているのだろう、ヒトカゲがわがままを言い出した。「たまには店に入るか」とルカリオもその気だったので、3人は食堂へと入っていった。

「いいか、1人600ポケ以下だからな」

ルカリオは財布の中身を思い出していた。確かラティアスから預かった金はほとんど使ったため、自分の財布の中の金で数日間苦労しなかったためにはどうすればよいかを考えた結果、この金額になったのだ。

『はい』

ヒトカゲとラティアスはとても嬉しそうだ。どんなものを食べようかメニューをはしゃぎながら見ている。一方のルカリオはというと、疲れた様子でイスに座りながら天井を見上げている。

「はあ〜……親父の手がかり、全然入ってこねえな〜……」

昼間に母親の話をしたせいか、ふと父親の事が思い浮かぶ。もちろん行く町行く町で聞き込みは行っているが、有力な情報は何1つ得られていないのだ。

「20年もどこほつつき歩いてんだよ……俺、もう立派に成長したんだぞー」

まるで父親に語りかけているように、そう呟いた。目はどこか哀しそうで、声にも力が無い。滅多に見せない自分の弱い部分が出てしまうほど、気分が晴れないのだろう。

今のところ、何かしらの情報を持っていると思われる者は2人。チーム・レジエンスの生き残りであるライボルトか、何故か自分を殺そうとしてくる、ジュプトルだ。

この2人に接触する方法を探らなくては、そう心に決めてルカリオは自分もメニューを見ようと姿勢を元に戻した、その直後に目の

前の光景に愕然とする。

「お、お前ら、まさか俺の分まで……？」

そこにあつたのは、明らかに多すぎる皿の数と、その上に載っているきのみやポフィンのくず。推測するに、ルカリオの分まで注文し、食べてしまったのだろう。

「だって、ずーつと上向いてたから寝ちやっただかと思つて」

「寝てたとしても起きたら食うだろ普通！ それに寝てねーよ！ 見りゃわかるだろ！」

案の定、キレ始めたルカリオ。それでもヒトカゲは申し訳なく思うわけでもなく、「食べたいなら注文しちやおうよ」という始末。ヤケになったルカリオは財布の事を考えずに注文し、料理を平らげていった。

悲劇は食後に発生した。会計をしようと3人が席を立ち、店員がいる入り口で財布と取り出そうとルカリオがカバンの中を漁るが、どこを探しても自分の財布がなく、空になったラティアスの財布しかないのだ。

「あれ、どこいった？」

思い切つてカバンの中身を全部出してみる。地図、父親から預かった玉、ラティアスの財布、いつだかのメモ用紙、バルからもらったメダル、そして少量の食料しか出てこなかった。

盗まれるはずはない、落とすはずもない、じゃあ一体どうしてなくなつてしまったのだろう、ルカリオは頭を掻きむしるほど必死で

考えた結果、ある結論に至った。

「……あーっ！ アーマルド！」

それしかない、レッドクリフに登る前にアーマルドが自分の財布を持ち出したに違いない、絶対そうだと結論づけ、一気に怒りが込み上げてきたようだ。

「あいつ、俺があのだに逝ったら意地でも見つけてボコボコにしてやっからな！」

（そ、そこまで……）

苦笑いする2人であったが、その様子を見たルカリオの怒りがヒトカゲに飛び火した。もとはお前がわがまま言うからだと言いがかりをつけてくる。

「それに、俺の分まで勝手に注文して食いやがって……ほら、早くしろ」

「早くって……何？」

首を傾げているヒトカゲをルカリオが抱き上げ、店内のとある場所へと連れて行かれた。それは金の払えない3人にとって、唯一の救いとなる物がある場所だった。

同時刻、カレッジではあるポケモンが忙しなく動いていた。書類の整理や会議の準備などと、夜になっても仕事が終わらずにない。そんな中、別のポケモンに声をかけられた。ニドキングだ。

「バンちゃ……じゃなかった、バンギラス巡査、電話」

「あ、今行きます、おじさ……いや、警視」

職場では互いに役職名で呼び合わなければいけないため、いつもつつかかってしまうらしい。そう、ここはカレッジにある、バンギラスが所属する警察署なのだ。

珍しく、バンギラス宛てに電話がきたことに驚いているものの、誰だろう、もしかしてポツポの奴かと少しばかり期待して電話を取ると、その画面には久々の顔が映し出されていた。

「あつ、バンギラス？」

「……あー、ヒトカゲか」

心の中ではへこみながらも、ヒトカゲからの電話だ、それはそれで嬉しかったようだ。ヒトカゲが何か言おうとしたが、言いたいことがあったのか、バンギラスの方が先に話し始める。

「昨日ドダイトス達から聞いたぞ。なんつーか……残念だったな」

「あ、うん。でももう大丈夫だよ」

心配してくれたのはヒトカゲにとってとてもありがたい事だが、今はそれどころでない。会話が止まった一瞬の隙を突いて、ヒトカゲが用件を切り出した。

「あのね、バンギラス。実はお願いがあって電話したんだけど……」  
「俺にお願い？ 何だ？」

警察官になって一層頼りにされてるんだなと、鼻を高くして話を聞こうとしたバンギラスだが、実際に話を聞くと、一気に脱力してしまった。

「僕達、お金持っていないのに食堂入っちゃったの！ だからお金貸して！」

「……は、はぁ？」

事情を聞いたバンギラスは呆れながらも、「翌朝にピジョット警部に届けさせる」と言って電話を切った。その横では、「金貸しも立派な業務だ」とニドキング警視が笑いながらバンギラスの肩を叩いた。

第61話 とある1日（後書き）

カメックス

「……俺をここに呼び出すとは、どっいつ了見だ？」

ふ、深い意味はございませんが（汗）

たまにはいいじゃない、こっやって後書きでトークするのも。

カメックス

「ふん、てめえの腹ん中は読めてんだぜ。何が目的だ？」

も、目的だなんてそんな……ホントに話しようか……ってただだって  
（汗）

カメックス

「……俺がゼニガメに1週間の禁酒宣言されて苛立ってるのを知っててか？（怒）」

………はい（汗）

第62話 神に誓え(前書き)

何とか頑張って書きました。

ヒトカゲ

「今月もう1回投稿できるのかな？」

ルカリオ

「さあな。ま、俺らには早い夏休みってことでいいんだけどよ」

8月には通常に戻るから、君達に夏休みはないけど？

ルカリオ

「夏休みくれーっ！（怒）」

アーマルド

（笑うまい、笑うまい…… 笑）



## 第62話 神に誓え

その夜、金のない3人は店から出ることができず、呆れた店長が、哀れに思ったのか軟禁の意味でかはわからないが、店の2階に泊めてくれることになった。

もちろん、食器洗いや店の掃除をすることが条件だ。一見大変そうに思えるが、ラティアスの“ミストボール”のおかげで物凄く早く片づけることができた。

「はあ……もう寝よ」

気疲れしてしまったせいも、みんな倒れるようにその場に寝始める。床がひんやりしているため、すぐに深い眠りへ入っていった。

深夜、辺りの住人もみんな寝静まった頃、ヒトカゲ達が寝ている店の前にとあるポケモンが現れた。体の大きさはルカリオの約3倍程ある、巨大なポケモンだ。

「ここかぁ。確かに感じるぜ……」

何かを確認すると、そのポケモンはその場から一瞬にして消え去った。だがすぐに別の場所へ姿を現す。その場所とは、ヒトカゲ達の寝ている部屋だ。

ヒトカゲ、ルカリオ、ラティアスの順に目で確認すると、怪しげな笑みを浮かべ、ゆっくりと目を閉じる。何かを念じているようであり、しばらくその状態を保つと、何やらエネルギー弾のようなものをつくり、3人に向けて放った。

「これでいいな。始めるか」

一体何をしたのだろうか、3人は怪我1つしていない。そのポケモンは首を鳴らして準備を整えると、目の前で寝ているヒトカゲ達を起こすべく、大きく息を吸い、大声を出す。

「……起きやがれ　！！」

怒鳴り声が耳に入り、ルカリオとラティアスは飛び起きる。何事かと辺りを見回すと、今までに見たことのない光景が飛び込んだ。き

「なっ、何だこれは！？」

それは今まで寝ていた部屋ではなかった。一言で言えば「何もなし」。水の上に落とされた絵の具のような模様が絶えず流動しながら全体を包み込んでおり、上下左右もわからない。

突然のことで驚いているばかりで、自分達の後ろにいる存在に気づいていなかった。苛立ちを隠せないそのポケモンは、2人の頭に水を吹きかける。

「俺を無視するなんて、肝据わってんな、おい？」

恐る恐る後ろを振り返ると、そこには見たこともないポケモンがこちらを見ながら怒った表情をしていた。しかも見上げなければならぬほど巨大だ。

二足の西洋ドラゴン風の体形、大きな翼、全体的に薄紫色で、両肩には宝石を思わせる器官が備わっている。そして2人が1番着目

したのは、真っ赤な瞳だ。

「だ、誰だ？　ここはどこだよ？　俺らに何しやがった？」

軽くパニック状態に陥りながらも、状況を整理すべく質問をするルカリオ。それに答えようとするが、まだ気に入らないことがあるらしく、不満そうな表情でこう言った。

「その前に、そのガキ起こせ」

いまだに爆睡しているヒトカゲが気に食わないらしい。ラティアスがゆすって起こそうとするも、全く反応がない。仕方ないとルカリオが腰を上げ、殴って起こすことにした。

「で、どちら様ですか？」

ヒトカゲは半分寝ぼけた状態でそのポケモンを見ていた。ようやく答える気になったようで、上から視線で話を始めた。

「俺の名はパルキア。空間を司る神だ。覚えとけ」

今ヒトカゲ達の目の前にいるのは、神の中でも高位な存在である、空間を司る力を持つパルキアだ。言葉使いはライコウのそれよりも荒く、オーラも顔つきも恐い。

だがカメックスの恐さとはまた違うようだ。パルキアに対しての言動を間違えると全てが終わる。そんな感じがしてならなかったと3人は後に語る。

「さて、紹介はこんなもんにして……今から俺の言うことをよく聞け」

何やら重大なことでも告げるかのような口調でパルキアはそう言った。聞き逃してはならないと、3人は集中してパルキアの話すことに耳を傾けた。

「まず、今から話すことは絶対に誰にも話すな。いいな？ もしバラすと、命はないと思え」

秘密厳守、といったところであろうか。それを約束してもらった上で話をするという、何とも一方的な要求であるが、3人はその要求を吞まずにはいられなかった。

恐い。それしか感じ取ることができなかったのだ。もし断れば殺されてしまうのでは、そう感じさせるほどだった。黙って頷くと、パルキアは本題に入る。

「てめーらのことはルギアから聞いている。ホウオウを捜して旅してるんだってな。だが俺が知りてえのはそんな事じゃねえ。お前達が捜している、もう1人の奴のことだ」

これに1番心当たりがあったのは、ヒトカゲだ。おそらくパルキアが言いたいであろうそのもう1人のことを頭に浮かべ、恐る恐る、小さな声でその名前を言ってみた。

「それって、ディアルガ……？」

「そうだ、ディアルガだ」

やはり間違いなかった。パルキアが知りたがっているのは、ディアルガについてだ。何故ディアルガの名を出したのか、それについ

てはすぐ語ってくれた。

「実は俺もディアルガを捜してんだ。あいつがいないせいで、てめーらの世界に異変が起き始めてるはずだ」

異変が起きていると言われたが、特に思い当たる節はない。自分達の知らないところで何か起こっているのだろうと解釈し、続きを聞くことにした。

「そんな事は、あつちやならねえ。唯一神がいなくちゃ、世界はすぐに混沌に陥る。そうなったら、てめーら全員お陀仏だぜ？」

言っていることは理解できるが、それを表現するのに神様がお陀仏とか言葉使うのかと、ルカリオは素直に思った。もちろん、口に出して言えない。

「それに……どうも只事のように思えなくな。だからてめーらをこうやって異空間に連れてきてやって話してんだ」

3人がわかったのは、ここはパルキアが創り出した異空間であることだ。わざわざ自分達を異空間へ連れ込む必要がどこにあるのだろう、ふと気になったラティアスが訊ねてみた。

どうして、これを口外してはいけないのか。他の者達に協力を得れば早く見つかるのではないか。それに対するパルキアの答えは、何とも意外なものであった。

「これに関して俺は誰も信用しちやいねえ。てめーらが慕ってるルギアも、表向きではホウオウ捜してるみてーだがな」

「表向きって……どういう事？」

これは聞き捨てならない発言だ。3人、特にヒトカゲが全信頼を置いていたルギアでさえも、パルキアにとってはディアルガ失踪に関係する容疑者なのだから。

それにその言い方からすれば、他の神または神に仕えるポケモン、エンテイやライコウにスイクン、さらにはグラードンなどもまた疑われているのだ。その理由を訊くと、ヒトカゲ達も知らないことを教えてくれた。

「たとえばルギアの奴、ホウオウ以外にも何かを捜してるようだ。誰にも知られないようにな」

正直、ヒトカゲは軽いショックのようなものを受けた。万が一、自分達を裏切るようなことをしたらと考えてしまいたくなかったが、それを考えることがルギアに対する裏切りになってしまうと直感し、忘れることにした。

「とまあ、今の段階で信用できんのは一切関わりのないめーらだけだ。そこで交渉だ」

3人がパルキアの言いたいことを大体理解したところで、今度は交渉を持ち掛けられた。一体何を交渉しようとしているのか、恐い思いをしながら、ヒトカゲ達は黙ってそれを聞く。

「ディアルガ失踪の真実を掴むことを誓え。そうすればこっから出してやる」

「ち、誓えって?」

パルキアは間違いなくそう言った。何とも理不尽な交渉を持ちかけたものだ。そんな交渉をすんなりと受け入れるはずもなく、ルカリオが反論する。

「じよ、冗談じゃねーよ。そんな勝手すぎねーか？ 勝手に連れ込んで、受け入れなきゃこっから出してもらえねーって……」

刹那、パルキアは右肩の宝石のような器官にエネルギーを溜め込み、それを利用して右腕を大きく振り払った。パール色を帯びたエネルギーの刃が向かってくる。“あくうせつだん”だ。

それは空間を切断するという技。ヒトカゲとルカリオの間を縫うように、空間が切れていった。落ちたらどこに行くか全くわからない。3人は絶句する他なかった。

「俺は神だ。神の言う事は絶対だ。だから誓えって言ってんだ。わかったな？」

「……はい……」

強制的に、ディアルガ失踪の真実を掴むことを誓わされてしまった3人。それにしてもこのパルキア、「神だから」と理由だけで無茶苦茶なことを言うようだ。

「じゃあ、てめーらを返してやる。いいか、絶対に口外すんじゃないぞ。わかったな？」

無言のまま3人が頷くと、パルキアは指をパチンと鳴らした。次の瞬間、3人は自分達が寝ていた部屋へと戻っていた。異空間ごと、パルキアも消えていた。

頼む、夢であってくれ。ヒトカゲ達は絶対そう思ったに違いない。窓の外を見てもまだ真つ暗。現実逃避するかのように、3人はすぐに眠りについた。

「当てになるとはあんま思ってたねえが、あいつらぐれーしか探れそ  
ーな奴いねーしな」

自分のいるべき空間へと戻ったパルキアが、ヒトカゲ達がいる世  
界を映し出した水晶を見ながらそう呟く。彼がどういっ思いでヒト  
カゲ達に命令したのか、それはパルキア自身しかまだわからない。

「楽しみにしてるぜえ……どんな結果になるのかをよ……」



## 第62話 神に誓え（後書き）

ここで、パルキアの設定を軽く公開します。

- ・ 1人称は「俺」。言葉使いは悪いが、頭が悪いわけではない。むしろいい方である。
- ・ 短気ではないが、神様という地位をいいことに、何でも言うことをきかせる。要するにわがまま。
- ・ すぐさま「あくうせつだん」で脅す。そしてこれを誰にも知られないようにするため、異空間に連れ込むことが多い。
- ・ 口癖は「俺は神だ」や「わかつたな？」など。

パルキア

「何か気に食わん。変えろ」

いやだ。

パルキア

「俺は神だぞ？ 早く変えろ」

私は君の創造主だからね？ わがまま言つと消すよ？

パルキア

「……後悔するからな、覚えとけよ（怒）」

こんな感じですか（笑）

第63話 花の街（前書き）

暑いですねえ。

ヒトカゲ

「あつついねえ」

ルカリオ

「久々の更新の第一声がそれか（汗）」

そうですね（笑）

長々と喋ってもしょうがないので……じゃあラティアス、よろしく。

ラティアス

「見てくれないと、月に代わって、おs……ふがつ！」

ルカリオ

「はい、ストップな（汗）」

### 第63話 花の街

翌朝の目覚めは最悪だった。朝を迎えて真つ先に頭に浮かんだのがパルキアの顔だったからだと言を揃えて言う。3人の顔がげつそりしている。

「い、生きてるよね？　ここ夢の中じゃないよね？」

よほど不安らしく、ヒトカゲが何回もルカリオとラティアスに訊いている。2人も他の者の目や周囲の様子を見渡し、ここが現実であることを確認した。ほつと胸を撫で下ろす。

「夢でなかったのは確かだな。けど、今は忘れようぜ。ホウオウ先に捜さねーといけねーし、恐えし」

最後の一言が本音であるのに間違いない。そしてそこに対して激しく頷く2人。これから1日の始まりを迎えようというのに、すっかり気分を悪くしてしまった。

「じゃあ、もう朝食とって行きましょう。次の街までもうそんなにないんですよ？」

ルカリオのカバンから勝手に取り出した地図を見ながらラティアスが訊ねる。それを見ると、今から歩けば昼には到着するほど近い位置にあった。久々の聞き込みができるヒトカゲは嬉しそうだ。

あれだけ恐い思いをしたが、とりあえずパルキアの約束を無視し、当初の予定通り、ホウオウ捜しを先にすることにした。だが、この時点で大事なことを忘れていたのだ。

「……私はもう帰っていいのかな？」

『……あつ!』

いつの間にか、ヒトカゲ達のいる部屋の窓辺にピジヨット警部がいたのだ。しかも首からお金が入った袋を提げている。そう、少し前にバンギラスに頼んだお金を持ってきてくれたのだ。

それなのに、3人は話をしていて完全無視。ピジヨット警部が怒っているわけではないのだが、焦りと不安が3人の心の中に芽生え始める。

「私が帰れば、お前達はしばらくこの店で働かされるはめになるの  
だろうなあ」

『ピ、ピジヨット様!』

少々意地悪な口調でピジヨット警部がからかう。それを本気で3人は許しを請うような態度を取る。今バンギラスのお金を受け取らないと、それしか頭になかった。

散々ピジヨット警部にからかわれた後、ようやくお金を受け取ることができた3人の表情は満面の笑みだった。3人をからかったピジヨット警部もご満悦の様子。

「それでは、私は戻るが、十分気をつけるんだぞ」

そういい残して、ピジヨット警部は窓から飛び去っていった。姿が見えなくなると、3人はどっと疲れが出たようで、その場にへたり込む。

「……もっかい寝るか」

ルカリオの提案にヒトカゲとラティアスは黙って頷いて返事をし、再度眠りにつくことにした。お金を近くに放つたらかしにしていたのは言うまでもない。

昼過ぎには店員に支払いを終え、ヒトカゲ達は次の街へ向けて歩いていった。地図でいえば、あと数kmのところだ。今日は天気もよく、程よい風が気持ちいい。

「いい天気だね。こんな天気ならお昼寝したいくらいだな」

「さつきまで十分寝たばつかるーが」

「えっ、何言ってるんですか、3時間くらいは寝たじゃないですか」

平和な時間を過ごしながら3人は話しながら歩く。ふと、ヒトカゲが前方に目をやると、誰かが道の真ん中に立っているのが見えた。だがあまりに遠くてはつきりわからないようだ。

「見て、あれ。何してるんだろ？」

ヒトカゲに声をかけられルカリオとラティアスもその方向を見ると、確かに誰かがいる。何かを配っているように見えたが、やはり誰かまでは見えないらしい。

「ちょっと行ってみようぜ」

3人は駆け足でそのポケモンの所に近づいていった。進むにつれて見えてきたのは、テディベアを思わせるようなかわいらしい熊のようなポケモン、ヒメグマだ。

さらに近づくと、ヒメグマはチラシのようなものを近くにいたポケモン達に配っていた。何気ないふりをして3人はチラシを受け取

る。

「ぜひいらしてくださいね」

ヒメグマがかわいい声で宣伝する。ヒトカゲ達はもらったチラシに目を通すと、どうやら3人が行くところとしている街でお祭りがあるようだ。そこにはこう書かれてあった。

“花の街　ドラグサムの花祭り開催！”

実は、次の街『ドラグサム』は別名“花の街”と呼ばれるほどの種類の花が咲き乱れる街なのだ。そんな知識がなくとも、花びらがついているチラシから容易に想像できた。

「へえ、早く行ってみたいですね！」

「そうだね……ん？」

ヒトカゲがチラシに目を通していた、その時だった。右下に小さく書いてある主催者の欄に書いてあった名前に、ヒトカゲは酷く驚いた。

(えっ、うそ……)

その名前は、ヒトカゲがかなり心配している者の名前だった。できればすぐに逢いたいという想いが強くなり、導かれるように街に向けて走り出した。

「あ、おい！」

勝手に走りだすヒトカゲに気づいたルカリオとラティアスが後を

追いかける。しょうがないなと思っっている2人だが、実は花祭りを少し楽しみにしているのだ。

ドラグサムの中心から少し離れたところにある、花が咲き乱れる草原。遮るものがないため、常に風が穏やかに吹いている。だが、ここは花祭りの会場ではない。

その草原の中心には、ぽつりと一つ、墓がある。その墓の前に1匹のポケモンが立っていた。そのポケモンは墓前に、自分で摘んできたであろう花を手向ける。

「とうとう僕が主催で開くことできたんだよ。君が好きだった、花祭り」

合掌しながら墓に語りかけるそのポケモンの表情は穏やかだ。そこに別の存在がいるかのように、自分が主催したという花祭りについて話をしていった。

話している途中何者かの気配を感じ、そのポケモンは目つきを変え、素早く後ろを振り向いて戦闘態勢に入る。が、そこにいたのは予想だにしなかった存在だ。

「……えっ、ヒトカゲ？」

「やっぱり……カイリユールだったんだね」

そのポケモン　カイリユールの目の前にいたのは、チラシを片手に息を切らしていたヒトカゲだった。それからすぐにヒトカゲを追ってきたルカリオとラティアスも到着した。

「君、僕の居場所を突き止めにきたの？」

やはり元殺し屋なだけあり疑い深く、報復なのかと疑っている。もちろんヒトカゲにそんな気持ちはなく、偶然チラシをもらって会おうと思ったと説明すると、カイリユーは少し落ち着きを取り戻した。

「それで、何でカイリユーが……？」

チラシを見せながらヒトカゲが訊ねる。花祭りを主催している理由を知りたいようだ。ひと息おいて再び墓前の方を振り返り、カイリユーが語り始めた。

「ここ、ドラグサムは僕の故郷。そして、ずっと好きだった幼馴染のリユの故郷でもある」

そう、この街はカイリユーの故郷。半生を過ごした場所であり、幼馴染を亡くした場所でもある街だ。半年前に戻ってきて、真っ先にこの祭りを計画したという。

その理由は、自分の気持ちを表現するため。生前リユが好きだった花を街いっぱい咲かせ、見せてあげたかったのだ。彼女が喜ぶ顔を思い浮かべることができると信じて。

「だから、命日に合わせて祭りを開くことにしたんだ。今の僕にできることは、これくらいだからさ」

それが、カイリユーのせめてもの罪滅ぼし。1年前とは相当変わっており、以前のように精神異常をきたすこともないと本人は言う。故郷へ帰ってきたことがよかつたらしい。

ヒトカゲとカイリユーの関係を未だに理解できずにただ見ていたルカリオとラティアス。ちょうどその時、彼らの背後に聞き覚えのある声がいくつも聞こえてきた。



「あらーかなり素敵な花ばかりね！」

「そうですね。あとで飾ってあげましょう」

「何だなんだ、俺様より花の方に見とれるなんて、どういうことだ？」

「誰が好き好んで軍鶏なんか見るか。自重しろ」

会話が耳に入ると、2人は一瞬にして誰かわかったようだ。振り向くべきか、それとも黙っているかまよっている間に、向こう側から声を掛けられてしまった。

「ん？ 俺様の弟子共じゃないか！ どうしたこんなところで」

こう言われてしまつては無視するわけにはいかない。たつた今気づいたふりをして2人は振り返ると、予想通り、チーム・グロックスのメンバー全員がいた。

それにしても、別行動を取つたはずのグロックスが何故ここにいるのか、それが気がかりである。この街に何か情報があるのかと、ルカリオが訊ねる。

「なあ、何でここに？」

まさか花祭りに来たわけではないだろうとルカリオは考えていたが、それは間違っていた。1番それを言いそうにないガブリアスの口から、それは語られた。

「花祭りに参加するためだ」

「……………えっ？」

そのまさかだった。何故花祭りなんかに参加する理由があるのだ

ろうか、自分達のことは一且棚に上げそう思っていると、話を終えたヒトカゲとカイリユーがこちらに向かってきた。

ヒトカゲはガブリアス達の存在に気づき、手を振っている。そしてカイリユーはというと、口を半開きにし、驚きの表情を見せている。彼の目線の先には、チーム・グロックス全員の姿が。

互いに見つめ合っている。彼らが何らかの形で知り合いなのは傍から見ていたヒトカゲ達にもすぐにわかった。しばしの沈黙の後、先にそれを破ったのはガブリアスだった。

「生きていたか、カイリユー……」

### 第63話 花の街（後書き）

カイリユー

「みなさん、お久しぶりですね」

前回の人気投票で第3位だったカイリユーでございます（笑）

カイリユー

「もう僕の出番がないかと思ったら、ちゃんと書いてくれたんで嬉しいです」

プテラだけ優遇するわけにはいかないしね（笑）  
でもそんなに出番ないかも……

カイリユー

「出番増やしてくれないと殺しちゃうかも」

頑張ります！（汗）

## 第64話 自責の念（前書き）

うん……

サイクス

「作者が考え事……明日は雨だな」

快晴だつつうの（怒）

いやさ、印象的なセリフを書くって難しいなあと。

ドダイトス

「この作品中にあつたら、是非ともメッセージで教えてほしいそうですぞ」

お願いします……と、本編に入る前に。

前回の話、修正しました。何とですね、1箇所すごいミスがありましたして……

ホウオウ捜し

× ホウホウ捜し

ホーホーを捜すためにヒトカゲ達は壮大な旅をしているという文になっっていました（笑）

バンちゃん

「やべえ、ホーホー捜し……（笑）」

## 第64話 自責の念

生きていたか　その言葉は何を意味しているのだろうか。彼らに一体どんな関係があるのか、ヒトカゲ達は成り行きを見守るしかなかった。

「お前が姿を消してから数年……俺達はあらゆる手を使って捜し回ったが、見つけることができなかった」

ガブリアスが言うことをカイリユーは無表情で、黙って聞いている。なんだかまずい展開になってきたなとルカリオは思っている。容易に口出しするような状況でもない。

「話してもらおうか。この数年間、どこで何をしていたのか」

それはヒトカゲしか知らない、この街に戻ってくるまでの空白の数年間。何があったかはヒトカゲが1番よく知っている。この場で言えるようなことではない。

カイリユーとてこれは言いたくないはず、どうすればよいのだろうかとヒトカゲが考えていた。すると、沈黙を通していたカイリユーがとうとう口を開いたのだ。

「……殺してた……」

「な、何だと!?!」

「たくさんのポケモン達を、殺してた。自分を、止められなくて」

自らの口から、真実は語られた。特にためらいもなくすんなりと滅多に驚きの表情を見せないガブリアスでさえ、これには驚かすにはいられなかった。

「お前、それは本当か！？ 殺しは重罪だぞ！？ そんな事して

」  
「わかってる。だから開いたんだよ、この花祭りを」

少し強めの風がその場にいた全員に当たる。風に乗って花びらが舞い散る。再び彼らの間に始まった沈黙が物語るのは、必死で相手を理解しよう、させようという意思の表れだった。

カイリユーの目は本気だった。以前の自分とは違う、曲がった道をまっすぐに直しているんだと言っているような、輝きのある目だ。

「僕は、異常だった。誰かを殺せば、戻ってくると思い込んでいたからね。それが何の意味もないことに気づいたのは1年前。それからは、僕の気持ち天国に伝わるように、どうすればよいか考えたんだ。その結果が、花祭りってわけ」

ガブリアス達の頭の中にある、空白の数年間がカイリユーによって埋められていった。愚かであるが、どれだけ辛い思いでいたか、どれほど悲痛であったかを理解するのに時間はかからなかった。

全てが語られた頃には、カイリユーは泣き出していた。自分自身を振り返っているうちに、愛する者の思い出も一緒に蘇り、それぞれの想いが混じって涙となったのだ。

「泣くな、辛かったのはお前だけではない」

そつと優しい言葉をかけたのはポーランドだ。その後ろでは、ゲンガーとメタグロスが涙を堪えていた。彼らもずっと同じ想いだっただのだ。

「そつだ。お前の幼馴染であり、そして、俺達のマネージャー。失

って辛かったのはお前だけじゃない……俺達もだ」

そう言いながら、ガブリアスは泣いているカイリユウの肩を叩く。その時、ヒトカゲ達は初めて知った　カイリユウの幼馴染・リユは、チーム・グロックスのマネージャーであったことを。

気分が落ち着き、みんなはリユの墓前に立ち、合掌する。それぞれが想いを込めながら、約1分、その場で会話しているかのよう。

「さて……ヒトカゲ、今度は君の番だよ」

「ん、何が？」

合掌が終わると同時に、カイリユウがヒトカゲに話しかける。もちろん何のことかわからずに、ヒトカゲは首を傾げながら訊き返した。

「ポケラスの、しかもこんな遠いところにいるんだから、何か目的があるんでしょ？」

さすがはカイリユウと言ったところであろうか、勘が鋭い。あ、そっかと今になってようやく気づいたヒトカゲの顔はほんのり赤い。元から赤いためわかりにくい。

「今は、ホウオウとディアルガを捜してるんだ」

「……ホウオウにディアルガ？　また何か事件でも？」

神様を捜しているということに驚くカイリユウ。すぐに事件性を疑った。だがこれに関してヒトカゲは多くは語れなかった。特にディアルガに関して言えば、パルキアに口止めされているせいである。

「おいヒトカゲ、いい加減話してくれよ。そのカイリユー、知り合いなのか？」

若干存在を空気にされていたルカリオが、カイリユーについてヒトカゲに訊ねた。先ほどの話の内容から危険な存在な気がしてならず、ラティアスも心配している。

「あつ、うん。1年前に僕の命を狙ってたの」  
『へえ〜……はっ!?!』

これには驚かすにはいられない2人。プテラに続き、ヒトカゲが犯罪者と普通に会話している光景を目にするのは2人目だ。改めて、ヒトカゲが何者なのかわからなくなってきたようだ。

「よろしくね、ルカリオ君にラティアスちゃん」

さらにカイリユーが笑顔で握手を求めてきた。ちよつと空気読めよと言いたくなってしまったが、避けるわけにもいかず、恐怖に耐えながらルカリオとラティアスは握手を交わした。

笑顔の彼を見て、ガブリアスの表情が緩くなる。もう大丈夫だろう、今のあいつならちゃんとやっていける、これ以上犯罪を繰り返すことはないと思えたようだ。

「カイリユー」

呼びかけられた方を向くと、ガブリアス達全員がカイリユーを見ている。その顔はガブリアスとポーマンダを除けばみんな綻んでいる。



「俺らはもう行くが、リユの事、頼んだぜ」

何も知らない者が聞けば、何てことのない別れの挨拶。だがカイリユーやグロックスのメンバーにすればこれはとても意味の深いもの。互いに通じ合っているかの確認になる。

この言葉に、カイリユーは右手を握り、それを胸にあてた。そして深く頷いた。大きな使命を授かった軍人の如く、しっかりとした眼差しで。

「それじゃ、何かあった時には本拠地マントに来てくれ。グランサンより少し先にある」

「……ありがとう」

互いに気持ちを通じ合ったのを確認できたようだ。同じ者を想う気持ちは今でも変わらない、だからこれからも大切にしていこうと、改めて誓った瞬間でもあった。

グロックスのみんなを見送った後、カイリユーは話題を戻す。だがさすがのカイリユーでも神様レベルの情報は持っていないようで、首を傾げるしかなかった。

「こればかりはわからないな。うん……他の神様は知ってるのかな？」

『他の神様？』

神様って他にもいたの、と言ったような顔で3人はカイリユーを見た。神様はどれだけいるのといったような顔つきの3人を見てカイリユーが苦笑いをする。

「そ、そうだよ。代表的なだけ言つてくと……海の神・ルギア、生命の神・ホウオウ、大地の神・グラードン、水の神・カイオーガとか……さらに高位なのに、時の神・ディアルガ、空間の神・パルキア、冥界の神・ギラティナとか。そして全ての頂点にいるのが、創造の神・アルセウス」

他にも意志の神・アグノムなど、全ての神様を列挙し終わった頃には、ヒトカゲ達の頭は蒸気が出てしまいそうな程混乱していた。こんなに神様がいると思つてもみなかつたようだ。

「だ、大丈夫？ まあそれはおいといて、僕ちよつと訊きたいことがあるんだ」

そう言いながらカイリユーが振り向いた先は、ルカリオの方。どうせ「君もしかして、ライナスの息子なの？」という質問だろうと思つていたルカリオは度肝を抜かれることになる。

「なんか最近、ジュプトルって奴が君のお父さんの仲間を殺し回つてるみたいだけど、どしたの？」

ルカリオの正体は既にカイリユーに知られていた。それどころかジュプトルの存在まで知つている。驚きながらもルカリオは身を乗り出し、すぐるような思いで情報提供を乞い願う。

「頼む！ どんなことでもいい！ あいつの事に関しての情報を持つてたら教えてくれ！」

その必死な姿から緊急性を感じ取つたカイリユーであつたが、残念ながらジュプトルの事はよくわからないという。たまたまエレキブルが殺された時に目撃しただけだとか。

興奮が一気に冷め、落胆したルカリオをヒトカゲ達がなだめる。カイリユーもどうにかしてあげたいと思っっているが、昔のように「僕が殺してあげよっか？」とも言えない。戸惑うばかりだ。

「やっぱり、グローバイルに行つて本人に聞くしかないね」

ルカリオをなだめるつもりでヒトカゲは言ったのだが、これに一番反応したのはルカリオではなく、カイリユーの方だった。おもわずヒトカゲに今の言葉を訊き返した。

「えっ、今、グローバイルに行くつて言った？」

「うん。ひよっとして……グローバイルつて知ってる？」

そのカイリユーの反応が気になるヒトカゲ達。全員がカイリユーの目を見て返事を待っている。当の本人は無表情のまま、何故か黙っている。次の瞬間、思いがけない答えが返ってきた。

「それって……ドラグサムの近くにある、グローバイル村の跡地のこと？」

「ち、近く!？」

何と、グローバイルはドラグサムとそれほど離れていない場所にあったのだ。ようやく、ジュプトルとの決戦に一步近づくことができ嬉しそうだ。

「な、なあ、他にグローバイルについて何か知ってないか？ 何かあったのかとか」

「まあ、そこまで詳しくは知らないけど、ある程度なら……」

これまた好都合だ。ジュプトルについて情報があればあるほど、

ルカリオの父・ライナスの情報も入ってくる可能性が高くなっていくからだ。ルカリオは是非聞かせてほしいと頭を下げる。

「オツケーだよ　　だけどここじゃマズいだろうから、うちまで来てもらおうかな？」

そう言うと、カイリユーが「ついてきて」とヒトカゲ達を案内しようとする。カイリユーがあまりに速く飛び去ってしまい、ヒトカゲ達が迷子になりかけ、無事にカイリユーの家に着いたのは出発してから1時間後のことだった。

## 第64話 自責の念（後書き）

次回に向けて、用語説明を1つ。

・神族

ポケモンの世界で「神」と呼ばれている者達を指す。

はい、以上。

ルカリオ

「もうちょいヒントとかないのかよ（汗）」

ありません（笑）

そういえば、先ほど数カ月ぶりに評価欄を見たらポイントがけっこう増えていました。入れてくださった方、ありがとうございます。

ヒトカゲ

「こんな作者さんのためにわざわざしてくださって、本当に申し訳ないです」

ヒトカゲ、最近だんだん言うようになってきてないかい？（怒）

第65話 消えた村（前書き）

今回は全体的にシリアスな感じですね。

カイリユー

「僕にぴったりだね」

そ、そうかな？（汗）

それはともかく、グロバイルの歴史を見ていきましょう。

## 第65話 消えた村

その昔、ドラグサム周辺があまり開拓されていない頃の話。この辺りは誰も住めないような荒れ具合で、枯れた草木が風に乗って砂埃と一緒に舞っているほどだ。

誰も開拓しようとしないうその土地を、とある1匹のポケモンが見るにみかね、自分1人の手で開墾しようではないかと発起した。そのポケモンこそ、後のグロバイルの村長・トロピウスなのだ。

このトロピウス、実は翼を使って空を飛ぶことができなかった。そのため、草食恐竜のような大きな体で何度も何度も、数km離れた場所から植物の種と水を持ってきては荒地に撒く、それをひたすら繰り返していた。

彼の努力とは裏腹に、植物は一向に育つ気配を見せなかった。それでも彼は、たとえ炎天下の中でも極寒の中でも、ひたむきに同じ事を行うのであった。1年に2回しか生らないという、自分の首に生える果物も植えたこともあつたらしい。

数年間続けてみたものの、植物が芽生えることは1度もなかった。この時既にトロピウスの体力も気力も限界に達していた。そしてとうとうある日、種を植えている最中にトロピウスが倒れてしまう。

やはりダメだったか……薄れゆく意識の中でそう呟いた、まさにその時である。トロピウスの目の前に1匹のポケモンが現れたのだ。しかし朦朧としていたため、姿をはっきりと見ることが出来なかった。

そのポケモンは何かを語りかけているようだったが、これも聞くことができなかった。しかし、はっきりと聞こえた言葉に希望を持ってたようだ。

「助けてやろう。その代わりに、今までの行いを続けよ」

刹那、トロピウスを淡い光が包み込み、彼の体力を回復させていった。安心するかのように、トロピウスはそのまま眠りについてしまった。

彼が目覚めると、既にそこには誰もいなかった。夢だったのか、それとも現実だったのかわからないまま辺りを見回していると、それが現実であったことを確信できるものがあつた。

何と、種を植えた場所から芽が出ていたのだ。それも1つだけではない。いくつもの芽が土から顔を出していた。さらにその傍には、自分を助けてくれたであろうポケモンが残した「おきもの」があつたのだ。

そうだ、ここが開墾できたら、村を創ろう。そしてこの「おきもの」をお守りとして祀<sup>まつ</sup>ろ。新たな希望を持ったトロピウスは、顔もわからぬポケモンに感謝しつつ、より一層開墾に励んだそうだ。

さらに数年後、ようやく努力が実り、ポケモン達が住めるほどの環境が整い、既に村としての機能を果たしていた。もちろん村長には、この土地を開墾したトロピウスが座に着くことになった。

それほど大きな村ではなかったが、村の住人はみんな生き生きとしていた。大きな争いごともなく、長閑で住み心地のいい村だと思んなは言う。それだけで村長は嬉しかったという。

そんな平和な村に悲劇が訪れたのは、今からちょうど20年前の話。何が起こつたのかは誰も知らず、一夜のうちにして全てが崩壊していたのだ。

建物は全て倒壊し、朝方になつても炎がくすぶつたままだ。住人はというと、避難できる、いや、避難するために逃げ出せる者が1人もいなかった。村長も含めて。

村自体が小さく、他の街ともそれほど交流もなかったため、あま



りこの事実は世間に知れ渡ることなく風化していったのだという。今ではグロバイルという村名すら知らない者がほとんどなのだ。

「……とまあ、僕が知ってるのはこれだけかな」

グロバイルの歴史についてカイリユーが知っているとこまで語った。この経緯を知ると、ルカリオの気持ちが複雑になっていった。それを代弁するように、ラティアスが口を開く。

「敵だけど、ジュプトルって可哀想な奴なのね。故郷も家族も、同時に無くして」

そう、ジュプトルこそがグロバイル唯一の生存者。それを考えると同情してしまいそうにもなるが、今の彼はルカリオにすればただの殺し屋。そのような感情を抱いてはいけないと振り払う。

歴史を知ることが出来て少しは満足しているが、何故ジュプトルがレジェンズのメンバーとルカリオを殺害しようと企てているのかを知るまでには至らず、ヒトカゲ達は再び頭を悩ますこととなった。

「やっぱり、本人に直接訊いたほうが早そうだね」

「そうだな、場所もわかったことだし……ん？」

ふと、ルカリオの頭にある仮説が思い立った。その仮説が正しければ、ジュプトルが自分を狙う理由になる。だがそれは同時に、自分の父親・ライナスが罪人だと認めてしまうことになりかねない仮説であった。

（親父が……いや、そんなはずはない。だけどそれ以外には……）

現段階で考えうる仮説はこの1つである。その真偽にルカリオは思い悩んでいる。その様子が気になったのか、カイリユーが声をかける。

「どうしたの？ すっごい考え事してるみたいだけど」

「はっ、あ、いや、どうやってあいつ倒すかな〜って悩んでただけだ」

確信が持てない今、あまり余計なことは話さないでおいた方がいいだろう、そう考えた故の嘘だった。カイリユーだけはその不自然さに違和感を覚えたが、敢えて触れないでおこうと口を噤んだ。

日も暮れ始めた頃、ヒトカゲ達はグロバイルに向けて出発しようとしていた。カイリユーの話によると、直線距離にして歩いて2時間ほどだと言う。

「あれ、泊まっていけないの？」

「せっかくだけど、こんだけ近いならもう行っちゃおうと思ってさ」

カイリユーの誘いを丁寧に断るルカリオ。ヒトカゲ達と話し合った結果である。挨拶をして歩き始めようとした時に、カイリユーが言い忘れたことがあると言い、3人を引き止める。

「グロバイルまでは、隣町を迂回しないと行けないんだよ」

『……………どういう事？』

すぐ近くにあるはずなのに、わざわざ隣町を迂回しなければならぬ理由を、カイリユーは地図を持ってきてそれを3人に見せなが

ら説明する。

「確かにグローバルまでは歩いて2時間くらい距離だけど、崖はあるし川は流れてるし、凶暴なポケモンいっぱいいるし、たぶんまともに通れないと思うよ、空飛べるポケモン以外は」

もう少し早く思い出してくれ、そう3人は思ったに違いない。さらに話を聞くと、その隣町までは歩いて半日以上かかるという。仮に今出発したら、町には朝方に到着することになる。

『…………お世話になりま〜す』

ヒトカゲ達は直行でカイリユウの家へと戻っていった。そんな3人の行動が面白いのか、カイリユウはくすくすと笑いながら玄関の扉を閉めた。

その夜、場所は変わってアイランドのディオス島。数カ月ぶりにそこへルギアが戻ってきた。ひよつとしたらハウオウが戻ってきているかもしれないと思つてのことだ。

洞窟の奥にある「共鳴の部屋」に入ると、ルギアは目の前の存在に驚き、おもわず1歩引いてしまった。そこにいたのはハウオウではなく、別の神様だ。

「よお、久しぶりだな、ルギア」

「…………パルキアか」

共鳴の部屋にいたのは、その場で頼杖ついて座っているパルキアだった。どういうわけかニヤリと笑みを浮かべている。ルギアはその不自然さに戸惑っている。

「何の用だ？ わざわざこんなところまで来て」

「そんなにイラつくなよ、仲良くやるうぜ？ 俺達『家族』なんだからよ」

そう言うとパルキアは近くにあった、ホウオウを呼ぶために使う金の結晶を手にし、それをツメに乗せてくると回し始める。視線を結晶にやったまま、パルキアは話を始めた。

「てめー、一体何してやがる？」

質問されたルギアは一瞬どう応えてよいか悩む。それにパルキアがそう言った真意は何か、ひとまず様子を窺ってみることにした。

「どういう意味だ？ 私は行方不明になったホウオウを捜して……」  
「俺が訊いてるのは、てめー自身が何してるかってことだ。スイクン達にさせてることじゃねーよ」

ルギアの言葉を遮ってパルキアが言う。これはまさに凶星だ。冷や汗が流れるほどルギアは内心焦っているが、顔に出さずにあくまで冷静を装う。

「別にお前が気にするほどのことではない」

しばし沈黙が流れる。無言のまま返答を待つルギアと、結晶を回して遊んでいるパルキア。互いに相手がどう出るかを待っているように見える。

先に沈黙を破ったのはパルキアだ。回していた結晶を中に投げ、落ちてきた際に右手で捕らえる。そのまますくと立ち上がり、視線をルギアの方へと向ける。

「ま、大体見当がついてつからいいけどよ。いずれは喋らなきゃいけないー日が来るだろうしな」  
「……………」

台座に結晶を置き、パルキアは帰ろうとしているのか、ルギアに背を向けた。だが何かを思い出したかのように頭を上げ、ルギアに話しかけた。

「そっぴや、言い忘れてたことがあつたぜ」  
「何だ？」

ルギアには見えていないが、この時パルキアは笑みを浮かべていた。そのまま振り返り、笑顔を保ったまま楽しそうにルギアにこう言った。

「ディアルガ捜し、てめーが慕ってるヒトカゲ達も協力してくれるつてよ」  
「なっ、なんだと!？」

この日1番の衝撃と驚きを見せるルギア。無意識に目も口も大きく開いてしまうほどだ。思ってもみなかった事態に焦る気持ちを抑えきれず、パルキアを問い詰める。

「ディアルガの事は我々神族だけの問題だ! 一般のポケモンを巻き込んで万が一の事があつたらどうする!」

珍しく大声で、ルギアは遠まわしではあるがパルキアにやめるように諭す。一方のパルキアはというと、ルギアの言葉に対して聞く耳持たずといった具合だ。

「万が一の事があつたらどうするって？ どうもしねーよ。可哀想  
って思うぐれーだろーな」

「おい、いい加減にしろ！」

「ははっ、冗談に決まっつんだろ！」

この状況下でも、パルキアは冗談を言えるほど落ち着いていた。  
この余裕はどこから来るのだろうか、ルギアは不思議に思い続けている。

「俺だつて考えなしにそんな事しねーよ。無駄な事は嫌いだからよ」

そう言うと、自分の目の前に空間の裂け目を作り始めた。どうやら本当に帰るようである。最後に一言だけ、ルギアはパルキアに付け加えた。

「いいか、ヒトカゲ達に深く追求させるでないぞ」

「……どうだかな」

あいまいな返事だけ残すと、パルキアは自分の空間へと戻ってしまった。このやりとりだけでルギアは疲労困憊といった顔をしている。自身にとつて驚くべき内容が多かつたためであろう。

一体パルキアは何を考えているのだ、ヒトカゲ達を使って何をさせるつもりなのだろうか。ルギアが真剣に考えているこの答えを持っているのは、パルキアだけである。

第65話 消えた村（後書き）

ルギア

「パルキアは何を考えているのだ？」

パルキア

「てめーこそ何こそそしてんだよ？」

はいはいやめなさい（汗）

こついう、敵か味方かわからなくなるようなシーンを書いてみたくて、いざ書くと楽しいですね（笑）

ルギア

「私は何も悪事などしておらん」

パルキア

「俺が悪い奴に見えるってか？」

……皆さんはどちらが悪者に見えますかな？（笑）

ルギア・パルキア

『そついう作者が1番の悪者だ（汗）』

第66話 最後の隊員（前書き）

ルギア

「だからパルキアは何を考えているのだ？」

パルキア

「てめーこそいい加減吐きやがれ」

いつまで言い争ってるのさ（汗）

えーもう9月ですね。秋らしくない気温が続いていますが、体調には気をつけましょう。

私はあとちょうど1カ月休みがあるので、勉強もゲームも執筆もできるように頑張っ……

ルギア

「パルキア、私をはめるつもりか？」

パルキア

「それはこっちのセリフだ。言わねーなら無理矢理……」

君達、うるさいからしばらく出番なし（怒）

ルギア・パルキア

『な、なんだとっ!？（汗）』



## 第66話 最後の隊員

翌朝の目覚めはカイリユーの用意したフルーツの匂いにより、爽快なものになった。3人が気持ちよく目を開けると、目の前にカイリユーがフルーツを持って立っていた。

「おはよう。これ食べたいでしょ？」

カゴいっぱいに盛られたフルーツを見て食べたくないという者はこの場にいないだろう。ヒトカゲは真っ先に飛びつこうとしたが、さっとそれを回避する。

「食べたかったら、ヒトカゲは洗い物、ラティアスは火おこし、ルカリオは街から僕宛の荷物運んできて」

簡単な手伝いと引き換えにフルーツをくれるという。ヒトカゲとラティアスは積極的に動き、洗顔した後にすぐさま手伝いを始めた。ルカリオはというと、藁の布団に入ったままカイリユーとにらめっこ状態だ。

ヒトカゲと旅をしていく中でルカリオも段々と朝が辛くなってきたようで、心の中ではフルーツよりも睡眠時間の方が欲しいらしい。それを目で訴えている。

「あのさ、フルーツいららないから寝かせてくれ」

眠い目をしながら何気なくルカリオは言った。だがその一言が引き金となったのか、カイリユーにあの笑顔が戻ってきた。つい1年前まで持っていた、殺し屋の顔だ。

霞んだ目ではあまりわからなかったが、ルカリオがはつきりわか

ったのは、カイリユーが自身のツメを研ぎ始めている姿だ。それを認識して目をパッチリ開けると、目の前までカイリユーが迫っていた。

「手伝ってくれないと、ヒトカゲ達に死体運びのバイトさせなきゃいけないんだけどなあ」

「……お、お手伝いさせてください、カイリユーさん……」

ルカリオに選択肢など最初からなかったのだ。その場から逃げるかのようにカイリユーの家を飛び出し、街のペリッパ郵便局まで一目散に走っていった。

3人は手伝いの後にフルーツを食し、すぐに隣の街へ向けて出発する準備を整えた。何とか日が暮れるまでに移動してしまいたいという意見が一致したためである。

「カイリユー、頑張ってね」

「うん。何かあったら知らせてね。何でも手伝ってあげるよ」

ヒトカゲとカイリユーはがっちり握手を交わす。それが終わるとルカリオとラティアスにも握手しようとカイリユーが手を差し出す。ラティアスは喜んで手を出す。朝の件があり、ルカリオは手を出すまでに相当な勇気を搾り出した。

握手が済むと、3人はカイリユーに別れを告げて出発した。姿が見えなくなるまで互いに、何度も何度も手を振り続ける。特にヒトカゲにとっては、カイリユーの様子を見て安心した分、名残惜しいものになってしまった。

「じゃ、走るぜ。急がないと途中で野宿だ」

カイリユーが見えなくなつたところで、ルカリオが促す。制限時間は日没まで。それを考えると道のりの半分以上は走らないと間に合わない計算になる。

野宿より宿泊まりがいいに決まっている。ヒトカゲはいつも以上にやる気を出し、走り始めた。それを追うようにルカリオとラティアスも後ろからついて行った。

「そんな日もあるって」

「……そうかもな」

走り始めて数分後、街の郊外まで来て突然の雨。3人はなくなくと雨宿りを強いられてしまった。大きい木の下で3人、同時にため息をついた。

「あつ、あそこに大きなフキが生ってますよ」

「じゃあねえ、あれで雨防ぎながら歩くか」

ラティアスが発見した大きいフキを傘代わりにして、3人は再び歩き始める。だがこの状況では走ることが出来ないため、雨が止まなければ野宿決定となる。

雨が止むように祈ってはいるが、想いとは正反対に雨はその強さを増していった。雨粒は大きく、下手したらフキの葉が破けてしまうのではないかというほどだ。

「どうしよ、こんなに酷かったら野宿すらままならないかも……」

さすがのヒトカゲも参っている。冗談交じりに「グラードンがい

ればすぐ晴れたよね」と嘆くほどだ。やがてその足取りは止まってしまった。

つられるように、ルカリオもラティアスもその場に止まってしまふ。肩で大きく呼吸したと思ったら、出てきたのはため息だけだ。雨ざらしの中の野宿がほぼ確定になった。

だがそんな時、ルカリオが何者かの波導を感じ取った。2人、自分達のいる方へと近づいている気がするという。その方向を3人はじっと見つめていると、やがて遠くからポケモンが来るのがわかった。

ポケモンの姿がだんだん大きくなっていくと、ルカリオとラティアスの緊張が増していった。雨雲を思わせる鬣たてがみを持った、虎に近い姿のポケモン。もう一方は、額に水晶を思わせるものが存在するポケモンだ。

「やはり、ヒトカゲだったか」

「やつほ〜 ライコウにスイクン」

ヒトカゲ達の前まで来ると、彼ら ライコウとスイクンが話しかけてきた。アイランドの番人かつルギアの側近である彼らを見ただけで、ルカリオとラティアスは畏縮してしまった。

だが驚いたのは2人だけではない。ライコウがラティアスの方に目をやると、どういいうわけか反射的に1歩下がってしまったのだ。どうやら拒否反応のようだ。

「こんな雨の中、どこへ行く？」

全身びしょ濡れのスイクンが訊ねると、どうしても今日中に隣町へ行きたい旨をヒトカゲが伝える。この際、グローバルについては一切触れていない。

いい近道があれば教えてほしいなと期待を抱いていたヒトカゲ達

に対し、何のためらいもなく、ライコウが3人に対してこう言った。

「ならば俺達の背中に乗れ。連れてってやる」

『ホ、ホントに!?!』

願ってもなかった提案だ。ライコウとスイクンの足だと確実に夕方までには隣町に着くことができる。ヒトカゲ達が断る理由などどこにもない。

「悪いが、ラティアスは飛んでもらえるか？」

「そ、そんなに私重くないです！」

「い、いや、そういう意味じゃなくてな……」

やはりラティアスという種族は扱いづらいものなのだろうか、しばしの間ライコウはそればかり考え、何事にも集中できなかったという。

降りしきる雨の中、ヒトカゲはスイクン、ルカリオはライコウの背中に乗り、隣町への道をひたすら突き進む。2人に並ぶようにラティアスは飛行している。今にもフキが折れてしまいそうな程速く走っていた。

「あの、スイクン」

「どうした？」

走行中ずっと黙っていたヒトカゲが、突然スイクンに話しかける。「あの」事をずっと気にかけていたようで、思い切って質問するこ  
とにしたようだ。

「……ルギアは、僕達を裏切るようなことはしないよね？」

このような質問をした理由に、先日パルキアから言われた言葉が心の中に引っかかっていたからだ。誰にも知られないように、ホウオウ捜し以外のことをしている。それが本当だと信じてしまうと、ルギアを疑ってしまうことになる。

さらにそこから悪い方へ、悪い方へと考えていくと、もしかしたら敵の一味なのではないかという憶測まで出てしまいかねないため、ヒトカゲははつきりさせたかったのだ。

「いきなり何を言う。ルギア様がお前達を裏切る理由がどこにあるというのだ」

はつきりと、スイクンは言い切った。裏切りなどない、自分もそう信じているということの意味していた。ヒトカゲも、まだほんの少しだけ気にしているものの、パルキアの言葉だけを鵜呑みにしていたことを反省する。

「そうだよ。なんとなく不安になっちゃったんだ」

「わからなくはない。だが今はあっちの方が不安だ」

そう言ったスイクンは首を横へと向ける。つられるようにヒトカゲも同じ方向を向くと、今にもライコウの背中から落ちそうになっているルカリオの姿があった。

「おい、もっとしっかり掴まってる」

「しゃーないだろ！ お前の鬣が雨のせいで滑るんだよ！」

確かにこれは不安だな、と頷くヒトカゲ。それでもあまり気にすることなく、すぐさま視線を前へと戻し、何事もなかったかのように

に振る舞った。

ヒトカゲ達がドラグサムの隣町『ハイボル』に到着した時には、すっかり雨は止み、茜色の夕陽が町やヒトカゲ達を照らしていた。何だかいたたまれない気持ちになったようだ。

「ありがとね、スイクン、ライコウ」

「礼には及ばん。こちらに向かうついでだ」

そう言うつとすぐさまスイクンとライコウはどこかへ向けて走り去っていった。ヒトカゲが何か言いかけた時には、既に声の届かないところまでいた。

急ぎの理由でもあるのだろうかと考えただけにとどめ、ひとまず初めて訪れたこの町の景観を眺める。全体的に寂さびれている、田舎と呼ぶに相応しい町だ。

「さて、宿でも探そ……」

ふと、ルカリオが横をちら見した時だった。何気なく辺りを見ようとして目に飛び込んだのは、自分の左胸にもある、あの赤い稲妻印だった。

その稲妻印はあるポケモンの左頬についていた。焦点をずらして顔を確認すると、ルカリオが捜していたポケモンの顔がはっきりと映し出された。

（あれは……間違いない。親父の仲間だった、ライボルトだ！）

第66話 最後の隊員（後書き）

お久しぶりですな、ライコウ（笑）

ライコウ

「何で俺を見て笑うんだ（汗）」

いや〜だって、レンジャーでも映画でもパツとしなかったからさ、本編に出してあげたらあんな感じだし（笑）

ライコウ

「……ラティアスという種族は、みんな“個性的”なのか？」

どうだろうねえ。君が思い浮かべてるラティアスはそうかもしれないね（笑）

ライコウ

「マジ勘弁してくれ（汗）」

何でライコウがラティアスに対してこんな風に思ってるか、本編でわからなかった人は『短編集』の2つめの話を読んでみてください。その後読み返すとなんとなくわかるはずですよ（笑）



第67話 決意（前書き）

ヒトカゲ

「最近あつついな〜……カメックス、お水くれない？」

カメックス

「やってもいいが、暑さのせいでぬるくなってるぜ？」

ルカリオ

「なんだ、ぬりいのか。甲羅ってそんなも……がつ！？（汗）」

カメックス

「てめえは自分の血でも飲んでろや（怒）」

はいはいやめなさいってば（汗）

それでは第67話でございます、どうぞ（笑）

## 第67話 決意

電気による火花を想像させるような毛と尾、鼻の長い犬に似た骨格と、水色の体。特徴的な山型になっている黄色の鬘たてがみを持っている、ほうでんポケモン。それがライボルトだ。

このライボルトの左頬にある、赤色で描かれた稲妻印が、彼がルカリオの父・ライナスがかつて率いていたチーム・レジエンスの一員であることを証明していた。

「ヒトカゲ、ラティアス、ちょっと来てくれ」

小声で言いながらルカリオが手招きをする。何も知らないヒトカゲ達を建物の陰まで呼び寄せると、2人にもライボルトの姿、特に稲妻印を確認させた。

「家までついてって、話きたいんだけどいいか？」

『オツケー』

ルカリオを先頭に、建物の陰に隠れながらライボルトに見つからないようにそつと後を追っていった。当のライボルトはヒトカゲ達の存在に一切気づくことなく、町中を歩いている。

しばらくして到着したのは、町から離れてほぼ森に近いところに佇んでいる、1軒の古い家。ライボルトが入っていったことから、どうやらここがライボルトの家らしい。

3人は同じことを思った。かつての有名人が住むような場所でも家でもないな、誰とも関わりを持たずに1人でひっそりと暮らしているようにしか見えないと。

「よ、よし、早速訊きに行くか」

若干緊張気味のルカリオ。冷や汗が流れ出す。ルカリオだけでなく、おそらくレジエンスを知っているポケモンなら誰でも、そのメンバーに声をかけることだけでも緊張するだろう。

1つ深呼吸をし、勇気を出して木製の扉をノックする。扉の向こう側からは足音が聞こえる。胸が再び高鳴り始めているうちに、扉は開かれた。出てきたのはまぎれもなく、ライボルトだった。

「どちら様ですか？」

ライボルトと目が合った瞬間、ルカリオは息が止まるほど緊張が最高潮に達し、何も言葉が出なくなってしまった。代わりにヒトカゲが応えることにした。

「あの、チーム・レジエンスのライボルトですか？」

「……そうだが」

ライボルトにとっては久々の客人であるためか、しきりにヒトカゲ達のことを見ている。そして彼は、ルカリオの左胸にある赤い稲妻印を見つけてしまった。

(この印、そして顔つき……そうか)

驚きは見せず、無表情のまま振舞っている。だが頭の中ではルカリオがここへ来たことにある想いを抱いていた。“あの時期が来たのか？”と。

そんな事を考えているとは知らず、ヒトカゲは話を進めようと口を開いた。ようやくルカリオも落ち着きを取り戻しつつあるようで、

呼吸が安定してきた。

「ライボルトに話しておかなければならないことがあって」  
「えっ？」

ライボルトにとって、これは不思議なことであった。ライナスが不在となつてから、チームは活動を自粛、メンバー全員がひっそりと暮らすようになり、社会と距離を置いていたからだ。情報が入ってこないのだ。

当然、チームのメンバーが殺されたという話はヒトカゲから聞くまで一切知らなかった。思いがけない一報であつたにも関わらず、非常に落ち着いている。

そして話し手はルカリオへと移る。メンバーを殺した犯人を知っていることを含め、自分の父親の情報について聞き出そうと必死に熱弁した。

「……そうか、お前達の言いたいことはわかつた」

一通りの話を聞き、ライボルトは現状を把握した。自分の周りでのそのような事が起こっていたのかと冷静に受け入れている。ヒトカゲ達はこれで情報が手に入る、そう確信していた。

「だが、今私が話せることは何もない。悪いが帰ってくれ」

ヒトカゲ達の質問などに対し、ライボルトが応えたのはこれだけであつた。そのまま扉を閉めようとしたため、納得のいかないルカリオが両手で扉をがっしり掴む。

「待ってください！ 頼みますから教えてください！ 本当に何でもいいんです！」

「手を離せ！ 帰ってきてくれ！」

強力な顎力でライボルトは扉の取っ手を銜え、ルカリオの手をはさむ勢いで扉を閉めてしまった。その後もヒトカゲ達は何とかしてライボルトと話をするためにノックしたりしたが、一切応じる様子はなかった。

普通なら、愕然としてしまう状況である。希望をまた1つ失った感覚に陥るかもしれないところだが、ルカリオは違った。何も答えようとしないうライボルトを疑っている。

「なんか怪しいな。ひょっとして親父の行方知ってんのか？」

しかしそれを確認する術はない。ヒトカゲに「ジユプトルに聞いた方が早い」と言われ、渋々その場を後にすることにした。何度か家の扉の方を振り返るが、結局開かれることはなかった。

この時ライボルトは、ヒトカゲ達が帰っていく姿を扉の隙間からこっそり覗いていた。完全に姿が見えなくなると、そつと扉を閉め、大きく息を吐く。

（おそらく、彼ら 特にあのルカリオが次にここへ来たとき、私は覚悟を決めねばならないだろう）

複雑な表情を顔に出し、ライボルトは心の中で呟いた。その決意は彼にとってどれほど大きいものなのか、ヒトカゲ達が理解するのはもう少し先の話である。

日が落ちてすっかり夜を迎えた頃、ヒトカゲ達がいたのはハイボルの隅にある芝生が植わっている場所だ。ここで野宿するつもりらしい。

というのも、ハイボル自体観光などによる来客が訪れることが滅多にないため、宿を営む者が誰もいないのだ。民家に行つて交渉するも、ヒトカゲ達のように大人数だと泊める場所もないのだとか。

「頼む、1人で行かせてくれ！」

『ダメだよ絶対！』

そこでは、ルカリオとヒトカゲ、そしてラティアスが何やら言い合いをしていた。ルカリオの意見に対してヒトカゲとラティアスが反対しているようだ。

「これは俺の問題だから、俺自身で解決したいんだよ！」

『でも1人で行くのは危険すぎるって！』

話の内容から、どうやらルカリオは1人でグロバイルに行くつもりらしい。当然ながらリスクが高いため、ヒトカゲとラティアスは必死にそれを阻止しようとする。

何度も許しを請うルカリオだが、それでも2人からOKの返事をもらえない。1人でジユプトルと戦う決意を固めていた彼はそう簡単に折れるわけにはいかず、ある行動に打って出る。

「……いいや、後回しにして先に飯食おう、なっ？」

真剣な表情から一変、口調も含めて穏やかなものになった。急な変化に戸惑いながらも、思い止まってくれたかと感じた2人は頷き、きのみを採りに行くこうとする。

「あつ、飯ならカイリユーからもらったやつがあるぜ」

そう言つて2人を止めると、ルカリオはカバンから瓶を2本取り

出した。これは何なのかと尋ねると、きのみで作った果肉入りジュースだと言う。

珍しいなと思いつながら、ヒトカゲとラティアスはそのジュースを飲み始めた。だが一口飲んだか飲まないかくらいのところ、2人の顔が青ざめ始めた。

「に、苦い……」

「酸っぱいです……」

それは2人が苦手とする苦い味と酸っぱい味のジュースであった。さらに、苦手な味を食したためか、視界がぐるぐると回りだす。間違いなく混乱状態だ。

「ヒトカゲ、ラティアス、ごめんな」

半笑いしながらルカリオが混乱して動けない2人に近づく。何をしたのかとヒトカゲが訊ねると、両手を合わせて謝りつつ、次の第を説明し始める。

「そのジュースな、お前らの嫌いなバンジのみとイアのみでできてるんだわ。つまり、お前ら専用のしびれ薬をカイリユウに作ってもらったんだ」

苦いのが苦手な者が食べると混乱に陥るバンジのみと、酸っぱいのが苦手な者が食べると混乱に陥るイアのみ。その両方をヒトカゲとラティアスに食べさせたのだ。

「な、なんで、ここまで……」

うまく喋れず、ヒトカゲは途切れ途切れに訊ねる。どうしてここ

までするのかと。同じことをラティアスも言いながら、2人でルカリオの方を見る。彼の表情は今、不自然にも、自然な笑みで満ちている。

「勝手なこととして本当に悪いと思ってる。だけど、これはどうしても譲れないんだ。親父が関係している以上、その問題を解決するのは家族である俺の役割だからな」

家族の問題であるため、外部の者の助けはいらない。自分達で決するのが理由だと語るルカリオ。こう言っても絶対止められると思ったから、こうするしかなかったという。

だからと言って、仲間であるヒトカゲとラティアスをただ置き去りにしていくことはできないため、「別の形で」戦いに協力してほしいと願い出る。

「混乱が治まったら、グローバルまでライボルトを連れてきてほしいんだ」

『ラ、ライボルト……を？』

どういうわけか、ライボルトを殺すつもりジュプトルがいるグローバルに、そのライボルトを連れて来いという。ルカリオ曰く、「対面すればどちらかが何かしらの情報を吐くだろう」とのこと。

それに加え、ヒトカゲとラティアスがいれば護衛できるだろうし、何よりライボルトが元探検隊であることを考えれば、そう簡単に殺されるはずもないという考えだ。

「じゃあ悪いけど、俺は先にグローバルに行ってくる。ライボルトの件、よろしくな！」

そう言うとすぐに、ルカリオは右手を挙げて挨拶し、その手でカ



バンを掴んで2人に背を向けて走り出した。本当に身勝手な行動であるが、ヒトカゲ達は怒っても呆れてもいなかった。

何故そのような感情が芽生えなかったか、それはルカリオの表情にあった。普段と何ら変わらない笑顔だったからこそ、ヒトカゲ達はわかったのだ。それが、2人に対する信頼の証であることを。

信じてくれ、その想いが始終ルカリオから伝わってきたのだ。以前のように他者を護りたいがあまりに芽生えた自己犠牲に満ちた想いではなく、必ず勝ってみせる、だから信じてくれという信頼を寄せる想いである。

「ぼ、僕達も、やらなきゃね」

「そう、ね。動けるようになったら、すぐ行きましょう」

こうして、宿敵・ジュプトルとの最終決戦が、幕を開けたのだ。

## 第67話 決意（後書き）

カッコつけると後で痛い目にあう法則って知ってるかい、ルカリオ君？

ルカリオ

「……………えっ？（汗）」

ヒトカゲ

「じゃあ次こそ死んじゃうんだね、かわいそうに」

ラティアス

「あつ、見てみて、献花バーゲンやってる！ 買いにいきましょう！」

ルカリオ

「コラ待ててめーら！ まだ死んじゃいねーぞ！（怒）」

次回、ジュプトルとの最終決戦です（笑）

ジュプトル

「絶対見とけよ」

第68話 詠唱封じ（前書き）

はいみんな、花束あげて。

ヒトカゲ

「お疲れさま、だって」

ラティアス

「亡き友を思う、ですって」

ルカリオ

「……死亡フラグ立ったって言ったやつぶっ殺すぞ（怒）」

## 第68話 詠唱封じ

すっかり夜中になっていたが、ルカリオがグローバルに到着するのにそれほど時間はかからなかった。ハイボルから一本道をひたすら走り続け、最初に目にしたのは、倒壊した建物だ。

「ここか……カイリユーの話のとおり、すっげー跡だな」

見るも無残な光景が広がっている。建物の残骸の他にも、草木が生える気配のない地面から舞う砂埃、何か強い力が加わって空いたであろう穴。異様としか言えないようなものだった。

辺りを見回し、ジュプトルを捜す。しかし隠れられるような場所はなく、気配も感じない。まだこの場所に来ていないのかと思っていると、不意に背後から声をかけられた。

「俺ならここだ」

一瞬、ルカリオの背筋が凍った。慌ててその場から離れて後ろを振り向くと、そこにはジュプトルがいた。完全に気配を消して近づいていたようだ。

「……ストーカーかよ、驚かせやがって」

さっさと波導を使って調べておけばよかったと、ルカリオは後悔した。とはいえ、思ったよりも早くジュプトルに会えたことに喜びのような感情を抱く。

「なあジュプトル。せっかくここに来たんだ。いい加減、俺を殺そうとする理由くらい教えてくれたっていいんじゃないか？」

ここに来るまでに、ルカリオは様々な仮説を立ててきた。それが正しいかどうか、ここで証明されると思っているのだ。ジュプトルは少し間をおき、口を開いた。

「いいだろう。ただし、俺に勝つたらの話だ」

すかさず戦闘態勢に入るジュプトル。心の中ではさっさと片付けてしまいたいと思っているに違いない。そう感じたルカリオもぐつと構える。

それから数秒も経たないうちに、互いにわずかな体の動きを読み取り、それが戦いの始まりの合図となり、2人は自身の相手へと向かっていった。戦闘開始である。

「でんこうせつか」！

「しんそく」！

ジュプトルの“でんこうせつか”に対し、ルカリオは“しんそく”を繰り出す。どんな攻撃を仕掛けてくるか想像できなかったため、必ず先制してダメージを与えてしまおうとの考えだ。

素早く移動しているジュプトルの目の前にルカリオが突如として現れ、ジュプトルは体当たりされてしまう。“でんこうせつか”は不発に終わってしまった。

「けたぐり」！

「しんくうは」！

またしてもルカリオが先制を取れる攻撃になった。目には見えないう衝撃波がジュプトルにぶつかり、“けたぐり”も失敗してしまった。今のところはルカリオ優勢に見えるが、いつまでも先制技を出

すわけにはいかない。

「りゅうのはどう」！

おおよその動きがわかったところで、ルカリオは“りゅうのはどう”を放った。エネルギー弾がまっすぐジュプトルに飛んでいくが、<sup>すんで</sup>既の所でかわされる。

「ギガドレイン」！

ようやくジュプトルの攻撃が当たる。しかもダメージを与えるに加えて体力も回復、ルカリオにとっては少し痛いものになってしまった。

「マジか……こりゃ少し厄介だな」

そう、この技は与えたダメージの半分を回復できる技。ルカリオとジュプトルは互いにタイプ上の相性では大ダメージを与えることができないため、繰り返し使用されれば長期戦は避けられない。

もし大ダメージを与えるならば、詠唱をするしかない。だがかなり体力を消費することになることを考慮すれば、まだ詠唱するわけにはいかないのだ。

「考え事している場合か？」

意識が完全にジュプトルから離れていたルカリオはその声に過敏に反応した。気づいた時にはすでに目の前まで迫っていたのだ。距離をとろうとしたが、一瞬ではそこまで離れることができなかった。

「れんぞくぎり」！

右腕で1回、左腕で1回、ジュプトルはルカリオの体にx印を入れるような斬り方をした。直撃こそ避けることができたが、直に右肩から血が出ていることに気づく。

「や、やりやがったな。調子乗りやがって……」

「俺はお前を殺すためにやってるんだ。調子も何も無い」

斬られたとはいえ、傷は浅い。まだまだ動けるなどルカリオは確信すると、次の手を考えた。少しでもジュプトルと距離を置くために、お得意の“あれ”を使うことにした。

「そろそろ、本気出さず。 “ボーンラツシュ”！」

ルカリオは両手を前に出し、手のひらに気を集中させて波導を集めていく。それはやがて輝かしい青色を放つ、骨の形に似た棒になっていった。これを使って棒術を行うのが彼の特技なのだ。

「確かお前と最初に会った時、お前のぎんのハリとで戦ったよな。今その武器はないけど、“リーフブレード”で十分戦える……どうだ？」

何と、まるで過去を懐かしむかのように、ルカリオは勝負の提案をしたのだ。最初に対峙した時と同じく、“剣術”対“棒術”で挑みたいらしい。

「面白い。いいだろう」

その提案に乗るジュプトル。これは何かの作戦なのだろうかと疑っているが、実はそうではない。ルカリオがこう提案したのには意

味が込められている。

以前、同じ戦い方でルカリオは負けていた。殺される寸前のところまでやられたのを、後から悔やんでいたのだ。そして今回、差で戦う最後の機会であることを考え、同じ戦い方で勝利を収めてやる、というルカリオの強い気持ちの意味しているのだ。

「じゃあ行くぞ。“リーフブレード”！」

「どっからでも来い！」

ジュプトルがルカリオに向かっていく。“ボーンラッシュ”をしっかりと持って構えているルカリオのもとに、最初の一振りが下ろされる。金属音に似た音を出して、互いにぶつかり合う。

“リーフブレード”はジュプトルの両腕の葉に似た器官にエネルギーを集中させ、刀の刃のようにして斬りつける技。そのため、斬りつけた腕とは逆の腕で追加攻撃が可能なのだ。

今、“ボーンラッシュ”と右腕の“リーフブレード”が押し合い状態になっている。ジュプトルは気づかれないように左腕も構え、横からルカリオを斬りにかかろうとした。

「そうはいくかよ！」

左腕が振られたと同時に、ルカリオはその場で飛び上がった。その下を“リーフブレード”が綺麗な弧を描いていく。そのついでに、“ボーンラッシュ”を強く押し付けてジュプトルから離れる。

それから数分間に渡り、2人は激しい戦闘を繰り返す。相手の隙を窺っては一発当てようとするが、“みきり”を使わずとも交わされてしまう。互角の勝負であるとはいえ、だんだんと互いに疲労の色が見え始め、動きも若干ではあるが鈍くなってきた。

「うっ！」



再び、押し合いの状態になった。2人とも息を切らしながら、震え始めた腕を懸命に押し合っている。先程と同じように空中に飛び、反動を利用して離れようとルカリオが考えていた矢先、予想しなかった事態が発生する。

「…………おらあつ！」

何と、ジュプトルが足で“ボーンラツシュ”を蹴り上げてしまったのだ。ジュプトルの脚力はルカリオの握力よりもはるかに強いため、ルカリオは自然と手を離さざるを得なかった。

「しまっ…………」

「くらえっ！」

“ボーンラツシュ”がなくなり、がら空き状態のルカリオに、すかさずジュプトルが“リーフブレード”で斬りにかかった。それは見事に命中し、ルカリオの左肩に大きく傷をつける。

「があっ!?!」

痛みあまり、その場に倒れこんでしまった。しかしすぐさま立ち上がり、出血している左方を右手で押さえる。これで両肩を負傷したことになる。

そろそろ危うくなってきたと感じ、詠唱をくりだろうかと考えていたルカリオ。まさかそう考えるタイミングをジュプトルによって作られていたとは思ってもないだろう。

数分間も“ボーンラツシュ”と“リーフブレード”による攻防を繰り返していたのは、体力を削って早く詠唱を使わそうとするジュプトルの策略だったのだ。

「 やどりぎのタネ 」

何故か、“ やどりぎのタネ ” をルカリオではなく彼の近くには  
らまくジユプトル。タネは地面に強く根を張って、小さく芽を出し  
ている状態までになった。

「 な、何をする気だ？ 」

その光景はルカリオにとって奇妙なものにしか見えなかった。攻  
撃するわけでも回復するわけでもない、このタネが何のためのもの  
か、ジユプトルはすぐに明かしてくれた。作戦の1つとして。

「 “ くさむすび ” 」

刹那、“ やどりぎのタネ ” から出ている芽が急速に伸び始めた。  
目にも止まらぬ速さで蔓状の植物になり、その蔓がルカリオの両手、  
そして口へと巻きつき始めたのだ。

「 なっ……んっ!?! 」

あっという間に、両手と口が植物によって縛られてしまった。解<sup>ほど</sup>  
こうともがくが、解ける気配が全くない。それを楽しそうな目で見  
ているのは、ジユプトルだ。

「 どうだ？ それが俺の “ 詠唱封じ ” だ 」

「 ん、んんーんん（え、詠唱封じ）？ 」

口を開けないため、言葉にならない声でルカリオが訊ねる。彼の  
滑稽な姿を見て、鼻で笑いながらジユプトルは説明を始める。

「お前と攻防を繰り返せば、必ずお互いに体力は削れる。そうなればお前は詠唱を使うだろうと踏んだ俺は、詠唱させないように口を縛っただけだ。ついでに手も縛れば……翼のない鳥同然だ」

先読みしていたジュプトルが完全優勢な状態である。怪我を負い、詠唱を封じられ、両手を縛られたルカリオの勝算はほぼゼロだろうと予期できるほどであった。

第68話 詠唱封じ（後書き）

サイクス

「ありや、ホントに死亡じゃねえの？」

バンちゃん

「なんかそんな気してきたな。しゃあねえ、何か用意すつか」

サイクス

「ドッグフードと受け皿と……あと何だ？」

バンちゃん

「服なんてどうだ？ 最近流行りの振袖のやつとか」

ルカリオ

「……犬じゃねえし第一にメスでもねーっつーの！（怒）」

大変ですな、人気者は（笑）

ちなみに、うちのジュプトル君、“くさむすび”を使うと何でも結べちゃうんですな。

第69話 不屈の心（前書き）

ヒトカゲ

「うわゝ　ラティアス、見てみてゝ！」

ラティアス

「あら、綺麗なお花がいっぱい　それに花についてるタグには『乙』って書いてあるわね。きっと良品ってことね！」

ルカリオ

「……そう思えねえのは俺だけか？（怒）」

## 第69話 不屈の心

「もう攻撃できまい。大人しく俺の攻撃を受けるがいい」

唯一ルカリオが使えるのは足だけ。攻撃できないわけではないが、この状態では返り討ちにある可能性の方が高い。今はジュプトルの攻撃から逃れる以外方法はなかった。

怒りを示すように、ルカリオはジュプトルをキツと睨みつける。しかしそれに動じるはずもなく、冷めた目でジュプトルはただじつとルカリオを見ていた。

「“エナジーボール”！」

次の瞬間、一方通行の攻撃が始まった。両手に深い青色のエネルギー弾をつくり、ルカリオに向けて放つ。このくらいならかわすことができる、余裕を持ってルカリオは避けたが、誤算が生じた。

(なっ、もう1発あったのか!?)

ルカリオが集中して見ていたのは、1発目の“エナジーボール”。実はジュプトルは2発連続で放っていたとは思わず、気づいた時にはすでに自分の近くまで迫っていた。

いつものように技で相殺させようと構えたが、手を縛られていることを忘れていた。何も出来るはずなく、無抵抗のまま“エナジーボール”をくらってしまう。

「“いわなだれ”！」

すかさず次の攻撃を仕掛けてくるジュプトル。いくつかの岩を空

中へ移動させ、ルカリオの頭上へと持つて行く。“エナジーボール”によって起こった砂埃が消えたと同時に両手を下ろすと、その岩を落とした。

大量の岩がルカリオに向かって降り注ぎ、体中に走った激痛に悲鳴を上げた。辺り一体に響き渡るほど、大きな悲鳴だ。うつ伏せのまま岩の下敷きになっている。

「リーフストーム！」

それでもジュプトルは容赦なく、攻撃の手を緩めない。一刻も早く岩から脱出したいルカリオだが、予想以上に岩が重いことに加え、“いわなだれ”の追加効果による怯んでいた。

植物の葉が渦を作りながらルカリオに突っ込んでいく。その威力は凄まじく、岩をふっ飛ばし、さらにルカリオをもふっ飛ばしてしまっただ。

互いに体力があまり残されていない状態。ましてやルカリオに至ってはジュプトルからの攻撃を受けっぱなしだ。相当なダメージを負ったに違いない。

うつ伏せになったまま動こうとしないルカリオを見て、腹を括るジュプトル。彼とて好きで殺しをしているわけではないからか、自然と手が震え始める。

「終わりだな。とどめを刺してやる」

ゆっくりとルカリオの下へと近づいていく。確実に息の根を止めるために“リーフブレード”の準備をしている。だがすぐに、溜めていたエネルギーが一瞬にして放散してしまう事態に陥った。

ジュプトルの耳にあるものが聞こえてきたのだ。それは彼が1番

恐れていて、今までやってきたことが崩れ去るほど、聞きたくないものでもあった。

【……無辺、時に切り立ち大地よ……】

紛れもなく、それはルカリオ固有の混沌語カオス・ワーズであった。これが耳に入った瞬間、ジュプトルは後退してしまうほど驚愕した。その間にも、詠唱は続けられる。

【静寂、時に荒々たる海原よ　そこから得ん万物が持ちし躍動よ  
我が命に従いて　我が手に集いて力となれ】

ジュプトルが驚いている間にも、ゆっくりとルカリオはその場で立ち上がり、詠唱を終える。そして口元はというと、きつく縛られていたはずの蔓がすっかりなくなっていた。

「ば、馬鹿な！　蔓を解いただと！？　一体どうやって……！？」

頭の中が混乱状態にあるジュプトルに対し、ルカリオは傷の痛み  
に若干辛そうにしているものの、状況が変わったことに笑みを浮かべていた。

「へっ、残念だったな。こんなもの、縄抜けの手品とおなじなんだよ！」

それは至って簡単な方法だ。ルカリオが行ったのは、口が縛られ



るとわかった瞬間に口を半開きにして、そのまま縛られただけである。そして口を閉めることで若干の隙間が出来、蔓を解くことができるのだ。

すぐに蔓を解けなかったのは、ジュプトルを油断させる必要があったからだ。そのため自分の体力をギリギリまで削ってでも、蔓を解くタイミングを窺っていたのだ。

「き、貴様あゝ！」

「思わぬ誤算だったな、ジュプトル。だがお前の誤算はもう一つあるんだぜ」

悔しさのあまり齒軋はきりするジュプトルを見ながら、葉で手を縛っていた蔓を引きちぎり、両手も自由になったルカリオはジュプトルの犯したもう一つの誤算について語り始めた。

「お前が俺にダメージを与えるつもりでやった“いわなだれ”。この技の追加効果が相手を一定の確率で怯ませることだって知ってるよな？」

「それが何……ま、まさかお前!？」

ある事実気づいたジュプトルは驚きのあまり目を大きく見開いた。この瞬間を待ってましたと言わんばかりの表情でルカリオはこう言い放った。

「そつだ。俺の特性はな、俺の座右の銘でもある『ふくつのこころ』なんだよ！」

不屈の心　それは技を受けて怯むと、自分自身の素早さが上がるといふ特性だ。もともと素早さの面で言えばジュプトルはルカリオより少し素早いだけなので、今のルカリオはジュプトルより素早

く動けるのだ。

「そんなじゃ、今度は俺がお前をボコる番だな。容赦しねえからな！」  
「ち、調子乗りやがって！」

完全に形勢逆転の状況に変わってしまった。しかしながら、ルカリオも体力が有り余っているわけではない。時間との勝負になると自覚していた。

「あくのはどう?!」

「エナジーボール!」

黒と青のエネルギー弾が互いの手から放たれる。だが青、つまり“エナジーボール”はそのまま“あくのはどう”に飲み込まれていった。それは運よくジュプトルの軌道から逸れ、余裕が生まれた。

「リーフブレード!」

その余裕を利用し、一気に攻めに出るジュプトル。距離を縮めてルカリオに斬りかかるが、素早くなったルカリオは容易くかわす。それどころか、ルカリオは振りかざされた右腕を思い切り掴んだ。

「なっ!?!」

「いつくぜー! “インファイト”!」

がら空きになっている部分を狙い、ルカリオは右手の拳に意識を集中させ、“インファイト”を放った。威力抜群のパンチに耐えられるはずもなく、ジュプトルの体は軽々と宙へ投げ飛ばされる。

ジュプトルの位置を確認しながら、ルカリオは最後の1発を放つ準備をしていた。両手で青白い“波導”を集め、球状にしてその大

きさを徐々に大きくしていった。

「『波導は、我にあり』なんだよ。“はどうだん”！」

ルカリオの十八番、とも言うべき技“はどうだん”が放たれた。狙い通り、宙を舞っているジュプトルに命中する。それを確認し、ルカリオはガッツポーズをとる。

遠くへ飛ばされたジュプトルは力なくそのまま地面に落下する。呻り声うなを上げているが、もう体を動かすことができない状態になっていた。そこへ、ゆっくりとした足取りでルカリオが近づいていく。

「俺の勝ちだな、ジュプトル……？」

悔し顔を拝もうとルカリオが覗き込むと、ジュプトルの意外な表情に思わず困惑してしまった。この時ジュプトルは、ツメで土を掻きつつ、目から大粒の涙を流していたのだ。

「……………くそっ、ここまでだというのか……………！」

確かに悔しそうにしているものの、目に涙を浮かべているということを見ると、相当ルカリオに負けたことが悔しいのだろう。地面を拳で叩きつけている。

「そんなに俺を殺したかったのか？」

今の様子からして、かける言葉がこれくらいしか思い浮かばなかったルカリオ。ジュプトルに同情しているわけではないが、今がこれを聞くいい機会だろうとのことだ。この問に対し、ジュプトルは怒号で答える。

「ああそうとも！ お前を殺して、お前の父親に一生残る傷をつかさせるつもりだった！」

「……俺の親父に、一生残る傷を？」

この言葉で、ジュプトルが父親のライナスに恨みを抱いていると確信をもつことができた。問題は、その理由だ。一見してルカリオと同じくらいの若さでありながら、20年前に消息を絶っているライナスに何の恨みがあるというのだろうか。

「お前だけじゃない！ ライナスに関わりのあつた探検隊のメンバーも同じだ！」

全てはライナスを絶望の淵に追いやるため、そのような意図があるように聞き取れる。命を奪うまでジュプトルを駆り立てた原因を、ついにルカリオは訊ねた。

「な、何で……何で俺の親父にそんなに恨みがあるんだよ？」

その場にしゃがみこみ、視線を低くしたルカリオ。依然として涙が止まらないジュプトルもルカリオの方を見上げる。そして小さい声で、ジュプトルはこう言った。

「……20年前、俺は見たんだ……」

「見た？ 俺の親父をか？」

その言葉を聞くや否や、再びジュプトルの目つきが鋭いものへと変わった。同時に、怒りが最高潮へと達したかのごとく大声で、ルカリオにとって衝撃となることを言い放った。

「そうだ！ そしてライナスのせいで……俺の故郷、グロバイルが

……壊滅したんだよ！」

## 第69話 不屈の心（後書き）

ルカリオ

「さっ、勝ったぜ？ 死亡フラグ立てた奴、どうしてくれんだ？」

別にどうもしないでしょう。兄貴が負けてがっかりする方の声が多いはずだし（笑）

ルカリオ

「はっ？（怒）」

というわけで、次回、20年前に何があつたかを明かしましょう。

第70話 悲しい結末（前書き）

遅くなってしまいましたね、すみません（汗）

ヒトカゲ

「ブラックやってたから？」

ルカリオ

「友人にもらったPSS2やってたからか？」

ラティース

「また頻繁に飲みに行っていたりとか？」

ジュプトル

「睡眠時間も多かったそうだな」

……全部です、はい（泣）

## 第70話 悲しい結末

「親父のせいでグローバルが壊滅しただと!？」

ジュプトルの口から語られた、思いもよらぬ理由だった。それはルカリオの推測からは大きく外れるものであった。信じる事が出来ず、ルカリオは自分の推測が正しいかどうか、今一度訊ねようとする。

近くに置いていた自分のカバンを掴み、その中からあるものを取り出す。中で絶えず色が交じり合っているかのように輝いている水晶のようなもの。ライナスから預かったお守りだ。

「なあ、答えてくれ。俺の親父がこれを盗っていったから、お前は恨んでいたんじゃないのか？」

そう考えたのは、最後にジュプトルと対峙した時の出来事に起因する。この時、明らかにジュプトルはルカリオが首にかけようとしていたこのお守りを奪おうとしていた。

それに加え、カイリユーから聞いたグローバルの話に出てきた、トロピウスが祀っていた「おきもの」。それこそが自分の持っているこのお守りなのではないかとルカリオは推測したのだ。

このお守りをライナスが盗み、逆に村の形見とも言うべきものを奪われたジュプトルが憤慨し、ずっとライナスのことを恨み、追いかけていたのだろう、そう考えていた。

それを確かめるべく、このお守りを手に取り、ジュプトルに見せる。するとどうだろうか、目の色が確実に変わり、大きく開いてそのお守りを見ていた。

「……そうだ、だからグローバルが滅んだのだ!」



強い調子でジュプトルは言い放った。この言い方だと、ルカリオの推測とは少し違うもののようにだ。固まってしまったルカリオに対し、ジュプトルの方から声をかけた。

「……いいだろう、お前に話してやる。俺が見てきたものをな……」

今から20年前の話。グローバルでは数十匹のポケモン達が生活を営んでいた。いくつかある集落の1つに、ジュプトル 当時のキモリがいた。まだまだ幼い年である。

「おとーさん、おそといつちゃだめ？」

キモリが自分の父親に甘えた声で言う。父親であるジュカインのガランドは尻尾を引っ張られ、少しくすぐったそうにしている。

「だめだ。完全に風邪が治ってないだろう。それに、外はあいにくの雨だ」

家の中から外を見ると、弱いが雨が降っていた。病み上がりの子供が遊ぶには最悪のコンディションである。家で大人しくしているように言い聞かせる。

「じゃあ、いつからおそとでいいの？」

「そうだなあ、次に晴れたときだな。でもあまり長い時間はだめだからな」

この年頃だと、「何でもだめって言うからやだ」と思い始める。

キモリも例外ではなかったが、いつも優しくしてくれる父親の言うことだからと、だだをこねることはなかった。

その日の深夜、胸苦しさを感じてキモリは目覚めると同時に違和感を覚えたようだ。何かに導かれるかのように窓へ向かい、外を見ると、半月が出ていた。

「あつ、はれた」

雲は切れ、雨が上がっている。それだけで興奮を覚え、目もすっかり覚めてしまった。数日間ずっと家にこもりつ放しであったこともあり、欲が抑えきれず、キモリは外に出てしまう。

夜ならではの涼しげな風、雨上がり後の冴え渡る空気、それが最高に気持ちよいようだ。大きく息を吸った後、家の周りを走り回る。体も軽く感じている。

「……………あれ？」

そんな時だ。深夜にも関わらず、自分以外の誰かがいるような気配を感じ取った。その気配のする方へと歩き始め、家からどんどん離れていく。

気づいた時には、キモリは村の中心に来ていた。建物の陰に隠れてその気配がする方を見ると、そこにあっただのは、トロピウス村長がグローバルを開墾していた際に手に入れた、「おきもの」が祀られている建物だ。

この「おきもの」は、この時すでにトロピウスによって、「これはホウオウ様の御慈悲により、この村のために置いていったもの」と民に伝えられていた、立派な宝玉だ。

その中から、自分より大きな影が1つ飛び出したのをしっかりと見

た。暗すぎて顔こそはつきり見えなかったものの、月明かりで照らされた部分ははつきりと確認した。右胸にある赤い稲妻印と、刺のある青と黒の右手。

「だれだろう……」

キモリはじつとその影を目で追っていった。素早く、音を立てずに走り去っていったその影が見えなくなってからほんの数分後、場の空気が一変する。

突如としてグローバル上空にのみ黒い雲が発生し、生温い風が一帯を包む。キモリは子供ながらに何かが起こると予感した。それが的中したと理解するまでに時間はかからなかった。

キモリの後方から、大きな爆発音が聞こえた。さらに爆発による振動がキモリにも伝わってきた。突然揺れだした地面に驚いて、その場で身を縮こませる。

「こわいよ、は、はやくかえろ！」

一目散に家へ向かって駆け出すキモリ。怖さのあまり目を瞑っていたが、再び起きた爆発により目を開けた。すると、衝撃的な光景が繰り広げられていた。

「な、なにあれ!？」

キモリが見たのは、雲から地面に向かって、黒い大きなエネルギー波のようなものが降り注いでいる光景だった。しかも1度だけではない。数秒に1回のペースでそれは出されていた。

その黒いエネルギー波は地面や民家に激突し、次々と破壊している。木々にぶつかった際には火災まで発生している、まさに悪夢としか言いようのない大惨事だ。

とにかく家に帰ろう、お父さんの傍にいれば安全だ。キモリはそれだけを思うようにして再び走り出した。父親のいる自分の家へ向かって。

この緊急事態に村全体が混乱していた。もちろんガランドも例外ではない。さらに彼に至っては、息子であるキモリがいつの間にかいなくなっていることに激しく動揺していた。

「キモリーっ！ どこだーっ！」

必死に走り、物陰などを必死に捜す。どこかで怪我でもしているのか、はたまた誘拐されたのか、愛しい我が子がいないことに焦りは募るばかりである。

この時、ガランドは気づいていなかった。自分の頭上で、倒壊寸前の建物の屋根が今まさに落ちかけていようとは。

それから数分後、キモリはようやく家付近までやって来た。だが家が見つからない。自分の思い出せる限りで帰り道を進んで辿り着いたのは、自分の家、ではなく、自分の家があった場所だった。

「お、おうちが！」

先程まであった家が完全に倒壊していた。それと同時に、家族唯一の父親がいないことに気づいた。自分の周りをぐるっと見回るが、姿はない。

「おとーさん！ どこー!？」

キモリは無我夢中で父親を捜し始める。ひたすら叫ぶ。その途中、たくさんの倒れているポケモン達を目にする。この時はわからなかったが、彼らは既に息絶えていた者達だ。

だんだん怖くなり、走るスピードも自然と上がる。今にも泣きそうである。そのせいで視界がぼやけて転んでしまいが、転んだその場所の目の前に、捜していた父親の苦しそうな顔があった。

「おとーさん！」

「……キ、キモリか」

ガラントに抱きつこうとするキモリだが、よく見るとガラントが瓦礫に埋もれている。それだけでなく、明らかに赤い色が辺りに見えている。

必死に瓦礫から引きずり出そうとするが、子供の力ではどうにもできない。それだけならまだしも、ガラントはその場から抜け出そうとしない。この時すでに死期を悟っていたのだ。

「……キモリ、頼みがある」

今なら、この子だけなら助けてあげることができるかもしれない。何としてでもキモリだけをこの場から離れさせるべく、ガラントは大嘘をついた。

「隣町に行つて……父さんに、リンゴを持ってきてくれ」

「リンゴ？」

「そうだ。それを食べると父さんは元気になれる。さっ、早く……」

何回もキモリに「大丈夫だ」と言つて安心させ、隣町へと行かせようとする。子供であるため、それが自分を危険から護ろうとしてくれている嘘だとはわからずに、父親の言うことだからと信じた。

「う、うん。行ってくる！」

「それが、最後に交わした言葉だ」

20年前の真相を、ジュプトルが全て語った。誰にも知られることのなかった、グロバイルの歴史。それを知ったルカリオの心境はとても複雑なものであったに違いない。

「じゃ、じゃあやっぱり、俺の親父が……」

今の話を聞く分には、ライナスが宝玉を奪い去ったため、祟りが起きたという解釈ができる。だがそれを信じられずにいるルカリオ。自分の父親がそんな事をしたと思えないのが当然だろう。

「な、なあ、嘘だろ？俺の親父がそんな事するはず……」

話の内容を受け入れることができず、必死に否定し始めるルカリオに対し、怒りながら犯人はライナスだと言い張るジュプトル。言い合いになったところで、事実が変わらない。

頭の中では、ジュプトルに嘘偽りはないことはわかっている。だがライナスが、父親が、村を滅ぼすきっかけを作ってしまったと思いたくないと、自分に言い聞かせているのだ。

頼む、嘘だと言ってくれ。否定し続けるルカリオの思考が止まったのは、突如として聞こえてきた、ジュプトル以外の声による、この言葉によってだ。

「いいや、嘘ではない。事実だ」

2人は声のする方に目をやると、そこにいたのはライボルトだった。そしてその横にはヒトカゲとラティアス。どうやらたった今ここに着いたようだ。

ジュプトルはライボルトがいることに、ルカリオはライボルトが言ったことに驚いている。今の会話を聞いていたライボルトは、ルカリオを目覚めさせるような一言を告げた。

「この村の宝玉を取っていったのは、間違いなくライナスだ」

## 第70話 悲しい結末（後書き）

ジユプトルのお父さんの名前であるガランドは、ライフル（銃）の名前からとりました。“タネマシガン”とか得意そうかな〜という妄想で。

ヒトカゲ

「そうなんだ〜。それよりもさ、ライボルトの言ったことの方が…」

ライナスが宝玉取ってったってことね。詳しい内容は次回になります。



第71話 手紙（前書き）

善か、悪か。

生か、死か。

白か、黒か。

今まで謎に包まれていたライナスの意志が、今、解き明かされる。

……という、BWを意識したコールを書いてみました（笑）  
それでは、本編をどうぞ。

## 第71話 手紙

宝玉を取っていったのは、間違いなくライナスである。その言葉がルカリオにどれほど衝撃を与えたかは計り知れない。それはすなわち、ライナスが村を壊滅へと誘ったことを意味するからだ。

だが、何故ライボルトがその事実を知っているのだろうか。もしかしてライボルトも加担していたのかと不安になったヒトカゲが、何も言えなくなっている2人に代わって訊ねる。

「なんで、そんな事知ってるの？ ライナスが取っていったなんて」

隣のラティアスも心配そうに見つめている。何を語るのだろうか、何がわかるのだろうか、不安が膨らんでいくのを感じながら、返答を待っている。

記憶を辿るように、ライボルトは瞳を閉じている。無言の状態がしばらく続き、今まで止んでいた風が吹き始めると同時に目を開け、口を開いた。

「グローバルが壊滅する前夜、ライナスが私のところに来たのだ」

今から20年前、グローバルが壊滅する前の日の夜、ライボルトの自宅に突然ライナスが顔を出した。いつものように依頼を持ってきたのかと思っていたが、様子がいつもと違うことに気づく。

「話がある。中へ入れさせてくれ」

彼の表情を一言で表すなら、「真」。確かにいつも真剣に依頼をこなしたりチームをまとめたりしているが、今回はそれを超越しているのが感じ取れた。ライボルトはそれを察し、中へと入れる。

「話とは何だ？」

すっかり暗くなった家の中で、密談するか如く距離を近づける2人。周りを見て誰も隠れていないかなどを確認すると、ライナスは2通の手紙を取り出し、ライボルトへと差し出した。

「今から、私は行かなければならないところがある」

「行かなければならないところ？」

ライナスが遠まわしに言う理由がわからなかった。いつものように目的地の名前をはっきり言うことをしないでだけでライボルトは違和感を覚えた。明らかにいつものライナスではないと。

「そつだ。自分がすべき事をしなくてはならないのだ。自分が生まれてきた理由がそつであるがために」

この言葉の意味を、理解することができなかった。そして未だに理解できていない。そんな意味深の発言を受け、ライボルトは返答に困ってしまう。

「そのため、私はこれからグローバルへと向かう。1人でな」

「えっ？」

単独行動などありえないと驚いているライボルトを見ながら、ラ

イナスは先程置いた手紙を再び手に取り、ライボルトに見せる。

「頼みがある。この手紙、1週間預かってくれ」

それは、しっかりと封がされてある、青色と緑色の封筒だ。誰かに渡してほしいというわけではなく、預かってほしいとのこと。ライナスは続けてこう伝えた。

「もし、1週間以内に私が戻ってきたら、それを返してくれ。万が一1週間以上過ぎてしまった場合は、死ぬまで預かってほしい。そして、私の息子とグロバイルの村のポケモンが2人でやって来たら、それぞれに渡してくれ」

まるで遺書を思わすような言い方であった。これでライボルトは確信した。ライナスは、命を懸けた何かをしようとしているということ。

わざわざ自分のところに訪ねて言ったのだから、自分を1番に信頼してくれているだかだだろうと信じ、黙って頷いてライナスの頼みを受け入れた。

「わかった。これを預かるう」

「恩に着る。頼んだぞ」

それだけ言うと、ライナスはライボルトの家を後にした。これがライボルトが見た、最期のライナスの姿であった。背中が妙に大きく見えたようだ。

「それから20年、私は未だにライナスに会っていない」

今までの経緯を簡単に語ってきたが、ライボルトも辛くないはずがない。まだライナスが戻ってきていないことが何を意味するかを考えると、今にも涙が出てきそうになる。

「親父、一体何したんだ……？」

問題はそこだ。ライナスがグローバルに向かい、宝玉を取った理由が謎のままだ。ライボルト自身も推測しか立てていない。だが、それを知る術は残っている。

「ルカリオ、そしてジュプトル。これを読め」

ライボルトが差し出したのは、青色の封筒と緑色の封筒。それはまさしくライナスから預かっている手紙である。約束の期間を過ぎ、かつライナスの息子とグローバルの民が同時にいる。条件は揃っていた。

ルカリオとジュプトルはライボルトから手紙を受け取り、それぞれ封を開ける。ルカリオは緊張しながら、ジュプトルはまだ冷めぬ怒りを覚えたまま手紙を読み始める。

そこには、全てが書かれていた。この場にいる全員が知っておくべき内容が詰まっている。ルカリオの手紙にはこう書かれていた。

【愛する我が息子へ】

おそらく、この手紙を読んでいるということは、お前は立派に成長してルカリオになっているだろう。そして父さんのことを捜して

くれているのだと思う。だがそれは同時に、父さんがこの世にいないことを意味することになる。辛いかもしれないが、許してくれ。

記憶にあるかどうか知らないが、お前が小さい時に父さんはお守りを渡した。それは今隣にいるであろうグロバイルの村人のものだ。返してやってくれ。

それは、父さんがグロバイルの村にある脅威から護るために取ったものだ。脅威はそれを壊そうと狙っていた。だが上手くいかなかったのだな。村もきつと大きな痛手を負っているに違いない。手助けをしてほしいと思う。探検家に憧れているお前なら、きつとやってくれるはず。

本当なら、今のお前をこの目で見たかった。それが叶わなかったのは非常に残念だ。それだけじゃない。お前と遊んだり、学んだり、笑ったり……もつと一緒に過ごしたかった。だがこれが運命というものだ。運命には従うしかない。

最後に、これだけは話しておこうと思う。それは父さんの夢だ。父さんの夢はな、有名になることでも強くなることでもない。探検家をやめることだ。決して嫌になってやめたいという意味ではなく、世界中の謎を解明し終わり、世界が平和になり、誰も困り事や悩み事がなくなるようにしたいという意味だ。

本当に、悔しい。不甲斐ない父さんでごめんな。お前が胸を張って誇れる父親になりたかった。

手紙の内容はこれで全部である。全部に目を通した時には、ルカリオは震えていた。目からは大粒の涙が零れ落ち、ぼたぼたと手紙に当たっている。声を詰まらせてむせび泣いていた。

「…………お、親父…………」

意外な形で知ることになった父親の死の事実は、あまりにも深い悲しみをルカリオに与えてしまった。手紙に書かれている一言一言が沁みている。

その間にも、もう一方の手紙をジュプトルは読み進めていた。彼に渡された手紙の内容もまた、全員が知るべき内容が書かれていた。

### 【グローバルの民へ】

このような形で報告することになり、また、村を完全に護りきれなくて、多大な被害を被つたに違いない。心から詫びたい。

謝っても許されることではないと十分にわかっている。だが、私は村長のトロピウスとの合意の上で、村の宝玉を持ち出したのだ。これを破壊し、壊滅へと導こうとする脅威からグローバルを救うために。それだけは理解してほしい。

とはいえ、結果的には護りきれなかった。ただの泥棒、いや、村を滅ぼしたポケモンだと思われても仕方ない。私がしたことがそんなのだから。

償いをしたくても、既に私の命はない。だからといって怒りの矛先を他の者に向けることだけはやめてほしい。悪いのは全て私だ。罪なき者に痛みを与えないでくれ。

今、貴方の横にいるのは私の息子だ。彼は私がグローバルで行った事を何一つ知らずに育ってきたはずだ。だから私の息子という目で見ずに1人のポケモンとして、グローバル復興の手伝いをさせて

やってほしいと思う。

それから、私が持ち出した宝玉は、息子に託してある。おそらく大切にしてあるはずだから、返してもらってくれるだろうか。そしてそれを再び祀れば、村長も喜ぶことだと思う。

本当に申し訳のないことをした。どうか、怒りを鎮めてもらいたい。

ジュプトルは愕然とする他なかった。今の今まで、自分がとてつもなく大きな勘違いをし、そのせいで、復讐という名目で少なからず命を奪っていったのだから。

力が抜けたようにひたひたに跪き、地面に手をついた。嘘だと信じたいと心の中で言うが、この手紙が偽りでないことは読めば理解できる。ようやく、自分が間違えていたことに気づかされたのだ。

「……俺は、一体何のために……何のためにこんなことをしてきたんだ！」

自然と目から流れ落ちる涙が感じられないほど、ルカリオと同じく身を震わせ、自分自身を嘆いていた。今までの半生が全く無意味なものであったと言わんばかりに。

ヒトカゲ、ラティアス、そしてライボルトも、2人の手紙の中身を読まずとも、その様子からおおよそのことを理解できた。2人の気持ちを察すると、声すらかけれない。

ルカリオ、そしてジュプトル。先程まで相反する存在であったが、今は違う。ライナスという寛大で勇気のある、思いやりのある存在によって繋がりを持っているのだ。



第71話 手紙（後書き）

ルカリオ

「ほら、やっぱり親父はいい奴だったじゃないか」

どうしてその息子がこうなってしまったのか……。

ルカリオ

「ん？（怒）」

全てはグローバルを護るため、そのためにライナスはたった1人で戦った。自分を犠牲にして。

アーマルド

「このくらいカッコよかったら、俺も助かってたのにな」

ルカリオ

「てめえが俺を刺して落ち……って、なんでいるの！？（汗）」

アーマルド

「後書きだから」

ルカリオ

「……………（これっていいのか？ 汗）」

## 第72話 憎しみと幸せ（前書き）

ストック使って投稿しました。

……本当はあまり筆が進んでいないのですが、どうしてもこのジュ  
プトル編（今回で終わりです）が中途半端なまま投稿遅れるのも嫌  
だな、ということ、投稿しちゃいました（笑）

その次からはストックを作るので今回より期間が空いてしまいます  
が、許してくださいね。

ヒトカゲ

「はやく僕中心のお話にもどしてほしいなー」

頑張るから待っててね（汗）

ところで今回のお話、いくつか名言を入れましたが……全部ルカリ  
オが言ってるのであんまり良さが伝わらないかもです。

ルカリオ

「どつという意味だ（怒）」

## 第72話 憎しみと幸せ

2人の涙が止まると、ライボルトがそつと近くに寄ってきた。足音でライボルトの存在に気づき、2人は顔を上げて視線を合わせる。

「何が書いてあったかは私は知らない。だが察するに、ライナスがグロバイルを崩壊させたわけではなさそうだな」

これに対して特に返事をするわけでもなく、2人は黙っていた。まだ立ち直っていないことくらいはわかっているようで、ライボルトも返事を促そうとはしなかった。

「さて、お前達にはまだ問題がある」

言葉が耳に届き、2人の目の色が変わる。大体の察しはついているせいか、ルカリオとジュプトル、互いに顔を合わせようとすももちろん、無言のままです。

「『これから』だ。これからどうするか、決めねばならない」

これから その言葉はルカリオとジュプトルに深く突き刺さるものであった。今、2人の今後を決める、極めて重要な時がやってきたのだ。

ルカリオからしてみれば、死ぬ気で立ち向かったことを考えると今後も何もなかった。自分の旅の目的も父親の死を持ってこれで終わることを含めるとなおさらだ。

一方のジュプトルも、事実を知ったことにより復讐が幕を閉じた。この20年間、復讐のためだけに生きてきたようなもの、『これから』に何も見出せずにいるのは当然である。

「これから……だと？」

先に口を開いたのはジユプトルだ。その口調は誰の耳にも、刺のある言い方にしか聞こえないものであった。鼻で笑うと、再び一気に脱力したかのような、弱い声に戻る。

「全く無意味な半生を送ってきた俺に、この先に何かあると言うんだ？ 今の俺にあるのは、罪なき者を殺したという事実だけだ」

それは、絶望を意味しているように聞き取れる。ずっと命を狙われていた立場だからこそ、ルカリオにはその言葉の意味が理解できた。今思い出しても、あの時の狂気に満ちていた顔を思い浮かべると、今の心情は想像に難くない。

もちろん、それを見てきたヒトカゲとラテイアスも同じだ。複雑な表情をしながら、2人を見ている。声はまだかけることができていない。

ようやく声をかけることができそうになった時、いきなりジユプトルは地面に向かって仰向けに倒れ込む。少し消えかかっている月を見ながら、咳き始めた。

「……この手紙を真実と受け止めた以上、俺に生きる意味はない。グロバイル復興も俺だけなら雲を掴むより難しい。生きていたところ……何もできん」

その咳きは冷えた空気と一緒に他の者達のところへと流れていった。危険な匂いを感じ取り、近づくに近づけない状態の中、ジユプトルはルカリオに目を合わせ、こう言った。

「ルカリオ、この場で俺の首を掻き切ってくれ」

「な、何だつて!?!」

もうこの時、いや、それよりずっと前からジュプトルの心は決まっていた。自分のすべき事がなくなったら、この地の土に還ろうと。当初の予定とは違っているが、今がその時だと思っっているようだ。

復讐するためにポケモンを殺したということもあるが、大きな要因はそれではない。まだ誰にも話していない、別の要因があるのだ。とても大きな、想いが。

「どうせ裁きを受けなければならん。命を奪った者が生きることをお願い願うなんておかしな話だ。俺の死を持って、全てに終止符を打つつもりだ……早く殺してくれ」

ジュプトルは目を閉じ、覚悟を決めた。攻撃の意志も一切見られず、完全に無防備である。そんな彼のもとへ、ルカリオがゆっくりと近づいていった。

ルカリオにはジュプトルを殺すつもりなど一切ない。だがその顔つきはどう見ても怒っているようで、ヒトカゲ達は別の不安を覚えた。何かするのではないかと。

そしてジュプトルの傍まで行くと、ルカリオは彼の顔をじっと見た。無表情の顔をしばらく見続けた後、強い調子で彼に向かって言い放った。

「また逃げんのか?」

逃げるのか。どこかひっかかる言葉だ。このように感じたジュプトルはそっと閉じていた目を開けた。真剣な表情のルカリオが目に飛び込んできた。

「今までは勝負に負けそうになって逃げた。それで今回は変えられない現実を不幸に思い、逃げ出そうとしてる……違うか？」

はつきり言ってしまうえば凶星である。自ら命を絶とうとする、これが逃げることに等しいことはわかっているが、そのわかりきったような言い方が癪に障りおもわず反論してしまう。

「逃げるだと？ 俺の役目が終わったただけの話だ。逃げるわけじゃない」

「いいや、逃げてるな。無理とか言っただけに言い訳して、何もしてねーだろ」

言葉を遮ってまでルカリオはジュプトルを否定する。決して逆上させたいわけではなく、考えを改めてほしいという思いがルカリオにはあるのだ。

「この20年、相当な覚悟で復讐を遂げようとしてきたはずだ。逆を言えば、お前の家族に対する愛情がそれほど強かったってことじゃないか？」

刹那、ジュプトルが固まった。何のために復讐を成し遂げようとしてきたか。その問いに対する明確な答えがわかった瞬間である。全てを辿れば、亡き父親を想ったことだと。

1人になってからずっと想い続けていたのは、もちろん父親のことだ。死ぬ間際に見せてくれた笑顔を何度も頭の中に蘇らせながら、ライナスへの復讐を固く誓ったのだ。

「……………」

ジュプトルは完全に言葉を失っていた。反論できなくなったというところもあるが、言葉より先に出てきたガラントとの記憶で頭がいっぱいになってしまったからだ。

懐かしく、愛おしく、そして悔しく 複雑に絡まった感情は一粒の涙となって目から流れ落ちる。ゆっくりと、歪んだ線を描きながら頬を伝って。

「それだけの愛情があれば、できるはずだぜ。グローバルを復興させることも」

感情を波導で感じ取ったルカリオは励ますように語り掛ける。ルカリオが見たジュプトルの波導は、白色、それはすなわち『浄化』を意味する色だった。

「……だが、言ったはずだ。俺の力では難しいと」

それでも、ジュプトルにはまだためらいがあった。一人でグローバルを立て直すほどの力は持っていないと自覚しているため、無理ならいつそ親と一緒にいたい、まだそう思っている。

これを受けて、ルカリオが1つ、大きなため息をつく。やれやれといった表情でジュプトルに向けて言った言葉は、誰もが驚くような言葉であった。

「誰が1人でやれって言った。俺もいるだろ」

「……えっ？」

一瞬、誰もが自分の耳を疑った。その言葉はまさしく、ルカリオがジュプトルの事を許したものであった。当の本人は気恥ずかしかったのか、顔が赤らんでいる。

「お、お前……俺のこと、許してくれるのか？」  
「……ああ、許してやるよ」

ぶっきらぼうに、だが想いを込めてルカリオは「許してやる」と口にした。あれだけ窮地に立たされたのにも関わらずそう簡単に許すとは考え難いと、その場にいた全員が思う。

彼は一体どう思っているのか、本心は何なのか、真っ先に訊きたくなったジュプトルが立ち上がり、まるでからかわれたことを怒るかのような口調で質問をぶつけた。

「う、嘘言つな！ 俺の心を弄もてめそびやがって！ お前を殺そうとした奴を簡単に許せるはずがないだろ！」

普通なら、その通りである。殺されかけた者が易々と加害者を許すとはあり得ないと言い切ってもおかしくない。それを打ち破るような発言をしたルカリオはジュプトルの言葉に対して、こう述べた。

「俺とお前のためだよ」

何を意味しているかわからない。これがジュプトルを始め、ヒトカゲ達も最初に思ったことだ。問いかける前に、ルカリオが続けて話し始める。

「はつきり言つて、お前のこと憎いぜ。殺したくなるくらいな。だけれどな、憎い奴の事を許さない限り、俺が幸せになることなんかねーんだよ」

「幸せ……？」

「そうだ。誰かを憎む気持ちはな、そいつをさらに不幸にするだけだ。幸せってのはな、そういう気持ちを取っ払うと降って来るんだぜ」



憎しみからは何も生まれぬ。かえって心を蝕み、その者を荒れ  
されていくだけである。憎しみを捨て、そこから新しく見えてくる  
ものを頼りに、幸せを掴むのだ。ルカリオの言葉にはこのような意  
味が込められていたのだ。

いがみ合うことが愚かであること、そしてルカリオが持つ優しさ  
がようやくジュプトルの心に通じたようで、再び咽び泣きはじめた。  
自分の悪い部分を全て洗い流すかのように。

「さて、これからどうするか、だったな」

ジュプトルの涙が止まった頃に、ルカリオがぼつりと言った。話  
し合いでもするつもりなのか、ヒトカゲとラティアスを手招きして  
呼び寄せる。

「あのさ、ヒトカゲ、ラティアス……いいよな？」

何かをためらっているような言い方で2人に訊くルカリオ。彼が  
言いたい事はお見通しだったのか、ヒトカゲとラティアスは顔を合  
わせて笑みを浮かべると、ルカリオに対して首を縦に振った。

それを確認すると、まだじつと地面を見つめていたジュプトルに、  
そつと手を差し伸べた。ジュプトルがそれに気づくと、ゆっくりと  
顔を上げてルカリオと目を合わせる。

「俺達、実はホウオウ捜してる旅の最中なんだけどよ、その……な  
んつーか……来るか？」

今まで生きてきた中で、これほど優しくしてくれる奴がいただろ

うか。ジュプトルはそう思うとまた涙が出そうになるが、ぐっと堪え、いつものポーカーフェイスを保って右手を差し出した。

「……そうさせてもらう。グローバル復興のため、協力してくれ」  
「ああ、もちろん」

こうして、つい先程まで敵であったジュプトルが、旅の仲間に加わった。2人が握手を交わす頃には、既に朝日が地平線から顔を出していた。

互いに、この日を絶対に忘れまいと誓う。今日という日が一生の中でどれほど重要な日であったかを胸に刻んで生きていくことが、自分達の父親に対する孝行と確信して。

## 第72話 憎しみと幸せ（後書き）

というわけで、最後のメンバーはジュプトルです！  
はい、挨拶してちょうだいな。

ジュプトル

「断る。挨拶などできるか」

あら、まだオープンじゃないのね（汗）

これを期に、またTOPのイラストを変えました。いい加減バンちゃん飽きましたよね（笑）

バンちゃん

「苛立たしいなその言い方（怒）」

さて、仲間が全員揃ったところで、もっかいだけ投票やろうかな？  
なんて考えてます。詳細はそのうち攻略集にて。

### 第73話 旅、再開（前書き）

「旅、再開」となってますが、実は1歩も前へ進みません（笑）

ヒトカゲ

「だったらサブタイ変えようよ（汗）」

バンちゃん

「ところで、前話してた投票は？ やんのか？」

それは後書きにて。その前に本編いきましょー！。

### 第73話 旅、再開

朝、それは本来1日の活動を始める時間帯である。その時間まで起きていたヒトカゲ達全員は安心したこともあり、強烈な睡魔に襲われていた。

「う、うちに来なさい。寝ないとみんなぶっ倒れるぞ……」  
『は、はい……』

家に案内しているライボルトの足もふらついている。そしてヒトカゲ達も彼に必死について行こうとしている。まだ比較的しっかりしているのは、ジユプトルただ1人だった。

昼、それは本来1日の活動真つ盛りの時間帯である。その時間まで寝ていたヒトカゲ達全員は1度起き上がるものの、特にルカリオとジユプトルが疲労困憊といった表情をしていたため、再び眠りについた。

「食事を用意してやつ……」

しばらくしてライボルトがヒトカゲ達のいる部屋に顔を出すと、腕組みして寝ているジユプトルを除く3人はだらしなない格好で寝ていた。相当疲れていることが窺える。

「つたく、これだから若い奴は……と言いたいところだが、あれだけのことをしたんだ、疲れるに決まってるな」

このライボルト、典型的な堅物で、自分と一世代以上離れたのは

もちろん、同年代のポケモンの冗談さえ笑うことはない。もしルカリオがこれを知ったら、「なんでこいつが親父と1番仲がよかったんだ？」というに違いない。

結局ライボルトは誰も起こさずに、1人で全員分の食事を食べるはめになった。途中から吐き気を催しはじめたのは言うまでもない。

夕方、それは本来1日の活動が終わる時間帯である。いつまで経つても起きる気配のないヒトカゲ達に、いい加減呆れていたライボルトは叩き起こそうと決心する。

だがそんな時、玄関の扉をノックする音が聞こえた。珍しく来客が来たようだ。バリバリと音を立てて電気を充電させていたライボルトは一旦充電を止め、玄関へと向かう。

「はい、どちら様ですか？」

その声が耳に入ったのか、今の今まで寝ていたヒトカゲがようやく目を覚ました。藁のベッドから転げ落ち、目を擦りながらライボルトのいる方へと歩き始める。

何も知らずにライボルトへ近づこうとしたとき、扉の向こうからヒトカゲにとってもライボルトにとっても聞き慣れた声が聞こえてきた。

「警視庁のニドキングだ」

ヒトカゲの足が止まった。どうしてこんなところにニドキング警視が、というのが正直な思いだ。一瞬にして血の気が引いていくのが感じられたようだ。

ここまで焦っているのは、彼に会いたくないというわけではない。今彼に会ってしまうと、ジュプトルの存在が確実にバレてしまうか

らだ。

「久しぶりだな。お前が直々に私のところへ来るなんて」

2人が話し込んでいる間に、ヒトカゲがそつと後戻りをする。焦っているせいか、ほんの数mしか離れていない部屋までがものすごく遠く感じたようだ。

「実はな、あるポケモンを捜しているんだ」

「ん、誰だ？」

その間にも、ニドキングとライボルトの会話は進んでいく。どうやらニドキングは誰かを捜索してここまでやって来て、この辺をよく知っているライボルトに協力をしてもらおうと思っただらう。

もしかしてジユプトルのことだろうか。ライボルトも薄々そう感じていた。そうだとしたら庇ってあげようと思っていたが、その必要はなかった。

「捜しているのはな、ヒトカゲ。それと一緒に旅している奴だ。おそらくこの辺りにいると思うんだが……見かけなかったか？」

ヒトカゲという単語を聞いただけでほっとしてしまったライボルト。それが謝りであることに気がつくはずもなく、気を緩め、本当のことをニドキングに話してしまう。

「ああ、それなら……」

その頃ヒトカゲ達が寝ていた部屋では、ヒトカゲによって起こされたみんなが事情を把握した。ルカリオとラティアスは慌てふため

くが、ジュプトルだけは妙に落ち着いていた。

「お迎えが来たってわけか」

そうぽつりと言つと、部屋から出ようとするジュプトル。勘だけはいいルカリオは、彼が自首するつもりだとわかると咄嗟に部屋の出口を塞ぐ。

「ちよつと待て。もう約束破る気か？」

つい数時間前に、一緒に行こうと決めただけ。それなのにこんなにあつさりとは放棄されてしまつては説得した意味がなくなるとルカリオは考えていた。

「確かに約束はした。だがこの状況でどうしろと？」

ジュプトルの言うことも一理ある。比較的狭い部屋には隠れるような場所はない。逃げようにも出入り口はただ1つ。居場所がバレるのも時間の問題であつた。

状況が状況だけに、ルカリオはあれこれと考えを巡らすも名案は出ず。どうしようかと必死に考えているときに、部屋の先から声が聞こえてきた。

「ヒトカゲ。ニドキング警視が来てるぞ。お前に会いたいと」

最悪だつた。自分達がいることがニドキングに知られてしまったのだ。これで本当に逃げも隠れもできなくなった。万事休すの事態だ。

「これ以上何もできないだろう。早くどいてくれ。俺は自首する」



「ま、待ってっ！ お前だけ部屋に残ってれば何とかなるかもしれねーぜ！」

「俺の存在が向こうに知られていたとしたら、意味がないだろ」

互いに1歩も引かず、小声で言い争っている時間がどんどん長くなっていく。自首すると言ってきたきかないジュプトルと、それを阻止しようとするルカリオのせいだ。

先程の呼びかけに誰も反応しないせいか、ニドキングは首をかしながらライボルトもどうしたのかと不思議がり、部屋の様子を見に行こうとした、その時だった。

「待ってくれ。私が様子を見に行く」

「えっ!？」

何と、ニドキングが部屋へ行こうとしたのだ。彼が部屋へ入ればもうその時点でジ・エンド。それだけは避けねばとライボルトが必死で止めようとする。

「だ、大丈夫だ。たぶんまだ寝ているだけだ。私が起こしに行く」

「もう夕方だぞ？ 寝ているはずがない。部屋にいて呼びかけに反応しないなら、何かあったはずだ。警察としては、事件・事故だと疑わずにはいられないんでな」

最もな理由を突きつけるとともに、ニドキングは少々強引にライボルトの家へと足を踏み入れた。これにはライボルトも動揺せずにはいられない。何とかして止めなければ、その一心だった。

「どけ。俺は行く」

「だから待てって。利かない奴だな」

一方のルカリオとジュプトルは、まだ言い争っていた。言い争いが止まったのは、それからすぐ。ニドキングのものと思われる足音を聞いてからだ。

「まずい！ な、何か何か……！」

慌てふためくルカリオの目に飛び込んできたのは、今の状況でジュプトルを隠すにはもってこいのものだった。ジュプトルを隠す方法を思いつくと、おもわず笑みがこぼれた。

「なあジュプトル。しばらく大人しくしててな」

「どういう意味……なっ!？」

それからものの数秒後に、ニドキングが部屋に入ってきた。ニドキングの目には、元気な姿のヒトカゲ、ルカリオ、そしてラティースが写った。

「なんだ、いるなら返事しないか」

『こ、こんにちは〜』

3人はどことなくよそよそしく挨拶をした。遅れてやって来たライボルトは半分諦めかけていたが、部屋全体を見回してある事に気づき、目を丸くする。

(あれ、ジュプトルがない……?)

もう1度よく見回したが、ジュプトルの姿が部屋のどこにもない。理由はどうであれ、とりあえずはニドキングに見つかっていないだけ安心だと、胸を撫で下ろした。

「バンちゃんから話を聞いて来たんだ。あれから、ジュプトル……だったか？ 見つかったか？」

「い、いや、1回も会ってないんだ。どこにいるんだらうね〜」

冷や汗を垂らしながら嘘を通そうとするヒトカゲ。だがそれが警察に通用するはずもなく、ニドキングはヒトカゲが嘘をついていると確信した。

それでも何も言わず、ライボルトと同様、部屋をぐるりと見回す。すると、不自然な光景を見つけた。1カ所に高く積み重ねられた藁の布団と、それに寄りかかっているルカリオだ。

「……………」

絶対に怪しい。ニドキングが心の中でそう呟くと、ルカリオをじつと見つめ始めた。2人の視線が合うと、ルカリオもまた冷や汗を流して固まってしまふ。

「ルカリオ、そこをどけ。どかないとドリルで風穴開けるぞ」

この状況で嘘を突き通せるとは思えず、観念した表情でルカリオが退く。すかさずニドキングが藁をどかしていくと、中から息苦しそうにしているジュプトルが出てきた。

「……………犯罪者を匿うとは、どういう事だ？ 説明してみる」

もう言い逃れはできない。深いため息を1つつくと、ヒトカゲと

ルカリオと一緒に事情を説明し始めた。

「そうか、ライナスがそんな事を……」

事実を知り、あまりに残念でならないとニドキングは滅入っていた。彼もまた、ライナスが生きていることを願っていた者の1人であるゆえ、悲しみも人一倍大きい。

グロバイルの生存者がいたことには歓喜したが、誤解から生じたとはいえ数人を殺した犯罪者であるジュプトルに対してどう言葉を投げかけてよいものか、悩んでいる間に彼から口を開いた。

「早く逮捕してくれ。逃げる気などない」

促されるままに手錠をかけようと、胴体に巻いてあるベルトに手を伸ばそうとした時、ヒトカゲ達の顔が目に入った。ヒトカゲ、ルカリオ、ラティアス、そしてライボルトまでが複雑な表情を浮かべている。

その表情から、ニドキングはみんなの気持ちを察した。ホウオウに出会ってグロバイル復興を願うその時まで、猶予を欲しいという想いが強く感じ取れたようだ。

(やれやれ、上にバレたら懲戒処分かもしれんな……)

軽いため息を吐くと、伸ばしていた手の力を抜き、ジュプトルを見下ろした。彼の目をしっかりと見つめながら、警視、もとい1人の善意あるポケモンとしてこう述べた。

「お前の逮捕は、グロバイル復興が確約された後だ」

「……えっ？」

驚くしかなかった。警察が自分を見逃してくれるなんてあり得ないと思っていたジユプトルにこの言葉は衝撃以外の何ものでもない。この時、“優しさ”というものに触れた気がしたようだ。

「それまでの保護観察人は、ルカリオ、お前がやってくれ」

それだけ言い残し、ニドキングは何も言わずに部屋を出て行った。ライボルトが慌てて追いかけていき、部屋にヒトカゲ達だけしかいなくなると、ジユプトル以外みんなが笑顔になる。

「だってよ。もうこれで旅しないなんて言う理由なんかないよな？」

「よかった」。私もうヒヤヒヤしちゃいました！」

一緒に旅ができるとルカリオとラティアスは喜んでいる。だがそれがジユプトルには不思議でならなかった。他者が自分のために何かをしてくれるという心理がわからなかったのだ。

どうして、俺なんかのために……みんながどう思っているか尋ねようとした時、ヒトカゲがジユプトルを呼んだ。目線を合わせると、まるで全てを見透かしたかのような言葉をヒトカゲが言った。

「しばらくすれば、きっとわかるようになるよ」

その言葉が、ジユプトルの心に深く根付いた。理由はわからないが、忘れてはいけないことだと直感的に感じたジユプトルは、この時初めてヒトカゲという存在を気にし始めた。

### 第73話 旅、再開（後書き）

さてと、読者の皆様に「投票」の協力して頂きたいのです。

これは企画、というよりは私個人のお願いです。改めて、どのようなキャラクターが好まれているのかを知っておきたいのです。結果を受けて、これからの執筆に活かしていきたい所存であります。

〜ルール〜

・1人につき、あなたの好きな3人のキャラクターを選んでください。

・選んだキャラクターが好きな理由を教えてください。

バンちゃん

「次からは、作者さんからのお願いな。いっぱいあるけど、協力してやってな」

・「ヒトカゲの旅」および「ヒトカゲの旅 SE」最新話までに登場したキャラクターから選んでください。

・理由を書く際、「ヒトカゲというポケモンが好きだから」「ルカリオは俺の嫁」等、私の描写したキャラクターの個性とは関係ない理由は避けてください。

・お手をかけますが、投票は「小説家になろう」のメッセージでお願いします。感想欄やメールはなしで。

・投票のお礼は、結果発表にて代えさせていただきます。ごめんなさい。

・小説に関する事など、何かコメントがあると、Linoは舞い上がります。気をつけてください。

以上のめんどくさい内容を守ってまで投票してくださる方は、11/28（私の誕生日）まで投票をお願いします。

さて、行こうか元1位。

バンちゃん

「元って……（怒）」

## 第74話 各々の動き（前書き）

今回もライボルトの家から1歩も動きません（笑）

ヒトカゲ

「出た、作者さんの足止め（汗）」

ルカリオ

「いい加減オースに行かせてくれよ（汗）」

次回必ず（笑）

それと投票ですが、次の日曜日が締め切りです。ご協力してくれる方はお急ぎを。

アーマルド

「俺に入っていたりする？」

ラティアス

「あの、私には？」

ジュプトル

「言わずとも、俺に入れたら？」

……必死だなお前ら（汗）



## 第74話 各々の動き

「おいニドキング、いいのか？」

黙って帰ろうとするニドキングを、申し訳なさそうな表情でライボルトは止めようとする。黄金色に輝く夕陽が彼らを照らし、また影をつくる。

「何がだ？」

「何がって……お前なら、あの状況で逮捕しないはずないだろう。それを見逃すなんて……」

警察が犯罪者を見逃すなど、どの世界においてもあつてはいけななことだ。特にニドキングの場合、その世界では恐れられているほどの豪腕ぶりを発揮する存在。それをよく知っているライボルトからしてみればあり得ないことだったのだ。

「じゃあ、お前はあいつを黙って引き渡すつもりだったか？」

「あ、そ、それは……」

ライボルトの言葉が詰まった。黙って引き渡すつもりなら家にあるはずはない。頭の中ではそれが犯罪であることはわかっているが、行動と反してしまっている自分がわからなくなっていたのだ。

「なあライボルト。『情』ってものは、どうしてこうも誰かを救いたがるんだろっな」  
「えっ？」

ニドキングが言ったこの言葉の意味をすぐには理解できず、反応

に戸惑ってしまふ。あまり見せない表情にニドキングは軽く笑うと、再びライボルトに背を向けた。

「また近いうちに来るわ、じゃあな」

そう言うと、夕陽が輝いている方向にニドキングが歩き始めた。ライボルトには、彼の背中がまるで自分の父親のそれと同じように、広く、そして大きく見えたそうだ。

その後、「宿になるような場所は当分ない」という理由から、ライボルトの家に再び泊まることとなった4人。さすがに申し訳なさを感じているせいも、食事中も肩身の狭い思いでいた。

だが、この場にジユプトルはいない。「悪いが食欲がない」と言っただけで1人でどこかへ行ってしまったのだ。きつとまだ馴染めないからだろうとヒトカゲとルカリオは考えていたが、それでもラティアスは心配でしようがない。

「わ、私捜しに行つてきますっ！」

かじりかけのきのみを一気に食べると、ヒトカゲ達が止める余裕もないほど猛スピードで部屋を飛び出していった。玄関を間違えて壁に頭をぶつけたことはすぐに知られてしまふが。

「もう、どこに行つたのかしら？」

玄関を勢いよく出て数m、右も左もわからないこの村でどうやって捜そうか、きよろきよろと辺りを見回しているラティアスに、背

後から声をかけた者がいた。

「誰を捜してるんだ？」

「……え、あれ？」

声の主は、今まさにラティアスが捜そうとしていたジュプトルだった。どうやらライボルトの家の前で夜風に当たっていただけのようだ。ラティアスの頬が少し赤くなる。

「ちょ、ちよつともお、驚かせないでくださいよ！」

「俺は驚かしたつもりはない」

徐々に恥ずかしさが増していくラティアスの顔はそれに比例してさらに赤くなる。彼女の表情を見ても、ジュプトルはくすりと笑わない。腕組みしてただ見ているだけだ。

「それで、俺に用でもあるのか？」

ため息混じりに言った。なんだか馬鹿にされているように思ったのか、ラティアスは軽く口を膨らませ、ちよつと不機嫌そうに返答する。

「用があつちやいけませんか？ 私はジュプトルさんが心配になっただけです」

「心配？」

「そうですね。ごはんも食べないし、一人でどっかに行っちゃうし、心配しないわけじゃないですか」

実は、ヒトカゲよりもルカリオよりも、ラティアスはジュプトルを気にかけていたのだ。恋愛感情ではなく、むしろ我が子を心配に

思う母親のような感情を抱いていた。

「そんなの知ったことか。俺の勝手だろ」

「あつ、ちよつと……」

そう言いながら、ジュプトルは家の中へ入っていった。あれこれ言われるのが苦手なようだ。扉のボタンという音がラティアスの耳に入ると、今までの興奮が一気に冷め、悲しい表情へと変化する。

ラティアスには、今のジュプトルを理解することができなかった。孤独に生きてきた者が、集団の中に入っていくことが容易でないことに。

夜明けも近くなつてきている時間帯に、ヒトカゲは目を覚ました。薄暗くて部屋の中を見渡してもよく見えないが、全員の寝息は聞こえてきた。まだ誰も起きていないようだ。

「……まだ夜だ。目が覚めるなんて珍しいな」

ふと、頭の中にフラッシュバックしてきた、今までに会ってきた仲間の顔。ゼニガメからはじまり、一緒に旅をしてきたベイリーフや相手をしてくれたサイクスなど。

「みんな、早く戻ってきてくれないかな。何してるのかな」

仲間のことを考えながら、再びヒトカゲは眠りについた。「再び戻ってくる」と言っていた彼らは、各々のすべき事を着実に消化しながら、早くヒトカゲ達と合流することを望んでいた。

「……マ、マジですか！ おじ……警視」

小さい会議室で大声を上げたのは、カレッジ内の警察署に勤務しているバンギラスだ。ライボルトの家を離れてから数時間後にニドキングがカレッジに戻り、事情を説明したのだ。

「そういうことだ。ま、何かあっても私が責任取るだけの話だからな」

「もみ消すのは責任じゃないかと……」

いつものように笑いながら話すニドキング。笑いながらではあるが、意味しているのはそれこそ犯罪である。そんな彼がバンギラスにとって心配でならないようだ。

「ところで、お前に任せた件、どうなった？」

ニドキングが訊ねたのは、バンギラスに任せてあった事件のことだ。バンギラスは巡査であるにもかかわらず、任される仕事は何故か刑事が担当するようなものばかり。これもおそらくニドキングの仕業であろう。

「あつ、あともうちょっとで片付きそうです」

「そうか。なら片付いたらすぐにヒトカゲ達に合流してこい」

「……えっ？」

それは願ってもない言葉だった。いつかは頼み込んでみようと思っていたことがニドキングの口から聞けたことに、おもわずバンギラスの顔が綻んだ。

「い、いいんですか!? 任務は……」  
「それぐらい何とかなる。たぶんヒトカゲ達も待つてるだろうしな。それに……」

そこまで言いかけると、ニドキングの表情が一変、真面目な顔つきになる。急な変化に気づき、バンギラスも不思議がって顔を覗きこむような体勢になった。

「なんだか、あまりいい予感がしないんでね。今回のあいつらの旅は……」

時を同じくして、ロルドフログの隣に位置する村『ビレ』にある宿屋の中には、ポケモン達から受けた依頼を1つずつ片付けている、チーム・グロックスことゼニガメとカメックスがいた。

「あと2つ依頼片付けたら、ようやく終わるね、兄さん」

「ああ。今回は厄介なもんばかりだったから、時間かかったな」

藁の布団にうつ伏せになって会話する2人。仰向けで寝れないのが悲しい習性だ。藁の気持ちよさにゼニガメがうとうとしつつも、会話は続いた。

「兄さん、早く片付けてヒトカゲ達と合流しよう」

「そうだな……しかし、まさかアーマルドとはな。運命って奴は、ずいぶん残酷なことしてくれんじゃねえか」

先日ドダイトス達がカメックス達のところへ到着して開口1番に

告げた、グランサンでの出来事。「優しさというものが無い」とルカリオに揶揄されるカメックスだが、誰よりもアーマルドを気にしていたと自負するほど、弱者を想う気持ちを持ち合わせているのだ。

「ゼニガメ。運命が不幸をもたらすとしたら、その運命、ぶっ壊しに行くぜ」

「……う、うん」

ここまで本気で考えているとはゼニガメも想像していなかったよ  
うで、一瞬言葉が詰まるほど驚いた。しばらくして落ち着いた頃に話しかけようとしたが、既にカメックスは寝息を立てていた。

「サイクス、右」

「は、はいよっ！　ここかい？」

その頃アイストにあるサイクスの実家では、サイクスは父親であるバルのマッサージをしていた。1時間以上揉んでいるらしく、揉み手の全身は汗だくだ。

「ん〜、これぞ親孝行ってやつだな。成長したな、息子よ」

「……親父、マッサージ機あるのに俺に揉ますとは……」

バルはわざとマッサージ機を使わず、サイクスに背中を揉ませている。1分1秒でもコミュニケーションを図りたいがための策略だとは、サイクスは知らない。

「それよりサイクス、私の手伝いはいいから、そろそろ戻ったらどうだ？」

「あ、うん……」

彼もまた、グランサンの事件を聞かされてからしばらく落ち込んでいた。こんな事になるなら、もっと触れ合っておけばよかったと後悔が残っている。

さすがのサイクスでも、彼らをどうやって励ましてあげればよいのだろうかと思っていた。その事を知ってか知らずか、バルが何気ない素振りでもう言った。

「なんだ、嬉しくないのか？ お前らしくないな」

お前らしくない そうだ、もともだとサイクスは気づかされたのだ。自分の持ち味は明るく振舞うことだ。励ますのではなく、いつも通りに接すればよいという結論を出すことができ、笑顔が戻る。

「……ありがとう、親父」

その日の夜、アイランド行きの船がシーフォードから出港した。乗客の中に、わりと大きめな体格の2人がデッキで海を眺めている。ベイリーフとドダイトスだ。

「あとは実家だけね。大分遅くなっちゃった」

「そうですね。ヒトカゲ達もけっこう先まで行ってしまったのではないでしょうか」

仲間にグランサンで起こったことを伝えて回り、最後はベイリーフの父親に伝えれば終わりだと言う。だがベイリーフはどういうわ



けか渋い顔をしている。

「予定より遅れちゃったのは、絶対あのポケモンのせいだわ」

実はここまでに来る間に、とあるポケモンのトラブルに巻き込まれていたのだ。放っておくこともできず、ひとまず安全なところで案内してあげたせいで遅れたのだ。

「ああ、彼ですか。なんか不思議な奴でしたねえ」

ドダイトスはそのポケモンのことを思い出す。容姿は特別変わったところはないのだが、彼らにとって意味不明な発言を繰り返していたのだという。

「『俺はこの世界を知らない』なんて、まるでヒトカゲみたいなのと言っていましたな」

第74話 各々の動き（後書き）

バンちゃん

「……なあサイクス」

サイクス

「ん、なんだい？」

バンちゃん

「何で俺とお前のコンビで、こっやって仕事させられんだろっな」

サイクス

「さあなー。適任だからじゃねーのかな」

バンちゃん

「適任？ 何のだ？」

サイクス

「最近チラチーノとユニランのキーホルダー買って喜んでるBちゃんなる奴をイジる役」

バンちゃん

「ああ、つまり俺のこ……俺のことだよな？（怒）」

## 第75話 オースへ(前書き)

頑張って書きましたとも!

ルカリオ

「はいはい、お疲れさん」

しかしまあ、寒くなってきましたね。これ書いているとき(2時です) - 9 ですよ(汗)

ヒトカゲ

「そんな時は布団へGO!」

そうさせてもらいます(笑)

あっ、そういえば……投票の際に「小ネタ小説復活してほしい」とあったので、また再開します! これから数回は後書きに書いていく予定です。

## 第75話 オースへ

次の日の朝、全員がライボルトの家の外にいた。これから旅に出発するヒトカゲやルカリオ達はもちろん、この家の住人であるライボルトまで荷物を抱えていた。

「私はこれからメンバーの墓参りをしてくる。ライナス以外は、みんな独り身だったからな」

各地を巡り、1人1人の墓を立てていくという。そしてルツキーには自分から説明しておくのとルカリオに伝えると、そつとジュプトルの方へと視線を向ける。

「気にするな。あいつらなら赦してくれると思う。お前は、先を見ていればいい」

何かを言おうとしたのか、ジュプトルが口を開こうとした。だがその時には既にライボルトはみんなに背を向けて歩き出していた。開いていた口を少し強く閉じる。

「それじゃ、僕達も行こうよ」

ライボルトの姿が見えなくなつてから、ヒトカゲはみんなの方を振り向いて言う。ルカリオとラティアスはすぐに首を縦に振るが、どこへ向かうかも知らされていないジュプトルだけ眉間を寄せている。

「どこへ向かうつもりなんだ？」

「あゝそっぴや言つてなかつたな。実は『オース』って場所にホウ

オウが向かったって情報がちょっと前に入ってたさ」

普通なら、思いもよらぬ情報に驚くところだが、今のジュプトルは驚きすら顔に出そうとしない。「そうか」と一言で済ますだけに止まっている。

無愛想に見えるが、今の自分達のような環境を経験したことがないからだろうと全員が思っているため、特に気にすることなく受け止めていた。

「じゃあ、レッツゴーしましょう」

目的地がはつきりしたところで、ラティアスを先頭に、ヒトカゲ、ルカリオ、そしてジュプトルが続いて歩き始める。目指すはここ『ハイボル』から北の方角に位置する、『オース』へ。

彼らが道なりに歩いている姿を、上空から見つめている者がいた。それがヒトカゲやルカリオ達だとわかると、にいつと、不敵な笑みを浮かべて嬉しがっている。

「これで、大体役者は揃ったみてーだな」

その者　パルキアの頭の中にある計画通りに事が運んでいるらしい。何年も前から練ってきた計画が、あと少しのところまで実現に至るまでにきているのだ。

「全員で6人が……まだ不安要素はあるが、今のところ時間がないわけではねーし、なんとかなるだろ」

自分の姿がヒトカゲ達に気づかれていないことを確認すると、右

手で空間を切り裂く。彼らに背を向けて自分の空間へ戻ろうとする際、もう一度振り返ってこう呟いた。

「神ならぬ身で、神に抗うことができるか……そのうち見させてもらっせ」

「ほう、リザードンから退化か……」

歩き始めて1時間、話題はヒトカゲの過去についてになっていた。見た目が子供であるだけに、以前戦った時に信じられないほどの力を出していたことをずっとジュプトルは気にしていたのだ。

「早くリザードンに戻りたいんだけどね。ホウオウにディアルガ捜せって言われてもね」

「骨が折れる話だよな……」

笑い話として話すヒトカゲと、その話を聞くだけで物凄く疲れた表情をするルカリオ。それを見てラティアスが心配そうにルカリオに近寄るが、彼女お得意の天然が発動した。

「ルカリオさんの特性、もしかして“なまけ”ですか？」

「あのものぐさゴリラと一緒にすんな！俺は“ふくつのこころ”だ！」

ラティアスからしてみれば本気で心配したことであるため、何故ルカリオが怒るのかがわからず驚いている。もちろん彼女でなくて

も、普段の姿を見ても彼の特性が“ふくつのこころ”だとは誰も思わないのが当然である。

このやりとりをヒトカゲは楽しそうに見ているが、ジュプトルにとってはただのもめ事と同じ。軽いため息をつけて彼らから視線を逸らす。

(くだらん。誘いに乗った俺が間違ってたか……ん?)

その時、ジュプトルは不自然に落ちていた1輪の花を見つけた。手にとってよく見ると、まだ咲き始めの花であった。おそらく誰かが落としたのだろうと判断すると、すぐ捨てようとした。

「あつ、きれいなお花じゃないですか」

ルカリオとのごたごたが終わったラティアスがジュプトルの方へと向かった。彼が持っていたのはラティアスの好みの花だったらしく、羨ましそうに見ている。

「どうしたんですか、この花」

「不自然に落ちてたのを拾っただけだ。こんなもんいらんから、お前が片付けとけ」

そう言うと、ラティアスに向かって花を投げつけ、再びジュプトルは歩き始める。嫌っているわけではないのだが、体が反射的に避けてしまうのだ。

冷たくされて本来なら怒りたくなるところだが、ラティアスは違った。自分に背を向けたジュプトルに向かって、呼び止めるように少し大きな声で話を始める。

「こんなもんじゃないですよ。こうするとかわいいじゃないですか」

文句でも言う気なのか、と思ったジュプトルがラティアスの方を振り向く。そして彼女が目に入ると、彼は驚きのあまり目を見開き、言葉を失った。

「……ほらね？　かわいいでしょ？」

ジュプトルが見たのは、先程投げつけた花を右耳に飾り付けているラティアスの姿だ。好きな花だということもあり、とても嬉しそうな表情である。

刹那、これまでに抱いたことのない感情がジュプトルに襲い掛かる。電気が体中を流れるような旋律を覚え、体が固まってしまう。頭の中では相当焦っている。

(な、何だこれは……俺に何が起きている？　この感情は一体……?)

顔こそ赤くはないものの、緊張によく似た感じを受けている。足掻いてもどうにもできなかつたので、しばらく黙ってこの感情が落ち着くのを待つことにした。

「ん、どした？　ジュプトル」

「……俺に構うな……」

ルカリオをはじめとしてみんなが様子のおかしいジュプトルを気遣うが、本人は構っているどころではない。何かを振り払うかのように、頭を抱えながら一人で歩き始めた。

さらに数時間後、歩き疲れたヒトカゲは地面にへばりついてそこ



から動こうとしない。ちょうど昼食の時間帯ということもあり、休憩を取ることにした。

出発する前にライボルトからもらった食料を広げ、自由に取って食べ始める。それぞれマイペースで食事を進めていく中、ある話題が拳がった。

「ねえジユプトル、村がなくなった後、どうやって生活してきたの？」

ヒトカゲが何気に気になっていたことだ。それを聞いたルカリオとラティアスも同意する。一気に注目を浴びることとなったジユプトルだが、妙に落ち着いていた。

「なんでそんなことを聞く？」

「だって、いろいろ大変だったと思うからさ。今までどうしてたのかなって」

もちろん、全てを知りたいというわけではない。何かを共有できないだろうかというヒトカゲの考えが生み出したものである。その問に対し、ジユプトルの応えはしばらくしてから返ってきた。

「お前ら、何か勘違いしていないか？」

返答が予想しなかったものだけに、3人とも驚いてしまう。おもわず食事の手を止めてしまうほどだ。その返答の意味がわからないでいる3人に向けてさらに続く。

「確かに俺はお前らに感謝はしている。だが、だからと言ってお前らと親しい関係になるうとは思ってない。今のところはな」

これが今の本心のようだ。場の空気が一気に重くなるのをヒトカゲとルカリオは感じた。だがそんなことお構いなし、というよりは場の空気を読めない者が1人。

「ジュプトルさんって、いわゆるツンデレなんですね、わかります」

この強者　ラティアスの発言に一同絶句。口を開いて固まってしまった。特にジュプトルに至っては未だかつて誰にも見せていない顔つきになっている。

どうしてみんな固まってるんだろうと、ラティアスは首をかしげている。口を開いたまま、喉から声を出すようにして他のみんなは必死に言葉を発する。

「い、いま……」

「ツンデレって……」

「……俺がか……?」

そこで普通ならば、慌てて謝罪するところである。だが悪いことを言ったと思っていないラティアスは、ものすごく正直な返事を言い放つのであった。

「あつ、はい……そうです」

刹那、ジュプトルの頭の中ではぶちつと音を立てて何かが切れた。それを合図に、自分のツメを立ててラティアスに襲い掛かろうと飛び出したのだ。

「この女、今この場で殺してやる!」

「ま、待ってって落ち着けよ!」

「ストップストップ!」

憤慨しているジュプトルを、ヒトカゲとルカリオが足を掴んで必死に止めている。この状況になってようやくラティアスは自分が何か悪いことしたのだらうと思いい、小さく謝るのであった。

夜、道の途中にある宿場で4人は夜を明かすことにした。当然ながら夜になってもジュプトルの怒りは治まらず、他の3人が寝静まった後も苛々によって寝付けないでいた。

1人起き上がり、部屋の壁に背中をつけて腕組みをし、じつと何かを考えている。苛立っている様子から想像するに、おそらく今日の出来事を振り返っているようだ。

（まったく、今日はとんだ1日だったな。こんな奴に振り回されるとは……）

視線をラティアスの方へと向ける。彼女は手のツメを口元に当てるといふ何とも可愛らしい格好で寝ていた。そんな彼女をじつと見つめた後、そつと瞼を閉じる。

（振り回された分、久々に“自分”を出せたがな）

そのまま窓から空を見ると、月が出ていた。満月ではなく三日月であったが、自分を照らしてくれるほどの眩い光まはゆを放っていた。

## 第75話 オースへ（後書き）

（小ネタ小説）

### ・民の仕返し

以前、ルギアのくしゃみによって崩壊した町があった。その民の怒りは計り知れなく、神であろうが関係なく、ルギアを生け捕りにしようと計画した。

数カ月後、その計画が実行され、何も知らないルギアは民によって捕らわれてしまう。縄で縛られ身動きが取れずにもがいている。

「確かに私に非がある。だがこんな事をして何になる？」

あくまで冷静に対処しようとするが、民の怒り具合からして冷静になどなれないようだ。そしてどういうわけか、民は皆白い何かを持っている。

「何をやる気だ？」

「二度とお前がくしゃみしないよう、こうしてくれよう！」

刹那、民はルギアの口をこじ開け、中に綿をつめていった。口さえ開かなければくしゃみは出ないと考えたようだ。綿はどんどんつめられ、最初に入れられた綿が喉元をくすぐる。

「…………ゴホッ！」

刹那、口に入れられた綿どころか民まで吹き飛ばされていく。今度はくしゃみではなく「咳」で、民の計画はもろくも崩れ去ってしまった。

「赦せ、民よ。これは故意ではない」

「やかましい！ もう二度と現れるな！」

信頼を取り戻すのに数百年かかったのは、この出来事のせいである。

第76話 ミユウちゃん(前書き)

今年もあと少し……あつという間だったなあ。

ドダイトス

「そうですねえ。一杯やりますか？」

そして来年はどんな年になるのかなあと思ったり。

ドダイトス

「きつと良い年ですよ。一杯やりますか？」

とりあえず、この寒さだけなんとかしてほしいですな。

ドダイトス

「確かに。一杯やりますか？」

君、スルーしてるのにしつこいな(怒)

## 第76話 ミユウちゃん

次の日にはなんとか元通りになってくれていたジユプトルを見て、3人は安堵の表情を浮かべた。とは言っても、彼のぶっきらぼうのところまで直っていたわけではない。

「ジユプトル、朝食食べようよ」

「いらん。朝は食えん」

ヒトカゲからの誘いも断り、部屋で再び眠り始めた。朝が弱いわけではなく、できるだけ1人でいたいという表れである。そんな彼を見て、どことなく、アーマルドと似ているように見えたようだ。

「あゝあ、アーマルドならすぐボコれたのにな。あいつ相手じゃ俺が殺されかねえし」

「そうですね。ルカリオさん殺してもお金ありませんしね」

そこへ、食べ物を加えたルカリオとラティアスがヒトカゲの元へとやって来た。ちなみにラティアスは寝ぼけていない。3人揃ったところで、部屋の外からジユプトルの方を見る。

わざと視界に入らない向きで、寝ている、というよりは瞼だけ閉じている状態だ。会話は全て耳に入っている。それを知ってか知らずか、ヒトカゲ達は本音で話をする。

「いつそ思いきってボコってみたら？」

ルカリオにラティアス、そして寝たふりをしているジユプトルも小さく驚く。誰もこのような思いきった発言をするとは思っていなかったのだろう。

「……うゝし、やってみるか。寝てることだし」

この大胆な発言ですっかりその気になったルカリオの拳は既に握られていた。つかつかとジュプトルへと近づいていった、まさにその時であった。

ヒトカゲ達が気づいた頃には、ルカリオは後方へ向かって宙を舞っていた。何が起きたかと視線を元に戻すと、藁の布団の上で構えているジュプトルが目に入ってきた。

近づいてきたルカリオに危機感を感じたのか、それとも無性に苛々していたのかはわからないが、彼に向かってとびつきりの蹴りをお見舞いしたのだ。自己防衛のつもりらしい。

「わかった。食べばいいんだろ」

洪々と、そしてため息交じりにジュプトルが言いながら布団から降り、宿場の食堂のある方へと歩き始める。それを見て嬉しそうな表情を浮かべ、ヒトカゲとラティアスも後を追う。もちろんルカリオは放置。

朝食が終わると、すぐさま宿を出発した4人。元気よく、と行きたいところだが、腹部を抱えて俯きながら歩いている者が約1名。

「痛つて〜、くそっ……加減なしで蹴りやがって」

加害者であるジュプトルをきつと睨みつける。しかし本人はその目線にすら気づかず、涼しげな表情だ。それに腹を立てるが、自然と腹に力が入るせいで再び痛みを苦しむ。

そんな時だ。頭に何かが乗ったように重みを感じたルカリオ。



目線を上げるがそれだけでは何も確認できず、両手で頭の上のものを捕まえようとした。

だが既すんでのところでは重みの感覚が消える。掴もうと思って出した手が頭上で交差する。体のバランスが崩れながらも、振り返ってその存在を確認しようとした。

「……………あ、あれ……………？」

ルカリオの顔が青ざめていく。それもそのはず、彼の目に映っているのは、彼が一番恐怖を抱いているポケモン チーム・ブラスタスのリーダーである、隻眼のカメックスなのだから。

ずっとルカリオの事を忘れていたヒトカゲ達がふと後方に目をやると、腰を抜かしているルカリオと、彼をじっと見下ろしているカメックスの姿があつた。ヒトカゲ達は2人のもとへ駆け寄る。

「ルカリオさん、スリでもしたんですか？」

何も知らないラティアスがそう言うが、今のルカリオには突っ込みもできない。そんな彼をよそに挨拶しようとしたヒトカゲだが、カメックスのある異変に気づく。それがわかると、ヒトカゲはより一層笑みを浮かべた。

「かわいそうだから、もうやめてあげたら？」

それを聞いたカメックスは軽く微笑んだ。刹那、カメックスの体が光り輝く。突然の事にヒトカゲ以外の全員が口を開けて驚いていて、我に返った時には別のポケモンの姿が飛び込んできた。

「あれ、なんでバレちゃったの？」

そこにいたのは、過去にヒトカゲ達の前に忽然として現れては助言をしていった謎の旅人・ミュウだった。今回も“へんしん”でルカリオをからかって面白がっていたのだ。

残念そうにミュウは空中でうなだれている。そんなミュウに対してヒトカゲは面白そうに、正体を見破った理由を説明する。

「だって、カメックスが隻眼なのは左目だもん。今見たら右目に傷があつたよ」

そう、カメックスの傷は左目にある。ルカリオも言われるがままに思い出すと、確かに記憶の中のカメックスはヒトカゲの言うとおり、左目が隻眼であった。

「ぼ、僕としたことが……間違えちゃった……」

両手で目を覆い、さらにブルーになつてしまったミュウ。ミスをしたことが相当ショックだったようだ。「まあまあ」とヒトカゲが優しく慰めてあげている姿はまるで友達のように。

ルカリオは脱力して仰向けに倒れこみ、ジュプトルは初めて目にした幻の存在にまだ驚きを隠せないでいる。そんな中、ラティアスだけは全く違つた反応を見せた。

「……か、かわいい」

まるで癒し系動物を見たかのような表情でミュウを見ている。そして無意識のうちにミュウへと接近し、近づくや否や思いつきり抱きしめたのだ。

「ミュウちゃんギガントカワユスな」

「えっ、あの……ミ、ミュウちゃんって……」

さすがのミュウも戸惑いを隠せない。ラティアスのデレデレ具合を見ればなおさらだ。これにはヒトカゲもただ苦笑いをする他なかった。

「あ、あのさ、今日はどうしたの？」

とりあえず気だけでも紛らわせてあげようと考え、ヒトカゲがミュウに質問する。頭を撫でられつつも、ミュウはいつものように振舞おうとした。

「そろそろ、いいこと教えてあげようかな？なんて思ってね」

ミュウといえば、ヒトカゲ達の前にふと現れては、その後の出来事を意味するような言葉を残していく、まるで占い師のような存在だ。そんなミュウの言うことだ、何かまたプラスになるようなことを言ってくれると期待しているところに、珍しくジュプトルが割って入る。

「おい、訳がわからん。説明しろ」

ミュウの可愛さに夢中になっているラティアスを除き、唯一話についていけないジュプトルはいてもたってもいられず、口を挟んだ。幻のポケモンとヒトカゲが普通に会話しているのを不思議がるのも無理はない。

「えつとね、それは……」

懇切丁寧にヒトカゲはミュウと出会った時の話から始める。一通りの説明を聞き終わると、ジュプトルはさらに驚くことになる。グ

ロバイルでの出来事をミュウが予知していたのを知るからだ。

「どういうことだ。そんな情報、俺を見張っていない限り知りえないことなはずだ」

「簡単だよ。ちょっとわざを使えばわかるんだもん」

少し間が生まれる。わざを使ってそんなことができただろうか、頭をひねっていると、ようやく気分が落ち着いたルカリオが戻ってきた。

「“みらいよち”か？」

「そつ　ちよつと先の未来なら見えるんだ」

へえ、と感心するルカリオ達であったが、ヒトカゲだけは首を傾げている。何かがひっかかっているようで、思い切ってミュウに訊ねてみる。

「ミュウって、“みらいよち”使えたっけ？」

それはヒトカゲだから出てくる疑問である。人間のいる世界で、ヒトカゲはかなり前からミュウ、そしてミュウツールの存在を知っていた。ミュウのまつ毛から採取した遺伝子によって、いわば「兵器」として造られたミュウツールの経緯までも。

経緯を知った際、「ミュウにもできない事を、ミュウツールには取り入れる必要がある」という科学者の声明をどこかで耳にし、結果ミュウツールには“みらいよち”を覚えさせたと、後にリサから聞いたことがあったようだ。

「えへっ、実は僕使えるんだ」　なぜかは教えられないけどね」

可愛く、そして自慢げにミュウは答えた。理由は気になるもの、とりあえず“みらいよち”を使えることに納得したようだ。

それからすぐにミュウはラティアスの腕からするりと抜け出し、宙へと浮かび上がった。どうやらいい時間になってきたらしい。

「じゃあ、教えてあげるよ。次の出来事に関することはね……」

全員が固唾を呑んでその言葉を待った。1秒が1分経過したように感じている。ミュウを見つめながら、ヒトカゲ達はこの言葉を聞いた。

「『見た目で判断しちゃダメ』。下手したら本当に危ない目に逢っちゃうかも」

この言葉が何を意味するかはまだ誰もわかっていないが、共通して思ったことがあったようだ。ヒトカゲ、ラティアス、そしてジュプトルが同時にルカリオの方を見る。

「……な、何だよ。何が言いたいんだ？」

一気に注目を浴びて焦るルカリオ。そしてルカリオ以外のみんなが口を揃えて「その通りだと思う」と言ったのだ。この時ルカリオに沸々と怒りが湧いてきたらしい。

「それじゃあまた会おうね」

言葉を伝え終わると、クスクスと笑いながらミュウは飛び去ってしまった。何となく取り残された感じになってしまった4人は、しばし呆然としていたものの、再び歩き始めた。

「なんたる、今回は未来のことじゃない気がするね」  
「そうですね。『見た目で判断しちゃダメ』って……」  
「こいつの事そのまんま言っただけじゃねえか」  
「て、てめえら　　！！」

## 第76話 ミユウちゃん（後書き）

（小ネタ小説）

### ・参加条件

「俺について行きたいだど？」

それはもう何年も前の話。ボーマンダと共に冒険をしていたガブリアスのもとに、1人の若者が現れた。それこそ、「チーム・グロックスーめんどくさい奴」でおなじみのバシャーモである。

「是非！ 貴殿のような方をずっと捜し求めていたんだ！」

どこでガブリアスの存在を知ったかは知らないが、この時すでにバシャーモはガブリアスに憧れていたのだ。何とかしてチームの一員になれないかと必死に訓練を積んで、ようやく今日頼み込むことにしたのだ。

「あんな、ついて行きたくて行けるってものじゃな……」

「待て、ボーマンダ」

これまで数十人ものポケモン達が今のバシャーモと同じように同行したいと言ってきたが、全て断ってきた。その原因はガブリアスの出す“条件”に満たなかったからだ。

ボーマンダの場合、その条件というのは「24時間飛び続ける」というものだった。このように過酷な条件をパスした者のみ許されるところでいたボーマンダは断ろうとするが、それをガブリアスが

止めた。

「“条件”を今から出す。もしそれができたなら、俺について来い」  
「わかった！ その条件は……」

バシャーモは唾を飲み、条件が言い渡されるのをじっと待った。  
しばしの沈黙の後、ガブリアスはバシャーモに対して“条件”を言い渡した。

「カッコいい決め台詞、言ってみろ」

『……はい？』

ボーマンダとバシャーモは思わず拍子抜けする。どんな過酷な条件を言い渡されるかと思いきや、どついうわけか「カッコいい決め台詞を言う」というものだった。

2人ともガブリアスの顔を見るが、彼は本気のように。とりあえずやらないことには先に進みそうになかったので、バシャーモは身構えた。



「天が、地が、そして誰もが俺様を呼ぶ！ 情熱の貴公子、バシャーモ様だ！」

顔を覆いたくなるような台詞を、本気で言うバシャーモ。そんな彼を痛々しい目でボーマンダは見ている。こいつはいわゆるヒーロオタクなんだと。

これはさすがにダメだろうとボーマンダが思った時、ガブリアスはバシャーモに向かって右手を差し出した。

「合格だ。よろしくな」

こうしてバシャーモは、チーム・グロックスの一員になった。ちなみにガブリアスが何故このような“条件”を出したのかは、まだ本人の口から語られていない。

第77話 ライナスの像（前書き）

ヒトカゲ

「あけました〜！」

はい、新年になりましたね。今年がどんな年になるかはわかりませんが、とりあえず、1つ目標を決めました。

ルカリオ

「んで、その目標って？」

“頑張つて、面白いといえる小説を書くこと！”

アーマルド

「……………無理じゃね？」

ラティアス

「当たつて砕けるってことですね！」

ジュプトル

「それはそれは大した目標だな」

……………泣いていいですか？（泣）

とりあえず、今年もよろしくお願いします。

## 第77話 ライナスの像

数時間後、ヒトカゲ達の目の前に集落が見え始めた。そこはオースに1番近い町『グラス』である。その名の通り、遠くからでもわかるほど草が多い。雑草だらけの町だ。

「意外に近かったね」

「そうかもな。でも今日はあそこでお泊りにすっか」

既に夕方近くで、空がほんのり赤みを増してきている。ポケモン達が帰宅したり、買い物やきのみ採取したりと1番活動的になる時間帯である。

ならばと、ヒトカゲはディアルガに関する聞き込みを先にしたいと言いつつ出す。いつものことだからとルカリオとラティアスは首を縦に振るが、ジュプトルだけは違った。

「何で俺までやらなければならんのだ？」

やはり協調性はまだない。ホウオウに関する事以外にまで協力しようとする姿勢は見せないでいる。完全にそっぽを向いている状態だ。

「こう言われてしまうと、返す言葉が見つからない。絶対にやってほしいというものでもないではあるが、できれば一緒にしたいという気持ちがヒトカゲにはある。」

おろおろしているヒトカゲ、若干呆れつつも困り顔のルカリオをよそに、一貫してポーカーフェイスのジュプトル。しかしそんな彼でも、彼女には勝てなかった。

「いいじゃないですか、ちょっとくらい」

「何がいいんだ。俺はディアルガに用事はない」

「そんなつんつんしないでくださいよっ」

血が頭へ急上昇していくジュプトルであったが、それはすなわち「負け」だと認めたということだ。キレそうになったが何とかして怒りを沈めると、脱力したような顔つきになり、大きくため息をつく。

「……わかった、手伝ってやるよ、ったく」

この態度にヒトカゲとルカリオは酷く驚く。つい前日までは殺してやると言っていた彼が怒りを抑えて素直に従ったのだ。急な変わり様に目を丸くして見ている。

「さすがです」

みんなはラティアスの方へと視線を向ける。ヒトカゲもルカリオも、そしてジュプトルも同じことを思ったようだ。『こいつ何者なんだ?』と。

しばらくして、4人はグラスにたどり着いた。彼らの予想通り、町へ入ろうとした時にはまるでお祭りでも始まるのかと想像してしまふほど、ポケモン達の出入りが激しい。

何とかポケモン達を掻き分けながら町の中へと入っていくと、多少ポケモン達の数は減っていたおかげで窮屈さからは開放された。

「それじゃあ、手分けして聞き込むとするか。集合はここでもいいな?」

「ここ、というのはわりと大きめの看板が立ててある食べ物屋前のことである。ルカリオの提案に全員が返事をする、各々ばらばらに聞き込みを開始した。」

ヒトカゲ、ルカリオ、そしてラティアスはいろんなポケモン達にディアルガについて一生懸命聞きまわっている。一方のジュプトルはと言うと、軽く聞きまわっている程度だ。

ああは言ったものの、やはり身が入らないようだ。彼からしてみればホウオウにグロバイル復興を頼み込む目的以外の事は全て「寄り道」程度にしか思っていない。

「おい、ディアルガを見たか？」

「ディアルガだって？ 冗談よしてくれよ、神様なんかそう会えるもんじゃないんだから」

視線が合った者にだけ軽く質問しながら、ジュプトルは町の中心部へと向かって歩き続けていた。歩くペースも自然と早くなっている。

そして町の中心と思われる広場にたどり着くと、ジュプトルの目にあるものが飛び込んできた。広場の中心にある、ポケモンの像だった。

「あれは……」

物凄く見覚えのある種族　ルカリオであることは像の後姿からも用意に確認できた。そのまま像の前方の方へ行ってみると、彼の予想していたポケモンの姿があった。

「……これが、ライナスか」

そう、この像はルカリオの父・ライナスの像だ。右胸にはしつかりと稲妻印が刻まれている。ジュプトルも、はっきりとしたライナスの姿を見るのはこれが初めてである。

像を見て、ジュプトルは思いを巡らせている。ライナスに対し、今までは憎しみ以外の感情を持ち合わせなかったが、事実を知ったことにより感謝の心も芽生え、複雑に思っている。

自分のせいでライナスの仲間のほとんどを殺めたことを、どう償えばいいのか、改めてこの場で考え始める。生きながら何をすればいいのだろうかと考えていた、その時だった。

「どうしたんですか？ そんなにぼーっとライナス像見ちゃって」

突如として声をかけられ、少し驚きながら振り返ると、ジュプトルより少し若いと思われる エネコロロがいた。笑顔でジュプトルのことを見ている。

「……………いや、何でもない」

あまり干渉されたくないジュプトルはその場を離れようとする。だがエネコロロは再び声をかけ、去ろうとしている彼の足を止める。「なんでこの町にライナス像があるか、知ってますか？」

「……………いや」

言われて初めて気づいたようだ。ライナスの故郷でもないのに、どうしてこの町に像が建っているのか、少し気になったようだ。それを見透かしたかのように、エネコロロはその経緯について話を始める。

「ちょうど30年前ね、この町は災害にあっただけきれいなさっぱりなくなっちゃったの。誰もがこの地域はもう住めるような環境じゃないって確信していたそうよ」

ジユプトルは辺りを見回してみるが、とても災害があったような場所とは思えないほどの町が発展している、と印象づけられた。さらにエネコロロは続ける。

「まさに絶望だった時に、ライナスさんがこの町に来てくれたのよ、1人で」

「……1人で？」

ふと、疑問が湧いた。災害があった所に1人で飛び込んでいくだろうか、ましてやライナスには複数人のメンバーがいたはずであると考えている。

エネコロロの話によれば、ライナスは偶然通りかかったとのこと。そして状況を知るや否や、自らすすんで復旧作業に取り掛かったようだ。

呆然としている住人達を励ましつつ、彼らの目の前で黙々と1人、倒壊した建物の残骸を片付けたり、堆積した土砂を運んだり、とにかく懸命に動いていたという。

「彼のおかげで、町は救われたわ。その後彼を称えるためにこの銅像を住民みんなで建てたの」  
「なるほど……」

再び、ジユプトルは顔を上げてライナス像を見る。ライナスには悪というものがないと彼に思わせるほど、像の表情が勇ましく見えた。まさに「カッコいい」のだ。

そのまま目をエネコロロの方へと向けようとした時、像の台座に

貼られているプレートに何やら文字が刻まれているのを発見した。そこにはこう書かれていた。

【誰も1人で生きてはいけない。たとえ見えてなくても、誰かが助けてくれることを忘れるな】

【笑顔でいる。それが私への最大の恩返しだ】

「これはライナスさんが、町のみんなを励ますために言ってくれた言葉みたいです。感動した住民達がこうやって残したんですって」

これらの言葉は、まるで今銅像の目の前に立っている自分に対して言っているように、ジュプトルは感じ取ったようだ。その言葉一つ一つが、身に沁みる。

そしてこれが、先程求めていた答えになっていた。村を護ってくれようとした、その恩返しとしてジュプトルがすべき事。笑顔でいることである。

「あら、話し込んだじゃいましたね。ごめんなさい。それでは失礼します」

話が一通り済んだエネコロロは会釈してその場を後にする。その場に取り残されたジュプトルはまた像を見つめ、しばらくすると、何と自然と笑みをこぼした。

(まさか、言葉一つで救われるとはな……偉大さがわかった気がするぜ)



彼は今、大きな変化を遂げた。自らの意志で、他人に感謝をしたのだ。言葉に出してはないものの、彼の表情がそれを証明していた。笑顔という恩返し表情によって。

しばらく銅像の前に立っていると、ジュプトルを呼ぶ声が聞こえてきた。ヒトカゲ達がなかなか戻ってこないのを心配して捜しに来てくれたらしい。

ヒトカゲ達は、ジュプトルの傍にあるのがライナス像だとわかると口を開けたまま驚いている。特にルカリオは像がある理由が知りたくて仕方がなさそうだ。

「……ということらしい」

「マジか、親父がなー。やっぱりすげーな」

ジュプトルから話を聞いたルカリオも改めて、自分の父親の偉大さを知って感銘を受けている。自分には真似できないことだと思いき知らされたようだ。

「そつえば、何か情報あったか？」

しばらくライナス像を見つめた後、思い出したかのようにルカリオが訊ねる。それに対し、ジュプトルは何も言わぬまま首を横に振る。

「ディアルガに関するものは何もない。だが……」  
「だが？」

何か気になる含みを持たせた言い方に、みんなは耳を傾ける。重大なことでもわかったのだろうかと期待している彼らに対しジュプ

トルが言ったのは、これだけだった。

「似ても似つかぬ親子が、本当にいたことはわかった」

そう言うと、鼻で笑いながらジュプトルは歩き始めた。その言葉の意味がすぐにわかったヒトカゲとラティアスも笑いを堪えながら彼についていく。ただ1人、ルカリオだけはわからないでいた。

「お、おい、それってどういう……ん、もしかして俺と親父のことか!？」

ようやく理解すると、ルカリオの怒りはどんどん大きくなっていった。もちろん似てないと言われたことも原因だが、1番はジュプトルにからかわれたという事実だ。

ルカリオから逃げるように立ち去ったジュプトルの顔は軽くではあるが、微笑んでいた。その表情を見たヒトカゲはとりあえず安心できたようだ。これから先そんなに心配いらないだろうと。

## 第77話 ライナスの像（後書き）

（小ネタ小説）

・本能？

これは、まだバンギラスの父・ラルフが生きていたときのこと。警察官である彼は今のニドキング警視と共に行動することが多かった。仕事として、親友として。

そのため、ラルフの家によくニドキングが遊びに来ていた。もちろん、今のバンギラスが生まれるより前から、ラルフが死ぬ数日前まで。

ある日、いつものように酒を買ってニドキングがラルフの家に来た。仕事帰りなため夜遅く、ニドキングが家に入ったときにはヨーギラスとナエトルは仲良く並んで寝ていた。

「あら、まずかったかな？」

「そんなことはない。2人とも、お前の事好きだからな」

ラルフは快く招きいれ、ニドキングと一緒に杯を交わし始める。

話の内容の大半は仕事がらみになる。お互いよくわかっていて、話すことに共感を得やすい。

ふと、ニドキングはヨーギラスとナエトルの方を見る。すやすや眠る子供の姿を見ると、疲れが癒されると言う。自然と笑みがこぼれる。

「しっかし、子供って可愛いもんだな。私も早いとこ結婚したいも

んだ」

「ははっ、そうだな。お前も俺みたく、早く結婚するんだな。子供は見ているだけで癒される」

ほのぼのとした会話が続けていたが、次の瞬間、ラルフが衝撃の一言を放った。

「それに、うまそうだしな」

一瞬、ニドキングは我が耳を疑った。今自分の目の前にいる親友が、自身の子供を見てうまそうと言うはずがないと、これは空耳だと強く自分に言い聞かせた。

確かに肉食ではあるが、そんな男ではないと思っている。もちろんそうであると信じているが、念のためラルフに訊ねてみる。

「今、うまそうって言った？」

「……冗談に決まっているだろう。ホントにお前は頭堅いな」

ニドキングの問いを、ラルフは明るく笑い飛ばした。今の出来事を、ヨーギラス達が大きくなって絶対には言わないでおこうと、この時ニドキングは心に固く誓った。

第78話 看板娘（前書き）

私の研究室の先生、ポケモン映画に携わってたのはどこかで話しましたが……セレビィの映画からっていうのを昨日本人から聞きました。

ヒトカゲ

「ホントなの？ だってもう10年前の映画じゃない」

そう思って、ついさっきDVDでエンディング確認したら……本当だった！

エンディングクレジットに知人の名前があると、ものすごい鳥肌立ちます。これホント！

## 第78話 看板娘

「なんでてめえにあんなこと言われなきゃいけないんだよ」

「事実を口にして何が悪い。お前自身の半生を振り返ってみろ」

すっかり日が暮れ、そろそろ宿探しをしたい時間帯になったにもかかわらず、先程の一件で機嫌が悪くなってしまった2人が言い争っているせいで、ヒトカゲとラティアスはその場から動けずいた。だからと言って困っているわけでもなく、傍から見ていると2人のやりとりが楽しいようで、にやつきながら傍観していた。どこか楽しそうなジユプトルと、本気で怒っているルカリオを。

「ジユプトル、そういうてめえだって、話に出てきたてめえの親父さんと比べたら随分意地悪い性格だな？」

「何を言うかと思えば。お前の目は節穴か？ 犬の視力じゃ見えませんってことか」

徐々に、というよりは急速にエスカレートしてきたところで、ヒトカゲとラティアスによるストップがかかる。我に返ったルカリオとジユプトルが辺りを見回すと、見物している者がざっと数十名。

その集団の中から、「あの稲妻印って、もしかして……」のような声が聞こえ始めている。この町にとってライナスは英雄である、それ故にその息子と思しきポケモンがいれば騒ぎどころではなくなる。

（やばっ！ これは……逃げるしかない！）

冷や汗をかいて焦りだしたルカリオは一刻も早くこの場から立ち去るべく、ヒトカゲとラティアスの手を引っ張り、集団の中を縫う

ようにして走り出した。

ただ1人、その場に残されたジユプトルは言いようのない焦燥感に襲われ、いてもたってもいられず、彼もまた逃げるかのようにその場を後にした。

ようやく人気の少ないところへやってきた4人。町の外れなのだろう、建物が点在している。息が上がっていたのが落ち着くと、冷静になったルカリオとジユプトルが呟く。

「宿、探すか」

「同感だ。疲れるだけだしな」

ヒトカゲも嬉しそうな顔をして頷いた。さて探し始めようと4人が1歩踏み出した、まさにその瞬間だった。全員の目に何やら目立つ看板が飛び込んできたのだ。そこにはこう書かれていた。

“旅館 黒子”

その看板は100歩歩かずとも着いてしまうほどの距離にあった。気合入れて損した、といった顔をする4人であったが、結果として今晚の宿を見つけたことが出来たことに対しては嬉しそうだ。

ただ気になったのは、旅館の名前である。“黒子”という名前に何だか不気味な感じがしてならないようだ。しかし周りに泊まれそうな場所も見当たらないため、ここで泊まることにした。

民宿の扉につけてあるベルが鳴る。誰かが入ってきたようだ。従業員がそれに気づき、カウンターから入り口へと向かい客の出迎える準備をする。

お気に入りの飾りを耳につけ、前足で毛並みを整え、きちんと定位置につく。扉が7割方開いたところで、ゆっくりと頭を下げて挨拶をする。

「いらつしゃいませ、ようこそ旅館黒子へ……あら？」

「こんばんは……あれ？」

最初に入ってきたのはヒトカゲ。彼を見た従業員はおもわず驚いた。そしてヒトカゲの方も、従業員の姿を見て驚かずにはいられなかった。

ヒトカゲを出迎えた従業員というのは、まさに旅館の名前が表す姿そのもので、黒色をしている。そして外見は猫のよう。この世界では、このポケモンはこう呼ばれている。

「ブラッキー！ここにいたんだ！」

「1年ぶりかしら。久しぶりね」

そう、彼女は1年前にプテラとカイリユーと活動していたブラッキーだ。彼女も彼ら同様、執行猶予期間なのだ。半年ほど前にここで働き始めたのだとか。

「なんだか、私が綺麗だとかで客足が増えてね、おかげで看板娘になれたのよ、フフツ」

特にその経緯についてヒトカゲは触れるつもりでなかったのだが、ブラッキーは嬉しそうに喋り続けていた。こんな性格だったっけとヒトカゲに思わせるほどだ。

しかしそれだけ、彼女が充実しているということになる。今まで見出せなかった、自分の輝かしい未来というものを今手に入れていく。それが傍から見てもわかるようだ。



「ヒトカゲ、知り合いか？」

ブラッキーが喋り終わったのを見計らい、ルカリオが興味本位で訊いた。そして何食わぬ顔で、首を縦に振りながらヒトカゲは応える。

「うん、1年前にカイリユートとプテラと一緒に行動してたんだ」

「……お前の知り合いって、元殺し屋多いな」

ヒトカゲと出会ってそこまで長くないが、彼から紹介してもらったポケモン達の中にいる元犯罪者の割合が高いことにルカリオは恐怖を抱いている。もちろん、彼の中ではカメックスも犯罪者のカテゴリーに位置している。

「あら、お知り合い？」

1年前とは違うメンバーの顔を見て、ブラッキーが訊ねる。ヒトカゲが1人1人の紹介をすると、笑みを浮かべながらブラッキーも挨拶する。

「ようこそ、旅館黒子へ。私は従業員のブラッキーでございます。お見知りおきを」

『ど、どうも……』

ブラッキーの笑顔が逆に恐ろしく感じるルカリオ達。顔が引きつっている彼らを、ヒトカゲとブラッキーは首をかしげながら見ている。

「カイリユーとプテラにも会ったのね。元気そうだったかしら？」  
「うん。2人とも、目的を持って行動しているよ」

大部屋に案内されたヒトカゲ達はくつろぎながら、ブラッキーと話をしている。彼女は1番気になっていた、かつての仲間の近況について知ると、ほっと胸を撫で下ろした。

逮捕後1度も顔を合わせていないと彼女は言う。会いたくないというわけではなく、彼らがどんな風になら変わったのかを知るのが少し怖かったのだと打ち明けた。

「そう……ならば今度会ってみようかしら」

どうやら安心したようで、ブラッキーは自分で淹いれたお客様用のドリンクをさりげなく飲み始める。ちなみに今飲んだのはルカリオに差し出すはずの分である。

「ところで、今あなた達は何をしているの？ アイランドからこんな遠くまで来て」

今度はヒトカゲ達が答える番だ。待つてましたと言わんばかりに経緯の説明が、途切れることなくヒトカゲの口から伝えられる。ルカリオ達にしてみればうんざりするほど聞いた内容だからか、耳栓をしていた。

そして自分達がホウオウを捜してここまでやって来たことを聞くと、ブラッキーは何かを思い出したかのようにヒトカゲに話し始める。

「ホウオウなら、確かこの前オースへ飛んでいくのを、私見たわ」

『ほ、本当！？』

思ってもみない情報がヒトカゲ達に舞い込んできた。ブラッキーがホウオウを見たという。これだけでも満足なのだが、彼女はさらに情報を持っていた。

「本当よ。それと、ここのところ、オースから出入りしている様子はなさそうよ」

ここまでわかれば、ヒトカゲ達がこれ以上苦労することはなくなる。明日起きたらオースに向かい、ホウオウがどこにいるか捜すだけでいいのだから。

こうなると安心感が増していくと同時に、少しだけ気になることが出てきたようだ。20年も行方知れずだったホウオウがこう簡単に見つかるのだろうか。

だが、今それはそんなに考え込むようなことではなかった。とにかく、目的が果たせることが嬉しく、笑みがこぼれてしまう。

「じゃあ、明日すぐ行こう！　そしてホウオウに会わなきゃ！」

「そうだな。ようやく会えるんだもんな」

「私、願い事考えなきゃ！」

「……願い事をかなえる神じゃないだろ」

嬉しそうな様子を傍で見ているブラッキーも、だんだんと嬉しくなってきたようだ。互いに喜び合える嬉しさというものを、この半年間で彼女は理解できたのだ。

以前の自分を捨て去り、1からこの旅館で「触れ合う」ということを学ぼうとしたのが半年前。今に至るまでたくさんの経験を積んで、ここにいる“ブラッキー”が生まれた。

「それじゃあ、私は戻るわ。何かあったらフロントまでいらっしや

い  
」

業務に戻るため、ブラッキーが部屋を後にした。挨拶を済ませ、ヒトカゲ達は荷物袋から食料を取り出し、部屋の真ん中に堂々と広げて夕飯を食べ始める。

その夜、誰もが寝静まっている頃、4人だけが寝付けないでいた。みんな落ち着いているように見えるが、自然と胸が高鳴っている。それぞれ思うところがあるのだろう。

神様という存在ならば、ルギアにグライドン、そしてパルキアにも会っている。だがホウオウだけは彼らの中で特別な存在に思えて仕方ないらしい。眠りにつくまで、ヒトカゲ達はあれこれ思いを巡らせていた。

全ては明日　明日、ホウオウに会える。それから……。

同じ頃、ブラッキーは読書をしながら受付を行っていた。普段なら静けさいっぱいこの時間帯、今日に限って珍しく風が吹いている。

雨でも降ってくるのかと思ったブラッキーが戸を閉めようと入り口に立った。だが雨が降る気配はない。その代わり、生温く、気持ち悪い風が吹いていた。

「あら、何だか変な風ね。不気味」

まるで、そこに誰かがいるような温もりを感じたブラッキー。「幽霊でも現れたかしら」と冗談を呟きながら、扉を閉めた。

## 第78話 看板娘（後書き）

（小ネタ小説）

・俺の弟がこんなに可愛いわけがない

朝、カメックスが頭痛で目を覚ました。酒を飲みすぎたせいではなく、元々偏頭痛持ちなのだ。

「痛え……………」

こんな目覚め方をして、機嫌がいいはずがない。もしこの場に“青い犬”がいればぶん殴っていただろう。

だが今ここには八つ当たりできるような相手はいない。力任せに床を叩くと、その勢いで起き上がるうとした。

「……………ん？」

ふと、顔をしかめた。違和感を覚えたようで、どうも自分の尻尾が圧迫されている感じがしている。そして何より気持ち悪いらしい。おそらくポケモンの仕業だ。そう推測したカメックスはツメをとぎ、そのポケモンを引き裂こうと自分の尻尾の方を向いた。

「んゝいいなあ」

そこにいたのはゼニガメ。何とカメックスの尻尾を加えていた。だが本人は眠っているらしく、自分の兄の存在に気づいていない。さすがに引き裂くのは諦めたが、いつまでも尻尾をなめられていては困る。カメックスはゼニガメを起こそうと、声をかけようとした。

「……兄さん、これあったかい……むにゃ」

「……参ったな。しゃあねえ、しばらくこのまんまにしてやるか」

弟という存在が、一層可愛く感じた日であった。

第79話 岬の途中で（前書き）

ヒトカゲ

「あれ、更新早くない？」

実はちょっとした理由がありましてね。今、私テスト真っ只中なんだよ。

ルカリオ

「だったら勉強してりゃよくね？」

そうなんだけど、ストックを使って今回の話を投稿してしまおうと思っ

ラティアス

「なんでですか？」

今回投稿しておけば、今よりも続きが気になるはず、と思ったから  
（笑）

ジュプトル

「……どうしようもない奴め」

それが私、Linoなんですよ（笑）

## 第79話 岬の途中で

「おはようございま……せんね」

翌朝、宿泊客を起こしに回るブラッキーがヒトカゲ達が寝ている部屋に入った時に発した一言だ。彼らが眠りについたのは結局朝方起きれるはずがない。

しかも全員の寝相があまりにも酷い。藁でできた布団が散乱し、4人とも何故か部屋の隅っこで仰向けになつて寝ている。こんな状態の彼らを見てしまつては言葉も出てこない。

「あんまり遅くまで寝てると、料金上がっちゃうわよ、フッフ」

ぼつりと呟きながら、ブラッキーは他の部屋へと行ってしまった。いやらしさだけは以前と変わっていないようだ。そんな事に気づくはずもなく、4人は深い眠りの中にいた。

太陽が南中高度から少し下がった頃、先に目が覚めたのはラティアスだ。すつきり目覚めたようで、すぐに体を起こすことが出来た。水を飲もうと部屋の扉を開けたとき、ちょうど部屋にブラッキーがやって来た。

「あら、起きたのね」

「あつ、はい。今起きました」

ふとラティアスの目に入ってきたのは、ブラッキーが口にくわえている紙切れ。何だろうと思つてみると、その紙切れをラティアスに渡したブラッキー。口元が少しにやついている。



ラティアスがその紙に書かれているものに目を通すと、どうやら請求書のような。右下に料金が書かれているのを発見し、さすがの彼女も青ざめる。

「ひゃ〜！ こ、こんなに！ ルカリオさん持ってるかな……？」

書かれていた金額はそこまで高い値ではない。だが彼らにとつたら巨額な請求であることには間違いない。慌ててルカリオを叩き起こし、金の有無を確認する。

数秒後、部屋中にルカリオの絶叫する声が響き渡った。部屋の前で待機しているブラッキーはくすくすと笑っている。いわゆる確信犯だ。

「な、なんだこれ！？ ってか今昼！？ くっそーまんまとやられたか！」

ルカリオの大声によりヒトカゲとジユプトルも目を覚ます。何事かと近寄ってみると、絶叫こそしないものの、今の彼らにしては目を覆いたくなるほどの数字が羅列されている。

「これ、払える？」

「……ルカリオ、お前どのくらい持ってる？」

その場で小会議が開かれた。もちろん議題は「お金が払えるかどうか」。1分以内にその会議は無事に閉幕し、1つの結論を出すことが出来た。結論をブラッキーに伝える。

『……払えませんか』

この時の所持金は、わずか1000ポケ。ルカリオの計算によれ

ば、オースに到着するまでにきつちり使える金額でやりくりしてきたという。と言っても、今持っているお金は前にバンギラスから借りたものに、ジュプトルが持っていたものを足したものだ。

「それは困るわ。この旅館、4名分の料金を免除する余裕はないわよ」

ブラツキーはそう言うが、実はブラツキーが働き始めてから経営は右肩上り。ヒトカゲ達の料金が支出されても痛くないほどの稼いだ。商売をしている以上、請求にはうるさいようだ。

仕方ないので、再びバンギラスに電話。しかし不在だったためサイクスにも電話するが、彼もまた不在。ここでヒトカゲの提案により、サイクスの実家に請求書を送りつけるという方法で難を逃れた。

「これなら問題ないわ。それじゃあ、みんな頑張つてね。応援しているから」

嬉しそうな顔をしながら、ブラツキーは仕事へと戻っていった。せっかくホウオウに会える日だというのに、寝坊しただけでこれだけの被害を受けるとは何て不幸なんだと、4人は心の中で嘆いた。

それから数時間後、太陽が赤みがかつてきた頃、ヒトカゲ達はオースまで数kmのところまでできていた。夜には到着できるだろうと考えながら歩いている。

ヒトカゲがきのみを一つ食べようと、カバンの中に手を入れた、その時だ。細長い棒状のものがあつたことに気づき、それを掴んで取り出してみる。

「……あつ」

「どっかしました？」

声に反応したのはラティアス。振り返ると、ヒトカゲが口を半開きにして固まっていた。そして右手には、綺麗な水色の棒状のものが握られている。

「わあ、綺麗な色の笛ですね」

今度はルカリオとジュプトルがラティアスの声に反応し、彼らの方を振り返る。その笛を初めて見るジュプトルは興味を持っているようだが、その笛がどんな笛かを知っているルカリオの体は震えだす。

「お、おいヒトカゲ、その笛……海神笛だよな？」

「う……うん」

そう、この笛は海神笛。ポケラスに来る前にルギアからもらった、ルギアを呼び出すための笛。グラードンとの一戦の際に使用してから、ずっとカバンにしまいっ放しにしていたのだ。

滅多に使うものでもないということもあり、その存在を忘れかけていたようだ。いまだ固まったままのヒトカゲに、ルカリオの怒号が浴びせられる。

「どうしてホウオウがオースにいるかもってわかった時にそれ使わねーんだよ!!」

「だ、だって〜!」

もしルカリオの言うとおり、早めの段階で使っていれば、さほど苦労することなくオースへ辿り着けるのは間違いない。笛を掴んだ瞬間、ヒトカゲもそう思っていた。

「いいから吹け！ 今すぐ吹け！ 早く！！」

ルカリオの怒り方が半端ない。さすがのラティアスとジュプトルも1歩引くほどの怒り具合だ。ヒトカゲもこれほど怒ったルカリオは見たことがない。

慌てて笛を吹くヒトカゲ。動揺しているせいか笛の吹き方が荒々しく、吐息も強い。ホイッスルさながらの音色になってしまった。耳を劈く音が鳴り響く。

【何事だ、やかましい】

刹那、テレパシーを使ってルギアが呼びかけてきた。さすがにこの音に不満をこぼさずにはいられなかったようだ。そしてヒトカゲ達の近くにいたのか、1分と経たないうちに駆けつけてきてくれた。神様と、神様を呼びつけるヒトカゲをジュプトルは目を丸くしてみている。初めて見る者は誰でもこのような反応になる。話で聞くのと実際に目にするのではこれほど差が出てしまうものだ。

「ホウオウが、この先のオースにいるって！」

「本当か？ 確かなのか？」

ヒトカゲの言うことが少し信じられないといった顔をするルギア。だが嘘偽りをつくような者でないとわかっていて、首を縦に振ったヒトカゲを見て事実だと受け止めた。

「少し待てるか？ 番人達も呼ばなくては」

そう言うと、ルギアは目を閉じて強く念じる。今念じているのは、いわば緊急信号のようなもので、エンテイ・ライコウ・スイクンに

しか伝わらない特殊な念である。

1時間ほど経ち、夕陽が地平線に差しかかり始めた時、遠くから番人達3人が一緒に走ってきたのがヒトカゲ達に見えた。彼らもわりと近くにいたのだらう。

『只今、参上致しました』

ルギアに対して深々と頭を下げるエンテイ達。珍しい光景にヒトカゲ達はじつと見ている。そのままルギアから、ホウオウ発見の旨が伝えられた。

番人達もこれには非常に驚いた。彼らの話によると、これまで何度もオースも見てきたが、ホウオウが訪れた様子もなかったという。実に良いタイミングに恵まれたと嬉しがっている。

これで、メンバーは揃った。ヒトカゲはルギアに、ルカリオとジュプトルはそれぞれスイクンとエンテイに乗り、全員で一気にオースへ向けて駆け始めた。ヒトカゲ達が走る数倍の速さで。

「ねえ、1つ聞きたいことがあるんだけど……」  
「何だ？」

飛行中、ヒトカゲはルギアに話しかけた。その内容は、以前から気になっていた、“あの”ことである。

「その……僕達に、隠してることってある？」

前にスイクンにもたずねてしまった、この質問。もちろん隠し事

をしていないと信じたいと思っっている、そのせいで確信を得たい気持ちが強くなっているのだ。

これに対し、ルギアは小さくため息をついた。少々呆れたような表情をしながら、前を向いたままヒトカゲの質問に答えた。

「パルキアに何か吹き込まれたのか？」

「えっ、あ、いや……」

「まったく、要らん事を。ヒトカゲ、これだけは言っておこう。私はお前達を騙したり、操ろうとしたりするつもりは全くない」

直接是非で答えることはなかったが、隠し事があったとしても悪い方向ではないという意味合いをヒトカゲは掴めたようだ。少しは安心できたらしい。

しかし、ルギアの方からパルキアの名が出てくるとはと、ヒトカゲは驚いた。やはり何かしらの関係があるのだろうか、それとも隠し事をしているのはパルキアの方なのかと、新たな考えが生まれてきた。

「ヒトカゲ、お前がパルキアに何を言われたかは私は知らん。だが、我々神族が嘘をつくことは一切ない。たとえ、それが信じられない事だとしてもな」

この言葉が何を示しているかはすぐにわからなかったが、ヒトカゲは後々この言葉の意味を理解することとなる。そう遠くない、未来で。

「この話はこれまでだ。今はホウオウを優先せなば。いいな？」

「う、うん」

ヒトカゲの返事を合図に、ルギアは飛行速度を一気に上げた。同

時にエンテイ達も走るスピードを上げ、ルギアに遅れを取らないようにぴったりついていった。

目指すべき岬・オースまでは、もう目と鼻の先の距離だ。

## 第79話 岬の途中で（後書き）

（小ネタ小説）

### ・プレゼント

1年前のナラン八島でのこと。ポツポがバンギラスの家に遊びに来て、帰ろうとした時だ。何故か落ち着きのないバンギラスが部屋中を行ったり来たりしている。

顔を少し赤らめ、短い腕を後ろに回している。ポツポが首を傾げながらバンギラスを見ていると、急に目の前に袋を見せつけられた。

「ほ、ほらよ。持ってけ」

それは丁寧にラッピングされた袋であった。どうやらプレゼントのようだ。でも今日はポツポの誕生日でもなければ、何も無い至って普通の日である。

「えっ、どうしたのいきなり？」

「い、いや、なんつーか……ほら、その……いつも、飯とか作ってくれるからさ、あ、ありがとうの意味で」

目を背けて、だんだんと声が小さくなっていくバンギラス。思いつきでプレゼントしようと思ったらしい。

理由はどうであれ、プレゼントを受け取ったポツポはとても嬉しそうだ。目を輝かせてバンギラスにお礼を言う。

「ありがとう　今開けてもいい？」



「す、好きにすりゃあいいだろ……」

では遠慮なくと、ポップはゆっくりと包装をはがしていき、中で包まれていた箱をそつと開けた。

「……………何これ？」

箱の中にあつたのは、一枚の皿だった。ポップが驚いたのは皿自体ではなく、皿に描かれていたものだ。

茶色と黄緑がぐつちやぐちやに混ざつたような模様らしき物が皿に描かれていたのだ。それが何かを判別するのは普通の者ならまず不可能と思われるほど、酷い何かだった。

「た、大変だつたんだからな。鏡使つて何回も見直したりしたんだぜ」

これを聞いて、ポップは確信した。そうか、これは自分達だったのかと。

第80話 生命を司る神（前書き）

バンちゃん

「カメックス、珍しく俺らのコンビで前書きだと」

カメックス

「そっぴゃ、お前とは久しく会ってもないな」

バンちゃん

「俺いっつもサイクスと組まされてからかわれてるからな（汗）」

カメックス

「あいつ騒がしいから、今度『しつけ』るか」

バンちゃん

「あ、ありがと（汗）そっぴゃ、今回は後書きの小説はお休みだつてよ」

## 第80話 生命を司る神

日が半分ほど地平線に隠れている中、まるでタイムリミットが迫っているかの如く、大慌てでオースへ向かっていたヒトカゲ達。近づくに連れて緊張も増す。

そのせいか、時間が短く感じたようだ。緊張して頭の中が混乱気味になっている間に、オースにたどり着いてしまったようだ。地面についたときの軽い衝撃で気づく。

「着いたぞ。ここがオースだ」

ルギアの背中から降りたヒトカゲがその景色を見渡す。岬、というだけあって岩場がほとんどで、少し歩けばそこは崖があり、その下はわりと穏やかな海だ。

夕方ということもあり、どことなく淋しさが漂っているように感じる。自分達以外に誰かいるわけでもなく、波の音だけが聞こえてくる、そんな場所である。

「ここどこかにいるんだ。どこだろう？」

右を見ても、左を見ても、ホウオウの姿はない。軽くため息を吐いた時、ふとヒトカゲの目に1つの岩場が飛び込んできた。まるで洞窟のような形をしている、とてつもなく大きな岩の塊だった。

「あそこ……？」

「案外、当たりかもしれないな。見えるか？」

ルカリオの指差した先はその岩場の端。目を凝らしてよく見ると、岩に穴があるのが確認できた。その穴はルギアの翼を広げたくらい

の大きさがあり、誰でも入れるほどであった。

「あつ、見えました。もしかしてあの中に？」

「可能性はなくはない。今期待できるのはあそこだな」

目を細めながら、ラティアスとジュプトルもその穴を見ていた。

彼らもあの岩場の中にホウオウがいるだろうと確信している。他に考えようがなかった。

「見てみよう。ここからなら歩いて行けるはずだ」

ルギアの言葉に一同頷き、目的の岩場へ向けて歩き始める。自分達はゆっくりのつもりでも、その足取りは誰もが速まっている。ホウオウに逢いたい、その一心によって。

数分とかならずにその岩場の前へ到着した。全員が入り口を囲うように並び、中の様子を窺おうとする。しかし当たり前だが中は暗く、何も見えていない。

そこでルギアがテレパシーでホウオウに呼びかけてみる。聞こえていたら返事をしてくれと数回念じてみるが、一切返事は返っていない。それが気がかりになっていた。

「何故テレパシーが通じないのだ……理由がわからぬ」

20年間、ずっと考え続けている謎である。テレパシーさえ通じてしまえば、ホウオウの行方などどうにでもなることだった。それが不可能ゆえ安否すら確認できずにいたのだ。

「ヒトカゲ、入って中の様子を見てきてくれないか？」

「ぼ、僕が？」

エンテイがヒトカゲに穴の中に入るよう頼んだ。ヒトカゲはどうして自分が行くのだろうかと思つて戸惑うが、自分の尻尾を見たらなるほどと言つた顔になる。

「そつか、明かり代わりになるもんね。わかつた！」

「頼んだぞ。私達はここで待っている」

深く頷いて、岩の穴へと入つていこうとした。だがヒトカゲは穴の入り口直前でその足を止めざるを得なかつた。まるでそこに壁があるかのような、熱い空気の塊を感じたのだ。

その空気はヒトカゲでさえ熱く感じさせるほど強力な、否、“特殊な”ものであつた。みんながヒトカゲが進まないのを不思議に思つたその時、中から声が聞こえてきた。

「我に用ある者か？」

わりと低めの、よく通る声だ。その場に居た全員がこの声に敏感に反応した。特にルギアやエンテイ、スイクン、ライコウに至つては驚きに近い反応だ。

久しく聞いていない、だが聞きなれた声。ルギアにとっては自分の分身と言つても過言ではない、そして番人達にとってはルギア同様に崇めるべき存在あがの声だと確信できた。

「私だ、ルギアだ。姿を見せてくれ」

その声が届いたのか、穴の中から岩にツメが食い込む音がギシギ

シと聞こえてきた。音はだんだん大きくなっていき、こちらに近づいてきているのがわかる。

足音に合わせて全員の胸が高鳴っていく。ハウオウに逢うということに対し、すでに覚悟はできている。緊張していた時間はあっという間に過ぎ、ついにその時を迎えた。

暗闇から出てきたのは、虹色を象徴するかのような色合いの翼。ルギアほどではないが、ヒトカゲの何倍もある大きな体。そして、ヒトカゲ達の想像以上に神々(こうこう)しい出で立ちだ。

光の当たり具合によって七色に変化する翼を持ち、見たものに永遠の幸せを約束されるという、神話にも語り継がれている、生命を司る神　ハウオウが姿を現した。

「久しぶりだな、我が一族の同士ルギアよ。それに我に仕えし番人達よ」

20年ぶりの再会であるにも関わらず、ハウオウの表情は特に変化しない。無表情のまま、安堵しているルギア達をゆっくりと見回していた。

「話してもらおう。20年もの間、どこで何をしていた？」

再会の喜びを味わう間もなく、早速ルギアはハウオウを問いただす。神が不在という事態を重く見ているため、まずこの理由から解明するのが先決と考えたようだ。

この質問に対しても特に驚くこともなく、さらに焦ることもなく、一貫して感情を表に出さないままハウオウは質問に答えていった。

「20年……もうそれほどの時間が流れたのか。我はいくつもの世

界を移動し、その状況を見てきたのだ」

神様は、どの世界においても唯一無二の存在。いくつもの世界を統括するため、別世界へと移動することは珍しくないことなのだ。もちろんホウオウであつても、目の前にいるルギアであつても。

しかし、連絡なしにこれほど長い間この世界を不在にするのは未だかつてなかった。連絡ができなかった、その訳を、ホウオウはこの場では答えようとしなかった。

「今は言えん。すまないが、ディオス島へ帰る時にさせてくれ。その時に話そうではないか」

どうしてこんなまどろこしい事をするのだろうか、他の者達に聞かれたくないことでもあるのだらうかとルギアは推測する。首を傾げつつも、それを受け入れた。

そして、ホウオウはヒトカゲ達の方を向く。ヒトカゲの顔をしばらく見て、次はルカリオ、そしてラティアスにジュプトルと、全員の顔を見覚えたところでルギアに訊ねる。

「この者達は、何者だ？」

「この者達が、私の頼みを聞いてお前を捜してくれていたのだ」

刹那、初めてホウオウは表情を変えた。小さくではあるが、嘴を開けて驚いている。ホウオウが驚くのは極めて稀なことらしく、番人達はそれに対して驚いていた。

そのままホウオウはヒトカゲの方へと顔を近づける。しっかりと目を見つめている。ヒトカゲはというと、ホウオウを目の前にして緊張しすぎて全身が震えていた。

「そうか。汝が、我が行方を……」

だんだんと落ち着いてきたようで、ホウオウの言うことに頷けるようになる。だがその落ち着きが、その直後に聞いたホウオウの一言に対して疑問を抱かせてしまう。

「初めて会う顔だな。よく我が行方を突き止め、同士の願いをかなえてくれたな。礼を言おう」

ヒトカゲは、しばらくの間固まってしまう。ホウオウに頭を下げられ再び緊張したせいであるが、それ以外の要因もある。どうも気になることができてしまったようだ。

そんな彼をよそに、ヒトカゲとホウオウの間に割って入ってきたものがいた。ここまで来る目的がホウオウに会うためであった、ジュプトルである。

「いきなりですまない。俺はホウオウの加護を受けた村で育った者だ。頼む、今壊滅状態にある村を元通りにできないだろうか」

彼の最大の目的、それはホウオウにグローバルの再復興を願うこと。長年願ってきたことが今この場で叶いそうというところまできているのだ。落ち着けるはずがない。

ジュプトルの真剣さは、しっかとホウオウに伝わっていた。少し間をおき、言葉を選んでいるような様子を見せながら、ホウオウは口を開いた。

「今すぐ、というわけにはいかないが、必ず復興せんことを誓う。よいか？」

「……はい！」

待ちに待った返事だ。グローバル復興が確約され、ジュプトルは



半泣き状態だ。全てが報われた、これで再び村の時間が動き始める、そう思っていた。

「ホウオウ様、これからどうなさるおつもりで？」

一段落したところで、ライコウが今後について訊ねる。心配そうな表情から、再び行方不明になっては困ると思っっていることが容易に窺える。

「心配などいらぬ。当分はこの世界にいるつもりだ」

再び、安堵の表情を浮かべる番人達。これで以前のように各地を見回る、自分達の本来の活動ができると思うと、肩の荷が下りたように息を大きく吐いた。

「さて、汝らが出向いてくれた以上にここに止まる所以なし。ディオス島へ戻らん」

「そうだな。一旦アイランドへ戻るとしよう。お前達は先に行け」

ルギアの合図と共に、番人達は今まで来た道を駆け足で戻っていた。そして同時に、ホウオウとルギアが飛び立つ姿勢を取る。ヒトカゲ達の方を再度振り向き、こう告げた。

「ホウオウに会わせてくれたこと、本当に礼を言う。私達は戻るが、近いうちにまた会おう」

そう言い終わると、2人は地面を強く蹴って空中へと飛んでいった。2人並んで南へと飛んでいく様子をただヒトカゲ達は見つめていた。見えなくなるまで、ずっと。

「それで、あの理由は何だというのだ？」

飛行中、周囲に誰もいないのを確認したルギアがホウオウに再度訊ねた。おそらく、誰にも知られたくないような理由であるため先程答えなかったのだらうと、あれからずっと思っている。

「……ルギア、汝なら、今起こっている事態を把握しているだろう。それがどの世界でも起こっていた」

「どの世界でも……」

ホウオウはまた、無表情のまま淡々と話を進めていく。重大な話であるにもかかわらず、表情を変えないのが逆にルギアに緊張感を与えていた。

「そろそろ、気を引き締めていくべきだ。徐々に、近づいているぞ

“崩壊”への時期が

」

第80話 生命を司る神（後書き）

はい、ホウオウが見つかったので、ここで一区切りつきました。

ヒトカゲ

「ホウオウ見つけるだけで80話……長かった（汗）」

ルカリオ

「同感。だけど次ディアルガ捜すんだろー？」

そうですね。次回から新しい話になっていくんですけど……

ラティース

「私、モデルになれますか？」

いきなり何わけのわからんことを（汗）

どんな方向性になるかを、次話で明かしますので今しばらくお待ちください（笑）

ジュプトル

「随分期待させるんだな、作者は」

出来がそんなによくないのは目に見えてますがね（笑）

第81話 新しい地へ（前書き）

4月になりましたね。春ですねえ。

ヒトカゲ

「お久しぶりです。ようやく投稿なんだ」

……ようやくは余計だよ（汗）

さてと、今回からまた新しい内容になっていきます。どんな方向性になるかは、今回の話でわかります！

ルカリオ

「みん」

みなさん、それではどうぞ（笑）

ルカリオ

「かぶらすな！（怒）」

## 第81話 新しい地へ

ホウオウも見つかり、グローバル復興も約束され、これで1つ大きな役目を終えた4人。ほっと胸を撫で下ろすのが普通であるが、今の彼らはそうではない。

「……取り残されちゃったね」

「ああ。俺ら完全に置き去りだよな」

ヒトカゲ達はただ呆然とその場に立ち竦んでいる。番人達も、ルギアも、そしてホウオウもそれぞれの持ち場に戻っていき、オースにいるのは彼らのみである。

日も暮れ、辺りは深い青色に染まりつつあった。今からブラッキーのいる宿に戻る時間もなく、なくなるところで野宿することに決めた。岩陰に移動して今後の話し合いを始める。

「あとは、ディアルガ捜しかあ。こんだけ聞きまわっても情報ゼロだし、困ったな」

「確かにな。ジュプトル、何か考えないか？」

話を訊こうとルカリオがジュプトルの方を振り向くと、彼は腕組みしながら目を瞑っていた。寝ているかと思いきや、そのまま口を開いて返事をした。

「俺には関係のないことだ。俺はディアルガに用はないしな」

いつもの調子の、協調性に欠ける返答だ。そこが気に入らないルカリオは口を曲げて面白くなさそうな顔をするが、それはすぐに笑いへと変わるのであった。

「まあ、どうしても言うなら協力してやってもいいぜ。どうせまだ村の復興まで時間があるし、お前ら困ってるみたいだからな」  
「見事なツンデレっぷりですね!」

思わず吹かすにはいられなかったヒトカゲとルカリオは、ジュプトルに背を向けて笑い始める。満面の笑みで爆弾発言をしたラティアスはというと、まるで「そうですよね?」と問いかけているような表情でジュプトルを見ていた。

「い、いい加減にしねえと本当に殺すぞ……」

顔を赤らめながら、小声で怒り出した。もちろんラティアスが彼が怒る理由をわかってているはずもなく、首を傾げている。この後ジュプトルをなだめるのに他の3人は一苦労したのだとか。

結局今後どうするかの話をもとめられないまま、4人に眠気が差してきた。起きてから話しても遅くはないだろうという結論に至り、寝ることにした。

体を横たえて眠りに着こうとした時、近くから大きな足音が聞こえた。自分達以外に誰もいないはずの場所であるためか、ヒトカゲ達に緊張感が高まる。そして姿を現したのは、以前も突然現れた、逆らえない存在だ。

「しばらくぶりだな」

『げっ、パ、パルキア!』

思わず「げっ」と言ってしまうほど、ジュプトルを除いた彼らは驚いてしまった。今この場で起こっているのは、彼らが会いたくな

い、空間の神・パルキアの参上である。

「てめーら、『げっ』って何だよ？ 神に向かってよー」

すっかり耳に入っていたようで、パルキアは不機嫌そうな顔になり、舌打ちまでしている。そしてそんなパルキアが目線を変えると、彼の目にジュプトルの姿が飛び込んできた。

ジュプトルは今まで以上に目を見開き、声が出ないほど驚き、緊張している。この表情がたまらいのだろう、パルキアはニヤリと笑みを見せつけている。

「どうした？ 神を目の前にして怖気づいてるのか？」

まさにその通りである。こんな短期間に神や、神の側近を見ていて気を動転させない方が難しい。それを知ってか知らずか、ジュプトルをからかうような言い方だ。

「ところで、何か用事でもあるのですか？」

「ああ、あるとも。俺がこうして直々に出向いてやってんだからな」

そう言いながら、ヒトカゲ達を覆うようにパルキアは立ちほだかる。ただ話しやすいような位置にただだけか、逃げるなという意味で立っているのか、その真意は誰もわからなかった。

「ホウオウ見つかったみてーじゃねーか。よかったな」

「えっ、どうして知ってるの？」

「俺は神だぜ？ そんなことぐれーすぐにわかるに決まってるんだろ」

今日はやたらと神って言葉使うなあと思いつつも本人にそれを言えるはずもなく、そのまま黙って話を聞くことにした。話と言って

も、訊かれる内容は大体想像がついている。

「それで、俺が頼んだ件、どうなってる？」

ヒトカゲ達の予想通り、訊ねられたのはディアルガの行方についてだ。ここに来るまでに聞き込みを続けてきたが、ホウオウの情報でさえ少数であったのに、ディアルガの情報がそれ以上に入るわけがない。ゼロである。

「誰も知らねえってさ。散々聞き回ったんだけどな」

「だろうな。そんな簡単に見つかるぐれーなら俺がやってらあ」

ねぎらいの言葉が一切ないパルキアの発言が何となく気に入らな  
いと感じたルカリオ。何故、自分達にこんな事をさせているのかを  
改めて問いたくなったようだ。

パルキアを問いたださうと口を開きかけたところで、パルキアに  
よってそれは遮られた。今度は何を言い出すかと思っていると、意  
外な言葉が発せられたのだ。

「おい、てめーら全員でポケモニアに行け」

『……ポケモニアへ！？』

全員が大声を出して驚く。これほど驚く理由、それは“ポケモニ  
ア”という言葉にある。

ポケモニアとは、今ヒトカゲ達のいるポケラス大陸の北東に位置  
する大陸である。そしてそこはいわば「外国」。言葉こそ同じもの  
の、種族はかなり異なっているのだ。

突然外国に行けと言われても、4人は困惑するしかなかった。し  
かもその理由もわからない。パルキアは外国に行って何をしろと言  
うのだろうか。



「な、なんでポケモニアに？」

「もちろん、ディアルガを捜してもらおう。だがそれだけじゃねーぜ」

そう言うと、突然パルキアは空間を円形に歪める。そして指を鳴らした瞬間、そこにはポケモンと思われる2つの姿が映し出されていた。

1つは純白の体、巨大な翼、そして炎が吹き出するような尻尾を持つドラゴン。もう1つはそれとは逆に漆黒の体、巨大な翼、そして電気が蓄まっているような尻尾を持つドラゴンだ。

「ポケモニアには、2人の王がいる。それがこいつら レシラムとゼクロムだ。こいつらのところへ行つて、鍛えてもらえ」

「ちょちょちょ、ちょっと待って」

さらに混乱する4人。外国に行けというだけでなく、そこで鍛えろと、しかも王様に会つてというわけのわからない事態を整理するため、ルカリオがパルキアに問う。

「わけわかんねえよ。外国に行け？ 鍛えてもらえ？ どういうことなんだよ!？」

他のみんなも同感だと頷いている。だんだん面倒くさくなってきたのが、パルキアの口からため息が漏れる。少し苛立った顔つきで質問に答えた。

「うつせーなー。いいか？ てめーらは俺が目をつけた特別な奴なんだぞ。何かあって死にましたなんてことにならねーようにするためだ」

どうやら、パルキアのヒトカゲ達に対する期待はそれなりに大きいということが汲み取れる言葉だった。それがわかると、これに關してだけは少し納得できたようだ。

「それと、レシラムとゼクロムは俺らの側近だ。俺の命令ならすぐにきいてくれる」

そう、レシラムとゼクロムは神族の側近。こちらの大陸という番人達のような存在なのである。王の座についているのは、ポケモニア全域を統括し、監視下に置かれたためだという。

へえ、と納得している4人を見て何かを思い出したようで、パルキアが指を鳴らす。すると先程まで映っていたレシラムとゼクロムが消え、代わりに馴染みのある顔が映し出された。

「あつ、バンギラスだ！」

「そして……サイクスだな」

「こつちにはゼニガメ君とカメックスさんだわ」

「あれは、ベイリーフとドダイトスか」

そこには、道を駆け足で進んでいる仲間達の姿があった。今現在の彼らの姿を見ているのだ。しばらく眺めた後、空間が元に戻っていき、完全に消えてしまった。

「てめーらの仲間、今こつちへ向かっている。俺があいつらに知らせてやつから、ここを降りた先の海沿いにあるZ便使って先にポケモニアに向かえ」

そう言つと、ヒトカゲ達に背中を向ける。自分の空間へ帰ろうとしていると直感的にわかったため、ヒトカゲがパルキアを呼び止める。

「待つてパルキア！」

「……何だ？」

首だけ振り返るパルキアに向かって、ヒトカゲは1つ質問をした。パルキアは何を企んでいるのか、本当の目的が別にあるのではないのかと。

それを聞き、パルキアは少し無言になる。視線は逸らさぬまま、しばし沈黙があたりを支配した後、いつものような不敵な笑みを浮かべて、こう言った。

「次にてめーらと会うときに、全部話してやるよ」

これだけを言い残し、自分の空間へと帰っていった。空間の歪みが消えるまで4人は茫然と空中を見続けていた。それがなくなると、我に返って状況を把握し始める。

「なんか、今回も半ば強制的に押し付けられたような気が……」

「ああ、だけど逆らったらたぶん抹殺されっからな」

呆れ顔のルカリオが冗談交じりに言う。冗談で済めばいいが、本当に抹殺されそうなのでこれ以上の発言は控えた。発言の後すぐに悪寒がしたという。

「な、何だっただんだ今のは……」

「空間の神様のわがままですよー」

パルキアが去った後もずっと驚きっぱなしのジュプトルに、ラティアスが優しく、言うてはいけない事を口にして落ち着かせようとする。もちろんんぶざけてはいない。

通称、「空間の部屋」と呼ばれている、パルキアだけの空間。そこには先程ヒトカゲ達の前で作った鏡のようなものがいくつも存在していた。そこに映し出されているのは、数多くのポケモン達だった。

ヒトカゲ達はもちろん、サイクスやバンギラスといった仲間、「家族」であるルギア、さらにはレシラムとゼクロムの姿も。こうやって動向を探っているのだろう。

「全てを明かす時、こいつらは死を強いられることになるだろうな。だが、避けては通れねー。この世界で生きたいと思うならな」

## 第81話 新しい地へ（後書き）

（小ネタ小説）

・バルの妻

「ふーっ、ひとまず終わったな」

一仕事を終え、社長椅子にバルは深くもたれかかる。案件に次ぐ案件で仕事を立て込んでおり、今ようやく一区切りついたところだ。体に溜まっていた疲れが椅子に染み込んでいくような感覚に陥ると、まぶたが自然と落ちてきた。時間帯からしてもおそらく誰からも連絡が来ないだろうから、このまま少しうたた寝でもしようかと思っただけの時、電話がかかってきた。

「ん、誰だ？」

デスク前方にある壁掛けのモニターに受話器のマークが映し出されている。デスクに置いてあるボタンを押すと、画面に相手の顔が映され、通話が始まった。

「おつかれさまー、バル君」

「ああ、『お前』か。お疲れ」

バルが言った『お前』というのは、彼の妻、つまりサイクスの母親である。名前はクローイ、もちろんのバクフーンだ。彼女もバル同様、会社を経営しているやり手だ。

ちなみに彼女はポケラスでもポケモニアでもない、さらに遠い外

国に会社を構えている。そのため彼らがお互いに顔を合わせるのは電話のときか、数カ月に1回の休暇のときのみである。

「ところで、どうかしたのか？」

「ちよつと、バル君に聞きたいことがあってね」

会社の経営方針の話だろうかと思っていたバルにとって、クローイが告げた質問は思わず耳を塞ぎたくなるようなものだった。

「私名義のブラックカード、利用停止になってるんだけど」

実は、前にサイクスがガバイト達との対面で傷つけてしまったブラックカード、あのカードの名義は「クローイ」になっていたのだ。数枚あるうちの1枚をバルに持たせていたのだが、それが利用停止になった通知がどうやら彼女の元に届いてしまったようだ。

さらに悪いことに、そのカードをサイクスが持っていたことをずっと隠していたのだ。バルの背中はずでに汗まみれになっている。

「まさか、サイクスに持たせてトラブル起きたとか、そんなことあ

るわけないわよね？」

「……当たり前だ。約束しただろう」

「そうよね。もし約束を破ってたとしたら……バル君、わかるわよね？ 私がどういう挙動に出るか」

それから数分間、電話が切れるまでバルは必死に表情を出さずに頑張っていた。実際は汗が椅子から垂れ落ちるほど恐くて仕方がなかったようだが。

## 第82話 ポケモニア（前書き）

今回から数回、「NG集」なる企画（？）をすることになりました。過去の話のNG場面をさらしていきます。

ヒトカゲ

「なんか危なさそう……（汗）」

それと本編は、前作のアイランド、前話までのポケラス、そして今回からポケモニアへと場所を移します。大体お察しのとおり、イツシュ地方のポケモン達がメインになります。ですがそんなにながーくならない予定です。修行しに行くだけですからね（笑）

ヒトカゲ

「いつばい会えるといいんだけどなー」



## 第82話 ポケモニア

「うわー、こんな景色はじめてだ！」

青色の大海原を渡りきると、そこには彼らが今までに目にしたことのない、美しい光景が広がっていた。白く染まった砂浜、近くに生える小さな広葉樹、どれもこれもがポケラスにはないものばかりだ。

その新鮮な景観に圧倒されつつも、心が躍っているのが動作にも現れている。体が勝手に動き出し、無意識のうちに走り出したり飛び跳ねたりして楽しんでいる。

「あつ、あれなんだろ？」

ヒトカゲが見つけたのは、砂浜近くに密集している木になっている木の実は。見た目はフィラのように似ているが、こちらの方が色鮮やかでしかも大きい。見るからに甘そうである。

その木の実を1口ほおばってみる。彼の予想通り、口いっぱいに甘さが広がっていくのを感じていた。あまりの美味しさに自然と笑みがこぼれる。お気に入り確定の木の実は。

「はじめてだこんな木の実は！ さすが外国だ！」

1つの木に生っている木の實に対してここまで驚いたことは今の今までなかった。感動を覚えたのか、軽く放心状態になっている。よほどこの木の實が気に入ったようだ。

そして砂浜を駆け巡る。まさに楽園という名にふさわしい場所ではないかと、ヒトカゲは声を上げたくなるほどだ。以前仲間達と言ったりファイルというリゾート地が比べ物にならないくらい素晴

らしいらしい。

「んー！ ポケモニア最高！」

砂浜に仰向けに寝そべり、太陽に向かって叫ぶヒトカゲ。鍛えてもらうことなどすっかり忘れて、極楽気分をじっくりと味わっているのであった。

「いい加減目え覚ませよ」

頭の中に響いた声に驚き飛び起きると、今まで見ていたリゾート地が一瞬にして消えていた。ヒトカゲの目に映っているのは、ごつごつとした岩場と深い青色の海だ。

「あれ……ここどこ？」

「寝ぼけてんのか？ どれからどー見てもオースだろここは」

昨日までホウオウがいた洞窟で、4人は寝泊りしたのだ。もちろんそこから1歩も移動していない。ルカリオの言葉がようやく頭に入ったのは、それから数秒後のことであった。

とても気に入った木の実を始め、感動を覚えた景色などが夢であったとわかるとヒトカゲは大きく肩を落とした。夢が現実だと思い込んでいたらしい。

「はあ、あの木の実おいしかったのになあ」

「所詮、夢の中の話だ。もう行くぞ」

足で背中を軽く突いて、ジュプトルがヒトカゲを急かす。ゆっくりと立ち上がり、うなだれながらとぼとぼと歩く姿を見ると、「子

供だな」とルカリオとジユプトルが呟いた。

2時間くらい崖に沿って歩き続けると、先頭を行っていたラティアスが2匹のポリゴンZを発見する。ラティアスはポリゴンZに対して大きく手を振るが、見えていないのか、彼らは無反応だ。

このポリゴンZは、この世界における、いわばどこでもドアのような存在。彼ら Z便と呼ばれる存在は外国間を行き来するのになくしてはならない存在なのだ。

「ついたよー」

ポケモニアに行けることがよほど嬉しいのか、ラティアスの顔は満面の笑みだ。他の3人はというと、ルカリオは疲れ、ジユプトルは無視、ヒトカゲは先程のショックを引きずっていた。

「こんにちはー。ポケモニアまで4人お願いしまーす」

軽いノリで、2匹のポリゴンZに対してラティアスは言う。しかしどういうわけか、ラティアス達の姿を見ただけでポリゴンZ達が怯えだす。体を小刻みに震わせていた。

自分達にポリゴンZ達を怖がらせる要素がどこにあるのだろうか。疑問に思いつつ、どうしたのと訊ねてみる。すると、怯えている原因がすぐにわかった。

『あ、貴方達が、パルキア様の言った……！』

(あ、そういうことですか)

どつりで、といった様子の4人。納得というよりは呆れに近いような感情を抱いたようだ。パルキアが普通に頼みごとをしたのか、

半ば脅したのかは定かではない。

『じゃ、じゃあ早く行きましょう！　ここへ集まってください！』

何も話す隙を与えず、というよりは話せる余裕がないのだろう、ポリゴンZ達は早く仕事を片付けてしまおうと急かしている。その様子を見て哀れに思ったのか、特に何も言わずにヒトカゲ達は所定の位置へと移動する。

地面に丸印があり、そこへ4人は立ち並ぶ。それを囲うようにしてポリゴンZが移動した。2人は目を閉じて気を集中させ、“レポート”の準備をしている。

『すぐ着きますからね。大人しくしてください。はい、オッケーです』

「はい、オッケーです」という言葉がどうも引つかかると感じる前に、ヒトカゲ達の目には見慣れない光景が入ってきた。一瞬にして穏やかな海岸が周りに広がっていたのだ。

状況を把握するまでに少し時間がかかり、ようやく理解できたのはその数秒後。そう、すでにヒトカゲ達は“レポート”によってポケモニアに着いていたのである。

「も、もう着いたの!?!」

『はい、速さが売りですからね。では失礼します!』

口をあんぐりさせて驚いているヒトカゲをよそに、そそくさと帰還したポリゴンZ達。パルキアによる脅しがよほど恐怖に感じたのだろう、終始顔が引きつっていた。

「とりあえず……ここがポケモニア、か」

「南国ビーチって感じではないですね」

ポケラスと同じ色の海、同じような植物、同じような砂利道……外国であるにも関わらず目にするもののほとんどがポケラスのそれと大きな変化がない。

ポケラス大陸のリゾート地・リーフアイル同様のパラダイスを想像していたヒトカゲとラティアスにとってはギャップがありすぎて、衝撃を受け落ち込んでいる。

「はぁー……あんまり嬉しくない」

「何がっかりしてんだよ。ほら、行くぞ」

『どこへ?』

1人先に進もうとしたルカリオに、残りの3人が突っ込む。言われて初めて気づいたようだ。ここは外国。誰もこの国の道などがわかるはずがない。それはルカリオも例外でもなかった。

「どこへ……って言われたらなあ、確かに困るな。うーん……」

地図を持っていないどころか、周りに行き先を示すような看板もない。とりあえずその辺をうろついてみようと思った時、“天からの声”がヒトカゲ達に降ってきた。

【俺が教えてやるよ】

声が聞こえた瞬間だけ驚いたが、すぐに感情は一変、緊張へと変わる。声の主は言わずもがな、我が強い神様・パルキアである。姿がどこにもないことから、テレパシーで語りかけているようだ。

「随分と一般のポケモンに構うのが好きなみたいだな、神様は」

【てめーらに親切にしてやってるだけだぜ。大事な存在なんだからよお】

呆れ口調のジユプトルに対しても、普段と変わらずパルキアは楽しそうな話し方で接する。全員、まだパルキアのことを好きになれないでいる。むしろ、疑いの念の方が強い。

【とりあえず、今から俺の言うとおりに進んで行け。そこからそんなに遠くねーからよ】

ここで反抗しても仕方がないので、パルキアの指示通りに歩き始める4人。神様の言うことに逆らうつもりは全くないが、彼が相手の場合はどうしても気が進まないのだ。

【次の突き当たり、左だ】

約30分、パルキアがひたすら道案内をし、それに従ってヒトカゲ達は道を進んでいた。その間、余計な会話は一切ない。だが彼らには訊きたいことが残っている。

次にてめーらと会うときに、全部話してやるよ

そう、おおよそ半日前にパルキアが言ったことである。パルキアの考えを伺う絶好の機会ではあるが、誰1人としてその事を訊こうとしない。訊いてはいけないという空気が流れているようだ。

今知ってしまうのはいけないと思っっている者もいれば、単純に声をかけるのが怖いと思う者もいる。いずれにせよ、何かしらの恐怖が迫ってくる気がしたと後に4人は述べた。

【よし。あとはひたすら真っ直ぐ行けば着くぜ。もうてめーらだけで行けるな？】

「あ、うん。ありがとね、パルキア」

【あとは、向こうで待つてるあいつらの指示を仰げ。じゃあな】

そういい残し、パルキアとのテレパシーは途切れた。結局パルキアに関しては何も進展がなかったものの、無事に目的地につけただけ安心したとヒトカゲは思っていた。

「ここを行けばレシラムさんとゼクロムさんに会えるんですねー。楽しみです」

「お前なあ……いつ!？」

呑気なことよく言っただけでられるなあ、と半ば呆れているルカリオの足を、ジユプトルが踏んでしまった。もちろん余所見して歩いていたジユプトルが悪いのだが、ルカリオに対して謝るような輩ではない。

「邪魔だ。そんなところ歩くな」

「て、てめえが余所見してただけだろうが！ 何で俺が悪いみたいと言っ!？」

これが、ヒトカゲ達の日常となっているのも言うまでもない。でも、ディアルガが見つければこの光景も見られなくなると思うと、少々悲しさが込み上げてくるものがある。

ヒトカゲはこの時、ふと思った。仮にディアルガに出会うことができりザードンに戻れたとして、この先何をすればいいのだろうか。しばし考えてみるが、答えは出てこない。

「ん、ヒトカゲ、なした？」

「下向いていると、つまづいちゃいますよ」

「踏まれたくなかったら前向け」

思いふけっっているヒトカゲを後押しするように、他のメンバーが声をかける。その言葉が温かく感じたようだ。自然と顔に笑顔が戻ってくる。

「あ、うん。行こっか」

しばらくの間、今の事を考えないようにした。その代わりに、今過ごしているこの時間を大切にしていこう、そうヒトカゲは改めて心に決めた。



## 第82話 ポケモニア（後書き）

（NG集）

？ 転落（第2話「新たなる旅へ」より）

「そうそう、ライナスの家系はみんな、左胸に赤い稲妻印がついているんだ。それもまたカッコよくてな……」

そこからウインディの、ファンならではの少々マニアックな話が3時間ほど続いた。惚れ惚れするライナスの姿を頭に思い浮かべながらその場を行ったり来たりして話している。

「そこで盗賊団を倒した時の作戦はまさに」

ヒトカゲとデルビルの目の前で、一瞬にしてウインディの姿がなくなり、話が途切れた。その2秒後に、『ドボン』という鈍い音が響いた。

はい、落ちました。気づかぬうちに足を踏み外して海へダイブ！ ウインディやらかしてしまいました（笑）

ウインディ

「……汚点が……（汗）」

？ 要再検査（第31話「親の心」より）

「そんないい雰囲気をも簡単にぶち壊したのは、もちろんあいつだった。」

「おいサイクス、お前そんなに泣き虫だったか？ ……って、鼻水を私の体で拭うな！ あつ、鼻かむなサイクス！ やめなさいっ！」

「げんこつをお見舞いするため、バルは右手に作った握り拳を、本当ならサイクスの頭にぶつけるつもりだった……が、間違えて鼻に向けてしまったのだ。」

「ぶっ！」

再び鼻血を大量に出すことになってしまったサイクスは、このまま再検査を受けるために看護師たちによって運ばれていった。

バルさん、間違いとはいえこれは……（汗）

バル

「サイクス、悪かった、本当に悪かった！（汗）」

サイクス

「親父ごめん、俺もやりすぎた感があったから（汗）」

### 第83話 白と黒の王（前書き）

1カ月とは早いもので、あっという間に過ぎ去ってしまいました。

学校関係が大忙しです。合間見て小説をちよくちよく書いて、ようやくできましたー。

今回、いよいよ、あのお二方の登場です！

### 第83話 白と黒の王

「なあ、レシラム」

「何だ、ゼクロム」

ヒトカゲ達が目的地を目指して歩いていく頃、そこでは2匹のポケモンが彼らの到着を待っていた。その2匹こそ、この国　ポケモニアを統括する王なのである。

体全体が白く、腕と体が一体になった大きな翼を持つドラゴンタイプのポケモン。ジェットエンジンを彷彿させる尻尾と青い目が特徴の、「真実の王」がレシラムだ。

レシラムと対を成しているのが、体全体が黒く、巨大な翼を持つドラゴンタイプのポケモン。発電機を思わせる尻尾と赤い目が特徴の、「理想の王」がゼクロムである。

「これから来るであろう奴ら、お前ならどうする？」

真剣な眼差しでゼクロムがレシラムに問いかけたのは、ヒトカゲ達についてである。彼らに接触した際にどのような行動をとるのか、という意味だ。

「パルキアの命令ではあるが……私に従うに相応しくない者であれば、容赦はせん。善の心がない者はその場で焼き殺すまで」

真実を求め続ける者、それが自分に従える者の条件だとレシラムは決めている。彼が言ったように、善の心を持たない者は自身の手で滅ぼしてしまうのだ。

「お前とて同じだろう、ゼクロム。私と違い、真実ではなく理想で

はあるが」

「そうだ。理想を持たない奴は、俺に相応しくない。もしそんな奴らなら、雷で心臓を貫こうじゃないか」

ゼクロムもレシラム同様、自分を従える条件というものを持っている。2人のこの信念は一見恐ろしいものに見えなくはないが、あくまで自分達が直接力を貸そうとする者のみに対してのことである。もちろん、一般の国民に対してそのような条件を提示したりはない。ただしこの国で犯罪があれば、それがどんな罪であれその犯人は“王に盾突いた”ということで死刑に処される。犯罪＝理想も善の心も持たないと判断されるからである。

「しかし……パルキアの意図がわからん。何のために鍛えさせるというのだ？」

「定かじゃないが、たぶん……ん、来たようだ」

2人が会話している最中、ゼクロムが気配を感じた。彼の目線の先をレシラムも見つめると、こちらに向かって歩いてきている4人のポケモン達の姿が遠くにあった。

「ついたのかなー？」

見慣れない荒野を見回して、ヒトカゲは今いる目的地“ラゼングロード”のセントラルポイントと呼ばれる場所を探していた。そこにレシラムとゼクロムがいるのだという。

一応捜してはいるのだが、見知らぬ土地に来ればその光景の方に目がいつてしまうのは必然なこと。4人の見える範囲にレシラムとゼクロムの姿はあるのだが、“アウト・オブ・眼中”状態だ。

「なんか、何も無い場所ね」

「全然手が付けられないって感じだな。こんなところにいるのか？」

ラティアスとルカリオは完全に背を向けてしまっている。これでは自分たちのことを気付くまでに相当な時間を費やすと思ったレシラム達は、2人同時に力いっぱい地面を踏んだ。

何かが発したような音と同時に“じしん”並みの揺れが起こり、その音のした方を振り返る。すると何か点のようなものが見え、何だろうと近づいてみる。

4人の目に入ってきたのは、白と黒の巨体。それが、自分たちが探していたレシラムとゼクロムに他ならないことはすぐにわかった。しかし今まで見てきた「神様」ではないためか、あまり緊張していないようだ。

「お前達が、パルキアにここへ行けと言われたのか？」

「あ、はい。行けと言われたので」

ヒトカゲの素直すぎる返答に思わず笑いそうになったゼクロムだが、頑張って表情を変えなかった。一方のレシラムは少タイラツと来たようだが、彼も表情を保っていた。

「そうか。では自己紹介くらいはせねばな。私はこの国の『真実の王』、レシラムだ」

真実の王　レシラムは翼を1回はためかせ、威厳に満ちた目つきでヒトカゲ達を見下ろす。透き通った青色の瞳に映るのは、緊張した彼らの顔だ。

「そして、俺がこの国の『理想の王』、ゼクロムだ」

理想の王　ゼクロムは自身の体から電気をちらつかせる。ヒトカゲ達は1歩下がるように後退するが、ゼクロムが恐いからではなく、単に静電気で痛い思いをしたくないだけである。

「私達は、お前達を訓練するようパルキアに言われた。だがお前達が本当に私達の下で訓練するに値するかどうか、決めさせてもらう」「……値するか？」

「そうだ。この国にいる以上、この国のやり方というものがある。お前達がそれに従わないつもりなら……」

ここで、ゼクロムは口を止めた。どうやらヒトカゲ達の反応をうかがっている様子。いきなりこんな事を言い出して困惑しない者はいないだろうという考えは当たっていた。

首をかしげながら、ヒトカゲ達の目はレシラムとゼクロムを行ったり来たり。戸惑い以外の何物でもなかった。それを見て笑みを浮かべるわけでもなく、無表情のままレシラムは彼らに告げた。

「その時は『王の意思に背いた』として、死刑に処する」

刹那、全員の動きがピタリと止まった。聞き慣れないフレーズがまるで木霊こだまするかのよう<sup>こ</sup>に頭の中で響き渡る。その言葉の意味がようやくわかると、自然と体が小刻みに震えだす。

「し、し……死刑？」

「何を驚いている？　ここは絶対王政の国だ。俺とこいつの決めたことが法として施行されるのだ。当然、この地に足を踏み入れたお前達も例外じゃない」

王に背くと、それは死を意味する　この国の事情を知らないでやってきたヒトカゲ達にとっては、寝耳に水の話。そしてこれを知

った瞬間から、下手な発言をすれば命を無くすことになる。

自分たちにとっては不条理に思うことでも、地域が違えばそれが常識となってしまう。彼らは頭の中で知っていることだとしても、これはあまりに自分たちの常識とはかけ離れているものだった。

「じ、じゃあ、どうやって受け入れてくれるか決めるんだ？ 教えてくれよ」

内心は怖がっているルカリオだが、話を進めないことには解決すらしれないと思い、緊張の面持ちでレシラムに問いかける。彼から返ってきた答えは、簡単でもあり、難しくもある条件だった。

「【お前達の真実と理想】を答えてみる。その答えで私達が判断する」

『真実と理想……？』

4人の頭の上には疑問符が浮かんでいた。今まで生きてきた中で考えたこともなかった問いだ。互いに目を見合わせるが、誰もが戸惑っている様子。

「どうした？ まさか答えられないのか？ もしそうならば、今のうちに覚悟を決めるんだな」

「ま、まとまっつてないだけだよ！ だからもう少し待って！」

ゼクロムの催促が余計に彼らを焦らせる。落ち着かないことには始まらないので、ヒトカゲは深呼吸をし、冷静になれたところで話し合いを始めた。

数分後、話し合いのためにレシラムとゼクロムに背を向けていた



4人が振り返った。どうやら意見がまとまったようである。それでも、彼らの顔色は決していいというものではなかった。

「答えはまとまったか？」

「うん、一応……」

もちろん、意見がまとまったからと言ってそれが彼らに認められるものとは限らないし、いっそのこと諦めて辞世の句を読むというわけにもいかない。

不安でいっぱい、というのがヒトカゲ達の想いだ。それ以外に何も無い。全ては自分達の出した答え次第だと腹をくくり、その時をじっと待つしかなかった。

「では述べてみる。【お前達の真実と理想】というものを」

再び、ヒトカゲは深呼吸をする。何回息を吸って吐いてを繰り返しても胸を締め付ける感覚は取れずにいた。もう待ち時間はない。ゆっくり、そしてはつきりと、ヒトカゲは質問に答え始めた。

僕らには理想がある。みんなが平和に暮らしていける世界になってほしいという理想が。

だけど、実際は違う。生まれたときから本能として、僕らは争いを起こすようになってる。今の真実がこれ。

じゃあこれに従って生きていくのかと言われたら、理想はただの妄想にしか過ぎない。理想を叶えるための努力をして、それを真実に変えること、それが、僕達が生きていく理由の1つになると考えてる。

最後まで言い終わってヒトカゲが恐る恐る視線を上げると、より表情がきつくなつたレシラム、そしてゼクロムと目があった。2人の反感を買ってしまったのだろうかと焦りだす。

「それがお前達の真実だというのか？」

「今言つたのが理想だつて言つんだな？」

先ほどの問いかけよりも威圧感が増していた。そのせいか、4人の表情もより険しいものへと変わっている。王の意向にそぐわないものだったのかと、自分達の出した答えに後悔し始めた。

しかし、引き下がれない。言つたものを訂正するということは自分達を否定するだけでなく、極端に言えば2人の王に嘘をついたことにもなる。信念を貫いて首を縦にするしかなかった。

レシラムとゼクロムは互いに顔を見合わせ、同時に頷く。2人も心の中で答えが一致していたようだ。すぐにヒトカゲ達の方を向き、レシラムが静かに口を開いた。

「……決まりだな。お前達の意味、認めようではないか」

「み、認めてくれるのか？」

「平和という理想を持ち、平和を真実としたいという意味、俺らにしっかり伝わった。訓練してやるっ」

ゼクロムの言葉を聞いた瞬間、ヒトカゲ達が安堵の表情を浮かべて地面に座り込んだ。ここ数日間の緊張が全部ほぐれたと言つてもいいくらいの、大きな息を吐いた。

4人全員が口を開こうともせず、ただただ疲れを地面へ染み込ませていく。そんな彼らをよそに、レシラムが離れたところへゼクロムを呼び寄せる。

「何だ？」

「先程の続きを聞かせてほしい。彼らを鍛える目的についての考えを」

「ああ、それが」

ゼクロムは天を見上げ、どことなく複雑な顔つきになる。向こう側にある黒く濁った積乱雲へと視線を移し、小声でレシラムに語りかけた。

「おそらく、パルキアは助けたいのだろう。昔に失くした『家族』をな……」

第83話 白と黒の王（後書き）

レシラム

「この場では初だな。私が真実の王、レシラムだ」

ゼクロム

「俺が理想の王、ゼクロムだ」

王様、ねえ……（笑）

レシラム

「何故笑う？ お前は私たちをどう描きたいのだ？」

そうだねえ、あのメスに出てくるデオニス王みたいな感じかな？ いや、もっと酷くしても……

ゼクロム

「俺らも神族だぞ？ 悪に染めてどうするといふのだ」

楽しいじゃない（笑）

レシラム・ゼクロム

『た、楽しい………（汗）』

## 第84話 赤い元仲間（前書き）

どうも、食後は黒烏龍茶を飲む方、Linoです

そろそろ徐々に謎を解明させていこうという流れなのに、それについて書くこととするとどうも伏線が増えていく。今回より次回の方（規制）。

サイクス

「ところで、約1カ月ぶりにログインしようとしてパスワード忘れてたのって誰？」

……さーどうぞお読みください（汗）

## 第84話 赤い元仲間

「ついて来い」

修行が認められた4人はレシラムの後ろを歩いている。もう修行を始めるのかと思っっているせいか、吐く息の方が多い。すでに疲れがピークに達している。

眠気も少しずつ襲ってきている中、若干霞んだ視界に入ってきたのは、岩陰にひっそりと構えているログハウスだ。木の色が岩の色と似ているため、一見ただけではわかりにくい。

「この国にいる間は、あそこに住むといい。生活する分には困らないだろう」

レシラムが言うには、このログハウスは元々避難用としてつくられたものであるため、中が広く、ヒトカゲ達の仲間が来ても全員で難なく寝泊まりできるのだとか。

「ありがとう。じゃあ遠慮なく使わせてもらおうね」

ヒトカゲを筆頭に、他の3人も頭を下げて礼を言った。レシラムはそれに対して何も返答することなく、ただじつと4人の姿を見下ろしている。

特に嬉しさや清々（すがすが）しさというものを感じたりしていない。逆にこれくらいのことでは何故礼を言うのかと、レシラムは聞きたいと思っているようだ。

「おい、お前達」

後方からやって来たゼクロムが4人を呼ぶ。彼のもとへと行こうと足を踏み出そうとするが、彼の方から近づいてきた。レシラムの横に並ぶと、早々に話を始める。

「街でも見に行くがいい。この国がどのようなものか、お前達目で確かめる」

それもそうだな、と思う反面、半ば強制的にこの場から離れさせたいような言い方に聞こえたようだ。どのみち訓練は他の仲間が来ないことには始まらないので、それまで自由にしていようと考えていたところだ。

「じゃあそうすっかな。街ってどこだ？」

「ここから北西に向かえ。直に見えてくるはずだ」

ゼクロムの手の指す方向へと、ルカリオを先頭にして歩き始める4人。ヒトカゲやラティアスを先頭にすれば道に迷わないことはないし、ジユプトルが先導してくれるはずもないことはすでに経験でわかっていた。

「で、私に話したいことでもあるのか？」

ヒトカゲ達の姿が見えなくなったところで、レシラムがすべてを見透かしたかのような言い方でゼクロムに問いかける。特に驚く様子もなく、ゼクロムは淡々と話を持ちかける。

「やはり気になるんだ。あいつらがどうしてパルキアに目をつけられたのか」

「確かに。私も彼に聞くまで、『詠唱』ができるとは知らなかった」

とにかく、2人はヒトカゲとルカリオの存在が気になって仕方がないようだ。そして詠唱についても気になることがあり、疑問に思うことが多くて戸惑っている。

少し間をおいて、ゼクロムがレシラムに背を向ける。どこかに行こうとしているのは明らかで、行き先までおおよそ検討がついているがあえてそれを訊ねてみる。

「確かめに行くのか？」

「ああ。ルギアに聞けばわかるだろう。それに、別件についてもあるからな」

直に、その場からゼクロムの姿はなくなった。彼が去って行った方向をじっと見続けていたレシラムの表情は、小さくではあるが、曇りがかっていた。

1時間もかからずに、ヒトカゲ達は街に到着した。木でできた看板に書かれた『テューダー』というのがこの街の名前なのだろう。そして街並みはというと、見た目上ポケラスにある田舎と何ら変わらない。

違うものがあるとするれば、“空気”　ポケモン達が織りなす雰囲気だ。物々交換する者達、日光浴をしながら談笑する者達、それ以外の者達も全員が平和を象徴しているかの如く笑顔でいる。

「なんだか、落ち着けるような街だね」

「いいですよー、和みます」

ヒトカゲとラティアスはすぐにこの街が好きになったようだ。見慣れないポケモンが多いせいか、気分も高揚気味だ。一方のルカリ



オとジュプトルはというと、慎重になっている。

「おい、あそこのクイタラン、ずっとこっち見てんだけど」

「知るか……と言いたいが、確かに視線が気になる」

ルカリオとジュプトルからしても、クイタランからしても、見ている相手は外国からやってきた者。物珍しげな視線を送るのは何ら不思議なことではない。

クイタランに気を取られていると、前方で立ち止まっていたヒトカゲ達にぶつかった。ちゃんと歩きやがれと怒鳴ろうと彼らの方を振り向くと、その先に人だかりができていた。

「ん、何だあれ？」

「よくわからないですが、行ってみましょうよ」

遠くから見ても、お祭りのような楽しい活気であるようではなかった。何の騒ぎだろうと気になった4人が近づいてみると、集団の真ん中に1人、倒れているポケモンがいた。

赤色で、羽がついた体。カニ、というより何かの頭のような形をした2本のツメには目のような模様がついている。ポケモニアにはいない種族であるそのポケモンは、ハッサムと呼ばれている。

そのハッサムには特徴があり、ツメについている円い目のような模様が途中できれいに切れていて、まるで怒りの目つきのようになっている。

「……あれ？ えっ、えっ!？」

彼を見て1人とてつもなく驚いているのは、ヒトカゲだ。動揺が激しく、あちこち見回してあたふたしている。ルカリオ達がどうしたと訊ねてもただただ慌てふためくばかりだ。

その時だ。気を失っていたハッサムの目がうつすら開いた。ぼやけていた視界がはつきりすると、ヒトカゲの姿が彼の目に映り、次の瞬間、彼はヒトカゲに飛びついた。

「…………ヒ、ヒトカゲ　　！！」

「わっ、ちよっ!?!」

迷子になった子供がわんわん泣くように、ハッサムは声を荒げてヒトカゲに泣きついていた。ヒトカゲはもちろん、周りにいるみんなもこの状況が理解できずに戸惑うばかり。

落ち着かせようと何回かハッサムに呼びかけようとするが、声をかけるのもためらってしまうほど手におえない状況だ。いつまでもこうしているわけにもいかないのです、少々強引に場所を移動することに。

「で、そのハッサム、お前の知り合いなのか？」

「そう。そうなんだけど…………」

せつかく街に繰り出したのに、何も見学できぬままラゼングロードへと戻るはめになったヒトカゲ達。ジュプトルが問いたですが、ヒトカゲの様子がどうもおかしい。その理由はすぐに語られた。

「僕よくわからないんだけど…………このハッサム、前にいた世界の仲間なんだ」

『前にいた世界…………だって!?!』

そう、このハッサムは、かつてヒトカゲがいた世界にいるトレーナー・リサの手持ちの1匹。つまりヒトカゲの昔の仲間ということになる。久々の再会に喜びたいところだが、そうは言っていられない

い事態だ。

「じゃ、じゃあお前、どうやってここへ？」

ルカリオの質問が全てを語っている。どのようにしてこの世界へやって来たのか　ヒトカゲ達が1番気になっている謎について訊いてみるが、ハッサムは黙って首を横に振る。

「わからない。気がついたら全然見覚えのないところにいる……」

詳しく話を聞くと、元にした世界でトレーナー同士のバトルをしていた際、突然「ゆがみ」が目の前に発生し、それに飲み込まれたという。そして我に返った時には、この世界にいたらしい。

右も左もわからず、目的を持つこともできずにたださ迷い歩くと約1カ月、力尽きて倒れたところにヒトカゲに会えたのはまさに奇跡だと涙ながらに感謝していた。

「ゆがみ……まさか、パルキアが言ってた異変って、このこと？」

ハッサムの話を聞いてヒトカゲはあることを思い出した。彼が初めてパルキアと会った時に聞かされた“異変”だ。このことに関係していないと言い切れないと推測する。

「おかしくないかもですね。世界間を移動できるなんて、普通あり得ないことですしね」

珍しくラティアスがまじめなことを言う。明日は絶対に嵐か吹雪か地割れか、世界が崩壊するだろうとルカリオとジュプトルは2人で同じことを思っていた。

「……というわけなんだけど」

しばらくして、ログハウス近くに現れたレシラムに事情を説明した。ハツサムはレシラムを一目見ると恐れ多くなつたのか、自分より小さいヒトカゲの後ろに隠れる。

「事情は承知した。それで、お前達はどうしたいのだ？」

事情を話せば、何かしらの対処法を教えてくれる、そう考えていたヒトカゲ達にとっては少し返答に困る言葉だった。レシラムから何かしようという動きはみられない。

「と、とりあえず、一緒に住ませてほしいな、と思って」

「構わん。好きにするがいい」

それだけ言い残し、すぐにレシラムは背を向けてどこかに行ってしまった。特にハツサムのことを気遣うわけでもなく、優しく受け入れようとするわけでもなく、ただ淡々と返事をしただけだ。

レシラムに初めて会ってから、彼が自分の心を見せようとしたことは1度もない。喜怒哀楽どころか、思ったことを口にしたこともない。「心」が伝わってこないのだ。

「なんか、感じ悪いよな。ジュプトルみてーだな」

「民に好かれるような王の様では、あまりないかもな」

何気ないルカリオの言葉をしっかと聞いたジュプトルは、話しながらもルカリオの足をぎゅっと踏み潰していた。彼の方が感情を出しているのかもしれない。

「家の中はいろ、ハツサム」

「あ、ああ。あの人達、大丈夫なのか？」

「いつものじゃれあいですから」

当たり前の光景になってしまった、ルカリオとジュプトルの「じゃれあい」。これに慣れてないハツサムだけが、彼らに対してかなり心配をしていた。

第84話 赤い元仲間（後書き）

アーマルド

「すっかり後書きでも出番なくなって暇だから来た」

そ、そうですか（汗）

じゃあ次回の予告でもしてもらおうかな？

アーマルド

「次回……主人公が出ない話。以上」

間違っていないけど、それは……（汗）

## 第85話 神の隠し事（前書き）

グラードンファンの方、お待たせしました！（いるかどうかはわかりませんが）

今回のお話で、一気にフラグを立てます。ですが中身については想像にお任せします。

バンちゃん

「ほおー。ごっちゃんにならないのか？」

それだけが心配なのです（汗）けど後戻りはできぬ！ 書くっきゃないのだバンちゃんよ！

バンちゃん

「そ、そうか……（なんか今日の作者、熱いな 汗）」

## 第85話 神の隠し事

「こうして会うのは何年ぶりになるだろうな、グラードン」

ヒトカゲ達がハツサムを見つけたのと時を同じくして、グランサ  
ンでは2人の神族が崖下に隠れて面会していた。その一方はこの地  
に居座っている大地の神・グラードンだ。

「我は久しく汝の顔を拝んでなかった。我が盟友、ゼクロムよ」

今グラードンの目の前にいるのは、つい先程までヒトカゲ達の志  
を診断していたゼクロムだ。その面持ちは特に変わりなく、彼にと  
ってはいつもどおりの無表情である。

「再会を喜びたいところだが、今回はなしだ。用があつてここへ来  
た」

「用とな。何事だ？」

用というからには、何かよからぬことでも起きたのかとグラード  
ンは危惧するが、焦りを見せていないゼクロムの様子から察するに  
緊急性はなさそうだという認識だ。

ゼクロム自身もそこまで急いで解決することではないと判断して  
いるが、この後にある「本命」に会うためのついでと思つてわざわざ  
ざグラードンのところを訪れたのだ。

「お前、ヒトカゲのいる集団のことについて、何か知ってるか？」

何かに動揺してしまったかの如く、一瞬グラードンの動きが固ま  
る。だがそれをゼクロムは見抜けなかったようで、グラードンの微妙



な変化に気付くことなく返事を待っていた。

「知ってはいるが……汝と関係することでもあると言っのか？」

「ああ。とりあえず聞いてくれ」

ゼクロムは話を始めた。数日前に突然自分達の前にパルキアが現れ、強くしてほしい奴らがいるから頼むわと告げたこと。そして子供にしか見えないヒトカゲが混じっていたこと。

どう考えても神族に關係するようなポケモン達でないと思っっているゼクロムにとって、不思議でならないこの事態。確信できる情報を少しでも欲しいようだ。

「……汝の望むべきことは理解した」

しばらくして、グライドンが口を開いた。「その問いに答えてやるのではないか」という顔つきで、自身が目覚めてから聞いたこともゼクロムに話し始める。

「ホウオウとディアルガ捜し、それがあの者達の目的だ。この目的の中心にいるのが、あのヒトカゲなのだ」

旅の目的、ルギアとの関係、グランサンでの事件　今のヒトカゲ達につながるような出来事をできるだけ伝えた。もちろん、“彼の存在も含めて”

それがゼクロムにどう響いたかわからないが、ある程度の情報を得ることができたことに対しては満足しているだろうとグライドンは思った。

「ほう。なら、パルキアが何を企んでいるかは知らんと言っんだな？」

「そうとも。我が内にパルキアの謀なし」  
はからしむ

疑り深い性分なのか、ゼクロムは圧をかけた言い方でグラードンに迫る。それに動じないグラードンの口調や表情から、これ以上攻めるのは無理だと感じたようだ。

「……そうか。お前に聞いたかったのはこれだけだ」

体を南の方向へと向けるゼクロムをグラードンが呼び止める。どこへ行くのかと訊くと、ルギアのところへ行って確認したいことがあると言い残し、その場から飛び去った。

「……今は時期ではない。まだ早い」

完全にゼクロムの姿が見えなくなってから、グラードンがぼつりと呟いた。数歩足を運び、目を向けた先にあるのは、崖下に広がる赤い地面。

「『ただ死んだだけなら』、話は簡単に済むのだがな」

崖下を覗き込んだと思いきや、今度は空を見上げている。雲が太陽を覆いかけているのを、何かに思いふけながらしばらくじっと見続けていた。

それから約1時間後、ゼクロムはアイランドの中心・ディオス島にいた。暗い鍾乳洞の中を自身の電気で青白く照らしながら奥へと進む。

実はここへ訪れるのはそう珍しいことではない。1年に2、3回はディオス島を訪れて、ルギアと対談しているのだ。この2人はわりと仲がいい。

「来たか、ゼクロム」

通路の奥にある広い空間に辿り着くと、待ちわびていたような表情のルギアがいた。事実、ゼクロムが現れる数時間前からこの場に待機していたのだ。

「待たせたな。早速だが、訊きたいことがある」

「何だ？」

先程グラードンから聞いたことを踏まえ、ゼクロムは問いかける。その問いの核はただ1つ　　パルキアの企みについて何か知っていることはないかと。

レシラムとゼクロムのところへ修行しに行かせたということを知っていたルギアからは、沸々と怒りが湧き上がってきている。きつい目つきが鋭さを増す。

「一体、ヒトカゲ達に何をさせるつもりなんだ……！」

「それなんだが、ちょっと聞いてくれ」

「えっ？」

興奮状態のルギアが一気に怒りを収めた。何かわかることがあるのではないかとすぐる思いでゼクロムの言うことに耳を傾けようとする。

この部屋にはこの2人以外誰もいないにもかかわらず、確証性のある話でないためかゼクロムは小声で話をする。数時間前にレシラムに話していた推測と同じ内容である。

話が進むにつれ、ルギアの表情が徐々に驚きのものへと変化していった。それが当然の反応だろうな、というのが内容を説明していたゼクロムの思いだ。

「もしこれが本当なら、俺達だけで太刀打ちするより遙かに状況は良くなる」

「だが……神族以外の者達を関わらせるわけには！」

「お前ならそう言うだろう、ルギア。だが考えてみる。なぜあの詠唱があるのかを」

詠唱　その言葉を聞いてルギアの言葉が詰まった。これこそ、ルギアが抱いていた最大の疑問。“なぜヒトカゲとルカリオに詠唱を使う能力があるのか”ということだ。

それは詠唱そのものの常識が覆される事実である。ヒトカゲに会った時からこの疑問については自覚していたのだが、事が事だけに敢えて隠していたのだ。

「詠唱は本来、俺達だけが使える能力であつたはず。神族間で力の共有をするためにな」

「……その通りだ」

ゼクロムの言葉は、ヒトカゲとルカリオが“神だけが使える力”を手に入れているということを意味していた。それがわかつただけで、2人はこの事態の全てを把握したわけではない。

「となると、誰かが意図的に、あいつらに能力を付加したことになる。もちろん、俺ではない」

「私も断じて違う。付加する理由がない」

しばしの沈黙。互いに頭を俯き加減にして考えを巡らせる。だが

答えどころか疑問を解決する取っ掛かりすら見つからない。その原因の1つに、世界の違いがある。

ヒトカゲ、ルカリオの2人は互いに違う世界で生まれ、生きてきた時間も異なる。そこにどんな意図があるのかを推測することは2人には不可能だった。

「ふむ……埒があかん。一旦保留にしよう」

ルギアの一言で、この一件は持ち越しとなった。近いうちにまた議論しようということになり、2人の気持ちは少しだけ楽になったようだ。

大きく息を吐くと、ゼクロムがルギアの名を呼ぶ。実はゼクロムにはもう1つ尋ねたいことがあったようで、その話をしようと口を開いた。

「ところで、“王子様”はどうした？」

「……マナフィか。あの子も、不明なままだ」

2人が口にした、マナフィと呼ばれるポケモンは、神族の中ではかなり若い存在だ。海に住む者達を束ねる役目を担うため、『海の王子』としての位を継承されるはずだった。

「私の失態だ。子供を監視することすらできないとは……他のことを番人達に任せずと捜しているというのに見つからないとは、つくづく私は神としての器が足りんな」

実はマナフィが行方不明になったのは、ホウオウと同時期、つまり20年前ということになる。その時から責任を感じていたルギアはホウオウの捜索を番人達に、自分はマナフィの捜索をしていたのだ。

「自分を責めすぎるな。そして一人で抱え込むな。俺らにも責任はある」

自嘲気味に笑うルギアをなだめるゼクロム。こう見るとやはり2人の仲は良いようだ。ルギアの気持ちが悪くまで、ゼクロムはこれ以上何も言わずに黙って待っていた。

その後、互いの近況について軽く話し、ゼクロムがラゼングロイドへ帰ろうとする。ルギアは頭を軽く下げて礼を言い、ディオス島の外まで見送りに来た。

「すまん。今日はずいぶん悲観的な思考に走ってしまった」

「気にするな。誰であれ、そういう時もある」

飛び立とうとゼクロムが足に力を入れたとき、言い残したいことがあったのか、ルギアの方を振り向いた。真剣な表情で、ルギアにこう告げた。

「俺の仮説が正しいならば、いつ惨事が起きてもおかしくない。なるべく早いうちに対策を練る機会を設けよう。当然、パルキアにも出向いてもらうつもりだ」

「了解した。何か動きがあれば、すぐに知らせてくれ」

互いに頷くと、ゼクロムは飛んで行ってしまった。姿が見えなくなるまでルギアはその場に留まり、完全に視界からいなくなっただら、マナフィを捜すために海に潜りこんだ。

「あいつら、昔っから仲良さだよなー」

ルギアとゼクロムが一緒にいるところを、別の空間からパルキアが見ていた。ただし会話は伝わらないため、雑談程度に思っているようだ。

普段不敵な笑みを浮かべてばかりのパルキアだが、どういわけかこの2人を見てから表情が暗い。物欲しそうにしている、といったような顔つきだ。

「俺も昔みてーに、みんなと仲良くやりてーな。そう思わねーかな、あいつは」

パルキアの目線の先には、何も映っていない鏡のようなものがあった。パルキアにも1つだけ、映し出せない空間があるのだ。それをしばらくの間、じっと見つめていた。

第85話 神の隠し事（後書き）

アーマルド

「次回予告させてもらえるみたいだから、やるわ」

じゃあ、次回こんな内容だから、うまくまとめて。

アーマルド

「……えっ、何こいつ？ 俺、苦手かも」

レシラム

「そいつは私もゼクロムも嫌いだ。本当なら殺したいくらいだ」

アーマルド

「うおっ、ま、まさかあなた……ふがつ！」

ゼクロム

「黙ってる。後書きでも死にたくないだろう？」

アーマルド

（なんか、乗っ取られた…… 汗）



## 第86話 バカティニ（前書き）

アーマルド

「さてさて、作者のタスクがひと段落ついたらしいから、更新だと……もうやだ」

何がやだって？

アーマルド

「本編で出番ないのにここで紹介とかしたくない」

仕方ないでしょう。君死んでるんだから。

アーマルド

「……なあ、それホントなん？ 俺本当に本編で死んでる？」

では、本編スタートです！

アーマルド

（……何か怪しい……）

## 第86話 バカティニ

2日間、ヒトカゲ達は特に修行のようなことをしていなく、ポケモニアに慣れるために街へ行ったりラゼングロードでのんびりしたりと、自由な生活を送っていた。

その間、ハッサムからは別世界の話をしてもらい、ヒトカゲは懐かしさを感じたり近況を知ったりして満足し、ルカリオ達はこの世界と違う部分を知るだけでいくつもの驚きを感じたようだ。

「そっかー、みんな元気にしてたんだねー」

「まあな。相も変わらずってところかな。特に、大変だけど楽しいって感じは」

やはり元メンバーということもあり、話が弾む。そんな彼らの姿を、ルカリオは頬杖をつきながらぼーっと眺めている。その横にはラティアスが座り、彼の顔をまじまじと見ている。

「どうかしました？」

「いんや、別に。たださ、いいよなあって思ってたさ」

「……というと？」

「俺らこうやって旅してるけどさ、それだけで本当にいろんな人達と出会えるってのが、いいって思うわけよ」

数カ月間、シーフォードでヒトカゲと出会ってから様々な経験をしてきたルカリオ。こうして落ち着いて振り返ってみて、改めて旅の良さを実感しているようだ。

「いいですよー。まあ、ルカリオさんは別ですけど」

「……はあっ？」

一瞬にしてルカリオの頭部に血管が浮き上がる。ラティアスは「ルカリオ（と自分との経験の仕方）は別」ということを言いたかったらしいが、どうやらそういう意味では伝わってないようだ。

そのやりとりを聞いていたのか、後方からジュプトルがやって来た。ほんの少しだけ笑みを浮かべて、嘲笑するかのようにルカリオに話しかけてきた。

「所詮、それだけの存在だったってことか。ライナスの息子が聞いて呆れるぜ」

「い、言ってくれんなてめえ……！」

刹那、右手を握ったルカリオは勢いよく、自分の近くにいるジュプトルの足へその拳を下ろした。ジュプトルの全身に痺れるような痛さが走っていく。

目を大きく見開き、歯を食いしばって痛みに堪えている。すぐに目つきを鋭いものに変え、鉤状かぎになっている自身のツメをルカリオの頭へと突き刺した。

先程のジュプトルと同じ表情と痛みを、今度はルカリオが経験する羽目になった。もつとも、彼の場合はツメが刺さっている箇所から赤い液体が流れ出しているのだが。

「痛つてえなてめえ！ 出血までしてんじゃねえか！」

「当然の報いだ。あんまり俺を怒らすような事すんじゃねえぜ」

互いに無言で睨み合う。ラティアスもさすがに彼らを止めたいようだが、慌てふためいてなかなか行動に移せずにいた、その時。

「あれ、顔が血だらけだ！ にゃはは！」

子供っぽい、わりと高めな声が3人の耳に入った。声のする方へ目を向けると、ヒトカゲよりも小さいポケモンがお腹を抱えながらケラケラと笑っていた。

黄色の体で、橙色の大きなV字型の耳、背中には小さな羽を持っている。3人にとっては初めて見るポケモンなため、話しかけようにも躊躇している。

「あれ？ 初めましてだよな？ ねえねえ、犬のお兄さん？」

戸惑っている間に、そのポケモンの方から話しかけてきた。ラテイアスとジユプトルは同時に同じことを思った。「お兄さん」だけだよかったものを」と。

「……い、犬じゃねえよ、ルカリオってんだよ、俺はな」

(た、耐えた……！？)

あれだけ短気なルカリオが、それを堪えて必死に平常心で接しようとしている姿を見て、2人は大変驚いている。天変地異ほど珍しいことのように思えてしまうほどだ。

「あたし、ビクティニ」

そのポケモンは、自らの名をビクティニと言った。それはよしとして、明らかに子供っぽいビクティニがどうしてこんなところにいるのかが気になったようだ。

「あのお、レシラムどこ？ どこにいる？」

どうやら、レシラムの知り合いらしい。ルカリオは彼のいる方を指さすと、ビクティニははしゃぎながら彼の下へと向かって行った。

何となく存在が気になったのか、3人もビクティニの後を追いかけることにした。

途中でヒトカゲとハッサムにも声をかけ、ビクティニを追った。直に彼らの目がレシラムの背中をとらえる。さすがに大人数が近づいていることもあり、レシラムも気配を察知する。

「レーシラムー」

そしてレシラムが振り返ると、満面の笑みを浮かべたビクティニが飛びかかってきた。普通なら驚いて固まってしまふところだが、レシラムは慣れた手つきでビクティニを叩き落とした。

予想だにしない出来事にみんなは驚きを隠せない様子。地面に顔を埋め込まれたビクティニも心配ではあるが、レシラムの怒りに満ちた表情の方が深刻である。

「何しに来た？」

レシラムはビクティニを見下して冷たく言い放つ。顔を上げたビクティニはそんなレシラムを見ても何も動じることなく、先程と同じ調子で話し始める。

「だって会いたくなかったんだもん！ だから会いに来たの」  
「私は会いたくない。帰れ」

おそらく、こういつやりとりが日常茶飯事なんだろうとみんなは想像できた。そうこうしているうちに、ヒトカゲ達とレシラムの目が合った。悪いことをしていないのにも関わらず、怖気づいてしま

「お前達がこいつを連れてきたのか？」

全員が首を横に振る。ちょうどその時、後方からゼクロムが戻ってきた。これでこの状況が少しはよくなる、そう思っていたみんなの考えは脆くも崩れ去ることとなる。

「……何でお前がいるんだ？ 早く立ち去れ」

ゼクロムまでもが、ビクティニに対して睨みを利かせて言い放った。そしてやはり、誰がどう見ても、ゼクロムの表情はこれでもかと言わんばかりの怒りに満ちている。

レシラムもゼクロムも苛立たせてしまうこのビクティニというポケモンは、一体何者なのだろうか。ふとそう思ったヒトカゲ達は成り行きを見守ることにした。

「だから、2人に会いたくってきたの」

「迷惑だ。お前が来るとろくなことがない」

手でビクティニを薙ぎ払うゼクロム。それに懲りることなく、甘えた子供そのものの姿で今度はレシラムの翼にすり寄る。彼はビクティニの顔も見ずに振り払った。

それでも、ビクティニは2人に構ってほしいのか、べたべたすりすりとまとわりついている。ヒトカゲ達もこの様子を見て、彼らが苛立つ理由を大体理解できたようだ。

「……警告だ。もうやめろ」

「もっ、いいじゃないっ！」

最後の警告も無視したビクティニの方を、レシラムとゼクロムが

向いた。ようやくビクティニを受け入れてあげるのがと安心したヒトカゲ達は、すぐに絶句することとなる。

レシラムは×字のコロナを帯びた球状の炎を口元に集め始め、ゼクロムは尻尾の発電機をフル稼働させて青色の電気を全身にまとい始めたのだ。もちろん、彼らは怒っている。

『帰れ!!』

刹那、レシラムはその炎 “クロスフレイム” を放ち、同時にゼクロムは纏った電気で相手に突っ込む技 “クロスサンダー” でビクティニを吹き飛ばした。

「お、あれなんだ?」

同時刻、ラゼングロードの境界あたりをぞろぞろと数人のポケモンが歩いていった。彼らは爆発音と共に飛ばされている何かを発見したようで、空を見上げている。

「爆発が気になるな……行くぞ」

「そうですね。もしかしたら、彼らの仕業かもしれませんね」

どうやら飛んでいったものには興味がないようだ。それよりも気になっている爆発の原因を探るため、爆心地へ向かって彼らは駆け足で向かって行った。

一方その爆心地 2人の王が大技を放った場所では、ヒトカゲ達が一驚を喫していた。自分達には出せそうにない威力の技を、目

の前で見せつけられたのだから。

ようやく怒りが治まりつつあるレシラムとゼクロムは、少々疲れた顔つきでヒトカゲ達の方を向く。それだけでも、今の彼達は肩を小さくしてしまうほど恐がっている。

「今の一撃でも、私達の持てる力の2割も出ていない。覚えておけ」  
「あれはまだかわいい方だ。俺達に反抗すると、こんなもんで済まされないからな」

無言かつ素早く首を縦に振る5人。そして誰もビクティニの安否について気にならないのは、これが日常的に起こっているのだと想像し得たからだ。実に悍ましいことである。

「おい、そこのお前ら！ 大丈……あつ」

その時、ヒトカゲ達に声をかけてきた者がいた。若干息を切らし、焦っているようで声色だけでは誰かは判別できなかったが、振り向くと、ヒトカゲとルカリオの表情が緩んだ。

「……バンちゃん！」

「ちゃん付けやめろっ！」

何ともテンポのいい返しをしてくれたのは、バンギラスだ。久々のやりとりに自然と心が弾む。話しかけようとすると、バンギラスの後ろから次々と“仲間”がやってくる。

「おー久々だなヒトカゲー！」

「ゼニガメ！ それにカメックス！」

「ワンちゃん、飼い主のサイクスですよ」

「いつ犬としてお前に飼われたんだよ！？」



「やっぱりだったか。ラティアスちゃん、元気でしたか？」  
「ええ。ドダイトスもベイリーフも元気そうですね！」

バンギラスをはじめ、ゼニガメ、カメックス、サイクス、ベイリーフ、そしてドダイトスの計6人が集結した。ヒトカゲにすれば、旅における新旧メンバーの全員集合になる。

再会を喜び合っている際、ふとバンギラスは目線をヒトカゲの後方にずらす。目線の先にいたのは、前回彼らに同行した際に戦った、ジュプトルであった。

「て、てめえ！ 何故ここにいやがる！？」

「……何故って……えっ？」

バンギラスの声で状況を把握したのが、カメックス、サイクス、そしてドダイトスが瞬時にジュプトルを取り囲んだ。状況をよくわかっていないジュプトルはただただ驚き、挙動不審に陥っている。

「話は聞いてるぜ。てめえ、相当な殺ポケ犯らしいじゃねえか」

「俺のかわいいペットをいじめようとしてるらしいな」

「ラティアスちゃん、離れてください！ 私が何とかしますから」

そう、彼らはジュプトルがヒトカゲ達の旅に同行していることを知らなかった。こうなった原因はもちろんパルキア。すっかり伝え忘れてくれたようだ。

なんか、ポケモニアに来てからトラブルしか起きてないな、とヒトカゲは肩を落とし、溜息を吐きながら心の中で呟いた。

## 第86話 バカティニ（後書き）

どーも、地デジでdボタンをなかなか押さない方、Linoです。

今回は完全コメディ回にしました。ちなみにバクティニはちよくちよく出てくる予定。

映画の水樹奈々さんが演じる可愛らしいバクティニと『完全に切り離して』考えてください。ここでのバクティニは一言でいうと『ただのウザい子』です。

そうそう、宣伝が1つ。

twitterで「ヒトカゲの旅 SE」のキャラ達の台詞が見れるbotをつくりました。もちろん、専用につくったオリジナルの台詞を多数扱ってます。

興味がある方は、@SE\_bot1へ。何かあれば管理者（私）@Lino056まで。

どちらもフォロー歓迎ですが、諸事情により100%リフォローするわけではないので、ふてくされないでくださいね

第87話 修行開始（前書き）

さっ、張り切っていきましょー！

サイクス

「やーん。めんどくさいよーん」

バンちゃん

「そう言うなって。出番が増えるだけありがたいと思わないと」

カメックス

「出たがりなのはお前の方だろ」

バンちゃん

「ばっ、な、なわけねーだろっ！（汗）」

## 第87話 修行開始

「なんだ、最初っから言えよ」

「いきなり囲まれてそんなこと言えるか……」

ヒトカゲとルカリオがカメックス達に懇切丁寧に事情を説明したおかげで、なんとか納得してもらえたようだ。彼らが事情を知らなかったとはいえ、いきなり囲まれたジュプトルは少々不機嫌になる。それが終わるのを見計らっていたのか、ちょうどいいタイミングでレシラムとゼクロムが近づいてきた。総勢11名、この人数を見てさすがの王様も戸惑っている。

「こ、この人数を相手しろというのか……」

「まったく。どうしようもないな、パルキアは」

溜息をつくしかなかった。これといった詳細を聞いていたわけではないので、せいぜい数人程度だと思っていたのだろう。呆れた表情がよく窺える。

「仕方ない……お前達、ちょっと集まれ」

レシラムの大きめの声が全員に届く。駆け足で王の下へと向かうが、そのうちの半数はレシラムとゼクロムを目の当たりにして、驚きの余り固まってしまふ。

「明日から修行をする。場所はここ、ラゼングロードだ。お前達に事前に準備してもらったことなどはない。いいな？」

『はいっ！』

「詳しいことは明日話す。以上だ」

それだけ言うと、レシラムは早々とその場を後にする。彼を追いかけるように、ゼクロムもまたヒトカゲ達に背を向ける。「コミュニケーションか？」という某炎タイプの呟きは幸い彼らの耳には入っていないかったようだ。

多少気に障るようではあったが、それよりも仲間との再会による嬉しさが上回っている。宿に戻りつつ、和気藹々（あいあい）と話を弾ませていった。

「何か進展はあったか？」

視界からヒトカゲ達が完全にいなくなったのを確認して、レシラムが口を開いた。どうやらゼクロムがしてきた話の内容が気になっていたらしく、それで早く解散したようだ。

「いや、ない。だが近々俺達で集合して話し合う機会を設けることにした」

「……そうか。パルキアが何をどこまで知っているかだな」

2人とも、表情を深刻なものへと変える。できれば身内の者を疑いたくないのだろうが、詠唱が絡んでいる以上、少なくとも今自分達の置かれている状況だけでも把握しておきたいと思うほど、不安に陥っている。

「お前の推測、できればはずれてほしいと願うしかない」

「あくまで推測だ。しかも、最悪な場合のな」

それ以上、ゼクロムは何も言おうとはしなかった。追求したところ

るで喋ってくれることはないしレシラムも気づいたのだろう、彼もまた口を閉ざした。

次の日、朝早くから修行が始められた。分担制にし、レシラムにはヒトカゲ、ジュプトル、カメックス、サイクス、ベイリーフが、ゼクロムにはルカリオ、ラティアス、ゼニガメ、バンギラス、ドグイトスがついた。

なお、ハッサムは「迷惑かけちゃうから、自分達のことにあまり関わらせたくない」というヒトカゲの想いから、みんなのマネージヤーとして世話をすることになった。

「揃ったな。では始めるぞ」

先陣を切ったのはレシラム達の方だ。始めると言ってもただ呼び出されただけのヒトカゲ達は、レシラムの方を見て指示を待っている。今にも寝そうなサイクスを除いて。

「その前に、訊きたいことがある」

突如、声を発したのはカメックスだ。メンバー全員を見渡しながら、レシラムに目を向ける。どうやらこのメンバーに疑問があるようだ。

「何だ？」

「王は炎タイプのはず。同族と弱点である草タイプを強化するのはわかるが、何故俺がこっちなんだ？ 水タイプの強化を目的とするなら俺は向こうのはずだ」

このメンバーで唯一、他のメンバーの弱点を突くことができる力

メックスはこの編成に疑問を抱いた。彼の言うとおり、ゼクロム側で修行する方がいいのではと誰もが思っている。

「疑問に思うのが普通だろう。だがこれで問題はない。信用できないというのなら、“ハイドロカノン”を撃ってみろ」

「なっ……“ハイドロカノン”を？」

レシラムの返答は思わず聞き返してしまうものであった。水タイプ最強技と言われている“ハイドロカノン”を自分に向かって撃てと言っただ。

よほど攻撃に耐える自信があるのか、それとも確実に避ける策があるのか、いずれにしてもこれに応えてみたいという気持ちが強まったカメックスは、地面を力強く踏みしめて構えた。

「じゃあ、撃たせてもらっせ」

全身にぐつと力を込め、背中にある2つのキャノンと口から弾丸並みの速さでカメックスの“ハイドロカノン”は放たれた。確実に当たる、その場にいた全員がそう思っていた。レシラムを除いて。突如、白い霧のようなものが一瞬にして辺りを支配し、彼らから視界を奪った。それと同時に、熱気が襲い掛かる。一帯はサウナ状態と化した。

「な、何これ？」

「あつついなー。余計眠くなりそう……」

みんなが、これが何かを考えているうちに風が吹き、白い霧のよくなものはあつという間に引いていった。そして彼らが目にしたのは、“ハイドロカノン”が放たれる前と同じ光景だった。

「……俺の“ハイドロカノン”が全く効いてないだろ？」  
「いいや、違うな」

堂々と構えているレシラムの姿を見て、多少なりともダメージは与えたと思っっているカメックスが驚く。だが「レシラムのダメージは0だと」口を開いたのは、サイクスだ。

「ハイドロカノン”は当たってすらいない……当たる直前に全て『蒸発』したんだよ」

『じ、蒸発！？ あれを全部！？』

そうだろ？ という目でサイクスはレシラムの方を向く。驚きの表情を期待していたが、レシラムがそんな表情をしてくれるわけもなく、調子を崩してしまふ。

「その通りだ。高温の炎 “あおいほのお”で水を全て蒸発させたのだ」

そう、レシラムは“ハイドロカノン”が当たる直前に、“あおいほのお”を放ったのだ。先程の白い霧はカメックスの放った水が気化したものである。

「通常お前達が吐く炎は不完全燃焼していて、赤色の炎だ。しかし私の吐いた炎は体内で酸素濃度を調整し、完全燃焼している状態だ。もちろん、温度もこちらが高い」

そう言いながら、レシラムは小さめの“あおいほのお”を実際に吐いた。初めて目の当りにする技にみんな興味津々で、その凄さを改めて実感している。実際に炎に触ったヒトカゲもその熱さに大きく目を見開いて驚く。



「それでは、修行の具体的な説明を始める」

淡々とした物言いでレシラムの説明が始まった。カメックスには水圧の強化、ジユプトルとベイリーフには炎を“切る”訓練を、そしてヒトカゲとサイクスには“あおいほのお”にできるだけ近い炎を出せるようにとのことだ。

はつきり言ってしまうえば、ヒトカゲとサイクスへの指示は無謀、というより不可能なものだ。肺活量を上げたところで解決できるような問題ではない。レシラムだから成せる固有技なのだから。

「今から炎でお前達を囲む。そこでどういう練習をしようが勝手だ。何か得るものがあるまで試行錯誤するがいい」

これ以上の指示はなく、気づけばヒトカゲ達はすでに青色の炎に囲まれていた。レシラムは「獅子の子落とし」のような教え方なのだろうと、全員が心で呟いた。

レシラム側だけがこのような修行の仕方なのかと思いきや、そうではなかった。時を同じくして、ゼクロム側の方でも一驚を喫するような事が起きていた。

「……お、俺達のコンビ技が……」

「まったく無効化されちまうなんて……」

こちらでは、ドナイトスとバンギラスのコンビ技 “じしん” で砕かれた大きめの岩での“ストーンエッジ”が、ゼクロムに掠<sup>かす</sup>ることなく木端微塵になった。

「これが“クロスサンダー”の力だ。電気だからと言ってなめるな」

ゼクロムは青みを帯びた高圧の電気を自身の発電機で作り出し、その電気を大量にまとめた雷を大岩に叩きつけたのだ。雷の力が岩が砕けるとは誰も想像していなかった。

自身の固有技で最も威力のある“らいげき”を使っていないところを見ると、レシラムよりは手加減したようだ。とはいえ、全員の驚く様子を見ると、十分すぎる威力であることは間違いない。

「では、始めよう。2人組か3人組になって、1組につき1時間、俺と戦闘だ。無論、手加減はしない」

こちらはこちらで手加減なしの長時間戦闘という辛い修行である。“クロスサンダー”を見せつけられた後だと、全力で行きたくなくなってしまうようだ。

夕方になり、修行1日目終了となった。レシラムとゼクロムの終わりの合図を聞くと、ほとんどの者が地面に座り込むか、そのまま倒れこんだ。

「こ、これいつまで続くんだよ……」

「それは私達にもわからない。だが、そう長くは続かないだろう」

ヒトカゲ達はこれほど辛い修行をしたことがない。もちろん、神族が相手だから余計だ。2人の王は全く疲れた表情を見せず、むしろ涼しい顔をしている。

「明日も今日と同様だ。今のうちに体を休めておけ」

これが毎日続くと思うと、それだけでさらに疲れが増した感じになったようだ。彼らを気遣うことなく、レシラム達はその場を後にした。

「さて、そろそろ“仕事”だ」

「ああ、これが本業みたいなものだからな。“悪に裁きを与える”のがな」

## 第87話 修行開始（後書き）

2010年夏 今話を思いつく。「炎って確か青い方が熱いんだっけ？」ってことで、ヒトカゲに青色の炎を出す特訓をさせようと考える。

2010年秋 BW発売。レシラム固有技「あおいほのお」……だと？

というわけで、私の想像とゲーフリさんの想像が見事に（？）一致しまして、どうしよーと考えました。

でもよく考えたら、ヒトカゲに“せいなるほのお”を使わせていたわけですし、オリ技を投入せずに済んだので結果オーライということ、こんな感じになりました。

あと炎の色と熱さについてですが、深く突っ込まれると作者が泣いてしまうので、この世界はこういうもんだということにしといてくださいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7007h/>

---

ヒトカゲの旅 SE

2011年10月5日00時42分発行